

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第100集

ほん がわ  
本 川 遺 跡

2003

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

# 序

豊田市は「三河」の国名の由来といわれる矢作川の上流に位置しており、古えより海と山を結ぶ交通の要衝として発展してまいりました。そして現在では、愛知県が誇るモノづくりの中心地として、世界中にその名を知られた工業都市であります。

この本川遺跡においても、愛知県下で最古級のカマドをもつ竪穴住居が確認され、古墳時代中期に当地に居住していた人々が、すでに進取の気性に富んでいたことがわかります。

また、この集落でまつりにもちいられていた鳥形木製品は、きわめて写実的につくられており、特に羽根の部分は実際に鳥の羽根を挿して使用された可能性があります。このような鳥形木製品は全国でも例がなく、当時の本川集落に居住した人々の豊かな創造力には驚かされます。

こういった重要な調査成果がおさめられた本報告書が、さまざまなかたちで活用され、ひいては埋蔵文化財の保護に結びつくことを願ってやみません。

最後になりましたが、当愛知県埋蔵文化財センターが設立されて以来、発行してまいりました報告書は、本書をもってついに100集を数えることとなりました。これまで、発掘調査の実施に際して、ご理解とご協力をいただきました地元住民の方々をはじめ、関係者および関係諸機関の皆様方に、厚くお礼を申し上げる次第です。

平成15年8月

財団法人愛知県教育サービスセンター  
理事長 井上銀治

# 例 言

1. 本書は、愛知県豊田市永覚町大正・本川に所在する本川遺跡（愛知県遺跡番号 63472）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第二東海自動車道建設にともなう事前調査として実施し、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成 10（1998）年 4 月から平成 11（1999）年 3 月までで、調査面積は 15,500 m<sup>2</sup>である。
4. 調査担当者は、北村和宏（主査、現・愛知県立豊田高等学校教諭）、佐藤公保（調査研究員、現・愛知県立惟信高等学校教諭）、宇佐見 守（調査研究員、現・愛知県立春日井西高等学校）、樋上 昇（調査研究員）、成瀬友弘（調査研究員、現・愛知県立豊野高等学校教諭）が担当した。
5. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。  
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団、豊田市教育委員会
6. 発掘調査においては、次の方々の助力を得た。  
平野弥生・渡辺周子（以上、当時発掘調査補助員）
7. 本書の編集は佐藤公保による編集方針を樋上 昇が引き継いでおこなった。執筆は、佐藤公保、樋上 昇、堀木真美子、鬼頭 剛、川添和暁（以上、調査研究員）、上田恭子（調査研究補助員）が担当し、その分担は目次に記した。  
また、第Ⅲ章については、2 は森 勇一氏（愛知県立明和高等学校教諭）、3 は藤根 久・今村美智子氏（パレオ・ラボ）、4 は山形秀樹・Lomtatie Zauri 氏（パレオ・ラボ）、5 は植田弥生氏（パレオ・ラボ）、6 は池谷勝典・馬場伸一郎氏（アルカ）、7 は池谷勝典氏、8 は望月明彦氏（沼津工業高等専門学校）に玉稿を賜った。  
なお、遺物の写真撮影については、福岡 栄氏に依頼した。
8. 報告書作成の整理は平成 12（2000）年 4 月から平成 14（2002）年 3 月までの 2 年間に佐藤公保が担当し、平成 14 年 10 月から平成 15 年 3 月までの半年間に樋上 昇が引き継いだ。
9. 報告書作成にかかる整理事業には、次の方々の助力を得た。  
平成 12 年度：阿部佐保子（調査研究補助員）、服部久美子・本多恵子（以上、整理補助員）  
平成 13 年度：阿部佐保子・八木佳素実（以上、調査研究補助員）、加藤豊子・後藤恵里・服部里美・林 真弓・本多恵子（以上、整理補助員）  
平成 14 年度：阿部佐保子・岩本佳子（以上、調査研究補助員）、後藤恵里・中村たかみ（以上、整理補助員）
10. 本書で使用した遺構の遺構の略記号は次のとおりである。  
SA……柵列跡、SB……建物跡、SD……溝跡、SK……土坑、SX……その他
11. 調査に使用した座標は、国土交通省告示に定められた国土座標（平面直角座標）第Ⅶ系に基づくものであり、海拔標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。ただし、表記については旧基準「日本測地系」による。
12. 本報告書で使用した土壌色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
13. 調査記録・出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。
14. 本報告書の作成にあたっては、次の関係各機関・各位のご協力・ご指導を賜った。  
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、豊田市教育委員会、岡崎市教育委員会、西尾市教育委員会、(株)アルカ、国際航業(株)、パリノ・サーヴェイ(株)、(株)パレオ・ラボ  
館谷 一・伊藤秋男・笠原 潔・加納俊介・川崎みどり・黒田文美子・西藤清秀・笹原芳郎・城ヶ谷和広・杉浦裕幸・鈴木とよ江・鈴木裕明・中川律子・榎崎彰一・穂積裕昌・村上由美子・村木 誠・森 泰通・山田昌久・山田康弘・渡辺 誠（以上、敬称略 50 音順）

# 本文 目次

第Ⅰ章 調査概要	(樋上 昇)	
調査にいたる経緯と調査の経過		1
地理的・歴史的環境		3
基本層序		6
第Ⅱ章 遺構・遺物		
Ⅰ期 縄文晩期～弥生中期前葉	(樋上 昇)	
1. 主要遺構		7
2. 出土土器		9
Ⅱ期 弥生中期末～古墳前期	(樋上 昇)	
1. 主要遺構		9
2. 出土土器		12
Ⅲ期 古墳中期		
1. 主要遺構 (樋上 昇)		15
2. 出土土器 (佐藤公保)		19
Ⅳ期 古墳後期～平安時代	(樋上 昇)	
1. 主要遺構		34
2. 出土土器・陶磁器		35
Ⅴ期 中世	(樋上 昇)	
1. 主要遺構		36
2. 出土土器・陶磁器		37
Ⅵ期 戦国時代	(佐藤公保)	
1. 主要遺構		37
2. 出土土器・陶磁器		41
木製品 (樋上 昇)		44

石器・石製品・ガラス製品

(川添和暁)

1. 石器	48
2. III期に属する石製品・ガラス製品	49

第III章 自然科学分析

1. 矢作川沖積低地北部, 本川遺跡における古環境変遷 (鬼頭 剛・堀木真美子・上田恭子)	50
2. 本川遺跡から産出した昆虫化石群集 (森 勇一)	63
3. 本川遺跡出土土器の胎土分析 (藤根 久)	68
4. 本川遺跡出土土器付着煤類の年代測定 (山形 秀樹・Lomtatize Zauri)	97
5. 本川遺跡出土木製品の樹種同定結果 (植田弥生)	104
6. 本川遺跡の属性表および石器観察について (池谷勝典・馬場伸一郎)	118
7. 本川遺跡出土石器の使用痕分析 (池谷勝典)	120
8. 本川遺跡出土黒曜石製石器産地推定 (望月明彦)	127

第IV章 まとめ (樋上 昇)	128
-----------------	-----

第V章 考察

出土木製品群からみた本川遺跡 (樋上 昇)	132
-----------------------	-----

挿図 目次

図 1 本川遺跡調査工程	1	図 16 III期竪穴住居の主軸方位分布グラフ	129
図 2 本川遺跡の位置	2	図 17 III期竪穴住居の主軸長分布グラフ	130
図 3 調査区位置図	2	図 18 本川遺跡周辺の弥生・古墳時代遺跡	131
図 4 本川遺跡と周辺の遺跡	5	図 19 本川遺跡と周辺の遺跡	133
図 5 基本層序	6	図 20 本川遺跡遺構変遷図	134
図 6 本川遺跡III期土師器の器種分類	21	図 21 本川遺跡器種別使用樹種変遷グラフ	136
図 7 C区における深掘層序断面写真	52	図 22 本川遺跡時期・遺構別器種組成変遷グラフ	137
図 8 C区深掘層序断面試料の粒度分析累積曲線	54	図 23 本川遺跡時期別樹種組成変遷グラフ	138
図 9 B区遺構検出面における粘土鉱物のX線回折図	55	図 24 本川遺跡主要器種・自然木樹種組成グラフ	140
図 10 本川遺跡における東西層序断面図	58	図 25 本川遺跡遺構別自然木樹種組成グラフ	141
図 11 土器胎土中の粒子組成図	73	図 26 本川遺跡ブナ科・ヒノキ科 利用器種組成比較グラフ	142
図 12 土器胎土および粘土中の粒子組成図	74	図 27 釈迦山遺跡出土木製品器種・樹種組成グラフ	143
図 13 主な遺跡における土器胎土の 粘土の種類と砂粒組成	93	図 28 八王子遺跡遺構全体図	144
図 14 土器付着物・炭化材の暦年較正	98	図 29 八王子遺跡出土木製品器種別 使用樹種変遷グラフ	145
図 15 土器付着物の暦年較正	99		

図 30 八王子遺跡出土木製品器種・樹種変遷グラフ	147	図 35 顔戸南遺跡遺構変遷図	153
図 31 勝川遺跡遺構全体図	149	図 36 恒武遺跡群遺構全体図	154
図 32 勝川遺跡出土木製品器種・樹種組成 変遷グラフ	150	図 37 山ノ花遺跡出土木製威儀具	155
図 33 ト・メキ遺跡出土木製品器種・樹種 組成グラフ	151	図 38 城之越遺跡遺構全体図	156
図 34 顔戸南・城之越・恒武西浦・ 山ノ花遺跡出土木製品器種組成グラフ	152	図 39 出土木製品の組成と集落の階層性 についての模式図	157
		図 40 木製祭祀具と祭祀の重層性、 武器と威儀具の関係模式図	158

## 表 目次

表 1 本川遺跡と周辺の遺跡	4	表 14 放射性炭素年代測定および 暦年代較正の結果 (その 1)	100
表 2 C 区深掘層序断面試料の粒度組成解析結果	53	表 15 放射性炭素年代測定および 暦年代較正の結果 (その 2)	101
表 3 C 区深掘層序断面試料の粒度組成	53	表 16 放射性炭素年代測定および 暦年代較正の結果 (その 3)	102
表 4 本川遺跡における放射性炭素年代測定結果	57	表 17 土器付着物 (外側煤類) の 付着状況と炭素含有量	103
表 5 本川遺跡より産出した昆虫化石	65	表 18 分析試料と分析者一覧	109
表 6 本川遺跡および周辺遺跡の土器試料と その特徴 (その 1)	69	表 19 分析試料の時期と点数	109
表 7 本川遺跡および周辺遺跡の土器試料と その特徴 (その 2)	70	表 20 本川遺跡の時期別の樹種同定結果	111
表 8 本川遺跡・周辺遺跡出土土器胎土の 粘土と砂粒の特徴 (その 1)	88	表 21 本川遺跡出土住居建築材樹種	113
表 9 本川遺跡・周辺遺跡出土土器胎土の 粘土と砂粒の特徴 (その 2)	89	表 22 周辺遺跡出土住居建築材樹種	113
表 10 岩石片と分類の組み合わせ	90	表 23 出土石器属性表	119
表 11 粘土と砂粒組成の関係	91	表 24 判別方法・判別分析からの 最終推定結果および判別図法による 推定結果と判別分析による推定結果	127
表 12 各遺跡の粘土と砂粒組成の関係 (その 1)	91		
表 13 各遺跡の粘土と砂粒組成の関係 (その 2)	91		

## 写真図版 目次

写真図版 1 本川遺跡出土の昆虫化石	67	写真図版 6 石器使用痕 -1	122
写真図版 2 土器胎土中の粒子顕微鏡写真 1	95	写真図版 7 石器使用痕 -2	123
写真図版 3 土器胎土中の粒子顕微鏡写真 2	96	写真図版 8 石器使用痕 -3	124
写真図版 4 本川遺跡 主な樹種の 組織写真 (その 1)	116	写真図版 9 石器使用痕 -4	125
写真図版 5 本川遺跡 主な樹種の 組織写真 (その 2)	117	写真図版 10 石器使用痕 -5	126

## 遺構図版

遺構図版 1	I 期遺構全体図	遺構図版 40	Ⅲ期遺構図 (16)
遺構図版 2	I・Ⅱ期遺構分割図 (1)	遺構図版 41	Ⅲ期遺構図 (17)
遺構図版 3	I・Ⅱ期遺構分割図 (2)	遺構図版 42	Ⅲ期遺構図 (18)
遺構図版 4	I・Ⅱ期遺構分割図 (3)	遺構図版 43	Ⅲ期遺構図 (19)
遺構図版 5	I・Ⅱ期遺構分割図 (4)	遺構図版 44	Ⅲ期遺構図 (20)
遺構図版 6	I 期遺構図 (1)	遺構図版 45	Ⅲ期遺構図 (21)
遺構図版 7	I 期遺構図 (2)	遺構図版 46	Ⅲ期遺構図 (22)
遺構図版 8	Ⅱ期遺構全体図	遺構図版 47	Ⅲ期遺構図 (23)
遺構図版 9	Ⅱ期遺構図 (1)	遺構図版 48	Ⅲ期遺構図 (24)
遺構図版 10	Ⅱ期遺構図 (2)	遺構図版 49	Ⅲ期遺構図 (25)
遺構図版 11	Ⅱ期遺構図 (3)	遺構図版 50	Ⅲ期遺構図 (26)
遺構図版 12	Ⅱ期遺構図 (4)	遺構図版 51	Ⅲ期遺構図 (27)
遺構図版 13	Ⅱ期遺構図 (5)	遺構図版 52	Ⅲ期遺構図 (28)
遺構図版 14	Ⅱ期遺構図 (6)	遺構図版 53	Ⅲ期遺構図 (29)
遺構図版 15	Ⅱ期遺構図 (7)	遺構図版 54	Ⅲ期遺構図 (30)
遺構図版 16	Ⅱ期遺構図 (8)	遺構図版 55	Ⅲ期遺構図 (31)
遺構図版 17	Ⅲ期遺構全体図	遺構図版 56	Ⅲ期遺構図 (32)
遺構図版 18	Ⅲ期遺構分割図 (1)	遺構図版 57	Ⅲ期遺構図 (33)
遺構図版 19	Ⅲ期遺構分割図 (2)	遺構図版 58	Ⅲ期遺構図 (34)
遺構図版 20	Ⅲ期遺構分割図 (3)	遺構図版 59	Ⅲ期遺構図 (35)
遺構図版 21	Ⅲ期遺構分割図 (4)	遺構図版 60	Ⅲ期遺構図 (36)
遺構図版 22	Ⅲ期遺構分割図 (5)	遺構図版 61	Ⅲ期遺構図 (37)
遺構図版 23	Ⅲ期遺構分割図 (6)	遺構図版 62	Ⅲ期遺構図 (38)
遺構図版 24	Ⅲ期遺構分割図 (7)	遺構図版 63	Ⅳ期遺構全体図
遺構図版 25	Ⅲ期遺構図 (1)	遺構図版 64	Ⅳ・Ⅴ期遺構分割図 (1)
遺構図版 26	Ⅲ期遺構図 (2)	遺構図版 65	Ⅳ・Ⅴ期遺構分割図 (2)
遺構図版 27	Ⅲ期遺構図 (3)	遺構図版 66	Ⅳ・Ⅴ期遺構分割図 (3)
遺構図版 28	Ⅲ期遺構図 (4)	遺構図版 67	Ⅳ・Ⅴ期遺構分割図 (4)
遺構図版 29	Ⅲ期遺構図 (5)	遺構図版 68	Ⅳ期遺構図
遺構図版 30	Ⅲ期遺構図 (6)	遺構図版 69	Ⅴ期遺構全体図
遺構図版 31	Ⅲ期遺構図 (7)	遺構図版 70	Ⅴ期遺構図 (1)
遺構図版 32	Ⅲ期遺構図 (8)	遺構図版 71	Ⅴ期遺構図 (2)
遺構図版 33	Ⅲ期遺構図 (9)	遺構図版 72	Ⅵ期遺構全体図
遺構図版 34	Ⅲ期遺構図 (10)	遺構図版 73	Ⅵ期遺構図 (1)
遺構図版 35	Ⅲ期遺構図 (11)	遺構図版 74	Ⅵ期遺構図 (2)
遺構図版 36	Ⅲ期遺構図 (12)	遺構図版 75	Ⅵ期遺構図 (3)
遺構図版 37	Ⅲ期遺構図 (13)	遺構図版 76	Ⅵ期遺構図 (4)
遺構図版 38	Ⅲ期遺構図 (14)	遺構図版 77	Ⅵ期遺構図 (5)
遺構図版 39	Ⅲ期遺構図 (15)		

# 遺物図版

遺物図版 1	I 期土器 (1)	遺物図版 39	III 期土器 (28)	遺物図版 77	III 期木製品 (6)
遺物図版 2	I 期土器 (2)	遺物図版 40	III 期土器 (29)	遺物図版 78	III 期木製品 (7)
遺物図版 3	II 期土器 (1)	遺物図版 41	III 期土器 (30)	遺物図版 79	III 期木製品 (8)
遺物図版 4	II 期土器 (2)	遺物図版 42	III 期土器 (31)	遺物図版 80	III 期木製品 (9)
遺物図版 5	II 期土器 (3)	遺物図版 43	III 期土器 (32)	遺物図版 81	III 期木製品 (10)
遺物図版 6	II 期土器 (4)	遺物図版 44	III 期土器 (33)	遺物図版 82	III 期木製品 (11)
遺物図版 7	II 期土器 (5)	遺物図版 45	III 期土器 (34)	遺物図版 83	III 期木製品 (12)
遺物図版 8	II 期土器 (6)	遺物図版 46	III 期土器 (35)	遺物図版 84	III 期木製品 (13)
遺物図版 9	II 期土器 (7)	遺物図版 47	III 期土器 (36)	遺物図版 85	III 期木製品 (14)
遺物図版 10	II 期土器 (8)	遺物図版 48	IV 期土器・陶磁器 (1)	遺物図版 86	III 期木製品 (15)
遺物図版 11	II 期土器 (9)	遺物図版 49	IV 期土器・陶磁器 (2)	遺物図版 87	III 期木製品 (16)
遺物図版 12	III 期土器 (1)	遺物図版 50	V 期土器・陶磁器	遺物図版 88	III～V 期木製品 (1)
遺物図版 13	III 期土器 (2)	遺物図版 51	VI 期土器・陶磁器 (1)	遺物図版 89	III～V 期木製品 (2)
遺物図版 14	III 期土器 (3)	遺物図版 52	VI 期土器・陶磁器 (2)	遺物図版 90	III～V 期木製品 (3)
遺物図版 15	III 期土器 (4)	遺物図版 53	VI 期土器・陶磁器 (3)	遺物図版 91	III～VI 期木製品
遺物図版 16	III 期土器 (5)	遺物図版 54	VI 期土器・陶磁器 (4)	遺物図版 92	I～II 期石器 (1)
遺物図版 17	III 期土器 (6)	遺物図版 55	VI 期土器・陶磁器 (5)	遺物図版 93	I～II 期石器 (2)
遺物図版 18	III 期土器 (7)	遺物図版 56	VI 期土器・陶磁器 (6)	遺物図版 94	I～II 期石器 (3)
遺物図版 19	III 期土器 (8)	遺物図版 57	II 期木製品 (1)	遺物図版 95	I～II 期石器 (4)
遺物図版 20	III 期土器 (9)	遺物図版 58	II 期木製品 (2)	遺物図版 96	I～II 期石器 (5)
遺物図版 21	III 期土器 (10)	遺物図版 59	II 期木製品 (3)	遺物図版 97	I～II 期石器 (6)
遺物図版 22	III 期土器 (11)	遺物図版 60	II 期木製品 (4)	遺物図版 98	I～II 期石器 (7)
遺物図版 23	III 期土器 (12)	遺物図版 61	II 期木製品 (5)	遺物図版 99	III 期石製品・ガラス製品
遺物図版 24	III 期土器 (13)	遺物図版 62	II 期木製品 (6)		
遺物図版 25	III 期土器 (14)	遺物図版 63	II 期木製品 (7)		
遺物図版 26	III 期土器 (15)	遺物図版 64	II 期木製品 (8)		
遺物図版 27	III 期土器 (16)	遺物図版 65	II 期木製品 (9)		
遺物図版 28	III 期土器 (17)	遺物図版 66	II 期木製品 (10)		
遺物図版 29	III 期土器 (18)	遺物図版 67	II 期木製品 (11)		
遺物図版 30	III 期土器 (19)	遺物図版 68	II 期木製品 (12)		
遺物図版 31	III 期土器 (20)	遺物図版 69	II 期木製品 (13)		
遺物図版 32	III 期土器 (21)	遺物図版 70	II 期木製品 (14)		
遺物図版 33	III 期土器 (22)	遺物図版 71	II 期木製品 (15)		
遺物図版 34	III 期土器 (23)	遺物図版 72	III 期木製品 (1)		
遺物図版 35	III 期土器 (24)	遺物図版 73	III 期木製品 (2)		
遺物図版 36	III 期土器 (25)	遺物図版 74	III 期木製品 (3)		
遺物図版 37	III 期土器 (26)	遺物図版 75	III 期木製品 (4)		
遺物図版 38	III 期土器 (27)	遺物図版 76	III 期木製品 (5)		

## カラー写真図版

カラー写真図版 1	SK1011 土器群	カラー写真図版 4	SB2067 土器群
カラー写真図版 2	SK1001 土器群	カラー写真図版 5	SD2001 土器群
カラー写真図版 3	SB2064 土器群	カラー写真図版 6	NR2001 出土鳥形木製品

## 遺構写真図版

遺構写真図版 1	A 区 I・II 期遺構 (1)	遺構写真図版 14	A 区 III 期遺構 (6)
遺構写真図版 2	A 区 I・II 期遺構 (2)	遺構写真図版 15	B 区 III 期遺構 (1)
遺構写真図版 3	A 区 I・II 期遺構 (3)	遺構写真図版 16	B 区 III 期遺構 (2)
遺構写真図版 4	A 区 I・II 期遺構 (4)	遺構写真図版 17	B 区 III 期遺構 (3)
遺構写真図版 5	B 区 I・II 期遺構 (1)	遺構写真図版 18	B 区 III 期遺構 (4)
遺構写真図版 6	B 区 I・II 期遺構 (2)	遺構写真図版 19	B 区 III 期遺構 (5)
遺構写真図版 7	B 区 I・II 期遺構 (3)	遺構写真図版 20	B 区 III 期遺構 (6)
遺構写真図版 8	B 区 I・II 期遺構 (4)	遺構写真図版 21	B 区 III 期遺構 (7)
遺構写真図版 9	A 区 III 期遺構 (1)	遺構写真図版 22	B 区 III 期遺構 (8)
遺構写真図版 10	A 区 III 期遺構 (2)	遺構写真図版 23	B 区 III 期遺構 (9)
遺構写真図版 11	A 区 III 期遺構 (3)	遺構写真図版 24	B 区 III 期遺構 (10)・IV 期遺構
遺構写真図版 12	A 区 III 期遺構 (4)	遺構写真図版 25	B・C・D 区 VI 期遺構
遺構写真図版 13	A 区 III 期遺構 (5)		

## 遺物写真図版

遺物写真図版 1	I 期土器・II 期土器 (1)	遺物写真図版 12	V・VI 期土器・陶磁器・木製品 (1)
遺物写真図版 2	II 期土器 (2)	遺物写真図版 13	木製品 (2)
遺物写真図版 3	II 期土器 (3)	遺物写真図版 14	木製品 (3)
遺物写真図版 4	III 期土器 (1)	遺物写真図版 15	木製品 (4)
遺物写真図版 5	III 期土器 (2)	遺物写真図版 16	木製品 (5)
遺物写真図版 6	III 期土器 (3)	遺物写真図版 17	I・II 期石器 (1)
遺物写真図版 7	III 期土器 (4)	遺物写真図版 18	I・II 期石器 (2)
遺物写真図版 8	III 期土器 (5)	遺物写真図版 19	I・II 期石器 (3)
遺物写真図版 9	III 期土器 (6)	遺物写真図版 20	I・II 期石器 (4)
遺物写真図版 10	III 期土器 (7)	遺物写真図版 21	III 期石製品・ガラス製品
遺物写真図版 11	III 期土器 (8)・IV 期土器・陶磁器		

# 第 1 章 調査概要

## 調査にいたる経緯と調査の経過

本川遺跡は、愛知県豊田市永覚町大正および本川に所在する。この遺跡は平成 7（1995）年度の愛知県埋蔵文化財調査センターならびに豊田市教育委員会による遺跡の有無確認調査により、古墳時代と戦国時代の遺跡の存在があきらかとなった。その結果、第二東海自動車道建設にともなう事前調査として日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて委託をうけ、（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが平成 10（1998）年 4 月から平成 11（1999）年 3 月まで発掘調査をおこなった。調査区は A～D 区で、調査面積は 15,500 m<sup>2</sup>である。各調査区の面積および調査期間・調査担当者名は下記の表のとおりである。

調査の結果、Ⅰ期：縄文時代晩期～弥生時代前期、Ⅱ期：弥生時代中期末～古墳時代前期、Ⅲ期：古墳時代中期、Ⅳ期古墳時代後期～平安時代、Ⅴ期：鎌倉～室町時代、Ⅵ期：戦国時代の 6 期にわたる遺構群を確認した。このうち、Ⅰ～Ⅳ期は A・B 区に、Ⅴ・Ⅵ期は全調査区に遺構が展開している。なかでも、Ⅲ期（古墳時代中期）は約 100 棟におよぶ竪穴住居を検出した。また、D 区では、調査区の東半部で大規模な自然流路を確認しており、本遺跡の名称の由来となった矢作川の旧河道の一部である可能性が高い。

なお、本報告書の作成にかかわる整理作業は平成 12・13（2000・2001）年度および平成 14（2002）年度下半期の 2 年 6 ヶ月間である。

（樋上 昇）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
A区 (3,600) (北村・佐藤・宇佐美・樋上・成瀬)												
B区 (4,400) (北村・佐藤・宇佐美・樋上・成瀬)												
C区 (3,750) (北村・樋上・成瀬)												
D区 (3,750) (北村・樋上・成瀬)												

図 1 本川遺跡調査工程



図2 本川遺跡の位置

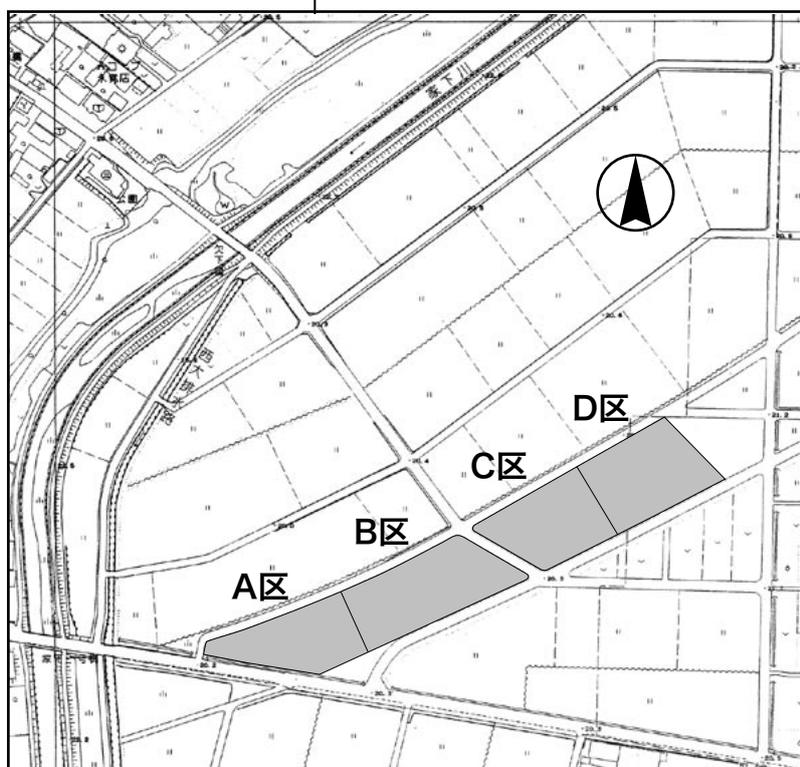


図3 調査区位置図 (1 : 2,500)

## 地理的・歴史的環境

本川遺跡は岡崎市と境を接する豊田市南部の矢作川右岸に位置している。地理的には矢作川によって形成された沖積低地（岡崎平野）の北端に近く、西は中位段丘面である碧海台地の段丘崖に接している。岡崎平野の西を画して南北にのびるこの碧海台地の段丘下に位置する沖積低地に形成された、幅約 100 m の狭い微高地上に I～IV 期の遺構群が展開している。なお、調査区内での遺構検出面（Ⅲ期）の標高は約 19m である。

本川遺跡の周辺で、もっとも古く人の活動の痕跡が認められるのは本川遺跡の北東 2km に所在する水入遺跡（28）である。ここでは、AT 降灰期（2,2000～21,000 年前）の土層中から石器群が出土している。

縄文時代の遺跡は、前述の水入遺跡（中期末）のほか、神明遺跡（4、中期後葉）・今町遺跡（29、後期前葉）でそれぞれ竪穴住居が確認されており、そのほかにも大明神 A・B 遺跡（24・27）、西槽目遺跡（22）、北田遺跡（21）が縄文土器・石器の散布地として知られている。また、本川遺跡の西に接する大清水遺跡（2）も縄文時代の遺跡として愛知県遺跡地図に登録されている。今回の発掘調査においても、縄文晩期～弥生前期の遺構・遺物が出土していることから、大清水遺跡と本川遺跡は一連の遺跡と考えることができる。

弥生時代の遺跡としては、まず本川遺跡の北東約 300m に位置する川原遺跡（11）をあげることができる。碧海台地段丘下の沖積低地に形成された狭い微高地上に、まず墓域が形成され、中期末には夥しい数の竪穴住居が重複して築かれる。さらに、後期初頭には居住域は廃絶し、一辺が 20m をこえる巨大な低墳丘墓が 4 基築造されている。この時期の居住域としては、川原遺跡の北約 200m の碧海台地縁辺部に位置する神明遺跡が想定されている。ここでは、弥生後期の竪穴住居が 15 棟確認されている。

川原遺跡の巨大墳丘墓群は古墳前期初頭まで新たな墓壙の掘削が継続する。古墳前期末には、神

明遺跡で新たに集落が営まれ、中期に最盛期を迎える。5 世紀後半にはカマド・須恵器・鉄製農具といった、当時としては最新の文物が出土している。

このほか、川原遺跡では新たな墓域が形成される。また、水入遺跡では幅 5.5m、深さ 4.5m、全長 220m の大溝が確認されており、その延長とみられる溝が天神前遺跡（20）・郷上遺跡（12）を縦断している。おそらくは、矢作川から分岐し、碧海台地の段丘崖に沿って掘削された巨大な運河施設と考えられる。本川遺跡では確認できなかったが、調査区のさらに西側の段丘直下に所在する可能性がある。

このような大規模な土木作業を指揮したであろう首長層の奥津城は、碧海台地縁辺部に点在している。北から、鳥狩塚古墳（26）、西槽目古墳（23）、渡刈富士塚古墳（17）、安福寺古墳（10）、三味線塚古墳（8）、車塚古墳（3）などがそれで、いずれも 5 世紀中葉～後半頃に築造されたとみられる。これらの古墳の立地をみると、水入遺跡に隣接して鳥狩塚古墳・西槽目古墳、郷上遺跡に隣接して安福寺古墳、神明遺跡に隣接して三味線塚古墳、本川遺跡に隣接して車塚古墳、というように、集落に近接して 1 ないし 2 基の古墳が築かれているようにみとれる。このうち、発掘調査がおこなわれたのは三味線塚古墳のみである。直径 29m の円墳で、内部主体は全長 4.85m の粘土櫓が確認された。未盗掘ではあったが、副葬品は鉄鏃 1 点と赤色顔料、炭化物とわずかな土器片のみであった。

矢作川の対岸にあたる岡崎市域の丘陵上には全長 31m の帆立貝形前方後円墳である古村積神社古墳（36）を始めとして、多数の古墳が群集している。その一方で、矢作川右岸にみられる大規模な集落が現状では認められていない。

6 世紀後半にいたると、これまでの集落群はほぼ衰退し、神明遺跡の小規模な谷を隔てた西側の碧海台地上に矢迫遺跡（5）が出現する。8 世紀まで継続するこの遺跡では、竪穴住居 17 棟のほか、大壁建物 3 棟が検出され、鉄滓・鍛造剥片

などが出土している。

7世紀代には、神明遺跡の西側の谷に面して、神明瓦窯(6)が築かれる。この瓦窯は西三河最古の古代寺院である岡崎市北野廃寺(114)に瓦を供給したことで知られている。また、7世紀後半～8世紀後半には、神明遺跡・水入遺跡・今町遺跡で新たな集落が形成され、天神前・郷上遺跡の大溝が再掘削されている。

中世には、神明遺跡の西側の谷を隔てた台地上

に鴛鴦城跡(7)、本川遺跡の南約500mに上野城跡(48)が築かれる。また、神明・今町・天神前・郷上遺跡で方形の区画溝をめぐらす屋敷地群が展開している。このうち、郷上遺跡では18世紀まで集落が継続するが、矢作川による度重なる水害のため、安永年間から明和4(1767)年にかけて碧海台地上へと集落が移動する。その後、沖積低地は水田が営まれて現在へといたっている。

(樋上 昇)

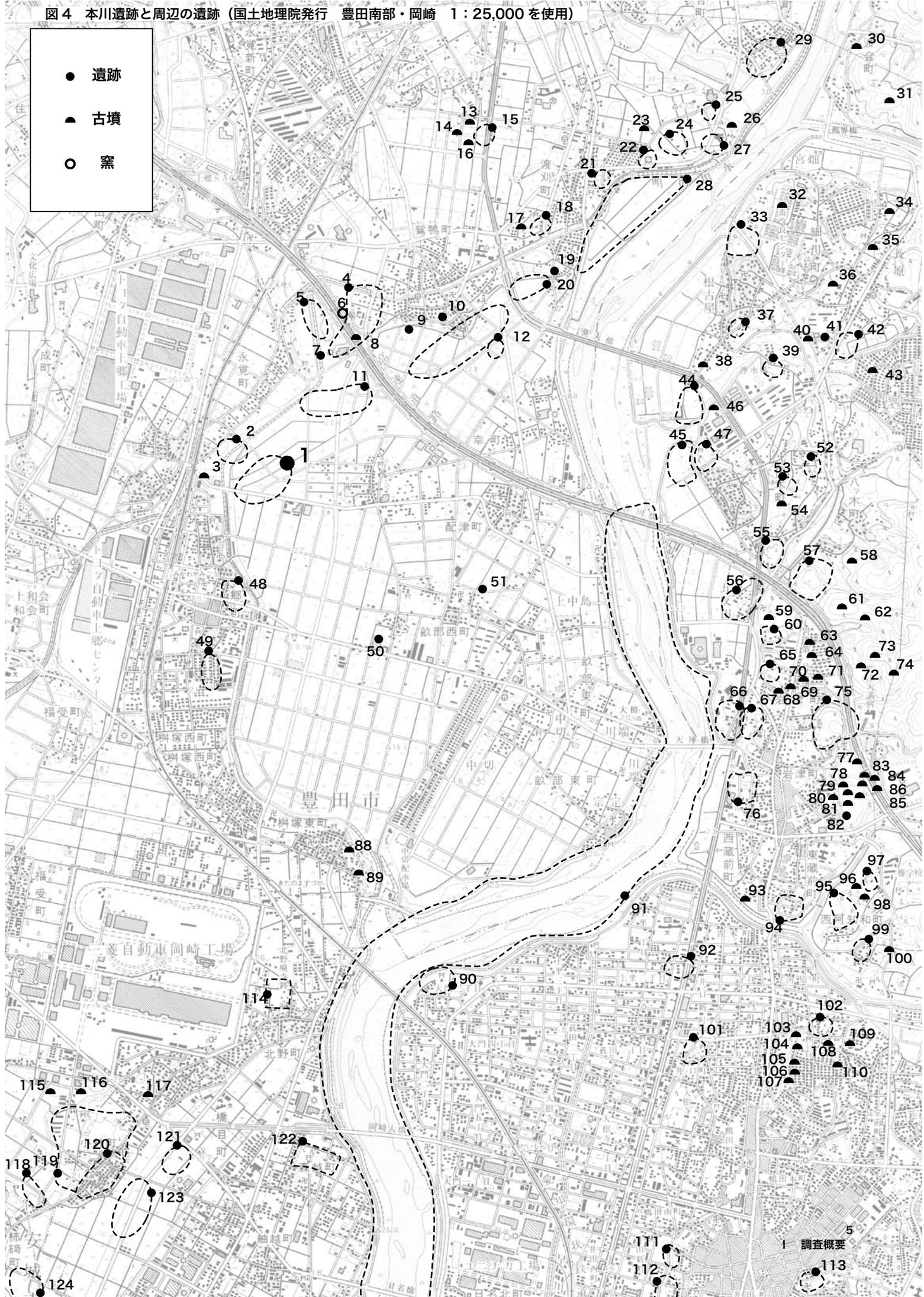
番号	遺跡名(時代)	番号	遺跡名(時代)	番号	遺跡名(時代)
1	本川遺跡(弥生～古墳・戦国)	51	高正館跡(中世)	101	井ノ口遺跡(弥生)
2	大清水遺跡(縄文)	52	八反田遺跡(旧石器～縄文)	102	百々城跡(中世)
3	車塚古墳(古墳)	53	年重遺跡(縄文)	103	西池ノ入第1号墳(古墳)
4	神明遺跡(弥生～奈良)	54	年重古墳(古墳)	104	西池ノ入第5号墳(古墳)
5	矢迫遺跡(古墳・中世)	55	東郷遺跡(弥生)	105	西池ノ入第2号墳(古墳)
6	神明瓦窯(奈良・白鳳)	56	於御所遺跡(弥生～中世)	106	西池ノ入第3号墳(古墳)
7	鴛鴦城跡(室町)	57	車塚遺跡(縄文)	107	西池ノ入第4号墳(古墳)
8	三味線塚古墳(古墳)	58	ハツ木古墳(古墳)	108	東池ノ入第1号墳(古墳)
9	鴛鴦町元屋敷遺跡(奈良～近世)	59	車塚第1号墳(古墳)	109	東池ノ入第2号墳(古墳)
10	安福寺遺跡(古墳)	60	於御所南遺跡(縄文)	110	東池ノ入第3号墳(古墳)
11	川原遺跡(縄文～平安)	61	車塚第3号墳(古墳)	111	井田城跡(中世)
12	郷上遺跡(弥生～近世)	62	車塚第2号墳(古墳)	112	山王城跡(弥生)
13	高岡3号墳(古墳)	63	岩津第5号墳(古墳)	113	赤山遺跡(弥生)
14	高岡2号墳(古墳)	64	岩津第6号墳(古墳)	114	北野廃寺跡(古代)
15	高岡遺跡(縄文)	65	岩津新城跡(戦国)	115	小針第1号墳(古墳)
16	高岡1号墳(古墳)	66	若一王子神社遺跡(古墳)	116	小針第2号墳(古墳)
17	渡刈富士塚古墳(古墳)	67	岩津大膳城跡(戦国)	117	猿投塚古墳(古墳)
18	小狭間遺跡(古墳)	68	岩津第2号墳(古墳)	118	小針西遺跡(弥生)
19	上郷中塚状遺構(古墳)	69	岩津第1号墳(古墳)	119	小針遺跡(縄文～中世)
20	天神前遺跡(古墳・奈良)	70	岩津第3号墳(古墳)	120	小針城跡(戦国)
21	北田遺跡(縄文)	71	岩津第4号墳(古墳)	121	宮前遺跡(不明)
22	西槽目遺跡(縄文)	72	天神山第9号墳(古墳)	122	山伏遺跡(弥生～室町)
23	西槽目古墳(古墳)	73	天神山第8号墳(古墳)	123	長田遺跡(不明)
24	大明神A遺跡(縄文)	74	天神山第5号墳(古墳)	124	仏供田遺跡(縄文)
25	雁戸遺跡(古墳)	75	岩津城跡(戦国)		
26	烏狩塚古墳(古墳)	76	生平遺跡(旧石器～中世)		
27	大明神B遺跡(先土器)	77	中ノ坂第2号墳(古墳)		
28	水入遺跡(古墳～近世)	78	東山第1号墳(古墳)		
29	今町遺跡(奈良・近世)	79	東山第4号墳(古墳)		
30	梅垣内古墳(古墳)	80	東山第2号墳(古墳)		
31	上ヶ塚古墳(古墳)	81	東山第3号墳(古墳)		
32	権水古墳(古墳)	82	鐘鋤畑古墳(古墳)		
33	細川城山城跡(戦国)	83	中ノ坂第3号墳(古墳)		
34	雨戸古墳(古墳)	84	中ノ坂第9号墳(古墳)		
35	長原古墳(古墳)	85	中ノ坂第8号墳(古墳)		
36	古村積神社古墳(古墳)	86	中ノ坂第4号墳(古墳)		
37	仲間町遺跡(不明)	87	中ノ坂第1号墳(古墳)		
38	上平古墳(古墳)	88	東郷1号墳(古墳)		
39	岩御堂遺跡(旧石器)	89	東郷2号墳(古墳)		
40	石田第2号墳(古墳)	90	大門遺跡(弥生～中世)		
41	石田第1号墳(古墳)	91	矢作川河床遺跡(縄文～中世)		
42	石田東遺跡(旧石器～縄文)	92	味噌粕岩遺跡(弥生)		
43	窪地古墳(古墳)	93	蔵前古墳(古墳)		
44	細川城跡(鎌倉)	94	前田遺跡(弥生～中世)		
45	干地遺跡(旧石器～中世)	95	御用田南遺跡(弥生)		
46	しんぞう塚古墳(古墳)	96	御用田第2号墳(古墳)		
47	仁木八幡宮遺跡(旧石器～古墳)	97	御用田遺跡(弥生)		
48	上野城跡(室町)	98	御用田第1号墳(古墳)		
49	上野下村城跡(室町)	99	西阿知和城跡(中世)		
50	国江城跡(室町)	100	下山田第1号墳(古墳)		

表1 本川遺跡と周辺の遺跡(番号は右頁の地図と一致する)

豊田市教育委員会 1996『神明遺跡』豊田市埋蔵文化財調査報告書第6集  
 豊田市教育委員会 2001『神明遺跡II』豊田市埋蔵文化財調査報告書第17集  
 豊田市教育委員会 2001『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財調査報告書第18集  
 愛知県埋蔵文化財センター 2001『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集  
 愛知県埋蔵文化財センター 2002『天神前遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第96集  
 愛知県埋蔵文化財センター 2002『郷上遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第98集  
 愛知県埋蔵文化財センター 2002『矢迫遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第102集  
 愛知県埋蔵文化財センター 2002『今町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第105集

図4 本川遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院発行 豊田南部・岡崎 1:25,000 を使用)

- 遺跡
- ▲ 古墳
- 窯

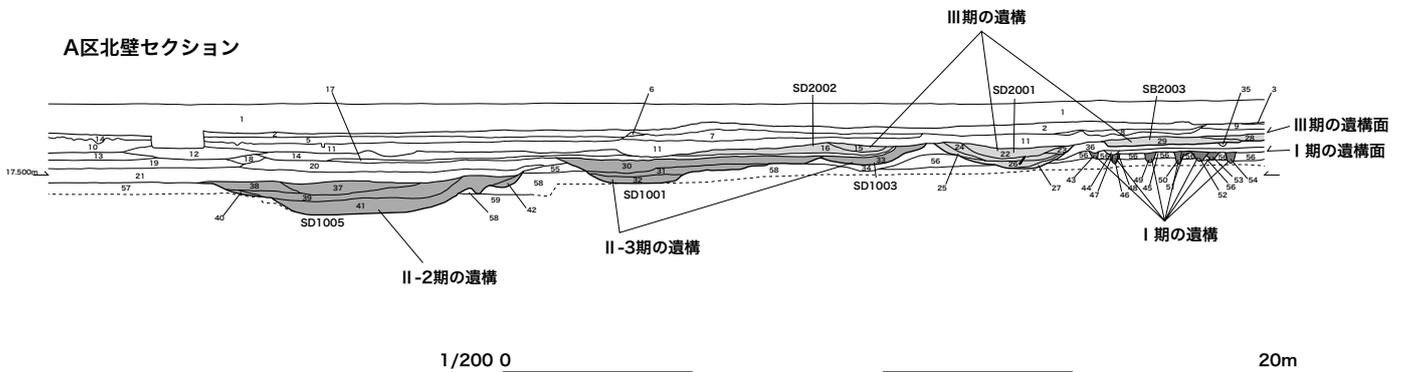


## 基本層序

本川遺跡の現況地表面は標高約 19.5m である。現代の土地区画整理にともなう客土約 80cm を除去すると、それ以前の水田面にいたる。水田耕作土・床土を剥ぐと、古代 (IV期)～戦国期 (VI期)

の遺構面となる。古墳中期 (III期) の遺構検出面はおよそ 18.5m で、縄文晩期～古墳前期 (I・II期) の遺構面は標高 18～17.5m で地山面に達する。

なお、各層位の土質については、下記の A 区土層セクション図のとおりである。(樋上 昇)



- |              |                                |              |                            |
|--------------|--------------------------------|--------------|----------------------------|
| 1. 盛り土       |                                | 31. 5Y4/1    | 粘質シルト (木片含)                |
| 2. 5Y5/1     | 細粒砂                            | 32. 10YR3/1  | シルト (植物遺体多く含)              |
| 3. 5Y6/1     | 細粒砂、2の続き                       | 33. 10YR3/1  | シルト (木片含)                  |
| 4. 5Y4/1     | 細粒砂                            | 34. 2.5Y4/1  | シルト                        |
| 5. 5Y4/1     | 細粒砂、4と同じ                       | 35. 10YR4/1  | シルト (10YR6/1 シルト小ブロック・炭含)  |
| 6. 5Y4/1     | 細粒砂 (10YR7/4 中粒砂層状に含)          | 36. 2.5Y3/1  | シルト                        |
| 7. 2.5Y6/3   | 中粒砂 (2.5Y4/1 細粒砂含)             | 37. N4/      | 粘土                         |
| 8. 2.5Y6/3   | 中粒砂 (2.5Y4/1 細粒砂含)、5と同じ        | 38. 2.5Y4/1  | 粘土                         |
| 9. 10YR5/1   | 極細粒砂 (10YR7/4 細粒砂ブロック状に含)、8の続き | 39. N3/      | 粘土 (砂・植物遺体多く含、ドングリ目立つ)     |
| 10. 7.5Y3/1  | シルト (底に腐食植物遺体が互層になる)           | 40. 5Y4/1    | 粘土                         |
| 11. 7.5YR3/1 | シルト                            | 41. 5Y3/1    | 中粒砂 (植物遺体層)                |
| 12. 5Y5/1    | 粘質シルト                          | 42. 2.5GY4/1 | 極細粒砂 (植物遺体含)               |
| 13. 2.5Y4/1  | シルト (山茶碗片含)                    | 43. 5Y4/1    | 粘質シルト (炭含)                 |
| 14. 5Y4/1    | シルト                            | 44. 5Y5/1    | 粘質シルト (5Y5/2 粘質シルト斑土、炭含)   |
| 15. 7.5YR3/1 | シルト (7.5YR4/1 シルト含、木片含)        | 45. 5Y4/2    | 粘質シルト                      |
| 16. 7.5YR4/1 | シルト (木片含)                      | 46. 5Y4/1    | 粘質シルト                      |
| 17. 5Y3/2    | シルト (5Y2/1 シルト層挟む)             | 47. 5Y5/2    | 粘質シルト                      |
| 18. 5Y4/1    | 粘土 (植物遺体含)                     | 48. 5Y5/2    | 粘質シルト、47と同じ                |
| 19. 2.5Y3/1  | 粘質シルト (土師器・植物遺体層堆積)            | 49. 5Y5/2    | 粘質シルト                      |
| 20. 5Y3/1    | 粘質シルト                          | 50. 5Y4/1    | 粘質シルト (炭含)                 |
| 21. N5/      | 粘土 (無遺物)                       | 51. 5Y4/2    | 粘質シルト (5Y4/1 粘質シルトブロック・炭含) |
| 22. 10YR4/1  | シルト (植物遺体含)                    | 52. 5Y4/2    | 粘質シルト (炭含)                 |
| 23. 10YR5/1  | シルト                            | 53. 5Y4/2    | 粘質シルト (5Y4/1 粘質シルト含、炭含)    |
| 24. 10YR4/1  | 極細粒砂 (2.5Y6/3 中粒砂含、植物遺体多く含)    | 54. 2.5GY5/1 | シルト                        |
| 25. 2.5Y4/2  | 極細粒砂                           | 55. 5GY4/1   | 粘質シルト                      |
| 26. 2.5Y4/1  | シルト (2.5Y6/2 細粒砂含、植物遺体多く含)     | 56. 5GY3/1   | シルト                        |
| 27. 2.5Y3/1  | 粘質シルト (木片含)                    | 57. 7.5GY5/1 | 粘質シルト (無遺物)                |
| 28. 7.5YR4/1 | シルト (灰層含)                      | 58. 7.5GY4/1 | 極細粒砂                       |
| 29. 10YR4/1  | シルト                            | 59. 2.5Y3/1  | 粘質シルト                      |
| 30. 2.5Y3/2  | シルト                            |              |                            |

図 5 基本層序 (A 区北壁セクション図 1 : 200)

## 第II章 遺構・遺物

### I期 縄文晩期～弥生中期前葉

#### 1. 主要遺構 (遺構図版1～7)

A区西端にはNR01、B区東端からC区西端にかけてNR02の二つの谷があり、I期からIV期の遺構群はおおむねこの二つの谷に挟まれた、南北に伸びる幅約100mの微高地上に展開している。

I期の遺構は縄文晩期から弥生中期前葉に属する。明確な竪穴住居はなく、多数のピットと溝を確認している。溝には後述するように、2～6条が2m前後の間隔でほぼ平行して走る例が7ヶ所において認められる。これらは畠の畝間の溝である可能性も考えられるが、溝の間隔が2m前後と、一般に確認される畠\*の畝間に較べてやや広いことを指摘しておきたい。

この時期の遺構群は出土遺物と遺構の重複関係から、おおまかに4小期に分けることができる。

以下、個別の遺構について詳述していく。

##### (1) I-1期

SK60

B区北東隅付近にある円形の土坑で、南半部を欠失している。直径は0.8mで深さは0.1m。馬見塚式に属する壺の破片が出土している。

このほか、後述するIII期(古墳中期)に属するB区の竪穴住居の埋土中から縄文晩期に属する土器が数点出土している。

##### (2) I-2期

SD02・06・07

A区の北東側に位置する3条の溝群。後述する大型方形土坑SK04の西に接する。中央の

SD07は全長6.1mで最大幅が0.6m、深さ0.2mをはかる。方位はN-60～62°-Wで、それぞれの溝間距離は約1.8m。

SD10

I-3期の溝SD09に切られる溝で、全長約9.6mで最大幅が1.0m、深さは0.1m。方位はN-74°-Wで、SK04の主軸に近い。

SD41 (遺構図版7)

B区の中央やや西寄りを北西から南東へ走る溝で、両端とも調査区外へと伸びている。最大幅が2.8m、深さ0.6mで、断面は緩やかなV字形をなす。方位はN-62°30'-Wで、SD02・06・07に近い。I-3期の遺構SD24～26・30・33・35に切られる。この溝より北東は谷NR02にかけて地形的に低くなるため、I-2期の遺構はSD41より南西に展開すると考えられる。榎王式に属する深鉢が出土している。

SD43

SD41に切られる南北溝。最大幅は1.9mで深さは0.2m。方位はN-28°30'-Wで、この時期に属する他の遺構とは異なるため、I-1期まで遡る可能性がある。

SK04 (遺構図版7)

一辺約3m、深さ0.3mをはかる大型の方形土坑で、A区東端に位置する。I期において、唯一竪穴住居の可能性をもつ遺構だが、柱穴・炉跡は未確認。特に出土遺物もないため、詳細な時期決定はできないが、SD02・06・07の東に接しており、主軸の方位もN-21°-Eとほぼ直交することから、これらの溝群と同時期の可能性が高い。

##### (3) I-3期

SD01・08・51～55

A・B区の境に平行して走る6条の溝群。幅は

\* 日本考古学協会鹿児島大会2000『はたけの考古学』資料集

0.4m から 1.3m で、全長は約 7m。深さは 0.2m 前後で、断面は U 字形を呈する。方位は N-55° ~ 66° -E。各溝間の距離は 1.7 ~ 2.5m。なお、SD48・49 も同様の溝で、溝間距離も約 2.5m と近いが、SD51・53 とは若干位置がずれることから、別の一群としておく。SD48 からは檜王式の深鉢が出土している。

#### SD05

東端が SD04 に切られ、西側は NR01 へ向かってのびる東西溝。幅は 0.8 ~ 5.1m と一定せず、やや蛇行している。

#### SD12・13

A 区南端に位置する 2 条の平行溝。SD12 は全長 4.1m で最大幅 0.5m、深さは 0.1m。SD13 は全長 4.4m で最大幅 0.7m、深さ 0.1m で、方位は N-68° ~ 70° -W で、SD01・08・51 ~ 55 に近い。溝間距離は 1.8 ~ 2.0m をはかる。

#### SD18 (遺構図版 6)

SD12 の北に位置し、SD12 にほぼ直交する溝。全長約 7m で最大幅約 1m、深さ 0.2m をはかる。方位は N-27° 30' -W で、SD09・47・56・57、SK15 もほぼ同じ方位をとる。

#### SD20 ~ 26

I -2 期の溝 SD41 を切って北西から南東に走る 7 条の溝。このうち、SD20・22・23・25・26 と SD22・24 の二群にわかれる。前者の一群は全長 3.9 ~ 4.9m で幅 0.2 ~ 0.4m、深さ 0.1m で、方位は N-20° ~ 32° -W。溝間距離は 1.6 ~ 2.2m をはかる。後者の一群は全長 2.05 ~ 3.4m で幅 0.2 ~ 0.4m、深さ 0.05m 前後で、方位は N-20° ~ 32° -W。溝間距離は 1.85m をはかる。

#### SD30・31・33 ~ 35

SD20 ~ 26 と同じく、SD41 を切る 5 条の溝群で、北端は調査区外へとのびる。溝幅は 0.2 ~ 0.7m で、深さは 0.2m 前後。溝間距離は 2.0 ~ 3.0m とやや不揃いである。方位は N-13° ~ 24° 30' -W。

#### SD47 (遺構図版 6)

SD48 に切られる溝で、南は調査区外へとのびる。最大幅が 0.4m で深さは 0.2m、方位は

N-25° -W。

#### (4) I -4 期

#### SD04

SD02 の西をほぼ南北に走る溝。全長約 18m、最大幅 0.9m で深さ 0.2m をはかる。I -3 期の溝 SD05 を切る。方位は N-1° 30' -E。

#### SD14 ~ 16

SD14 と SD16 は A 区のほぼ中央を東西に 2.2 ~ 2.3m 間隔で平行して走る溝。SD15 は SD16 のほぼ真西に位置することから、本来は同一の溝であった可能性がある。SD16 は全長 5.5m で最大幅 0.6m、深さ 0.2m をはかる。方位は N-88° 30' ~ 94° 30' -W。

#### SD37・38

I -3 期の溝 SD34・35 の南に位置する 2 条の東西溝。SD37 は全長 2.3m で最大幅 0.4m、深さは 0.1m。SD38 は全長 4.1m で最大幅 0.47m、深さは約 0.1m をはかる。溝間距離は約 0.3m ときわめて狭い。方位は N-81° 30' ~ 82° -E。

#### SD46

I -3 期の溝 SD47 の東に位置する南北溝で、南端は調査区外へとのびる。最大幅は約 0.4m で深さは約 0.1m。方位は N-9° 30' -W。

以下の土坑群からはいずれも檜王式の深鉢が出土していることから、I -2 ~ 4 期の範疇に属することは確実だが、それ以上の時期の決め手はない。ただし、I -2 期に関しては前述の SD41 がほぼ北限と考えられるので、それより北に位置する SK61・68・69、SX01・02 は I -3・4 期のいずれかであろう。

#### SK61

長軸 1.7m、短軸 1m、深さ 0.1m の隅丸方形を呈する土坑。長軸の方向がほぼ真北であることから、I -4 期に属する可能性が高い。

#### SK68

SK61 の南に位置し、長軸 1.0m、短軸 0.9m、深さ 0.1m の円形土坑。長軸方向がほぼ東西であることから、SK61 と同様に I -4 期である可能

性が高い。

SK69

SK68の南東に位置し、南半部を欠失する。直径は1.4mで深さは0.2m。長軸の方向がほぼ真北であることからI-4期の可能性が高い。

SK79 (遺構図版7)

I-4期の溝SD37・38の西に位置する円形土坑で、直径2.3m、深さ0.1mをはかる。後述するII期の掘立柱建物SB1013に切られる。

SX01

B区北隅に位置する性格不明の遺構で、檜王式の深鉢の口縁部が出土している。

SX02

I-3期の溝SD31の東に位置し、檜王式に属する深鉢が半裁された状態で出土している。土器棺墓の可能性はあるが、明確な掘形は認められない。

NR01

A区西端を北東から南西にのびる谷状地形で、東肩のみが確認されている。この時期に属する土器は出土していないが、すでにI期から存在したと考えられる。

NR02

B区東端からC区西端を南北に走る谷状地形。B区で確認した西肩付近にSK60とSX01がある。埋土中からは檜王式～水神平式に属する深鉢や壺の破片が出土している。弥生中期以降埋没が進み、続くII期には西肩はさらに東へと移動している。

## 2. 出土土器 (遺物図版1・2)

SD41～48、SK61・68・69・79、SX01・02、検出III・IV (遺物図版1)

1～3・5～12は条痕文系の深鉢で、外面は二枚貝の腹縁をもちいて横方向に調整をおこなう。内面はナデ。所属時期はおおむね檜王式期の範疇に属する。

SK60 (遺物図版1)

4は条痕文系の壺の胴部。外面の調整は上半部が横方向の板ケズリ、下半部は左上がりの二枚貝による条痕をほどこす。内面はナデ。時期は馬見

塚式期。

NR02 (遺物図版2)

14～16は檜王式に属する条痕文系の深鉢。外面の調整は14・16が二枚貝による横方向の条痕、15は板ケズリ。内面はナデ。

17・18は水神平式の条痕文系深鉢。外面には17は横方向、18は左上がりの条痕をほどこす。18の内面は板ケズリ。

19は細頸壺の口縁部で、口縁端部および外面には二枚貝の腹縁による押し引き文をほどこす。内面はナデ。これまでに類例がなく、時期は決めがたいが、弥生中期前葉に属する可能性が高い。

NR1002 (遺物図版2)

20は縄文晩期末に属する条痕文系の深鉢。外面は二枚貝による横方向の条痕で、内面は板ケズリ。

SB2037・2045・2048・2075 (遺物図版2)

21～24はIII期(古墳中期)の竪穴住居から出土した縄文晩期～弥生前期の土器群。21は突帯文系の深鉢。外面は二枚貝による条痕ののち、ナデ調整。内面はナデ。22は波状口縁の深鉢で、口縁端部と口縁部外面に刺突をほどこす。外面は条痕ののちナデで、内面はナデ。23は深鉢の口縁部か。24は中部高地系(水式)の深鉢。外面は縦ハケののち、半裁竹管で文様を描く。内面はナデ。底部外面には網代の圧痕が残る。土器胎土分析の結果では、火山岩地域の組成をしめすことから、御嶽山周辺からの搬入品である可能性が高い。(樋上 昇)

## II期 弥生中期末～古墳前期

### 1. 主要遺構 (遺構図版8～16)

II期の遺構は弥生中期末から古墳前期で、竪穴住居12棟・掘立柱建物1棟のほか、溝14条、土坑多数がこの時期に属する。主軸の方位と遺構の重複関係から、北で約40°東へ振れる一群(II-1期)、北で約60°東へ振れる一群(II-2期)、ほぼ真北の一群(II-3期)のおおむね3時期に区分できる。出土遺物から、これらはそれぞれ弥

生中期末(長床式)・弥生後期(川原上層Ⅰ～Ⅱ式)・古墳前期(川原上層Ⅲ式)に属する。

この時期の遺構はもっぱらB区東半部に集中するが、A区においても、西側の谷NR01(NR1001)に沿って5条の溝が南北に走っている。また、Ⅰ期にみられたB区東端の谷NR02は東に移動し、NR1002となるが、NR02の埋土中からはⅡ-Ⅰ期の遺物が多数出土していることから、NR02はⅡ-Ⅰ期までは機能しており、Ⅱ-2期以降、埋没が進んでNR1002へと移動する。

以下、主要遺構の記述に際しては、この3期区分にしたがって記述する。

### (1) Ⅱ-Ⅰ期

#### SB1002・SK1045(遺構図版9)

NR02に接しており、東側コーナーはNR02によって破壊されている。一辺が約3.6mのほぼ正方形で、南辺に対して北辺がやや広がる。主軸の方位はN-42°-Eで、台付甕1点が出土している。SK1044～1046に切られる。うち、SK1045からも同時期の土器が出土している。SK1045はSB1002と主軸の方位がほぼ一致し、長軸3.3m、短軸1.8m、深さ0.2mをはかる。

#### SB1005・SK1073(遺構図版11)

B区中央北辺に位置する。方位はN-30°-Eで、この時期としては唯一ほぼ真北の竪穴住居。南辺は試掘トレンチで破壊されており、東西辺は3.60m、南北辺は2.10mが残る。住居床面に掘削された土坑SK1073はSB1005の北東コーナーにあり、長軸2.3m、短辺1.1mで深さ0.2m。SB1011(遺構図版12)

時期を決定しうる土器は出土していないが、主軸の方位がN-43°-EとSB1002に近いことからこの時期に属するとおもわれる。北東辺は遺存していないが長軸は4.2m以上、短辺は2.8m。

#### SB1013(遺構図版13)

B区西端付近に位置する掘立柱建物。桁行3間、梁間2間の総柱で、東側の柱列に沿って南側にさらに柱穴が1基ある。柱間は桁行が1.69～1.82m、梁間は2.16～2.52mである。柱穴は

掘形が直径約30cmの円形で、柱径は約18cm。東側と南側の柱列には柱根が遺存していた。主軸の方位はN-16°-Eで、Ⅱ-Ⅰ期の他の遺構とは合わず、所属時期がわかる遺物もないが、Ⅱ-2・3期の遺構群とはさらに軸線がずれることから、ここではⅡ-Ⅰ期としておく。

#### SK1003

A区のほぼ中央に位置する長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.2mの円形土坑。細頸壺の口縁部が出土している。

#### SK1006

A区とB区のほぼ境に位置する土坑で、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.1mをはかる。壺の上半部が出土している。

#### SK1028

Ⅱ-2期の竪穴住居SB1001の床面にある土坑で、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.3mをはかる。大型壺の肩部片が出土しているが、Ⅱ-2期の竪穴住居内に位置することから、このⅡ-Ⅰ期に属するか否かは不明。

#### SK1072(遺構図版16)

B区中央北辺に位置する不整形の土坑で、長軸5.8m、短軸4.1m以上、深さ0.4mをはかる。台付甕5点、壺の破片2点が出土している。そのほか、この遺構の上面にあたるⅢ期の竪穴住居SB2069の埋土中からもこのⅡ-Ⅰ期に属する土器が多数出土しており、本来はこの土坑のものであった可能性が高い。

他にSK1020・SK1076・SK1115・SX1001なども時期を決めうる土器は出土していないが、主軸の方位からこの時期に属するとおもわれる。また、前述のように、NR02もこの時期まで機能していたと考えられる。

### (2) Ⅱ-2期

#### SB1004(遺構図版10)

B区北辺のやや東寄りに位置する竪穴住居で、長軸が4.7m、短軸は3.3mをはかる。主軸の方位はN-0°30'-Eとほぼ真北で、後述するSB1007に重複するように築かれている。川原上

層 I -2c 期に属する土器が多数出土している。

SB1006 (遺構図版 11)

II -1 期に属する SB1005 の南に位置する竪穴住居。長軸 4.0m、短軸 3.7m で、主軸の方位は N-3° 30' -E。時期を決めうる土器はないが、主軸の方位は真北に近いことから II -2 期に属する可能性が高い。

SB1007 (遺構図版 10)

SB1004 に切られる竪穴住居で、長軸 4.4m、短軸 3.9m で主軸の方位は N-5° -W。北・東・南には周溝を有する。北周溝 SK1098 からミニチュアの台付甕が出土している。SB1004 に切られることから、川原上層 I 式前半期に属する。

SB1008 (遺構図版 11)

B 区中央やや東に位置する竪穴住居。長軸 6.2m、短軸 2.8m と極端に東西に長い。主軸の方位は N-84° -W。中央両端近くに径 0.9 ~ 1m 前後の円形土坑が 2 基あることから、2 本の柱で桁を支えていたと考えられる。出土遺物は特にないが、主軸の方位から II -2 期とする。

SD1004 (遺構図版 14)

SD1005 を切る土坑状の溝で、最大幅 3.2m、深さ 0.6m。内部から多量のドングリが出土した。時期を決めうる遺物はなく、II -3 期に下る可能性もある。

SD1005 (遺構図版 14)

後述する II -3 期の溝 SD1001 に切れ、南はやはり SD1004 に切られる。西側の肩に杭列および矢板列を打ち込み、西に分岐する SD1013 が接続する。規模は最大幅が 6.3m、深さは 0.1m で、主軸の方位は N-11° -E。時期を決めうる土器はないが、曲柄三又鍬が 1 点出土している。II -3 期の溝 SD1001 に切られることから、II -2 期に属する可能性が高い。

SD1013 (遺構図版 14)

SD1005 から南西に向かって分岐する溝。SD1005 同様 II -2 に属する可能性が高い。最大幅が 2.8m、深さ 0.1m で、主軸の方位は N-33° -E。

SK1011 (遺構図版 12)

II -3 期の竪穴住居 SB1001 の北壁に接する土坑で、長軸 2.2m、短軸 1.2m、深さ 0.2m。川原上層 II -1c 期の良好な一括土器群が出土している。

NR1002

B 区の東壁に沿って北西から南東にのびる谷。埋土中からは川原上層 I ~ III 式期にかけての土器が出土しているが、川原上層 II -1 ~ 2 式期のものが最も多い。

このほか、SB1009・SD1008 などの遺構もこの II -2 期に属する可能性が高い。

### (3) II -3 期

SB1001 (遺構図版 9)

NR1002 に近接している竪穴住居。長軸 5.3m、短軸 5.0m と II 期の竪穴住居では最も規模が大きい。主軸の方位は N-68° 30' -E。川原上層 III 式期の小型台付甕やミニチュア器台、高杯の脚部が出土している。

SB1003 (遺構図版 10)

II -2 期に属する SB1007 の東に接する竪穴住居で、長軸 3.0m、短軸 2.9m。主軸の方位は N-69° -E で、SB1001 とほぼ同じであることから、II -3 期に属するとおもわれる。

SB1010

II -1 期の SB1011 の東に位置する竪穴住居で、長軸 3.3m、短軸 3.1m。主軸の方位は N-58° -E と SB1001 に近いことから II -3 期に属する可能性が高い。

SD1001 (遺構図版 14)

II -2 期に属するとおもわれる溝 SD1003 と SD1005 に挟まれた南北溝で、最大幅 3.8m、深さ 0.6m をはかる。主軸の方位は N-8° -E。溝の下層より川原上層 III -2 式期の良好な土器群と木製品が出土している。

SD1002 (遺構図版 14)

SD1001 より分岐する溝で、最大幅 1.9m、深さ 0.5m をはかる。主軸の方位は N-15° -W。出土遺物は特にない。

### SD1003 (遺構図版 14)

A区西端部に4条走る南北溝のうち、最も東に位置する溝。最大幅2.3m、深さ0.6mをはかり、主軸の方位はN-2°30'-E。時期を決めうる出土遺物は少ないが、川原上層Ⅲ～Ⅳ式期の土器が出土していることから、Ⅱ-3期に属する。

### SK1001 (遺構図版 15)

SD1003の西肩を切って掘削された土坑。長軸1.4m、短軸1.1mをはかる。土坑内からは川原上層Ⅲ-1b～2a式期の大型台付甕4個体分が重なった状態で出土した。

このほか、SK1021・1034・1075も主軸の方位から、この時期に属する可能性が高い。

## 2. 出土土器 (遺物図版 3～11)

### (1) Ⅱ-1期

#### SB1002 (遺物図版 3)

25は台付甕。口縁端部に刻みをほどこし、口縁部から体部にかけては内外面ともナデ調整。

#### SB1005 (遺物図版 3)

26・27は壺の肩部で、いずれも櫛による直線文で区画したのち、上下にヘラで斜格子文をほどこす。内面はナデ。

28は深鉢状の甕で、調整は内外面ともにナデ。

29・30は台付甕の体部上半。口縁端部に刻みをもち、器面調整は内外面ともにナデをほどこす。

#### SK1003 (遺物図版 3)

31は細頸壺の口縁部。端部に刻みをほどこし、内外面ともにナデ調整。

#### SK1006 (遺物図版 3)

32は受口状口縁の太頸壺。口縁部外面はナデ、口頸部以下は縦ハケののち、半裁竹管で横方向に沈線をほどこし、肩部にはヘラで波状文を加える。内面はナデ。

#### SK1028 (遺物図版 3)

33は太頸壺の肩部。櫛による直線文と波状文を交互にほどこす。内面はハケののちナデ。

#### SK1045 (遺物図版 3)

34は太頸壺の肩部で、外面にはハケののち半

裁竹管による沈線をほどこし、下段にはヘラで2条の連弧文を加える。

35は台付甕の体部上半。口縁端部に刻みをほどこし、内外面の調整はナデ。

36は台付甕の脚部。外面には縦方向のヘラミガキをほどこし、内面はナデ調整。

#### SK1072 (遺物図版 4)

37・38は壺の肩部。37は縦にヘラで直線文ののち、横方向に半裁竹管で直線文を加え、その下には同じく半裁竹管で連弧文を2条ほどこす。内面はナデ。38は外面にササラ状工具で横方向に直線文を描き、下に上向きの連弧文をほどこす。内面はナデ調整。

39～44は台付甕。39・40は小型で41～43は大型の甕で、いずれも口縁端部には刻みを有する。39は口縁部に強い横ナデをほどこし、外面が縦ハケののち、ナデ。内面は上半部がハケののち板ケズリで、下半部は板ケズリ。40は外面にハケを残し、内面はナデ。41は外面が縦ハケののちナデで、内面は粗い横ハケあるいは板状工具によるケズリ。42は口縁部を強く横ナデし、外面はナデ、内面は横ハケののち、ナデ調整。43は外面が口頸部はナデで、肩部以下は横方向の板ケズリ。内面は縦方向の板ケズリをほどこす。44は大型の脚部。外面は横ハケののち縦方向のヘラミガキ。内面はナデで、底部内面にはスガが付着する。

#### SB2069 下層 (SK1072) (遺物図版 5)

45～47は太頸壺。45は口縁端部にまばらな間隔で刻みをほどこし、頸部にはササラ状工具で下向きの連弧文と簾状文、肩部は上向きの連弧文。内面はナデ。46は頸部から肩部にかけての破片で、櫛描の直線文で区画したのち、その間を下向きの鋸歯文で埋める。内面は板ケズリ。47は肩部から体部下半の破片で、肩部には櫛による直線文と波状文。内面は縦方向の板ケズリ。48は肩部で、櫛による直線文をほどこし、上下にヘラによる斜格子文を加える。内面はナデ。

49・50は台付甕の体部。いずれも口縁端部に刻みを加え、外面はナデ、内面は板ケズリののち、

ナデをほどこす。

SK1073 (遺物図版 5)

51・52 は太頸壺。51 は頸部で、外面にはササラ状工具で直線文と籐状文をほどこし、その下には同じ工具で山形文を描く。内面はナデ。52 は肩部で、外面は櫛による直線文と波状文を交互に描く。内面はナデ。

NR02 (遺物図版 6)

53 は太頸壺の肩部で、外面は櫛による直線文と波状文。内面はナデ。

54 は大型壺の底部で、外面はヘラミガキ。内面はナデ。

55 は小型の甕口縁部で、内外面ともにナデ調整。

56～58 は台付甕で、56・58 は口縁端部に刻みをほどこす。56 は内外面ともに板ケズリののち、ナデ。57・58 は内外面ともにナデで、57 は特に口縁部に強い横ナデをほどこす。58 は口径が 30cm を超える大型品。

NR1002 (遺物図版 6)

59 は太頸壺の頸部で、横ハケののち斜めにヘラで刻みを加え、その下は半裁竹管で区画し、さらに下にはヘラで山形文を描く。

60 は台付甕の口縁部で、端部には刻みを加え、内外面はナデ調整。

SD1001 (遺物図版 6)

61 は高杯あるいは鉢の脚部で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整。

## (2) II -2 期

SB1002 (遺物図版 7)

川原上層 I -2c 式期\*の一群。

65 はいわゆるワイングラス形高杯 (川原分類高杯 R) の杯部。外面は縦、内面は横方向のヘラミガキをほどこす。川原上層 II -2 式期に属する。

SB1004 (遺物図版 7)

66 は山中様式の有段高杯 (川原分類高杯 F) の杯部。立ち上がりが低く、外面には沈線と 2 条の波状文をほどこす。

67・68 は高杯の脚部。67 は円形の透かしが残る。いずれも外面は縦方向のヘラミガキ。67 は内面に横ハケ、68 はナデ。

69 は直口壺 (川原分類壺 D) の口頸部。口縁と肩部の境に沈線を 2 条加える。調整は外面が縦、内面は横方向のヘラミガキ。

70 は広口壺 (川原分類壺 B) の底部。平底で、体部外面には縦方向のヘラミガキをほどこす。

71～73 は台付甕 (川原分類甕 C)。71 は口径が 30cm 近い大型品。外面は横ハケで、内面は横ハケののち、縦方向のヘラケズリ。72 は脚部で、外面には縦ハケをほどこす。73 は小型の甕で口縁部内外面は横ハケ、体部外面は縦ハケで、体部内面は縦方向のヘラケズリ。

74 は器形不明だが、外面には赤彩をおこない、横方向に穿孔をほどこす。合子状のツマミか。

SB1007 (SK1098) (遺物図版 7)

98 はミニチュアの台付甕で、手づくねで仕上げる。出土した SB1007 が上記の SB1004 に切られることから川原上層 I 式期に属することは確実である。

SK1011 (遺物図版 10)

川原上層 II -1c 期の一括資料。

86～88 は有段高杯 F。川原上層 I 式期の 66 に較べて立ち上がりが高く、かつ開くようになる。86・87 は口縁部外面に波状文、脚部には櫛描の直線文をほどこし、87 は口縁部端部に 2 条の沈線を加える。脚部の穿孔は 3 方向。88 は口縁部の波状文、脚部の櫛描文・穿孔をいずれもほどこさない。内外面ともに縦方向のヘラミガキ。86・87・89 は尾張地域からの搬入品か。

89 は器台。口縁部は上面に広い面を有し、脚部には沈線を加える。穿孔は 3 ヶ所。

90・91 は短頸壺。90 は口縁部が内湾し、91 は強く外反する。いずれも器高に較べて体部径が大きく、外面には縦方向のヘラミガキをほどこす。

92・93 は広口壺 B。口縁部外面を強くなでて面をつくりだすが、下垂はしない。外面は縦方向のヘラミガキ、口縁部内面には櫛による刺突を

\* 赤塚次郎 2001 「川原上層 I・II・III 式の設定」『川原遺跡 第二分冊』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 91 集

なお、当該期の器種分類もこれに従っている。

ほどこす。

94～97は台付甕C。いずれも口縁端部に面取りをほどこす。外面および口縁部内面はハケ、体部内面は縦方向のケズリ。94は小型、95は中型、96・97は大型品。

NR02（遺物図版11）

100は台付甕あるいは鉢の口縁部で、器壁が厚く、外面は縦ハケののち横ハケ、内面は口縁部が横ハケ、体部はヘラケズリをほどこす。

NR1002（遺物図版11）

110～112は川原上層I式期、101～106は川原上層II式期に属する。

110は加飾広口壺Bの口縁部で、内面に櫛で扇状文をほどこす。111は甕の蓋。内外面ともにハケメが残る。112は台付甕で、II-1期（長床期）の系譜をひく。外面はナデ、内面はヘラケズリをほどこす。

101はワイングラス形高杯Rで、口縁端部が緩やかに外反する。外面は縦、内面は横方向のヘラミガキをほどこす。102～104は有稜高杯Fの杯部。102・103は外面に波状文を描く。104は縦方向のヘラミガキ。105・106は高杯の脚部。105は外面に赤彩をほどこす。沈線と櫛による刺突文。106は端部で、面取りをほどこす。

検出III（遺物図版11）

113はワイングラス形高杯だが、外面に赤彩をほどこし、口縁部が強く外反する川原分類の高杯Pで、前述の65・101とは系譜を異にする。外面は縦方向のヘラミガキ、内面には横ハケが残る。川原上層I-2c期に属する。

検出IV（遺物図版11）

114は甕あるいは壺の蓋で、左右両側に各2ヶ所穿孔をもつ。川原上層I式期か。

### (3) II-3期

SB1001（遺物図版9）

62は高杯あるいは器台の脚部で、外面には縦方向のヘラミガキをほどこす。

63は小型の台付甕。器高に対して高い脚部をもち、口縁部径が体部径より広い。体部外面は縦

ハケ、口縁部内面は横ハケ、体部内面は縦方向のヘラケズリをほどこす。

64はミニチュアの器台で、手づくねで仕上げる。

SD1001（遺物図版8）

川原上層III-2式期の良好な土器群。

75はワイングラス形高杯Rで、口縁端部はわずかに外反する。外面は縦ハケののちヘラミガキをほどこす。

76・77は川原分類による広口壺H。76は口縁部が二段階に外反し、端部を上方につまみだす。外面は斜めハケののち、縦方向のヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキで、体部はヘラケズリ。77は口縁端部に面取りをほどこす。外面の調整は縦ハケで、口縁端部付近と肩部以下にはスガが厚く付着する。体部内面はヘラケズリ。

78は口縁端部に刺突を有する台付甕（川原分類甕D）。体部外面は横ハケ、口縁部および体部内面には幅広のヘラケズリをほどこす。

79は大型の台付甕で、口縁部が内湾する（川原分類甕G）。内外面ともに粗いハケメを残す。

80・81は台付甕の脚部。80は底部径が14cmを超える大型品。体部の底には円板を充填する。80・81ともに端部は内湾し、外面には縦ハケをほどこす。

SK1001（遺物図版9）

82～85は大型の台付甕。82は口縁部径が体部径に較べて大きく、口縁端部を上方につまみだす。外面および口縁部内面はハケ調整。83は口縁部・体部ともにゆがみが著しい。体部上半はハケで、下半はヘラケズリ。内面は横ハケののちヘラケズリ。85は口縁端部を強く面取りする。外面および口縁部内面は横ハケ、体部内面はヘラケズリをほどこす。85はわずかに内湾する口縁部で、脚台が低く開く。外面は縦ハケ、口縁部内面は横ハケ、体部内面はヘラケズリ。

NR1002（遺物図版11）

107～109は廻間様式の影響を強くうけた内湾有段高杯の脚部。いずれも外面は縦方向のヘラミガキで、109の内面は横ハケ。（樋上 昇）

## Ⅲ期 古墳中期

### 1. 主要遺構 (遺構図版 17～62)

Ⅲ期の遺構としては、竪穴住居 93 棟、溝 27 条、土坑 130 基、自然流路 2 条、ピット多数を確認している。

竪穴住居の分布は、調査区内の最高所である B 区西寄りが後世の削平によるためか、やや希薄で、A 区東半部と B 区中央部に集中する。特に、A 区東半部は後述する SB2015・2025 など、一辺が 7m を超える大型の竪穴住居がある。これら大型住居の西には南北に流れる溝 SD2001 があり、この溝の東岸からはケヤキの大木の根がみついている。このケヤキの根の周辺からは多量のミニチュア土器が出土していることから、この一画では小規模なマツリがおこなわれていたことがわかる。この集落では、少なくとも調査区内において掘立柱建物が一棟も確認していないことから、集落の有力者は南北溝 SD2001 とそのほとりにそびえるケヤキの大木を背にした大型竪穴住居に居住していた可能性が高い。ただし、これら大型建物を囲む柵列・溝のような施設はみられない。おそらく、大型建物に居住していた人々も、豪族あるいは首長と呼びうるような、集落の一般構成員と隔絶した存在ではなかったとおもわれる。

なお、この時期に所属する遺構はきわめて多く、本節で詳述することはできないため、まとまった遺物が出土した遺構についてのみ記述をおこなひ、その他の遺構については遺構一覧表にまとめることとした。

#### SB2004 (遺構図版 26)

A 区の中央やや北寄りで、SD2001 に近い位置にある竪穴住居で、SB2005 を切り、SK2002 に切られる。規模は長軸 5.4m、短軸は 3.4m で、主軸の方位は N-36° 30' -W である。埋土中から土師器の高杯・壺・甕などが出土している。

#### SB2015 (遺構図版 30)

A 区のやや東寄りに位置する大型の竪穴住居。

規模は長軸 7.1m、短軸 6.5m で、主軸の方位は N-55° 30' -E である。SB2016～2018・2020 を切っている。SB2016 はこの SB2015 とほぼ同規模であることから、SB2016 と SB2015 の居住者には何らかの関連があった可能性が高い。埋土中から土師器の小型壺・壺・甕などが出土している。

#### SB2016 (遺構図版 30)

前述の SB2015 に切られており、SB2012・2014・2017 を切っている。長軸 7.3m、短軸 6.4m で、主軸の方位は N-80° -W。土師器の高杯・小型壺などが出土している。

#### SB2025 (遺構図版 34)

A 区中央南壁際に位置する竪穴住居で、SB2007～2009・SK2008 を切っている。長軸 8.3m、短軸 7.6m と、本調査区内で最大の規模を有する。主軸の方位は N-14° -W で、SB2015 とは同時併存の可能性がある。住居内の北壁付近に土師器の高杯・壺・甕などが集中しているが、その多くは埋土中からの出土である。

#### SB2029 (遺構図版 35)

B 区のほぼ中央に位置する竪穴住居。SB2076 に切られている。残存する一辺の長さは 5.0m で、主軸の方位は N-29° 30' -E。床面の中央やや西寄りには炭化物の広がり認められる。床面直上から土師器の高杯・小型壺・壺・甕など多量の土器が出土している。

#### SB2034 (遺構図版 37)

B 区東寄りの NR2002 に近接した位置にある竪穴住居で、SB2040 を切っている。規模は長軸が 5.1m、短軸が 4.8m で、主軸の方位はほぼ真北である。北東コーナー付近の埋土中から土師器の高杯・小型壺・壺・甕など多量の土器が出土している。

#### SB2035 (遺構図版 37)

SB2034 の東に位置する竪穴住居で、SB2065 と SK2108・2112 に切られている。残存する一辺の長さは 4.9m で、主軸の方位は N-31° 30' -E。埋土中から土師器の高杯・壺・甕などが出土している。

SB2041 (遺構図版 40)

SB2070 の東に位置する竪穴住居だが、西壁の一部が残存するのみで、規模・主軸の方位は不明。わずかに残存した西壁に接してカマドの支脚にもちいられたとみられる高杯が倒立した状態で出土している。本集落内で作り付けのカマドを有する竪穴住居は SB2067 とこの SB2041 のみであることから、SB2041 も本集落の最終段階に営まれた竪穴住居である可能性が高い。

SB2042 (遺構図版 41)

B 区北東隅近くに位置する竪穴住居。規模は長軸 5.0m、短軸 4.8m で、主軸の方位は N-4° -W とほぼ真北。南西コーナー付近の埋土中から土師器の高杯・壺などが出土している。

SB2045 (遺構図版 41)

SB2029 の北西に位置する竪穴住居。長軸 3.2m、短軸 3.1m ときわめて小規模で、主軸の方位は N-8° 30' -E と真北に近い。極小規模の竪穴住居ながら、床面直上から土師器の高杯・小型壺など多量の土器が出土している。明確な柱穴が確認されていないことから、方形の廃棄土坑である可能性も考えられる。

SB2046 (遺構図版 42)

SB2029 の西に位置する竪穴住居で、SB2048・2076・2087 と SK2106・2107 に切られ、SB2057 を切っている。規模は長軸が 5.6m 以上、短軸が 4.8m で、主軸の方位は N-75° -E。埋土中から土師器の鉢・高杯・壺などが出土している。

SB2048 (遺構図版 43)

SB2046 を切る竪穴住居で、SB2060・SK2106 に切られる。長軸 4.9m、短軸 4.0m と小型である。主軸の方位は N-15° 30' -E。埋土中から土師器の高杯・小型壺・壺などが出土している。

SB2056 (遺構図版 46)

SB2029 の東に位置する竪穴住居で、SB2031・2083 を切っている。規模は長軸 4.0m、短軸 3.6m と小型である。主軸の方位は N-83° -E と真北に近い。埋土中から土師器の高杯・小

型壺・甕などが出土している。

SB2057 (遺構図版 46)

SB2046 の南に位置する竪穴住居で、SB2046・2087 に切られる。長軸 4.0m、短軸 3.6m と SB2056 とほぼ同規模である。主軸の方位は N-51° -W。床面直上および埋土中から土師器の高杯・小型壺・壺・甕・ミニチュア土器など多量の土器が出土している。

SB2059 (遺構図版 46)

B 区南西寄りに位置する竪穴住居で、SB2077 に切られ、SB2061 を切っている。規模は長軸が 5.6m で短軸が 5.0m。主軸の方位は N-23° 30' -E。埋土中から土師器の高杯・壺・甕などが出土している。

SB2062 (遺構図版 47)

B 区南西隅に位置する竪穴住居で、SB2074 に切られる。残存する一辺の長さは 3.7m ときわめて小規模である。主軸の方位は N-29° -E で、床面には炭化物の広がり認められる。土師器の高杯・甕などが出土している。

SB2064 (遺構図版 48)

SB2048 の西に位置する竪穴住居で、他の竪穴住居・土坑との重複はない。規模は長軸が 5.5m で短軸は 5.4m。主軸の方位は N-58° 30' -W。

この竪穴住居は焼失しており、4本の主柱穴には柱材、床面には垂木材が焼け残った状態で遺存していた。主柱穴の規模は直径約 20cm で、深さは床面から約 40cm あり、柱根の直径は最も太いもので 11cm 程度である。北側の柱穴 P2001 には礎板が敷かれていた。また、北壁付近と中央には炭化物の広がり認められ、南側のコーナーには粘土塊が遺存していた。

床面直上および埋土中からは土師器の高杯・小型壺・壺・甕など多量の土器が出土した。

SB2065 (遺構図版 48)

B 区東寄りで、SB2035 の南に位置する竪穴住居。SB2035 を切り、SK2112 に切られる。長軸が 4.6m で短軸は 3.7m と小規模である。主軸の方位は N-12° 30' -W と真北に近い。埋土中から土師器の高杯・小型壺・壺・甕など、比較的多

くの土器が出土している。

SB2067 (遺構図版 49・50)

B 区のやや南西寄りに位置する竪穴住居で、SB2090 を切っている。規模は長軸・短軸ともに 5.6m で、主軸の方位は N-34°-30'-W。東側の壁面は南半部がやや広がっており、その広がったところに作り付けのカマドがある。

このカマドはきわめて残存状況がよく、天井部の崩落が全くなかったために、住居の壁面付近を除いて煙道部がほぼ完全に遺存しており、内部には炭化物と焼土がぎっしりと詰まっていた。焚き口の中央から支脚用につくられたとおもわれるきわめて器壁の厚い土師器の高杯が倒立状態で出土した。住居の外にのびる煙出しは直径約 20cm の正円形である。

住居の内部にはこのカマドから掻き出された炭化物が一面に広がっており、その炭化物の層も複数面あることから、何度も床を貼り直していることがわかる。最も下の床面には、住居のほぼ中央に焼土面があり、地床炉も存在していた可能性がある。カマド付近の壁面が不自然に広がっていることと考え合わせると、この住居は当初地床炉のみで、のちに一部を拡張してカマドを付設した可能性もある。いずれにせよ、本集落内で確認した作り付けカマドは SB2041 と、この SB2067 の 2 例のみで、いずれもこの集落では最終段階の竪穴住居であることから、集落の存続期間の最終末にカマドが導入されたことになる。ただ、このカマドをもつ住居の規模がきわめて標準的なことは、カマドをもたないが主軸の方位がほぼ一致することから同時期の可能性がある大型竪穴住居 SB2015・2025 などといかなる関連を有していたのかが注目される。

床面および埋土中からは土師器の杯・鉢・高杯・小型壺・壺・甕などとともに、この時期の本集落内ではほとんど出土していない須恵器のハソウの頸部が出土していることも注目に値する。

SB2068 (遺構図版 50)

B 区中央やや北寄りに位置する竪穴住居で、SB2088 を切っており、SK2104 に切られている。

規模は長軸が 4.6m で短軸は 4.4m とやや小型である。主軸の方位は N-10°-E で、真北に近い。床面直上から土師器の杯・高杯・ミニチュア土器・土製品などが出土している。

SB2069 (遺構図版 51)

B 区中央で北壁に接する位置にあり、SB2070 に切られる。長軸は 4.6m 以上で短軸は 3.6m 以上。主軸の方位は N-14°-E と真北に近い。埋土中からは土師器の杯・高杯・壺などが出土している。

SB2070 (遺構図版 51)

SB2069 を切る竪穴住居で、規模は長軸が 3.4m 以上で短軸は 3.0m 以上。主軸の方位は N-20° 30'-E。埋土中から土師器の高杯・小型壺・壺・甕・ミニチュア土器などが出土している。

SB2071 (遺構図版 51)

B 区南東寄りに位置する竪穴住居で、SB2079 を切っている。規模は長軸が 5.0m で短軸は 3.4m。主軸の方位は N-9°-E と真北に近い。埋土中からは土師器の高杯・小型壺・壺などが出土している。

SB2072 (遺構図版 52)

B 区中央南寄りに位置する竪穴住居で、SB2089 を切っている。規模は長軸が 5.9m で短軸は 5.5m。主軸の方位は N-88°-W と真北に近い。検出面から床面まで 28cm と比較的深く、途中に 1 層炭化物層が入ることから、床面を貼り直している可能性がある。床面直上および埋土中から土師器の高杯・鉢・壺・甕・ミニチュア土器・土製品など多量の遺物が出土している。

SB2073 (遺構図版 52)

SB2067 の東に位置する竪穴住居で、SB2030・2078・2082・2090 を切っている。規模は長軸が 4.6m で短軸は 4.5m とやや小型。主軸の方位は N-61°-E で、SB2015・2025・2067 の軸線に近い。床面にはやや西に偏して炭化物層の広がりがあり、土師器の高杯・壺・甕などの土器が出土している。

SB2074 (遺構図版 53)

B 区の南西隅に近く、SB2062 を切る竪穴住

居。長軸 4.5m 以上で短軸は 3.2m 以上。主軸の方位は N-26° -E。検出面から床面までの深さが 30cm あり、床面には炭化物層が一面に広がる。埋土中から土師器の高杯・小型壺・甕などが出土している。

#### SB2076 (遺構図版 53)

B 区中央やや西寄りに位置する竪穴住居で、SB2029・2046 を切っている。規模は長軸が 4.6m で短軸は 3.2m と小型。主軸の方位は N-84° -W とほぼ真北。土師器の高杯・壺・ミニチュア土器などが出土している。

#### SB2077 (遺構図版 54)

B 区南西寄りに位置する竪穴住居で、SB2059・2061 を切っている。規模は長軸が 5.9m で短軸は 5.8m。主軸の方位は N-8° 30' -E と真北に近い。埋土中から土師器の高杯・壺などが出土している。

#### SB2078 (遺構図版 54)

B 区中央南寄りに位置する竪穴住居。SB2082 を切り、SB2073 に切られる。規模は長軸が 3.7m で短軸は 3.1m ときわめて小規模だが、床面には 4 本の支柱穴が認められる。主軸の方位は N-29° 30' -E。床面および埋土中からは土師器の高杯・壺・甕などが出土している。

#### SB2080 (遺構図版 39)

B 区中央やや東寄りに位置する竪穴住居で、SB2039 を切っている。上層・下層の 2 基の竪穴住居が重複している。規模は上層が 6.4 × 5.8m で、下層は 6.4 × 6.4m。主軸の方位は N-6° 30' -W と真北に近い。上層の床面には壁溝がめぐり、下層の北半部には炭化物層が広がる。上層・下層ともに大量の土師器が出土している。

#### SB2081 (遺構図版 55)

B 区のほぼ中央に位置する竪穴住居。SB2032 を切り、SB2083 に切られる。規模は 5.7 × 5.7m で、主軸の方位は N-45° -W。床面中央には炭化物の広がり認められる。埋土中からは土師器の高杯・小型壺・壺・甕など多量の土器が出土している。

#### SB2082 (遺構図版 55)

B 区中央南寄りに位置する竪穴住居で、SB2073・2078 に切られる。規模は長軸が 6.0m で、短軸は 4.8m。主軸の方位は N-4° 30' でほぼ真北。床面の北寄りに炭化物の広がり認められる。住居床面直上および埋土中からは土師器の高杯・小型壺・甕などが出土している。

#### SB2083 (遺構図版 55)

B 区ほぼ中央に位置する竪穴住居で、SB2056・2081 を切っている。規模は長軸が 4.6m で短軸は 3.4m と小型である。主軸の方位は N-16° -W。床面やや西寄りには炭化物の広がりがあり、床面および埋土中からは土師器の高杯・小型壺・壺・甕など多量の土器が出土している。

#### SB2085 (遺構図版 56)

B 区ほぼ中央で南壁に接しており、SB2067 の南に位置する竪穴住居。規模は長軸が 4.3m で短軸は 3.3m 以上。主軸の方位は N-25° 30' -W。埋土中からは土師器の高杯・小型壺・壺などが出土している。

#### SB2087 (遺構図版 57)

B 区中央西寄りに位置する竪穴住居で、SB2047・2056 を切り、SK2029・2107 に切られる。規模は長軸が 4.5m で短軸は 4.2m。主軸の方位は N-79° -W で、真北に近い。住居床面の北半部から土師器の杯・鉢・高杯・小型壺・壺・甕などが出土している。

#### SB2088 (遺構図版 57)

B 区中央やや北寄りに位置する竪穴住居で、SB2068 に切られる。規模は長軸が 4.5m 以上で短軸は 4.5m。主軸の方位は N-38° -E。住居の床面および埋土中から土師器の高杯・壺・甕などが出土している。

#### SD2001 (遺構図版 59)

A 区のほぼ中央を南北に流れる溝で、南端はやや西に屈曲する。規模は最大幅が 6.0m で、深さは 1.0m。断面は浅い皿状を呈する。溝のほぼ中央の東岸に接してケヤキの大木の根が遺存していた。

遺物は土器・石器・木製品がある。土器はすべ

て土師器で、高杯・小型壺・壺・甕・ミニチュア土器など大量に出土している。なかでもミニチュア土器は15点あり、そのほとんどが前述のケヤキの根に乗った状態で出土していることから、このケヤキの大木の周辺で小規模な祭祀行為が執りおこなわれていたとおもわれる。

木製品には掘削具・工具・容器・機織具・机天板・建築部材・杭など、さまざまな器種がみられる。また、加工途中の板や不要となった残材なども多数出土していることから、この溝の周辺では木製品の加工もおこなわれていた可能性が高い。SK2007 (遺構図版 61)

A区のほぼ中央に位置する土坑で、SB2023を切っている。規模は長軸2.2m、短軸1.8mの楕円形で、検出面からの深さは20cmの浅い皿状の断面を呈する。埋土中からは土師器の高杯・小型壺・壺・甕など多量の土器が出土している。SK2112 (遺構図版 62)

B区東寄りに位置する土坑で、SB2035・2065を切っている。規模は長軸が1.3m以上、短軸1.2mの楕円形で、東半部をIV期の溝SD3001に削られている。検出面からの深さは20cmで、断面は2段掘りになっている。埋土は4層で、うち2・3層から土師器の高杯・小型壺・壺・甕・ミニチュア土器など多量の土器が出土している。

NR2001・SD2002 (遺構図版 60)

A区SD2001の西を南北に流れており、北半部の溝状遺構をSD2002とし、中央付近から南が極端に広がる自然流路状遺構をNR2001とする。SD2002の規模は最大幅が6.8mで、深さは0.3m。NR2001は南端で幅約20mをはかる。NR2001の南西隅には多量の杭が打ち込まれており、その西から鳥形木製品を含む木製品が出土しているが、製品は少ない。

NR2002

B区東端からC区西端にかけて位置する自然流路(谷地形)。土師器の鉢・高杯・小型壺・壺・甕・ミニチュア土器など多量の土器が出土している。なかでもC区出土の土器群は土坑状の遺構から

一括して出土しているが、時期は弥生後期から古墳中期におよぶ。(樋上 昇)

## 2. 出土土器

出土した古墳時代の遺物はコンテナ110箱を数え、本川遺跡の遺物の主体を占める。そのほとんどが土師器であり、須恵器の出土量は極めて少なく、SB2067及びSB2058から各々1点、その他、包含層から出土したものを含めても十点上もおよばない。土師器の器種は杯・高杯・壺・甕・鉢などがみられ、特に甕、高杯、壺のなかでは小型壺と直口壺が目についた。

これらの遺物は、当遺跡の北西に位置する神明遺跡出土の古墳時代の遺物群の様相と類似しており、尾張の松河戸式に併行する時期に属する。

主な器種は以下のタイプに分かれる(図6)。

### 高杯

A: 杯部は体部と底部の境が明確で、体部は逆「ハ」の字状に開く。脚部は杯部との接合部が絞り込まれるものが多くみられ、裾部との境は明確なものが多い。

B: 杯部は体部と底部の境が明確で、境界に明確な段を有する。体部は逆「ハ」の字状に開く。脚部は杯部との接合部が絞り込まれるものが多くみられ、裾部との境は明確なものが多い。

C: 杯部は体部と底部の境が明確で、境界に断面三角の突起を有する。体部は逆「ハ」の字状に開く。脚部は杯部との接合部が絞り込まれるものが多くみられ、裾部との境は明確なものが多い。

D: 杯部は体部と底部の境が不明確で、体部は湾曲して立ち上がる。脚部は直線的に立ち上がる。

E: 杯部は体部と底部の境が不明確で、体部は内湾して立ち上がり、口縁は短く外反する。体部下位は強く屈曲する。脚部は直線的に立ち上がる。

この他、量的には少ないが、タイプAの杯部にラップ上に開く脚部を有するもの(2347)、全貌は不明であるが杯部内底面に短いかえりが付くも

の(2148、2287、2308、2596)などがある。

#### 小型壺

A：丸底で、口縁は逆「ハ」の字状に開き、扁球状の体部を有する。口縁径が体部最大径より大きい。

B：丸底で、口縁は逆「ハ」の字状に開き、扁球状または球形の体部を有する。口縁径は体部最大径とほぼ同じ。

C：丸底で、口縁は逆「ハ」の字状に開くものが多く、扁球状または球形の体部を有する。口縁径が体部最大径より小さい。

D：平底で、口縁は逆「ハ」の字状に開き、体部は縦長の球形を呈する。口縁径が体部最大径より大きい。

E：平底で、口縁は逆「ハ」の字状に開き、体部は縦長の球形を呈する。口縁径は体部最大径とほぼ同じ。

F：平底で、口縁は逆「ハ」の字状に開き、体部は縦長の球形を呈する。口縁径は体部最大径より小さい。

#### 直口壺

A：丸底で、口縁は逆「ハ」の字状に開き、体部は球形を呈する。

B：口縁は逆「ハ」の字状に開き、体部は扁球形を呈する。

C：口縁は短く直立気味に立ち上がり、体部は扁球形を呈する。

#### 甕

A：丸底で、口縁は外反気味に立ち上がり、体部は球形を呈する。

B：平底または丸平底で、口縁は外反気味に立ち上がり、体部は球形を呈する。

C：平底または丸平底で、口縁は外反気味に立ち上がり、体部は扁球形を呈する。

D：底部に台が付く。口縁は外反して立ち上がり、体部は縦長の扁球形を呈する。台付甕。

E：口縁は直立気味に立ち上がり、端部で外反

する。体部は球形を呈する。

#### 住居出土の遺物

住居から出土した遺物は、SB2057、2064、2067、2072、2078、2080、2081、2083からまとまって出土している。

SB2004 (遺物図版 12 2001～2005)

高杯、直口壺、甕が出土している。2001は高杯Aで杯部内外面および脚部に縦方向のミガキがみられる。裾部の高さが高い。2002、2003は高杯Aになると考えられる。2004は直口壺Bで、口縁内面には斜め方向のミガキが施され、体部には線刻がみられる。2005は平底の甕。

SB2014 (遺物図版 12 2006～2008)

高杯、甕が出土している。2007は高杯の脚部で、縦方向のケズリが施される。2008は甕C、内外面に板ナデが施される。

SB2015 (遺物図版 13 2009～2016)

小型壺、二重口縁壺、短頸壺、甕が出土している。2009は小型壺A、2010は小型壺Bで、口縁がやや内湾する。2011は小型壺EないしF。2012は二重口縁壺。2013は短頸壺で、体部内外面は板ナデが施される。2014・2015は甕AないしBで、体部外面上位はハケ、中位から下位は横方向のケズリが施される。2014は体部中位に線刻が見られる。2016は甕Bで、調整は前記の甕と同じである。

SB2016 (遺物図版 12 2017～2019)

高杯、小型壺が出土している。2017は高杯Dであると考えられる。2019は小型壺BないしCに相当する。

SB2017 (遺物図版 14 2020)

2020は甕Bで、体部上位はナデ、中位から下位は板ナデ、下位はケズリが施される。

SB2019 (遺物図版 13 2021～2023)

高杯、壺、甕が出土している。2021は高杯Aである。2022は直口壺になると考えられる。2023は甕Cになると考えられる。

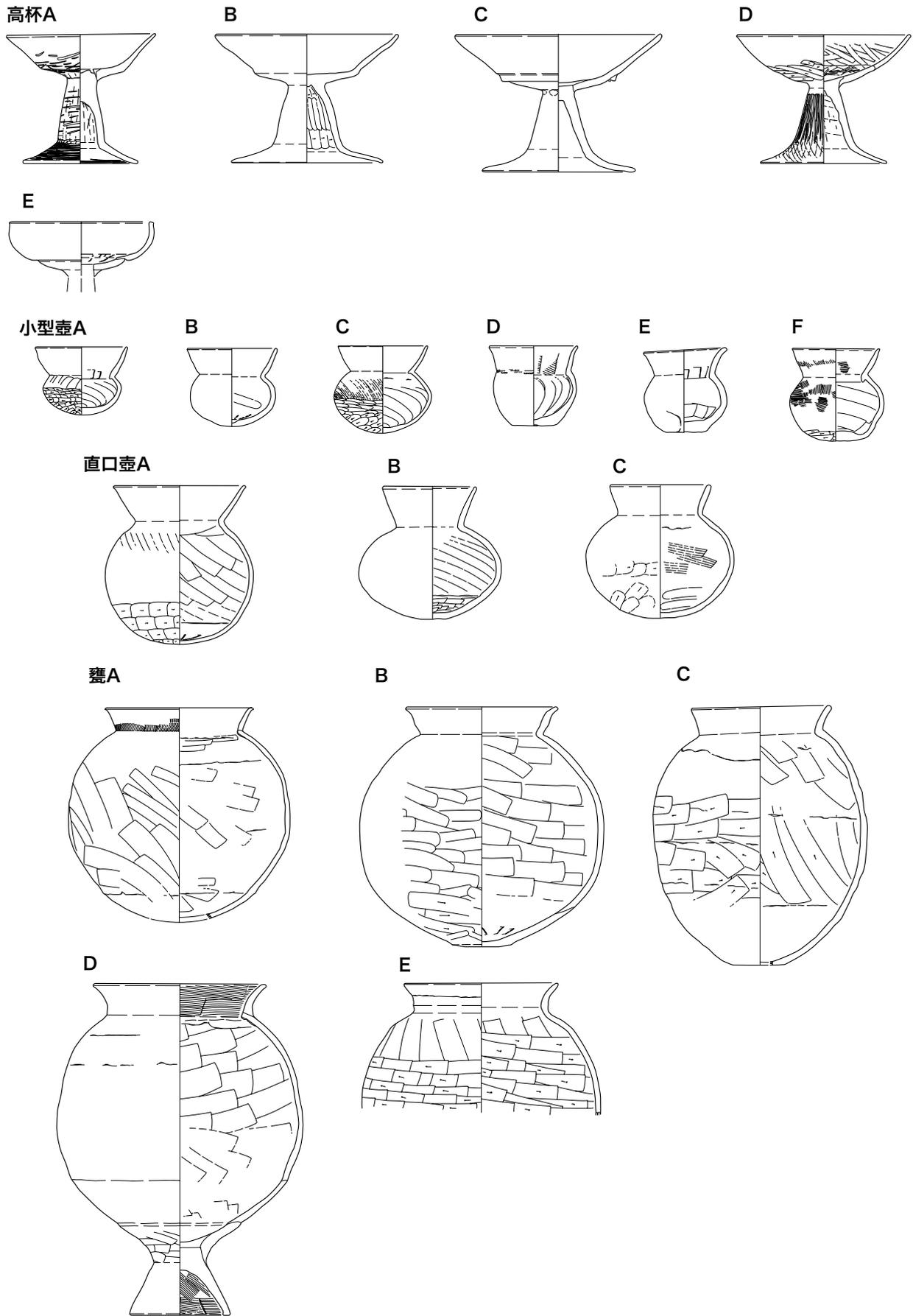


図6 本川遺跡Ⅲ期土師器の器種分類

SB2021 (遺物図版 14 2024)

2024 は高杯Aで、体部、脚部共にナデが施される。脚部は太く、杯部との接合部が強く絞り込まれる。この遺物は住居内のSK2045から出土している。

SB2022 (遺物図版 14 2025)

2025 は高杯Aの杯部。

SB2024 (遺物図版 14 2026)

2026 は直口壺Aの胴部になると考えられる。

SB2025 (遺物図版 14 2027～2032)

高杯、二重口縁壺、台付甕、甕が出土している。2027 は高杯Aで、杯部は板ナデ、脚部は縦方向のケズリの後にナデが施されている。2028 は高杯の杯部で、体部は脚部から逆「ハ」の字状に広がる。体部外面は斜めの板ナデが施される。

SB2032 (遺物図版 16 2050～2052)

高杯、台付甕が出土している。2050、2051 は高杯Aである。2052 は甕Dの脚部である。

SB2034 (遺物図版 15 2053～2064)

高杯、小型壺、二重口縁壺、台付甕、甕が出土している。2054、2055 は高杯Aで、2055 は杯部内外面にミガキが施される。2057～2060 は高杯の脚部で、2057 は縦方向にケズリが、2059 と 2060 にはケズリの後にナデが施される。2058 は器高が低く、外面は前面にナデが施される。2056 は二重口縁の壺の口縁である。2053、2063、2064 は甕Dの脚部である。2061 は小型壺Fで、口縁は非常に短い。2062 は甕Eで、体部上位は板ナデ、上位から中位は横方向のケズリが施される。

SB2035 (遺物図版 15 2065～2069)

高杯、短頸壺、台付甕が出土している。2065、2069 は高杯の脚部で、2069 は穿孔がみられる。2068 は甕Dの脚部である。2067 は短頸壺の口縁から体部にかけてであり、体部上位に線刻がみられる。

SB2041 (遺物図版 15 2070～2073・2603)

須恵器、高杯、土製品が出土している。いずれもSB2041の竈内またはその周辺から出土したものである。2603、2070 は高杯Eである。

2603 は外面が赤変し被熱の痕跡がみられる。竈内部から逆転して出土しており支脚として使用されたと考えられるものである。2071 は高杯Dの口縁になると考えられ、大型の高杯である。2072 は竈内部から出土した土製品である。表面は赤変し被熱の痕跡がみられる。2073 は須恵器で、ハソウの体部と考えられる。

SB2042 (遺物図版 16 2074～2079)

高杯、壺、台付甕が出土している。2074～2075 は高杯Aで2074、2075 は脚部部の杯部に接合する部分が強く絞り込まれ、2074の杯部外面は横方向の板ナデ、脚部は縦方向のケズリの後ナデが施され、裾の高さは低く扁平である。2076の杯部は外反し、外面には斜めのミガキが部分的に施される。2078 は壺の底部で、2079 は甕Dの脚部である。

SB2043 (遺物図版 18 2080)

2080 は杯で、底部から逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持つ。体部外面はナデ、内面は上位はナデ、下位は板ナデが施される。

SB2045 (遺物図版 17 2081～2088)

高杯、小型壺が出土している。2081 は高杯Aで、杯部が深い。2082～2086 は高杯の脚部で、2083、2085 には縦方向の幅広のミガキがみられる。2087 は小型壺Aで、杯部の口縁端部が外反し、体部中位から下位に横方向のナデが施される。2088 は小型壺Bで、杯部の口縁端部が外反し、体部中位から下位に横方向の指ナデが施される。

SB2046 (遺物図版 16 2089～2094)

高杯、直口壺が出土している。2089 は高杯Dになると考えられ、杯部口縁は強く外反する。2090、2092 は高杯Aで、2090 は口縁がやや内湾気味に立ち上がり、杯部の底部と裾部の外面には縦方向のハケが施される。裾部の高さが高い。2093 は直口壺B、2094 は直口壺Cである。

SB2048 (遺物図版 17 2095～2104)

高杯、小型壺、二重口縁壺が出土している。2095～2098 は高杯の脚部で、2096 は脚部縦方向のケズリが施され、裾部の高さが高い。

2098 は部分的に縦方向のミガキがみられる。2099 は小型壺Cで、口縁は外反し体部下位に指ナデが施される。2100 は小型壺Bで、口縁は内湾し、体部下位にはケズリが施される。2103、2104 は二重口縁壺の口縁である。

SB2052 (遺物図版 18 2106～2108)

二重口縁壺、壺、台付甕が出土している。2106 は小型の二重口縁壺で、外面及び口縁内面にハケが施される。全体的に器壁は薄い。2107 は壺の底部である。2108 は甕Dの脚部である。

SB2056 (遺物図版 19 2109～2118)

高杯、小型壺、直口壺、広口壺、二重口縁壺、甕が出土している。2109、2110 は高杯Aで、2109の杯部は器高に比べ口径が小さい。2112 は脚部に縦方向のケズリが施される。2113 は小型壺Cで、口縁は直立気味に立ち上がり、体部下位にケズリの後ナデが、体部内面は指ナデが施される。2114 は小型壺Fになると考えられ、底部は平丸底で、外面は全面ナデが、体部内面は横方向の板ナデが施される。2115 は直口壺で、口縁は直線的に大きく開き、口径が体部最大径より大きくなると考えられる。2116 は二重口縁壺の口縁で外面に断面三角の突帯が付く。口縁外面中位から下位、内面の一部にハケが残る。2117 は甕Cになると考えられる。外面はナデが、体部内面は板ナデが施される。2118 は広口壺で、外面にはナデが、体部内面には横方向の板ナデが施され、内外面に粘土帯の接合痕が残る。

SB2057 (遺物図版 20 2119～2141)

高杯、小型壺、二重口縁壺、広口壺、短頸壺、台付甕、甕、ミニチュアが出土している。2119、2120、2122 は高杯Aで、2122の杯部内外面に幅広のミガキが、脚部はケズリの後にナデが施される。2121 は内湾する碗状の杯部に短い棒状の脚部が付く。内外面にナデ調整が施される。2125 は小型壺Dで、体部外面の上位から下位はケズリ、内面は横方向の板ナデの後にナデが施される。底部は平丸底である。2126、2128 は小型壺Eで、共に体部外面下位にケズリが、内面には指ナデが施される。2128 は口縁がやや内湾

気味に立ち上がる。2127 は小型壺Bで、体部外面は板ナデの後にナデが、内面は指ナデが施される。2129 は小型壺BないしEで、体部最大径は体部下位にある。体部内面は指ナデの後に横方向の板ナデが施される。2132、2133 は広口壺で、2132には線刻がみられる。2134 は二重口縁壺の口縁である。2137 は壺の体部で線刻がみられる。2138 は短頸壺で、体部外面の上位はナデ、下位は板ナデが、内面は板ナデが施される。2139 は甕で、体部内外面にハケが施される。2140 は甕Dである。2141 はミニチュアである。SB2058 (遺物図版 18 2142～2144)

須恵器、高杯、台付甕が出土している。2142 は高杯の脚部で、縦方向のケズリの後にナデが施される。2143 は甕Dの脚部の一部である。2144 は須恵器の甕の体部と思われる。外面は平行タタキ、内面はナデが施される。

SB2059 (遺物図版 19 2145～2153)

高杯、小型壺、台付甕が出土している。2145 は高杯Dである。2146、2147 は高杯Bで、2146の杯部は深く、杯部と脚部の接合部は絞り込まれる。2148 は杯部内底面に短いかえりが付く。杯部の底部外面にはミガキが施される。2149、2151 は高杯Aで、2151の口縁は外反し、脚部は棒状に立ち上がる。2152 は小型壺Fで、体部外面下位には指ナデが、内面には板ナデが施される。2153 は甕Dで、脚部の上位である。

SB2062 (遺物図版 18 2154～2158)

高杯、壺、甕が出土している。2154 は高杯Bである。2156 は高杯の裾部で線刻がみられる。2157 は壺の体部上位に線刻がみられる。2158 は甕Eである。

SB2064 (遺物図版 21 2159～2173)

高杯、小型壺、直口壺、甕が出土している。2159～2165 は高杯Bで、2161～2165の脚部は太く杯部と脚部の接合部は絞り込まれる。いずれも外面はナデ調整が施されるが、2159の杯部内面、2164の杯部内外面、2165の杯部外面にはハケ調整がみられる。2173 は小型の高杯で、杯部と脚部の接合部にハケが部分的に施される。

2166 は丸底の小型壺である。2167 は平底の小型壺で、体部外面にハケがみられる。2168 は小型壺Dで、体部外面はナデ調整が、内面は指ナデが施される。2169 は小型壺Fで、口縁内外面と体部外面上位にハケがみられ、体部外面下位にはケズリが、内面には板ナデが施される。2170、2171 は直口壺Bで、2170 は平底で体部外面上位にハケが、下位にケズリが施される。2172 は甕Cで、体部外面にハケ調整が施される。

SB2065 (遺物図版 22 2174 ~ 2182)

高杯、小型壺、直口壺、台付甕が出土している。2174、2176 は高杯Aで、2176 は杯部の口縁端部がやや内湾し、脚部に焼成後の穿孔が4ヶ所みられる。2175 は高杯Dで口縁端部がやや内湾する。2177 は高杯Cで、内外面はハケが施される。2179 は小型壺Fで、口縁は短く外反して立ち上がる。外面はナデが、体部内面下位は板ナデが施される。2180 は小型壺Cで、体部上位から下位はナデ、下位はケズリの後にナデが、内面は指ナデが施される。2181 は直口壺Bである。2182 は甕Dの脚部である。

SB2067 (遺物図版 23・24 2183 ~ 2207)

SB2067 は竈が確認された住居で、須恵器、杯、高杯、鉢、小型壺、直口壺、二重口縁壺、台付甕、甕が出土している。2183 は平底の杯で、体部は湾曲して立ち上がり口縁は外反する。外面にはナデが、内面には指ナデの後にナデが施される。2184、2185 は丸底の杯で、体部は内湾して立ち上がる。2184 は内外面にナデが施され、2185 は外面には強い板ナデが、外面は横方向の板ナデが施される。2187、2188 は高杯Eで、内外面共、ナデが施される。2189、2192 は高杯Cで、2189 の杯部外面には粘土帯の接合痕が残る。2192 は杯部高が高く、脚部は短く太く杯部との接合部は絞り込まれる。なお、2192 は竈内部で、逆転した状態で検出されており、竈の支脚として使用されたと考えられる。2193 は高杯Dで、杯部高は低く湾曲して立ち上がる。脚部は短く太く杯部との接合部は絞り込まれる。口縁径に比べ底部径が小さい。2195 は高杯Aで、杯

部の底部は平たく、径が大きい。脚部は短く太く杯部との接合部は強く絞り込まれる。2190、2191、2194 は高杯の脚部で、いずれも短い。2186 は鉢で、口縁は短く外反し扁球状の体部を呈する。口縁および体部内外面上位から下位にはナデが、体部外面下位の稜線以下にはケズリが施される。2196、2197 は小型壺で、2196 は外面および口縁内面にはハケが体部内面には指ナデが施される。2198 は直口壺Cになると考えられる。2199、2200 は二重口縁壺で、2200 は外面に条痕状の荒いハケが施される。2201 ~ 2203 はいずれも口縁を欠くが、甕Cになると考えられる。2201 は外面にはナデが、内面には上位から下位にナデが下位に板ナデが施される。2202、2203 は外面にはハケが、内面には板ナデの後にナデが施される。2202 は底部に焼成後の穿孔がみられる。2204 ~ 2206 は甕Dで、2204 は小型の甕で、口縁は直立気味に立ち上がり口縁端部が短く内側に折れる。外面には縦ハケが、口縁内面には横ハケが、体部内面には横方向の板ナデが施される。2205 の口縁は外反して立ち上がり、口縁端部は面取られ凹み外傾する。体部は体部上位に最大径がありやや肩が張る。体部外面にはハケが、下位には荒い横ハケが施され、口縁内面には横ハケが、体部内面には指押さえの後にナデが施される。2206 は体部外面にはハケが、内面上位には板ナデが施される。2207 は須恵器で、ハソウの口縁で外面に櫛描の波状文が施される。

SB2068 (遺物図版 25 2208 ~ 2213)

杯、高杯、ミニチュア、土製品が出土している。2208 は高杯Eである。2209 は高杯Cで、杯部の口縁は外反する。2210 は丸底の杯で、口縁端部が強く内湾し、外面には粘土帯の接合痕が残る。2212 は甕のミニチュアで、外面には縦ハケが、内面には板ナデが施される。2213 は扁平の棒状の土製品である。

SB2069 (遺物図版 25 2214 ~ 2219)

杯、高杯、直口壺が出土している。2214 は丸平底の杯で、体部は湾曲して立ち上がり、外面にはナデが、内面には板ナデが施される。2215 ~

2217は高杯Aである。2219は直口壺Cで、体部外面中位から下位にはケズリの後にナデが施され、内面中位は横ハケが下位は指ナデが施される。SB2070(遺物図版26 2220～2227)

高杯、小型壺、直口壺、壺、ミニチュアが出土している。2220、2222、2223は高杯Aで、2220の口縁端部はやや内湾し、外面にはナデが、杯部内面にはハケの後にナデが施される。2223の口縁端部はやや内湾し、杯内面には指ナデが施される。2221は高杯Bである。2224は小型壺Fになると考えられ、外面にはナデが、内面には指ナデが施される。2225は直口壺Bで、外面にはナデが、内面上位から下位には指ナデが下位には板ナデが施される。2226は壺で、体部外面上位から中位には板ナデの後にナデが、下位にはケズリが施される。2227はミニチュアで、外面には指押さえの痕跡がみられる。

SB2071(遺物図版18 2228～2234)

高杯、小型壺、直口壺、壺が出土している。2228は高杯Aで、杯部内面に部分的にミガキが施される。2230は小型壺Fで、体部下位にケズリが施される。2229は小型壺Dで、底部径が大きく全体的に器壁は薄い。外面は前面ナデが施される。2232は直口壺Bで、体部には板ナデが施される。2233は直口壺の口縁で、内外面に横方向のミガキが施される。2234は壺の体部で、線刻がみられる。

SB2072上層(遺物図版27・28 2242～2267)

高杯、鉢、小型壺、二重口縁壺、広口壺、台付甕、甕、ミニチュア土製品が出土している。2243、2248は高杯Dで、浅い杯部を有する。2243は外面に板ナデの後にナデを施す。2248は外面下位に板ナデを施す。2244～2247は高杯Aで2244、2246、2247の杯部は外反して立ち上がり、端部はやや内湾する。2249～2257は高杯の脚部で、2249は中実の短い棒状を呈する。2250は2249と同様な形状を呈し、脚部内は中空である。2242は器壁の薄い平底の鉢で、外湾しながら立ち上がり口縁端部は内側に折れる。外面にはナデが、内面には幅狭の板ナデが施

される。2258、2259は小型壺で、2258は小型壺Fになると考えられる。体部外面には粘土帯の接合痕が残る。2260は二重口縁壺の口縁である。2261は広口壺の口縁で、内外面ともにナデが施され、内面には粘土帯の接合痕が残る。2262は甕Cになると考えられ、口縁は強く外反し、体部内外面共に板ナデが施される。2263、2264は甕Bで、共に口縁は外反し、体部外面にはナデが内面には板ナデが施される。2265は甕Dの底部で、脚部は短く、欠損した後に二次的に加工している。体部外面下位にはハケの後に条痕状の荒いハケが施される。内面はハケの後にナデが施される。2266はミニチュアで、外面にはナデが、内面には指ナデが施される。2267は円盤状の薄い土製品である。

SB2072下層(遺物図版28 2235～2241)

高杯、短頸壺、ミニチュアが出土している。2235、2236、2238、2239は高杯Aで、いずれも杯部高は高く、杯部は外反気味に立ち上がる。2239は杯部内底面の近くにミガキが、脚部に部分的に横方向のミガキがみられる。2237は高杯の脚部で、外面に縦方向のミガキが施される。2240は壺で、口縁端部はやや外反する。2241はミニチュアである。

SB2073(遺物図版25 2268～2273)

高杯、鉢、小型壺、直口壺、甕が出土している。2269は高杯Aで、内外面にはナデが施される。2270は高杯Eになると考えられる。外面にはハケが施される。2268は鉢になると考えられる。平丸底になり、外面下位にはケズリが、内面には幅狭の板ナデが施される。2271は小型壺Fになると考えられ、体部外面上位にはハケが、内面には指ナデが施される。2272は直口壺Eになると考えられる。2273は甕の口縁で、外面にはナデが、体部内面には板ナデが施される。

SB2074(遺物図版29 2274～2282)

高杯、小型壺、台付甕、甕が出土している。2274は高杯Bで、脚部は太く、杯部との接合部で強く絞り込まれる。杯部内外面には全面的に、脚部外面には部分的にハケが施される。2275、

2276 は高杯Aで、共に杯部口縁端部がやや内湾し、杯部高に比べ口縁径が大きい。2277 は小型壺Eで、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、内外面ともに板ナデが施される。2278 は小型壺Cで、口縁端部はやや外反する。体部外面下位および内面には指ナデが施される。2279 は小型壺Dで、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、体部外面上位から下位にはナデが、外面下位および内面は幅狭の板ナデの後にナデが施される。2280 は甕AないしBになると考えられ、口縁は直線的に立ち上がる。体部外面上位および下位にはナデが、中位には板ナデが、内面は板ナデの後にナデが施される。2281 は甕Bで、口縁は外反する。体部外面上位にはハケの後にナデが、中位から下位にかけては板ナデが施される。体部内面は板ナデの後にナデが施される。2282 は甕Dで、口縁が外反し立ち上がり、体部は最大径が上位にありやや肩が張っている。体部外面上位には横方向のケズリの後にナデが、中位から下位にかけては横方向のケズリが、下位には板ナデが施される。体部内面上位にはナデが、中位から下位にかけては横方向の板ナデの後にナデが施される。

#### SB2076 (遺物図版 26 2286 ~ 2288)

高杯、小型壺が出土している。2287 は高杯で杯部内底面に短いかえりが付く。2286 は高杯Aである。2288 は小型壺Cになると考えられる。体部外面上位から下位にはナデが、下位にはケズリの後にナデが施される。

#### SB2077 (遺物図版 26 2289 ~ 2295)

高杯、鉢、小型壺、甕が出土している。2290 は高杯Cで、大型の高杯になり、脚部には部分的に縦方向の幅広のミガキが施される。2291、2292 は高杯Dで、2291 は杯部高が高く、外面には板ナデの後にナデが施される。2289 は台付の碗または台付の鉢の脚部である。2294 は小型壺Cで、口縁は短く直立気味に立ち上がり、体部は縦長の扁球状を呈する。体部外面にはナデが、内面には幅狭の板ナデが施される。2295 は甕Cで、体部外面には板ナデが、内面上位には板ナデが中位から下位には横方向板ナデの後にナデが施

される。

#### SB2078 (遺物図版 30 2296 ~ 2306)

高杯、直口壺、台付甕、甕が出土している。2296 は高杯Bで、内外面はナデが施される。2297、2300 は高杯Aで、杯部底部は平たく径が大きい。外面および杯部内面はナデが施される。2300 は棒状の長い脚部を有し、外面にはナデが、杯部内面にはナデが施される。2298 は高杯Dで、杯部外面には板ナデが、内面にはナデが施される。脚部外面は縦方向のケズリの後にナデが施される。2299 は高杯の脚部で、短く外面にはナデが施される。2301、2302 は直口壺で、2301 は口縁、体部外面には立てハケが施される。2302 は丸底で、体部の肩がはり体部下位に稜を有する。体部中位に最大径がある。体部外面上位から下位にかけてはナデが、下位にはハケが、内面中位から下位にかけては指ナデが施される。2303、2306 は甕Dで、2303 は脚部である。2306 は体部外面および口縁部内面にはハケが施される。体部内面上位は板ナデの後にナデが、中位から下位にかけてはナデが施される。2304 は甕の口縁で、口縁はやや内湾しながら立ち上がり端部はやや外反する。口縁の内外面、体部外面にはハケが施され、体部内面はケズリが施される。2305 は平底の甕の底部で、外面にはハケが、内面中位は板ナデが、下位にはハケが施される。

#### SB2080 上層 (遺物図版 31 ~ 33 2336 ~ 2380)

高杯、器台、鉢、小型壺、直口壺、二重口縁壺、広口壺、台付甕、甕が出土している。2337、2339、2340、2346、2348、2351 は高杯Aで、2337 は杯部の口縁が短くやや外反して立ち上がり、杯部高は浅い。内外面にハケが施される。2339 は内面に部分的にミガキが施される。2346 は杯部の口縁が直線的に立ち上がり、脚部は太く、杯部との接合部で強く絞り込まれる。脚部外面は縦方向のケズリが施される。2348 は脚部に3ヶ所、焼成前の穿孔がみられる。杯部内外面および脚部外面にはミガキが施される。2351 の杯部口縁はわずかに内湾して立ち上がり、脚部は細く杯部との接合部で絞り込まれる。脚部外面

にはハケが施される。2338、2345は高杯Bで、2338は杯部の口縁はわずかに内湾して大きく開いて立ち上がり、杯部高は低い。2345の脚部外面は縦方向のケズリが施される。2341、2349、2350は高杯Dで、2341は残部から大型の高杯になると考えられる。外面にはナデが、内底面にはハケが施される。2349の脚部の上位は中実で、杯部口縁径と裾部底部径がほぼ同じである。杯部外面下位にはケズリが施され、脚部上位にはケズリが施される。2350は杯部外面下位にはケズリが、内面上位には幅狭の板ナデが内底面にはミガキが部分的に施される。脚部と裾部境が不明確で脚部外面には縦方向のミガキが、裾部には板ナデが施される。2347の杯部は口縁と底部の境が明確で、口縁は逆「ハ」の字状に開き、ラッパ上に開く脚部を有し、脚部は3ヶ所の焼成前の穿孔を有する。口縁内外面には部分的にミガキが施され、脚部外面には縦方向のミガキが施される。2342～2344は高杯の脚部で、2342は裾部内面に線刻がみられる。2336は小型の平底の鉢で、口縁は内湾して立ち上がり、端部に1ヶ所、焼成前の穿孔がみられる。2352は小型壺の体部で、体部外面および口縁内面下位には横方向のミガキが施される。2355は小型壺Aで、口縁は外反しながら立ち上がる。体部外面中位から下位にはケズリの後にハケが、内面には指ナデの後に板ナデが施される。2356、2357は小型壺Bで、2356の口縁は受け口状になり、2357の口縁はやや内湾しながら立ち上がる。2356、2357共に体部外面中位から下位にはケズリが、内面は指ナデが施される。2358、2360は小型壺Cで、口縁は外反して立ち上がる。体部外面中位および内面には指ナデが施される。2360の口縁は短く外反して立ち上がり、球形の体部を有する。体部外面上位にはナデが、下位にはケズリが、内面には指ナデが施される。2359は小型壺Dで、口縁は内湾気味に立ち上がり、受け口状になる。外面はナデが、内面は指ナデが施される。2361、2362、2364は直口壺の口縁で、2361、2362は内外面に横方向のミガキが施される。2365、2367

は直口壺Aになると考えられる。2365の口縁はやや内湾しながら立ち上がり受け口状になる。2367は口縁内外面および体部外面には横方向のミガキが、体部内面は板ナデが施される。2368は直口壺Cで、体部外面上位にはナデが、中位から下位には板ナデが、内面には板ナデが施される。2363、2371は二重口縁壺で、2363は口縁外面にはハケが、内面にはナデが施される。2371の口縁が直立気味に立ち上がり端部が内湾し受け口状になる。2366、2369は平底の壺で、口縁は直線的に立ち上がり端部で強く外反する。体部は縦長の扁球状を呈し最大径は体部中央にある。体部外面上位にはナデが、中位から下位にかけてケズリが施される。体部内面は板ナデの後にナデが施される。2370は広口壺である。2372は壺で、口縁は外反して立ち上がる。体部外面には縦方向の板ナデが、内面には横方向の板ナデが施される。2373は甕Dの脚部である。2374～2379は甕の口縁で、2374、2376、2377、2379は体部外面にはナデが、内面には板ナデが施される。2375、2378は体部外面にはナデおよび板ナデが、内面は板ナデが施される。2380は器台で、杯部は直線的に開き端部はごくわずかに外反する。内底面には焼成前の穿孔がみられる。

SB2080 下層 (遺物図版 34～35 2307～2335)

杯、高杯、小型壺、直口壺、二重口縁壺、甕が出土している。2307は平底の杯で、口縁はやや内湾しながら立ち上がる。外面にはナデが、内面下位にはケズリが施される。2308は杯部内底面に短いかえりが付く高杯で、かえりの部分である。2309は高杯Aで、杯部内外面には部分的にミガキが施される。2310～2317は高杯の脚部で、2310～2312には外面に横方向のミガキが施されている。2313、2314は外面にケズリの後にナデが施される。2315は板ナデが施される。2316、2317には縦方向のミガキが施される。2318は小型壺AないしDになると考えられる。2319、2320、2323は小型壺の体部で、2320の体部外面に横方向の細かいミガキが、内面には横方向の板ナデが施される。2321は小型壺Cで、

口縁は直線的に立ち上がり端部はやや外反する。体部外面上位には縦方向の板ナデが、中位から下位には横方向の細かいミガキが施される。内面には指ナデの後にナデが施される。2326 は直口壺 A ないし B で、口縁は短くやや内湾して立ち上がる。体部外面上位にはナデが、中位にはケズリが、内面にはナデが施される。2328 は直口壺 A で、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。体部外面上位には板ナデの後にナデが、下位には横方向のケズリが、内面には板ナデが施される。2324、2325 は二重口縁壺の口縁で、2324 は口縁が直立気味にやや外反して立ち上がる。2327 は壺の口縁で、口縁は直線的に立ち上がり端部で強く外反する。2329～2335 は甕の口縁で、2329 は強く外反し、内外面にはハケが施される。

SB2081 (遺物図版 36・37 2381～2407)

高杯、鉢、小型壺、直口壺、広口壺、台付甕、甕が出土している。2382、2383、2388 は高杯 A で、2382 の杯部口縁はやや内湾気味に立ち上がり、内外面共にハケの後にミガキが施される。2383 は内外面共に部分的に縦方向のミガキが施される。2388 の口縁は直線的に立ち上がり、端部でやや内湾し、内外面共にナデが施される。2384、2386 は高杯 D で、2384 の口縁端部はやや内湾し、口縁外面下位にはケズリがみられる。2386 の口縁の上位は外反し、外面下位にはケズリおよび板ナデが、内面下位には板ナデが施される。2385 は高杯 B で、口縁はやや内湾して立ち上がり、内外面共に板ナデが施される。2387 は高杯 C で、口縁は直線的に開き杯部径に比べて杯部高が低い。杯部外面にはナデが、内面にはハケの後にナデが施される。2389～2395 は高杯の脚部で、2389 は杯部との接合部が絞込まれ、3ヶ所に焼成後の穿孔がみられる。外面には縦方向のケズリの後にナデが施される。2390 は棒状を呈し、外面には縦方向のケズリの後に横方向のミガキが部分的に施される。2391 は直立気味に立ち上がり、杯部との接合部がやや絞込まれ、脚部外面にはナデが施される。2392～2395 の脚部外面にはいずれも縦方向のケズリの後にナ

デが施される。2396、2397 は小型壺 C になると考えられ、2396 は体部外面には板ナデの後にナデが、内面には板ナデが施される。2397 は体部外面にはナデが、内面には指ナデの後に板ナデが施される。2398 は小型壺 B で、口縁端部がやや内湾する。体部外面上位にはナデが、中位から下位にかけては板ナデが、内面には板ナデの後にナデが施される。2399 は小型壺 C で、全体的に器壁が薄く口縁端部がやや外反する。体部外面はナデが施され、内面は指ナデの後にナデが施される。2400 は小型壺 D で、体部上位から下位にはナデが、下位にはケズリが、内面には板ナデが施される。2401 は体部下位に焼成後の穿孔が 1ヶ所みられる。2381 は鉢の口縁で、口縁は内湾し、外面にはナデが、内面には板ナデが施される。2403 は直口壺 C で、丸平底で口縁は短く直立して立ち上がり端部でやや外反し、体部最大径は体部下位にあり下ぶくれ状の体部を呈する。体部外面にはナデが、内面には板ナデの後にナデが施される。2405 は広口壺で、口縁端部はやや外反する。体部上位外面には板ナデが施され、内面上位には板ナデが、中位には板ナデの後にナデが施される。2406、2407 は壺で、2406 は平丸底で口縁端部が外反し、口縁から体部内外面には粘土帯の接合痕が残る。体部外面上位にはナデが、中位から下位にかけては荒い条痕状のハケが施される。口縁内面には板ナデが、体部内面上位から中位には指ナデが、中位から下位にはナデが、下位には板ナデが施される。2407 の口縁端部は外反し、体部外面には指ナデが、内面には板ナデが施される。2402 は小型の甕 D で、球形に近い体部をもち、体部外面上位から下位にはナデが、下位には板ナデが、内面には板ナデが施される。2404 は甕で、口縁は外反して立ち上がり、体部内外面には板ナデの後にナデが施される。

SB2082 (遺物図版 38 2408～2417)

高杯、小型壺、台付甕、甕が出土している。2408 は高杯 B で、口縁はやや内湾して立ち上がる。杯部内外面共にナデが施され、体部外面には粘土帯の接合痕が残る。2409 は高杯 C で、外面

の断面三角の突起は欠落していると考えられる。杯部内外面にはナデが施される。2411は高杯Aで、口縁はやや外反して立ち上がる。杯部内外面にはナデが、脚部外面には縦方向のケズリの後にナデが施される。2412、2413は小型壺Fで、共に口縁は直立気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに内湾する。2412は体部外面にはハケと板ナデが、口縁内部上位にはハケが、体部内部には指ナデが施される。2413は体部外面にはナデが、体部内面上位には指ナデの後にナデが、下位には板ナデが施される。2414には小型壺Fで、全体的に器壁は薄く、口縁はやや内湾気味に立ち上がり端部でやや外反する。体部外面にはケズリが、内面にはケズリの後に指ナデが施される。2415は甕AないしBで、体部外面上位にはナデが、中位から下位にかけては板ナデが、体部内面には板ナデが施される。口縁および体部内外面に粘土帯の接合痕を残す。2416は甕Cになると考えられる。口縁は大きく開く。体部内外面は共にナデが施される。2417は甕Dで、口縁は強く外反し、体部は縦長の扁球形を呈する。体部外面にはナデが、口縁内面にはハケが、体部内面上位から中位にかけては板ナデが、中位から下位にかけては板ナデの後にナデが施される。

#### SB2083 (遺物図版 39 2418～2429)

高杯、小型壺、直口壺、二重口縁壺、台付甕が出土している。2418は高杯Cで、口縁は直線的に開き端部はわずかに内湾し、脚部は杯部との接合部で絞り込まれる。杯部には内外面ともにナデが、脚部外面にはナデが施される。2419は高杯Dで、杯部外面下位にはケズリが、内面には板ナデが、脚部外面には縦方向のケズリの後にナデが施される。2420は高杯Bで、口縁は外反し、杯部内外面共にナデが施される。杯部外面には粘土帯の接合痕が残る。2422は小型壺Cになると考えられる。体部外面にはナデが、内面には指ナデが施される。2423は平丸底の小型壺で、体部外面上位には板ナデの後にナデが、中位から下位にかけてはナデが、下位にはケズリが施される。体部内面上位から中位にかけてはナデが、下位に

は指ナデの後にナデが施される。2421は小型壺Bで、体部外面上位から下位にかけてはナデが、下位にはケズリの後にナデが施される。2424は直口壺Bで、口縁端部がやや内湾し、体部は肩が張り体部上位に最大径がある。体部外面上位にはナデが、中位から下位にかけては板ナデの後にナデが、下位には板ナデが施される。体部内面上位から下位にかけては指ナデが施される。2425は直口壺Cで、丸底で体部は扁球形を呈し体部中位に最大径がある。体部外面上位から下位にかけてナデが、下位にはケズリが施される。体部内面上位から中位にかけてはナデが、下位にはケズリが施される。2427は平底の二重口縁壺で、体部はやや肩が張り、体部最大径は体部上位にある。体部外面上位から下位にかけてはハケが、下位にはハケの後にナデが施される。体部内面上位にはナデが、上位から下位にかけては板ナデの後にナデが施される。2426、2428、2429は甕Dで、2426の口縁は直立して立ち上がり口縁端部は外反する。体部外面中位から下位にかけて体部最大径がある。体部外面上位および下位は板ナデが、体部内面上位には板ナデの後にナデが、下位には板ナデが施される。2428は口縁が外反し、体部は歪な縦長の扁球形を呈する。体部外面上位から中位には板ナデが、中位から下位にかけてナデが、下位は指ナデが施される。

#### SB2085 (遺物図版 35 2430～2435)

高杯、小型壺、壺が出土している。2430は高杯Dで、内外面共にナデが施される。2431は高杯Aで、杯部口縁はやや内湾して立ち上がり、脚部は杯部との接合部でやや絞り込まれる。杯部内外面および脚部外面にはナデが施される。2433は平底の小型壺の体部で、体部外面にはハケの後にナデが、内面には指ナデが施される。2434は小型壺Cになると考えられる。体部外面にはハケの後にナデが、内面には指ナデが施される。2432は小型壺Eで、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。体部外面上位から下位にはナデが、下位には板ナデの後にナデが施される。体部内面には指ナデが施される。体部外面下位に線刻がみられ

る。2435は壺で、口縁端部がやや内湾する。体部外面上位にはナデが、中位には板ナデが、内面には板ナデが施される。

SB2087 (遺物図版 22 2436～2447)

高杯、小型壺、直口壺、鉢が出土している。2439は高杯Dで器高が高い。杯部は杯部高が高く、脚部は棒状で直線的に立ち上がり、上位が中実である。2440は高杯Aで、杯部内面にミガキが施される。2436～2438は鉢で、2436は平底で、体部が内湾して立ち上がり、口縁端部がやや外反する。体部外面にはナデが、内面には指ナデが施される。2437、2438は内湾した体部を呈し、口縁端部は短く直立する。体部外面には縦ハケが、内面には板ナデが施される。2443は小型壺BないしEで、体部外面中位および内面には板ナデが施される。2444は小型壺の体部と考えられるが、線刻がみられる。2445は壺または甕の口縁で焼成後の穿孔が1つ認められた。2446は直口壺Cになると考えられる。2447は平底の壺で、外面にはナデが、内面には板ナデの後にナデが施される。2448は壺ないし甕の体部で線刻がみられる。

SB2088 (遺物図版 37 2450～2454)

高杯、小型壺、甕が出土している。2450は高杯Bで、口縁はやや外反し立ち上がり、内外面共にナデが施される。2451は高杯Cで、口縁端部はわずかに内湾し、内外面共にナデが施される。2452は高杯の脚部で、脚部は太く杯部との接合部で強く絞り込まれる。2453は直口壺Bで、口縁端部はやや内湾し、体部はかなり扁平な球形を呈し下位に稜を有する。体部外面にはナデが、内面には指ナデが施される。2454は甕で、口縁は強く外反し、体部外面上位にはハケが、中位にはハケの後にケズリが、内面には板ナデが施される。

#### 溝出土の遺物

溝から出土した遺物は、住居群の西端で検出されたSD2001からまとまって出土している。

SD2001 上層 (遺物図版 40 2504～2521)

高杯、小型壺、広口壺、甕が出土している。

2504は高杯Aで、口縁は強く外反して立ち上がり、脚部は細い棒状を呈する。杯部底部外面に板ナデが施される他は、外面および杯部内面にはナデが施される。2505、2506は高杯の脚部で、2505の脚部は太く裾部径は小さい。2506の脚部はラッパ状に広がり脚部と裾部の境が不明確である。共に外面には部分的に縦方向のミガキが施される。2507は高杯Bで、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。杯部外面には部分的にミガキが、内面にはナデが、脚部外面には縦方向のケズリが施される。2508～2510は高杯の脚部で、2508の外面にはケズリの後にナデが、2509、2510の外面にはナデが施される。2511は小型壺Cになると考えられる。体部外面上位には粘土帯の接合痕がのこり、体部外面上位から下位にかけてはナデが、内面には指ナデが施される。2512は小型で平底の広口壺で、口縁は外反し、体部はやや肩が張り体部最大径は上位にある。口縁外面にはハケの後にナデが、体部には部分的にハケがのこりナデが施される。2513は平底の壺で、口縁はやや外反して立ち上がり端部はやや内湾し、体部中位から下位にかけて体部最大径がある。口縁および体部内外面には粘土帯の痕跡が残り、内外面にはナデが施される。2514はS字甕の口縁である。2515は甕の口縁で、口縁は短く立ち上がり端部は面取られる。口縁外面にはハケの後にナデが、内面にはハケが、体部外面上位には細かいハケが、内面には指頭圧痕が残り、ハケの後にナデが施される。2516は甕で、口縁は短く外反し、体部は球形を呈すると考えられる。外面には荒いハケが、口縁内面にはハケの後にナデが、体部内面にはナデが施される。2517～2521は椀状のミニチュアで、内外面にはナデが施される。

SD2001 下層 (遺物図版 41～43 2464～2501)

高杯、小型壺、二重口縁壺、広口壺、台付甕、甕、ミニチュアが出土している。2464～2467は高杯Aで、2464の口縁はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部の沈線がみられる。脚部は上位が中実で、棒状を呈し杯部との接合部でやや絞り込まれ、裾部高は高い。杯部内外面および脚部外面

には縦方向のミガキが、裾部外面には横方向のミガキが施される。2465の口縁は外反しながら立ち上がり、脚部は上位が中実で、棒状を呈し杯部との接合部でやや絞込まれる。杯部外面には部分的に横方向のミガキが、脚部外面には縦方向のケズリの後にナデが、さらにナデの後に部分的に横方向のミガキが、裾部外面には横方向のミガキが施される。2466には内外面共にナデが施される。2467は外面にケズリが施される。2468、2469、2476は丸底の小型壺で、2468は体部外面上位には横方向のミガキが、下位にはミガキの後にナデが施され、内面には指ナデが施される。2469は体部上位から下位にかけてナデが、下位には指ナデが、内面には指ナデが施される。2476は体部上位外面に粘土帯の接合痕が残り、上位にはハケの後にナデが、下位にはケズリが、内面には板ナデが施される。2470は平底の小型壺で、体部外面上位から下位にはナデが、下位にはケズリが、内面には指ナデが施される。2471は小型壺Aで、口縁は内湾気味に立ち上がる。体部外面上位は縦方向の板ナデの後にナデが、中位から下位にかけてはケズリが、内面には指ナデが施される。2474は小型壺Cで、口縁は内湾気味に立ち上がる。体部外面上位にはハケの後にナデが、中位にはミガキが、下位にはケズリが、内面には指ナデが施される。2477は小型壺Eで、口縁は外反して立ち上がり、体部外面下位に粘土帯の接合痕が残る。体部外面にはナデが、内面上位から下位にかけてはナデが、下位には板ナデが施される。2475は小型壺Fで、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、体部内外面に粘土帯の接合痕が残る。外面にはナデが、内面上位にはナデが、下位には指ナデが施される。2461、2478は二重口縁壺の口縁で、2461の口縁内面にはハケ状工具の刺突がみられる。2473は壺で、体部下位に最大径があり下膨れ状の体部を呈する。体部外面には粘土帯の接合痕が残り、ナデが施される。内面には縦方向の板ナデの後に指ナデが施される。2479は広口壺で、口縁は強く外反して立ち上がり、口縁端部には突帯がつく。体部は球形を呈し

平底である。口縁外面は縦方向のミガキが、内面にはミガキが施されるが、内面のミガキは摩滅が著しい。体部外面にはハケ後に縦方向のミガキが施され、内面上位にはケズリの後に板ナデが、上位から下位にかけてはケズリの後にナデが施される。2480は壺で、体部下位に最大径があり下膨れ状の体部を呈する。外面上位にはハケの後にナデが、中位には指ナデが、下位にはナデが施され、内面には上位にはナデが、中位から下位にかけては板ナデの後にナデが施される。2491は小型の台付の鉢になると考えられ、体部内外面下位にはミガキが施される。2463は甕の口縁で、内湾して立ち上がり、外面にはハケの後にナデが、口縁内面にはハケが、体部内面上位にはナデが施される。2462、2488、2490は甕Dで、2462は体部外面にはハケが、内面上位にはハケが、中位には板ナデが、下位にはハケが施される。2488は体部外面下位にハケが、内面にはケズリが施される。2490の口縁は開き、端部がわずかに内湾する。口縁外面はハケの後にナデが、内面はハケが施される。体部外面上位にはハケの後にナデが、中位には指ナデが、下位にはハケの後にナデが施され、内面上位から中位は板ナデが、下位にはハケが施される。2481、2483、2484は甕Cで、2481は平丸底で、口縁は外反して立ち上がる。体部外面にはナデが施され、下位には部分的に指ナデがみられる。内面上位は荒い条痕状のハケが部分的に、下位には板ナデが施される。2483の口縁はやや外反気味に立ち上がり端部でわずかに内湾し、体部内外面には粘土帯の接合痕が残る。体部外面にはナデが、内面上位から中位には板ナデが、下位には板ナデの後にナデが施される。2484の口縁は直立気味に立ち上がる。体部は横長の扁球状を呈し、平丸底である。体部外面上位にはナデが、中位から下位には荒い条痕状のハケの後にナデが施される。内面上位から中位にかけてはナデが、中位には板ナデが施される。2482、2486は甕Eで、2482の底部は突出し平底になる。体部外面にはナデが、下位に指ナデが施され、内面にはナデが施される。2486は口縁と体部の

接合部に段を有する。体部外面にはハケが、内面上位には板ナデが、下位にはナデが施される。2485は甕Aで、口縁は短く大きく開く。体部外面上位および下位にはナデが、中位には板ナデが施され、内面には上位から下位にかけてはナデが、下位には指ナデが施される。2487、2489はハケが施される甕で、2487の口縁は直立気味に立ち上がる。口縁外面にはハケの後にナデが、内面にはハケが施され、体部外面上位にはハケが、中位以下には板ナデが施される。内面上位には板ナデが、中位から下位にはナデが、下位には指ナデが施される。2489の口縁は大きく外反し、口縁径が体部最大径を上回る。外面にはハケが、口縁内面および体部内面上位にはハケが、内面中位以下には板ナデが施される。2492～2500は椀状のミニチュアで、外面に粘土帯の接合痕が残るものもみられる。いずれも外面はナデが施され、内面にはナデの他、指ナデが施されるものもある。2501は甕のミニチュアで外面にはナデが、内面上位にはナデが、下位には指ナデが施される。

SD3001 (遺物図版 44 2522～2530)

SD3001は古代の溝であるが、埋土中から古墳時代の高杯、小型壺、二重口縁壺、壺、甕が出土している。2522～2526は高杯の脚部で、いずれも外面にナデが施される。2525は焼成前の穿孔が3ヶ所みられる。2527は平底の小型壺である。2529は二重口縁壺の高縁である。2528は壺で、口縁が外反し、体部外面にはナデが、内面には板ナデが施される。2530は甕で、口縁は外反し端部は面取られる。体部外面および口縁には粗いハケが、体部内面上位には板ナデが施される。

SD3003 (遺物図版 44 2535～2537)

SD3003も古代の溝であるが、埋土中から古墳時代の遺物が出土している。2536、2535はそれぞれ、高杯の裾部と脚部である。2535は外面にケズリがみられ、穿孔が1カ所確認された。2536は外面に細かいミガキが施される。2537は鳥型土製品で、尻尾状の扁平な突起がみられる。

## 土坑出土の遺物

土坑出土の遺物は、SK2112からまとめて出土している。

SK2002 (遺物図版 45 2540～2542)

2540は高杯Aで、口縁端部はやや内湾し、脚部は杯部との接合部で絞り込まれ、裾高は低い。脚部下位に横方向の板ナデが施される他、杯部内外面および脚部上位から下位はナデが施される。2541は甕Cで、平丸底になる。体部外面上位にはナデが、中位から下位にかけてはケズリが施され、内面上位には板ナデが、下位にはナデが施される。2542は甕Dの底部である。

SK2005 (遺物図版 45 2543、2544)

2543は高杯Bで、脚部は杯部との接合部で絞り込まれる。杯部外面上位にはナデが、下位にはケズリの後にハケが、内面にはハケの後にナデが施される。脚部はナデが施される。2544は直口壺の口縁で、内外面共にハケが施される。

SK2007 (遺物図版 45 2545～2548)

高杯、小型壺、甕が出土している。2545、2456は高杯Aで、2545の口縁は直線的に短く立ち上がり、端部でやや内湾する。杯部外面には粘土帯の接合痕が残る。杯部外面にはナデが、内面上位にはミガキが、脚部外面にはミガキが施される。2546は口縁端部がやや内湾し、脚部は杯部との接合部で絞り込まれ、脚部下位に焼成前の穿孔が3ヶ所みられる。裾部は広く広がり、杯部口縁径とほぼ同じ大きさである。杯部外面上位および内面にはナデが、外面下位にはケズリが施され、脚部外面上位にはハケの後にナデが、上位以下にはナデが施される。2547は小型壺Fで、口縁は内湾して立ち上がる。体部内面に粘土帯の接合痕がみられる。体部外面上位および下位にはハケの後にナデが、中位にはナデが施され、内面には指ナデが施される。2548は平底の甕Cで、口縁は短く外反し、体部は体部中位に最大径を有する縦長の球形を呈する。体部内外面に粘土帯の接合痕が残る。体部外面上位にはナデが、中位にはケズリが、下位にはナデが施され、内面上位に

は板ナデが、中位にはケズリが、下位にはナデが施される。

SK2009 (遺物図版 47 2549)

2549 は丸平底の壺で、体部は歪な球形を呈する。体部外面上位にはハケの後にナデが、中位にはハケが、中位から下位にかけてはナデが、下位にはハケが施され、内面上位にはハケが、中位から下位にかけては指ナデが、下位にはハケが施される。

SK2021 (遺物図版 47 2550)

2550 は腕状のミニチュアで、外面に線刻がみられる。

SK2101 (遺物図版 47 2553、2554)

2553 は高杯の裾部で外面に線刻がみられる。2554 は甕 C で、口縁は強く外反し、体部上位に最大径がある。体部外面には板ナデの後にナデが、内面には板ナデが施される。

SK2106 (遺物図版 47 2556、2557)

2556 は壺の体部で、外面に線刻がみられる。2557 は高杯 B で、口縁はわずかに外反して立ち上がり、端部はわずかに内湾する。内外面はナデが施される。

SK2112 (遺物図版 46 2557～2571)

高杯、小型壺、直口壺、二重口縁壺、広口壺、台付甕、甕が出土している。2557 は高杯 A で、杯部高が高い。2558 は高杯の脚部で、外面には縦方向のミガキがみられる。2559、2560 は小型壺 D で、2559 は平底で、口縁はやや内湾して立ち上がる。体部最大径は上位にあり、底部径は小さい。口縁外面に粘土帯の接合痕が残る。体部外面上位にはケズリが、内面には指ナデが施される。2560 は平丸底で、口縁は端部がわずかに内湾する。体部外面上位にはナデが、中位から下位にかけてはケズリが施され、内面は指ナデが施される。2561 は小型壺 E で、口縁は外反して立ち上がる。体部外面にはハケが、内面上位から中位にはナデが、下位には指ナデが施される。2563 は小型壺の体部で、外面中位から下位にはミガキが、下位にはケズリが施され、内面上位には板ナデが、下位には指ナデが施される。2564 は直口

壺 A で、体部外面上位は板ナデの後にナデが、中位には板ナデが、下位にはハケが施され、内面はナデが施される。2565 は二重口縁壺の口縁で受け口状になる。2566 は広口壺で、口縁は内湾しながら立ち上がり、端部は短く外反する。口縁外面には縦ハケが、内面には横ハケが施され、体部内外面上位には板ナデが施される。2567 は壺の底部で、底部は突出する。体部内外面下位には板ナデが施される。2568、2569 は甕 C で、2568 の口縁端部はわずかに外反し、体部は最大径が体部下位にあり、下膨れ状を呈する。体部外面上位には板ナデの後にナデが、中位から下位にかけてはケズリが施される。内面は板ナデが施される。2569 の口縁はわずかに外反しながら立ち上がり、体部はわずかに縦長の球形を呈する。体部外面にはナデが、内面には強めの板ナデが施される。2570 は甕 A で、体部外面上位から下位にかけては板ナデが、下位にはケズリが施され、内面には板ナデが施される。2571 は甕 D の脚部である。

## その他の遺構出土の遺物

C 区土器集積 (遺物図版 47 2588～2594)

C 区西でみられた土器の集積で、弥生時代の遺物が混入する。高杯、鉢、台付甕、甕が出土している。2589 は高杯 A で、杯部内外面、脚部外面には縦方向のミガキが施される。2590 は高杯の脚部で、上位から下位にかけて 5 本単位の沈線が 3 単位みられ、下位には焼成前の穿孔が 3 ヶ所みられる。外面には縦方向のミガキが施される。2587、2588 は小型の鉢で、2587 は鉢の底部で、短い脚が付く。外面には縦方向のミガキが、内面には板ナデが施される。2588 の口縁がやや内湾気味に立ち上がる。体部外面にはナデが、内面には板ナデが施される。2592 は甕で、口縁は外反し、口縁端部に刺突がみられる。外面にはナデが、内面には板ナデが施される。2593 は甕 D の底部である。2594 は脚付きのミニチュアで、外面には指ナデが、内面にはナデが施される。

## 試掘調査、包含層出土の遺物

### 試掘出土遺物（遺物図版 47 2601、2602）

本調査に先立って実施された試掘調査で出土した遺物である。2601 は小型壺 F で、口縁端部はわずかに外反する。体部外面にはナデが、内面には板ナデが施される。2602 は甕 A で、口縁外面、体部外面の上位から中位にかけてはハケの後にナデが、中位から下位にかけてハケが、下位にはケズリが施され、内面にはハケが施される。

### 包含層出土遺物（遺物図版 44 2285、2455、2531、2534、2597～2600）

2455、2595、2598、2599 は線刻がみられる一群である。2455 は甕 D の脚部である。2595 は高杯の裾部で、2598、2599 は壺または甕の体部である。2285、2597 は小型壺 C で、2597 の口縁は短く開く。体部外面上位には板ナデの後にナデが、中位から下位にはケズリの後にナデが施され、内面には板ナデが施される。2285 の口縁は短く直立して立ち上がる。体部外面には指ナデが、内面にはナデが施される。2531 は高杯 A で、口縁端部はやや内湾し、内外面共にナデが施される。2534 は高杯の脚部で、外面にはミガキが施される。2596 は杯部内面にかえりをもつ高杯である。2600 は器台で、口縁は広く開き、端部はわずかに内湾する。体部下位に断面三角の突帯を有する。脚部は「ハ」の字状に開く。

(佐藤公保)

## IV期 古墳後期～平安時代

### 1. 主要遺構（遺構図版 63～68）

IV期の遺構は A 区西端の谷 (NR3001) を除くと、すべて B 区の東半部に展開する。南北方向の溝 SD3001～3011 と、不整形の土坑 SX3001 がある。

遺構の時期は 8 世紀後半～9 世紀前半が主体だが、試掘・表土はぎ・遺構検出時には 5 世紀後半から 11 世紀代にかけての遺物が出土している。

#### SD3001～3011（遺構図版 68）

B 区東半部を南北に走る溝群、うち、SD3004・3006・3008、SD3005・3009・3011、SD3002・3010 はそれぞれ一連の溝であるため、最も東の SD3003 から最も西の SD3002 (3010) まで、計 6 条となる。うち、SD3001 は SD3006 (3004) に切られている。溝の間隔と方位から、SD3001 と SD3002 (3010)、SD3003 と SD3005 (3009・3011) がそれぞれ同時併存していたとおもわれる。溝間の距離は 9～10m で、ほぼ平行していることから、道の側溝である可能性がある。それぞれの溝の規模と方位については、一覧表に記述し、ここでは詳述しない。

なお、SD3002 と SD3004 から土器が出土している。SD3002 出土の土器は 6 世紀代で、SD3004 はおおむね 8 世紀末～9 世紀初頭頃と、間にかかなりの年代の開きがあるが、SD3002 はわずか 2 点の須恵器しか出土していないことから、古い時期の遺物の混入であることも考えられるため、SD3002 の年代そのものはさらに下り、SD3004 とはさほど時期差がない可能性がある。

#### SX3001（遺構図版 68）

SD3002(3010)・3005 を切る不整形の土坑で、北西から南東方向にのびる。6 世紀後半頃の須恵器が出土しているが、遺構の時期は 9 世紀代を下る可能性が高い。

## 2. 出土土器・陶磁器 (遺物図版 48・49)

SD3002 (遺物図版 48)

3001 は須恵器高杯の脚部。下端は外側へ強く屈曲するが、端部は下方へのびない。透かしの下端が低いことから、6世紀前半頃に属するとおもわれる。

3002 は須恵器の短頸壺。口縁部は薄く、ほぼ直立する。6世紀後半に属するとおもわれる。

SD3004 (遺物図版 48)

3003・3004 は須恵器碗 A。いずれも底部外面に墨書があり、うち、3004 は「大」と書かれている。所属時期は8世紀末から9世紀初頭頃か。

3005 は須恵器杯 B 蓋。口縁端部が屈曲しており、8世紀末から9世紀初頭頃と考えられる。

3006 は須恵器高杯の杯部とおもわれるが、前述の相伴遺物に較べて古く、8世紀代には下らない可能性が高い。

3007 は土師質で、器壁が厚く、外面は縦ハケののち、横ナデ、内面は板ナデされている。下端部にも調整痕が残ることから、さらに下へ続くものとおもわれる。甕の口縁部としては異常に分厚いことから、移動式カマドの口縁部である可能性が考えられる。

SD5007 (遺物図版 48)

3008 はVI期(戦国期)の溝から出土した須恵器杯 H 蓋の口縁部。端部は強く外反する。6世紀後半頃に属する。

NR3001 (遺物図版 48)

3009 は須恵器杯 B 蓋で、口縁端部に屈曲がみられる。8世紀末～9世紀初頭頃か。

3010 は須恵器杯 A あるいは杯 B の口縁部。8世紀代に属する。

3011 は灰釉陶器の碗。三日月高台で、釉は漬け掛け。O-53号窯式期で、10世紀前半頃に属する。

SB2080 上層 (遺物図版 48)

3012 はIII期(古墳中期)に属する竪穴住居の埋土中からの出土した、K-90～O-53号窯式期に属する灰釉陶器の碗底部。外面には墨書の痕跡

が残る。9世紀後半～10世紀前半頃に属する。

SK2084 (遺物図版 48)

3013 は深い杯部の須恵器高杯。口縁は内湾し、体部下半にはロクロヘラケズりをほどこす。7世紀中葉～後半頃とみられる。

SX3001 (遺物図版 48)

3014 は須恵器杯 H 蓋の口縁部。端部が外方に大きく開く。時期は6世紀後半頃か。

検出 I (遺物図版 48)

3015 は須恵器杯 B の底部。O-10～IG-78号窯式期に属し、時期は8世紀末～9世紀初頭頃。

3016・3017 は知多式製塩土器の脚部で、知多4類に属する。

3018 は高い立ち上がりと深い杯部をもつ須恵器杯 H で、5世紀後半頃に属する。

3019 は H-72号窯式期の灰釉陶器碗。高台がやや外側につき、見込み部には粒状の墨痕が残る。

3020 は灰釉陶器壺の足で、獣足を模している。

検出 II (遺物図版 49)

3021 は須恵器杯 H 蓋で、口縁部外面には波状文をほどこす。H-111～48号窯式期とみられ、5世紀前半～中葉に属する。

3022 は同じく須恵器杯 H 蓋。時期は6世紀後半頃か。

3023・3024 は須恵器高杯。3023 は杯部の破片。3024 は脚部で、下端部は屈曲して下につまみだす。6世紀後半頃か。

3025 は須恵器 H で、口縁部は内傾し、立ち上がりも低い。底部はやや尖底化しており、口径は8.5cmと小型であることから、杯 H 最末期の I-17～41号窯式期に属するとみられる。時期は7世紀後半～末頃。

3026 は須恵器杯 A。底部はほぼ平らで、口径に較べて器高が低い。

3027 は灰釉陶器碗で、底部外面に墨書があるが、判読不能。O-53号窯式期で、10世紀前半頃に属する。

3028 は知多式製塩土器の脚部で、知多4類に属する。

表土はぎ (遺物図版 49)

3029・3030 は須恵器杯 B 蓋で、いずれも口縁端部が屈曲する。8 世紀末～9 世紀初頭頃か。

3031 は短頸壺。I-41～C-2 号窯式期で、7 世紀末～8 世紀前半に属する。

3032 は須恵器瓶類の底部で、外方に強くふんばる高台を有する。

3033 は緑釉陶器の素地。器形は椀あるいは皿で、内面には丁寧なヘラミガキをほどこす。底部外面にヘラ記号を有する。K-14～90 号窯式期で、9 世紀代に属する。

3034 は O-53 号窯式期の灰釉陶器椀。高い三日月高台で、釉は漬け掛け。時期は 10 世紀前半頃。

3035 は知多 4 類の製塩土器脚部。

その他 (遺物図版 49)

3036 は試掘調査で出土した須恵器杯 B 蓋。ほぼ完形で、口縁端部が強く屈曲し、内面にはヘラ記号をもつ。O-10 号窯式期で、8 世紀末～9 世紀初頭頃。

3037 は須恵器盤。口縁部の立ち上がりは低く、端部はやや内傾する。同じく O-10 号窯式期に属する。B 区北壁トレンチからの出土。

3038 は灰釉陶器椀の底部。外面には墨書が残るが、判読は不能。H-72 号窯式期に属する。

(樋上 昇)

## V 期 中世

### 1. 主要遺構 (遺構図版 69～71)

V 期の遺構は B 区のほぼ全域に広がる。B 区東半部には L 字形に屈曲する溝 SD4010・4011 があり、SD4010 の西約 20m の位置に南北溝 SD4003 が調査区を横断している。そのほか、多数の溝・土坑を確認しており、これらの遺構群はほぼ N-10°-E 前後か、それに直交する方位をとっていることから、ほぼ同時期に機能していた可能性が高い。後述するように、この時期に所属する遺物は A 区西端の谷 NR4001 以外はすべて包含層からの出土であるため、下記遺構群の時期は決めがたいが、13 世紀代の遺物が多い。

SD4003 (遺構図版 71)

B 区のほぼ中央を南北に走る溝。最大幅 1.7m で、深さは 0.6m。方位は N-15°-E で、東側には 2 条の溝 SD4007・4008 がほぼ平行している。SD4007 は全長 27.4m、最大幅 1.0m で、深さは 0.1m。方位は N-12° 30'-E。SD4008 は全長 28.8m、最大幅 1.1m で、深さ 0.2m。方位は N-9°-E。

SD4010・4011・4020 (遺構図版 70)

SD4010 は B 区北端から南北にのびる溝。南端を土坑群に切られ、SD4010 がこの土坑群に接続して東に直角に折れる。SD4010 は最大幅 1.9m で、深さは 0.3m。SD4011 は最大幅 1.8m で、深さは 0.2m をはかる。SD4020 は SD4010 内に掘削された小溝で、最大幅 0.7m で、深さは 0.2m。これらは屋敷地を囲む溝の可能性が高い。方位は SD4010 が N-17° 30'-E、SD4011 は N-60°-W、SD4020 は N-14°-30'-E。

## 2. 出土土器・陶磁器 (遺物図版 50)

NR4001

4001～4003は手づくね成形による土師器皿。  
4004～4007は伊勢型鍋の口縁部。4008は南部系の灰釉系陶器(山茶碗)で、藤澤編年の第8型式。

検出 I

4009～4016はA区より出土。4009は灰釉系陶器(南部系)の皿、4010も南部系の灰釉系陶器碗で、いずれも藤澤編年の第7型式に属する。4011は龍泉窯系の青磁輪花碗。4012も龍泉窯系の青磁碗で、深い中広の鎬蓮弁をもつ。4013・4014は同一個体とみられる白磁碗。4015・4016は陶丸。

4017～4020はB区から出土。4017は瀬戸窯産の天目茶碗。時期は大窯I～II。4018は播鉢で、同じく瀬戸窯産内外面に錆釉をほどこす。時期は穴窯末～大窯I。4019は土師器皿。4020は灰釉系陶器碗(南部系)で、藤澤編年の第4～5型式。

4021はD区出土の土鉢。

検出 II

4022は南部系の灰釉系陶器碗で、藤澤編年の第5型式に属する。

A区南北トレンチ

4023は伊勢型鍋の口縁部。

A区北壁トレンチ

4024は南部系の灰釉系陶器皿。藤澤編年の第7型式か。

表土はぎ

4025～4027はA区出土。4025は鉄釉の播鉢で、瀬戸第10小期に属する。4026は龍泉窯系の青磁碗で、内面に片彫りをほどこす。4027は白磁皿の口縁部。器壁が特に薄く、端部が強く外反する。  
(樋上 昇)

## 1. 主要遺構 (遺構図版 72～77)

戦国期の遺構は調査区B区とC区を中心に北西の延びる微高地上に展開する。微高地の両側は戦国期以降の耕作などにより著しく削平されているが、土層断面の観察から戦国期には湿地であることが判明した。北側ではD区の北東で戦国期以降の自然流路を確認している。微高地上では溝に区画された空間が少なくとも6つ検出されている。この空間を以下に「区画1」から「区画6」とする。区画は全ておおよそ、微高地の方向に準じて溝によって画され、区画の全体像は調査区の制約により明確ではない。区画3が全体の規模を推し量る唯一の例であり、概ね東西方向に30m・南北方向に47mの規模である。但し、区画3も中央に現道が存在し、区画がさらにわかれる可能性が残る。区画の内部には井戸・土坑が存在するものがあること、出土した遺物などからそのほとんどが屋敷地として利用されたと考えられる。区画内の遺構内から出土した遺物は土器・瀬戸美濃・貿易陶磁などであり、特に内耳鍋・羽釜などの土器や瀬戸美濃の陶器が顕著である。瀬戸美濃の時期は大窯I期を中心としたものが主体を占め、これらの区画は15世紀末から16世紀前葉を中心とする時期に存続したと考えられる。

## 区画1 (遺構図版 73)

区画1は調査区のB区北西隅に位置する。SD5009とSD5010に画された区画である。中心は調査区北西にあると考えられ、B区では区画の南西の一部が展開する。調査区内での規模は東西方向に16m、南北方向に17mを測る。調査区の制約により、区画内では溝以外の遺構は検出出来なかったが、屋敷地の一部と考えられる。

## SD5009 (遺構図版 76)

屋敷地の東を区画する溝である。溝は北東方向に走り、北から東に26°振る。幅1m、深さ0.5

mを測る。出土遺物は少なく、図示できたものは土師皿1点のみである。

#### SD5010

溝は現存する微高地の南西端に掘削され、屋敷地の南を区画する溝である。溝は北東方向に走り、北から東に114°振る。幅1m、深さ0.2mを測る。出土遺物は少なく、図示できたものはない。

#### 区画2（遺構図版73）

区画2はB区を中心に展開し、周囲を区画する溝がなく東西を区画1と区画3に挟まれた空間である。東西幅は15.6mであり、南北幅は調査区の制約から不明である。区画2内では、区画3の西を画するSD5007に近接して土坑が集中する。SK5001、SK5010を除き、これらの土坑は、長軸が1.2～0.8m、短軸が1～0.8m、深さ0.15mの規模の小型の土坑である。土坑内から出土した遺物は少ない。

#### SK5001（遺構図版76）

調査区で確認する平面形はやや形の崩れた方形をなす。東西幅3.5m、深さ0.5mを測り、南北幅は北側が現道下にあるため不明である。出土遺物は少なく、図示できたものは土師皿1点のみである。

#### SK5010（遺構図版76）

平面形は方形をなし、東西幅2.3m、南北幅1.8m、深さ0.4mを測る。SD5007に近接する。出土遺物は少なく、図示できたものはない。

#### 区画3（遺構図版74）

区画3はB区からC区にかけて展開する屋敷地である。東をSD5019、SD5024、SD5025に、西をSD5007・SD5011・SD5012に、南をSD5008に画され、規模は東西30m、南北47mを測る。北辺は不規則に走る溝が数条存在するが、区画5との境界は不明確である。また区画のほぼ中央の東西方向に現道が存在するため、屋敷地がさらに2分される可能性がある。区画内

の遺構は西側および北側に集中する。西側は区画溝であるSD5007に平行してSD5004などの溝が数条存在し、屋敷地が西側に拡張した可能性がある。北側には土坑・溝・ピットが集中する。ピット群は不規則に並び、柵列・掘立柱建物を確認するには至らなかった。

#### SD5004（遺構図版76）

B区の北に位置し、屋敷地の西辺の区画溝SD5007に併走する。溝は南北方向に走り、北から東に20°振る。幅0.8m、深さ0.3mを測る。出土遺物は土師皿、内耳鍋などがある。

#### SD5007（遺構図版76）

B区の北に位置し、屋敷地の西辺を区画する溝である。溝は南北方向に走り、北から東に20°振る。幅3.4m、深さ0.8mを測り、溝の西側に幅0.6mのテラスが存在する。セクションから少なくとも1度は掘り直した痕跡が窺える。出土遺物は土師皿、内耳鍋、縁袖小皿、播鉢、茶入れなどが出土し、量も多い。なお、この溝の北にはC区にSD5011およびSD5012が存在し、共にSD5007の延長にあたりと考えられる。

#### SD5008（遺構図版76）

B区の北に位置し、SD5007の南の延長の溝であり、屋敷地の南辺を区画する。溝は東西方向に走り、北から東に110°振る。幅1.5～0.4m、深さ0.7～0.1mを測り、溝の東側は後世の削平をうけ大きく規模を減ずる。出土遺物は多くはなく、丸碗、播鉢、茶入れが出土した。

#### SD5011

C区の南西隅に位置し、屋敷地の西辺を区画する溝である。溝は北東方向に走り、北から東に20°振る。幅0.8m、深さ0.3mを測る。出土遺物は少なく、図示できたのは天目茶碗、腰折皿である。

#### SD5012

C区の南西隅に位置する。溝は北東に走り、北から東へ19°振る。幅0.6m、深さ2mを測る。出土遺物は少なく、図示できたのは内耳鍋のみである。

SD5019

C区の南に位置し、屋敷地の東辺を区画する溝である。溝は北東方向に走り、北から東に20°振る。幅0.7 m、深さ0.2 mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たものはない。

SD5025

C区の南に位置し、屋敷地の東辺を区画する溝の一つである。溝は北東方向に走り、北から東に20°振る。南でSD5019に接続する。幅0.4 m、深さ0.1 mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たものはない。

SD5033

C区の南西に位置し、溝は北西方向にやや蛇行しながら走る。出土遺物は少なく、図示し得たものは羽釜1点のみである。

SD5037

C区の南西に位置し、屋敷地の北辺を区画する溝になる可能性がある。溝の西端と東端は各々、攪乱をうけている。溝は南東方向に走り、北から東に112°振る。出土遺物は少なく、図示し得たものは土鍋1点のみである。

SK5008

B区の北に位置し、土坑の北側は調査区外に、南側は攪乱により削平をうけ、平面形は不明である。確認し得たのは東西幅0.9 m、深さ0.6 mである。土坑の東側はSD5003に切られる。出土遺物は少なく図示できるものは出土しなかった。

SK5012

C区の南に位置する不定形の土坑である。土坑の西側は攪乱をうけ、現存で東西幅3 m、南北幅4.4 m、深さ0.3 mを測る。出土遺物は少なく、天目茶碗1点のみを図示し得た。

SK5014

C区の南端に位置し、土坑の南半分は調査区外に達する。攪乱坑の底部で確認され、確認面の比高から井戸である可能性がある。平面形はやや形のくずれた長円形を呈すると思われる。調査区で確認できた規模は東西に0.9 m、南北に1 m、深さは0.2 mを測る。出土遺物は少なく、図示し

得たのは羽釜のみである。

SK5023

C区の南に位置し、平面形は方形を呈する。東西幅1 m、南北幅0.8 m、深さ0.1 mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たのは内耳鍋1点のみである。

SK5026

C区の南に位置する。土坑の東側は大きく遺跡確認調査の試掘坑により削平されており、平面形は不明である。確認できた規模は東西幅0.8 m、南北幅2.3 m、深さ0.3 mを測る。出土遺物は少なく、腰折皿を1点のみ図示し得た。

#### 区画4（遺構図版75）

区画4はC区の南東隅を中心に展開する屋敷地である。区画の西辺はSD5002、SD5020に、北辺はSD5027に画された空間である。調査区内での規模は東西方向に34 m、北南方向に41 mを測る。区画内部には土坑・井戸・ピットが北側に集中してみられ、土坑・井戸は屋敷地の北を区画するSD5027に近接して展開する。ピット群は土坑・井戸とやや南に離れ、西を画するSD5021に近接してみられるが、不規則に並び、柵列・掘立柱建物は確認されなかった。

#### SD5002（遺構図版76）

B区の北東隅に位置し、C区のSD5020に接続し屋敷地の西辺を区画する溝である。溝は南北方向に走り、北から東に25°振る。幅0.9 m、深さ0.4 mを測り、溝の西側は幅0.3 mのほどのテラスを形成している。出土遺物は少なく、図示できたのは内耳鍋が1点のみである。

SD5020

C区の南に位置し、屋敷地の東辺を区画する溝である。B区のSD5002に接続すると考えられる。北から東へ20°振り、幅0.6 m、深さ0.2 mを測る。出土遺物は多くはなく、播鉢、土師皿、内耳鍋、羽釜が出土している。

SD5021

C区の南東隅に位置する。B区のSD5001の延

長の溝であり、屋敷地の西辺にあたる。北東に走り、北から東に22°振る。幅0.8 m、深さ0.2 mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たものは内耳鍋は1点のみである。

#### SD5023

C区の南東に位置する。南東に走り、北から東に104°振る。

溝の西端はSD5022に接続し、南西に走る。幅0.7 m、深さ0.2 mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たものは内耳鍋、羽釜である。

#### SD5027

C区の南東に位置し、屋敷地の北辺を区画する。南東に走り、北から東に112°振る。幅0.9 m、深さ0.3 mを測る。出土遺物は燭台、花瓶、鉢などが出土している。

#### SK5015

C区の南東に位置し、土坑の南側は調査区外に達する。不定形を呈し、調査区内の規模は東西に2.2 m、南北に0.7 m、深さ0.1 mを測る。出土遺物は緑釉小皿、壺、内耳鍋、羽釜がみられる。

#### SK5016 (遺構図版 77)

C区の南東に位置し、東西に長い不定形を呈する大型の土坑である。東西に5 m、南北に2.4 m、深さ0.9 mを測る。比較的まとまって遺物がみられ、青磁碗、緑釉小皿、花瓶、播鉢、土師皿、内耳鍋が出土している。

#### SK5028

C区の南東に位置し、円形を呈する。径1.5 m、深さ2.2 mを測る。近接するSK5027と同様に形状、深さから井戸である可能性がある。出土遺物は少なく、播鉢、土師皿を図示し得たのみである。

#### SK5030

C区の南東に位置し、ほぼ円形を呈する。径は1.3 m、深さ0.3 mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たのは緑釉小皿1点のみである。

#### SE5002 (遺構図版 77)

C区の南に位置し、南北に長い方形を呈する。東西に1.6 m、南北に2.3 m、深さ0.6 mを測る。井戸は屋敷地の北西隅に位置し、南でSD5021

に接続する。出土遺物は灰釉平碗、土師皿、内耳鍋がみられる。

#### SE5003 (遺構図版 77)

C区の南東に位置し、隅丸の方形を呈する。東西に2 m、南北に1.8 m、深さ0.9 mを測る。井戸と考えられるSK5027およびSK5028に近接しており、屋敷地の北西隅に位置する。出土遺物は多くはなく、図示し得たのは土師皿、羽釜である。

#### SX5001 (遺構図版 77)

C区の南端に位置し、遺構の南は調査区外に達する。平面形は東西に長い方形を呈すると考えられ、東西に8.1 m、南北に3 m、深さ0.4 mを測る。SD5021を切る。出土遺物は比較的まとまっており、白磁小杯、緑釉小皿、播鉢、土師皿などがみられる

#### 区画 5 (遺構図版 74)

区画5はC区の南西に展開する。南辺はSD5015に区画されるが、東辺には区画する溝は存在しない。調査区内での規模は東西方向に13 m、南北方向に21 mを測る。区画の中心は調査区北西にあると考えられ、C区では区画の南西の一部が展開する。区画内部ではSD5015に併走する溝を検出した他、明確な遺構はみられないが、屋敷地の一部と考えられる。

#### SD5015

C区の南西隅に位置し、南東に走り北から東に112°振る。屋敷地の南辺の溝であり、幅0.4 m、深さ0.4 mを測る。出土遺物は多くはなく、図示し得たのは内耳鍋などである。

#### 区画 6 (遺構図版 75)

区画6はC区の南に展開する。西辺をSD5017、南辺をSD5018、東辺をSD5030に画された区画である。区画の北側は微高地の北辺にあたりと共に、後世の掘削のために北辺の区画をみだせなかった。調査区で確認しうる規模は西東方向に30 m、南北方向に16 mを測る。区画

内部は大きく掘削をうけているため、遺構を検出できなかったが、屋敷地の一部と考えられる。

SD5017

C区の南西隅に位置し、北東に走り北から東に19°振る。屋敷地の西辺にあたり、南端でSD5018に接続する。幅1m、深さ0.6mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たものはない。

SD5018

C区の南に位置し、南東に走り北から東に110°振る。屋敷地の南辺にあたり、西端でSD5017に接続する。幅0.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たものはない。

SD5030

C区の南東に位置し、北東に走り北から東に19°振る。屋敷地の東辺にあたるが、溝の北は攪乱をうける。幅0.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物は少なく、図示し得たものは羽釜1点のみである。

## 2. 出土土器・陶磁器

出土した戦国期の遺物はコンテナ10箱に満たない。その中で図示し得たものは84点であるが、いずれも小片である。遺物が比較的まとまって出土したのは区画3と区画4であり、区画溝であるSD5007、SD5008、SD5011、SD5027の他、区画4のSK5016からの出土が顕著である。出土遺物は土器・瀬戸美濃・貿易陶磁などであり、特に内耳鍋・羽釜の土器や瀬戸美濃の陶器の出土量が目に付く。土器の土師皿は回転台成形のものが主であり、手捏成形のものは数点確認できたのみである。鍋・窯類では内耳鍋と羽釜が主体を占め、1点のみ茶釜型羽釜を確認できた。内耳鍋は尾張地方で主体を占めるヘルメットタイプと、三河地方で多くみられる体部上位が屈曲するタイプがあり、出土量はヘルメットタイプがやや多い。各々のタイプとも吊り手は1対である。ヘルメットタイプには体部外面上位に沈線がみられる。瀬戸美濃では皿類が多く、中でも縁釉小皿が際立った。瀬戸美濃は藤澤編年の古瀬戸後期IV段階から大窯3期のものがみられるが、大窯I期のもの

のがほとんどであり、他に大窯III期のものは播鉢が数点のみである。図示し得た貿易陶磁は2点のみであり、青磁碗と白磁小杯が出土している。

### 区画1 出土の遺物

図示し得たものはSD5009から出土した土師皿2点のみである。時期は不明であるが、周辺の区画と同じ時期である15世紀後葉から16世紀前葉と考えられる。

SD5009 (遺物図版 51-5001・5002)

5001・5002は共に回転台成形の土師皿である。5001は体部は直線的に立ち上がる。5002はやや外反して立ち上がる。

### 区画2 出土の遺物

図示し得たものはSK5001から出土した土師皿1点のみである。時期は不明であるが、周辺の区画と同じ時期である15世紀後葉から16世紀前葉と考えられる。

SK5001 (遺物図版 51-5003)

5003は回転台成形の土師器である。体部は直線的に立ち上がる。

### 区画3 出土の遺物

区画溝SD5007を中心に比較的、まとまって遺物が出土している。出土した瀬戸美濃の時期は古瀬戸後期IV段階から大窯I期であり、大窯I期ものが主体を占める。

SK5012・SK5014・SK5023・SK5026 他 (遺物図版 53-5004～5008)

区画3内の土坑から出土した遺物はいずれも少なく小片である。

5004は瀬戸美濃の天目茶碗であり、大窯I期のものである。5005は羽釜であり、鏝がやや長い。5006はヘルメットタイプの内耳鍋である。5007は瀬戸美濃の灰釉端反皿の口縁で大窯I期に属する。5008は区画内のピットから出土した

茶釜型羽釜の胴部であるが、鏝は欠損している。SD5007 (遺物図版 51-5009 ~ 5023)・SD5008 (遺物図版 51-5024 ~ 5026)・SD5011 (遺物図版 51-5027 ~ 5028)

いずれも屋敷地を区画する溝である。比較的遺物がまとまって出土している。

5009 は瀬戸美濃の天目茶碗の口縁である。大窯 I 期に属する。5010 は瀬戸美濃の腰折皿の底部であろう。古瀬戸後期IV段階に属する。5011・5012・5013 は共に瀬戸美濃の緑釉小皿である。5011 は古瀬戸後期IV段階に、5012 は大窯 I 期に属する。5013 は底部にあたる。5014 は瀬戸美濃の腰折皿である。古瀬戸後期IV段階に属する。5015 は常滑の捏鉢である。5017 は瀬戸美濃の肩付茶入れである。5018 は瀬戸美濃の花瓶の胴部である。5019 は瀬戸美濃の壺の底部である。5020・5021 は土師皿である。5020 は回転台成形であり、白橙色を呈し硬質に焼成される。5021 は手捏成形である。5024 は瀬戸美濃の天目茶碗の口縁である。大窯 I 期に属すると考えられる。5025 は瀬戸美濃の挿鉢の口縁である。大窯 I 期に属する。5027 は瀬戸美濃の天目茶碗である。口縁を欠く。大窯 I 期に属する。5028 は瀬戸美濃の腰折皿である。器高は低く口縁の反りがやや弱い。古瀬戸後期IV期に属すると考えられる。

SD5033 (遺物図版 53-5029)・SD5037 (遺物図版 53-5030)・SD5004 (遺物図版 54-5031 ~ 5033)・SD5012 (遺物図版 54-5034)

いずれも屋敷地内の溝である。SD5004 で比較的遺物がまとまって出土しているが、他の溝では遺物の出土量は極めて少ない。

5030 は体部の最大径が鏝ではなく、体部中央にある鏝付き鍋である。5032 は回転台成形の土師皿で、白橙色を呈し硬質に焼成されている。

#### 区画 4 出土の遺物

区画 3 と同様に区画内での出土遺物量は比較的多い。SK5016・SK5016、区画溝であるSD5002・SD5020・SD5027、及びSX5001に

まとまった遺物がみられる。出土した瀬戸美濃の時期は古瀬戸後期IV段階から大窯III期であるが、大部分は大窯 I 期のものである。

SK5015 (遺物図版 52-5038 ~ 5040、遺物図版 55-5041・5042)・SK5016 (遺物図版 55-5043 ~ 5051)・SK5030 (遺物図版 55-5054)

屋敷地を区画する溝に近接して存在する土坑である。屋敷地の北端に位置する廃棄土坑である可能性が高い。

5038 は瀬戸美濃の緑釉小皿であり、体部は開き気味に立ち上がる。大窯 I 期に属すると思われる。5039 は常滑の甕の底部である。5040 は瀬戸美濃の無頸壺の口縁である。5042 は吊り手が欠損しているが、内耳鍋である。体部外面には 1 周半ほどする沈線がみられる。5043 は竜泉窯系青磁の碗の体部であり、外面に連弁文が線刻されている。5044 は瀬戸美濃の緑釉小皿である。底部に線刻がみられる。古瀬戸後期IV段階に属する。5045 は瀬戸美濃の挿鉢の口縁である。大窯 I 期に属する。5046 は瀬戸美濃の花瓶の胴部である。5047 ~ 5049 は土師皿である。5047、5048 は回転台成形であり、5047 は白橙色を呈し硬質に焼成される。5049 は手捏成形であり、内面は放射状のハケが施される。5050 は内耳鍋で体部上位が屈曲する三河地方で多く見られるタイプである。5051 は土師器の蓋である。上部に摘みがあった痕跡がある。5054 は緑釉小皿である。古瀬戸後期IV段階に属する。

SK5028 (遺物図版 55-5052・5053)・SE5002 (遺物図版 53-5055 ~ 5057)・SE5003 (遺物図版 55-5058・5059)

屋敷地の北西に接近して存在する井戸または井戸と考えられる遺構である。

5052 は瀬戸美濃の挿鉢の口縁である。大窯 I 期に属する。5053 は回転台成形の土師皿である。5055 は瀬戸美濃の灰釉平碗の底部である。古瀬戸後期IV段階に属すると考えられる。5056 は回転台成形の土師皿である。5057 は吊り手を欠損するが、内耳鍋である。口縁部が内湾する。

5058 は回転台成形の土師皿である。灰色を呈し、硬質に焼成される。

5059 は羽釜である。鍔が短い。

SD5002 (遺物図版 54-5060)・SD5020 (遺物図版 53-5061～5063、遺物図版 54-5034～5037)・SD5027 (遺物図版 52-5065～5069)

SD5002 及び SD5020 は屋敷地の西辺を区画する溝であり、SD5027 は屋敷地の北辺を区画する溝である。

5034 は吊り手は欠損するが、ヘルメットタイプの内耳鍋である。5035・5036 は瀬戸美濃の播鉢である。5035 は口縁であり大窯 3 期に属すると考えられる。5037 は回転台成形の土師皿である。白橙色を呈し硬質に焼成される。5060・5061 は吊り手は欠損するが、体部上位が屈曲するタイプの内耳鍋である。5065 は瀬戸美濃の壺の底部である。5066 は瀬戸美濃の燭台の胴部である。5067 は瀬戸美濃の花瓶の胴部である。5068 は瀬戸美濃の鉢である。

SD5021 (遺物図版 54-5064)・SD5023 (遺物図版 53-5072、遺物図版 52-5073)

屋敷地内の溝である。出土遺物は極めて少ない。

5072 は羽釜である。鍔が短い。5073 は吊り手が欠損するが、体部上位が屈曲する内耳鍋である。

SX5001 (遺物図版 56-5078～5083)

屋敷地の西辺にあり、遺構の南は調査区外に達する。SD5021 を切る。出土した遺物の量は比較的まとまっている。

5078 は白磁角杯である。5079 は瀬戸美濃の縁袖小皿である。体部はやや開き気味に立ち上がる。大窯 1 期に属すると思われる。5080・5081 は瀬戸美濃の播鉢の口縁である。共に大窯 III 期に属すると思われる。5082・5083 は土師皿である。5082 は手捏成形であり、5083 は回転台成形である。

## 区画 5 出土の遺物

図示し得た遺物が出土したのは区画溝である SD5015 のみである。

SD5015 (遺物図版 54-5074～5076)

屋敷地の南辺にあたる。出土遺物は多くはない。

5074 は瀬戸美濃の腰折皿であると考えられる。底部高台内に焼成後の線刻がみられる。古瀬戸後期 IV 段階に属する。5075 は吊り手が欠損しているが、体部上位が屈曲する内耳鍋である。5076 は羽釜である。体部上位内面に吊り手が一對存在する。

## 区画 6 出土の遺物

図示し得た遺物が出土したのは区画溝である SD5030 のみである。

SD5030 (遺物図版 56-5077)

屋敷地の東辺にあたる。出土遺物は 1 点のみある。

5077 は羽釜である。鍔が短く、体部が直立気味である。  
(佐藤公保)

## 木製品

木製品は主として A 区西端部の谷 (NR2001・3001) および谷の縁辺部に掘削された溝群 (SD1001・1003・1005・2001) と竪穴住居出土の建築材がある。谷や溝から出土した木製品にも生活用具は少なく、ほとんどは溝の分岐点などに打ち込まれた杭や矢板である。以下、時期を追って記述を進めていくこととする。

### (1) II -1 期

SB1013 (遺物図版 57・58)

1064～1070 は II -1 期と考えられる掘立柱建物 SB1013 の柱根。直径は 13～15cm で、31～44cm の長さが残存していた。樹種は 1064～1066・1069 がヒノキ、1067・1070 はサワラで 1068 がヒノキ属。木取りは 1064・1066・1068・1070 が芯もち材で、他は割材をもちいている。

### (2) II -2 期

SD1005 (遺物図版 59～65)

1072～1087 は SD1005 からの出土。うち、1074～1086 は SD1013 との分岐点に打ち込まれた矢板で、それ以外の製品は 1072・1073 のみ。

1072 は伊勢湾型曲柄三又鍬。軸部は上端付近の後主面側に断面 V 字形の溝を切る樋上分類の D 類。肩部は丸く、やや華奢なつくりである。刃部の大半を欠損する。樹種はアカガシ亜属の柾目材。

1073 はモミ属の芯もち材をもちいた杭で、上端を欠損する。

1074～1086 は矢板。樹種は 1074・1076・1079・1083～1086 はシイノキ属の柾目材、1075・1077・1078・1080～1082 はクヌギ節の柾目材を使用する。

1087 はアカガシ亜属の柾目材。側端面には加工痕が残る。樹種・法量からみて、鍬の未成品である可能性が考えられる。

### (3) II -3 期

SD1001 (遺物図版 66～70)

1088～1111 は SD1001 からの出土。うち、1103～1111 は SD1002 との分岐点に打ち込まれた杭列である。

1088・1089 は円形皿で、樹種はいずれもヒノキ。1088 は口縁部が直線的にのび、端部に広い水平面をもつ。口縁部と底部の境がやや外方に突出する。1089 は底部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。口縁端部には狭い平坦面を有する。

1090 は片面に刃物で細かな溝を一定間隔にいた板で、曲物の側板とおもわれる。ヒノキの追柾目材を使用する。

1091 は直径 5cm をはかるモミ属の芯もち材で、端部付近に幅広の抉りをほどこす。屋根の下地にもちいる垂木材と考えられる。

1092 は直径 17cm、残存長 95cm のクワ属の丸太。柱材の可能性はある。

1093～1095 は 杭。1093・1094 は クリ、1095 はトネリコ属の芯もち材。

1096 は長方形の板で、長辺の一端に方形の小孔を穿つ。ヒノキの板目材をもちいる。

1097 はクリの柾目材の板。1098 は残存長 72cm、幅 17cm、厚さ 2.5cm の大型の板。1099 はアカガシ亜属の柾目材。側縁の一端が薄く、もう一端が厚いミカン割り段階の板。

1100 はコナラ節の割材をもちいた角棒。

1101 はヒノキ属の追柾目の角材。

1102 はアスナロの板目の割材。

1103～1111 は 杭。うち、1104 はヒノキ、1110 はクワ属で、他はクリをもちいる (1111 は未同定)。1103・1104・1106～1109 は割材で、他は芯もち材。

SD1003 (遺物図版 58)

1071 は板で、スギの板目材をもちいる。

#### (4) II期

SK1058 (遺物図版 71)

1112 は残存長 57cm、幅 16cm、厚さ 4cm をはかる大型の板で、コナラ節の芯もち材をもちいる。残存する各面は丁寧に面取りがほどこされている。腐食した面を上、立てた状態で出土しており、柱材の可能性はある。詳細な所属時期は不明。このほか、II期に所属するとみられる柱根が 2 点出土している。樹種はコナラ節とヤナギ属。

#### (5) III期

SB2002 (遺物図版 72)

1113 は SB2002 から出土したサワラの割材。残存長 70cm、幅 3cm で、垂木か梁材の可能性はある。

SB2064 (遺物図版 73)

1114 ~ 1116 は柱根で、1117・1118 は 1114 の礎板。柱根はいずれもコナラ節の芯もち材で、直径 10 ~ 13cm。礎板はヒノキの柵目材で、加工痕を明瞭にとどめる。SB2064 からはこのほかに多数の建築部材が出土している。使用された樹種はコナラ節・イヌガヤ・マキ属・ヒノキ・サワラ・ヒノキ属・クロベである。

SB2067 (遺物図版 72)

1119・1120 は柱根で、1119 はイヌガヤ、1120 はアカマツのいずれも芯もち材。このほかに SB2067 からはヒノキ属の柱根とヒノキ属・ヒノキ科の建築部材が出土している。

SD2001 (遺物図版 74 ~ 82)

SD2001 からは、この遺跡において最も多様な木製品が出土している。

1121 は伊勢湾型曲柄平鋏で、刃部下半を欠損している。筆者の分類では、軸部は D 類で刃部は III 類に属する。全体のつくりが華奢で、伊勢湾型曲柄平鋏の最末期の典型的な形態である。クヌギ節の柵目材をもちいる。

1122 は鉄斧の膝柄。ヒノキの枝分かれ部分をもちいる。台部には袋状鉄斧を装着したと考えられる。縦斧か横斧かは不明だが、台部の断面形が

やや縦長であることから、縦斧の可能性が高い。

1123 はカヤの板目材を丸瓦状に削り抜き、図面上の下端部をさらに斜めに面取りしている。桶状を呈する筒形容器の未成品とおもわれる。

1124 は方形の槽。ヒノキの柵目材をもちいる。器高は 3.3cm と浅い。

1125 はヒノキの板目材をもちいた角棒で、両端部を細くホゾ状につくりだす。機織具の部材とみられる。

1126 は指物の机天板。上面は平滑、下面は一方を斜めに面取りし、足を挿入するために蟻溝を彫る。

1127 は竪穴住居の柱材で、上端部は梁材をうけるために又状につくりだす。

1128 ~ 1130 は杭。1128 はクヌギ節の割材、1129 はアカマツの芯もち材、1130 はエノキ属の半割材をもちいる。

1131 ~ 1134 は穿孔板。1131 は残存長 65cm、幅 14cm、厚さ 2cm の大型の板で、中央に直径 1.5cm の穿孔をほどこす。建築部材か。アスナ口の柵目材をもちいる。1132 は全長 39cm の板で、図面上やや右に寄った位置に円孔をあける。1133 も残存長 38.8cm、幅 11cm、厚さ 2cm の板で、図面上の中央に直径 1.7cm の円孔を、左寄りには一辺約 2cm の方形孔をあける。1134 は残存長 13.1cm、厚さ 0.9cm の板で、図面上の左寄りに 1.4 × 1cm の方形孔を穿つ。1132 ~ 1134 はいずれもヒノキの追柵目材をもちいる。

1135 はヒノキの柵目板で、長辺の片側に 3 × 1cm の抉りをいれる。

1136 はサワラの板目材で、短辺の一端を尖らせる。1137 は幅約 6cm の不整形の板。樹種はヒノキの板目材。1138 は残存長 43.5cm、幅 3cm の細長いヒノキ属の柵目板。1139 は全長 39cm、幅 15cm、厚さ 5cm の板で、樹種はクリの柵目材。1140 はヒノキの追柵目材の薄板。両面に小孔が多数認められるが、人為的なものか否かは不明。1141 は平面が台形を呈する板で、ヒノキの柵目材。1142 は短辺の一方に切断痕

を残すヒノキの板目材。1143 はヒノキの柵目材で、一部が炭化する。1144 は全長 165cm、幅 13cm、厚さ 4cm をはかる大型の板で、クヌギ節の割材をもちいる。1145 は全長 130cm、幅 15cm のサワラの板目材で、節の部分に枝がわずかに残る。1146 はエノキ属の柵目材で、残存長 76cm、幅 24cm、厚さ 10cm。1147 はヒノキの板目材。

1148 ~ 1150 はいずれもヒノキの小型板で、各側縁に加工痕を明瞭にとどめる。前述のような大型の板から製品を加工した際にできた残材とおもわれる。1149 は柵目材で、1148・1150 は板目材。

1151 ~ 1153 は有頭棒。うち 1151 は完形品で、全長 49cm、幅 2.5cm、厚さ 1.5cm。樹種はヒノキの割材。1152・1153 はもう一方の端部を欠損する。いずれも板状で、1152 はヒノキ属、1153 はヒノキの柵目材をもちいる。

1154・1155 は角材。1154 はヒノキの板目材で、図面上の下半部が炭化している。1155 はヒノキ属の柵目材。

1156 はヤナギ属の丸太材。1157 も丸太材(樹種未同定)。このほかに、SD2001 からはイヌガヤの柱材が出土している。また、SD2001 の東側の岸に巨大な木の根が遺存しており、樹種同定の結果、ケヤキであることがわかった。このケヤキの大木の周辺からは手づくねのミニチュア土器が集中して出土しており、小規模な祭祀行為がこの場でおこなわれたことがわかる。

NR2001 (遺物図版 83 ~ 87)

NR2001 からも若干の木製品が出土しているが、次に述べる鳥形木製品以外は、柱材・杭・板・割材などで、生活用具はいっさい認められない。

1158 は鳥形木製品。ヒノキの板目材をもちいており、全長 41.4cm、最大幅 12.1cm、高さ 7.3cm で、平面観とともに側面観をも重視した立体的な形態である。胴部は片面側のみ削り込まれており、加工痕がきわめて明瞭に残る。もう一方は立体的で、加工痕をとどめないことから、削り込みのある面が下であったことがわかる。くち

ばしはやや下に向いており、肩部はやや怒り肩で、尾の長さは全長の 3 分の 1 を占めている。両側面にそれぞれ横一列に小孔を開けている。小孔は図面上の上側面は 6 ヶ所、下側面は 5 ヶ所で、この穴に羽根を挿したと考えられる。このような特徴をもつ鳥形木製品は他に例をみない。これら羽根を挿したと考えられる小孔のほかに、上面に 3 ヶ所の小孔があり、この 3 ヶ所の小孔にヒモを通して木の枝などにぶら下げた可能性がある。猛禽類を想起させる形状と本物の鳥の羽根を挿した可能性があることから、ある特定の鳥をモデルにつくられた可能性が高い。

1159 は柱材。全長 85cm、径 12cm。樹種はクヌギ節の芯もち材をもちいる。

1160 ~ 1162 は杭。1160 はスギ、1161 はニワトコ、1162 はミズキ属でいずれも芯もち材をもちいる。1162 は全長 182cm あることから、柱材の可能性はある。

1163 はヒノキの板目材の板。

1164 は有頭棒で、ヒノキの割材をもちいる。

1165 はヒノキの割材をもちいた角棒。このほかに、NR2001 からはクヌギ節・クリの柱材とヒノキの板材が出土している。

## (6) III~V期

NR3001 (遺物図版 88 ~ 90)

1166 ~ 1183 は NR2001 の上層から出土した木製品。古墳中期から中世にかけての遺物が共伴することから、時期の特定は困難であるため、III~V期のいずれかに属するとおもわれる。

1166 ~ 1170 は田下駄の足板。1166 ~ 1168 は前端が尖るタイプで、1169・1170 は先端が方形のタイプ。1166 は全長 48.5cm と長く、左右に 3 ヶ所ずつ 6 ヶ所と 2 列目と 3 列目の間に 1 ヶ所の 7 孔が開く。輪カンジキの痕跡が残ることから、輪カンジキ型田下駄であったことがわかる。1167 は残存長 38cm と 1166 より短く、穿孔は左右 2 ヶ所ずつの 4 ヶ所しか認められない。1168 は前半部のみが残存で、中央前寄りに 1 ヶ所と左右 1 ヶ所ずつの 3 ヶ所に穿孔があ

る。1169は残存長が45.5cmと長く、穿孔は左右が互い違いに合計3ヶ所認められる。1170は全長24.1cmと短く、穿孔は片側のみ2ヶ所あり、本来は4孔であったとおもわれる。樹種は1166・1167・1170がヒノキ属、1168はサワラ、1169はヒノキ科で、木取りは1167のみ板目で他はすべて柾目材を使用している。

1178は大型の琴の天板。全長が138cm、残存幅15cm、厚さ2cmの大型のモミ属の柾目材。長辺の遺存している側縁には2ヶ所の穿孔があり、下に共鳴箱を取り付けるために桜皮を隙間なく巻き付けている。破損している側縁近くの上方には集弦孔となる半月形の穿孔をほどこす。短辺は上端は凹凸がなく、下端側には弦をかける突起がつくり出されている。集弦孔を中央とすると、本来の幅は23.5cmで、6弦の琴に復原できる\*。

1171・1172は形代とみられる板。1171はヒノキ属の柾目材で、下端部を尖らせ、上端部付近に抉りを入れて若干幅狭にする。1172はサワラの柾目材で、上端を尖らせて、その下に抉りを入れる。所属時期は古代以降のものとおもわれる。

1173は杭あるいは柱材で、サワラの柾目材をもちいる。1174は杭で、クロベの割材を使用する。

1175～1177は穿孔板。1175はモミ属の柾目材で、片側に寄せて方形の穿孔をほどこす。1176は材が未同定だが、1175同様、方形の穿孔がみられる。1177はヒノキ属の柾目材で、左右各2ヶ所、合計4ヶ所に小孔が認められる。

1179・1180は有扶板。1179はサワラの板目材で、中央やや上よりの左右側縁を幅広に残して上下を削り込む。1180はヒノキ属の柾目材で、片側の側縁を一部台形に削り込む。

1181・1182はいずれもヒノキ属の柾目材をもちいた板。

1183は有扶棒で、上端部の両側縁を削り込む。樹種はヒノキ属の柾目材。このほか、NR3001からはヒノキの割材が出土している。

#### (7) VI期ほか

SK5016 (遺物図版91)

1184は横櫛。ヒサカキの柾目材をもちいる。出土遺構不明 (遺物図版91)

1185は出土遺構不明の杭だが、クリの割材をもちいていることから、SD1001 (II-3期)の杭列の材であった可能性が高い。(樋上 昇)

---

\* 笠原 潔・中川律子氏のご教示による。

## 石器・石製品・ガラス製品

### 1. 石器 (遺物図版 92～98)

本遺跡では、今回計 58 点の出土を見た。器種には、石鏃に代表される剥片石器・剥片・石核・磨製石斧・砥石・火打石などがある。帰属時期がある程度特定できるものは一部に留まり、個別に記載していくこととする。

#### 石鏃 (1001～1004)

4 点出土した。出土した石鏃はすべて有茎石鏃である。1001・1002 は身の長さが短めのもので、1003・1004 など、長身化したものもある。1002・1003 は両面に同様の調整を施しているが、1001・1004 などは片面は縁辺部を中心に調整を加えられており、特に 1001 では、断面形状が菱形ではなく三角形を呈する。いずれも弥生時代に属するものと考えられる。

#### 石錐 (1005～1008)

4 点出土した。刺突具状に先端部が尖る形状のもので、先端部に回転による微細剥離および摩滅の見られるものである。4 点出土した。棒状の形状のもの (1005) と頭部に摘部の見られるもの (1006～1008) の 2 形態がある。本川遺跡では、黒曜石製の石錐が見られることが注目される (1006・1007)。

#### 調整剥片? (1009・1011・1012)

1009 は剥片の裏側に縁辺部のみに調整が見られる。対向する 2 辺に階段状剥離の認められるものである。1011 は方形状を呈する薄手の剥片で、4 辺にわたり階段状剥離が見られる。楔形石器の可能性もあるが、不明である。1012 は薄手で小型剥片の鋭い側の辺に連続して細かい調整が見られるその反対側にも調整が見られるが、こちらは調整により鈍くなっているようである。スクレイパーの類いかもしれない。

#### スクレイパー (1010)

剥片の背面側の端部に調整が見られ、一部階段状になっている。石材により断言はできないものの、刃部表面も使用による摩滅が若干見られるか。

弥生時代に属するものか。

#### 剥片 1 (1014～1018)

ここで図化したものはすべて黒曜石製である。1012～1016・1018 は縦長剥片。1017 は表面が縦横両方向から剥離の見られるものである。楔形石器になるかもしれない。

#### 石核 (1013・1019)

1013 は下呂石円礫の風化面を背に、表面は周囲から剥離が施されている。1019 は黒曜石の石核である。断面直角三角形を呈し、鋭くなった稜側からの剥離が集中して見られる。

#### 剥片 2 (1020・1021)

石鏃に代表される小型の剥片石器に対応する以外の剥片をまとめた。1020 は断面三角形を呈する。表側底辺には連続した剥離調整が見られるものの、各辺には不連続な剥離が見られる。1021 は縦長剥片の端部に一部不連続な剥離が見られる。

#### 磨製石斧 (1022～1028)

磨製石斧には、両刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧が見られる。両刃石斧は 1 点のみの出土である (1022)。刃部は両面非常に研磨されている。平面観は刃部で左右非対称になっており、使用時欠損による刃部再生の結果だと考えられる。刃部には使用による刃こぼれと思われる剥離が不連続に見られる。扁平片刃石斧は 5 点出土した (1023～1027)。敲打調整ののちに研磨調整を行っている様子が、共通して見られる。側面観の観察では直線的ではなく、いわば捻れているものが多い。刃部には、使用痕と考えられる縦方向の細かい磨痕が観察される。柱状片刃石斧も 1 点のみの出土である (1028)。最終調整の研磨痕が器面全体に見られる。側面の一部が平坦にならず、若干凹み気味になっている。これも刃部に縦方向の細かい磨痕が観察される。いずれも弥生時代に属するものであろう。

#### 磨石・敲石 (1029～1031)

1029 は楕円形状を呈する平面に敲打痕の集中が残されているものである。1030 は欠損しているものの、側面が平坦になっており、磨石として

の使用が見られるものである。一平面には、敲打痕の集中が見られる。1031は先端部の尖った、やや三角柱状を呈した礫の一端に、多数の敲打痕が認められるものである。階段状剥離が著しく見られる。

台石？(1032～1034)

これらは、台石の可能性があるかと考えられるものであるが、作業痕跡を示す明確な使用痕などは認められない。遺構内の出土状況など、検討が必要であろう。

火打石(1035～1039)

チャート製の剥片であるものの、上記した石器石材のチャートとは異質で、かつ縁辺部を中心に階段状剥離の見られるものである。1035・1036・1038はやや厚手の剥片で、1037・1039は薄手の剥片を使用し、縁辺部は鋭く、そこに連続した階段状剥離が見られる。中世に属するものか。

砥石(1040～1050)

これはさらに二分類できる。

1. 比較的小型品のもの(1040～1047)。さらに形状から扁平なもの(1040～1042・1045)と、厚みのあるもの(1043・1044・1046・1047)に分けることができる。両者とも平面・側面ともに磨り痕の見られることは同じである。石材は、凝灰岩系統のものを使用しているものもほぼ共通している。これらも中世に属するものか。

2. 大型のもの(1048～1050)。板状になった石を利用している。いずれも表面には磨り痕が多く見られる。1049では側面にも磨り痕がみられ、そこは平坦面になっている。石材は結晶片岩・細粒花崗岩で、前者との違いを示している。

これらの石器群に関して、株式会社アルカも分析結果を提示されている(第Ⅲ章6・7)。この報告との併読をお勧めしたい。

## 2. Ⅲ期に属する石製品・ガラス製品

出土点数は13点で、すべてを図化した(遺物図版99)。

勾玉(1051～1053)

1051と1052は大きさがほぼ同一のものである。1051は非常に精緻な作りをしているものの、稜が強く残されている。先端部が若干欠損している可能性もある。穿孔は一方向からなされている。翡翠製。1052は貫通孔の部分で欠損している。最終調整で全面研磨を施されたと思われ、稜線が若干残る。ガラス製。1053は先端部が一部欠損しているものの、全形を伺い知ることができる。側面観に若干のねじれが見られる。穿孔部分には、片面側のみ穿孔部分を中心として大きな凹みが見られる。最終的な研磨調整により、表面に稜が若干残る。滑石製。

白玉(1054～1056)

1054は最終的な研磨調整により、表面がなめらかになっている。ガラス製。1055と1056は滑石製である。表面中央部に横走する稜が見られ、それを境に上下に斜方向の研磨痕が残されている。

管玉(1057～1063)

今回出土したものは、すべて熔結凝灰岩製である。長さは1.2cmから2.8cmのものまで見られるものの、径は0.5cmから0.6cmと、ほぼ一定である。これらは何か関連性をもって作られた可能性も考えられるか。穿孔は、径1.5mmから3mmの大ききで、1061を除いて比較的均一な大ききで行われている。(川添和暁)

# 第III章 自然科学分析

## 1. 矢作川沖積低地北部，本川遺跡における古環境変遷

鬼頭 剛・堀木真美子・上田恭子

### 1. はじめに

矢作川沖積低地北部の本川遺跡において地下層序を観察する機会を得た。その層序・堆積相解析・粒度分析・粘土鉱物分析・<sup>14</sup>C年代測定・微化石分析から堆積環境の復原を試みたので報告する。

### 2. 試料および分析方法

A区およびC区において、地表面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と<sup>14</sup>C年代の試料を採取した。なお、A区では調査区の西と東の2地点で深掘を実施している。また、A区の考古遺構SD2001、SD1001、SD1002、SD1003とC区の深掘層序断面において微化石分析試料を採取した。A区のSD2001では下位層より標高17.13～17.56mは灰色～褐色を呈する砂質シルト層からなり本層よりNo.1(標高17.20m)・No.2(標高17.41m)・No.3(標高17.55m)の3試料、標高17.56～18.20mは褐色～暗褐色を呈する粘土層からなりNo.4(標高17.67m)・No.5(標高17.85m)・No.6(標高18.00m)・No.7(標高18.15m)の4試料の合計7試料を採取した。A区のSD1001(02)では下位層より標高17.30～17.38mは砂質シルト層からなり本層よりNo.1(標高17.35m)、標高17.38～17.75mは灰褐色を呈する粘土層でNo.2(標高17.45m)・No.3(標高17.57m)・No.4(標高17.68m)の3試料を採取した。SD1002では標高17.56～

17.97mまで褐色を呈する粘土層でありNo.1(標高17.61m)・No.2(標高17.71m)・No.3(標高17.81m)・No.4(標高17.91m)の4試料を採取した。SD1003も標高17.30～17.66mまで褐色を呈する粘土層からなり、No.1(標高17.34m)・No.2(標高17.46m)・No.3(標高17.60m)の3試料を採取した。C区では深掘層序断面より6試料(No.1～6)の微化石分析試料と7試料(No.1～7)の粒度分析試料を採取した。採取層準は図10に示した。

また、遺構検出面(標高18.70m)を形成する黄褐色を呈するシルト質粘土層から粘土鉱物分析試料を採取した。

#### 分析方法

層序トレンチ調査や採取した試料の各種分析を行なった。

#### 層序解析

層序解析の記載にあたり、その層相・粒度・堆積構造・色調・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。堆積相の記載はMiall(1977, 1978, 1996)の河川コードを用いた。

#### 粒度分析

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分けた。2mmφよりも大きい粒子は水洗して重量を測定した。2mmφより小さい粒子は40.00gをビーカーにとり、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、ヒートプレート上で有機物の分解を行なう。分解終了後、蒸留水と分散剤(4%カルゴン)を加え、

攪拌しながら30分間音波洗浄を行なった。沈底瓶に懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにした。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置した。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分(0.063mm>), 粘土画分(0.0039mm>)を10ml採取し、105°Cで24時間乾燥させた後、重量を測定し、加積通過率(質量%)を求めた。ピペット法終了後、懸濁液を63 $\mu$ m篩で水洗した。63 $\mu$ m篩残留物を105°Cで5時間熱乾後、1.0, 0.5, 0.25, 0.125mm $\phi$ 篩でふるい分け、各篩ごとに篩上残留物の質量を測定し、加積通過率(質量%)を求めた。ピペット法およびふるい分け法で求められる加積通過率(質量%)から粒径累積曲線を描き、Wentworth(1922)の粒径区分ごとの質量を算出した。分析はパリーノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

#### 粘土鉱物分析

風乾試料約10gを500mlビーカーにとり、水を適量加えた後、30%過酸化水素水10mlを加えて混合し、時計皿にふたをして約1時間放置した。これを砂浴上にのせて加熱し、土壌から黒色味が完全にぬけるまで過酸化水素水を5mlずつ滴下し、分解を続けた。分解後、上澄みがなくなるまで加熱を続け、過剰の過酸化水素水を分解・除去する。冷却後、Mehra-Jackson抽出液を加え、80°Cまで加熱し、約2gのナトリウム過硫酸(2Na<sub>2</sub>S<sub>2</sub>O<sub>4</sub>)を加え、攪拌した後、15分間放置した。遠心分離し、上澄みを捨てた後、蒸留水で2回洗浄した。つぎに超音波処理し、分散させた後、1000ml沈底瓶にうつす。液温20°Cの状態では8時間静置した後、水面下10cmにサイフォンを挿入し、粘土画分(2 $\mu$ m>)の懸濁液を採取する。懸濁液の一定量を2本の遠沈管に採取し、1N酢酸ナトリウム-酢酸緩衝液(pH5.0)を加え、内容を攪拌した後、上澄みを遠沈除去し、これをもう1回繰り返した。遠沈管の1本に1N塩酸マグネシウム溶液(pH7.0)を加え(マグネシウム飽和試料)、もう1本に

1N酢酸カリウム溶液(pH7.0)を加え(カリウム飽和試料)、遠沈洗浄した。この操作をさらに2回繰り返して、水を加えて過剰の塩溶液を除いた。遠沈管の試料に水を加えて懸濁状態とし、懸濁物をスライド・ガラス上に採取し、風乾させた。この試料をX線回折装置(島津製作所製XD-3A)によって測定した。分析はパリーノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

#### 花粉分析

試料約10gを水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学処理を施し、花粉化石を濃集した。残渣をグリセリンにて封入しプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下で同定・計数した。出現率の算出にあたり、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉およびシダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数として用いた。分析はパリーノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

#### 植物珪酸体分析

湿重約5gの試料を過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250Khz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム:比重2.5)の順に物理・化学処理を行ない、植物珪酸体を分離・濃集した。これを希釈し、滴下・乾燥後、プリウラックスで封入し、プレパラートを作製した。400倍の光学顕微鏡下で出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体とよぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体とよぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数した。分析はパリーノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

#### 珪藻分析

乾燥重量1gをトールビーカーにとり、過酸化水素水(35%)を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行なった。岩片除去の後、水洗を4~5回繰り返しながら同時に比重選別を行なった。分離した試料を希釈し、マウントメディ



図7 C区における深掘層序断面写真

下位より粘土からなる堆積相 Fsc, 砂よりなる堆積相 Sp・Sfb がみられる。

ア(和光純薬製)にて封入した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個体を同定した。同定はKrammer and Lange-Bertalot(1986・1988・1991a・1991b)に従い、堆積環境の解析にあたって小杉(1988)、安藤(1990)、伊藤・堀内(1991)などの環境指標種を参考とした。なお、A区の考古遺構SD2001・SD1002・SD1003とC区の深掘層序断面試料の分析は鬼頭・上田が行ない、A区のSD1001はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

#### 放射性炭素年代測定

液体シンチレーション(LSC)法と加速器質量分析(AMS)法にて放射性炭素年代測定を行なった。

液体シンチレーション法の試料は、植物の根などを取り除いたあと乾燥させ、水に入れて浮上したものを除去した。つぎに塩酸溶液で煮沸し室温まで冷却した後、塩酸溶液を傾斜法にて除去した。試料を、水で塩酸を充分除去した後、乾燥して蒸し焼き(無酸素状態で400°Cに加熱)にした。蒸し焼きにした試料を純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素を補集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3ml(不足の場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとした)に、シンチレーターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料をした。測定は1回の測定時間50

分間を20回繰り返す、計1,000分間行なった。未知試料のほかに値が知られているスタンダード試料と、自然計数を測定するためのブランク試料と一緒に測定した。なお、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,570年を使用した。

加速器質量分析法の試料は酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計にて測定した。測定された<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。なお、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。

測定はパリノ・サーヴェイ株式会社(Code No.; PAL)とパリノ・サーヴェイ株式会社を通じて学習院大学放射性炭素年代測定室(Code No.; Gak)および株式会社地球科学研究所(Code No.; Beta)に依頼した。

### 3. 分析結果

#### 調査地点における層序と層相

深掘トレンチ調査で得られた層序記録をもとに粒度・堆積構造・色調により堆積相解析を行なった。その特徴に基づいて7つの堆積相が認められた。

堆積相St: 基質にシルトを含む極粗粒～粗粒砂からなる。明瞭なトラフ型斜層理が発達する。斜層理の1セットは上方細粒化傾向を示す。シルト成分を多く含むシルト質砂層をレンズ状にはさむときがあり、表面が摩耗した木片を伴う。

表 2 C 区深掘層序断面試料の粒度組成解析結果

試料番号	標高(m)	堆積物	粒径区分							
			2.00mm<	2.00～ 1.00mm	粗粒砂 1.00～ 0.50mm	中粒砂 0.50～ 0.25mm	細粒砂 0.25～ 0.125mm	極細粒砂 0.125～ 0.063mm	シルト 0.063～ 0.0039mm	粘土 0.0039mm>
No.1	18.78	シルト質砂層	0.1	0.6	4.1	19.1	24.1	21.6	22.5	7.8
No.2	18.62	シルト質砂層	0.2	0.7	3.9	22.6	25.2	19.5	21.0	7.0
No.3-1	18.44	中粒砂層	0.0	0.1	0.9	21.5	63.1	5.6	6.4	2.4
No.3-2	18.32	中粒砂層	0.0	0.1	3.2	48.1	33.4	3.3	9.4	2.6
No.4	18.24	粘土層	0.0	0.0	0.1	0.9	3.2	22.2	59.9	13.7
No.5	18.16	シルト質砂層	0.0	0.0	0.0	0.0	7.3	47.0	38.2	7.4
No.6	18.00	粘土層	0.0	0.0	0.0	0.1	0.6	5.5	49.5	44.3
No.7	17.48	中粒砂層	0.1	0.5	8.0	62.9	19.6	3.3	3.6	1.9

単位は重量%で表示

表 3 C 区深掘層序断面試料の粒度組成

試料番号	標高(m)	堆積物	Md (中央値)	Mz (平均値)	Mo (最頻値)	Sk (歪度)	$\sigma$ (分級度)	Kg (尖度)
No.1	18.78	シルト質砂層	3.64 $\phi$ (0.080mm)	4.45 $\phi$ (0.046mm)	2.99 $\phi$ (0.126mm)	0.43	著しい正 2.45	非常に悪い 0.72
No.2	18.62	シルト質砂層	3.40 $\phi$ (0.095mm)	4.32 $\phi$ (0.050mm)	2.33 $\phi$ (0.200mm)	0.49	著しい正 2.42	非常に悪い 0.73
No.3-1	18.44	中粒砂層	2.92 $\phi$ (0.132mm)	2.91 $\phi$ (0.133mm)	2.99 $\phi$ (0.126mm)	0.29	正の歪み 1.15	悪い 3.08
No.3-2	18.32	中粒砂層	2.48 $\phi$ (0.179mm)	2.59 $\phi$ (0.166mm)	2.33 $\phi$ (0.200mm)	0.45	著しい正 1.34	悪い 2.26
No.4	18.24	粘土層	7.16 $\phi$ (0.007mm)	6.66 $\phi$ (0.010mm)	7.64 $\phi$ (0.005mm)	-0.36	著しい負 1.64	悪い 1.22
No.5	18.16	シルト質砂層	5.63 $\phi$ (0.020mm)	5.72 $\phi$ (0.019mm)	7.64 $\phi$ (0.005mm)	0.09	ほぼ対称 1.72	悪い 0.65
No.6	18.00	粘土層	7.88 $\phi$ (0.004mm)	8.30 $\phi$ (0.003mm)	7.64 $\phi$ (0.005mm)	0.39	著しい正 2.06	非常に悪い 1.47
No.7	17.48	中粒砂層	2.17 $\phi$ (0.223mm)	2.25 $\phi$ (0.210mm)	1.99 $\phi$ (0.251mm)	0.43	著しい正 1.08	悪い 2.53

評価はFolk and Ward(1957)による

堆積相 Sp：中粒砂からなる。淘汰は悪く塊状を呈し、堆積構造の保存状態は悪いが、一部にプラナー型斜層理がみられる (図 7)。

堆積相 Sfb：中粒砂～極細粒砂からなるが、基質にシルトを含み、かつその含有量が多いことから堆積相 St や Sp とは区別される。人を含めた動・植物に由来する生物攪乱(バイオターベーション)により堆積構造は破壊されている。

堆積相 FI：シルトあるいは粘土を主体とし、砂粒子が分散してみられる。黄褐色～赤褐色を呈する。人を含めた動・植物の生物攪乱(バイオターベーション)により堆積構造は破壊されている。遺物や遺構が包含されるのはこの堆積相からである。

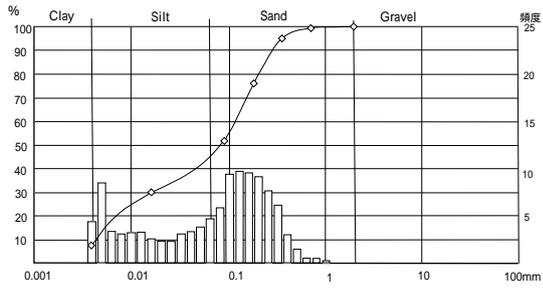
堆積相 Fsc：塊状・均質なシルトと粘土からなる。下位の砂層や礫層とは明瞭な境界面をもって接する。遺物や遺構はみられない。

堆積相 Fcf：塊状な粘土からなる。塊状・均質で礫や砂の粒子をほとんど含まない。植物の葉や茎などの細片を含む。有機物の含有量や酸化の程度の違いにより色調は変化し、有機物の多いものは黒褐色を呈する。

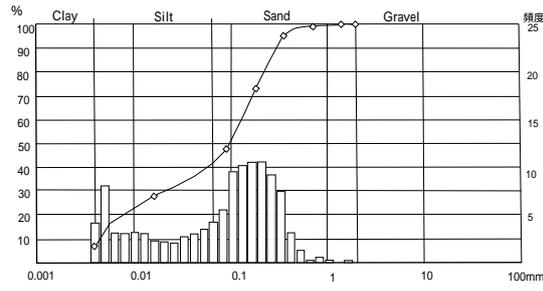
堆積相 C：黒色～黒褐色を呈する腐植に富んだ粘土からなる。全体に塊状であり、堆積構造はみられない。植物遺体を多く含むが、分解が進み粘土化している部分もみられる。

### 粒度分析

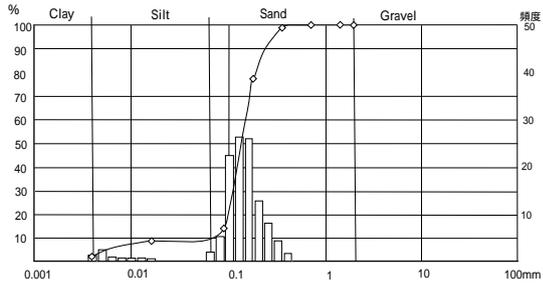
C 区の深掘層序断面の各層準 (図 10) において粒度分析を行なった。結果を図 8, 表 2・3 に示す。中央粒径と平均粒径, 歪度 (歪みの程度: 一番多いクラスの中央値 (モード) が平均より粗い方へ偏り, 細粒の方へ尾をひく場合を正, その逆を負とする), 尖度 (粒度分布曲線の山の尖り方), 分級度 (粒子の大きさのそろい具合) は Folk and Ward(1957) に従った。なお, 中央粒径は  $Md \phi = \phi_{50}$ , 平均粒径は  $Mz = \phi_{16} + \phi_{50} + \phi_{84}/3$ , 歪度は  $SkI = (\phi_{16} + \phi_{84} - 2\phi_{50})/2(\phi_{84} - \phi_{16}) + (\phi_{5} + \phi_{95} - 2\phi_{50})/2(\phi_{95} - \phi_{5})$ , 尖度は  $KG = (\phi_{95} - \phi_{5})/2.44(\phi_{75} - \phi_{25})$ , 分級度は  $\sigma I = 1/4(\phi_{84} - \phi_{16}) + 1/6.6(\phi_{95} - \phi_{5})$  により求めた。No.1 (標高 18.78m: 黄褐色シルト質砂層) では粒径の中央値 3.64  $\phi$  で平均値 4.45  $\phi$  である。歪度は 0.43 で著しい正, 尖



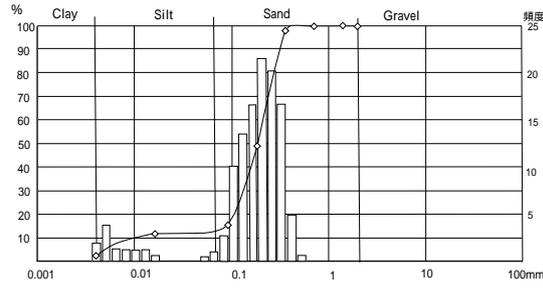
No.1



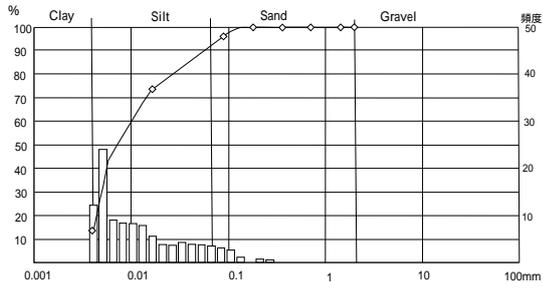
No.2



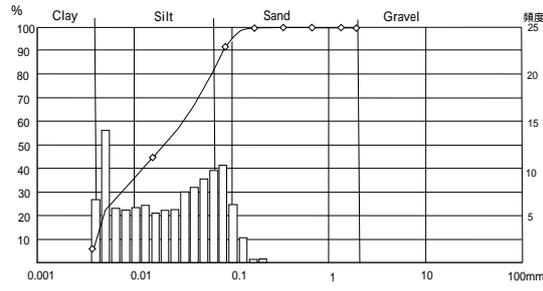
No.3-1



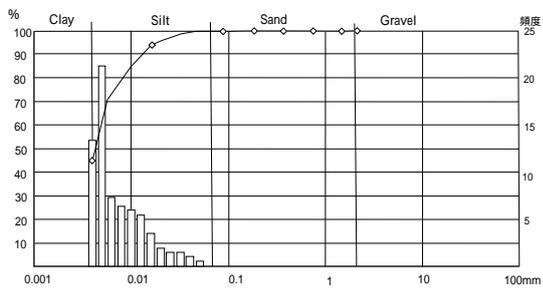
No.3-2



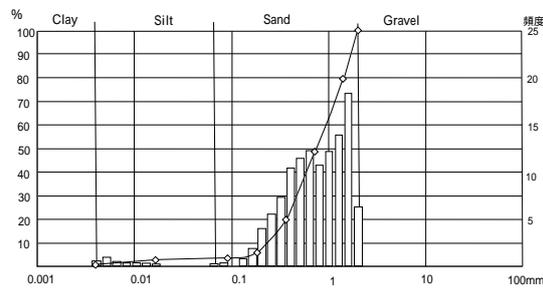
No.4



No.5



No.6



No.7

図8 C区深掘層序断面試料の粒度分析累積曲線

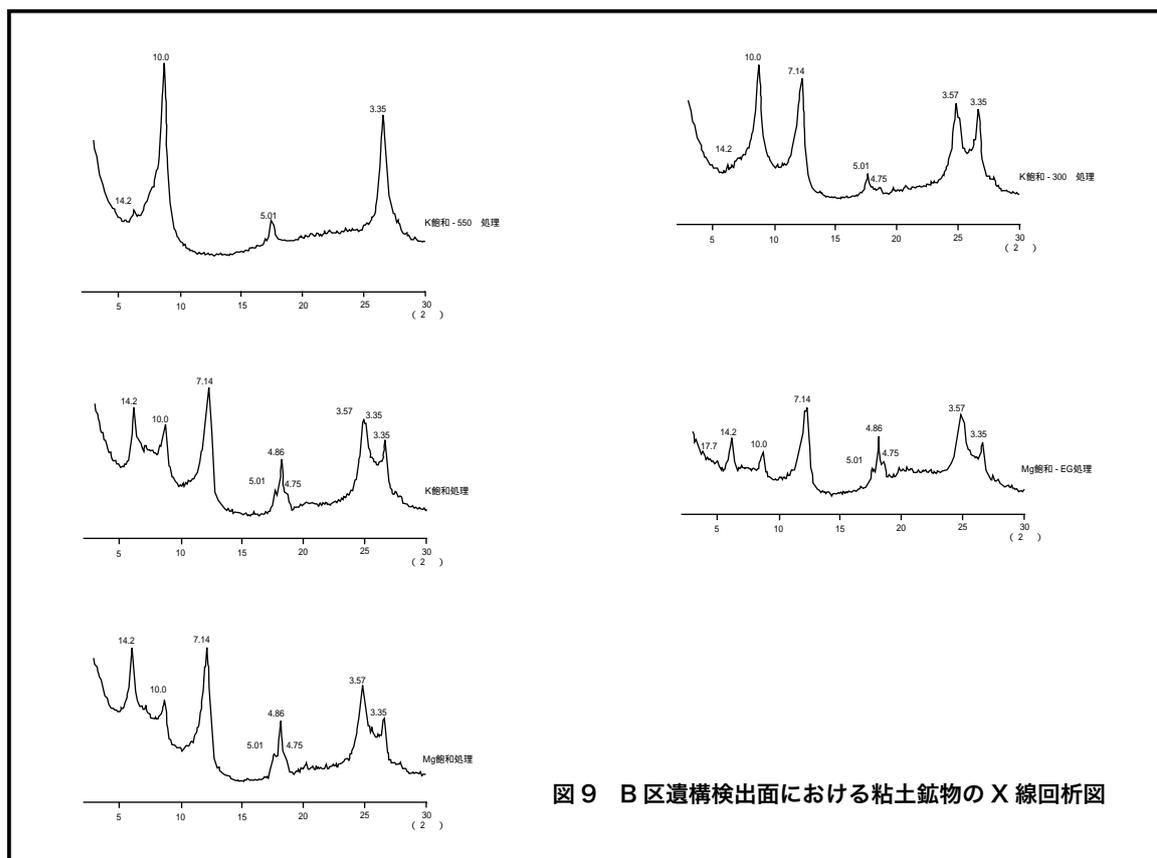


図9 B区遺構検出面における粘土鉱物のX線回折図

度は0.72で扁平であり、分級度は2.45で非常に悪い。N0.2(標高18.62m:灰色シルト質砂層)の粒径の中央値は3.40φ, 平均値4.32φである。歪度は0.49で著しい正に、尖度は0.73で扁平であり、分級度は2.42で非常に悪い。No.3-1(標高18.44m:中粒砂層)の粒径の中央値は2.92φ, 平均値2.91φである。歪度は0.29で正の歪みに、尖度は3.08で極めて突出し、分級度は1.15で悪い。No.3-2(標高18.32m:中粒砂層)の粒径の中央値は2.48φ, 平均値2.59φである。歪度は0.45で著しい正に、尖度は2.26で非常に突出し、分級度は1.34で悪い。No.4(標高18.24m:暗灰色粘土層)の粒径の中央値は7.16φ, 平均値6.66φである。歪度は-0.36で著しい負に、尖度は1.22で突出し、分級度は1.64で悪い。No.5(標高18.16m:暗灰色シルト質砂層)の粒径の中央値は5.63φ, 平均値5.72φである。歪度は0.09でほぼ対象に、尖度は0.65で非常に扁平、分級度は1.72で悪い。No.6(標

高18.00m:褐色粘土層)の粒径の中央値は7.88φ, 平均値8.30φである。歪度は0.39で著しい正、尖度は1.47で突出し、分級度は2.06で非常に悪い。No.7(標高17.48m:粗粒砂層)の粒径の中央値は2.17φ, 平均値2.25φである。歪度は0.43で著しい正に、尖度は2.53で非常に突出、分級度は1.10で悪い。

#### 粘土鉱物分析

遺構検出面(標高18.70m)を形成する黄褐色を呈するシルト質粘土層の粘土鉱物分析試料を行なった。X線の回折線の移動、消失変化から粘土鉱物としてカオリナイト(kaolinite)、緑泥石(chlorite)、イライト(illite)、スメクタイト(smectite)、ギブサイト(gibbsite)および石英(quartz)が同定された。Mg飽和処理では14.2Åの回折線は緑泥石および膨潤性粘土鉱物であるスメクタイト、10.0Åと5.01Åの回折線は雲母鉱物、7.14Åと3.57Åの回折線はカオリン

鉱物および緑泥石, 4.86 Åの回折線はギブサイト, 4.75 Åの回折線は緑泥石, 3.55 Åの回折線は石英である (図9).

## 微化石分析結果

### 花粉

A区 の古墳時代中期の集落を画す大溝と推定されるSD1001のNo.1 (標高17.35m)では全く花粉化石がみられなかったが, No.2~4 (標高17.45~17.68m)では保存状態が悪いものの花粉化石が検出された。木本花粉ではマツ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・クリ属・エノキ・ムクノキ属がめだつが, いずれも低率である。草本花粉ではイネ科の割合が高く, 他の種類は全体的に低率である。

C区 の深掘層序断面ではNo.3-1 (標高18.44m)と3-2 (標高18.32m)において非常に少なかったものの, 他の試料では同定・計数できた。主な花粉化石として木本花粉ではマツ属・ツガ属・クマシデ・アサダ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・ニレ・ケヤキ属が, 草本花粉ではイネ科・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・ソバ属・ヨモギ属などを多産した。

### 植物珪酸体

A区 の古墳時代前期の導水の溝と推定されるSD1001では保存状態が悪く, 表面に多数の溶食痕が認められる。No.2~4 (標高17.45~17.68m)でわずかにイネ属が認められるが, 全体にタケ亜科が多産する。

C区 の深掘層序断面でも保存状態の悪いものが多く, 表面に多数の溶食痕が認められた。No.3-1 (標高18.44m)と3-2 (標高18.32m)を除いたすべての試料でタケ亜科が多産し, イネ属も認められた。

### 珪藻

A区 の古墳時代中期の集落を画す大溝と推定されるSD2001では, No.2 (標高17.41m)とNo.4~7 (標高17.67~18.15m)から200個体を同定・計数でき, 22属80種 (3変種を含む)の珪藻殻が確認された。主な産出種として好止

水性・浮遊生種の*Aulacoseira ambigua*が10.0%と多産し, 流水不定性・付着生種の*Fragilaria ulna*(8.6%), *Eunotia pactinalis*(8.2%)を伴った。

A区 の古墳時代前期の導水用溝と推定されるSD1001では22属48種の珪藻殻が確認された。No.1 (標高17.35m)では10個体が確認されたのみである。No.2~4 (標高17.45~17.68m)の主な産出種として好止水性種の*Achnanthes crenulata*, *Aulacoseira ambigua*, *Aulacoseira crassipunctata*が10%前後と多産する。陸上にはほぼ限られる耐乾性のつよい*Hantzschia amphioxys*や*Navicula mutica*が10~20%と多産し, 同じく耐乾性のつよい*Pinnularia borealis*を伴う。

A区, 古墳時代前期のSD1001より分岐する同時代のSD1002では保存状態が悪く, No.3 (標高17.81m)とNo.4 (標高17.91m)のみ200個体を同定・計数できた。19属49種 (1変種を含む)の珪藻殻がみられた。主な産出種として好止水性・浮遊生種の*Aulacoseira ambigua*が21.0%, 流水不定性・底生種の*Pinnularia viridis*が17.8%と多産し, 流水不定性・底生種の*Pinnularia gibba*(9.8%), 流水不定性・付着生種の*Fragilaria ulna*(5.0%)を伴った。

A区 の弥生時代後期と推定されるSD1003ではNo.1~3 (標高17.34~17.60m)で200個体を同定・計数でき, 23属71種 (4変種を含む)の珪藻殻が確認された。主な産出種として好止水性・浮遊生種の*Aulacoseira ambigua*が22.8%と多産し, 流水不定性・付着生種の*Eunotia pectinalis*(9.3%), 流水不定性・底生種の*Pinnularia gibba*(8.7%)を伴った。

C区 の深掘層序断面ではNo.2 (標高18.62m)とNo.6 (標高18.00m)のみで200個体を計数でき, No.4 (標高18.24m)では174個体の珪藻殻を確認できた。24属75種 (1変種を含む)がみられ, 主な産出種として好止水性・浮遊生種の*Aulacoseira ambigua*が18.5%, 流水不定性・底生種の*Pinnularia gibba*が10.3%と多産し, 好止水性・底生種の*Stauroneis phoenicenteron*(7.7%), 流水不定性・付着生種の*Fragilaria*

表 4 本川遺跡における放射性炭素年代測定結果

調査区	標高 (m)	堆積物	試料の種類	<sup>14</sup> C年代 (yrs BP)	δ <sup>13</sup> CPDB (‰)	暦年代 (1σ, cal yrs BP)	Code No.
98A	16.90	暗褐色粘土層	土壌	2240±100	-	-	PAL-708 (LSC)
98A	17.10	黒灰色砂粘土層	土壌	2530±270	-	-	PAL-694 (LSC)
98A	17.24	灰褐色粘土層	木片	2080±110	-	-	PAL-709 (LSC)
98A	17.47	褐色粘土層	土壌	2220±150	-	-	PAL-696 (LSC)
98A	17.76	暗灰褐色粘土層	土壌	2450±130	-	-	PAL-710 (LSC)
98A	17.85	黒灰色砂混じり粘土層	土壌	1310±290	-	-	PAL-695 (LSC)
98A	17.96	暗褐色粘土層	植物片	2040±100	-	-	PAL-698 (LSC)
98A	18.46	灰褐色粘土層	土壌	1710±70	-	-	PAL-711 (LSC)
98A	14.65	黒褐色ビート	木片	3090±40	-28.7	3360-3320, 3310-3265	Beta-143646(AMS)
98A	15.40	黒褐色ビート	ビート	2600±40	-23.0	2745-2715, 2625	Beta-143647(AMS)
98A	15.50	シルト質砂層	木片	2860±40	-26.9	3055, 3000-2925, 2905-2890	Beta-144217(AMS)
98A	16.60	シルト質砂層	木片	2370±80	-29.6	2485-2480, 2470-2335	Gak-20293(AMS)
98C	17.00	シルト質砂層	木片	2670±50	-29.7	2835-2750, 2785	Gak-20210(AMS)
98C	17.85	褐色粘土層	土壌	500±60	-30.4	545-505	Gak-20209(AMS)

ulna(6.3%)を伴った。

#### <sup>14</sup>C年代測定の結果

測定に用いた試料の種類、採取層準と標高および<sup>14</sup>C年代測定結果を表4に示す。

## 4. 考察

### 堆積相から推定される本川遺跡の堆積環境

本川遺跡調査地点での層序および堆積相解析の結果(図10)に基づいて堆積システムの解釈を試みる。

堆積相Stでみられるトラフ型斜層理は、河川流路といった一方向流が流路底につくる砂堆(デューン)の移動累積によって形成されたものである。砂堆の形態には二次元と三次元のものがあり、二次元的なものがプラナー型斜層理、三次元的なものがトラフ型斜層理にあたる(Harms, et. al., 1975)。一般に三次元的な方が大きな流速で形成される(Costello and Southard, 1981)。堆積相Stのようなトラフ型斜層理の発達した砂層の組み合わせは砂質網状河川に特有のものである。

堆積相Stと同じく砂からなる堆積相SpとSfbは河川の洪水に伴う破堤(クレバスプレー)堆積物である。主に砂の粒子により構成されることから、河川の流路近傍の破堤基部にあたると思われる。また、堆積相Sfbには生物攪乱がみられ、

堆積後には離水して大気中にさらされ、生物活動が行なわれたことを示す。

堆積相Fsc・FcfおよびFmはシルトや粘土の細粒粒子を主体とした。静水中でゆっくり堆積したことがわかる。また、堆積相Fscでみられるシルト質粘土は河川からの洪水流の浮遊物質に由来する。

堆積相Cは黒色を呈する腐植質な粘土層からなる。堆積物の色調は有機炭素量、鉄含有量などが決定要因となるが、黒色化には主に植物遺体といった有機物含有量が多いことに起因する。本堆積相でも未分解の植物遺体を含む。水生植物の繁茂する湧水池において植物遺体が集積し、堆積相Cの腐植質粘土層を堆積させたと思われる。これらの特徴から後背湿地あるいは後背湿地の凹地に出現した池や沼といった環境であったと判断される。

堆積相FIは粘土やシルトの細粒粒子と、砂の粗粒な粒子が混然一体となっており、堆積構造はみられない。動・植物に由来するバイオターベーションがみられることや植物の根跡が普遍的にみられることから、堆積後には離水環境が卓越していたことがわかる。この特徴から堆積相FIは洪水により上方へ堆積物を累積させるとともに、一時的な堆積の休止と離水とを繰り返す自然堤防の堆積物である。

上記の各堆積相は、下位の粘土からなる堆積相Fscを砂層からなる堆積相Stが覆い、さらに

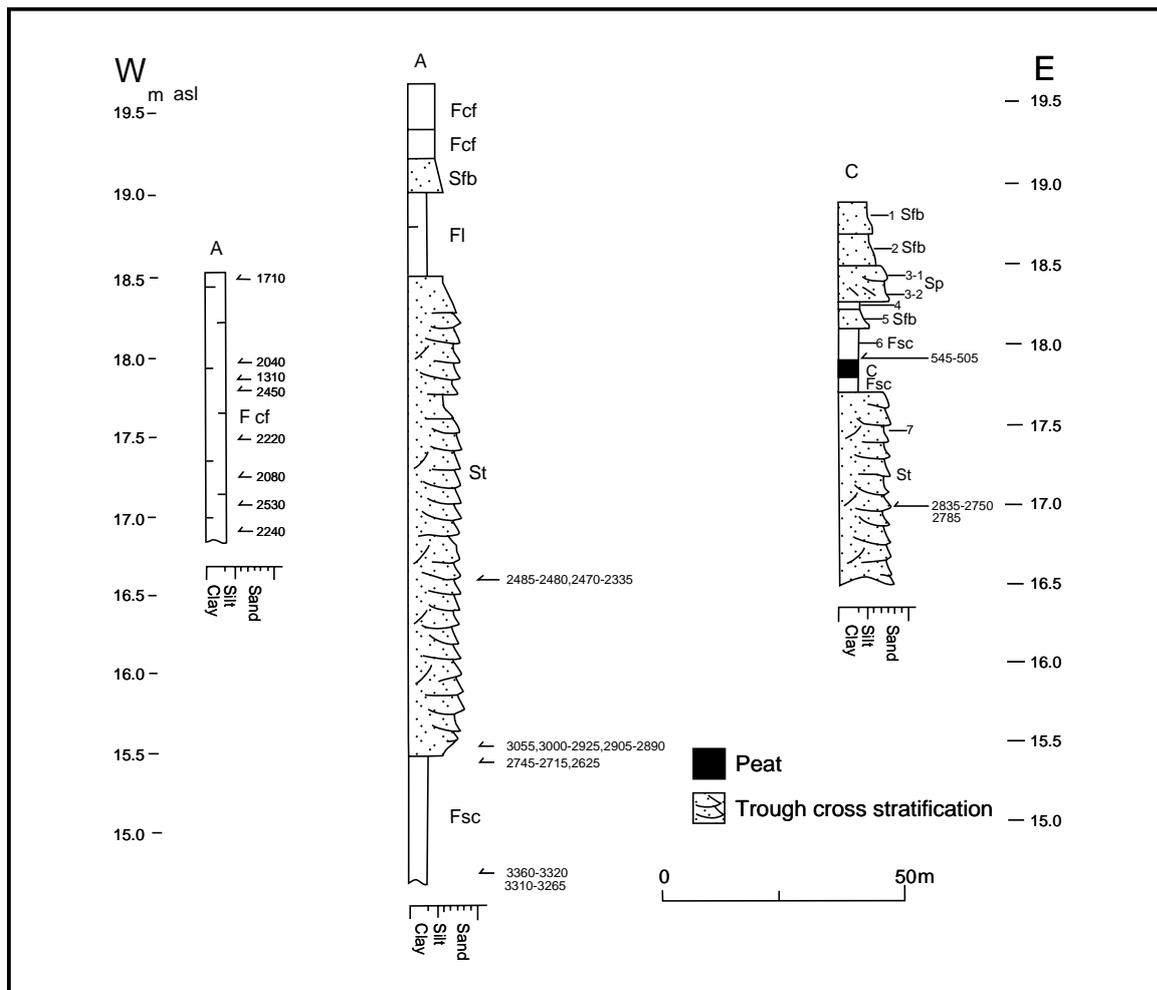


図 10 本川遺跡における東西層序断面図

堆積相コードと  $^{14}\text{C}$  年代値を層序断面右側に示す。C 区層序断面図の 1～7 の数字は粒度分析 (NO.1～7)・微化石分析 (No.1～6) の試料採取層準を示す。

堆積相 St を細粒粒子で構成される堆積相 Fsc・Fcf・Fl と堆積相 Sp・Sfb が覆う (図 10)。このことから調査地点の堆積環境は、後背湿地から河川流路 (チャンネル) を経て、その後、後背湿地とそこに出現した池や沼、自然堤防へと変遷したことがわかる。また、洪水による破堤堆積相 (堆積相 Sp・Sfb) がみられることから、洪水災害の記録がよみ取れる。

#### 縄文時代晩期の後背湿地 - 河川流路 - 自然堤防堆積システム

本川遺跡の最下位 (標高 14.65～15.50m)

は粘土からなり、堆積相 Fsc で表わされる後背湿地堆積物であった。A 区東側の層序断面において、この粘土層から採取した木片の  $^{14}\text{C}$  年代は 3360-3320 cal yrs BP ないしは 3310-3265 cal yrs BP (Beta-143646) を示し、同じく標高 15.40m から採取したピートは 2745-2715 cal yrs BP ないし 2625 cal yrs BP (Beta-143647) であった。約 3300～2700 年前に調査地点は後背湿地であったことがわかる。

ところで、本川遺跡から現世の矢作川にかけての北東 - 南西方向約 5.5km 間には、川原遺跡 (服部ほか編, 2001)、郷上遺跡 (酒井ほか編,

2002), 天神前遺跡(鈴木ほか編, 2001)の発掘調査が実施されている。本川遺跡から約1.8km北東の川原遺跡では標高15.4~16.1mで見られる黒褐色粘土層の下部(標高15.5m)で $3010 \pm 60$  yrs BP(Gak-20196), 上部(標高16.1m)で $2850 \pm 70$  yrs BP(Gak-20195)の $^{14}\text{C}$ 年代を得ている(鬼頭ほか, 2001a)。また, 本川遺跡から約4.0km北東の天神前遺跡では標高18.8mの粘土層が $2870 \pm 80$  yrs BP(Gak-20308)を示した(鬼頭ほか, 2001b)。矢作川沖積低地では縄文時代晩期頃の年代を示す粘土やシルトなどの細粒堆積物が広く分布するという報告がある(森ほか, 1990; 森・前田, 1993; 川瀬, 1998)。上記の各遺跡で得られたおよそ3300~2700年前の年代値は文化編年の縄文時代晩期にあたり, 本川遺跡および周辺でも縄文時代晩期を示す細粒堆積物が確認されたことになる。また, それらの年代値を示す堆積相も本川遺跡でみられたのと同様に堆積相Fscであったことから, 調査地周辺には少なくとも北東-南西方向に約4.0km以上の後背湿地が広がっていたものと推定できる。

本川遺跡では粘土からなる堆積相FscをA区では層厚約3.0mの粗粒砂(堆積相St)が, C区では層厚約1.2m以上の粗粒砂層(堆積相St)が覆った。本砂層の堆積年代について, A区東側の層序断面でみられる堆積相St直下の粘土層から2745-2715 cal yrs BPないし2625 cal yrs BP(Beta-143647)の $^{14}\text{C}$ 年代値を得た。なお, 本砂層中のシルト質砂層部分から得られた木片(標高15.50m)は3055 cal yrs BPから2905-2890 cal yrs BP(Beta-144217)であり, 下位層と年代値の逆転が生じている。これは粘土粒子よりも高エネルギーな水理環境下で, 上流部から二次的に運搬・堆積された結果と判断される。A区東側の堆積相Stのシルト質砂層部分から得られた木片(標高16.60m)は2485-2480 cal yrs BPないし2470-2335 cal yrs BP(Gak-20293)の年代値を, 同じくC区から得られた木片(標高17.00m)は2835-2750 cal yrs BPないし2785 cal yrs BP(Gak-20210)の

年代値を得た。この砂層は堆積相の特徴から河川流路(チャネル)と推定でき, 約2700~2400年前には調査地点は河川流路であり, 深掘り地点間の距離から推定して見かけの流路幅はおおよそ90m以上あったことがわかる。調査地には古矢作川, あるいはそこから分岐する流路が存在したことを示す。考古学的に捉えれば, 約2700~2400年前には人類活動が行なえない環境であったことがわかる。

砂層は細粒な堆積相である堆積相Fsc・F1・Fcf・Cによって覆われた。ここで粗粒な堆積相Stと細粒堆積相との境界に注目すると, A区東側の層序断面では標高18.50mに, C区では標高17.72mにある。A区東側でもっとも高く, 見かけの傾斜約 $15^\circ$ で東(C区)に向かって徐々に標高を減じている。このことから砂層頂部のつくる堆積地形はA区東側付近で高くなっていたこと示す。また, A区東側の堆積相Stの直上を覆うのは堆積相F1であった。堆積相F1は粘土鉱物分析の結果から, カオリナイト・緑泥石・イライト・スメクタイトといった粘土鉱物やシルトの細粒粒子と, 砂の粗粒粒子が混然一体となり, 動・植物に由来するバイオターベーションや植物の根跡が普遍的にみられた。また, 小野・鬼頭(2000)は, 本川遺跡の堆積相F1に対比される層序断面において軟X線写真とリン酸含有量測定を行ない, リン酸含有量のピークが確認され, それが離水環境にある旧地表面と対応することを示した。以上のことから, 堆積相F1は他の堆積相に比べて離水・乾燥環境が卓越していたことをもの語り, 先に述べた砂層のつくる凸地形上に自然堤防が形成されていたことを示すものである。以上のことから, 本川遺跡の調査地点で最初に離水した自然堤防を形成したのはA区の東側付近にあるといえ, 人類活動には好適地であった可能性を指摘できる。発掘調査においても, 本川I期(縄文時代晩期末~弥生時代初頭)の遺物・遺構が高密度で検出されるのがA区およびB区付近であり(成瀬ほか, 1999), 堆積相解析の結果とも矛盾しない。

ところで、堆積相 F1 からなる自然堤防堆積物の形成年代について、砂層の上部から  $^{14}\text{C}$  年代値が得られていないため不明である。一方、A 区の西側層序断面で得られた標高 16.90m の粘土層が  $2240 \pm 100$  yrs BP(PAL-708) であることを考慮すると、約 2200 年前頃に後背湿地が卓越する環境へと変化したことがわかり、自然堤防は 2200 年前よりも前にはすでに形成されていたと推定される。

#### 縄文時代晩期以降の自然堤防 - 後背湿地 - 破堤システム

本川遺跡では粗粒堆積相 St を細粒堆積相である堆積相 Fsc・Fcf・F1 と堆積相 Sp・Sfb が覆った。A 区西側の層序断面は標高 16.86 ~ 18.52m まで粘土層からなり、標高 16.90m で  $2240 \pm 100$  yrs BP(PAL-708)、標高 17.24m で  $2080 \pm 110$  yrs BP(PAL-709)、標高 17.85m で  $1310 \pm 290$  yrs BP(PAL-695) の  $^{14}\text{C}$  年代を得た。堆積相は Fcf に区分され、約 2200 ~ 1300 年前に後背湿地の卓越する環境となったことがわかる。なお、例えば標高 17.10m、17.47m、標高 17.76m では下位層や上位層に比べて  $^{14}\text{C}$  年代値の逆転がみられる。本層準からは本川 II ~ IV 期(弥生時代後期 ~ 古墳時代中期)の考古遺物が多産しており、人類活動に伴うバイオターベーションの結果であると思われる。

本川遺跡でみられるような約 2200 ~ 1300 年前頃を示す細粒堆積相について、前述の川原遺跡では標高 16.7m のシルト層から  $1680 \pm 90$  yrs BP(PLD-349)、標高 17.6m の黒褐色粘土層から  $1470 \pm 40$  yrs BP(PLD-20194) の  $^{14}\text{C}$  年代を得ている(鬼頭ほか, 2001a)。また、本川遺跡から北東約 3.0km の郷上遺跡では標高 19.7m の黒褐色腐植質粘土層から  $1440 \pm 80$  yrs BP(PLD-356) の  $^{14}\text{C}$  年代値を得た(鬼頭ほか, 2002)。さらに、本川遺跡の細粒堆積相に相当する考古遺構や深掘層序断面の珪藻分析では、好止水性・浮遊生種の *Aulacoseira ambigua* が多産した。*Aulacoseira* 属は湖沼沼沢湿地指標種群のひ

とつであり、富栄養な湖や池にみられるとされる(Van Landingham, 1970)。これらのことから、約 2200 ~ 1300 年前の調査地周辺は水深のある後背湿地であったことがわかる。

ところで、A 区の標高 19.00 ~ 19.21m と C 区の標高 18.11 ~ 18.91m には堆積相 Sp・Sfb が確認された。本堆積相は洪水による破堤堆積物と思われ、砂の粒子で構成されることから破堤の基部にあたと推定された。C 区の標高 17.48 ~ 18.78m にかけて各層準で行なった粒度分析では全ての層準で分級度は悪く、とくに上位層での分級度は非常に悪いに分類された。水の流量・流速が大きい洪水の際には、流れのもつ粒子を移動させる掃流力が非常に卓越し、さまざまな大きさの粒子を運搬する。分級度の悪さも洪水堆積物の特徴を示す。C 区の標高 17.85m の褐色粘土層は 545-505 cal yrs BP(Gak-20209) を示したことから、約 500 年前以降、とくに C 区付近に洪水流が卓越したことがわかる。ところで、約 500 年前頃の堆積物について、本川遺跡から約 1.8km 北東の川原遺跡において、標高 18.35m の粘土層から採取した木片から  $660 \pm 120$  yrs BP(PLD-348) の  $^{14}\text{C}$  年代値を得ている(鬼頭ほか, 2001a)。しかし、川原遺跡では標高 16.3 ~ 18.6m まで粘土層とシルト層のみで構成され、砂層は確認できない。洪水流は本川遺跡にのみ特徴的にみられ、C 区あるいはその近傍に洪水を生じさせた流路が予想される。発掘調査では C 区の東側に位置する D 区において河川流路跡が検出されており(成瀬ほか, 1999)、考古学的な所見とも矛盾しない。

#### 謝 辞

本論を作成するにあたり、試料の整理および図面作成では元研究補助員の尾崎和美氏、元整理補助員の服部恵子氏・田中和子氏、整理補助員の宇佐美美幸氏・服部久美子氏・山口きみ代・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

## 文 献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88.
- Costello, W. R. and Southard, J. B., 1981, Flume experiments on lower-flow-regime bedforms in coarse sand, J. Sed. Petrol., 51, 849-864.
- Folk, R. L. and Ward, W., 1957, Brazos river bar; a study in the significance of grain size parameters, J. Sed. Petrol., 27, 3-26.
- Harms, J. C., Southard, J. B., Spearing, D. R. and Walker, R. G., 1975, Depositional Environments as Interpreted from Primary Sedimentary Structures and Stratification Sequences, Short Course Notes, 2, SEPM, Dallas, 161p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸成珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 川瀬久美子, 1998, 矢作川下流低地における完新世後半の地形環境の変遷, 地理評, 71A-6, 411-435.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, 31-64.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemia ceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. Band2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Miall, A. D., 1977, A review of the braided-river depositional environment, Earth-Science Rev., 13, 1-62.
- Miall, A. D., ed., 1978, Fluvial sedimentology, Canadian Society of Petroleum Geologists, Memoir 5, 859p.
- Miall, A. D., 1996, The geology of fluvial deposits, Springer-Verlag, New York, 582p.
- 服部信博ほか編, 2001, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集「川原遺跡」第三分冊, 愛知県埋蔵文化財センター, 150p.
- 鬼頭 剛・小野映介・尾崎和美, 2001a, 矢作川沖積低地北部, 川原遺跡における古環境の復原, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集「川原遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 1-16.
- 鬼頭 剛・小野映介・尾崎和美, 2001b, 矢作川沖積低地, 天神前遺跡地域の層序と古環境, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第96集「天神前遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 41-47.
- 鬼頭 剛・堀木真美子・上田恭子, 2002, 第6節 矢作川沖積低地北部, 郷上遺跡における古環境解析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第98集「郷上遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 333-338.
- 森 勇一・永草康次・伊藤隆彦, 1990, 4章 自然科学分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集「岡島遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 36-50.
- 森 勇一・前田弘子, 1993, 珪藻および昆虫化石群集から得られた岡島遺跡の古環境変遷, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第43集「岡島遺跡・不馬入遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 87-132.
- 成瀬友弘・樋上 昇・佐藤公保, 1999, 本川遺跡, 平成10年度愛知県埋蔵文化財センター年報, 46-51.
- 小野映介・鬼頭 剛, 2000, リン酸含有量測定による堆積層序に記録された旧地表面と人為的攪乱層準の認定: 矢作川沖積低地 本川遺跡, 日本文化財科学会第17回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会, 100-101.
- 酒井俊彦ほか編, 2002, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第98集「郷上遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター

ター, 340p.

鈴木正貴ほか編, 2001, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第96集「天神前遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 80p.

Van Landigham, S. L., 1970, Origin of an early non-marine diatomaceous deposit in broadwater country, montana, U.S.A., DIATOMACEAE, BERLIN · STUTTGART, 449-455.

Wentworth, C. K., 1922, A scale of grade and class terms for clastic sediments, J. Geol., 30, 377-392.

## 2. 本川遺跡から産出した昆虫化石群集

森 勇一（愛知県立明和高等学校）

### 1. はじめに

昆虫の外骨格はキチン質で構成されており、死後土中に埋もれてからも腐ることなく保存される。また、昆虫は移動・跳躍に適した3対の脚と飛翔用の2対のはねを有し、環境変化に対する応答性が最も鋭敏な生物化石（森, 1994）とすることができる。遺跡をめぐる古環境の復元にあたり、昆虫化石（昆虫遺体ともいう）が重要であるのはこのような理由による。

遺物包含層から得られた昆虫化石群集が、遺跡が成立していた頃の周辺環境や植生・人の居住の多寡などの様子を探る手がかりになることについては、わが国のみならず諸外国においても多くの研究例がある。本論では、本川遺跡の遺物包含層より得られた昆虫分析試料をもとに議論する。

### 2. 試料および分析方法

本川遺跡は豊田市本川町に位置する古墳時代を中心とした集落遺跡である。遺跡調査は1998年に実施され、昆虫分析用試料は、愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭 剛氏によってトレンチ断面より採取されたものである。分析試料の採取層準は、IIPHG98A2 区のSD29 (SD1004) といわれる弥生時代後期の溝とされている。

昆虫化石の抽出は、2001年6月同センターを訪問した「こども記者」5名によりブロック割り法により実施されたが、その折りわずか14点しか検出できなかったため、ブロック割り後の試料を再度サンプルAおよびBに分割し、愛知県埋蔵文化財センター科学分析室のスタッフによって篩を用い水洗浮遊選別したものである。なお、サンプルAとBは、水洗浮遊選別に伴う便宜的な分割単位であり、試料ごとの有意な差異は認められない。サンプルAの湿潤重量は14.5kg、同B

は16.2kgであった。

昆虫化石の同定にあたっては、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ行い、同定後の標本は愛知県埋蔵文化財センター収蔵庫にて保管している。

### 3. 分析結果

分析試料（計30.7kg）からブロック割り法で検出された昆虫化石は14点、同じ試料を水洗浮遊選別した結果、218点（サンプルA）、226点（サンプルB）、計458点の昆虫化石が見いだされた。本川遺跡より産出した昆虫化石のうち、主なものについては、写真図版1に実体顕微鏡写真を掲げた。

産出昆虫を分類群ごとにみると、目レベルまで分類できたもの2目8点、科レベル12科270点、亜科レベル4亜科16点、族レベル2族5点、属レベルは7属68点、種まで同定できたものは27種83点であった。これ以外に、不明甲虫としたものは計8点であった。検出部位別では、上翅（Elytron）が最も多く、ほかに腿脛節（Legs）・前胸背板（Pronotum）・腹部（Abdomen）などが認められた。

生態別では、食肉性ないし食植性の水生昆虫が10点（2.2%）、食糞性ないし食屍性の地表性昆虫が30点（6.6%）、その他の地表性昆虫が194点（42.4%）、陸生の食植性昆虫が194点（42.4%）であり、その他の昆虫は計30点（6.6%）であった。

特徴的な種についてみると、食肉性の水生昆虫ではゲンゴロウ科 Dytiscidae のキベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis*（1点）が検出され、食植性の水生昆虫では、マメガムシ *Regimbartia attenuata*、セマルガムシ *Coelostoma stultum*、タマガムシ *Amphiops mater* といった小型のガムシ科

Hydrophilidae が確認された。これらの多くは、近現代の水田周辺に生息し、水田指標昆虫（森，1997）として知られるものである。

地表性昆虫では、エンマコガネ属 *Onthophagus* sp., センチコガネ *Geotrupes laevistriatus*, マグソコガネ *Aphodius rectus*・オオマグソコガネ *A. haroldianus* など、人糞や獣糞に集まる食糞性昆虫が発見された。

これ以外の地表性昆虫では、湿潤地表面を好むツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp., ヤマトトックリゴミムシ *Lachnocrepis japonica*, マルガタゴミムシ属 *Amara* sp. などが見いだされた。一方、ミカワオサムシ *Carabus arrowianus* や、スジアオゴミムシ *Haplochlaenius costiger*, ナガヒョウタンゴミムシ *Scarites terricola pacificus*, ナガゴミムシ属 *Pterostichus* sp. などは、むしろ乾燥した地表面上や畑作地、人家周辺に多い地表性昆虫である。大部分が水洗浮遊選別で検出されたため、発見された体節片が小さく、そのため種名や属名が特定できないままオサムシ科 Carabidae とした昆虫化石が、計 100 点存在する。

陸生の食植性昆虫では、人が植栽した畑作物や果樹・二次林の樹葉や花粉などに多いヒメコガネ *Anomala rufocuprea*, ドウガネブイブイ *A. cuprea*, マメコガネ *Popillia japonica*, コガネムシ *Mimela splendens*, コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda*, ヒメカンショコガネ *Apogonia amida* などが検出された。地表性昆虫同様、体節片が著しく小さいため同定が困難なものが多く、コガネムシ科 Scarabaeidae としたものが 22 点、サクラコガネ属 *Anomala* sp. とした昆虫片が 31 点認められた。

#### 4. 昆虫化石群集から推定される古環境

本川遺跡より得られた昆虫化石群集は、陸生の食植性昆虫を主体に、食肉ないし雑食性の地表性昆虫を随伴する昆虫組成とみなすことができる。オサムシ科が 100 点と多かったのは、水洗浮遊選別法を利用したため、腿脛節や腹部腹板などがバラバラに分離し、結果として多数計数されたも

のと考えられる。食糞性昆虫や水生昆虫の出現率は大変少なかった。

昆虫分析試料を採取した土壌試料は、土器編年からすると、弥生時代後期（約 1,900 年前）頃のものと考えられる。必ずしも多くないが、コブマルエンマコガネやマグソコガネ・センチコガネ・オオヒラタシテムシ・エンマムシ科など人家周辺に多い食糞・食屍性昆虫や、汚物食と考えてよい双翅目 Diptera の囲蛹などが本群集中に認められたことから、この時期、遺跡一帯に人為による環境汚染が進行していたと考えられる。

植生についての情報では、食植性昆虫の組成より遠近 2 タイプの植生空間について考察することができる。昆虫化石群集を産出した遺構とじかに接するところに存在した植生では、セマルガムシ・マメガムシなどの食植性の水生昆虫や、ネクイハムシ亜科 Donaciinae などの水辺に生息するハムシ科の甲虫類が有効である。これらの昆虫の産出から、本川遺跡の溝周辺には、ところどころスゲ類の繁茂する湿地が存在し、水草や藻などの水生植物が繁茂していたことだろう。この湿地のうちの水利の良い場所を選んで、水稲耕作地として利用された可能性があることは、同一層準から見いだされた稲作害虫のイネノクロカメムシ *Scotinophara lurida* や多くの水田指標昆虫の存在から支持される。

一方、ヒメコガネやマメコガネ・ドウガネブイブイ・コガネムシなどといった食葉性昆虫の産出は遺跡内や昆虫分析試料を産出した溝近傍の植生というより、本川遺跡北方の丘陵地や台地上の植生に由来するものと考えられる。ヒメコガネおよびマメコガネがマメ類や各種畑作物を加害し、ドウガネブイブイやコガネムシもまたブドウ・クリ・カキなどの果樹や畑作物を食害することから、溝や旧河道の後背地にこうした畑作物や果樹などが植栽されていたことが考えられる。ヒメコガネを中心とした食葉性昆虫は、中世の山林開発や畑作地の増大に伴い日本各地で大増殖したことが知られている（森，1999）。弥生時代後期の頃、本遺跡一帯ではこれらがすでに他の食植性昆虫を上

表5 本川遺跡より産出した昆虫化石

生態	和名	学名	PHG98A2	PHG98A2	PHG98A2	小計		
			SD29 サブⅡA ブロッカ分割	SD29 サブⅡA 70-テーション分	SD29 サブⅡB 70-テーション分			
水生	食肉性	ゲンゴロウ科		E1A1		2		
		キベリクロヒメゲンゴロウ	<i>Dytiscidae</i>			1		
	食植性	ガムシ科	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp		E1		1	
		マメガムシ	<i>Hydrophilidae</i>			E1	1	
		セマルガムシ	<i>Regimbartia attenuata</i> (Fabricius)		E1		1	
		タマガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)		E3		3	
ネクイハムシ亜科	<i>Amphiops mater</i> Sharp	E1			1			
		<i>Donaciinae</i>			E1	1		
地表性	食糞性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	P2 E2 A1 L2	E1 A3 L4	15		
		コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse	E1		1		
		センチコガネ	<i>Geotrupes laevistriatus</i> Motschulsky			M1 E1 L2	4	
		マゲソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	E1	E4	E1	6	
		オオマゲソコガネ	<i>Aphodius haroldianus</i> Balthasar			E1	1	
	食屍	エンマムシ科	<i>Histeridae</i>		L1		1	
		オオヒラタシテムシ	<i>Eusilpha japonica</i> (Motschulsky)			P1 L1	2	
		食肉・雑食性	オサムシ科	<i>Carabidae</i>	H3 P2 E1	H3 M2 P9 E7 T8 A10 L7	H3 E11 T6 A7 L21	100
			ミカワオサムシ	<i>Carabus arrowianus</i> (Breuning)		E2		2
			アオゴミムシ属	<i>Chlaenius</i> sp.		E3	E3	6
ヤマトトクリゴミムシ	<i>Lachnocrepis japonica</i> Bates		E1	E1	E2	4		
マルガタゴミムシ属	<i>Amara</i> sp.			E1		1		
ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.		E2	E9	11			
クロツヤヒラタゴミムシ	<i>Synuchus cycloderus</i> Bates		E1		1			
ヒラタゴミムシ族	Platynini		P3	P1	4			
ナガヒョウタンゴミムシ	<i>Scarites terricola pacificus</i> Bates		P2		2			
ナガゴミムシ属	<i>Pterostichus</i> sp.		P3		3			
スジアオゴミムシ	<i>Haplochlaenius costiger</i> (Chaudoir)		E1		1			
アトキリゴミムシ族	Lebiini			E1	1			
ゴミムシダマシ科	<i>Tenebrionidae</i>	E1	P1 E2	E5	9			
クロナガキマワリ	<i>Strongylium niponicum</i> Lewis	E1			1			
ハネカクシ科	<i>Staphylinidae</i>		H5 P7 E4 A10	H2 P6 E4 A10	48			
陸生	食性	コガネムシ科	<i>Scarabaeidae</i>		P1 E4 A2 L7	E2 A1 L5	22	
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.		H1 P2 E2 A2 L5	M1 P2 E6 T1 A1 L8	31	
		サクラコガネ	<i>Anomala daimiana</i> Harold		E1	E1	2	
		ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope		E1 T1 A2 L1	P2 A1 L1	9	
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky		H2 P3 E8 A1	E1	15	
		マメコガネ	<i>Popillia japonica</i> Newmann		P2 E2 A1		5	
		スジコガネ亜科	<i>Rutelinae</i>		H1 T2 A1 L1		5	
		コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal		E2 A1	E1	4	
		ヒメカンショコガネ	<i>Apogonia amida</i> Lewis		E1		1	
		クロコガネ	<i>Holotrichia kiotoensis</i> Brenske		L2	E1 L3	6	
	カナブン	<i>Rhomborrhina japonica</i> Hope			E1	1		
	ハナムグリ亜科	<i>Cetoniinae</i>		H1 S1 L1	H1 P1 C1 E3	9		
	コアオハナムグリ	<i>Oxycetonia jucunda</i> (Faldermann)		P1	E2	3		
	カミキリムシ科	<i>Cerambycidae</i>	E1	L1	E1	3		
	コメツキムシ科	<i>Elateridae</i>		E5	E2	7		
食植性	ハムシ科	<i>Chrysomelidae</i>		H1 P1 E6 L3	An1 P1 E5 L10	28		
	ノミハムシ亜科	<i>Alticinae</i>	E1			1		
	ゾウムシ科	<i>Curculionidae</i>		P3 E4	P1 E12 A1 L20	41		
	デオキノコムシ科	<i>Scaphidiidae</i>			P1	1		
	ケラ	<i>Gryllotalpa africana de Beauvois</i>		L 1		1		
	カメムシ目	Hemiptera		L2	A2	4		
	ツチカメムシ	<i>Macroscytus japonensis</i> Scott		A2	P1	3		
イネノクロカメムシ	<i>Scotinophara lurida</i> Burmeister	S1			1			
アリ科	<i>Formicidae</i>		H1 A1	H4 A2	8			
双翅目	Diptera		H1 C1	C2	4			
ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.		C1		1			
不明昆虫	Fragment of insect sclerites		An1 P2 O1	H1 L1 O2	8			
合計			14	218	226	458		

(検出部位凡例)

H(Head):頭部 An (Antenna):触角 M (Mandible):大腸 S(Scutellum):小楯板 P (Pronotum):前胸背板 C(Chrysalis):蛹 E (Elytron):鞘翅

W(Wing):上翅 T(Thorax):胸部 A (Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Other):その他

回り、優占種になりつつあった可能性が指摘される。クロコガネ *Holotrichia kitoensis* はアカマツ林に由来する昆虫であり、カナブン *Rhomborrhina japonica* や大型のハナムグリ亜科 *Cetoniinae*、カミキリムシ科 *Cerambycidae* などは主にクヌギ・コナラなどを中心とした落葉広葉樹林に多い昆虫である。こうした昆虫の産出も遺跡のバックグラウンドの植生を考えるうえで重要である。

水域環境に関する情報では、キベリクロヒメゲンゴロウやセマルガムシ・タマガムシなどの水生昆虫や、ヤマトトックリゴミムシ・ツヤヒラタゴムシ属・ヒラタゴミムシ族 *Platynini* などの地表性昆虫に水田指標昆虫が多く含有され、遺跡の周りに水田が存在した可能性が指摘される。イネノクロカメムシが確認されているが、本種は成虫越冬するため乾田タイプの水田にしか生息できないことから、この時期本川遺跡付近に水田が存在したとしたら、それは灌漑施設の整った水田であったと思われる。

#### 謝 辞

昆虫化石の写真撮影にあたっては、上田恭子氏（愛知県埋蔵文化財センター）にお世話になった。記してお礼申し上げます。

#### 文 献

- 森 勇一（1994）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元。第四紀研究，33，331-349.
- 森 勇一（1997）虫が語る日本史-昆虫考古学の現場から。インセクタリアム，34(1)・34(2)，18-23，10-17.
- 森 勇一（1999）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史。歴博国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」、国立歴史民俗博物館研究報告第81集、国立歴史民俗博物館、311-342.

#### 写真図版 1

1. アオゴミムシ属 *Chlaenius* sp.  
左上翅 長さ 5.5mm (試料 2 ; 標本 15)
2. ツチカメムシ *Macroscytus japonensis* Scott  
腹部腹板 幅 3.0mm (試料 2 ; 標本 22)
3. ケラ *Gryllotalpa africana* Beauvois  
脛節 長さ 2.0mm (試料 2 ; 標本 10)
4. ヒメカンショコガネ *Apogonia amida* Lewis  
左上翅 長さ 6.0mm (試料 2 ; 標本 24)
5. ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp.  
囲蛹 長さ 7.0mm (試料 2 ; 標本 6)
6. オオヒラタシデムシ *Eusilpha japonica* (Motschulsky)  
前胸背板 幅 8.5mm (試料 3 ; 標本 15)
7. ツチカメムシ *Macroscytus japonensis* Scott  
前胸背板 幅 4.0mm (試料 3 ; 標本 16)
8. コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* (Faldermann)  
左上翅 長さ 8.0mm (試料 3 ; 標本 6)
9. イネノクロカメムシ *Scotinophara lurida* Burmeister  
小楯板 長さ 6.5mm (試料 1 ; 標本 1)



### 3. 本川遺跡出土土器の胎土分析

藤根 久・今村美智子（株式会社 パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される。

一方、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが予想される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根、1996；車崎ほか、1996）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層であると予想される。このように、胎土中の混和材は、砂層の特徴である可能性が高く、また現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。

土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

ここでは、本川遺跡および周辺遺跡から出土した土器について、これら胎土材料について粘土および砂粒の特徴について検討した。

#### 2. 方法と記載

ここでは、土器の薄片を作成し偏光顕微鏡を用いた観察を行った。土器試料は、本川遺跡 90 試料、比較検討した川原遺跡 10 試料、水入遺跡 35 試料、郷上遺跡 10 試料、梅坪遺跡 21 試料、高橋遺跡 8 試料、神明遺跡 10 試料、小針遺跡 2 試料、高木遺跡 4 試料、松崎八反田遺跡 1 試料、若宮西遺跡 8 試料、住崎遺跡 10 試料、本川遺跡住居跡から検出された粘土塊 4 試料である（表 6 および表 7）。土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し（面積約  $6\text{ cm}^2$  程度（ $2 \times 3\text{ cm}$ ））、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着した後、精密岩石薄片作製機を用いて平面を作成し、同様にその平面の固化処理を行った。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ  $0.02\text{ mm}$  前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下 300 倍で分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、 $100\ \mu\text{ m}$  格子目盛を用いて任意の位置における約  $50\ \mu\text{ m}$  ( $0.05\text{ mm}$ ) 以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類 ( $50\ \mu\text{ m}$  前後) を対象とし、微化石類と石英・長石類以外の粒子が約 100 個以上になるまで行った。また、この計数とは別に薄片全面について、微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

表6 本川遺跡および周辺遺跡の土器試料とその特徴（その1）

分析No.	遺跡	ヤブ# No.	遺構名	器種	部位	タイプ分け	備考	色	中里層の有無	混入粒子の内題的特徴					その他	
										透明粒子	白色結晶	角閃石類	雲母類	白色粒子		赤色粒子
1	本川遺跡98A	1	SD2001	高杯	杯部	A-c	2504	灰黄褐	なし	△						薄い
2	本川遺跡98A	2	SD2001	高杯	脚部	A-c	2509	にぶい青橙	なし	△						薄い
3	本川遺跡98A	3	SD2001	高杯	脚部	A-a	2510	にぶい青橙	なし	△						木目細かい・薄い
4	本川遺跡98A	4	SD2001	ミニチュア	-	A-a	-	灰黄褐	なし							薄い
5	本川遺跡98A	5	SD2001	小型壺	脚部	A-a	-	にぶい青橙	有り	△						
6	本川遺跡98A	6	SD2001	甕	底部	A-b	2484	灰黄褐	なし	○						
7	本川遺跡98A	7	SD2001	壺	脚部	A-b	2479	にぶい青橙	なし	△						
8	本川遺跡98A	8	SD2001	高杯	杯部	A-c	2507	明赤褐	なし	△						薄い
9	本川遺跡98A	9	SD2001	甕	脚部	A-a	2490	にぶい青橙	やや有							木目細かい・薄い
10	本川遺跡98A	10	SD2001	甕	脚部	A-a	2486	灰黄褐	なし							木目細かい・薄い
11	本川遺跡98A	11	SD2001	壺	脚部	A-c	2480	にぶい青橙	なし							薄い
12	本川遺跡98A	12	SK2007	高杯	杯部	A-c	2546	淡黄	なし							
13	本川遺跡98A	13	SB2014	甕	脚部	A-c	2008	にぶい青橙	なし	△	○					大型白色△
14	本川遺跡98A	14	SB2015	壺	口縁	A-b	2012	にぶい褐	なし	△	○					
15	本川遺跡98A	15	SB2004	壺	脚部	A-a	2004	にぶい青橙	なし							薄い
16	本川遺跡98A	16	SB2004	高杯	スソ	A-a	2001	橙	なし							木目細かい・薄い
17	本川遺跡98B2	17	SB2064	高杯	脚部	B-a	2161	褐	なし							
18	本川遺跡98B2	18	SB2064	高杯	杯部	A-b	2163	暗褐	なし							極薄い
19	本川遺跡98B2	19	SB2064	高杯	杯部	A-c	2165	にぶい橙	なし							薄い
20	本川遺跡98B2	20	SB2064	甕	脚部	C-b	2172	黒褐	なし	△						薄い
21	本川遺跡98B2	21	SB2064	壺	脚部	A-b	2171	灰黄褐	やや有							木目細かい
22	本川遺跡98B2	22	SB2067	高杯	脚部	A-d	2191	淡黄	なし		△					
23	本川遺跡98B2	23	SB2067	高杯	杯部	C-a	2195	灰白	なし							木目細かい
24	本川遺跡98B2	24	SB2067	小型壺	脚部	A-a	2197	灰黄褐	なし							薄い
25	本川遺跡98B2	25	SB2067	高杯	杯部	A-d	2193	橙	なし	△						
26	本川遺跡98B2	26	SB2067	甕	脚部	B-c	2201	にぶい褐	なし	○	○					
27	本川遺跡98B2	27	SB2067	甕	脚部	A-b	2206	にぶい青橙	なし							薄い
28	本川遺跡98B2	28	SB2067	甕	脚部	C-t	2204	にぶい青橙	なし							
29	本川遺跡98B2	29	SB2080上層	高杯	杯部	A-h	2340	灰黄褐	なし							薄い
30	本川遺跡98B2	30	SB2080上層	高杯	杯部	A-b	2338	灰黄褐	有り							
31	本川遺跡98B2	31	SB2080上層	高杯	スソ	A-h	2344	灰白	なし	△						
32	本川遺跡98B2	32	SB2080上層	小型壺	脚部	A-g	2359	にぶい橙	なし							
33	本川遺跡98B2	33	SB2080上層	壺	脚部	B-a	2368	にぶい青橙	やや有							極薄い
34	本川遺跡98B2	34	SB2080上層	甕	脚部	B-a	2369	にぶい青橙	有り	△						木目細かい
35	本川遺跡98B2	35	SB2080上層	高杯	スソ	A-a	2350	淡黄	なし				△			木目細かい・極薄い
36	本川遺跡98B2	36	SB2080上層	高杯	杯部	A-b	2351	にぶい橙	有り	△						薄い
37	本川遺跡98B2	37	SB2080上層	高杯	杯部	A-a	2348	にぶい青橙	なし							薄い
38	本川遺跡98B2	38	SB2080上層	小型壺	脚部	B-a	2319	にぶい青橙	なし		△					
39	本川遺跡98B2	39	SB2080上層	小型壺	脚部	B-a	2323	黒	なし							
40	本川遺跡98B2	40	SB2080上層	壺	脚部	B-a	2327	にぶい青褐	なし							
41	本川遺跡98B2	41	SB2080上層	壺	脚部	A-b	2328、外面炭化物	黒褐	なし	○						薄い
42	本川遺跡98B2	42	SB2080上層	甕？	脚部	B-e	2333	にぶい橙	なし							
43	本川遺跡98B2	43	SB2080上層	甕	脚部	A-d	2329	橙	なし	○						
44	本川遺跡98B2	44	SK2112	高杯	杯部	A-a	2557	にぶい青橙	なし							木目細かい・薄い
45	本川遺跡98B2	45	SK2112	小型壺	脚部	A-a	2561	黒	なし	○						薄い
46	本川遺跡98B2	46	SK2112	壺	口縁	C-f	2564	にぶい青橙	なし							チャート質△・薄い
47	本川遺跡98B2	47	SK2112	甕？	脚部	A-f	2568	にぶい褐	有り							
48	本川遺跡98B2	48	SK2112	甕	脚部	A-a	2570	淡黄	なし							薄い
49	本川遺跡98B2	49	SK2112	台付甕	脚部	A-a	2571	黄褐	なし							薄い
50	本川遺跡98B3	50	SK1011	高杯	杯部	C-e	86	淡黄	なし	△						
51	本川遺跡98B3	51	SK1011	器台	口縁	A-b	89	淡黄	なし	△						もろい・薄い
52	本川遺跡98B3	52	SK1011	高杯	杯部	C-e	87	灰白	なし							薄い
53	本川遺跡98B3	53	SK1011	壺	脚部	B-b	91	にぶい青橙	なし							薄い
54	本川遺跡98B3	54	SK1011	甕(台付)	口縁	B-b	94	にぶい青褐	なし	○	△					薄い
55	本川遺跡98B3	55	SK1011	甕(台付)	脚部	A-a	96	黒褐	なし							薄い
56	本川遺跡98B3	56	SK1072	甕	脚部	C-c	39	褐	なし		△					
57	本川遺跡98B3	57	SK1072	甕	脚部	C-c	41	褐	なし		△					薄い
58	本川遺跡98B3	58	SB2048	壺？	脚部	C-d	-	にぶい褐	なし		△					
59	本川遺跡98B3	59	SB2075	深鉢	脚部	A-b	24	にぶい青褐	なし							
60	本川遺跡98B3	60	深鉢	深鉢	脚部	A-e	10	淡黄	なし		△					
61	本川遺跡98A	61	SD1003	壺	脚部	C-a	-	にぶい青	なし							
62	本川遺跡98A	62	SD1003	甕	脚部	C-a	-	淡黄	やや有							
63	本川遺跡98A	63	SD1003	甕(台付)	脚部	A-e	-	淡黄	なし							大型白色○
64	本川遺跡98A	64	SD1003	甕(台付)	脚部	C-c	-	にぶい青橙	なし		△					
65	本川遺跡98A	65	SD1003	甕(台付)	脚部	C-c	-	にぶい青橙	なし							大型白色△・薄い
66	本川遺跡98B2	66	SB2072	高杯	杯部	A-a	2238	淡黄	なし							薄い
67	本川遺跡98B2	67	SB2072	高杯	杯部	A-a	2236	にぶい橙	なし							薄い
68	本川遺跡98B2	68	SB2072	高杯	杯部	A-c	2244	橙	なし							薄い
69	本川遺跡98B2	69	SB2072	小型壺	脚部	A-a	2259	淡黄	なし							薄い
70	本川遺跡98B2	70	SB2072	甕	脚部	A-d	2263	黒褐	なし	○						
71	本川遺跡98B2	71	SB2072	甕	脚部	A-c	2264	黒褐	なし	○						薄い
72	本川遺跡98B2	72	SB2072	甕	脚部	B-c	2265	暗褐	なし							
73	本川遺跡98B2	73	SB2072	甕	脚部	A-a	2261	にぶい青橙	なし							木目細かい
74	本川遺跡98B2	74	SB2081	高杯	杯部	C-a	2387	にぶい青橙	なし							薄い
75	本川遺跡98B2	75	SB2081	高杯	杯部	C-a	2388	淡黄	なし							薄い
76	本川遺跡98B2	76	SB2081	高杯	杯部	C-e	2382	にぶい橙	なし							薄い
77	本川遺跡98B2	77	SB2081	小型壺	脚部	C-a	2309	にぶい青橙	なし							極薄い
78	本川遺跡98B2	78	SB2081	小型壺	脚部	C-a	2308	にぶい青橙	なし							極薄い
79	本川遺跡98B2	79	SB2081	壺	口縁	A-a	2403	にぶい青褐	なし							極薄い
80	本川遺跡98B2	80	SB2081	壺	脚部	A-i	2405	黒	なし							
81	本川遺跡98B2	81	SB2081	甕	口縁	A-a	2407	にぶい青褐	やや有							
82	本川遺跡98B2	82	SB2081	甕	脚部	A-a	2404	にぶい青褐	なし							
83	本川遺跡98B2	83	SB2081	壺	脚部	B-d	2406	灰白	なし							大型黒色△
84	本川遺跡98B2	84	SB2052	壺	脚部	A-c	2106	橙	なし							
85	本川遺跡98C	85	SK5015	羽釜	脚部	A-o	5041	黄褐	なし							薄い
86	本川遺跡98C	86	SK5016	内耳(箱曲型)	脚部	A-o	5050	黒褐	なし	△						薄い
87	本川遺跡98C	87	SK5016	皿	底部	A-a	5048	褐	なし							薄い
88	本川遺跡98C	88	SD5020	羽釜	脚部	B-o	5063	にぶい橙	なし							薄い
89	本川遺跡98C	89	SD5020	内耳(ヘルメット)	脚部	A-o	5062	橙	なし							極薄い
90	本川遺跡98C	90	SD5020	皿	口縁	C-o	5037	淡黄								

表 7 本川遺跡および周辺遺跡の土器試料とその特徴 (その 2)

分析No.	遺跡	#7 # No.	遺構名	器種	部位	タイプ分け	備考	色	中黒刷の有無	混入粒子の肉眼的特徴									
										透明粒子	白色結晶	角閃石類	雲母類	白色粒子	赤色粒子	黒色粒子	その他		
103	水人遺跡99B	3	SB01	高杯	脚部	A-c		浅黄緑	なし										
104	水人遺跡99B	4	SB01	小型壺?	胴部	C-b	大型雲母	橙	なし	○	○			金色△	○			薄い	
105	水人遺跡99B	5	SB01	甕	口縁	A-c		にぶい黄褐	やや有り	○								大型透明○	
106	水人遺跡99B	6	SB01	高杯	脚部	C-f		橙	なし	△				金色△	○	○			
107	水人遺跡99A	7	SD01 6層	高杯	スソ	C-d		にぶい黄	なし					金色△	○			断面マール、薄い	
108	水人遺跡99A	8	SD01 6層	高杯	脚部	A-a		にぶい黄褐	なし	△						△			
109	水人遺跡99A	9	SD01 6層	甕	口縁	B-c		にぶい黄褐	なし	△				金色△	○			大型白色○	
110	水人遺跡99A	10	SD01 6層	小型壺	胴部	C-a		灰白	なし	△					△	△			
111	水人遺跡99A	11	SD01 6層	小型壺	胴部	C-a		にぶい黄褐	なし						△	△	△		薄い
112	水人遺跡99A	12	SD01 6層	小型壺	口縁	C-a		灰白	なし	○					△				薄い
113	水人遺跡99A	13	SD01 6層	高杯	脚部	A-a		にぶい黄	なし						△				
114	水人遺跡99A	14	SD01 6層	高杯	杯部	A-b		にぶい橙	なし					金色△	○				
115	水人遺跡99A	15	SD01 6層	高杯	杯部	A-d		にぶい橙	なし	○	○				○				
116	水人遺跡99A	16	SD01 6層	甕	口縁	C-f		にぶい橙	有					金色△	○				
117	水人遺跡99A	17	SD01 6層	壺	口縁	B-c	二重口縁	にぶい黄緑	なし					金色△	△				大型白色△
118	水人遺跡98C2	18	SZ01 F黒色層	高杯	脚部	A-d	塔最下層	灰黄緑	なし						△				薄い
119	水人遺跡98C2	19	SZ01 F黒色層	小型壺	胴部	C-c		淡黄	やや有り	△									
120	水人遺跡98C2	20	SZ01 F黒色層	高杯	杯部	A-a		灰白	有										木目細かい、薄い
121	水人遺跡98C2	21	SZ01 F黒色層	高杯	スソ	B-c		にぶい黄褐	なし					金色△	△				薄い
122	水人遺跡98C2	22	SZ01 F黒色層	小型壺	口縁	A-a		淡黄	なし						△	△			木目細かい、薄い
123	水人遺跡98C2	23	SZ01 F黒色層	高杯	スソ	A-a		淡黄	なし										木目細かい、薄い
124	水人遺跡98C2	24	SZ01 F黒色層	小型壺	口縁	B-b		にぶい黄	なし						○		△		薄い
125	水人遺跡98C2	25	SZ01 F黒色層	甕	胴部	C-b		にぶい黄緑	やや有り					金色○	○	△			
126	水人遺跡98C2	26	SZ01 中層 (1)	高杯	杯部	B-b	須器混入	にぶい黄緑	なし						△				木目細かい、薄い
127	水人遺跡98C2	27	SZ01 中層 (1)	高杯	杯部	A-b		にぶい黄緑	なし					金色○	△				
128	水人遺跡98C2	28	SZ01 中層 (1)	高杯	杯部	C-a		淡黄	なし						△	△	△		
129	水人遺跡98C2	29	SZ01 中層 (1)	高杯	脚部	B-b		明黄緑	なし					金色△					木目細かい、薄い
130	水人遺跡98C2	30	SZ01 中層 (1)	小型壺	口縁	C-f		にぶい黄	なし		○				△		△		
131	水人遺跡98C2	31	SZ01 中層 (1)	甕	口縁	B-c		黒褐	なし					金色○	○				
132	水人遺跡98C2	32	SZ01 中層 (1)	甕	胴部	A-d		灰黄緑	やや有り					金色△	△				薄い
133	水人遺跡98C2	33	SZ01 中層 (2)	小型壺	口縁	C-a		にぶい黄	なし						△				木目細かい、薄い
134	水人遺跡98C2	34	SZ01 中層 (2)	甕	口縁	C-f	雲母キラキラ	灰白	なし		△			銀色○	○				薄い
135	水人遺跡98C2	35	SZ01 中層 (2)	甕	胴部	C-h	雲母キラキラ	浅黄	なし					銀色○	○				薄い
136	郷上遺跡97A	1	SB06ネコ	高杯	脚部	A-a		にぶい橙	なし					銀色○	△	△			断面マール
137	郷上遺跡97A	2	SB06東	高杯	杯部	C-b		橙	なし					銀色○	○	△			大型白色○
138	郷上遺跡97A	3	SB06東	高杯	杯接合	A-a		橙	なし	△				銀色△	△	△			
139	郷上遺跡97A	4	SB06東	壺	口縁	A-a		明黄緑	やや有り	△	△								
140	郷上遺跡97A	5	SB06東	甕	胴部	A-c		にぶい黄	なし										白色結晶大型△
141	郷上遺跡98B	6	SB11	高杯	スソ	A-c		橙	有り						○				
142	郷上遺跡98B	7	SB11	高杯	杯部~口縁	C-a		にぶい黄緑	なし					金色△					木目細かい、薄い
143	郷上遺跡98B	8	SB11	杯	口縁	A-a		明黄緑	やや有り	△					△		△		
144	郷上遺跡98B	9	SB11	甕	口縁	C-g		にぶい黄褐	なし					金色○					大型白色○
145	郷上遺跡98B	10	SB11	甕	胴部	A-f		にぶい黄	なし	○				金色○	○		○		
146	梅坪遺跡	1	SB446	高杯	脚部	C-i	Y10,4 809-3	黄緑	有り					金色△					
147	梅坪遺跡	2	SB446	高杯	杯部	A-c	Y10,4 809-3	淡黄	なし						△	△			薄い
148	梅坪遺跡	3	SB446	小型壺	口縁	C-j	Y10,4 809-3	にぶい橙	なし	△				金色○	△	△			薄い
149	梅坪遺跡	4	SB446	甕	胴部	C-h	注記なし	にぶい黄	なし					金色○	○	△			
150	梅坪遺跡	5	SB446	台付甕	脚部	C-h	Y10,4 809-8	褐	なし					金色○	○	△	△		薄い
151	梅坪遺跡	6	SB624	高杯or台付甕	脚部	C-e	Y10,6 3106	浅黄緑	なし						△	△	△		
152	梅坪遺跡	7	SB624	高杯	脚部	C-h	Y10,6 3144?	にぶい黄緑	やや有り	△				金色○	○	○	△		大型白色△、大型赤色△、薄い
153	梅坪遺跡	8	SB624	小型壺	胴部	C-h	Y10,6 3144	浅黄緑	なし	○	○			金色○	○	○	△		
154	梅坪遺跡	9	SB624	高杯	脚部	C-h	Y10,6 3175	にぶい赤褐	なし					金色○	○	△	△		大型白色○
155	梅坪遺跡	10	SB624	高杯	脚部	C-k	Y106,3176	橙	なし	△	△			金色○	○	△	○		
156	梅坪遺跡	11	SB624	高杯	脚部	C-h	Y10,6 3185	にぶい橙	有		△			金色○	○				
157	梅坪遺跡	12	SB624	高杯or台付甕?	脚部	C-f	Y10,6 3178	にぶい黄	有	○				金色△		○			大型白色○
158	梅坪遺跡	13	SB731	小型壺	口縁	B-c	Y108,1525,下層	にぶい黄緑	なし	△				金色△	○	△			薄い
159	梅坪遺跡	14	SB731	高杯	脚部	C-d	Y108,1547,床面	だい	なし					金色△					
160	梅坪遺跡	15	SB731	高杯	杯部	C-d	Y108,1552,下層2分層	にぶい黄緑	やや有り	△	△				△				
161	梅坪遺跡	16	SB744	高杯	杯部	C-b	Y10,7,3396	橙	なし					銀色○	△	△			極薄い
162	梅坪遺跡	17	SB744	高杯	杯部	C-l	Y10,7,3398	にぶい黄	有	○					○				大型白色○
163	梅坪遺跡	18	SB744	高杯	脚部	C-m	Y10,7,3401	淡黄	有						○				
164	梅坪遺跡	19	SB744	甕	口縁~胴部	C-l	Y10,7,3410	にぶい黄	なし		△			金色○	○	○			
165	梅坪遺跡	20	SB744	甕	口縁~胴部	C-h	Y10,7,3395	にぶい黄	なし					金色△	○				
166	梅坪遺跡	21	SB744	台付甕	脚部	C-f	Y10,7,3474	にぶい橙	有					○					大型白色○
167	高橋遺跡	22	1 F11フ	高杯	杯部	C-f	注記なし	だい	なし						○	○			
168	高橋遺跡	23	1 F11フ	高杯	脚部	A-c	Y1,78-811T上	橙	なし						○				大型白色○
169	高橋遺跡	24	1 F11フ	高杯	脚部	C-a	Y1,73,8 T11,1号,上	にぶい黄	なし						△				光る
170	高橋遺跡	25	1 F11フ	小型壺	胴部	A-j	Y1,73,8 T11,1上	赤褐	なし						○				
171	高橋遺跡	26	93C14号	高杯	脚部	C-f	Y1N,14E中~下,1015	明黄褐	なし										褐色しみ
172	高橋遺跡	27	93C14号	高杯	脚部	C-d	Y1N,14E中~下,1015,3分層	明黄褐	なし										
173	高橋遺跡	28	93C14号	高杯	脚部	C-n	Y1N,14E中,3,977	橙	有										大型白色○
174	高橋遺跡	29	93C14号	甕	口縁	C-l	Y1N,14E中,100,986	にぶい黄褐	有	○					△				
175	神明遺跡	30	SB21 3	高杯	脚部	C-o	00F2-4 075,SB213, 081,390	浅黄緑	なし						△	○	○		断面マール
176	神明遺跡	31	SB21 3	台付甕	脚部	C-i	00F2-4 075,SB213, 081,390	にぶい黄	なし										大型白色○
177	神明遺跡	32	SB21 3	二重口縁壺	口縁	C-e	00F2-4 075,SB213, 081,390	灰白	なし						△				
178	神明遺跡	33	SB21 3	小型壺	底部	A-a	00F2-4 075,SB213, 081,390	淡黄	有										
179	神明遺跡	34	SB02	高杯	杯部	C-p	(0F2-1-040)	橙	なし						△	○			
180	神明遺跡	35	SB02	甕	口縁	B-c	(0F2-1-047)	浅黄緑	やや有り	△					○				褐色しみ、厚さが薄い
181	神明遺跡	36	SB02	高杯	脚部	C-d	(0F2-1-045)	にぶい黄	有					金色△	○				大型白色○
182	神明遺跡	37	SB02	小型壺	胴部	C-c	(0F2-1-045,2分層)	にぶい黄	やや有り	△					△				かなり薄い
183	神明遺跡	38	SB02	高杯	脚部	A-h	(0F2-1-043)	淡黄	なし						△				
184	神明遺跡	39	SB02	台付甕	脚部	A-i	(0F2-1-042)	浅黄緑	なし								○	○	
185	小針遺跡	1	A層層 (古墳)	高杯?	杯部?	C-b	KBSHLA,奥堀1,950830	橙	なし					金色○	○	△			
186	小針遺跡	2	A層層 (古墳)	高杯	脚部	C-f	KBSHLA,奥堀1,950830	だい	なし	△					○				
187	高木遺跡	3	43次調査区画SI-48	高杯?	杯部?	C-a	TGV,SI487,F,850816	にぶい黄	なし						△	△			薄い
188	高木遺跡	4	43次調査区画SI-48	高杯?	杯部	C-f	TGV,SI48A,1層,850510	にぶい黄	なし						△	△			薄い
189	高木遺跡	5	43次調査区画SI-48	高杯?	脚部	C-a	TGV,SI48,IV,No.8504	橙	有										
190	高木遺跡	6	43次調査区画SI-48	高杯?	脚部	A-b	TGV,SI48A,1層,850510	だい	なし	△					△				
191	松崎八反田遺跡	1	SZ01上層	壺		C-q	74	赤褐	なし					金色△	○	△			
192	若宮西遺跡	2	SZ01上層	高杯		C-s	No.なし	橙	なし			△			△				薄い
193	若宮西遺跡	3	SB02	高杯		C-q	19	明赤褐	なし						△	△	△		
194	若宮西遺跡																		

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類した(菱田ほか、1993)。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子(微化石類)も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

#### [放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊性珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

#### [骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

#### [珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 $\mu\text{m}$ 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石(海水種)・珪藻化石(汽水種)・珪藻化石(淡水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

#### [植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約

10～50 $\mu\text{m}$ 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や垂鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

#### [胞子化石]

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30 $\mu\text{m}$ 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壤中にも含まれる。

#### [石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類(雲母)は、黄色などの細粒雲母類が含まれる石英または長石類である。

#### [長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと累帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶(微文象構造という)である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(斑晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO<sub>2</sub> 2%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

#### [雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開(規則正しい割れ目)にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が

多い。カコウ岩などのSiO<sub>2</sub> 2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

#### [輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石(主に紫蘇輝石)は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO<sub>2</sub> 2%が少ない深成岩、SiO<sub>2</sub> 2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO<sub>2</sub> 2%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO<sub>2</sub> 2%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

#### [角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO<sub>2</sub> 2%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

#### [ガラス・軽石型ガラス]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型ガラス)などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。

#### [斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶(鉱物の結晶)状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い

#### [凝灰岩質]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物などから構成され、非晶質でモザイクな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

#### [複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類(含雲母類)、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類(含輝石類)、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類(角閃石類)とした。

#### [複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒から細粒まで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類(等粒)として分類した。この複合石英類(等粒)は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

#### [砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

#### [不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

### 3. 各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(図11)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

#### [豊田市本川遺跡98A]

No.1: 60~600 μmが多い(最大粒径1.0mm)。石

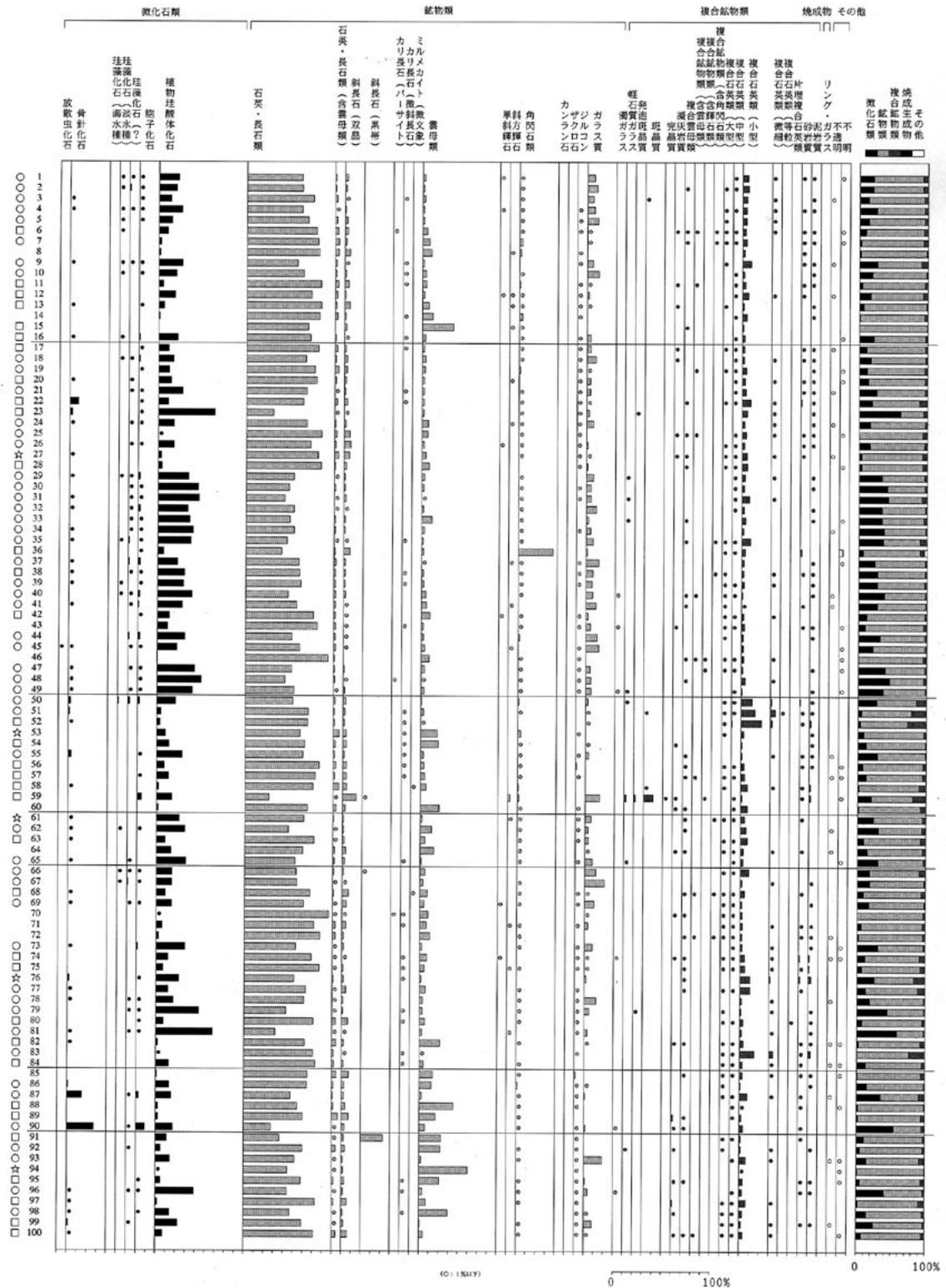


図 11 土器胎土中の粒子組成図 (全分類群を基数とした百分率で表示)

[粘土の区分 (試料番号左)]

- ☆ : 海水成粘土 (海水種珪藻化石などの出現)
- : 淡水成粘土 (淡水成珪藻化石などの出現)
- : 水成粘土 (不明種珪藻化石および骨針化石の出現)
- 無印 : 微化石類を含まない

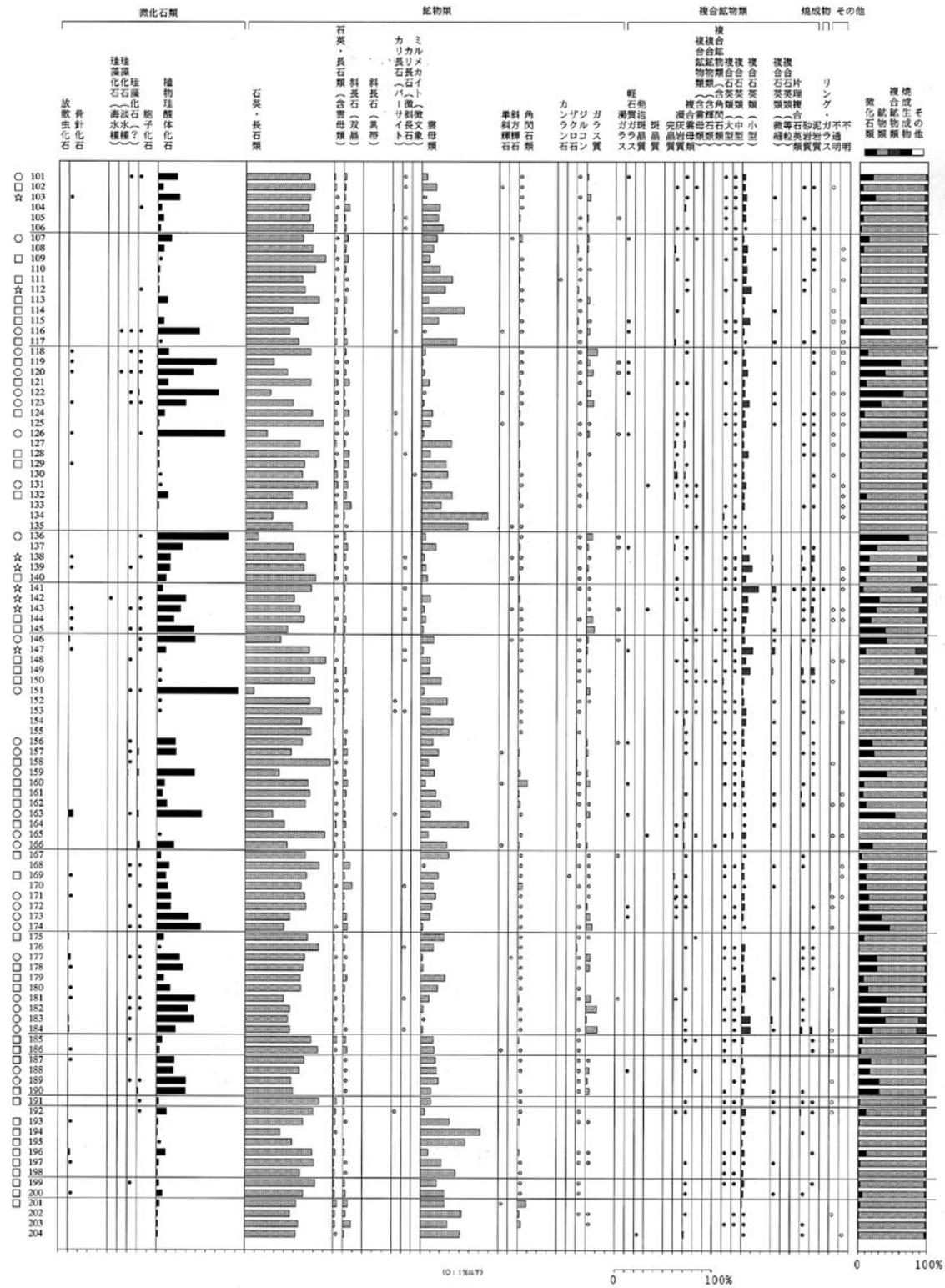


図 12 土器胎土および粘土中の粒子組成図 (全分類群を基数とした百分率で表示)

[粘土の区分 (試料番号左)]

☆: 海水成粘土 (海水種珪藻化石などの出現)

○: 淡水成粘土 (淡水成珪藻化石などの出現)

□: 水成粘土 (不明種珪藻化石および骨針化石の出現)

無印: 微化石類を含まない

英・長石類》ガラス質)斜長石(双晶)、[複合石英類]、ジルコン多い、角閃石類、雲母類、珪藻化石(沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia praeurupta* var. *bidens*、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 2: 30 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 600  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類》ガラス質)斜長石(双晶)、[複合石英類]、ジルコン多い、角閃石類、珪藻化石(湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Melosira* 属、*Rhopalodia* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い、稲類

No. 3: 30 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 800  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類》ガラス質)斜長石(双晶)、ジルコン多い、角閃石類、珪藻化石(淡水種 *Melosira* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い、植物珪酸体化石集合

No. 4: 30 ~ 200  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 650  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)ガラス質)斜長石(双晶)、ジルコン多い、珪藻化石(沼沢湿地付着生指標種群 *Stauroneis phoenicenteron*、淡水種 *Rhopalodia gibberula*、*Diploneis yatukaensis*、*Pinnularia* 属、*Melosira* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、不明種、小型珪藻化石密集)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産(含ヨシ属含む)

No. 5: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.1mm)。石英・長石類)ガラス質)斜長石(双晶)、[複合石英類、複合石英類(微細)]、ジルコン、斜方輝石、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 6: 60 ~ 900  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.6mm)。石英・長石類)複合石英類)斜長石(双晶)、カリ長石(パースイト)、複合石英類(微細)、ジルコン多い、単斜輝石、角閃石類、雲母類、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 7: 50 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.9mm)。石英・長石類)複合石英類)斜長石(双晶)、複合石英類(微細)、角閃石類多産、ジルコン多い、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属)、植物珪酸体化石少ない、暗赤色粒子目立つ

No. 8: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.8mm)。石英・

長石類)複合石英類)斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、雲母類、ジルコン、ザクロ石類、植物珪酸体化石少ない

No. 9: 30 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 400  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)ガラス質)斜長石(双晶)、雲母類、ジルコン多産、角閃石類、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Melosira* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 10: 50 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 650  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)ガラス質)斜長石(双晶)、ジルコン多い、角閃石類、雲母類、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Melosira* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 11: 50 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.4mm)。石英・長石類)複合石英類)斜長石(双晶)、単斜輝石、ジルコン多産、角閃石類、雲母類、[凝灰岩質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 12: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.1mm)。石英・長石類)複合石英類、斜長石(双晶)、ジルコン多い、ガラス質、角閃石類、単斜輝石、雲母類、[凝灰岩質]、珪藻化石(*Nitzschia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 13: 80 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類)複合石英類)斜長石(双晶)、雲母類、斜方輝石、ジルコン多い、角閃石類、[ガラス質]、珪藻化石(付着)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 14: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.3mm)。石英・長石類)雲母類(微細)複合石英類、斜長石(双晶)、ジルコン多い、角閃石類多い、斜方輝石、[複合石英類(微細)]、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 15: 50 ~ 230  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1mm)。石英・長石類)雲母類)斜長石(双晶)、ジルコン多い、単斜輝石、角閃石類、[複合石英類(微細)、凝灰岩質]、珪藻化石(不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 16: 40 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 900  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)ガラス質)複合石英類(輝石類)、斜長石(双晶)、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、ジルコン多い、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

【豊田市 本川遺跡 98B2】

No. 17: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 900  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)ガラス質、斜長石(双晶)、単斜輝石、ジルコン

多い、斜方輝石、角閃石類、珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 18: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 750  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類）ガラス質）斜長石（双晶）、複合石英類、ジルコン多い、角閃石類、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Gomphonema acuminatum*、湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia formica*、*Pinnularia cardinaliculus*、*Melosira* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、不明種多産）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い（集合塊）

No. 19: 40 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.9mm）。石英・長石類）複合石英類、雲母類、斜長石（双晶）、カリ長石（ $\text{H}^+$ -サイト）、ジルコン多い、角閃石類、斜方輝石、[ガラス質]、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 20: 70 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.3mm）。石英・長石類）ガラス質）複合石英類、複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ジルコン多い、斜方輝石、角閃石類、珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 21: 30 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 800  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類）ガラス質）斜長石（双晶）、ジルコン多い、斜方輝石、角閃石類、[複合石英類（微細）、複合石英類]、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Gomphonema acuminatum*、*Eunotia praerupta* var. *bidens*、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Melosira* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 22: 70 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.4mm）。石英・長石類）複合石英類、斜長石（双晶）、ジルコン多い、角閃石類、[複合石英類（微細）、ガラス質]、珪藻化石（不明種）、骨針化石多産、植物珪酸体化石少ない

No. 23: 40 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 550  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類）ガラス質）カリ長石（ $\text{H}^+$ -サイト）、ジルコン多い、角閃石類、珪藻化石（不明種）、胞子化石、骨針化石多産、植物珪酸体化石多産

No. 24: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 750  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類）ガラス質）複合石英類、斜長石（双晶）、ジルコン多産、斜方輝石、角閃石類、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、淡水種 *Melosira* 属、

*Diploneis* 属、*Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 25: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.1mm）。石英・長石類）複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、雲母類、ジルコン多い、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 26: 150 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 2.6mm）。石英・長石類）複合石英類）斜長石（双晶）、カリ長石（ $\text{H}^+$ -サイト）、ジルコン多い、角閃石類、ガラス質、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 27: 70 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1mm）。石英・長石類）複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン多い、雲母類、珪藻化石（内湾指標種群 *Melosira sulcata*、海水種 *Grammatophora macilenta*、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 28: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.5mm）。石英・長石類）複合石英類、斜長石（双晶）、ジルコン多い、雲母類、ガラス質、角閃石類、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 29: 40 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 700  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類）ガラス質）斜長石（双晶）、ジルコン多い、角閃石類、斜方輝石、珪藻化石（海水種 *Nitzschia* 属、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、*Cymbella* 属、*Melosira* 属、*Stauroneis* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 30: 60 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 650  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類）ガラス質、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン多い、[複合石英類]、珪藻化石（淡水種 *Cymbella* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 31: 30 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.3mm）。石英・長石類）ガラス質）斜長石（双晶）、ジルコン多い、角閃石類、[複合石英類、複合石英類（微細）]、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Melosira* 属、*Cymbella* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（含ヨシ属）

No. 32: 70 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.1mm）。石英・長石類）ガラス質）複合石英類、斜長石（双晶）、ジルコン多い、角閃石類、斜方輝石、[凝灰岩質]、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Cymbella aspera*、淡水種 *Rhopalodia gibberla*、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、

Diploneis 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多産 (イネ類珩酸体)

No. 33: 50 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 600  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石 (双晶)、雲母類、ジルコン多い、角閃石類、斜方輝石、珩藻化石 (汽水種 *Achnanthes brevipes*、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Pinnularia* 属、*Melosira* 属、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多産 (含ヨシ属)

No. 34: 40 ~ 200  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.3mm)。石英・長石類) ガラス質) 斜長石 (双晶)、ジルコン多い、斜方輝石、角閃石類、[複合石英類 (微細)]、珩藻化石 (淡水種 *Eunotia biareofera*、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多産 (含ヨシ属)

No. 35: 60 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 900  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 斜長石 (双晶)、斜方輝石、角閃石類、ジルコン多い、[複合石英類 (微細)]、珩藻化石 (淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、*Epithemia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多産

No. 36: 70 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.5mm)。石英・長石類) 角閃石類) 複合石英類) 雲母類、斜長石 (双晶)、ガラス質、ジルコン、単斜輝石、珩藻化石 (*Diploneis* 属)、孢子化石、植物珩酸体化石少ない (含ヨシ属)

No. 37: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 750  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、カリ長石 (パーサイト)、斜長石 (双晶)、雲母類、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、珩藻化石 (淡水種 *Eunotia biareofera*、*Rhopalodia gibberula*、*Diploneis finnica*、*Eunotia* 属、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多い

No. 38: 60 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.6mm)。石英・長石類) ガラス質) 斜長石 (双晶)、ジルコン多い、角閃石類、[複合石英類]、珩藻化石 (不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多産

No. 39: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 900  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石 (双晶)、雲母類、角閃石類、ジルコン多い、珩藻化石 (淡水種 *Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多い (含ヨシ属)

No. 40: 50 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.6mm)。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石 (双晶)、雲母類、単斜輝石、ジルコン多い、角閃石類、珩藻化石 (淡水種 *Eunotia biareofera*、*Rhopalodia gibberula*、*Eunotia* 属、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、*Stephanodiscus* 属、不明種多い)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多産 (含ヨシ属、塊)

No. 41: 30 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 750  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石 (双晶)、角閃石類、斜方輝石、雲母類、ジルコン多い、[複合石英類 (微細)]、珩藻化石 (淡水種 *Rhopalodia gibberula*、*Eunotia* 属、*Melosira* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、不明種多い)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多産

No. 42: 70 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 2.3mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石 (双晶)、雲母類、ジルコン多い、角閃石類、ガラス質、単斜輝石、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石少ない (含ヨシ属)

No. 43: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.1mm)。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、角閃石類、ジルコン多い、[凝灰岩質、複合石英類 (微細)]、植物珩酸体化石少ない

No. 44: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 750  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石 (双晶)、斜方輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン多い、放散虫化石 (1 個体)、珩藻化石 (沼沢湿地付着生指標種群 *Pinnularia acrosphaeria*、淡水種 *Epithemia* 属、*Rhopalodia* 属、*Eunotia* 属、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多産

No. 45: 40 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.3mm)。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石 (双晶)、ジルコン多い、斜方輝石、角閃石類、雲母類、放散虫化石 (2 個体)、珩藻化石 (淡水種 *Eunotia biareofera*、*Melosira* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、孢子化石、植物珩酸体化石多い

No. 46: 80 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.1mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石 (双晶)、斜方輝石、ジルコン多い、雲母類、角閃石類

No. 47: 60 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 700  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質、単斜輝石、角閃石類、斜方輝石、雲母類、ジルコン多い、斜長石 (双晶)、[複合石英類、複合石英類 (微細)]、珩藻化石 (淡水種 *Diploneis yatukaensis*、

Pinnularia 属、Rhopalodia 属、Cymbella 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 48: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) ガラス質、複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、ジルコン多い、珪藻化石(淡水種 Eunotia biareofera、Pinnularia 属、Cymbella 属、Diploneis 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 49: 40 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.4mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、ジルコン多い、角閃石類、ガラス質、雲母類、斜方輝石、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 Melosira 属、Pinnularia 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

【豊田市本川遺跡 98B3】

No. 50: 30 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類) 複合石英類(微細) 複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン、ガラス質、珪藻化石(外洋指標種群 Thalassionema nitzschioides、海水種 Coscinodiscus 属/Thalassiosira 属、Denticulopsis 属、内湾指標種群 Cyclotella stylonum、海水泥質干潟指標種群 Diploneis smithii、海水砂質干潟指標種群 Rhaphoneis surirella、湖沼指標種群 Melosira granulata、淡水種 Fragilaria construens、Fragilaria pinnata、Synedra ulna、Pinnularia 属、Eunotia 属、不明種、陸域指標種群 Melosira roeseana)、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 51: 30 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) 複合石英類(微細) 複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、ガラス質、珪藻化石(湖沼指標種群 Melosira granulata)、骨針化石多い、植物珪酸体化石少ない

No. 52: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) 複合石英類(微細) 複合石英類、カリ長石(ハート)、斜長石(双晶)、角閃石類、砂岩質、斜方輝石、ジルコン多い、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 53: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.3mm)。石英・長石類) 雲母類) 角閃石類) 斜長石(双晶)、複合石英類、ジルコン多産、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(海水種 Coscinodiscus 属/Thalassiosira 属、不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 54: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・

長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類(微細)、ガラス質]、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 55: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.8mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、ガラス質、角閃石類、ジルコン多産、珪藻化石(淡水種 Pinnularia 属、不明種)、骨針化石多産、植物珪酸体化石多い

No. 56: 60 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、雲母類、単斜輝石、ジルコン多産、珪藻化石(陸域指標種群 Hantzschia amphioxys)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 57: 70 ~ 750  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、ジルコン多産、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 58: 50 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.2mm)。石英・長石類) 複合石英類(微細)、複合石英類、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、斜方輝石、ジルコン多産、珪藻化石(付着陸域指標種群 Hantzschia amphioxys)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 59: 30 ~ 750  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.1mm)。斜長石(双晶) 斜長石(累帯) 斑晶質) ガラス質) 石英・長石類) 角閃石類) 単斜輝石、ジルコン、雲母類、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 60: 50 ~ 190  $\mu\text{m}$ と大型粒子が多い(最大粒径 2.4mm)。石英・長石類) 雲母類) 複合石英類) 複合雲母類、ジルコン多い、角閃石類、植物珪酸体化石少ない

【豊田市 本川遺跡 98A】

No. 61: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) ガラス質) 斜長石(双晶)、角閃石類、斜方輝石、ジルコン多い、[複合石英類]、放散虫化石(1 個体)、骨針化石、植物珪酸体化石多い

No. 62: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、ジルコン多い、珪藻化石(淡水種 Pinnularia 属、Cymbella 属、Epithemia 属、Surirella 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い(含ヨシ属)

No. 63: 70 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2mm)。石英・

長石類) ガラス質、複合石英類、斜長石 (双晶)、角閃石類、雲母類、斜方輝石、ジルコン多産、珪藻化石 (不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石多産

No. 64: 60 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.5mm)。石英・長石類) 複合石英類) 雲母類、斜長石 (双晶)、カリ長石 (ハート)、ジルコン多産、角閃石類、[複合石英類 (微細)、ガラス質]、植物珪酸体化石多産

No. 65: 50 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 4mm)。石英・長石類) 複合石英類) ガラス質) 斜長石 (双晶)、単斜輝石、ジルコン、角閃石類、[複合石英類 (微細)]、珪藻化石 (淡水種 *Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

【豊田市本川遺跡 98B2】

No. 66: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 850  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石 (双晶)、単斜輝石、ジルコン多産、珪藻化石 (淡水種 *Rhopalodia gibberula*、*Cymbella* 属、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い (含ヨシ属)

No. 67: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 950  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類) 斜長石 (双晶)、単斜輝石、ジルコン多産、角閃石類、[複合石英類 (微細)]、珪藻化石 (湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Rhopalodia gibberula*、*Melosira* 属、*Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い (含ヨシ属)

No. 68: 30 ~ 650  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.9mm)。石英・長石類) 複合石英類) 複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、角閃石類、雲母類、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン多産、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 69: 40 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 800  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、斜長石 (双晶)、雲母類、角閃石類、ジルコン多産、斜方輝石、珪藻化石 (海水種 *Coscinodiscus* 属 / *Thalassiosira* 属、淡水種 *Diploneis* 属、*Melosira* 属、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 70: 140  $\mu\text{m}$  ~ 1.2mm が多い (最大粒径 2.5mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石 (双晶)、雲母類、斜方輝石、単斜輝石、ジルコン多い、[胞子化石]

No. 71: 70 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.8mm)。石英・長石類) 複合石英類) 複合石英類 (微細)、斜長石 (双晶)、カリ長石 (ハート)、角閃石類、雲母類、斜方輝石、単斜輝石、ジルコン多産、ガラス質、植物珪酸体化石少ない

No. 72: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 2.6mm)。石英・長石類) 複合石英類、雲母類、角閃石類多い、単斜輝石、ジルコン多い、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 73: 30 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 850  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) ガラス質) 斜長石 (双晶)、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、[複合石英類、複合石英類 (微細)]、珪藻化石 (淡水種 *Diploneis finnica*、*Melosira* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産 (含ヨシ属)

No. 74: 50 ~ 450  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) 複合石英類 (微細) 複合石英類、斜長石 (双晶)、単斜輝石、雲母類、ジルコン多い、ガラス質、[片理複合石英類]、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 75: 50 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) 複合石英類 (微細)、複合石英類、雲母類、斜長石 (双晶)、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、ガラス質、珪藻化石 (不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 76: 30 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 650  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類) 複合石英類 (微細) 斜長石 (双晶)、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、ガラス質、[複合石英類]、珪藻化石 (海水種 *Archonodiscus ehrenbergii*、*Coscinodiscus* 属 / *Thalassiosira* 属、不明種)、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石多い (含ヨシ属)

No. 77: 50 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.3mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石 (双晶)、雲母類、角閃石類多い、斜方輝石、ジルコン多産、珪藻化石 (湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 78: 50 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1mm)。石英・長石類) ガラス質) 複合石英類、複合石英類 (微細)、雲母類、角閃石類、ガラス質、単斜輝石、斜長石 (双晶)、斜方輝石、ジルコン多い、珪藻化石 (淡水種 *Diploneis* 属、*Pinnularia* 属、*Melosira* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い (含ヨシ属)

No. 79: 50 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多い (最大粒径 1.3mm)。石英・長石類) 複合石英類、ガラス質 (含軽石型)、斜長石 (双晶)、

角閃石類、ジルコン多産、〔複合石英類（微細）〕、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、*Eunotia* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 80: 60 ~ 750  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 2.8mm）。石英・長石類〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン多産、単斜輝石、斜方輝石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 81: 40 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 2.8mm）。石英・長石類〉複合石英類、ガラス質、雲母類、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Diploneis* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産（含ヨシ属）

No. 82: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.6mm）。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、斜方輝石、ジルコン多産、〔複合石英類（微細）〕、斑晶質、ガラス質、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 83: 50 ~ 900  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 2.1mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合石英類、カリ長石（ハートサイト）、斜方輝石、ジルコン多い、〔ガラス質〕、珪藻化石（淡水種 *Cocconeis placentula*、付着陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*）、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 84: 60 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.2mm）。石英・長石類〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、斜方輝石、ジルコン多い、雲母類、〔複合石英類（微細）〕、骨針化石、植物珪酸体化石多い

【豊田市本川遺跡 98C】

No. 85: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.1mm）。石英・長石類〉複合石英類、斜長石（双晶）、雲母類、角閃石類、ジルコン多産、〔複合石英類（微細）〕、植物珪酸体化石少ない

No. 86: 40 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.2mm）。石英・長石類〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類多い、単斜輝石、ジルコン多産、雲母類、〔複合石英類（微細）〕、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*）、胞子化石、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 87: 40 ~ 650  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 2.7mm）。石英・長石類〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、斜方輝石、ガラス質、単斜輝石、ジルコン多産、〔複合石英類（微細）〕、

雲母類、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Pinnularia viridis*、淡水種 *Eunotia biareofera*、不明種）、胞子化石、骨針化石極多産、植物珪酸体化石多い

No. 88: 60 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 850  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類、斜長石（双晶）、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、ジルコン多い、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 89: 50 ~ 3500  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.2mm）。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多産、珪藻化石（不明種、付着）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 90: 30 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 700  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類〉雲母類〉斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン多い、ガラス質、〔複合石英類（微細）〕、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Nitzschia* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

【豊田市市川原遺跡 97Bc】

No. 91: 70 ~ 900  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.8mm）。石英・長石類〉複合石英類〉複合雲母類、斜長石（双晶）、雲母類、ジルコン多い、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 92: 70 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.6mm）。石英・長石類〉複合石英類、斜長石（双晶）、角閃石類、単斜輝石、雲母類、斜方輝石、ジルコン多産、〔複合石英類（微細）〕、珪藻化石（淡水種 *Synedra ulna*）、植物珪酸体化石少ない

No. 93: 50 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 850  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類〉ガラス質〉斜長石（双晶）、単斜輝石、ジルコン多産、雲母類、〔複合石英類（微細）〕、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*、不明種）、胞子化石、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 94: 20 ~ 100  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 900  $\mu\text{m}$ ）。石英・長石類〉雲母類〉斜長石（双晶）、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン多産、〔複合石英類〕、珪藻化石（汽水種 *Achnanthes brevipes*、不明種）、植物珪酸体化石少ない

No. 95: 60 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い（最大粒径 1.3mm）。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類、斜長石（双晶）、ガラス質、角閃石類、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 96: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.4mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、ガラス質、斜方輝石、ジルコン多い、珪藻化石(淡水種 *Eunotia biareofera*)、胞子化石、骨針化石多産、植物珪酸体化石多産

No. 97: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、ジルコン多い、角閃石類、斜方輝石、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 98: 100  $\mu\text{m}$  ~ 1.0mm が多い(最大粒径 2.6mm)。石英・長石類) 複合石英類) 斜長石(双晶)、雲母類、紋象岩、角閃石類、ジルコン多産、[ガラス質]、珪藻化石(汽水種 *Achnanthes brevipes*、淡水種 *Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 99: 70 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類) 複合石英類) 斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ガラス質、ジルコン多産、雲母類、[複合石英類(微細)]、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 100: 70 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン多い、[複合石英類(微細)、ガラス質]、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

【豊田市水入遺跡 99B】

No. 101: 60 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.6mm)。石英・長石類) 複合石英類、複合石英類(微細)、斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、ジルコン多産、単斜輝石、珪藻化石(淡水種 *Rhopalodia gibberula*、*Eunotia* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 102: 70 ~ 750  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.2mm)。石英・長石類) 雲母類) 複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多産、[複合石英類(微細)、ガラス質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 103: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1mm)。石英・長石類) ガラス質、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石多産

No. 104: 50 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.2mm)。石英・長石類) 雲母類) 複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ザクロ石類、単斜輝石、ジルコン多い、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*)、骨針

化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 105: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) 雲母類) 複合石英類、角閃石類、単斜輝石、ガラス質、斜長石(双晶) ジルコン多産、珪藻化石(陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*)、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 106: 40 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) 雲母類) 斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類、複合石英類(微細)、片理複合石英類]、珪藻化石(陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*)、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

【豊田市水入遺跡 99A】

No. 107: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2mm)。石英・長石類) 複合石英類、雲母類、角閃石類、ガラス質、ジルコン多い、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(淡水種 *Gomphonema* 属、付着集合 *Eunotia* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 108: 50 ~ 750  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類) 複合石英類、角閃石類、ジルコン多産、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 109: 50 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.1mm)。石英・長石類) 複合石英類、角閃石類、紋象岩、ジルコン多い、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(不明種、砂粒付着集合 *Cocconeis placentula*)、植物珪酸体化石少ない

No. 110: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類) 雲母類、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類、複合石英類(微細)]、植物珪酸体化石少ない

No. 111: 40 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類) 雲母類、斜方輝石、角閃石類、角閃石類、ジルコン多産、斜長石(双晶)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 112: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.2mm)。石英・長石類) 複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類多い、角閃石類、ジルコン多産、珪藻化石(汽水種 *Achnanthes brevipes*、不明種、陸域指標種群 *Pinnularia borealis*)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 113: 40 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類) 雲母類、斜長石(双晶)、ジルコン多い、角閃石類、斜方輝石、ガラス質、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 114: 50 ~ 200  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類〉雲母類〉単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、斜長石(双晶)、[紋象岩、凝灰岩類]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 115: 50 ~ 7500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.5mm)。石英・長石類〉複合石英類〉斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、雲母類、ジルコン多産、[複合石英類(微細)、凝灰岩質、ガラス質]、珪藻化石(不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 116: 100  $\mu\text{m}$  ~ 1.2mm が多い(最大粒径 3.1mm)。石英・長石類〉複合石英類〉斜長石(双晶)、ガラス質(含軽石型)、角閃石類、雲母類、単斜輝石、ジルコン多い、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia divergens*、*Synedra ulna*、*Eunotia* 属、*Melosira* 属、*Surirella* 属、*Pinnularia* 属、不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 117: 70 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類(微細)、凝灰岩質]、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

【豊田市水入遺跡 98C2】

No. 118: 50 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 900  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類〉ガラス質、複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、斜方輝石、ジルコン多産、珪藻化石(淡水種 *Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 119: 40 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類〉複合石英類、斜長石(双晶)、カリ長石(ハート)、角閃石類、ガラス質(含軽石型)、斜方輝石、ジルコン多い、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 120: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 600  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類〉斜長石(双晶)、ガラス質(含軽石型)、角閃石類、斜方輝石、雲母類、ジルコン、[複合石英類]、珪藻化石(淡水種 *Eunotia biareofera*、*Diploneis* 属、*Pinnularia* 属、*Melosira* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 121: 50 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類〉複合石英類、カリ長石(ハート)、斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多産、[複合石英類(微細)]、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 122: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.1mm)。石英・長石類〉複合石英類、斜長石(双晶)、ガラス質、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、不明種、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 123: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 650  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類〉複合石英類、斜長石(双晶)、ガラス質、角閃石類、ジルコン多い、珪藻化石(淡水種 *Cymbella* 属、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属、*Melosira* 属、不明種、陸域指標種群 *Pinnularia borealis*)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 124: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.3mm)。石英・長石類〉複合石英類、雲母類、斜長石(双晶)、角閃石類多い、斜方輝石、ジルコン多い、[凝灰岩質]、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 125: 50 ~ 750  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.7mm)。石英・長石類〉複合石英類〉斜長石(双晶)、雲母類、カリ長石(ハート)、斜方輝石、ジルコン多産、[ガラス質]、珪藻化石(付着 *Neidium hitchcockii*)、植物珪酸体化石少ない

No. 126: 40 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多く微細(最大粒径 950  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類〉斜長石(双晶)、角閃石類、ガラス質、雲母類、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、*Synedra* 属、不明種)、胞子化石、骨針化石、植物珪酸体化石多産

No. 127: 50 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類〉斜長石(双晶)、斜方輝石、角閃石類多い、単斜輝石、ジルコン多産、[ガラス質]、植物珪酸体化石少ない

No. 128: 50 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類〉斜長石(双晶)、雲母類、ジルコン多い、[複合石英類(微細)、複合石英類、ガラス質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 129: 30 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 700  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類(微細)、ガラス質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 130: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 3.8mm)。石英・長石類〉雲母類〉複合石英類、ジルコン多産、斜方輝石、角閃石類、[複合石英類(微細)]、胞子化石、植物珪酸体

化石少ない

No. 131: 70 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.8mm)。石英・長石類)複合石英類)斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、ジルコン多い、珪藻化石(淡水種 *Cymbella* 属)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 132: 100  $\mu\text{m}$  ~ 1.2mm が多い(最大粒径 2.1mm)。石英・長石類)雲母類)複合石英類)斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ガラス質、ジルコン多産、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 133: 60 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多い、非常に微細(最大粒径 650  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)雲母類)斜長石(双晶)、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類、複合石英類(微細)]、植物珪酸体化石少ない

No. 134: 60 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 3.1mm)。石英・長石類)雲母類)複合石英類)ジルコン多産、胞子化石

No. 135: 70 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2mm)。石英・長石類)雲母類)複合石英類)斜長石(双晶)、単斜輝石、ジルコン多産、角閃石類、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

【豊田市郷上遺跡 97A】

No. 136: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 750  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、ガラス質、斜方輝石、ジルコン多い、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 137: 600 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.4mm)。石英・長石類)雲母類)複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ガラス質(含軽石型)、ジルコン多い、植物珪酸体化石多い

No. 138: 30 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 900  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)複合石英類(微細)複合石英類)斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、雲母類、[片理複合石英類、凝灰岩質]、放散虫化石(1 個体)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 139: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)複合石英類、雲母類、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多産、斜長石(双晶)、ガラス質、放散虫化石?(1 個体)、珪藻化石(海水不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 140: 70  $\mu\text{m}$  ~ 1.3mm が多い(最大粒径 3.9mm)。

石英・長石類)複合石英類)複合石英類(微細)カリ長石(ハート)、斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン多い、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

【豊田市郷上遺跡 98B】

No. 141: 50 ~ 750  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.4mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)斜長石(双晶)、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン、[複合石英類、片理複合石英類]、放散虫化石(1 個体)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 142: 40 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.8mm)。石英・長石類)角閃石類、単斜輝石、雲母類、ジルコン、[複合石英類、複合石英類(微細)、ガラス質]、珪藻化石(海水種 *Arachonoidiscus ehrenbergii*、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 143: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 850  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類)複合石英類、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、[複合石英類(微細)、ガラス質]、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 144: 50 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類)複合石英類、斜長石(双晶)、カリ長石(ハート)、角閃石類、ガラス質、斜方輝石、ジルコン多い、[複合石英類(微細)]、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 145: 80 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類)複合石英類)斜長石(双晶)、角閃石類、ガラス質、単斜輝石、雲母類、ジルコン多産、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

【豊田市梅坪遺跡】

No. 146: 50 ~ 200  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.9mm)。石英・長石類)複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、単斜輝石、角閃石類、ジルコン、珪藻化石(淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 147: 60 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.4mm)。石英・長石類)複合石英類)複合石英類(微細)、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ガラス質、ジルコン、放散虫化石(1 個体)、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 148: 60 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2mm)。石英・

長石類》複合石英類、雲母類、角閃石類、ジルコン多い、骨針化石

No. 149:70 ~ 800  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類》複合石英類》斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、[複合石英類(微細)、ガラス質]、珪藻化石(不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 150:90  $\mu\text{m}$  ~ 1.0mm が多い(最大粒径 3mm)。石英・長石類》複合石英類》カリ長石(パーサイト)、角閃石類、雲母類、斜方輝石、複合雲母類、ジルコン多い、珪藻化石(不明種)、植物珪酸体化石少ない

No. 151:50 ~ 130  $\mu\text{m}$  と大型が多い(最大粒径 2.6mm)。石英・長石類》複合石英類》斜方輝石、単斜輝石、ガラス質、ジルコン、珪藻化石(淡水種 *Synedra ulna*、*Pinnularia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石極多産(含ヨシ属)

No. 152:50 ~ 200  $\mu\text{m}$  と大型が多い(最大粒径 2.4mm)。石英・長石類》複合石英類》雲母類、カリ長石(パーサイト)、角閃石類、ジルコン多い、[ガラス質]、珪藻化石(付着密集 *Cocconeis placentula*)、植物珪酸体化石少ない

No. 153:30 ~ 250  $\mu\text{m}$  と大型が多い(最大粒径 2.2mm)。石英・長石類》複合石英類》雲母類、カリ長石(パーサイト)、単斜輝石、ジルコン、複合鉱物類(角閃石類)、角閃石類、植物珪酸体化石極少ない

No. 154:50 ~ 400  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 2.1mm)。石英・長石類》複合石英類、雲母類、斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多い、珪藻化石(密集 *Eunotia* 属)、イネの類珪酸体化石

No. 155:60 ~ 750  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類》複合石英類》斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類(微細)]、植物珪酸体化石少ない

No. 156:40 ~ 170  $\mu\text{m}$  と大型が多い(最大粒径 1.7mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類》斜長石(双晶)、ガラス質、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 157:40 ~ 250  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 2.5mm)。石英・長石類》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類多産、単斜輝石、ジルコン多い、ガラス質、[複合石英類(微細)]、

珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属、不明種多産)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 158:60 ~ 700  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 1.7mm)。石英・長石類》複合石英類》カリ長石(パーサイト)、ジルコン、骨針化石

No. 159:60 ~ 250  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 2.5mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類》斜長石(双晶)、ガラス質、角閃石類多産、単斜輝石、ジルコン多い、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(淡水種 *Eunotia biareofera*、*Synedra ulana*、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 160:60 ~ 300  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類》角閃石類》複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、ガラス質、単斜輝石、ジルコン多産、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 161:60 ~ 300  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 1.3mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、斜方輝石、ジルコン多産、[複合石英類(微細)]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 162:50 ~ 250  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 1.3mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類多産、ジルコン多産、[複合石英類(微細)、ガラス質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 163:50 ~ 200  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 800  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類》斜長石(双晶)、雲母類、単斜輝石、ガラス質、角閃石類、ジルコン、[複合石英類]、珪藻化石(湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、不明種)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 164:50 ~ 600  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 1.4mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類》斜長石(双晶)、角閃石類、斜方輝石、ジルコン多産、[凝灰岩質]、骨針化石

No. 165:50 ~ 400  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類》複合石英類》斜長石(双晶)、複合石英類(微細)、雲母類、斜方輝石、ジルコン多産、角閃石類、珪藻化石(淡水種 *Synedra ulna*、砂粒付着)、植物珪酸体化石少ない

No. 166:40 ~ 180  $\mu\text{m}$  が多い(最大粒径 2.9mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ガラス質、ジルコン多い、珪藻化石(淡水種 *Eunotia formica*、*Eunotia* 属、不明種)、胞子化石、植物珪酸体

化石少ない

【豊田市高橋遺跡】

No. 167: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.1mm)。石英・長石類(雲母類)斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多産、[複合石英類、ガラス質]、珪藻化石(不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 168: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類(複合石英類)斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多い、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 169: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.2mm)。石英・長石類(雲母類)複合石英類、斜長石(双晶)、斜方輝石、ガラス質、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多産、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 170: 70 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.3mm)。石英・長石類(雲母類)斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多い、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 171: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.1mm)。石英・長石類(雲母類)複合石英類斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、珪藻化石(淡水種 *Synedra ulana*)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 172: 50 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.1mm)。石英・長石類(雲母類)斜長石(双晶)、斜方輝石、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類、複合石英類(微細)、ガラス質]、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属)、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 173: 70 ~ 700  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1mm)。石英・長石類(複合石英類)斜長石(双晶)、角閃石類、斜方輝石、単斜輝石、ジルコン多い、[ガラス質]、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 174: 70 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1mm)。石英・長石類斜長石(双晶)、ガラス質、角閃石類、単斜輝石、ジルコン、[複合石英類]、珪藻化石(淡水種 *Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

【豊田市神明遺跡】

No. 175: 50 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.4mm)。石英・長石類(雲母類)斜長石(双晶)、ガラス質、角閃石類、ジルコン多い、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 176: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2mm)。石英・長石類(複合石英類、カリ長石(パーサイト)、雲母類、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多産、珪藻化石?、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 177: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.1mm)。石英・長石類(複合石英類、斜長石(双晶)、雲母類、ガラス質、角閃石類、ジルコン多産、珪藻化石(淡水種 *Pinnularia* 属)、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 178: 50 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 750  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、ガラス質、ジルコン多産、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 179: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 900  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類(雲母類)複合石英類、角閃石類、斜長石(双晶)、斜方輝石、ジルコン多産、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 180: 40 ~ 130  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.4mm)。石英・長石類(複合石英類)カリ長石(パーサイト)、角閃石類、斜長石(双晶)、雲母類、単斜輝石、ジルコン多産、[ガラス質]、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 181: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.9mm)。石英・長石類(複合石英類)斜長石(双晶)、雲母類、角閃石類多産、ガラス質、ジルコン多産、珪藻化石(淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、陸域指標種群 *Pinnularia borealis*、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 182: 40 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.8mm)。石英・長石類斜長石(双晶)、複合石英類(微細)、雲母類、角閃石類、ガラス質(軽石型)、ジルコン多産、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 183: 40 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 750  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類(複合石英類(微細)、複合石英類、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、[ガラス質]、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 184: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.4mm)。複

合石英類》複合石英類(微細)複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ガラス質、単斜輝石、ジルコン多産、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

【岡崎市小針遺跡】

No. 185: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、珪藻化石(不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 186: 60 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.1mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

【岡崎市高木遺跡】

No. 187: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ガラス質、ジルコン多産、珪藻化石(付着 *Pinnularia* 属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 188: 50 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.3mm)。石英・長石類》複合石英類》雲母類、複合鉱物類(雲母類)、角閃石類、ガラス質、ジルコン多産、珪藻化石(沼沢湿地付着生指標種群 *Stauroneis phoenicenteron*、淡水種 *Pinnularia* 属、不明種、陸域指標種群 *Pinnularia borealis*)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

No. 189: 60 ~ 250  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 700  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類》雲母類》角閃石類、ジルコン多産、[ガラス質]、珪藻化石(淡水種 *Surirella* 属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

No. 190: 50 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.1mm)。石英・長石類》複合石英類、角閃石類、ガラス質、ジルコン多産、[複合石英類(微細)]、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多い

【西尾市松崎八反田遺跡】

No. 191: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類》雲母類》赤色粒》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類多い、ジルコン多い、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、イネの穎珪酸体化石

No. 192: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.7mm)。石英・長石類》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、[ガラス質]、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

【西尾市若宮西遺跡】

No. 193: 50 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、角閃石類多い、単斜輝石、ジルコン多産、[ガラス質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 194: 50 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1mm)。石英・長石類》雲母類》単斜輝石、角閃石類、ジルコン多産、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 195: 60 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.5mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多い、[複合石英類(微細)、ガラス質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 196: 50 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類》複合石英類、斜長石(双晶)、斜方輝石、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類(微細)、ガラス質]、骨針化石多い、植物珪酸体化石少ない

No. 197: 60 ~ 400  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、[複合石英類(微細)]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 198: 80 ~ 600  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2mm)。石英・長石類》雲母類》斜長石(双晶)、角閃石類多い、単斜輝石、ジルコン多産、[ガラス質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

【西尾市住崎遺跡】

No. 199: 40 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1mm)。石英・長石類》雲母類》斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン多産、[複合石英類、複合石英類(微細)]、珪藻化石(不明種)、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 200: 60 ~ 750  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類、単斜輝石、ジルコン多産、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石少ない

【粘土】

No. 201: 60 ~ 350  $\mu\text{m}$ が多く、粒径が揃っている(最大粒径 750  $\mu\text{m}$ )。石英・長石類》雲母類》角閃石類》斜長石(双晶)、ジルコン多産、単斜輝石、[ガラス質]、骨針化石、植物珪酸体化石少ない

No. 202: 60 ~ 300  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 2.2mm)。石英・長石類》雲母類》複合石英類、単斜輝石、角閃石類、ジル

コン多産、[ガラス質]、植物珪酸体化石少ない

No. 203: 50 ~ 500  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.8mm)。石英・長石類、雲母類、複合石英類、斜長石(双晶)、角閃石類多産、ジルコン多産、[ガラス質]、植物珪酸体化石少ない

No. 204: 40 ~ 200  $\mu\text{m}$ が多い(最大粒径 1.6mm)。石英・長石類、雲母類、斜長石(双晶)、単斜輝石、角閃石類、ジルコン多産、植物珪酸体化石少ない

## 4. 考察

### i) 微化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が 10 ~ 数 100  $\mu\text{m}$  (実際観察される珪藻化石は大きいもので 150  $\mu\text{m}$  程度)、放散虫化石が数百  $\mu\text{m}$ 、骨針化石が 10 ~ 100  $\mu\text{m}$  前後である(植物珪酸体化石が 10 ~ 50  $\mu\text{m}$  前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9  $\mu\text{m}$  以下、シルトが約 3.9 ~ 62.5  $\mu\text{m}$ 、砂が 62.5  $\mu\text{m}$  ~ 2mm である(地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は、胎土材料の粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した土器胎土は、微化石類により 1) 海水成粘土を用いた胎土、2) 淡水成粘土を用いた胎土、3) 水成粘土を用いた胎土、4) その他粘土を用いた胎土、などである(表 8・9)。

#### 1) 海水成粘土を用いた胎土 (13 胎土)

これら胎土中には、放散虫化石や海水種あるいは汽水種珪藻化石のいずれかが特徴的に含まれていた。試料 No. 61 や No. 138 あるいは No. 147 の胎土中には、放散虫化石が含まれていた。なお、これら海水成粘土とした胎土中には骨針化石も含ま

れていた。ただし、全体として珪藻化石などが少なく(海水成)である。

#### 2) 淡水成粘土を用いた胎土 (80 胎土)

これら胎土中には、淡水種珪藻化石の *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属のほか、湖沼浮遊生指標種群の *Melosira granulata* や沼沢湿地付着生指標種群などを少なからず含んでいた。

なお、淡水種珪藻化石が少ない場合には、(淡水成)とした。明らかに淡水種珪藻化石を多く含む胎土は、24 試料であった。なお、試料 No. 50 では海水種珪藻化石が顕著に含まれ、これ以外の 11 胎土において海水種珪藻化石または放散虫化石が僅かに含まれていた。

#### 2) 水成粘土を用いた胎土 (77 胎土、1 粘土)

この胎土中には、少ないものの不明種珪藻化石や海綿動物の骨格をなす骨針化石が特徴的に含まれていた。なお、珪藻化石は破片であるため淡水種あるいは海水種の判断ができなかった。

#### 3) その他粘土を用いた胎土 (30 胎土、3 粘土)

これらの胎土中には、水成を指標するような骨針化石あるいは珪藻化石などは含まれていなかった。

### ii) 砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的な特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った。起源岩石の推定は、砂岩質や複合石英類(微細)が堆積岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、ガラス質がテフラ(火山噴出物)、複合石英類(大型)やジルコンあるいは角閃石類を多く含む場合が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、片理複合石英類が片岩類である。



表9 本川遺跡・周辺遺跡出土土器胎土の粘土と砂粒の特徴（その2）

分析No.	遺跡	作74No.	分類	種類	粘土の特徴								砂粒の特徴		鉱物群の特徴		その他
					放出微化石	海水種珪酸化石	淡水種珪酸化石	不明種珪酸化石	骨針化石	植物珪酸化石	頻度(%)	形状	角閃石類	ジルコン	炭母類		
103	水入道跡99B	3	☆	(海水成)		△				△	◎	B	深成岩類 [テフラ、堆積岩類]		◎		
104	水入道跡99B	4		その他							△	B	深成岩類 [堆積岩類]		◎	陸域指標種珪酸化石	
105	水入道跡99B	5		その他								B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎	陸域指標種珪酸化石	
106	水入道跡99B	6		その他							△	B	深成岩類 [堆積岩類、片岩類]		◎	陸域指標種珪酸化石	
107	水入道跡99A	7	○	(淡水成)			△				△	B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎	付着珪酸化石集合	
108	水入道跡99A	8		その他								B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
109	水入道跡99A	9	□	水成				△				B	深成岩類 [堆積岩類]		◎	砂粒付着珪酸化石	
110	水入道跡99A	10		その他								B	深成岩類 [テフラ、堆積岩類]		◎		
111	水入道跡99A	11	□	水成						△	△	B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
112	水入道跡99A	12	☆	(海水成)		△汽水						B	深成岩類		◎	陸域指標種珪酸化石	
113	水入道跡99A	13	□	水成						△	△	B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
114	水入道跡99A	14	□	水成						△	△	B	深成岩類 [凝灰岩類]		◎		
115	水入道跡99A	15	□	水成								B	深成岩類 [テフラ、堆積岩類、凝灰岩類]		◎		
116	水入道跡99A	16	○	(淡水成)								B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
117	水入道跡99A	17	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類、凝灰岩類]		◎		
118	水入道跡98C2	18	○	(淡水成)				△	△	△	◎	B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
119	水入道跡98C2	19	□	水成								B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
120	水入道跡98C2	20	○	(淡水成)								B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
121	水入道跡98C2	21	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
122	水入道跡98C2	22	○	(淡水成)				△	△	△	◎	B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎	陸域指標種珪酸化石	
123	水入道跡98C2	23	○	(淡水成)				△	△	△	◎	B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
124	水入道跡98C2	24	□	水成								B	深成岩類 [凝灰岩類]		◎		
125	水入道跡98C2	25		その他								B	深成岩類 [テフラ]		◎	付着珪酸化石	
126	水入道跡98C2	26	○	(淡水成)				△	△	△	◎	B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
127	水入道跡98C2	27		その他								B	深成岩類 [テフラ]		◎		
128	水入道跡98C2	28	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
129	水入道跡98C2	29	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
130	水入道跡98C2	30		その他								B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
131	水入道跡98C2	31	○	(淡水成)				△		△	△	B	深成岩類		◎		
132	水入道跡98C2	32	□	水成								B	深成岩類 [テフラ]		◎		
133	水入道跡98C2	33		その他								B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
134	水入道跡98C2	34		その他								B	深成岩類		◎		
135	水入道跡98C2	35		その他								B	深成岩類		◎		
136	郷上道跡97A	1	○	(淡水成)				△			◎	B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
137	郷上道跡97A	2		その他								B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
138	郷上道跡97A	3	☆	(海水成)		△				△	△	B c	深成岩類 [凝灰岩類、片岩類、テフラ]		◎		
139	郷上道跡97A	4	☆	(海水成)		△				△	△	B c	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
140	郷上道跡97A	5	□	水成								B c	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
141	郷上道跡98B	6	☆	(海水成)		△						B c	深成岩類 [片岩類、テフラ]		◎		
142	郷上道跡98B	7	☆	(海水成)		△						B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
143	郷上道跡98B	8	☆	(海水成)		△						B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
144	郷上道跡98B	9	□	水成								B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
145	郷上道跡98B	10	□	水成								B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
146	柳坪道跡	1	○	(淡水成)				△				B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
147	柳坪道跡	2	☆	(海水成)		△						B c	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
148	柳坪道跡	3	□	水成								B	深成岩類		◎		
149	柳坪道跡	4	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
150	柳坪道跡	5	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
151	柳坪道跡	6	○	(淡水成)				△				B f	深成岩類 [テフラ]		◎	植物珪酸化石極多産・ヨシ属含む	
152	柳坪道跡	7		その他								B	深成岩類 [テフラ]		◎	付着珪酸化石集合	
153	柳坪道跡	8		その他								B	深成岩類 [テフラ]		◎		
154	柳坪道跡	9		その他								B	深成岩類		◎	イネ類珪酸体	
155	柳坪道跡	10		その他								B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
156	柳坪道跡	11	○	(淡水成)				△	△	△	◎	B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
157	柳坪道跡	12	○	(淡水成)				△	△	◎	◎	B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
158	柳坪道跡	13	□	水成								B	深成岩類		◎		
159	柳坪道跡	14	○	(淡水成)				△	△	◎	◎	B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
160	柳坪道跡	15	□	水成								B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
161	柳坪道跡	16	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
162	柳坪道跡	17	□	水成								B	深成岩類 [テフラ、堆積岩類]		◎		
163	柳坪道跡	18	○	(淡水成)				△				B f	深成岩類 [テフラ]		◎	骨針化石に多産	
164	柳坪道跡	19	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類、凝灰岩類]		◎		
165	柳坪道跡	20	○	(淡水成)				△				B c	深成岩類 [堆積岩類]		◎	砂粒付着珪酸化石	
166	柳坪道跡	21	○	(淡水成)				△				B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
167	高橋道跡	22	□	水成								B	深成岩類 [テフラ]		◎		
168	高橋道跡	23		その他								B	深成岩類		◎		
169	高橋道跡	24	□	水成								B	深成岩類 [テフラ]		◎		
170	高橋道跡	25		その他								B	深成岩類 [テフラ]		◎		
171	高橋道跡	26	○	(淡水成)				△				B	深成岩類 [テフラ、堆積岩類]		◎		
172	高橋道跡	27	○	(淡水成)				△				B	深成岩類 [テフラ、堆積岩類]		◎		
173	高橋道跡	28	○	(淡水成)				△				B	深成岩類 [テフラ]		◎	陸域指標種珪酸化石	
174	高橋道跡	29	○	(淡水成)				△				B	深成岩類 [テフラ]		◎		
175	神明道跡	30	□	水成								B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
176	神明道跡	31		その他								B	深成岩類		◎		
177	神明道跡	32	○	(淡水成)								B f	深成岩類 [テフラ]		◎		
178	神明道跡	33	□	水成								B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
179	神明道跡	34	□	水成								B	深成岩類		◎		
180	神明道跡	35	□	水成								B	深成岩類 [テフラ]		◎		
181	神明道跡	36	○	(淡水成)				△	△	△	◎	B f	深成岩類 [テフラ]		◎	陸域指標種珪酸化石	
182	神明道跡	37	○	(淡水成)				△	△	△	◎	B f	深成岩類 [テフラ、堆積岩類]		◎		
183	神明道跡	38	○	(淡水成)				△	△	◎	◎	B c	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
184	神明道跡	39	○	(淡水成)				△	△	◎	◎	B c	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
185	小針道跡	1	□	水成								B c	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
186	小針道跡	2	□	水成								B c	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
187	高木道跡	3	□	水成								B f	深成岩類 [テフラ]		◎	陸域指標種珪酸化石	
188	高木道跡	4	○	(淡水成)				△				B f	深成岩類 [テフラ]		◎	陸域指標種珪酸化石	
189	高木道跡	5	○	(淡水成)				△				B	深成岩類 [テフラ]		◎		
190	高木道跡	6	□	水成								B f	深成岩類 [テフラ] [堆積岩類]		◎		
191	松崎八反田道跡	1	□	水成								B	深成岩類		◎	イネ類珪酸体、赤色粘多産	
192	若宮西道跡	2		その他								B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
193	若宮西道跡	3	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
194	若宮西道跡	4	□	水成								B	深成岩類		◎		
195	若宮西道跡	5	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
196	若宮西道跡	6	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類、テフラ]		◎		
197	若宮西道跡	7	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
198	若宮西道跡	8	□	水成								B	深成岩類 [テフラ]		◎		
199	住駒道跡	9	□	水成								B	深成岩類 [堆積岩類]		◎		
200	住駒道跡	10	□	水成								B	深成岩類		◎		
201	粘土	1	□	水成								B	深成岩類 [テフラ]		◎	炭母類・角閃石類特が多い	
202	粘土	2		その他								B	深成岩類 [テフラ、堆積岩類]		◎	炭母類特が多い	
203	粘土	3		その他								B	深成岩類 [テフラ]		◎	炭母類特が多い	
204	粘土	4		その他								B	深成岩類		◎		

砂粒組成の分類は、最も多く出現する分類群（第1出現群）と次いで多く出現する分類群（第2出現群）の組合せに従った（表10）。

その結果、対象とした土器胎土について砂粒組成は大きく4群に分類された。ほぼ深成岩類からなるB群が92胎土（4粘土）、深成岩類を主体としてテフラを伴うBf群が85胎土、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うBc群が17胎土、堆積岩類を主体として深成岩類を伴うCb群が5胎土、火山岩類を主体としてテフラを伴うDf群が1胎土であった（表11）。

### iii) 胎土材料

胎土材料は、主に粘土と砂粒から構成されるが、粘土と砂粒組成の関係は以下のものである（表11）。

深成岩類を主体とするB群では、水成が最も多く46胎土、次いでその他が26胎土、（淡水成）が14胎土、（海水成）が6胎土であり、明らかな淡水成を示す粘土はない。このB群は、堆積環境を指標する微化石類が少ないかまたは含まれない粘土から構成されていることが言える。

深成岩類を主体としてテフラを伴うBf群では、（淡水成）が最も多く38胎土、次いで水成および淡水成が21胎土、その他が3胎土であり、（海水成）が2胎土である。このBf群では、堆積環境を指標する微化石類が少ないかまたは含まれない粘土が全体の約75%を占めるが、淡水種珪藻化石を比較的多く含む淡水成粘土がその残りを占め、前述のB群と明らかな違いを示している。

また、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うBc群では、水成が8胎土、（海水成）が4胎土、（淡水成）および淡水成がいずれも2胎土、その他が1胎土である。

堆積岩類を主体として深成岩類を伴うCb群では、（淡水成）が2胎土、水成や淡水成あるいは（海水成）が各1胎土である。

火山岩類を主体としてテフラを伴うDf群では水成が1胎土のみである。この組成は、堆積岩類が僅かであることから火山岩地域の組成と考え

られるが、平成13年度名古屋城三の丸遺跡の深堀調査において、熱田層上部層中の砂層においてほぼ火山岩類からなる黒色砂が観察されたことから（藤根ほか、2001）、これら相当する地層砂の組成である可能性が高い。なお、こうした混和材を用いた土器は、前後する粘土層を採取した祭に同時に混和材として砂層を採取したものと考えられる。

以下では、粘土の種類や砂粒組成の示す意味あるいは相互関係について考察したい。

土器作りは、第一に良質とも思われる粘土を探すことから始まると考えられる。これは、ここに示したように珪藻化石などの微化石類を含む材料粘土が全体の85%を占めるが、微化石類は砂あるいはシルト分が多くなるほど堆積物中に捕獲される確率が低くなるため、微化石類を含むこと自体が粘土質であることを示している。なお、東海地域では、良質の粘土層である瀬戸陶土層や矢田川累層などが知られているが、これら東海層群は古東海湖に堆積した堆積物であるが珪藻化石などの微化石類が乏しいと言った特徴がある。このため、これら地域に所在する遺跡から出土した土器の胎土調査では、微化石類が少ない胎土が多い（藤根・今村、2001など）。

本川遺跡は、矢作川の沖積低地部に位置するが、周辺部では東海層群の矢田川累層の堆積面とされる藤岡面や熱田層に対比される碧海面が見られ、ボーリング調査においてもこれら堆積物が確認されている（鬼頭ほか、2001）。これら矢田川累層や熱田層相当の段丘堆積物では微化石類が非常に

表10 岩石片と分類の組み合わせ

		第1出現群					
		A	B	C	D	E	F
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe
	f	テフラ	Af	Bf	Cf	Df	Ef

表 11 粘土と砂粒組成の関係

	B群		B c群		B f群		C b群		D f群		総合計	
	胎土数	%	胎土数	%	胎土数	%	胎土数	%	胎土数	%	胎土数	%
淡水成			2	11.8	21	24.7	1	20.0			24	12.0
(淡水成)	14	15.2	2	11.8	38	44.7	2	40.0			56	28.0
(海水成)	6	6.5	4	23.5	2	2.4	1	20.0			13	6.5
水成	46	50.0	8	47.1	21	24.7	1	20.0	1	100.0	77	38.5
その他	26	28.3	1	5.9	3	3.5	0				30	15.0
合計	92	100.0	17	100.0	85	100.0	5	100.0	1	100.0	200	100.0

表 12 各遺跡の粘土と砂粒組成の関係 (その1)

	行政区分	B群	B c群	B f群	C b群	D f群	合計
本川遺跡	豊田市	27	8	50	4	1	90
川原遺跡		6		4			10
水入遺跡		24		11			35
郷上遺跡		2	3	4	1		10
梅坪遺跡		11	2	8			21
高橋遺跡		8	0				8
神明遺跡		3	2	5			10
小針遺跡	岡崎市	0	2				2
高木遺跡		1		3			4
松崎八反田遺跡	西尾市	1					1
若宮西遺跡		7					7
住崎遺跡		2					2
合計		92	17	85	5	1	200
%		46.0	8.5	42.5	2.5	0.5	100.0

表 13 各遺跡の粘土と砂粒組成の関係 (その2)

	行政区分	淡水成	(淡水成)	(海水成)	水成	その他	合計	
本川遺跡	豊田市	16	31	4	29	10	90	
川原遺跡				4	1	5		10
水入遺跡		2	7	2	13	11	35	
郷上遺跡				1	5	3	1	10
梅坪遺跡		3	5	1	8	4	21	
高橋遺跡				4		2	2	8
神明遺跡		3	2		4	1	10	
小針遺跡	岡崎市				2		2	
高木遺跡			2		2		4	
松崎八反田遺跡	西尾市				1		1	
若宮西遺跡					6	1	7	
住崎遺跡					2		2	
合計		24	56	13	77	30	200	
%		12.0	28.0	6.5	38.5	15.0	100.0	

少ないことが予想される。この地域では、市街地であることからこれら地層の露出状態が悪いこともあり、良質の粘土層が分布しているかどうかは定かでない。

さて、土器の粘土材料としていずれの粘土層を採取したかは、明らかに土器材料のためのいわゆる“粘土採掘坑”なる遺構が検出されない限り特定はできない。また、本川遺跡から出土した土器群が当遺跡において作られた土器であるかどうかについても定かでない。

しかし、後述するように、対象とした土器胎土の砂粒組成は、火山岩類を含むD f群あるいは堆積岩類を主体とするC b群を除いては、矢作川上流部において領家花崗岩類が広く分布するといった地質現況から見て、当遺跡周辺における砂粒組成を示しているものと考えられる。こうしたことから、胎土材料としての対象粘土層は遺跡成立以前の沖積層、碧海面に相当する碧海層、矢田川累層に挟在する粘土層であることが予想される。ここで検討した胎土では、比較試料を含めて微化石類の少ない胎土が全体の85%に及ぶことから、碧海層あるいは矢田川累層などの粘土層が利用された可能性が高い。ただし、知立市や刈谷市など下流部における碧海層のボーリング調査では、堆積物中において淡水種珪藻化石のほか内湾指標種群などの珪藻化石が検出されていることから（森山ほか、1997）、こうした粘土を採取利用した場合には珪藻化石が豊富に含まれているものと考えられる。

次に、胎土中の砂粒組成については、B群はジルコンが特徴的に多く含まれ、薄片において容易に確認できる堆積岩類を含まないことからほぼ深成岩類から構成されている。これは、現在の地質状況から見ると当地域の砂粒組成と考えられるが、土器製作当時においていずれの粘土層に付随する砂層を利用したのか、あるいは当時の河川砂を用いたのか、などその解釈は一義的に決まるものではない。堆積岩類を伴うB c群は砂層の層位の違いを反映している可能性もある。なお、深成岩類を主体としてガラスからなるテフラを伴う

B f群は、混和材としての砂粒組成として扱っているが、これら挟在するガラスは、粘土層に付随する組成と理解した方が良く、対象とした粘土層の違いに起因する可能性が高い。なお、このガラスは、弥生後期のバレススタイル土器の3分の1において多量に含まれる場合があり、テフラが混和材として利用された可能性を示す（藤根、1998）。

なお、現在の河川砂を調べると、その砂粒表面には現生珪藻が夥しく付着している様子が観察される。一方、土器胎土中において時として砂粒表面に夥しい珪藻化石が見られることがあるが、地層砂において珪藻化石が全く含まれないことから、こうした事象が当時の河川砂が混入した証拠と考えている。なお、ここで検討した土器胎土では、No. 109とNo. 165において多くはないものの砂粒表面に小型の珪藻化石が集合して付着していた。

以上のことから、粘土の種類あるいは砂粒組成の組み合わせから、砂粒組成については、大きくはB群やB f群あるいはB c群の一群、C b群、D f群の3群が識別される。粘土の種類については、珪藻化石の出現頻度の違いから、大きく淡水成粘土とその他の微化石類の少ない一群の2群が識別される。これにより5通りの分類が可能である。

#### iv) 遺跡に見る胎土の特徴

各遺跡の粘土または砂粒組成の関係は以下のようである（表12および表13）。なお、前述したように、各遺跡から出土した土器群がその遺跡において作られたとは断定できないことから、各遺跡から出土した土器胎土の特徴が直ちにその遺跡における在地性の高い土器群として位置付けられるものではない。

分析対象の主体である本川遺跡の土器胎土では、砂粒においてB f群が最も多く50胎土、次いでB群が27胎土、B c群が8胎土、C b群が4胎土、唯一のD f群が1胎土である。粘土ではこのB f群を反映して珪藻化石を比較的多く含む

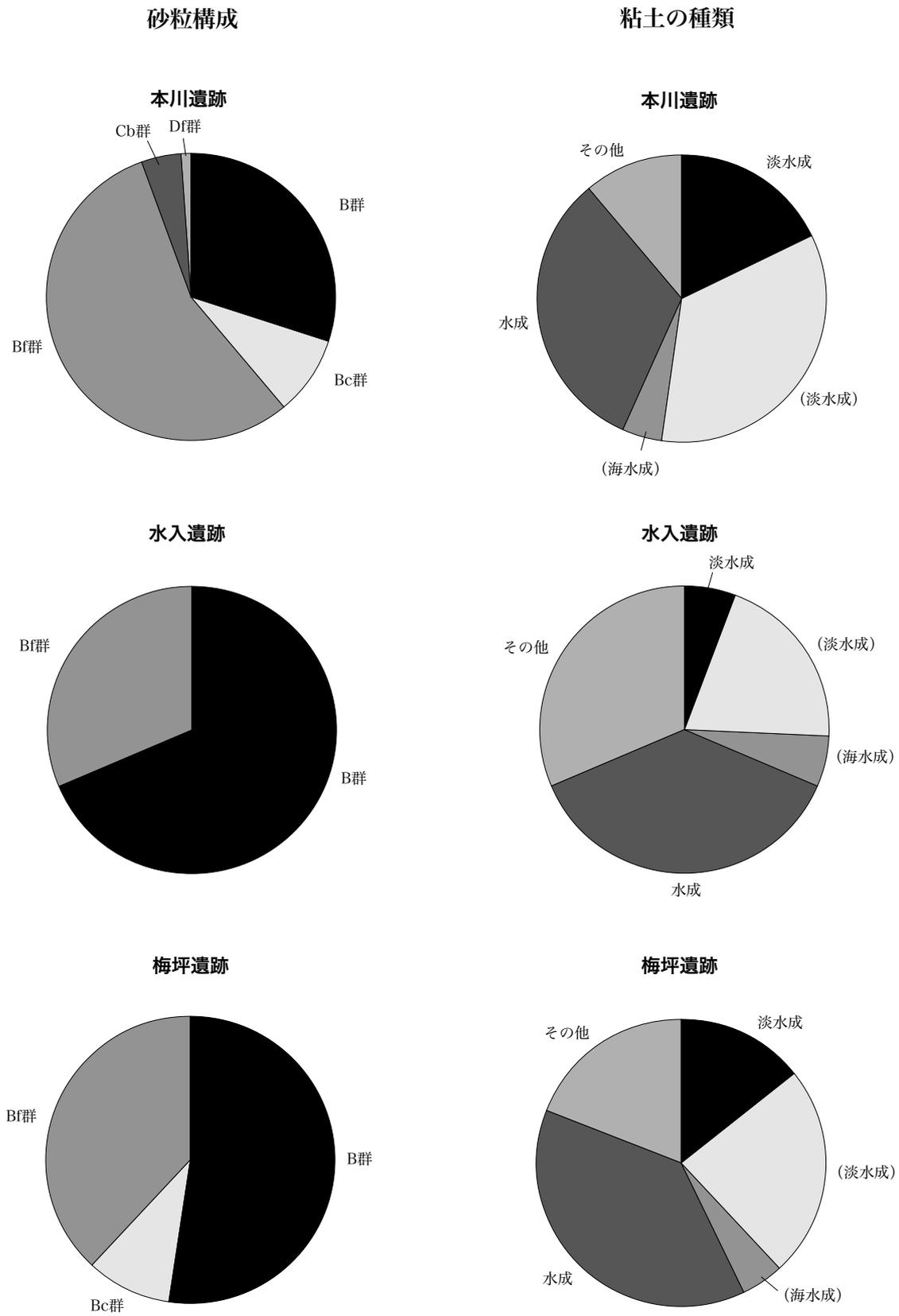


図 13 主な遺跡における土器胎土の粘土の種類と砂粒組成

淡水成粘土が比較的多く見られた。全体としては（淡水成）粘土や水成粘土の占める割合が高い。

本川遺跡から上流約 2.5km 付近に位置する水入遺跡では、砂粒において B 群と B f 群から構成され、粘土では全体として水成粘土やその他粘土が多く、珪藻化石を比較的多く含む淡水成粘土も少ないものが見られた。

さらに、水入遺跡から上流約 8km 付近に位置する梅坪遺跡では、砂粒において B 群および B f 群の占める割合が高く、粘土では全体として水成粘土やその他粘土が多く、珪藻化石を比較的多く含む淡水成粘土も見られ、概ね水入遺跡に類似した様相を示す（図 13）。

他の遺跡では、分析点数が少ないが、郷上遺跡や神明遺跡などは本川遺跡の砂粒構成に類似し、神明遺跡は粘土構成においても近い。また、川原遺跡や高橋遺跡あるいは若宮西遺跡などは水入遺跡や梅坪遺跡の砂粒構成に近い。

遺跡単位で粘土または砂粒構成を見るとこうした違いが見られるが、これらの違いが各遺跡の土器製作における材料の違いなのか、搬入した土器の違いなのかなどについては現時点では解釈できない。

## 5. おわりに

ここでは、本川遺跡および周辺遺跡の土器を対象として、これら胎土材料について検討した。

その結果、本川遺跡では、深成岩類を主体とする B 群やこの組成に近い B c 群あるいは B f 群の一群、堆積岩類を主体とした C b 群、火山岩類を主体とした D f 群の大きく 3 群が識別された。

また、粘土の種類では、珪藻化石を比較的多く含む淡水成粘土の一群と微化石類の少ない（淡水成）粘土や（海水成）粘土や水成粘土あるいはその他粘土の大きく 2 群が識別された。

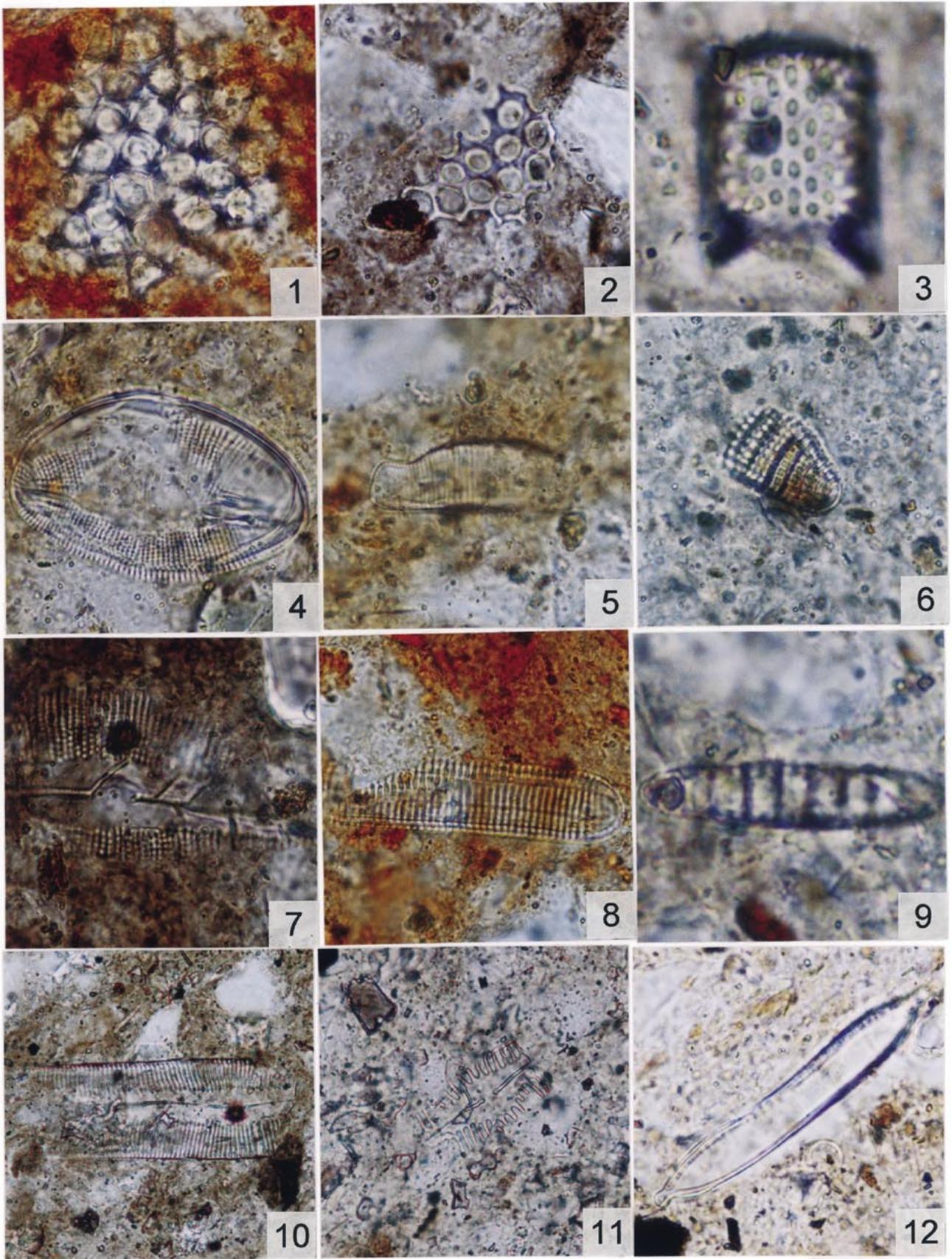
こうした材料の違いは、採取した地層層準の違いや地層分布域の違いなど地質学的状況による違いが考えられるが、土器が人工物であることから材料に関する解釈は単純ではない。こうした違いが土器作りにおいてどのような意味があるかは、

製作地の推定のみならず土器作りに関して重要な事柄である。

なお、試料 No. 59 の本川遺跡の深鉢胎土は、明らかにこの地域でない火山岩類を主体とした D f 群が抽出され、この組成が熱田層上部砂層中の火山岩類組成である可能性が高いことが指摘できた。

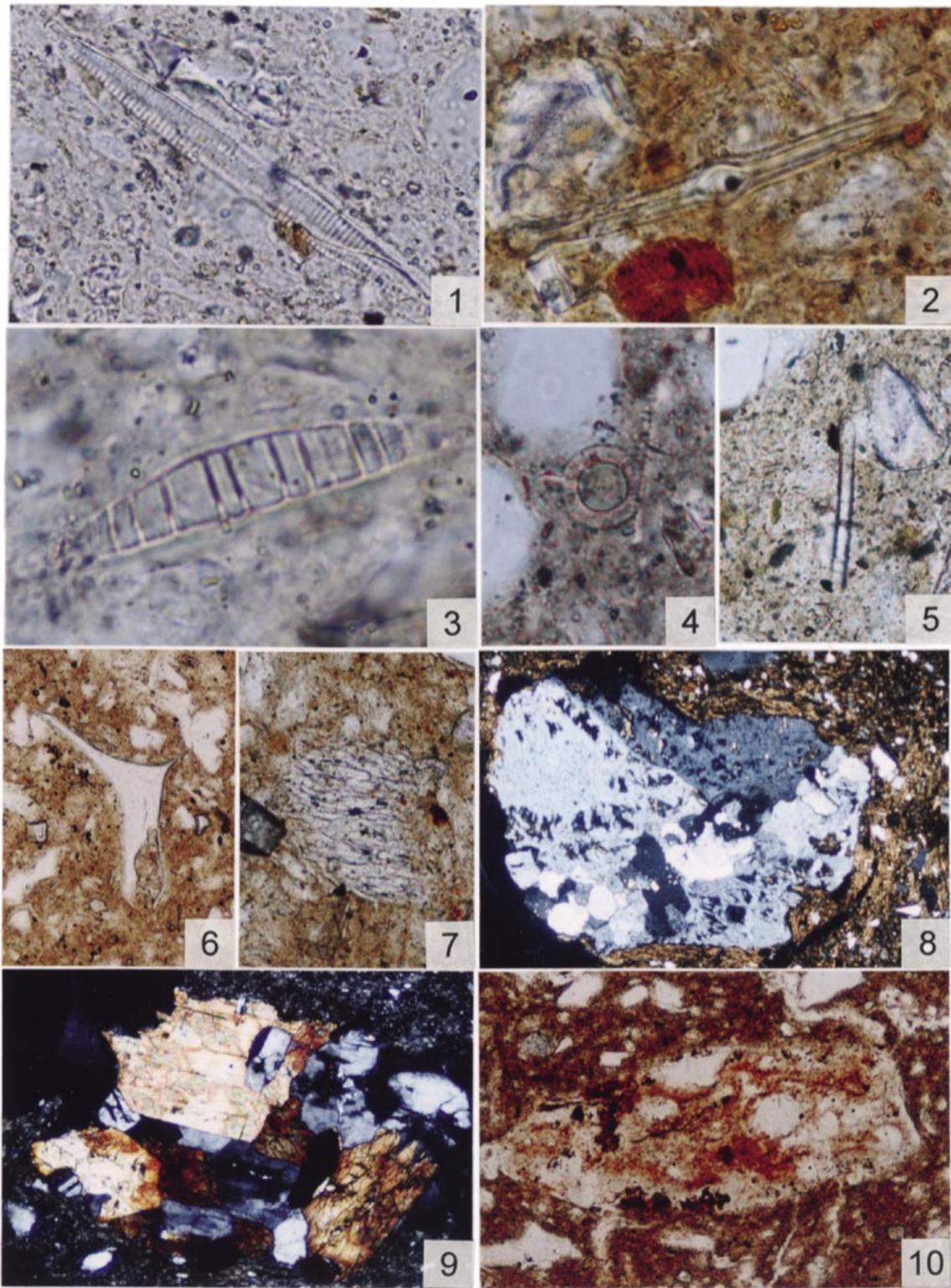
## 引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理，42,2,73-88.
- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』，平凡社，1612p.
- 菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—。日本文化財科学会第 10 回大会研究発表要旨集，34-35.
- 藤根 久（1998）東海地域（伊勢—三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料。第 6 回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108—117.
- 藤根 久・今村美智子（2001）川原遺跡出土土器の胎土材料。「川原遺跡 第三分冊」、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、39-46.
- 藤根 久・今村美智子・小村美代子・鈴木 茂（2001）弥生土器・製塩土器・土師器の胎土材料。「八王子遺跡報告編」、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、161-186.
- 鬼頭 剛・尾崎和美・小野映介（2001）矢作川沖積低地北部、川原遺跡における古環境の復元。「川原遺跡 第三分冊」、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、1-16.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究，27,1-20.
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料—粘土の起源を中心に—。日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨、153-156.
- 森山昭雄・橋爪 厚・石原 秀（1997）化石ケイソウ群集による碧海層の堆積環境の変遷と油ヶ淵断層による変位。愛知教育大学研究報告（自然科学編）、61-69.



写真図版 2. 土器胎土中の粒子顕微鏡写真 1 (スケール; 1,2,4 ~ 8:20  $\mu$  m, 3,9:10  $\mu$  m, 10,11:50  $\mu$  m, 12:200  $\mu$  m)

- |   |   |
|---|---|
| 1. 放散虫化石 No. 138(郷上)  | 2. 海水種珪藻化石 <i>Coscinodiscus</i> 属/ <i>Thalassiosira</i> 属 No. 156(梅坪) |
| 3. 湖沼浮遊生指標種群珪藻化石 <i>Melosira granulata</i> No. 2(本川)                  | 4. 珪藻化石 <i>Diploneis</i> 属 No. 4(本川)                                  |
| 5. 沼沢湿地付着生指標種群 <i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> No. 21(本川) | 6. 珪藻化石 <i>Epithemia</i> 属 No. 35(本川)                                 |
| 7. 珪藻化石 <i>Cymbella</i> 属 No. 9(本川)                                   | 8. 海水種珪藻化石 <i>Nitzschia</i> 属 No. 29(本川)                              |
| 9. 海水種珪藻化石 <i>Denticlopsis</i> 属 No. 50(本川)                           | 10. 珪藻化石 <i>Pinnularia</i> 属 No. 49(本川)                               |
| 11. 陸域指標種群珪藻化石 <i>Pinnularia borealis</i> No. 123(水入)                 | 12. 陸域指標種群珪藻化石 <i>Hantzschia amphioxys</i> No. 104(水入)                |



写真図版 3. 土器胎土中の粒子顕微鏡写真 2 (スケール ;1:20  $\mu$  m、2,3:10  $\mu$  m、4:25  $\mu$  m、5:50  $\mu$  m、6,9,10:200  $\mu$  m、7:100  $\mu$  m、8:500  $\mu$  m)

1. 淡水種珪藻化石 *Synedra arcus* No. 126(水入)

3. 淡水種珪藻化石 *Rhopalodia gibberula* No. 4(本川)

5. 淡水種珪藻化石 *Eunotia biareofera* No. 33(本川)

7. ガラス質 (軽石型) No. 17(本川)

9. 複合鉱物類 (含角閃石類) No. 153(梅坪)

2. *Tabellaria fenestrata* No. 79(本川)

4. 珪藻化石 *Melosila* 属 No. 2(本川)

6. ガラス質 No. 99(川原 97Bc-9)

8. 複合鉱物類 (含雲母類) No. 40(本川)

10. 泥岩質 No. 140(郷上)

## 4. 本川遺跡出土土器付着煤類の年代測定

山形 秀樹・Lomtatize Zauri (株式会社 パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

本川遺跡から出土した土器に付着する煤類と住居跡などから検出された炭化材の加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

試料は、各遺構から出土した土器より採取した煤類付着物 39 点と炭化材 5 点である。なお、SB11 甕 281 は、内側の付着物 (こげ類) を採取した。

付着物試料は、酸洗浄を施して不純物を除去した。炭化材試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した。これら前処理された試料を石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した  $^{14}\text{C}$  濃度を用いて  $^{14}\text{C}$  年代を算出した。なお、一部の試料について、試料の乾燥重量に対する  $\text{CO}_2$  ガスの圧力から炭素含有量 (%) を算出した。

### 3. 結果

表 1 に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値 -25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した  $^{14}\text{C}$  年代、 $^{14}\text{C}$  年代を暦年代に較正した年代を示す。

$^{14}\text{C}$  年代値 (yrBP) の算出は、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、計数値の標準偏差  $\sigma$  に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の  $^{14}\text{C}$  年代が、その  $^{14}\text{C}$  年代誤差範囲内に入る確率が 68% であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

#### 暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、および半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5,730 \pm 40$  年) を較正し、より正確な年代を求めるために、 $^{14}\text{C}$  年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と  $^{14}\text{C}$  年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて  $^{14}\text{C}$  年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて  $^{14}\text{C}$  年代を暦年代に較正した年代を算出する。

$^{14}\text{C}$  年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0 の改訂版) を使用した。なお、暦年代較正值は  $^{14}\text{C}$  年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 $1\sigma$  暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその  $1\sigma$  暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10% 未満についてはその表示を省略した。 $1\sigma$  暦年代範囲のうち、その確からしさを最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

### 4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した  $1\sigma$  暦年代範囲のうち、その確からしさを最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された (表 14 ~ 16、図 14 および図 15)。なお、図には極端に古く測定された試料

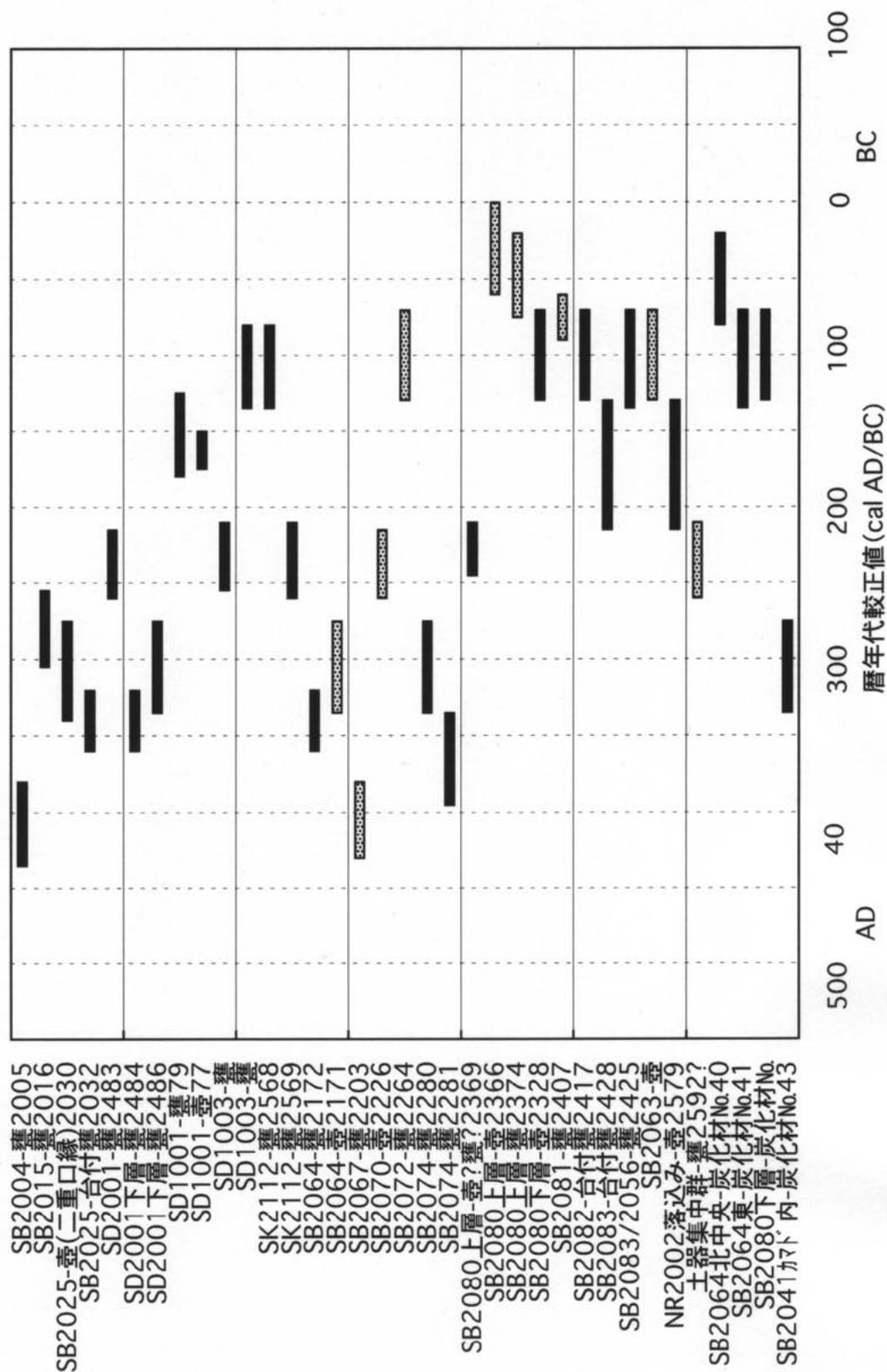


図 14 土器付着物・炭化材の暦年較正 (古墳時代)  
(網掛けは炭素含有量が 40% 以下の試料)

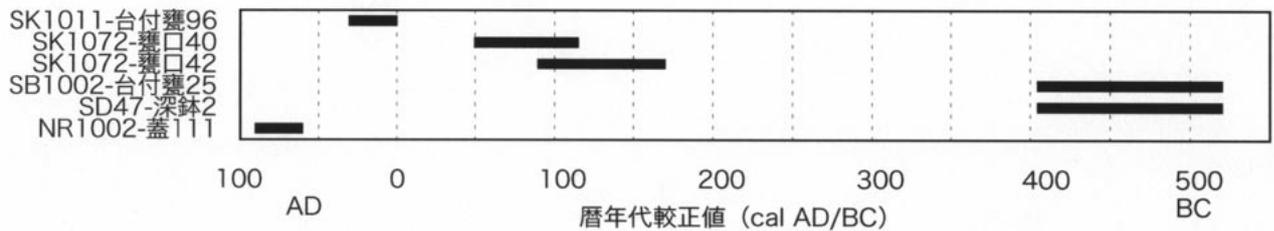


図 15 土器付着物の暦年較正 (古墳時代以前)

は示していない。

なお、付着物採取の際、肉眼観察により付着物が十分に多い (表 17 の◎印)、多い (同○印)、やや少ない (同△印)、少ない (同×印) に分けた。さらに、表 2 には、試料処理の際に、試料の乾燥重量に対する CO<sub>2</sub> ガスの圧力から炭素含有量 (%) を算出した数値を示した。

肉眼観察による付着状況と炭素含有量の結果は概ね対応しているが、炭素含有量が 50% を越える場合には、信頼性のより高い年代値が測定されているものとする。

藤根ほか (2003) は、S 字状口縁台付甕の胎土断面におけるサンドイッチ状構造の中黒層が材料とした有機質粘土の焼け残り部である可能性を指摘している。これは、土器胎土の中黒層の一部を同時に採取した場合、測定年代値が材料粘土の炭素による影響を受けることを示している。

こうしたことから、土器付着物の放射性炭素年代測定を行う場合、試料採取は胎土材料を採取することのないよう慎重に行わなければならない。なお、測定結果を評価するために炭素含有量を調べておくことが望ましいと考える。

### 引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎・日本先史時代の <sup>14</sup>C 年代、p.3-20.
- Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended <sup>14</sup>C Database and Revised CALIB3.0 <sup>14</sup>C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
- 藤根 久・Lomtatize Zauri・丹生越子・中村俊夫 (2003) S 字状口縁台付甕の AMS 年代とその意味、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 (XIV)、名古屋大学年代測定総合研究センター、208-216.

表 14 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果 (その 1)

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-1449 (AMS)	土器付着物 No.1 98A SK2007 甕2548	-25.8	3830 $\pm 30$	cal BC 2285 cal BC 2245 cal BC 2240	cal BC 2310 - 2265 (36.9%) cal BC 2260 - 2205 (58.4%)
PLD-1450 (AMS)	土器付着物 No.2 98A SB2004 甕2005	-30.5	1640 $\pm 30$	cal AD 415	cal AD 380 - 435 (84.8%)
PLD-1451 (AMS)	土器付着物 No.3 98A SB2015 甕2016	-25.9	1730 $\pm 30$	cal AD 260 cal AD 280 cal AD 325 cal AD 330 cal AD 335	cal AD 255 - 305 (55.3%) cal AD 315 - 345 (32.3%) cal AD 370 - 380 (10.7%)
PLD-1452 (AMS)	土器付着物 No.4 98A SB2025 壺(二重口縁)2030	-21.7	1750 $\pm 30$	cal AD 260 cal AD 285 cal AD 300 cal AD 320	cal AD 245 - 265 (25.1%) cal AD 275 - 340 (74.9%)
PLD-1453 (AMS)	土器付着物 No.5 98A SB2025 台付甕2032	-26.6	1720 $\pm 30$	cal AD 265 cal AD 275 cal AD 340	cal AD 260 - 285 (29.0%) cal AD 290 - 300 (11.7%) cal AD 320 - 360 (42.7%) cal AD 365 - 380 (16.6%)
PLD-1454 (AMS)	土器付着物 No.6 98A SD2001 甕2483	-24.3	1780 $\pm 30$	cal AD 245	cal AD 215 - 260 (50.5%) cal AD 280 - 325 (47.3%)
PLD-1455 (AMS)	土器付着物 No.7 98A SD2001下層 甕2484	-26.4	1720 $\pm 30$	cal AD 265 cal AD 275 cal AD 340	cal AD 260 - 285 (29.0%) cal AD 290 - 300 (11.7%) cal AD 320 - 360 (42.7%) cal AD 365 - 380 (16.6%)
PLD-1456 (AMS)	土器付着物 No.8 98A SD2001下層 甕2486	-26.4	1760 $\pm 30$	cal AD 255 cal AD 305 cal AD 315	cal AD 240 - 260 (30.2%) cal AD 275 - 335 (69.8%)
PLD-1457 (AMS)	土器付着物 No.9 98A SD1001 甕79	-24.7	1860 $\pm 30$	cal AD 130	cal AD 125 - 180 (61.2%) cal AD 190 - 215 (30.7%)
PLD-1458 (AMS)	土器付着物 No.10 98A SD1001 壺77	-23.0	1870 $\pm 30$	cal AD 130	cal AD 85 - 105 (24.0%) cal AD 115 - 140 (26.4%) cal AD 150 - 175 (28.6%) cal AD 190 - 210 (21.1%)
PLD-1459 (AMS)	土器付着物 No.11 98A SD1003 甕	-23.9	1800 $\pm 30$	cal AD 240	cal AD 135 - 155 (18.4%) cal AD 175 - 195 (18.2%) cal AD 210 - 255 (51.2%) cal AD 305 - 315 (12.3%)
PLD-1460 (AMS)	土器付着物 No.12 98A SD1003 甕	-27.6	1880 $\pm 30$	cal AD 130	cal AD 80 - 135 (73.3%) cal AD 155 - 175 (13.9%) cal AD 195 - 210 (12.7%)
PLD-1461 (AMS)	土器付着物 No.13 98B2 SK2112 甕2568	-25.4	1880 $\pm 30$	cal AD 130	cal AD 80 - 135 (73.3%) cal AD 155 - 175 (13.9%) cal AD 195 - 210 (12.7%)
PLD-1462 (AMS)	土器付着物 No.14 98B2 SK2112 甕2569	-27.3	1790 $\pm 30$	cal AD 240	cal AD 175 - 190 (10.9%) cal AD 210 - 260 (53.2%) cal AD 300 - 320 (23.6%)
PLD-1463 (AMS)	土器付着物 No.15 98B2 SB2064 甕2172	-12.9	1720 $\pm 30$	cal AD 265 cal AD 275 cal AD 340	cal AD 260 - 285 (29.0%) cal AD 290 - 300 (11.7%) cal AD 320 - 360 (42.7%) cal AD 365 - 380 (16.6%)
PLD-1464 (AMS)	土器付着物 No.16 98B2 SB2064 壺2171	-14.3	1760 $\pm 30$	cal AD 255 cal AD 305 cal AD 315	cal AD 240 - 260 (30.2%) cal AD 275 - 335 (69.8%)

表 15 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果 (その 2)

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-1465 (AMS)	土器付着物 No.17 98B2 SB2067 甕2203	-22.3	1650 $\pm 30$	cal AD 410	cal AD 355 - 370 (13.1%) cal AD 380 - 430 (83.4%)
PLD-1466 (AMS)	土器付着物 No.18 98B2 SB2070 壺2226	-26.3	1780 $\pm 30$	cal AD 245	cal AD 215 - 260 (50.5%) cal AD 280 - 325 (47.3%)
PLD-1467 (AMS)	土器付着物 No.19 98B2 SB2072 甕2264	-26.1	1910 $\pm 30$	cal AD 80	cal AD 70 - 130 (100%)
PLD-1468 (AMS)	土器付着物 No.20 98B2 SB2074 甕2280	-26.9	1770 $\pm 30$	cal AD 245 cal AD 310 cal AD 315	cal AD 235 - 260 (35.5%) cal AD 275 - 335 (64.5%)
PLD-1469 (AMS)	土器付着物 No.21 98B2 SB2074 甕2281	-28.8	1700 $\pm 30$	cal AD 345 cal AD 370 cal AD 380	cal AD 260 - 280 (19.1%) cal AD 335 - 395 (76.2%)
PLD-1470 (AMS)	土器付着物 No.22 98B2 SB2080上層 壺?甕?2369	-27.8	1810 $\pm 30$	cal AD 235	cal AD 135 - 160 (27.0%) cal AD 170 - 200 (30.7%) cal AD 210 - 245 (42.3%)
PLD-1471 (AMS)	土器付着物 No.23 98B2 SB2080上層 壺2366	-26.7	1980 $\pm 30$	cal AD 25 cal AD 45	cal AD 0 - 60 (91.3%)
PLD-1472 (AMS)	土器付着物 No.24 98B2 SB2080上層 甕2374	-27.1	1960 $\pm 30$	cal AD 30 cal AD 40 cal AD 55	cal AD 20 - 75 (92.6%)
PLD-1473 (AMS)	土器付着物 No.25 98B2 SB2080下層 壺2328	-28.7	1910 $\pm 30$	cal AD 80	cal AD 70 - 130 (100%)
PLD-1474 (AMS)	土器付着物 No.26 98B2 SB2081 甕2407	-30.9	1920 $\pm 30$	cal AD 80	cal AD 60 - 90 (50.9%) cal AD 100 - 125 (46.5%)
PLD-1475 (AMS)	土器付着物 No.27 98B2 SB2082 台付甕2417	-24.2	1900 $\pm 30$	cal AD 85 cal AD 100 cal AD 120	cal AD 70 - 130 (100%)
PLD-1476 (AMS)	土器付着物 No.28 98B2 SB2083 台付甕2428	-26.8	1850 $\pm 30$	cal AD 135	cal AD 130 - 215 (100%)
PLD-1477 (AMS)	土器付着物 No.29 98B2 SB2083or2056 甕2425	-27.2	1890 $\pm 30$	cal AD 90 cal AD 100 cal AD 125	cal AD 70 - 135 (90.7%)
PLD-1478 (AMS)	土器付着物 No.30 98B2 SB2057 台付甕2140	-26.7	2260 $\pm 30$	cal BC 375 cal BC 265	cal BC 390 - 355 (46.0%) cal BC 290 - 255 (38.0%) cal BC 245 - 235 (15.0%)
PLD-1479 (AMS)	土器付着物 No.31 98B2 SB2063 壺	-29.7	1900 $\pm 30$	cal AD 85 cal AD 100 cal AD 120	cal AD 70 - 130 (100%)
PLD-1480 (AMS)	土器付着物 No.32 98B2 NR2002東の落ち込み 壺2579	-26.7	1850 $\pm 30$	cal AD 135	cal AD 130 - 215 (100%)
PLD-1481 (AMS)	土器付着物 No.33 98B3 SK1011 台付甕96	-27.0	1990 $\pm 30$	cal AD 5 cal AD 10 cal AD 20	cal BC 40 - 30 (11.7%) cal BC 20 - 10 (15.2%) cal BC 0 - cal AD 30 (51.2%) cal AD 40 - 55 (22.0%)
PLD-1482 (AMS)	土器付着物 No.34 98B3 SK1072 甕口40	-21.8	2080 $\pm 30$	cal BC 90 cal BC 75 cal BC 60	cal BC 150 - 135 (19.0%) cal BC 115 - 50 (81.0%)

表 16 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果 (その 3)

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-1483 (AMS)	土器付着物 No.35 98B3 SK1072 甕口42	-25.3	2110 $\pm 30$	cal BC 160 cal BC 130 cal BC 120	<u>cal BC 170 - 90 (92.9%)</u>
PLD-1484 (AMS)	土器付着物 No.36 98B3 SB1002 台付甕25	-26.9	2420 $\pm 30$	cal BC 480 cal BC 470 cal BC 445 cal BC 410	<u>cal BC 520 - 405 (94.4%)</u>
PLD-1485 (AMS)	土器付着物 No.37 98B3 SD47 深鉢2	-26.0	2420 $\pm 30$	cal BC 480 cal BC 470 cal BC 445 cal BC 410	<u>cal BC 520 - 405 (94.4%)</u>
PLD-1486 (AMS)	土器付着物 No.38 98B3 NR1002 蓋111	-20.5	1920 $\pm 30$	cal AD 80	<u>cal AD 60 - 90 (50.9%)</u> cal AD 100 - 125 (46.5%)
PLD-1487 (AMS)	土器付着物 No.39 98C 土器集中群 甕2592?	-28.3	1790 $\pm 30$	cal AD 240	cal AD 175 - 195 (10.9%) <u>cal AD 210 - 260 (53.2%)</u> cal AD 300 - 320 (23.6%)
PLD-1488 (AMS)	炭化材 No.40 98B2 SB2064北中央	-27.0	1950 $\pm 30$	cal AD 35 cal AD 60	<u>cal AD 20 - 80 (96.2%)</u>
PLD-1489 (AMS)	炭化材 No.41 98B2 SB2064東	-23.9	1890 $\pm 30$	cal AD 90 cal AD 100 cal AD 125	<u>cal AD 70 - 135 (90.7%)</u>
PLD-1490 (AMS)	炭化材 No.42 98B2 SB2080下層	-28.6	1900 $\pm 30$	cal AD 85 cal AD 100 cal AD 120	<u>cal AD 70 - 130 (100%)</u>
PLD-1491 (AMS)	炭化材 No.43 98B2 SB2041カマド内	-30.6	1760 $\pm 30$	cal AD 255 cal AD 305 cal AD 315	cal AD 240 - 260 (30.2%) <u>cal AD 275 - 335 (69.8%)</u>
PLD-1492 (AMS)	炭化材 No.44 98B3 SK1115	-29.7	2630 $\pm 30$	cal BC 800	<u>cal BC 820 - 795 (100%)</u>

表 17 土器付着物（外側煤類）の付着状況と炭素含有量

(付着状況；◎：十分に多い、○：多い、△：やや少ない、×：少ない)

試料番号	試料形状	付着状態	炭素含有率(%)	備考
SK2007-甕2548	土器 付着物	○		PLD-1449
SB2004-甕2005		○	-	PLD-1450
SB2015-甕2016		○	-	PLD-1451
SB2025-壺(二重口縁)2030		△	-	PLD-1452
SB2025-台付甕2032		○	-	PLD-1453
SD2001-甕2483		△	-	PLD-1454
SD2001下層-甕2484		○	-	PLD-1455
SD2001下層-甕2486		○	-	PLD-1456
SD1001-甕79		○	-	PLD-1457
SD1001-壺77		◎	-	PLD-1458
SD1003-甕		○	-	PLD-1459
SD1003-甕		○	-	PLD-1460
SK2112-甕2568		△	-	PLD-1461
SK2112-甕2569		○	-	PLD-1462
SB2064-甕2172		○	19.1	PLD-1463
SB2064-壺2171		△	15.9	PLD-1464
SB2067-甕2203		○	14.2	PLD-1465
SB2070-壺2226		△	4.8	PLD-1466
SB2072-甕2264		△	7.0	PLD-1467
SB2080-甕2280		○	63.0	PLD-1468
SB2080-甕2281		○(内側)	29.0	PLD-1469
SB2080上層-壺?甕?2369		○	56.0	PLD-1470
SB2080上層-壺2366		△	7.3	PLD-1471
SB2080上層-甕2374		△	13.0	PLD-1472
SB2080下層-壺2328		○	58.0	PLD-1473
SB2081-甕2407		△	25.0	PLD-1474
SB2082-台付甕2417		△	58.0	PLD-1475
SB2083-台付甕2428		○	59.0	PLD-1476
SB2083/2056-甕2425		○	55.0	PLD-1477
SB2057-台付甕2410		△	27.0	PLD-1478
SB2064-壺		×	12.0	PLD-1479
NR2002落込み-壺2579		△	51.0	PLD-1480
SK1011-台付甕96		○	42.0	PLD-1481
SK1072-甕140		△	40.5	PLD-1482
SK1072-甕142		○	58.5	PLD-1483
SB1002-台付甕25		△	57.0	PLD-1484
SD47-深鉢2		○	50.1	PLD-1485
NR1002-蓋111		○	42.2	PLD-1486
土器集中群-甕2592?		△	17.5	PLD-1487

## 5. 本川遺跡出土木製品の樹種同定結果

植田弥生 (株式会社 パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

愛知県豊田市の本川遺跡から出土した木製品 (169 点) および自然木 (171 点)、合計 338 点の樹種同定結果を報告する。

樹種調査は 4 回に渡り実施されており (表 18)、この節では 4 回の樹種同定結果を集計し、同定根拠とした材組織の記載と、樹種同定結果から見た遺跡の全体的な木材利用と古植生について若干の考察を行った。また住居建築材の試料数が比較的多くあり、周辺遺跡においても同時期の建築材樹種の報告があるので、これらと樹種選択性を比較検討した。

一部試料については、材組織標本を再度顕鏡し、同定結果に修正を加えた。主な修正は、自然木のヒノキと同定されていた中から、根材を識別した点である。また同定結果の表示が分析者により異なるがほぼ同一分類群を指しているものについては、モミはモミ属に、ツブラジイはシイノキ属に、ヤマグワはクワ属に含めた。

このまとめに際し、樹種同定試料 (材組織標本) には新規の通番 (樹種試料 No. 1 ~ 338) を付けた。添付 CD に収録した樹種同定結果表には、この通番と各調査時に使用した番号を対比して表記してある。

### 2. 試料と方法

各試料の分析者を表 18 に、帰属時期の調査試料数を表 19 にまとめた。

樹種同定は、各試料から材の横断面・接線断面・放射断面を探し、剃刀を用いて各 3 方向の薄い破片を削ぎ取り、スライドガラスの上に並べ、ガムクロラル (抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液) で封入し、永久材組織標本を作製し、これを光学顕微鏡で 30

~ 400 倍に拡大して観察を行い、材組織の形質をもとに同定した。

樹種試料 No. 20 ~ 338 の材組織標本は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

### 3. 結果

表 3 に検出樹種の試料数を時期別に集計した。樹種は各木器の記載事項の中で報告されているのでここでは一覧表を提示していないが、樹種同定を行った試料一覧と同定結果は添付 CD に収録してある。

#### 樹種記載

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の量は少ない。仮道管に 2 本が対になるらせん肥厚があり、分野壁孔は小さなヒノキ型である。

カヤは暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、材は水湿に強く加工しやすい。

マキ属 *Podocarpus* マキ科

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。多数の樹脂細胞が年輪内に均一に散在する。分野壁孔はトウヒ型、1 分野におもに 2 個ある。

マキ属には当地域にも分布するマキ (イヌマキ) と紀伊半島・伊豆半島・山口県以西に分布するナギがあり、材組織からは両種を識別できない。いずれも暖帯の山中に生育する常緑高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れている。現在の分布からマキの可能性が高い。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.koch  
イヌガヤ科 図版 4 2 (樹種試料 No. 86)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。仮道管にらせん肥厚があり、カヤと異なり樹脂細胞が認められる。

イヌガヤは岩手県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。材は緻密で固い

が小径なので小型の器具や細工物などに使われるが、遺跡からは建築材として検出されることがあり、当遺跡においても建築材に利用されていた。

モミ属 *Abies* マツ科 図版 4 1R( 樹種試料No.144)

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂道や樹脂細胞はない針葉樹材。放射断面において放射柔細胞の接線壁に数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のスギ型やヒノキ型、1分野に1～6個がやや雑然と配置している。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属には暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。材組織は類似しており区別はできないが、分布からモミの可能性が高い。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図版 4 3( 樹種試料No.49)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った鋸歯状肥厚が顕著である。

アカマツは暖帯から温帯下部の平地から山地に分布し、やや乾燥した陽光地に生育する。人間活動との関係が深く二次林に多く生育する。材は堅く耐水性に優れる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

検出された2点ともに、年輪幅が狭く晩材部の量は少なく、分野壁孔はややヒノキ型に近いものも多く含まれており、典型的なスギ材とはやや異なっていた。しかし、晩材部の仮道管は厚く肥厚しており、放射組織の壁も厚く、分野壁孔は全般に大型で早材部では典型的なスギ型が観察され、1分野に2～4個あるが主に2個である。従ってスギと同定される。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する。材はやや軽軟で加工は容易である。

クロベ *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科

Ⅲ期 SB2064 の建築部材、Ⅲ～Ⅴ期 NR3001 の杭から検出された。

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量はやや多く仮道管は厚く肥厚している。分野壁孔はヒノキ型と孔口が広く開きスギ型に近いものが見られ、1分野に主に2個あるが3～5個ある分野も目立つ。

ネズコ(クロベ)は本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版 4 4( 樹種試料No.166) 5( 樹種試料No.203)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材部の仮道管壁はあまり肥厚していないものと、移行は急で晩材の量は少なく仮道管は厚く肥厚しているものがある。分野壁孔は壁孔縁の幅より孔口の幅が狭いヒノキ型で1分野に2～4個、主に2個が水平に配列している。

自然木の中には根材があり、特にNR2002から多く検出された。根材の晩材部は1～2層と少なく、仮道管の径は枝材より大きく、早材と晩材の仮道管の径の差は少なく、年輪界はやや不明瞭で、分野壁孔は大きく1分野に2～5個で枝材より数が多い。また、晩材部の肥厚は明瞭であるが、全般に構成細胞が大きく、枝材と根材の中間的な特徴を示し根張り部分の材と推定される試料も自然木に多く観察された(樹種No.152・153・154・159・160・161・165・175・177・180・183・184・185・187・191・193・198・200・280・296)。根張りとは推定される試料もNR2002から多く出土した。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれる。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) ヒノキ科 図版 4 6( 樹種試料No.91)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は大きなヒノキ型で、孔口はヒノキより大きく開き、孔口の幅と壁孔縁の幅が同じぐらい開き、孔口の開口は水平に近づく。

サワラは東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。材はヒノキよりやや軽軟で劣る。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔の輪郭は丸く一部でヒノキ型が観察され1分野に主に2個ある。ヒノキまたはサワラと思われるが、保存が悪く分野壁孔が充分観察できなかったためにヒノキ属とした試料である。

アスナロ *Thujopsis dolabrata* sieb. et Zucc. ヒノキ科 図版 4 7( 樹種試料No.100)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は小さなヒノキ型、1分野に2～4個ある。

アスナロは日本特産で1属1種で、本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用であるがヒノキよりやや劣る。

ヒノキ科 Cupressaceae

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は1分野に2～4個、壁孔の輪郭は丸くヒノキ型に似るが、細胞壁が不朽しているため分類群を絞ることができなかった試料である。

針葉樹 conifer

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材であるが、保存が悪くそれ以外の形質の特徴は不明な試料である。

ヤナギ属 Salix ヤナギ科

小型の管孔が単独または2～4個が複合し晩材部に向いゆるやかに径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、放射組織は単列異性で道管との壁孔は大きく交互状に密在する。

ヤナギ属は暖帯から温帯の水湿地や丘陵地の日当りのよい所に生育する落葉高木または低木で多くの種類がある。材組織は類似しているため樹種は特定できない。材質は軽軟で切削は容易だが耐朽性は低い。

オニグルミ Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura クルミ科

単独あるいは2～3個が複合した中型で楕円形の管孔が除々に径を減じながら分布し、接線状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性または上下端部に方形細胞がある異性、1～3細胞幅、道管との壁孔はやや大きく交互状である。

オニグルミは暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木である。材は加工しやすく狂いが少ない。

コナラ属 アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科

集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、放射組織は同性で単列と集合状があり道管との壁孔は孔口が大きく開き柵状・交互状に配列する。

アカガシ亜属はいわゆるカシ類で、おもに暖温帯に分布する常緑高木である。山野に普通なアラカシ・アカガシ・

シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性に優れる

コナラ属 コナラ亜属 コナラ節 Quercus subgen. Quercus sect. Prinus ブナ科 図版5 8(樹種試料No. 215)

年輪の始めに中型の管孔が配列し、晩材部は薄壁で角形の小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、放射組織は単列と集合状があり道管との壁孔は交互状・柵状である。

コナラ節は暖帯から温帯の丘陵から山地に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は丈夫で割裂性が良い。

コナラ属 コナラ亜属 クヌギ節 Q. subgen. Q. sect. Cerris ブナ科 図版5 9(樹種試料No. 218)

年輪の始めに大型の管孔が1～3層配列し、晩材部は厚壁で円形の小型の管孔が単独で放射状に配列する環孔材。接線断面と放射断面の形質は、前述のコナラ節と同様である。

クヌギ節は暖帯の山野に普通の落葉高木で、クヌギとアベマキが属する。二次林にも多く、材は重厚で割裂性が良い。

クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科 図版5 10(樹種試料No. 226)

年輪の始めに大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。放射断面はコナラ節・クヌギ節と同様であるが、接線断面において放射組織は同性で単列のものだけである。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性にすぐれる。

シイノキ属 Castanopsis ブナ科 図版5 12(樹種試料No. 126)

年輪始めに中型の管孔が間隔をあけて配列し徐々に径を減じ、年輪界付近では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。樹芯部では幅の狭い集合放射組織があり、その部分で年輪界が大きくずれる。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、放射組織は単列同性である。

樹芯部以外の材部で細胞幅の狭い集合放射組織が出現していた試料を、ツブラジイ (Castanopsis cuspidata

Schottky) と特定した。ツブラジイと同定した試料は、細胞幅の狭い集合放射組織が近接して2本見られ、年輪界は大きく波形を描いている。

シイノキ属は暖帯に生育する常緑広葉樹である。関東以西に分布するツブラジイ(コジイ)と、本州の福島県・新潟県佐渡以南に分布するスダジイがある。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科

年輪の始めに大型～中型の管孔が1～2層配列し、その後は小型の管孔が多数集合し接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に大型結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材は堅い。

エノキ属 *Celtis* ニレ科

年輪の始めに大型の管孔が配列し徐々に径を減じて行き、年輪界付近では非常に小型の管孔が多数集合して塊状・斜状・接線状に配列する散孔材。道管の壁孔は交互状に密在し、穿孔は単穿孔、放射組織は異性で1～10細胞幅で縁に鞘細胞がある。

エノキ属は落葉高木で、本州以南の低地から山地に普通のエノキ、北海道以南の山地に生育するエゾエノキ、近畿以西の山地にまれに生育するコバノチョウセンエノキがある。材は硬いがあまり強くない。

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科

厚壁で中型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合してまばらに分布し、管孔の径は年輪界近くでやや減少し、晩材では帯状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状で横に伸びた孔口はつながり流れ、穿孔は単穿孔、放射組織は異性で1～5細胞幅の紡錘形で道管との壁孔は交互状に密在する。

ムクノキは関東以西の暖帯から亜熱帯の山野に普通の落葉高木である。材は堅く丈夫である。

クワ属 *Morus* クワ科

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材部では小型の管孔が少数集合して塊状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚があり、放射組織は異性で1～5細胞

幅の紡錘形で上下端に方形細胞や直立細胞があり道管との壁孔は大きくて交互状に配列している。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。分布から恐らくヤマグワ (*Morus australis* Poiret) と思われる。材は重硬・強靱で保存性が高い有用材である。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb.et Zucc. カツラ科

小型の多角形の管孔が年輪内に密在し管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒数が30本前後の階段穿孔、内腔に弧状のチロースがある。放射組織は異性で1～2細胞幅、多列部の上下端や中間に方形細胞や直立細胞が単列で1～3層あり、道管との壁孔は階段状である。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の溪谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良く狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

サクラ属 *Prunus* バラ科 図版5 14(樹種試料No.274) 15(樹種試料295)

小型の丸い管孔が単独あるいは数個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向けて徐々に径を減じる散孔材。接線方向に配列する障害細胞間道が生じる。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性に近い異性、1～5細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

根材は中心部に髓が無く、年輪は不明瞭で管孔配列は疎ら、放射組織は大きく粗雑である。それ以外の形質は幹材と同様である。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育し、常緑を含み主には落葉の低木や高木でヤマザクラ・マメザクラなど約25種が属する。材は粘り気があり強く保存性も高い。

カマツカ *Pourthiaea villosa* (Thunb.) Decaisne var. *laevis* (Thunb.) Staf. バラ科 図版5 16(樹種試料No.292)

小型で円形の管孔が主に単独で散在し、年輪の始めは管孔が密に分布し、年輪界では極めて小型となる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に3～7細胞幅の紡錘形、上下端に方形細胞や直立細胞が単列で1～3細胞高あり、

道管との壁孔は小型で交互状、数珠状に軸方向に連なる大型の結晶細胞がある。

カマツカは暖帯から温帯の山野に普通の落葉低木である。材は重硬・強韌で割裂しにくい。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg.  
トウダイグサ科

年輪の始めに大型の管孔が単独または放射方向に複合して並び、晩材部では2～数個の小型で厚壁の管孔が放射方向に1列に配列して分布する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、放射組織は単列異性で放射柔細胞は大きく、道管との壁孔は小型で交互状である。

アカメガシワは宮城県・秋田県以南の暖帯の平野や山野に普通の落葉高木である。材は軽軟で質は良くない

カエデ属 *Acer* カエデ科

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科

小型の管孔が単独または2～数個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性、一部ではあるが層階状に配列する傾向がみられた。横断面や接線断面から分枝部の材であることが判り、道管配列がやや粗雑で道管の径がやや大きいのは、節部であると共に根材である可能性も考えられる。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。材は軽軟で加工し易く、材面は絹糸光沢がある。木理は不規則で耐久性は低く狂いがやすい。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ属

非常に小型で多角形の管孔が散在する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅、道管との壁孔は交互状・階段状である。

ヒサカキは暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。

ウコギ属 *Acanthopanax* ウコギ科 図版5 13(樹種試

料No. 266)

小型で薄壁の角張った管孔が接線状や斜状に文様をなしで配列する散孔材。道管の壁孔はやや大きく交互状、穿孔は単穿孔、内腔に隔壁状のチロースがある。放射組織は異性、1～5細胞幅、細胞高は非常に高く、構成細胞は粗雑で鞘細胞があり、道管との壁孔は大きくて交互状である。

ウコギ属は暖帯から温帯の山中に生育する落葉低木で、北海道から本州に普通に生育するヤマウコギ、北海道以南の浅山に分布するケヤマウコギ、近畿地方以西に分布するオカウコギなどがある。コシアブラは北海道以南の山地に普通の高木で、材は年輪の始めにやや大型の管孔が間隔をあけて配列することから、当試料はコシアブラ以外のウコギ属の材である。

ミズキ属 *Cornus* ミズキ科

小型の管孔が多くは単独で均一に分布する散孔材。道管の穿孔は横棒数が多い階段穿孔である。放射組織は異性、主に3細胞幅、多列部は平伏細胞からなりその上下端に方形細胞や直立細胞が単列で伸び片端の単列部の方が細胞数が多いものが目立ち、道管との壁孔は交互状である。

ミズキ属は暖帯から温帯の山地斜面や谷筋に普通の落葉高木で、ミズキ・ヤマボウシ・クマノミズキがある。材は緻密で加工しやすい。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

中型の管孔が年輪の始めに間隔を空けて1層配列し、その後は厚壁で小型の管孔が単独または2～3個が複合して散在する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、1～2細胞幅である。

トネリコ属は、おもに温帯に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種がある。材は重硬で弾力性があり折れにくい。

ニワトコ *Sambucus racemosa* Linn. subsp. *Sieboldiana* (Miquel) Hara スイカズラ科

やや小型の管孔が散在し、年輪の始めは分布数が多く、年輪界では扁平で極めて小型の管孔が帯状の配列する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、主に3～4細胞幅の整った紡錘形、上下端に直立細胞が見られ、縁辺部に鞘細胞があり、道管との壁孔はやや大きく交互状である。

ニワトコは本州以南の暖帯から温帯の山野に普通の落葉低木である。材は軽軟で髓が太い。

散孔材 (根材) diffuse-porous wood (root)

やや小型の管孔が均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数の多い階段穿孔、放射組織は異性、1～3細胞幅、上下端に方形細胞や直立細胞が単列であり、片端の単列部が長くなる。全般に構成細胞は薄壁で大きく粗雑である。節部の可能性もあるが、放射柔細胞が大型となっているので根材と同定した。ミズキ属の形質に類似していた。

広葉樹 broad-leaved tree

保存が悪く変形もしているため、道管を持つ広葉樹材であるが分類群は特定できなかった試料である。

木製品の樹種構成

木製品の各器種と樹種の関連は別項で詳細な検討がなされているので、ここでは樹種調査を行った木製品全体の樹種構成の特徴を記す。

木製品の時期は、II期(弥生時代)～VI期(戦国時代)に渡るが、多くはII-1期?(弥生時代中期末)からIII期(古墳時代中期)で、III期に属する試料が最も多い(表20)。II期からVI期の木製品167点からは、針葉樹12分類群(98点)、落葉広葉樹10分類群(57点)、常緑広葉樹3分類群(12点)が検出された。ヒノキが43点で最も多く、ヒノキと同属のサワラ(18)やヒノキと

表18 分析試料と分析者一覧

器種	分析担当者	樹種試料No.	分析試料の先頭表示	合計
木製品	元興寺	No.1～19	元興寺-	19
	パレオ・ラボ 植田弥生	No.20～95	パレオ・ラボ1-	76
	パレオ・ラボ 植田弥生	No.96～146	パレオ・ラボ2-	51
	パレオ・ラボ 松葉礼子	No.206～210	パレオ・ラボ3-	21
		No.323～338		
木製品合計				167
自然木	パレオ・ラボ 植田弥生	No.147	パレオ・ラボ2-	1
	パレオ・ラボ 松葉礼子	No.148～205	パレオ・ラボ3-	170
		No.211～322		
自然木合計				171
総合計				338

表19 分析試料の時期と点数

時期 (土器編年対応)	歴史時代	器種	試料数
II期	弥生時代～古墳時代前期	木製品	3
II-1期?	弥生時代中期末?	木製品	7
II-2期	弥生時代後期	木製品	17
II-3期 (川原上層III-2)	古墳時代前期	木製品	24
II-3期? (川原上層III-2?)	古墳時代前期?	木製品	1
II～III期	弥生時代～古墳時代中期	木製品	5
III期 (松河戸II併行)	古墳時代中期	木製品	91
		自然木	171
III～V期	古墳時代中期～中世	木製品	18
VI期	戦国時代	木製品	1
試料合計			338

サワラの識別が困難でヒノキ属(17点)としたものを含めると合計78点となり、調査試料数の約半数を占めている。そして時期ごとに見ても、II-1期?からヒノキおよびヒノキ属は継続的に多用され続けてきたことが判った。ヒノキが最も多いがサワラやヒノキ属も含め、板・杭・柱根・建築部材・礎板・棒・鳥形・織機具?・方形槽など様々な用途に使用されている。ヒノキの次に多く検出されたクリは杭に、クワ属も杭に、クヌギ節とシイノキ属は矢板、コナラ節は柱・柱根などに多く、広葉樹材の方が器種と樹種選択の幅はヒノキやヒノキ属に比べ狭いようであった。

#### 自然木の樹種構成

自然木は、III期に属する自然流路NR2002(58点)と溝SD2001(91点)、出土不明の22点である(表20)。

自然木の合計171点からは、針葉樹3分類群(104点)、落葉広葉樹17分類群(67点)が検出された。木製品と同様にヒノキが最も多く検出された。しかし木製品に比べ、針葉樹の分類群数はイヌガヤとヒノキの2分類群と少なく、常緑広葉樹は検出されず、落葉広葉樹の種類数は16分類群が検出され種類が豊富であった。また、ヒノキ(10点)やサクラ属(1点)そしてサクラ属とは異なる散孔材(1点)の根材合計12点が検出された。根材が含まれていた事から、これらは遺跡周辺に生育していた可能性がある。そしてSD2001からはケヤキの倒木(樹種No.147)が検出され、この遺跡内にケヤキの大木が生育していた事が確認された。

NR2002と溝SD2001の検出樹種を比較すると、ヒノキが圧倒的に多く、ヒノキの根材も検出された点は共通する。しかし、NR2002はヒノキ以外にはイヌガヤ(2点)とカツラ(1点)が検出されただけで、検出種類数は少ない。SD2001は、ヒノキ・イヌガヤ・カツラのほかに、クワ属・エノキ属・ヤナギ属・クリなど多種類の落葉広葉樹が検出され、検出種類数17分類群のすべてがSD2001から出土している。もし自然流路NR2002から多くの種類が検出されたのであれ

ば、水系域の森林から流木が流入したものと解釈し易いが、実際は溝SD2001の方がヒノキと共に非常に多種類の落葉広葉樹が検出された。出土遺構によりこのような相違が見られた要因については、不明である。

自然木と木製品で共通する樹種は、温帯針葉樹のイヌガヤとヒノキ、落葉広葉樹のヤナギ属・コナラ節・クヌギ節・クリ・エノキ属・クワ属、合計8分類群であった。これは、自然木と木製品から検出された主要な分類群数(約32分類群)の約1/4、自然木の主要な分類群数(18分類群)の約半数近くを占めている。従って自然木の樹種は、木製品の樹種と比較的関連性が高いとも受け止められ、自然木には加工の度合いが低く加工過程の廃材の可能性もある材も含まれていた事と調和的である。

前述の木製品からも検出されたコナラ節・クヌギ節などのほかにも、ケヤキ・ニワトコ・サクラ属・ウコギ属・アカメガシワ・ムクノキなど検出された落葉広葉樹は、暖温帯の落葉広葉樹林に普通の樹種であるが、森林伐採後などに形成される二次林の主要な構成樹種でもある。なお、ヤナギ属とカツラは河畔や溪谷沿いに生育し、検出されたほかの広葉樹とは生育環境が異なる。また、カツラは検出されているほかの落葉広葉樹に比べ冷涼で多湿な環境地に生育している。おそらく現在は遺跡周辺にカツラの自然分布は見られなと思われるが、当時は遺跡周辺にもカツラが生育可能な環境があった可能性は否定できない。

#### 古植生

今回、樹種調査を行った試料の多くはII~III期に属し、特に木製品も自然木も共にIII期(古墳時代中期)の試料が多い。この頃はまだ主に遺跡周辺地の森林を利用していたと推測されるので、木製品の樹種も伐採運搬が容易な利用範囲の森林を少なからず反映していると考えられる。

当遺跡の結果は、木製品にも自然木にもヒノキが非常に多い点が大きな特徴である。そして自然木からは、サクラ属1点・散孔材(サクラ属とは異なる)1点の根材が検出され、近くにこれら

表 20 本川遺跡の時期別の樹種同定結果

樹種	時期	木製品							自然木			合計	
		II期 弥生～ 古墳前期	II-1期? 弥生中期末	II-2期 弥生後期	II-3期 古墳前期	II～III期 弥生～ 古墳中期	III期 古墳中期	III～V期 古墳中期～ 中世	VI期 戦国時代	III期 古墳中期			
										NR2002	SD2001		不明
カヤ						1							1
マキ属						1							1
イヌガヤ						3				2	3		8
モミ属			1	1			2						4
アカマツ						2							2
スギ			1			1							2
クロベ						1	1						2
ヒノキ		4			5	5	28	1		47	31	10	131
ヒノキ 根材								4		8	2		14
サワラ		2				12							14
ヒノキ属		1		1		6	9						17
アスナロ					1	1							2
ヒノキ科						2	1						3
ヤナギ属	1					1					2	4	8
オニグルミ											1		1
アカガシ亜属			2	1		1							4
コナラ節	2				1	5					3	2	13
クヌギ節			6			4					2	2	14
クリ					11	16					5	1	33
シノキ属(ツブラジイ)			7										7
ケヤキ											2		2
エノキ属						2					9	1	12
ムクノキ											2		2
クワ属(ヤマグワ)				2		2					13	1	18
カツラ										1	1		2
サクラ属											2		2
サクラ属 根材											1		1
カマツカ											2		2
アカメガシワ											1		1
カエデ属												1	1
トチノキ											1		1
ヒサカキ									1				1
ウコギ属											5		5
ミズキ属						1							1
トネリコ属				2									2
ニワトコ						1							1
針葉樹											1		1
広葉樹											1		1
散孔材 根材											1		1
合計		3	7	17	25	5	91	18	1	58	91	22	338

の広葉樹が生育していたと推測され、ケヤキの倒木も遺跡内から出土し生育が確認された。更に、ヒノキの根材も10点が検出され、幹材との区別が困難で明確には識別できなかったが根張り部位と思われる試料も複数あった。この事から遺跡周辺にヒノキが生育していた可能性も考えられる。

しかし現在では、植栽以外に遺跡周辺にヒノキは自然には生育していない。最も近くでヒノキの

自然分布と思われる所は、奥三河の山岳地域である(文化庁、1973、自然史編纂調査会、1990)。当遺跡から北東に約15Km 六所山(標高606m)や北へ約20Kmの猿投山(標高629m)には、海拔500m前後にモミ-落葉広葉樹林が分布し、モミとミズナラを主体してツガや常緑広葉樹のウラジロガシ・アカガシも伴う森林にヒノキが生育している。

遺跡の報告では、矢作川上流域の猿投山南麓の標高 80～100 m に立地する伊保遺跡からヒノキの報告が見られる（猿投遺跡調査会、1974）。ここでは、古墳時代前期に比定される王江式土器を伴う井戸内から、コナラ・クリに次いで、焼けあとや刃痕があるヒノキの材が比較的多く出土し、このほかにも針葉樹のツガ・スギ、常緑のカシ類やシャシャンボ、落葉広葉樹のモモ・エノキ・フジ・ヤマウルシなども検出されている。

従って開発や集落の継続と規模拡大が進行する以前、当遺跡での調査では弥生時代や古墳時代では、周辺の丘陵地や矢作川上流の低山地帯にもヒノキが生育していて、ヒノキの分布範囲は現在より広く、標高の低い地域にも生育していた可能性もあったと考えられる。

当遺跡は標高約 19m で碧海台地の西側縁辺部の低地に立地し、東方に矢作川が南下している。本来当地域の自然植生はカシ林・シイ林・タブノキ林など常緑広葉樹林が主体である。当遺跡で常緑広葉樹が多く検出された時期は、II-2 期（弥生時代後期）に限られ、アカガシ亜属が板・曲柄三又鋏・杭から、シイノキ属が矢板に使用されていた。そして III 期（古墳時代中期）になると、自然木に常緑広葉樹は見出されず、木製品においても杭（樹種 No. 338）1 点にアカガシ亜属が使用されていただけである。従って II-2 期までは、照葉樹林の存在が類推され、アカガシ亜属やシイノキ属などの常緑広葉樹を利用して生活し、伐採や開発を行っていた影響で遺跡周辺の常緑広葉樹は減少してゆき、次第にコナラ節・クヌギ節・クリ・エノキ属などの二次林要素の落葉広葉樹が増加したと考えられる。当遺跡から約 500m 北部に位置し、当遺跡と同様に低地に立地する川原遺跡（豊田市鴛鴦町）の掘削具の用材においても、アカガシ亜属の減少時期が指摘されている（樋上ほか、2001）。川原遺跡では掘削具に、川原上層 I 式期（弥生時代後期前葉）以降はすべてアカガシ亜属が使用されていたが、川原上層 III 式期（弥生時代終末期・古墳時代初頭）からは掘り棒がアカガシ亜属である以外はすべてコナラ節に変わる。

この原因として、台地上のアカガシ亜属が優先的に利用されたために枯渇し、次の用材としてコナラ節が使用されたと考えられている。

当遺跡の古墳時代中期の導水路 SD1001 の花粉分析を見ると、アカガシ亜属は多い。しかし、マツ属複維管束亜属やコナラ亜属・クリ属・エノキムクノキ属など二次林要素の落葉広葉樹が多く、イネ科も目立つことから、遺跡の周囲は開けていた様子が伺える。当遺跡の昆虫化石群集の調査からも、畑作物や果樹の植栽地や水田の存在、アカマツ林やクヌギ・コナラなど落葉広葉樹林の存在が推定されている。従って当遺跡での樹種同定・花粉分析・昆虫化石群集からも、本川遺跡は III 期（古墳時代中期）には土地開発が進展していた様子が読み取れる。

ただし III 期に開発が進行していたとはいえ、III 期の自然木からは豊富な種類数の落葉広葉樹が検出されている。やはり川原遺跡（愛知県埋蔵文化財センター、2001）の花粉分析結果においても、弥生時代後期から古墳時代前期の花粉組成は中世に比べると、木本花粉の占める割合が高く、常緑広葉樹ではアカガシ亜属が多く、落葉広葉樹は二次林要素の樹種が目立つが検出された種類数は多い。このような結果は、当遺跡の古墳時代中期の花粉分析結果と非常に類似している。従って、遺跡から近距離の照葉樹林が開発の影響を受けて減少して二次林化が進行したが、木本花粉の占める割合や落葉広葉樹の樹種構成が多いことから、地域一帯の森林はまだ豊富に保たれていたと推定される。当遺跡の自然木において落葉広葉樹の種類数が多い結果は、花粉分析結果と符号している。

#### 住居建築材

樹種試料の中から、柱・柱根・礎板・建築材部材などを時期ごとに集計した（表 21）。時期は II-1 期？（弥生時代中期末？）から III～V 期（古墳時代中期～中世）に渡る。特に III 期（古墳時代中期）は試料数が多く、住居址から出土した試料も多い。表 22 に周辺遺跡の焼失住居址出土炭化材の樹種を集計し、比較資料とした。

当遺跡では、II 期と III 期の複数の住居址からヒ

表 21 本川遺跡出土住居建築材樹種

時期	II-1期?	II-3期	II期	II~III期	III期							III~V期	合計
	弥生 中期未?	古墳前期	弥生~ 古墳前期	弥生~ 古墳中期	古墳中期							古墳中期 ~中世	
遺構 器種	SB1013 堀立柱 柱根	垂木 丸太(柱?)	柱根	柱根	SB2001? 竪穴 建築部材	SB2002 竪穴 建築部材	SB2064 竪穴 建築部材		礎板	SB2067 竪穴 建築部材	柱・柱? 丸太(柱?)	杭or柱	
樹種													
マキ属								1					1
イヌガヤ								1					1
モミ属		1											1
クロベ								1					1
ヒノキ	4			5				2	1				12
サワラ	2				3	1		6				1	13
ヒノキ属	1							1		1			3
ヒノキ科					1					1			2
ヤナギ属			1										1
コナラ節			1				3	1			1		6
クリ											2		2
クワ属		1											1
ミズキ属											1		1
合計	7	2	2	5	4	1	3	13	1	2	4	1	45

表 22 周辺遺跡出土住居建築材樹種

遺跡 所在地 立地 時期	川原遺跡 (2001) 鴛鴨町 低地 弥生中期後半		神明遺跡 (2001) 鴛鴨町 台地上 弥生後期	岩長遺跡 (2000) 百々町 台地上 弥生後期		古墳時代		合計
	SB201 竪穴	SB211 竪穴	SB268	SB110	SB112	SB203	SB214	
	樹種							
モミ属		1						1
ヒノキ科	1							1
アカガシ亜属				4	1			5
コナラ節	18	3	7			1		29
クヌギ節		3	5			1	1	10
シイノキ属					1	1		2
サクラ属					1			1
イヌエンジュ		2						2
トチノキ					1			1
トネリコ属		1						1
合計	19	10	12	4	4	3	1	53

ノキやサワラが優占して検出された。広葉樹ではコナラ節が多く、やはり複数の時期の住居址から出土し、柱材に使用されていた。このほかに針葉樹ではマキ属・イヌガヤ・モミ属、落葉広葉樹ではクリ・ヤナギ属・クワ属・ミズキ属が検出され、常緑広葉樹は検出されていない。なお、Ⅲ期（古墳時代中期）の竪穴住居址 SB2064 の柱穴 P145 は、柱根がコナラ節で、礎板はヒノキであった。この組み合わせからは、地盤が弱く湿気が多い低地において住居を守るために、礎板にはコナラ節より材質が堅く丈夫で耐水性・耐久性に優れたヒノキを使用したと推測される。

低地に立地する川原遺跡（豊田市鴛鴨町）の弥生時代中期後半の住居址では、コナラ節が最も多く、針葉樹のモミ属・ヒノキ科も検出されている（愛知県埋蔵文化財センター 2001）。ヒノキ科（ヒノキ・サワラなど）やモミ属の針葉樹と落葉広葉樹のコナラ節が多く利用されている点では、当遺跡の樹種利用と類似性が見られる。一方、台地上に立地する神明遺跡（豊田市鴛鴨町）と岩長遺跡（豊田市百々町）からは、針葉樹の利用は確認されていない。弥生時代後期に川原遺跡から台地上へ集落を移動したと思われる神明遺跡の弥生時代後期の住居址は、落葉広葉樹で二次林の主要素でもあるコナラ節とクヌギ節が多く使用されていた（植田、2001）。岩長遺跡では、弥生時代後期は常緑広葉樹のアカガシ亜属とシイノキ属が多い。しかし古墳時代では、シイノキ属が検出されてはいるが少なく、落葉広葉樹は弥生時代後期では検出されなかったコナラ節とクヌギ節が利用されていた（植田、2000）。

ヒノキやサワラなどの針葉樹を多く利用していた当遺跡の樹種利用を周辺遺跡の結果と比較して見ると、時期の変化よりも低地か台地かの立地環境と利用樹種の構成が関連しているように思われた。低地の住居址では広葉樹材と針葉樹材の利用が多く、台地では常緑と落葉の広葉樹が多く使用され針葉樹は検出されていない。このような傾向が一般的であるのか、なぜ低地の方が針葉樹材を利用していたのかは、まだ資料数が少ないので

今後の課題と思われる。

## 4. まとめ

木製品 167 点と自然木 171 点の樹種同定結果から、主に次の事が明らかになった。

①主にⅡ期とⅢ期に属する木製品 167 点からは、針葉樹 12 分類群（98 点）、落葉広葉樹 10 分類群（57 点）、常緑広葉樹 3 分類群（12 点）が検出され、ヒノキが最も多く、同属のサワラとヒノキ属を含めると調査試料数の約半数を占めていた。ヒノキ属はⅡ-1 期？から継続的に多用され、板・建築材・棒・鳥形・織機具？・方形槽など様々な器種に使用されている。クリ・クワ属は杭、クヌギ節・シイノキ属は矢板、コナラ節は柱・柱根から主に検出され、ヒノキに比べ広葉樹材は製作器種が選択されていた。

②Ⅲ期の NR2002 や SD2001 から出土した自然木 171 点からは、針葉樹 3 分類群（104 点）、落葉広葉樹 17 分類群（67 点）が検出され、木製品と同様にヒノキが最も多く検出された。常緑広葉樹は検出されず、落葉広葉樹の種類数（17 分類群）は豊富であった。ヒノキ（10 点）・サクラ属（1 点）・散孔材（1 点）の根材が検出され、近くに生育していた可能性がある。倒木はケヤキで、SD2001 に生育していた。ヒノキとその根材は NR2002 と溝 SD2001 から多数が検出され、落葉広葉樹はほとんどが SD2001 から検出された。遺構により出土樹種構成に違いがある要因は、不明である。自然木と木製品に共通する樹種は、針葉樹のイヌガヤ・ヒノキ、落葉広葉樹のヤナギ属・コナラ節・クヌギ節・クリ・エノキ属・クワ属で、木製品の約 1/3 強が自然木からもみいだされたが、自然木には加工過程の廃材も含まれていた可能性がある。落葉広葉樹の多くは、暖温帯の落葉広葉樹林に普通の樹種であるが、二次林の主要な構成樹種でもあった。また冷涼で多湿な環境に生育するカツラも出土した。

③ヒノキは現在では植栽以外には奥三河の山岳地帯付近や木曾山地まで行かないと生育していないが、NR2002 や SD2001 から根材が検出

された事や伊保遺跡の報告例などから、当時は遺跡周辺地にも生育していた可能性が考えられた。当地域の本来の自然植生である照葉樹林は、木製品の樹種構成からⅡ-2期には存在が認められるが、Ⅲ期には遺跡周辺から減少し二次林化した落葉広葉樹林に変化したと思われる。川原遺跡(豊田市鴛鴨町)の木製品の樹種利用の変化や、当遺跡の花粉分析や昆虫化石群集の調査からも人為的な開発や森林利用による同様な環境変化が認められている。しかし、遺跡周辺の落葉広葉樹林の樹種構成は、比較的種類数が豊富であった。

④Ⅱ期とⅢ期の建築部材・柱・柱根は、複数種類の針葉樹と落葉広葉樹材が使用されていた。特に針葉樹のヒノキ属(ヒノキ・サワラ)が多く、次にコナラ節が多い。近隣遺跡の住居建築材樹種を比較すると、当遺跡と同様に低地に立地する遺跡(川原遺跡)では針葉樹とコナラ節が多く、台地上の遺跡(新明遺跡・岩長遺跡)では針葉樹は検出されず常緑樹のアカガシ亜属・シイノキ属や落葉樹のコナラ節・クヌギ節など広葉樹が多い傾向が見られた。当遺跡のⅢ期(古墳時代中期)の竪穴住居址SB2064の柱穴P145では、柱根がコナラ節で、礎板はヒノキの組み合わせが見られ、礎板にはコナラ節より耐水性・耐久性に優れたヒノキを選択した可能性があり、低地の住居址で針葉樹の利用が多いのは、広葉樹材より耐水性・耐久性に強いからかも知れない。

鈴木(2000)は、遺跡出土の木材で最も優占する針葉樹のスギ・ヒノキ・モミ・サワラの4樹種に注目し、古代の木材利用文化圏を提唱した。ヒノキが優占するヒノキ文化圏は、畿内を中心として太平洋側を東西に広がり、大井川付近でスギ文化圏と接している。当遺跡はこのヒノキ文化圏の東部に位置し、本州中部のサワラ文化圏にも近い位置にある。調査結果も正に、ヒノキが多く、サワラも少なからず検出された。各文化圏は各針葉樹の天然分布を反映しているが、古代において最良材だが資源が少なかったコウヤマキの代用として、各地元でそれぞれ豊富なスギ・ヒノキ・モミ・サワラを活用したと鈴木(2000)は見ている。当

遺跡は、広範囲で見るとヒノキの豊富な地域ではある。しかし当遺跡は矢作川右岸の低地の微高地に立地しており、遺跡より北部の猿投山や六所山などの山地帯に行かなければヒノキは分布していない。この奥三河一帯の山地林はモミ-落葉広葉樹林であり、針葉樹ではヒノキよりモミやツガが優占する森林である。しかし当遺跡からは、モミを含むモミ属の材は4点と非常に少なく、ツガは検出されなかった。当遺跡からヒノキが非常に多く検出された背景として、次のような事が推測される。ひとつは、遺跡周辺の丘陵地にもヒノキが生育していた可能性である。自然木からヒノキの根材が検出された点からも、あまり遠くない所にヒノキが生育していた可能性がある。それか、奥三河の山地帯にもヒノキが現在より多く生育しており、モミやツガより材質が良質のヒノキを選択的に伐採し水系を利用して矢作川流域の当遺跡まで運んで来た可能性である。今回の結果から当遺跡でヒノキが弥生時代から多用されていた背景について結論は出せないが、今後も地域一帯の資料が蓄積されていくに従い、古植生と集落の発達変遷などの関係から樹種利用の傾向や変化が読み取れるものと期待される。

#### 引用文献

文化庁 1973 『植生図・主要動植物地図 愛知県』文化庁。

自然史編纂調査会 1990 『東海の自然史』財団法人東海財団。

猿投遺跡調査会 1974 『伊保遺跡』。

樋上 昇・永井邦仁・木川正夫 2001 「豊田地区出土の木製品について」『研究紀要 第1号』愛知県埋蔵文化財センター。

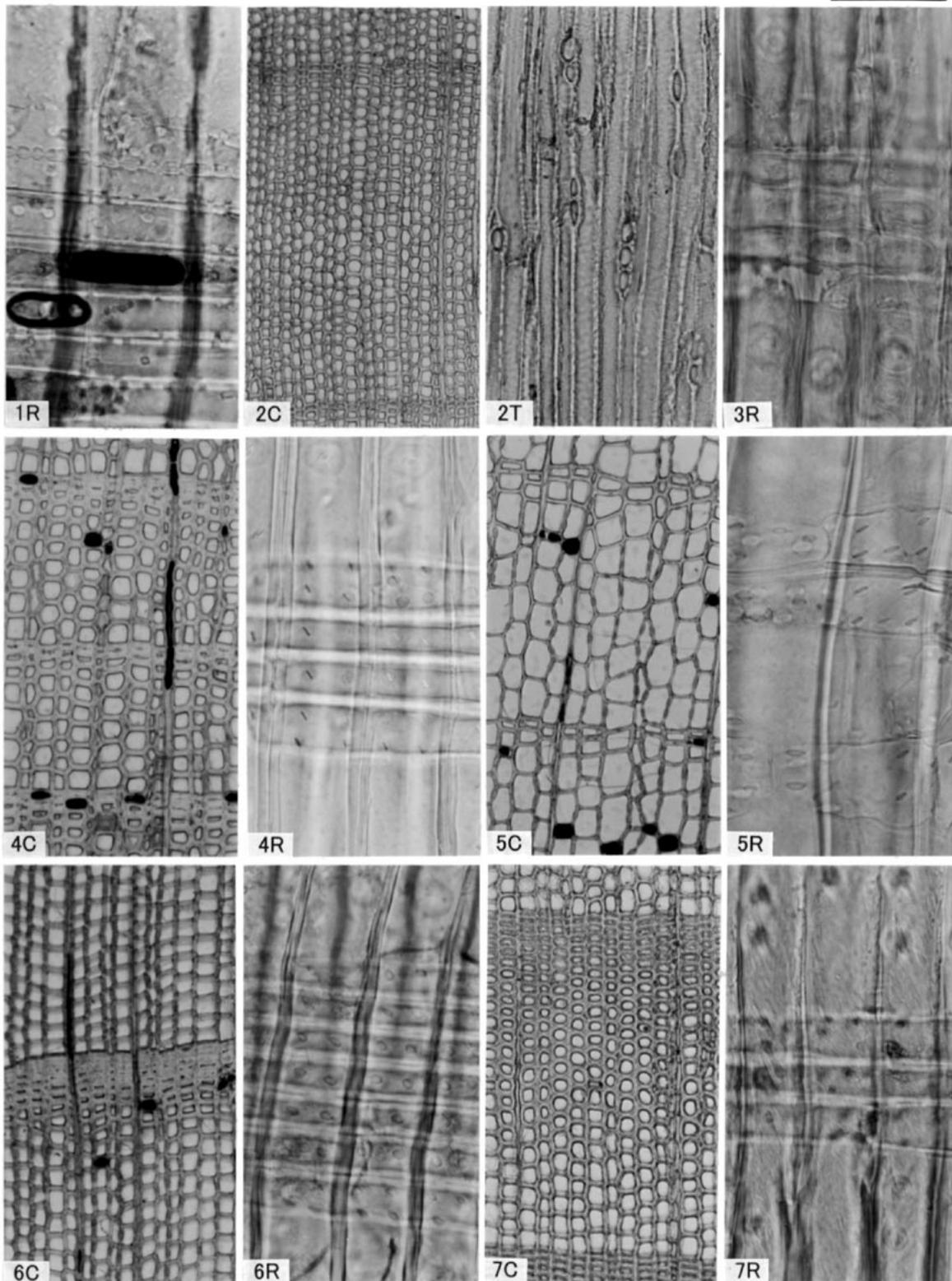
愛知県埋蔵文化財センター 2001 『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

植田弥生 2001 「神明遺跡焼失竪穴建物(SB268)出土炭化材の樹種同定」『神明遺跡Ⅱ』豊田市教育委員会。

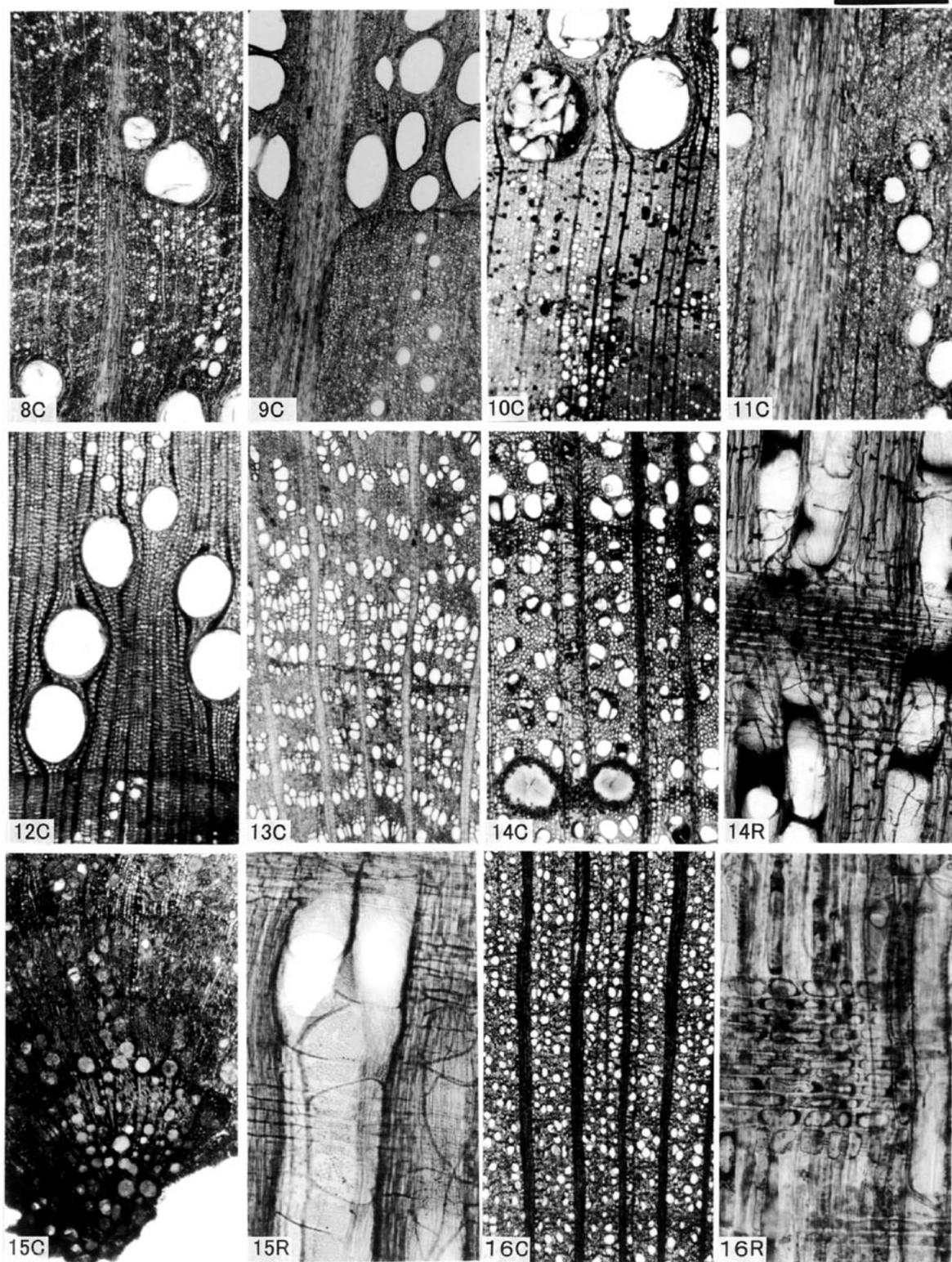
植田弥生 2000 「岩長遺跡出土炭化材の樹種同定」『岩長遺跡』豊田市教育委員会。

鈴木三男 2000 「木材」『考古学と植物学』同成社。

写真図版 4 本川遺跡 主な樹種の組織写真 (その1)



写真図版 5 本川遺跡 主な樹種の組織写真 (その2)



## 6. 本川遺跡の属性表および石器観察について

池谷勝典・馬場伸一郎（株式会社 アルカ）

平均した値をとった。

### 1. 属性表の凡例について

- ・石材・・・肉眼での鑑定。
- ・整形加工・・・刃部を形成したり、石器のかたちを整えるための加工。
- ・成形加工・・・素材の厚みを減らしたり、素材を大きく変形するための加工。
- ・素材技術・・・石器の素材を獲得するときの加工。
- ・素材形態・・・石器の素材のかたちです。縦長剥片、横長剥片などがこの欄に記入される。
- ・剥離技術・・・肉眼での鑑定。

### 2. 剥離技術凡例について

- ・HP は石材に対し、より変形しないハンマーの押圧剥離（石錐、削器にみられる）。
- ・S'P はSP よりも変形しないハンマーの押圧剥離（有茎石鏃と石錐にみられる）。
- ・HD は石材よりも硬いハンマーによる直接打撃。
- ・HvD は、石材に対しより変形しないハンマーによる垂直打撃。

### 3. 石鏃と石錐の属性項目について

- ・打点の径・・・コーン開始部の径で、単位はミリである。
- /・剥離の開始部・・・圧縮の力が強い順に、砕け・コーンタイプ、曲げタイプにわけて分類した。ただし、中間的な様相をもつものについては、強い属性を前にして「コーン・曲げ」、「曲げ・コーン」と表現した。
- ・稜線・・・目で見えて発達し、触感でも指に引っかかるものを「発達」、目で見えて発達していないが、触感で引っかかるものを「やや発達」、それ以外を「未発達」とした。
- ・末端形状・・・ステップ・フェザーに分類して記述した。
- ・剥離の幅・・・剥離の幅は、連続した剥離の中で中程度の典型的な大きさのものを幾つか測り、

### 4. 石器群の観察

以下の本文中の番号は、報告図面の番号に対応している。ここでは、特に注目すべき石器について記述する。

#### ●石鏃 (1001 ~ 1004)

有茎石鏃が4点出土している。すべてS'Pの剥離技術でつくられており、ほぼ同時期の石鏃と考えられる。石材は、珪岩2点、下呂石1点、ガラス質安山岩であるが産地不明1点である。産地不明の11の石鏃は分析結果から、TYPEBという分類がなされ、三重県多度町の寺山遺跡、宮ヶ平A遺跡出土資料の分析結果と一致することが判明した。このように、原産地分析は、産地同定のほかに遺跡間、遺跡内での同一産地、母岩分析にも適応できることが明らかになった。

#### ●磨製石斧 (1022 ~ 1028)

本川遺跡からは、弥生時代の磨製石斧が計7点出土している。うち、太形蛤刃石斧が1点、柱状片刃石斧が1点、扁平片刃石斧が5点出土している。すべてハイアロクラスタイト（玄武岩質の溶岩流が水と接触して急冷し破碎して生じた多量のガラス質の小片からなる岩石）である。

#### ●特殊磨石 (1030)

1点確認される。この石器は、楕円礫の細長い側面、直角礫の細長い稜上を機能面とする石器である。本遺跡のものは、楕円礫の両側面に機能面をもち、比較的良好に使用されている。この石器は、時期がある程度限定され、中部地域では縄文時代早期から前期前半ごろによく見られる石器である。

#### ●砥石 (1040 ~ 1047)

1043・1044など非常によく使用された4面の砥石が特徴的である。非常に丁寧な研がれかたをした砥石で砥面の状態がそれほど緻密ではないので中砥の範疇に入るものである。

\* 属性分析表には、この報告書で使用している器種名と株式会社アルカ報告にあった器種名との併記を行った。同様に、報告書での石材名とアルカ報告での石材名も併記してある。あえて記すが、差が生じているところは、どちらかか正しいもしくは間違っている、ということを示すものではない。遺物検討の一助にいただければ、幸いである。（川添和暁：註）

番号	報告書内器種名	報告書内石材名	アルカ認定器種	アルカ認定石材	産地分析結果	刃部加工	整形加工	成形加工	素材技術	素材形態	備考	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1001	石鏡	下呂石	有莖石鏡	ガラス質安山岩	下呂石	SP	SP	なし	不明	剥片	先端部、莖部欠損	19.5	15.6	5.5
1002	石鏡	チャート	有莖石鏡	珪岩	選択外	SP	SP	なし	不明	剥片		26.7	14.4	5.1
1003	石鏡	チャート	有莖石鏡	珪岩	選択外	SP	SP	なし	不明	剥片	莖部わずかに欠損	36.1	14.1	5.9
1004	石鏡	安山岩	有莖石鏡	ガラス質安山岩	産地不明	SP	SP	なし	不明	剥片		42.5	14.3	5.1
1005	石鏡	下呂石	石鏡	ガラス質安山岩	下呂石	SP	SP	なし	不明	剥片	先端部が摩耗	36.3	8.5	7.8
1006	石鏡	黒曜石	石鏡	黒曜石	星ヶ台	HP	HP	なし	不明	剥片	先端部わずかに欠損	37.3	24.3	14.1
1007	石鏡	黒曜石	石鏡	黒曜石	星ヶ台	HP	HP	なし	HD	横長剥片		26.2	20.7	9.1
1008	石鏡	下呂石円礫	石鏡	ガラス質安山岩	下呂石	SP	SP	なし	不明	剥片		31.2	19.6	8.1
1009	スクレイパー	チャート	二次加工剥片	珪岩	選択外	なし	HD	なし	HD	横長剥片		30.0	52.0	12.0
1010	スクレイパー	下呂石	削器	ガラス質安山岩	下呂石	HP	HD	折取	HD	横長剥片	素材の末端辺に加工がある	29.1	41.5	10.9
1011	調整剥片?	チャート	器種不明	珪岩	選択外	なし	HI	HI	不明	剥片	剥片を四角形に板状に整形、用途不明	30.6	31.3	10.7
1012	使用痕剥片	黒曜石	石鏡未製品	黒曜石	星ヶ台	HP	HP	なし	HVD	剥片		18.9	13.2	4.2
1013	剥片	下呂石円礫	石核素材	ガラス質安山岩	下呂石	なし	なし	HVD	不明	剥片	楕円礫をHVDで分割	42.2	59.5	22.6
1014	剥片	黒曜石	剥片	黒曜石	星ヶ台	なし	なし	なし	HD	剥片		21.7	20.4	4.1
1015	剥片	黒曜石	石核	黒曜石	星ヶ台	なし	なし	なし	なし	角礫	石鏡の素材剥片をHで作出	20.5	20.2	9.7
1016	剥片	黒曜石	剥片	黒曜石	星ヶ台	なし	なし	なし	HD	剥片		10.6	13.7	3.8
1017	剥片	黒曜石	両極石器	黒曜石	星ヶ台	なし	なし	HVD	不明	剥片		25.9	17.9	8.3
1018	剥片	黒曜石	剥片	黒曜石	星ヶ台	なし	なし	なし	HD	縦長剥片	縁辺の剥離痕は事故剥離の可能性がある。	29.1	25.6	6.5
1019	石核	黒曜石	石核	黒曜石	星ヶ台	なし	なし	なし	不明	剥片	正面が剥片剥離作業の作業面となる	35.7	51.9	36.7
1020	粗製剥片石器	泥質凝灰岩	器種不明	凝灰岩	選択外	なし	HD	なし	不明	剥片		77.3	55.4	18.2
1021	粗製剥片石器	泥質凝灰岩	剥片	ホルンフェルス	選択外	なし	なし	なし	HD	縦長剥片		102.9	65.7	25.3
1022	両刃石斧	ハイアロクラスタイト	太形給刃石斧	ハイアロクラスタイト	選択外	研磨	敲打	敲打	不明	不明		115.2	59.2	37.6
1023	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	選択外	研磨	研磨	HD	不明	剥片	刃部に線状痕、使用痕分析	63.6	26.7	15.3
1024	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	選択外	研磨	研磨	不明	不明	剥片	刃部に線状痕、使用痕分析	48.0	20.8	8.8
1025	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	選択外	研磨	研磨	HD	不明	剥片		48.1	36.8	9.2
1027	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	扁平片刃石斧	ハイアロクラスタイト	選択外	研磨	研磨	HD	不明	剥片	刃部に線状痕、使用痕分析	58.3	42.6	14.0
1028	柱状片刃石斧	ハイアロクラスタイト	柱状片刃石斧	ハイアロクラスタイト	選択外	研磨	研磨	HD	不明	不明	刃部に線状痕、使用痕分析	103.1	34.5	36.6
1029	蝕石	花崗岩	蝕石	閃緑岩	選択外	なし	なし	なし	適用外	楕円礫	風化激しい	78.2	63.2	43.4
1030	磨石・蝕石	砂質凝灰岩	特殊磨石	砂岩	選択外	なし	なし	なし	適用外	楕円礫	側面の平坦面は、磨りて形成された面、主面部に敲打痕	74.5	82.0	48.3
1031	蝕石	泥質凝灰岩	蝕石	砂岩	選択外	なし	なし	なし	適用外	楕円礫	端部と側面に敲打	75.7	48.5	33.1
1032	台石?	アブライト	自然礫	砂岩	選択外	なし	なし	なし	適用外	礫	被熱	110	109.8	45.3
1033	台石?	細粒花崗岩	自然礫	砂岩	選択外	なし	なし	なし	適用外	礫		153.3	123.3	68.5
1034	台石?	アブライト	石段部材	砂岩	選択外	なし	なし	なし	適用外	扁平礫	表面摩耗	323	120.5	70.8
1035	火打石	チャート	剥片(火打石)	珪岩	選択外	なし	なし	なし	HVD	剥片	縁辺に微細剥離、滑れ	43.1	50.0	21.2
1036	火打石	チャート	剥片(火打石)	珪岩	選択外	なし	なし	HD	不明	剥片	自然面の周辺に微細剥離、滑れ顕著	30.4	43.1	19.0
1037	火打石	チャート	剥片(火打石)	珪岩	選択外	なし	なし	HD	不明	剥片	縁辺に微細剥離	60.8	27.4	13.2
1038	火打石	チャート	剥片(火打石)	珪岩	選択外	なし	なし	なし	HVD	剥片	縁辺に微細剥離、滑れ	36.2	35.1	26.0
1039	火打石	チャート	剥片(火打石)	珪岩	選択外	なし	なし	なし	HVD	剥片	縁辺に微細剥離、滑れ	57.3	30.1	14.5
1040	砥石	凝灰岩	砥石	凝灰岩	選択外	なし	不明	不明	不明	不明	同側面にU字状の溝状砥面作出	40.9	36.2	16.6
1041	砥石	泥質凝灰岩	砥石	凝灰岩	選択外	なし	不明	不明	不明	不明	4面が砥面、使用痕分析	75.2	36.6	13.2
1042	砥石	凝灰岩	砥石	凝灰岩	選択外	なし	不明	不明	不明	不明	手持ち砥石	67.5	51.8	21.4
1043	砥石	凝灰岩	砥石	凝灰岩	選択外	なし	不明	不明	不明	不明	4面が砥面	43.2	40.3	37.1
1044	砥石	泥質凝灰岩	砥石	砂岩	選択外	なし	なし	なし	不明	不明	4面が砥面、使用痕分析	103.4	42.3	37.5
1045	砥石	凝灰岩	砥石	凝灰岩	選択外	なし	不明	不明	不明	不明	4面が砥面	94.1	56.4	55.3
1048	砥石?	結晶片岩	砥石	結晶片岩	選択外	なし	なし	なし	不明	不明	表面に浅く窪んだ砥面あり。	111.2	70.7	23.6
1049	砥石	細粒花崗岩	砥石	結晶片岩	選択外	なし	なし	なし	適用外	礫	表面、側面に砥面、表面に敲打痕	154.3	94.4	36.7

表 23 出土石器調査表

## 7. 本川遺跡出土石器の使用痕分析

池谷勝典（株式会社 アルカ）

### 1. はじめに

本遺跡から出土した扁平片刃石斧3点、柱状片刃石斧1点、砥石2点について低倍率と高倍率による使用痕分析をおこなった。この分析は石器の装着方法、被加工物、使用法などを推定し、当時の石器がどのように作られ、使われていたのか明らかにしていくための有効な分析方法である。

### 2. 観察方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は東北大学の分類基準によっている（梶原・阿子島1981、阿子島1989）。

### 3. 分析資料について

資料の所属時期については、片刃石斧については弥生時代のものであり、砥石については、弥生時代以降の古代・中世のものであると考えられる。

#### PL1・扁平片刃石斧（1024）

石材は、ハイアロクスタイトである。刃部は、よく研ぎ出されてお直刃である。刃幅は19.5mm、刃角は55度である。裏面側の刃部には刃部に直交する線状痕が明瞭に観察できる（写真1）。

高倍率の使用痕観察では、裏面側刃部に明瞭な線状痕と不明光沢が観察される（写真2、3）。不明光沢は、やや明るい光沢で光沢面が凸凹しており比較的高所から低所まで広がるという特徴をもつ。いままでの光沢分類に当てはまらないため不明光沢とした。写真4は、表面側の刃部であるが裏面側ほど線状痕、光沢ともに顕著ではない。このことから裏面側がより対象物と接触していたと推定される。写真5は、研磨による線状痕と不明光沢が観察される。この光沢の成因は不明であるが石器が装着された際の装着痕の可能性がある。

以上のことからこの石器の使用法は柄に対して刃部が直交する横斧的な手斧のようなものか鑿のように柄の先端部の延長として装着されたものかのいずれかの装着で使用されたと推定される。

#### PL2・扁平片刃石斧（1025）

石材は、ハイアロクスタイトである。刃部は、よく研ぎ出され片刃で直刃であるが刃部研ぎ直しなどによってやや右斜め上に斜行する。刃幅は41mmで刃角は約55度である。裏面側の刃部には刃部に直交する線状痕が明瞭に観察できる（写真1）。

高倍率の使用痕観察では、裏面側刃部に線状痕と不明光沢が観察される（写真2）。線状痕については資料35ほど明瞭ではない。不明光沢は、やや明るい光沢で光沢面が凸凹しており比較的高所から低所まで広がるという特徴をもつ。いままでの光沢分類に当てはまらないため不明光沢とした。写真3は、表面側の刃部であるが裏面側ほど線状痕、光沢ともに顕著ではない。このことから裏面側がより対象物と接触していたと推定される。写真4、5は、研磨による線状痕と不明光沢が観察される。この光沢の成因は不明であるが石器が装着された際の装着痕の可能性がある。

以上のことからこの石器の使用法は柄に対して

刃部が直交する横斧的な手斧のようなものか鑿のように柄の先端部の延長として装着されたものかのいずれかの装着で使用されたと推定される。

#### PL 3・扁平片刃石斧 (1023)

石材は、ハイアロクスタイトである。石器は1/2ほど破損している。資料5とほぼ同じ石器である。刃部は、よく研ぎ出され片刃で直刃である。刃幅は破損により不明であるが刃角は約60度である。裏面側の刃部には刃部に直交する線状痕が明瞭に観察できる。

高倍率の使用痕観察では、裏面側刃部に線状痕と不明光沢が観察される(写真1、2)。不明光沢は、やや明るい光沢で光沢面が凸凹しており比較的高所から低所まで広がるという特徴をもつ。いままでの光沢分類に当てはまらないため不明光沢とした。写真3は、表面側の刃部であるが裏面側ほど線状痕、光沢ともに顕著ではない。このことから裏面側がより対象物と接触していたと推定される。写真4、5は、研磨による線状痕と不明光沢が観察される。この光沢の成因は不明であるが石器が装着された際の装着痕の可能性はある。

以上のことからこの石器の使用法は柄に対して刃部が直交する横斧的な手斧のようなものか鑿のように柄の先端部の延長として装着されたものかのいずれかの装着で使用されたと推定される。

#### PL 4・柱状片刃石斧 (1028)

石材は、ハイアロクスタイトである。上記3点とは違い、角柱状の器体をもつ石斧である。この石器に抉り部が作出されれば抉入柱状片刃石斧である。抉り部を作出しようとした痕跡はわずかながら観察される。刃部は、よく研ぎ出され片刃で直刃である。刃幅は30mmで刃角は約70度である。裏面側の刃部には刃部に直交する線状痕が明瞭に観察できる。

高倍率の使用痕観察では、裏面側刃部に線状痕と不明光沢が観察される(写真1、2)。不明光沢は、やや明るい光沢で光沢面が凸凹しており比較的高所から低所まで広がるという特徴をもつ。いままでの光沢分類に当てはまらないため不明光沢

とした。写真3は、研磨による線状痕と不明光沢が観察される。この光沢の成因は不明であるが石器が装着された際の装着痕の可能性はある。

以上のことからこの石器の使用法は柄に対して刃部が直交する横斧的な手斧のような装着で使用されたと推定される。

#### PL 4・砥石 (1041)

石材は、泥岩である。石器は4面砥石であり、よく使い込まれている。低倍率の表面観察では、砥面は非常に緻密であり、研磨痕なども非常に細かいのがわかる(写真1)。

高倍率の観察では、光沢が輝点程度のものが散在している状況である。

明瞭な使用痕光沢は観察されない(写真2、3)。

以上のことからこの砥石は、仕上砥であると言える。

#### PL 5・砥石 (1044)

石材は、砂岩である。石器は4面砥石であり、よく使い込まれている。低倍率の表面観察では、砥面は資料13と比べると砥面の粒子が粗のがわかる(写真1)。

高倍率の観察では、光沢は観察されずに砥面の凸凹が顕著であることと粒子がほぼ均一であるのがわかる(写真2、3)。

以上のことからこの砥石は、中砥であると言える。

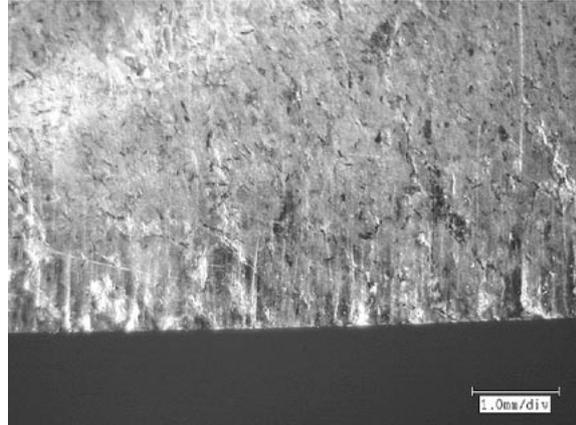
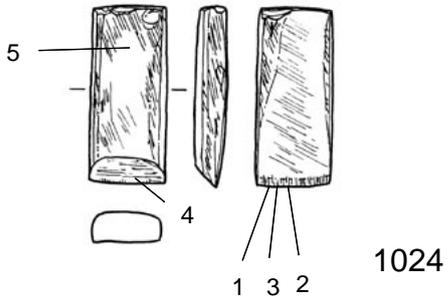
## 4. 総合所見

今回分析した4点の片刃石斧についてはほとんど同じような使用痕光沢が観察される。石斧に見られる使用痕光沢の成因については、不明である。複製石器を使った実験使用痕研究が必要である。

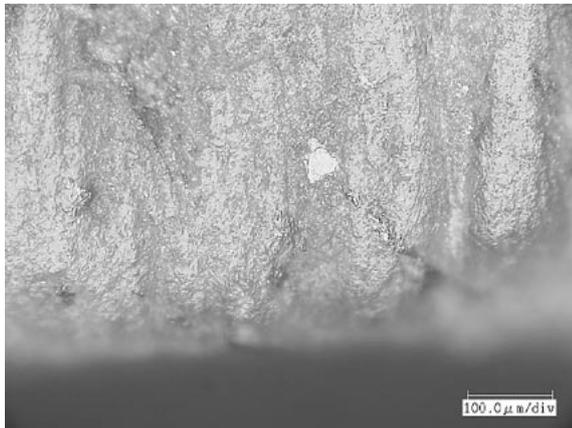
砥石2点については、中砥、仕上砥といった砥石の種類の違いを客観的に提示することができた。また、砥面には使用痕光沢が生じにくく、そのことが砥石という石器の特徴を示していると言える。

## 参考文献

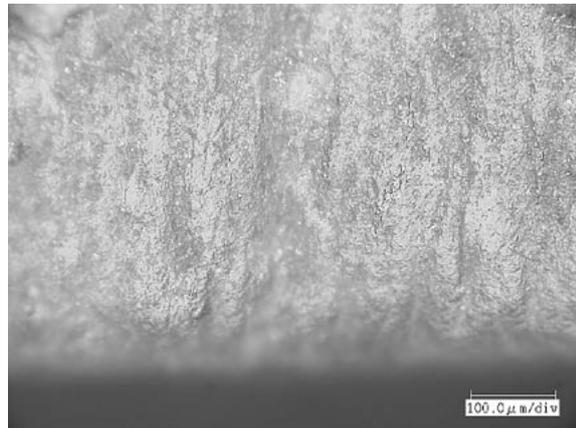
- 阿子島香 1989『石器の使用痕』考古学ライブラリー56 ニューサイエンス社  
梶原洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究-ポリッシュを中心とした機能推定の試み-」『考古学雑誌』67-1  
角張淳一 2000「続・石器研究についての感想」『東京考古』18 東京考古談話会  
梶原洋 1982「石匙の使用痕分析-仙台市三神塚遺跡出土資料を使って-」『考古学雑誌』68-2  
佐原 眞 1994『斧の文化史』東京大学出版会



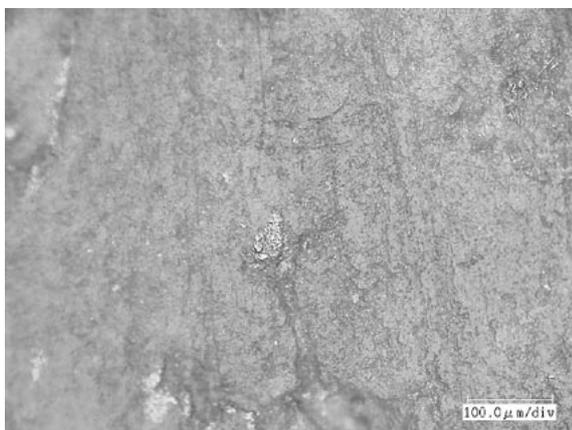
1 裏面側刃部拡大



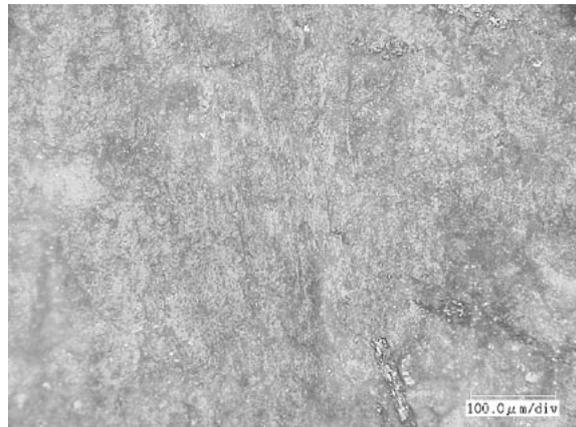
2 不明光沢と線状痕



3 不明光沢と線状痕

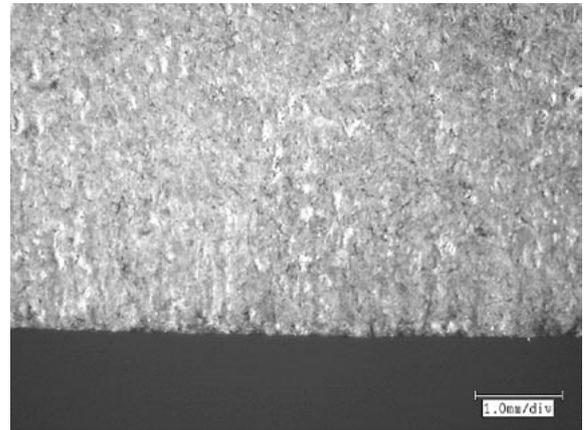
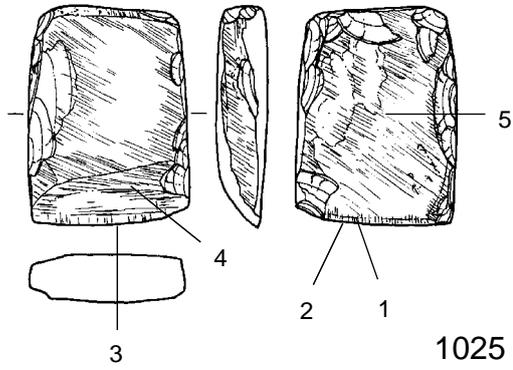


4 不明光沢

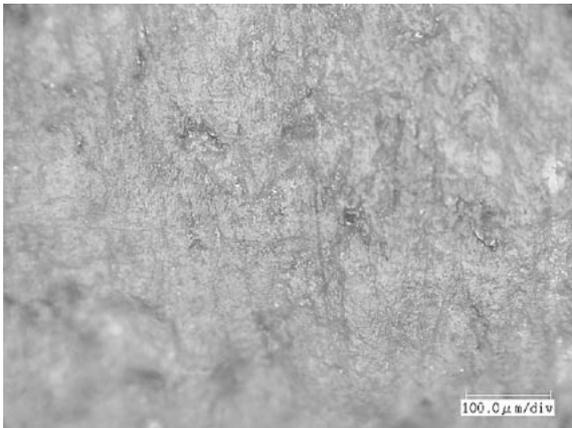


5 研磨痕と不明光沢

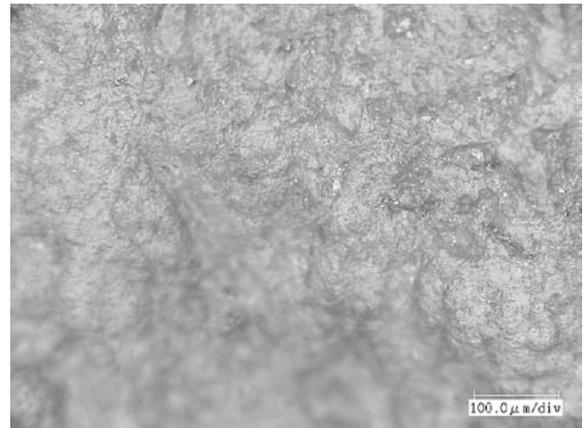
写真図版 6 石器使用痕 -1



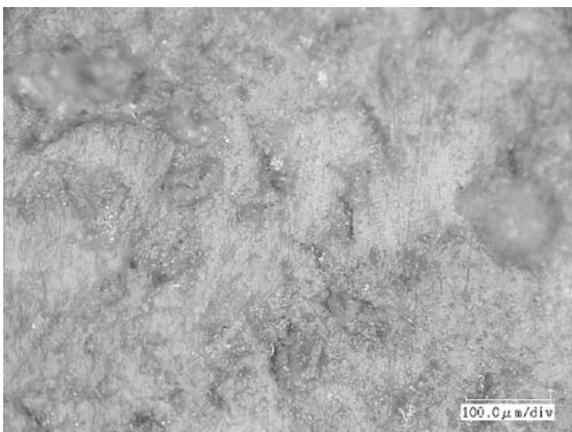
1 裏面側刃部拡大



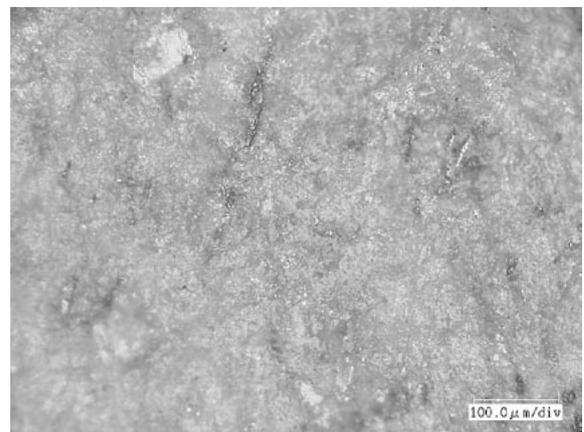
2 線状痕と不明光沢



3 裏面側刃部拡大

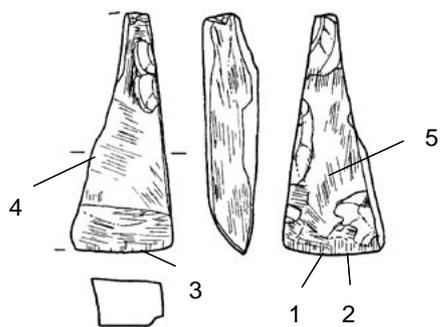


4 不明光沢と研磨痕

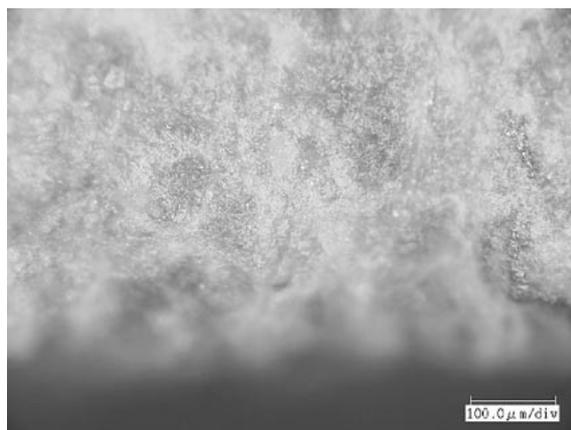


5 不明光沢と研磨痕

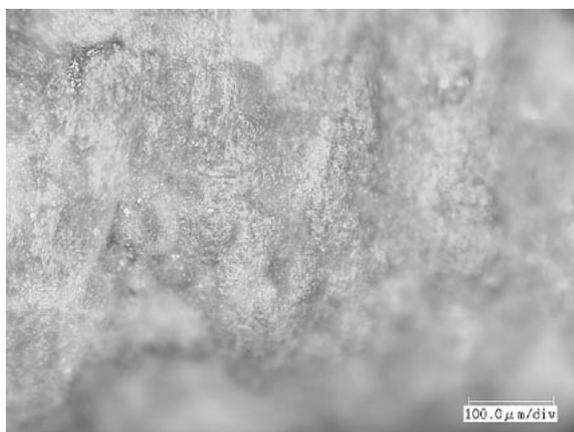
写真図版 7 石器使用痕 -2



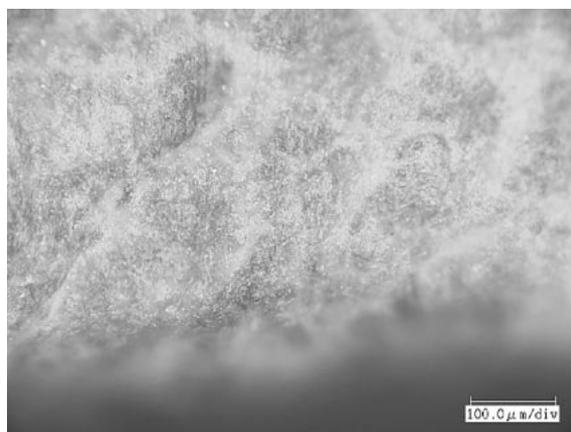
1023



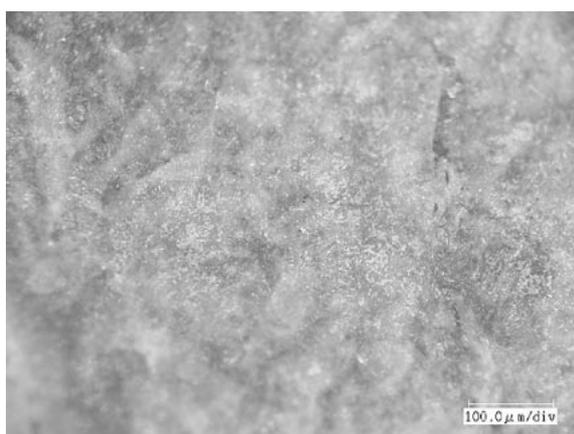
1 線状痕と不明光沢



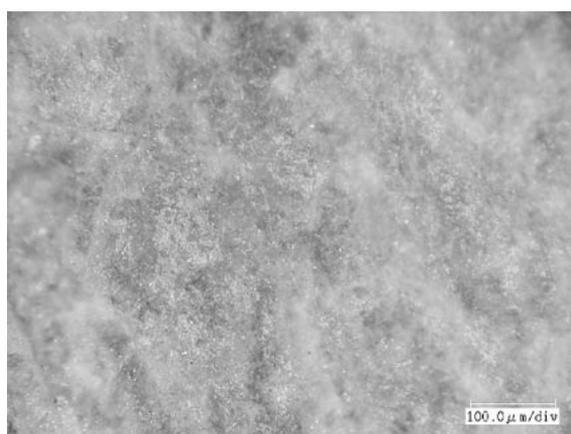
2 線状痕と不明光沢



3 線状痕と不明光沢

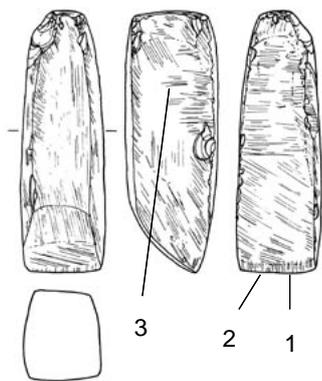


4 研磨痕と不明光沢

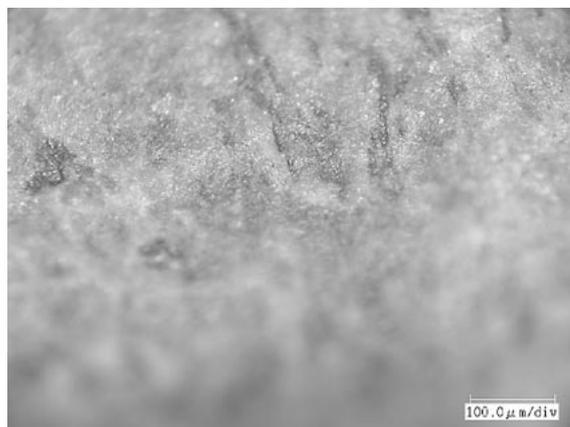


5 研磨痕と不明光沢

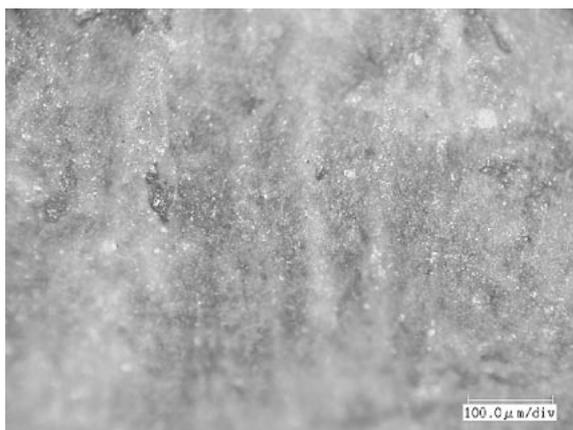
写真図版 8 石器使用痕 -3



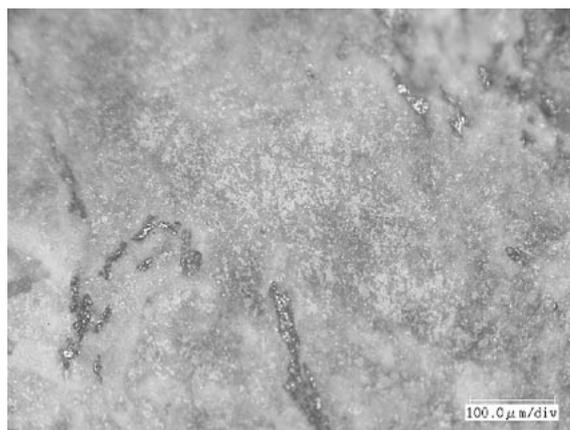
1028



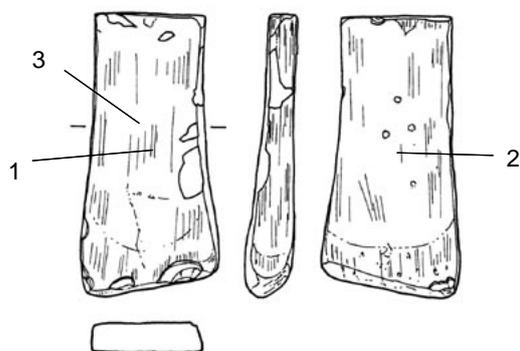
1 線状痕と不明光沢



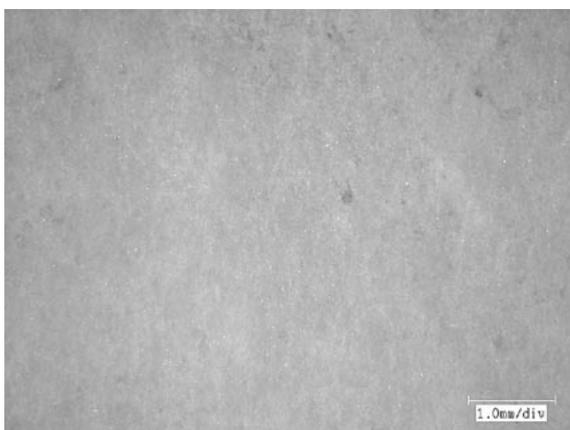
2 線状痕と不明光沢



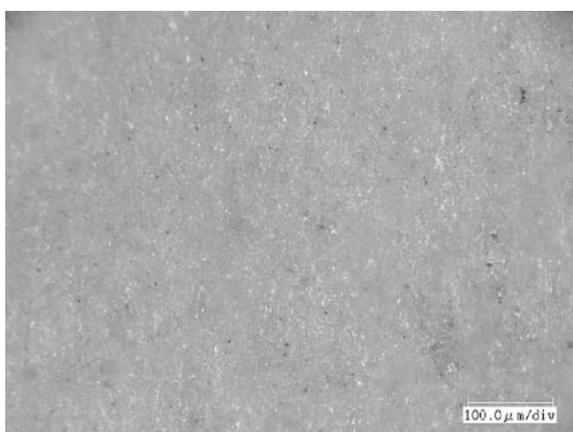
3 研磨痕と不明光沢



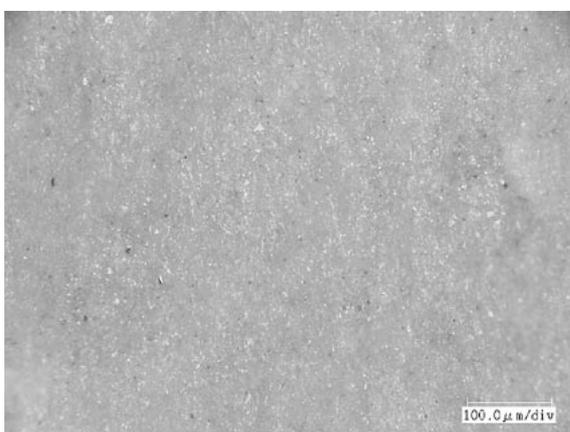
1041



1 砥面の低倍率写真

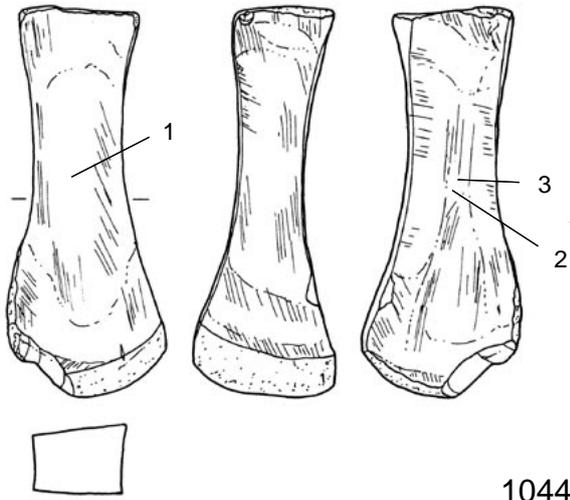


2 微弱な光沢

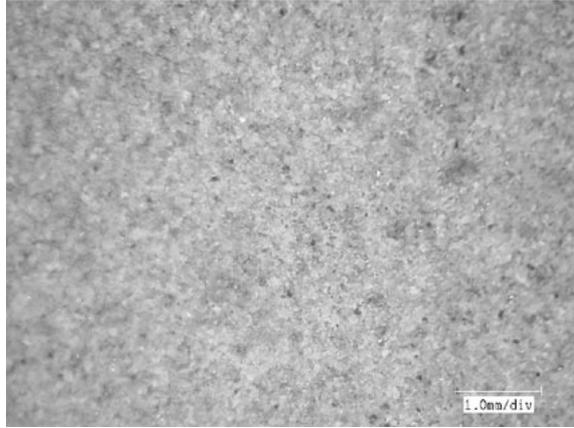


3 微弱な光沢

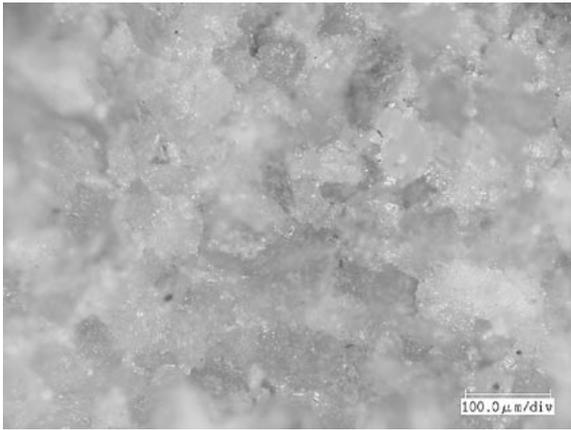
写真図版 9 石器使用痕 -4



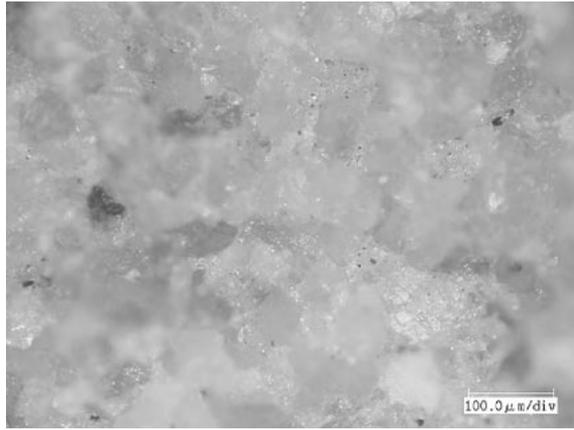
1044



1 砥面の低倍率写真



2 使用痕光沢なし



3 使用痕光沢なし

写真図版 10 石器使用痕 -5

## 8. 本川遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果

望月明彦（沼津工業高等専門学校）

表 24 判別図法・判別分析からの最終推定結果（左）  
および判別図法による推定結果と判別分析による推定結果（右）

分析番号	遺物番号	推定産地	判別分析					
			第1候補産地			第2候補産地		
			判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
AMY-1	1006	SWHD	SWHD	4.87	0	SBIY	98.86	0
AMY-2	1004	HNKJ	HNKJ	534.7	0	HNHJ	587.99	0
AMY-3	1007	SWHD	SWHD	7.58	0	SBIY	96.51	0
AMY-4	1008	GERO	GERO	3.28	0	NK	29.38	0
AMY-5	1010	GERO	GERO	5.17	0	NK	37.77	0
AMY-6	1013	GERO	GERO	1.51	0.0002	NK	18.87	0.0002
AMY-7	1005	GERO	GERO	5.16	0	NK	30.47	0
AMY-8	1019	SWHD	SWHD	13.12	0	SBIY	90.33	0
AMY-9	1001	GERO	GERO	9.42	0.0002	NK	27.46	0.0002
AMY-10	1012	SWHD	SWHD	7.77	0	WDTN	76.41	0
AMY-11	1018	SWHD	SWHD	8.01	0	SBIY	63.84	0
AMY-12	1017	SWHD	SWHD	2.15	0	SBIY	88.87	0
AMY-13	1016	SWHD	SWHD	9.98	0	SBIY	78.33	0
AMY-14	1015	SWHD	SWHD	13.55	0	WDTN	114.25	0
AMY-15	1014	SWHD	SWHD	7.66	0	WDTN	78.46	0

黒曜石資料は全て諏訪エリア星ヶ台群（旧霧ヶ峰系）である。

本研究室で用いている多変量解析法（判別分析）は、すでに知られている産地のどれに当てはまるかを解析する手法である。

黒曜石以外の資料は下呂石しか原石データがない。そのため、黒曜石以外では下呂石を除き、TYPEA,TYPEB という分類のみにとどめた。

TYPEB とした資料は、同じ三重県多度町寺山遺跡・宮ヶ平A遺跡出土の資料と分析結果が一致した。

この資料は判別図でも判別分析でも当てはまる産地原石がない。

TYPEA は寺山遺跡では検出されたが、本遺跡では確認されていない。

## 第Ⅳ章 まとめ

本川遺跡は、本調査の契機となった第二東海自動車道建設に先立つ試掘調査で新たに発見された遺跡である。しかしながら、付近には大清水遺跡（縄文）と車塚古墳が所在しており、本川遺跡の調査においても、この両遺跡に関連する時期を含めて、縄文晩期から戦国期にかけての遺構群を確認した。特に弥生前期から古墳中期の集落はA区からB区にかけての、沖積低地内に形成された幅100m程度の微高地上に展開している。

では最後に、この本川遺跡の調査成果について、時期を追って簡単にまとめることとする。

### Ⅰ-1期

今回の調査で最も古い遺物の所属時期は縄文晩期に属する。B区北東側に位置するSK60から馬見塚式期の壺が出土しており、このほかにも同時期の土器片がⅢ期の遺構内で確認されている。

本遺跡の北には縄文時代とされる大清水遺跡が『愛知県遺跡地図』に登録されている。大清水遺跡には正式な調査例はないが、今回の調査で出土した縄文晩期の土器により、この大清水遺跡と本川遺跡は一連の遺跡と考えられる。

### Ⅰ-2・3期

弥生前期～中期前葉（樫王式～水神平式期）の遺構群で特に注目されるのは、A・B区で検出した、2～6条平行して走る長さ4～7m、幅0.2～1.3mの溝群で、調査区内では5ヶ所確認している。溝の主軸の方位に2方向あることから、2時期以上に分けられる。溝間の距離が1.6～3.4mとやや広い点が気になるが、畝の畝間の溝である可能性も考えられる。

また、B区を北西から南東に走る幅2.8m、深さ0.6mの溝SD41は断面がV字形をなしており、この溝以北は遺構が希薄となることから、集落の北辺を画する溝である可能性が高い。

なお、本調査区において、この時期に属する明確な竪穴住居はないが、多数のピットを確認している。

### Ⅱ-1期

弥生中期末（長床式期）には3棟の竪穴住居がB区に築かれる。竪穴住居の数が少なく、重複がほとんど認められないことや、凹線文系の土器が全く出土していないことから、比較的短期間で廃絶したきわめて小規模な集落であったと考えられる。

ただし、A・B区の中央に位置する3×2間の掘立柱建物は、主軸の方位からこの時期に属する可能性が高い。とすれば、このような小規模な集落において、居住域からやや離れた位置に建てられた掘立柱建物にいかなる機能が想定されるのか注目される。

### Ⅱ-2期

弥生後期（川原上層Ⅰ～Ⅱ式期）にも、B区で4棟以上の竪穴住居が築かれている。このうち、SB1004とSB1007は重複していることから、小規模ではあるが、比較的継続して営まれた集落と考えられる。

また、A区の微高地西側に溝が4条掘削されている。このうち最も西端に位置する溝SD1005は、溝の西肩に矢板を打ち込み、分岐する溝SD1013が接続している。さらに、このSD1005に重複して掘削された溝SD1004からは大量のドングリが出土した。

### Ⅱ-3期

古墳前期（川原上層Ⅲ式期）には、B区の東側の谷（NR02）がさらに東側へ後退して、微高地がわずかではあるが拡大する。この時期に属する竪穴住居は3棟以上で、弥生中期末～後期と同様に東側の谷（NR1002）付近に集中する。

A区西側の谷(NR1001)の東には幅3.8m、深さ0.6mの溝SD1001からは川原上層Ⅲ-2式期の良好な土器群とともに、木製品が多く出土している。この木製品群には、2点の円形皿のほか、曲物の側板とおもわれる板や垂木材などが認められる。また、ミカン割り段階のアカガシ亜属の柾目板があることから、この時期の本川集落では鋤・鋤類をふくめた木製品を自家生産していたことがわかる。

このSD1001は、溝内に直交して2列に杭を打ち込んでおり、そこから東に溝SD1002を分岐させている。同様の施設は弥生後期のSD1013においても認められることから、これらの溝の南側に位置する低地部には灌漑用水を必要とする水田などの生産関連施設が存在した可能性がある。

### Ⅲ期

古墳中期はこの遺跡において、最も稠密に遺構が展開する時期である。A・B区の微高地上には約100棟もの竪穴住居が重複して築かれている。遺構の方位と重複状況から、4小期程度の変遷が想定されるが、出土土器の所属時期から、おおむね5世紀前葉～中葉におさまる比較的短期間の集落といえる。調査区内で確認された各小期の竪穴住居数は15～22棟であることから、未調査部分をふくめた総住居数は30棟前後とおもわれ

る。1棟の居住者を5人とすると、集落全体の人口は150人前後と復原できる。

竪穴住居の主軸方位(図16)は、N-20°-Eが4棟と最も多く、N-89°-W、N-36°30'-W、N-20°-W、N-4°30'-W、N-0°、N-6°-E、N-8°30'-E、N-9°-E、N-29°-E、N-29°30'-Eが各2棟でそれに次ぐ。おおむね真北を中心に東西30°前後の振れに収まるようである。

この集落では、掘立柱建物は少なくとも調査区内においては1棟も確認されていない。竪穴住居の規模は、長軸を基準にグラフ化すると(図17)、5～5.5mを中心に正規分布を示すが、3.5m以下の小型住居が3棟ある一方、7～7.5mが2棟、そして8.3mが1棟など、大型住居もみられる。

しかしながら、これら大型竪穴住居は西側に集中するものの、他の中・小型竪穴住居群との間に何らかの区画施設が設けられていたわけではないため、いわゆる首長層と呼ばれるような、集落の一般成員層から隔絶した存在ではなかったようである。SD2001から出土した木製品群をみても、机天板や円筒形刳物容器など、一部にやや質の高い品はあるが、他の同時期の集落遺跡と比較しても、決して質量ともに豊富とはいえず、むしろ貧弱な印象すら感じられる。西側の谷NR2001か

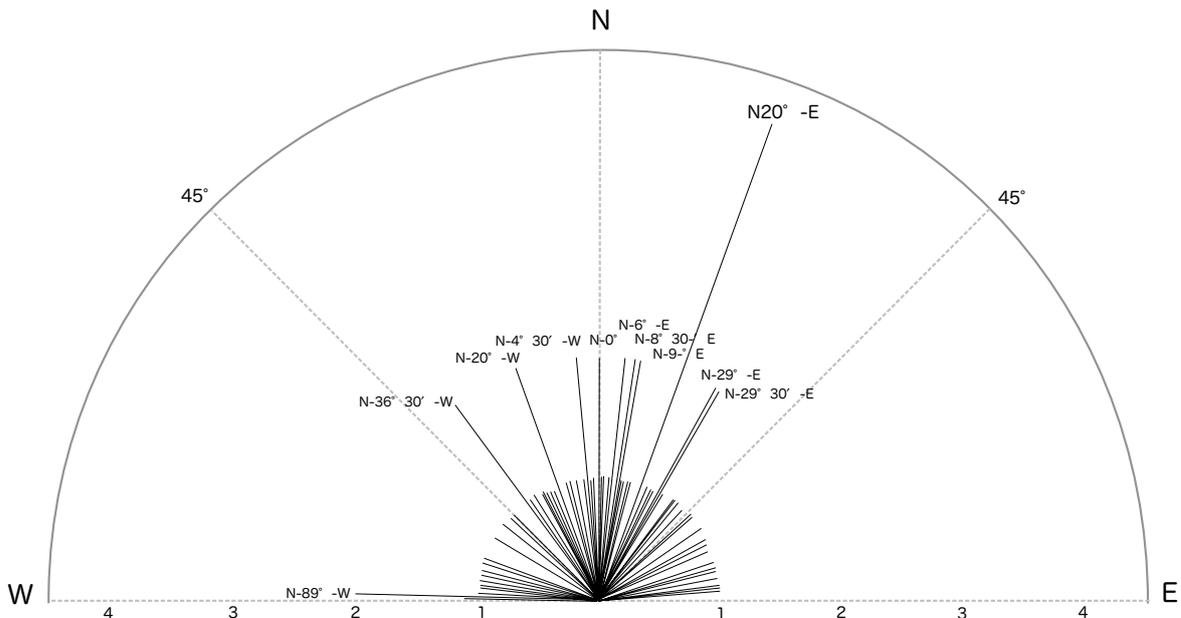


図16 Ⅲ期竪穴住居の主軸方位分布グラフ

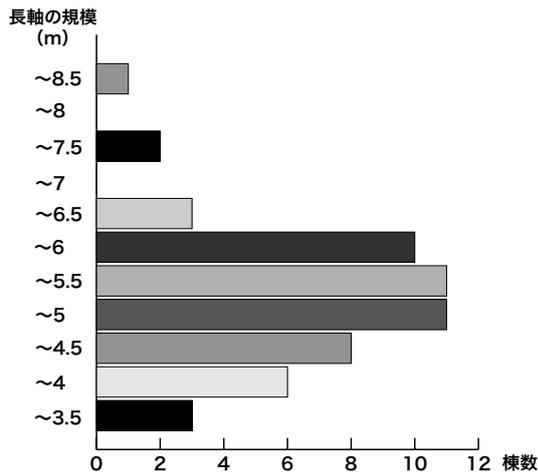


図 17 Ⅲ期竪穴住居の主軸長分布グラフ

ら出土した鳥形木製品がこの時期に属するとすれば、この集落には似つかわしくないほど立派なものといえるほどである。

こういった住居の構成・規模や出土遺物から、この集落は決して支配者層が居住するような、古墳時代社会の上位に位置づけられるものではなく、ごく一般的な、あるいは底辺を支えるような集落であるといえよう。古墳時代の集落研究は、これまで首長居館を頂点に、上位ランクの集落ばかりが注目されてきたきらいがある。しかし、上位に位置する集落遺跡を抽出してその特質を述べるためには、一方でこの本川遺跡のような一般的な集落にも目を向け、その集落構成や出土遺物の差異などにも注意を払う必要がある。

この本川集落では、存続時期の最終段階において、SB2041・2067の2棟の竪穴住居に作り付けのカマドが設けられている。西三河では、碧海台地上の神明遺跡とならんで、かなり早い時期に導入されたカマドといえる。しかし、全体の規模がわかるSB2067は一辺が5.6m四方と、この集落においてきわめて標準的な規模を有しており、決して大型竪穴住居（有力層）から導入が図られたわけではないことがわかる。

また、このSB2041・2067からは須恵器の破片が出土しているが、このⅢ期の集落では、遺構内からの須恵器の出土はこの2点のみである。付近には神明遺跡のように、カマド・須恵器・鉄器といった新来の文物が一括して導入される集落

がある一方、本川集落ではカマドのみがいち早く導入されるというように、新来の文物の受容に対しては、集落間で若干の温度差が感じられる。こういった違いは、あるいは集落間の階層差に起因している可能性がある。

この集落が形成された5世紀前葉～中葉には、北から水入・天神前・郷上・神明など、碧海台地の縁辺部ないしは沖積低地の微高地上に近接して多くの集落が形成されており、1～2基の古墳がそれぞれの集落に近接して築造されている。これらの集落群はそれぞれに何らかの機能差を分担しつつ、有機的な関連性を保っていたのであろう。

一方、矢作川の左岸をみると、右岸の集落群のような比較的規模の大きな集落は少なく、むしろ群集墳がめだつ傾向がある。これは、左岸には生産域でもある安定した広い沖積地がさらに下流にいたるまでないことにも起因しているとおもわれる。ただ、右岸に較べて古墳の数が圧倒的に多いことから、この地に葬られた被葬者層とその出身集落との関連が今後の研究課題といえよう。

#### Ⅳ期

古代には、B区の谷に接して南北方向の溝が数条掘削されているのみで、めだつた生活の痕跡は認められない。道の可能性はあるが明確なことはわからない。

#### Ⅴ期

中世にはB区の谷が埋没し、区画溝を有する屋敷地がA・B区で展開するようになる。また、区画溝に規制されて長方形の溝状土坑が平行して複数掘削されている。尾張低地部で同時期にしばしば確認される、土壇墓とみられる方形土坑と同様の機能を有するの否かは、今後の類例の増加を待って検討したい。

#### Ⅵ期

戦国期にいたると、古代以前は谷であったB・C区の境を中心に複数の区画をもつ屋敷地群が新たに築かれている。ただし、屋敷地の規模や、出土遺物に貿易陶磁・土師器皿が少ないことなどから、必ずしも有力者の屋敷地とはいえない。

(樋上 昇)

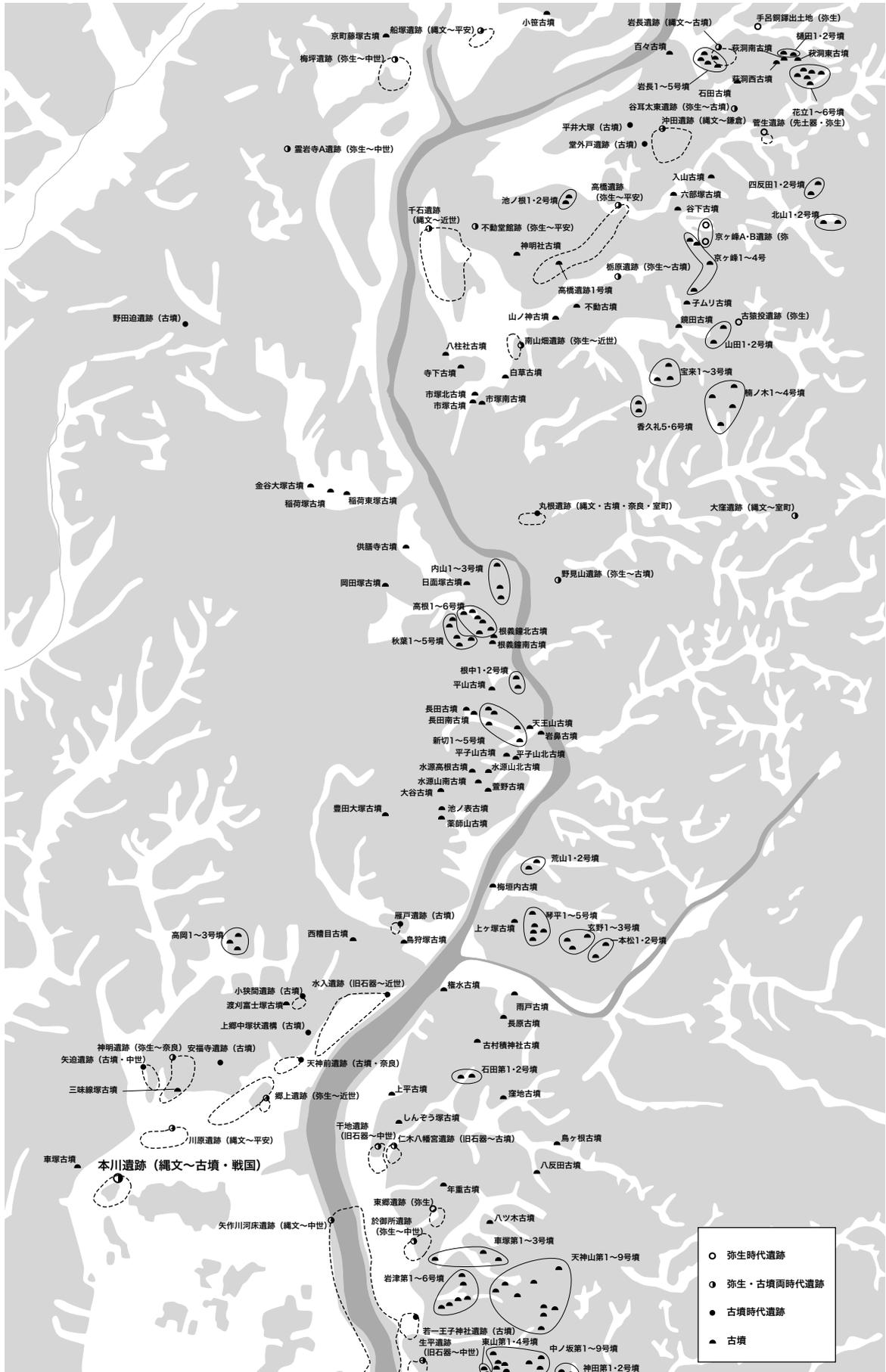


図 18 本川遺跡周辺の弥生・古墳時代遺跡 (1 : 50,000)

# 第V章 考察

## 出土木製品群からみた本川遺跡

～古墳前・中期集落の階層性について～

樋上 昇

### 1. はじめに

豊田市本川遺跡は、岡崎平野の北端に位置し、矢作川右岸に形成された沖積低地の自然堤防上に立地する縄文晩期から戦国時代にかけての集落遺跡である(図19)。沖積低地にあることから木質遺物の遺存状況がよく、集落が展開する微高地(東西幅約100m)の東西に形成された谷や、谷の落ち際に掘削された溝からは多くの木製品・自然木が出土した。また、弥生IV期に属するとみられる掘立柱建物(SB1013)や古墳中期の竪穴住居(SB2001・2002・2064・2067)からは柱根をはじめとする建築部材などを確認した(図20)。

小論では、弥生IV期から中世にかけて、本川遺跡から出土した木製品を様々な視点から分析し、各時期ごとの本川遺跡の性格や周辺の自然環境の復元を試みる。そして、周辺の他遺跡との比較を通じて、出土木製品から古墳前・中期集落の階層性についても検討してみたい。

### 2. 本川遺跡出土木製品の概要

本川遺跡からは、約160点の木製品のほか、大量の自然木が出土した。このうち、本報告書には122点の木製品を実測して掲載した。樹種同定をした木製品は161点で、そのほかにSD2001・NR2002などから出土した自然木(低加工の板・棒材をふくむ)171点についても樹

種同定をおこなった。

所属時期と器種・樹種名が判明している木製品は、弥生IV(長床式)期:7点、弥生V(川原上層I~II式)期:16点、廻間I式併行(川原上層III式)期:24点、松河戸II式併行期(5世紀前半):94点、松河戸II式併行期~中世:20点である。これらを器種ごとに分類し、グラフ化したものが図21である。

弥生IV期はすべて掘立柱建物SB1013から出土した柱根で、樹種はすべてヒノキ属である。

弥生V期の木製品は西側の谷に接して掘削された南北溝SD1005から出土している。このうち、13点の矢板は、SD1005から西側に分岐する溝SD1013の分岐点に打ち込まれたもので、通常の溝に廃棄されたような出土状態ではない。そのため、矢板を除くと、曲柄三又鍬・杭・板が各1点にすぎない。

樹種は、矢板がクヌギ節とシイノキ属(ツブラジイ)で、曲柄三又鍬と板がアカガシ亜属、杭はモミ属をもちいている。

廻間I式併行期はすべてSD1001からの出土である。このなかで、12点の杭のうち、9点は弥生V期と同様に、SD1001から分岐する溝SD1002との接続箇所、溝に直交して2列に打ち込まれていた。その他の木製品としては、円形の刳物皿2点、曲物側板とみられる板1点、柱とみられる丸太1点、垂木材1点、杭3点、

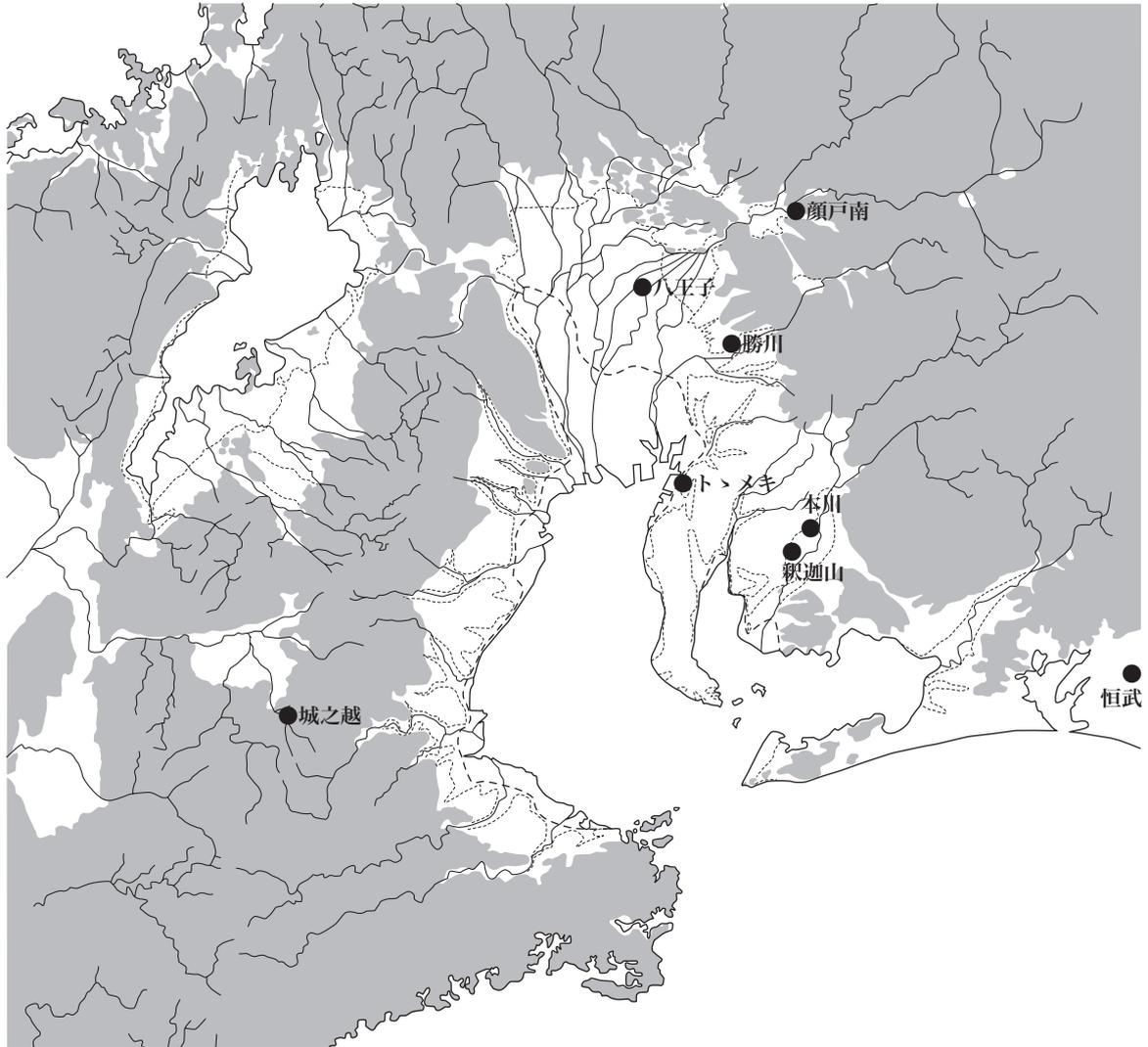


図 19 本川遺跡と周辺の遺跡

穿孔をほどこした板 1 点、板 3 点、角棒 2 点、割材 1 点である。

樹種は円形皿と曲物側板、穿孔板がヒノキ、柱はクワ属、垂木はモミ属、杭はクリが 9 点で、クワ属・トネリコ属・ヒノキが各 1 点、板はアカガシ亜属・クリ・トネリコ属が各 1 点、角棒はコナラ節・ヒノキ属が各 1 点、割材はアスナロであった。

松河戸Ⅱ式併行期は本遺跡において、質・量ともに最も木製品が充実する時期である。木製品 94 点中、50 点が SD2001 から出土している。それ以外の遺構では、NR2001 からは鳥形木製品 1 点、柱とみられる丸太 3 点、杭 3 点、板 2

点、棒 2 点があり、SB2001 から建築部材が 4 点、SB2002 からも建築部材が 1 点、焼失住居の SB2064 からは柱根が 3 点とその他の建築部材が 15 点、作り付けのカマドを有する SB2067 からは柱根 3 点とその他の建築部材が 2 点出土している。

樹種は、曲柄平鋸がコナラ節、鉄斧柄・方形槽・機織具とみられる板・鳥形・机天板・有扱板などがヒノキ、筒形容器未成品がカヤ、丸太がヤナギ属で、柱・建築部材・杭・板・棒などは図のとおりである。

松河戸Ⅱ式併行期～中世は NR3001（東側の谷 NR2001 の上層）からの出土で、器種は田下

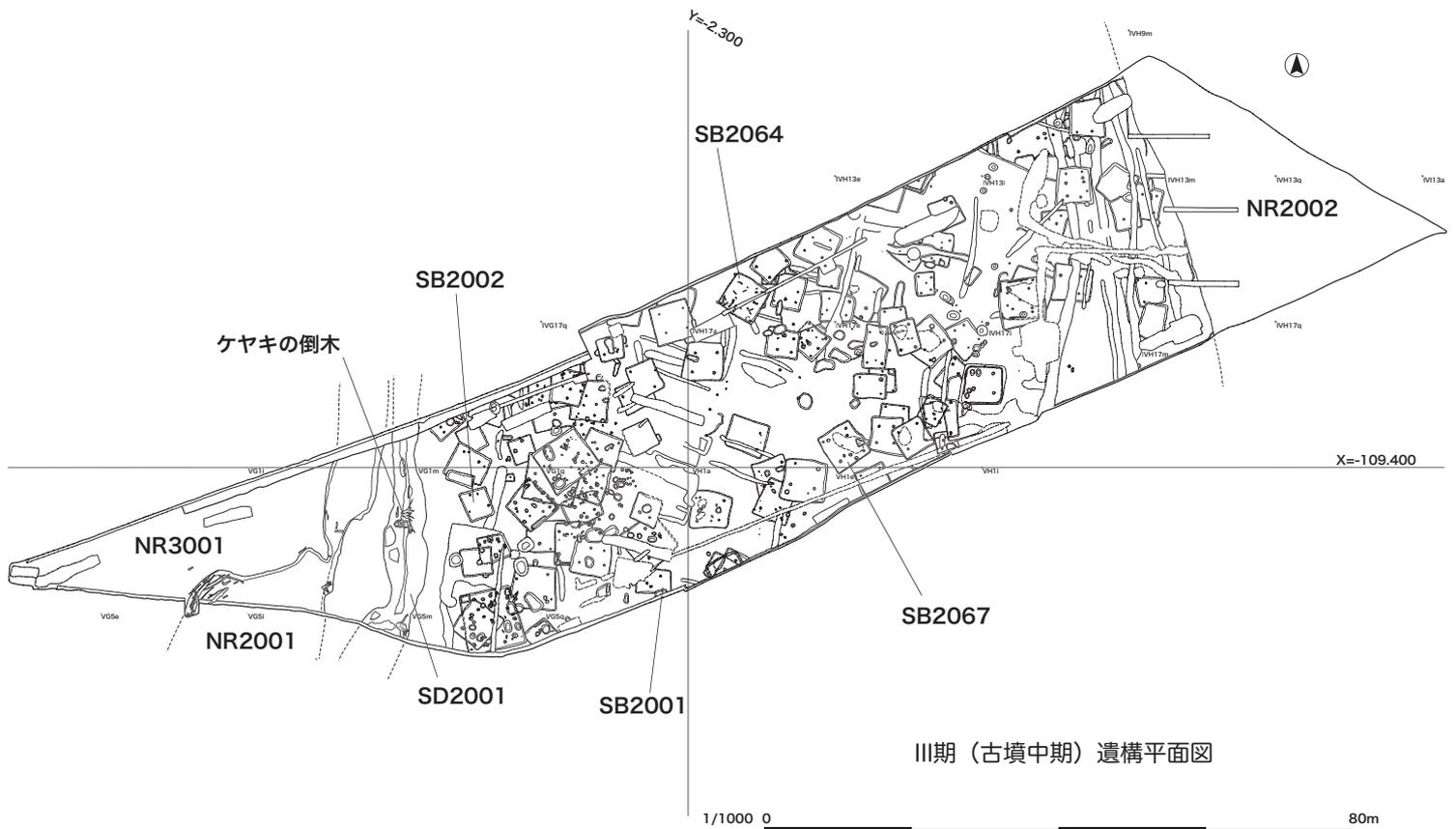
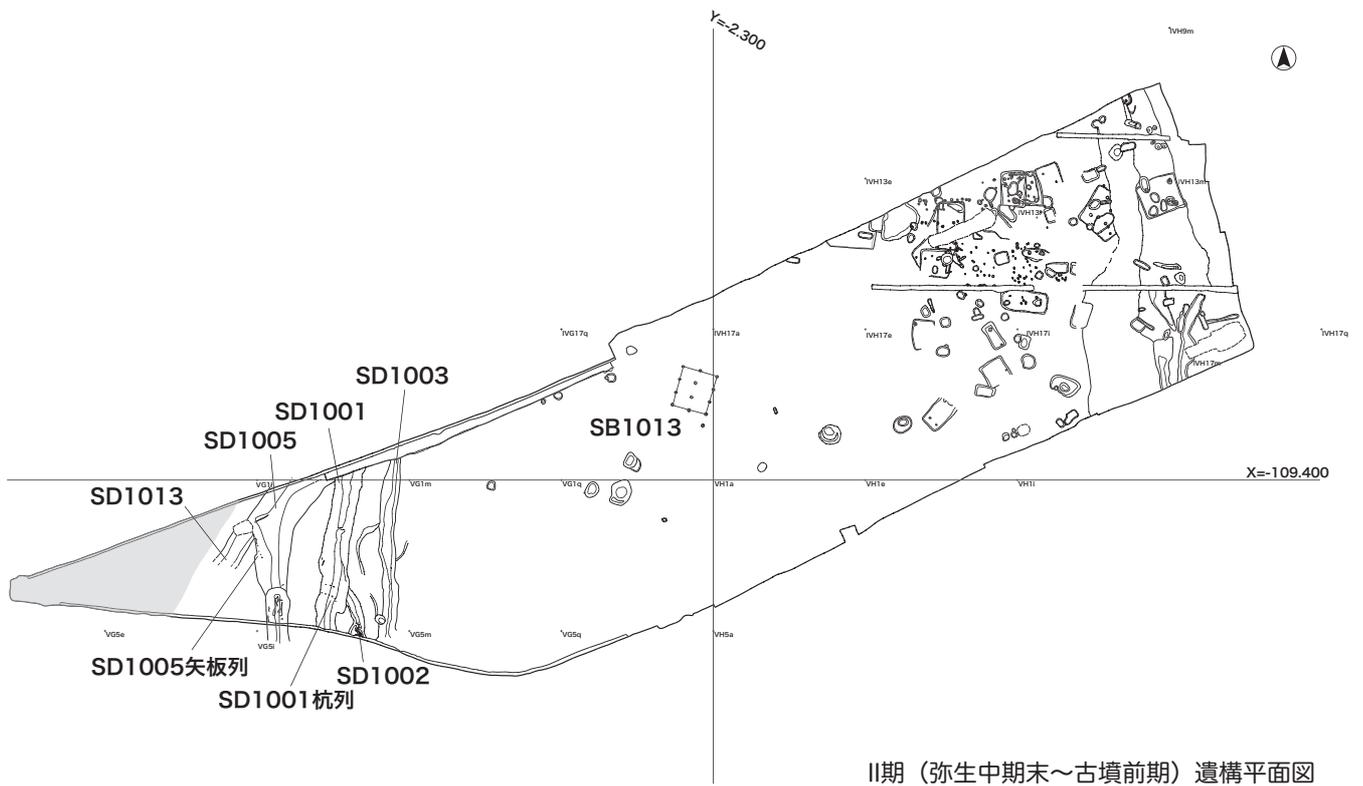


図20 本川遺跡遺構変遷図 (1:1,000)

駄足板 6 点、琴の天板 1 点、形代とみられる板 2 点、杭・有扶板・板各 2 点、穿孔板 3 点、有扶棒・割材が各 1 点である。樹種は田下駄足板がサワラ・ヒノキ科各 1 点、ヒノキ属 4 点で、琴板はモミ属。形代はサワラとヒノキ属が各 1 点、杭はサワラとクロベが各 1 点、穿孔板はモミ属が 2 点とヒノキ属が 1 点、有扶板はサワラ・ヒノキ属が各 1 点、板・有扶棒はいずれもヒノキ属、割材はヒノキであった。

### 3. 時期・遺構別の器種組成

前述の木製品をおおまかな用途別に分類し、その組成を時期・遺構ごとにみってみる (図 22)。

まず時期ごとの変遷では、弥生Ⅳ期は SB1013 からの出土であるため、すべて建築・土木部材 (柱根) である。

弥生Ⅴ期 (SD1005) も建築・土木部材 (杭・矢板) がほぼ 9 割を占め、掘削具と板は各 1 点のみである。

廻間Ⅰ式併行期 (SD1001) は建築・土木部材 (柱・垂木・杭) が約半数で、容器・棒が約 1 割、板が 2 割となる。

松河戸Ⅱ式併行期も建築・土木部材 (柱・建築部材・杭) が約 6 割、板が約 2 割、棒が 1 割弱で、掘削具・工具。容器・祭祀具・雑具 (机天板) は各 1 点でそれぞれ 1.1% にすぎない。

松河戸Ⅱ式併行期～中世になると、建築・土木部材 (杭) の比率が 1 割に下がり、かわって農具 (田下駄足板) が 3 割、板が 3.5 割を占めるようになる。また、時期が限定し得ないのは残念だが、比較的大型の琴板の出土は特に注目される。

次に、松河戸Ⅱ式併行期の木製品を遺構ごとにみると、SD2001 では、同期全体に比べて建築・土木部材 (柱・杭) の比率が約 4 割に下がり、板が約 3 割を占める。棒が 1 割で、掘削具・工具・容器・機織具・雑具 (机天板) はそれぞれ 2% となる。

NR2001 では、建築・土木部材 (柱・杭) が約半数で、板・棒が 2 割弱、祭祀具は鳥形木製品の 1 点のみである。

### 4. 時期別の樹種組成

次いで、時期ごとに木製品に使用された樹種の変遷をみていく (図 23)。

弥生Ⅳ期 (SB1013) の柱根はヒノキが半数以上で、サワラが約 3 割、ヒノキ属が 14% で、樹種のすべてをヒノキ属が占めている。

弥生Ⅴ期 (SD1005) はシイノキ属 (ツブラジイ) が最も多く約 44%、次いでクヌギ節が 37.5% と、この両者で全体の 8 割を占めている。残りはアカガシ亜属 (12.5%) とモミ属 (6.3%) のみで、モミ属の 1 点を除くとすべて広葉樹である。

廻間Ⅰ式併行期 (SD1005) はクリが約 4 割で、次いでヒノキが約 2 割、クワ属・トネリコ属が約 8% で、コナラ節・アカガシ亜属・モミ属・ヒノキ属・アスナロが約 4% である。6 割以上を広葉樹が占めている。針葉樹のなかでは 8 割以上をヒノキ科である。

松河戸Ⅱ式併行期にいたると、樹種数が 20 と急増する。それとともに針葉樹と広葉樹の比率が逆転し、約 65% を針葉樹が占めるようになる。なかでもヒノキは全体の 3 割で、ヒノキ科をすべて合わせると全体の半数以上を占めている。広葉樹で最も多いのはクリで全体の 17%、次いでコナラ節 (5.3%)、クヌギ節 (4.3%) で、それ以外は 1 ないしは 2 点のみの出土にとどまる。

松河戸Ⅱ式併行期～中世では、すべての樹種が針葉樹である。やはりヒノキ科が多く、全体の 9 割で、なかでもヒノキ属 (ヒノキ・サワラをふくむ) が 75% を占めている。

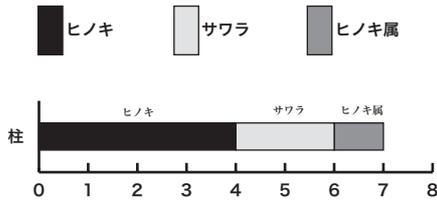
すべての時期を通じてみると、弥生Ⅴ期以外はヒノキ科が卓越し、次いで廻間Ⅰ式併行期と松河戸Ⅱ式併行期においてクリがめだっている。

### 5. 主要器種・自然木の樹種組成

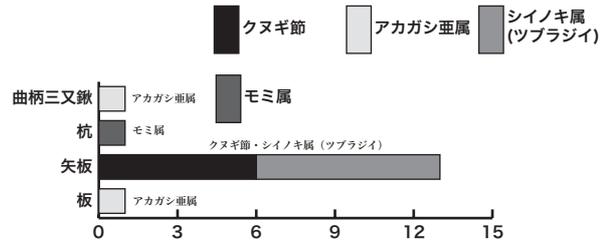
ここでは、本川遺跡において特に出土量の多い、柱・矢板・杭・その他の建築部材・板・棒・丸太について、時期別に樹種の組成比を出し、さらに松河戸Ⅱ式併行期については NR2002・SD2001 から出土した自然木との比較を試みたい。

# 器種別使用樹種変遷グラフ

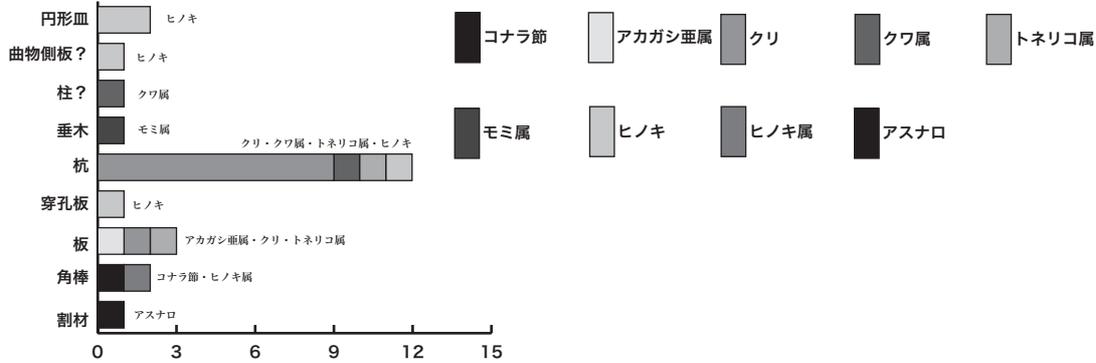
弥生IV期 (SB1013)



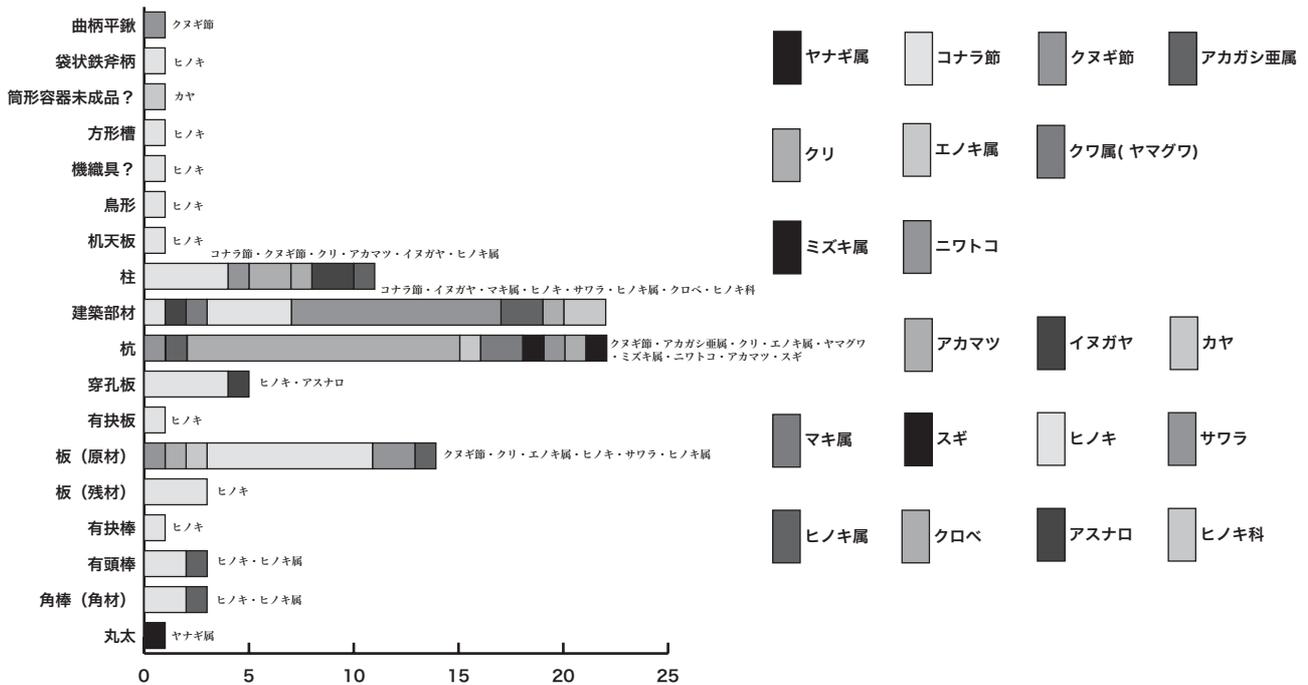
弥生V期 (SD1005)



廻間式併行期 (SD1001)



松河戸II式併行期 (SB2001・2002・2064・2067、SD2001、NR2001)



松河戸II式併行期～中世 (NR3001)

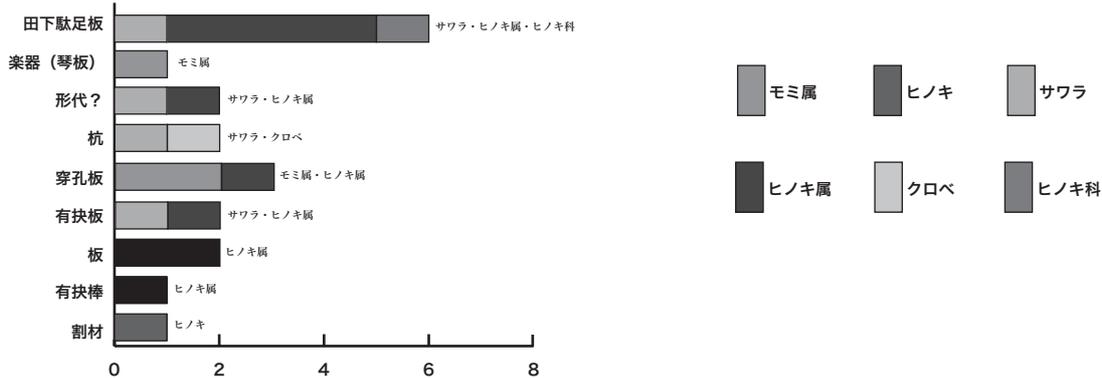
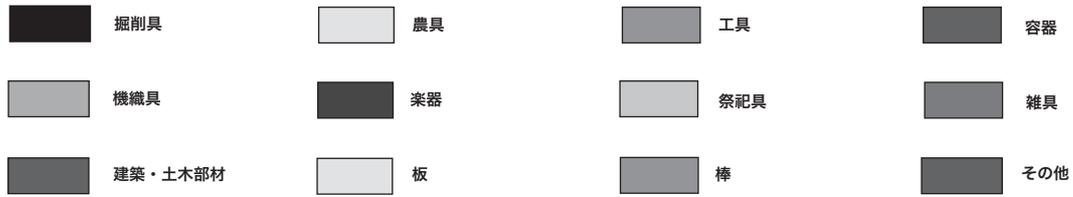
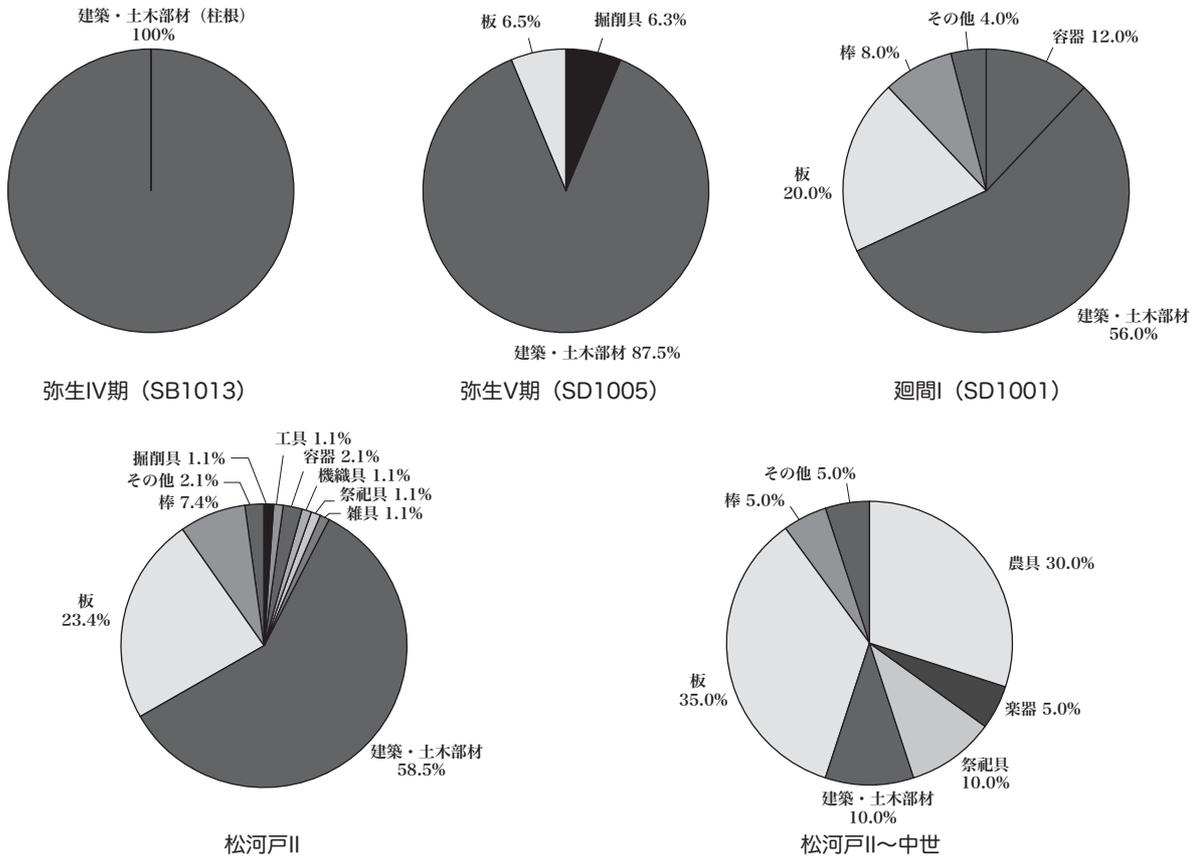


図 21 本川遺跡器種別使用樹種変遷グラフ



### 時期別器種組成変遷グラフ



### 遺構別器種組成変遷グラフ (松河戸II式併行期)

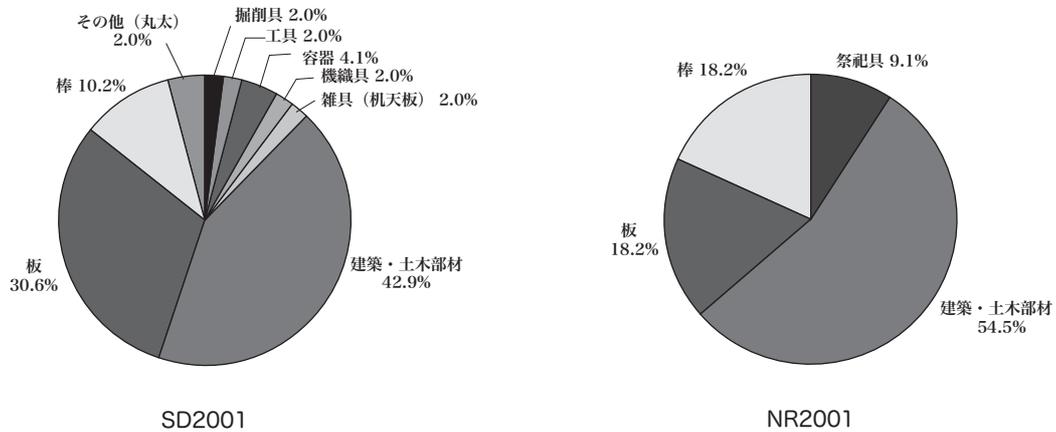
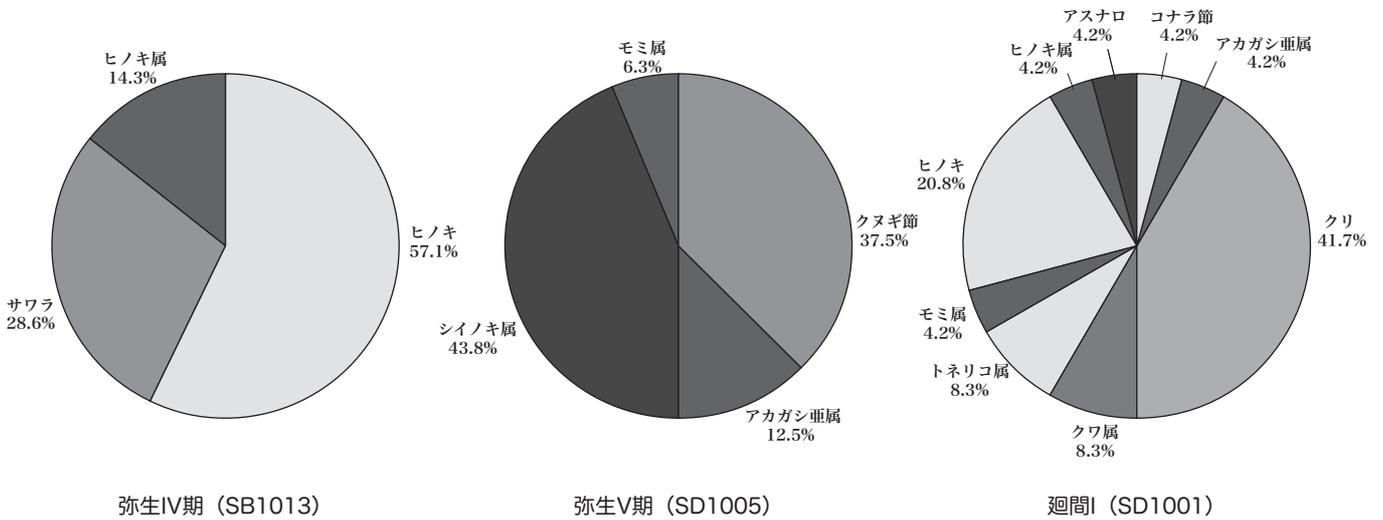
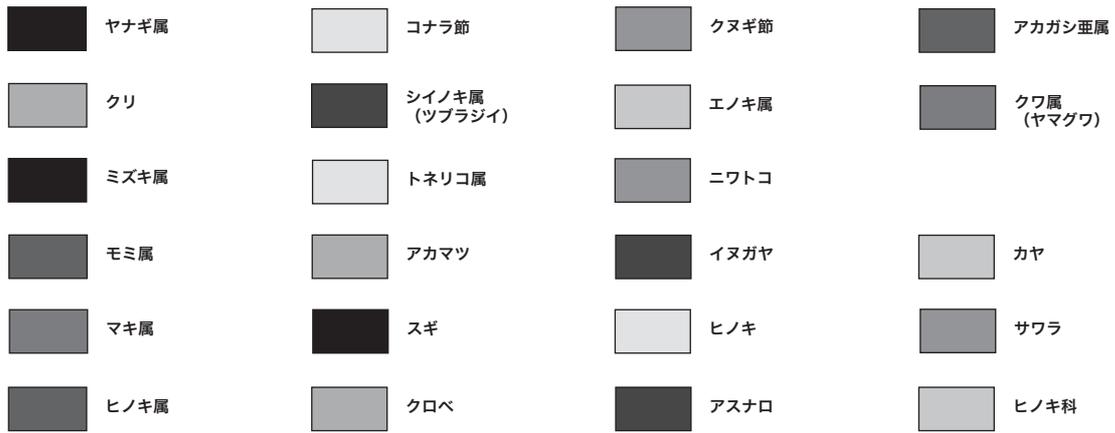


図 22 本川遺跡時期・遺構別器種組成変遷グラフ

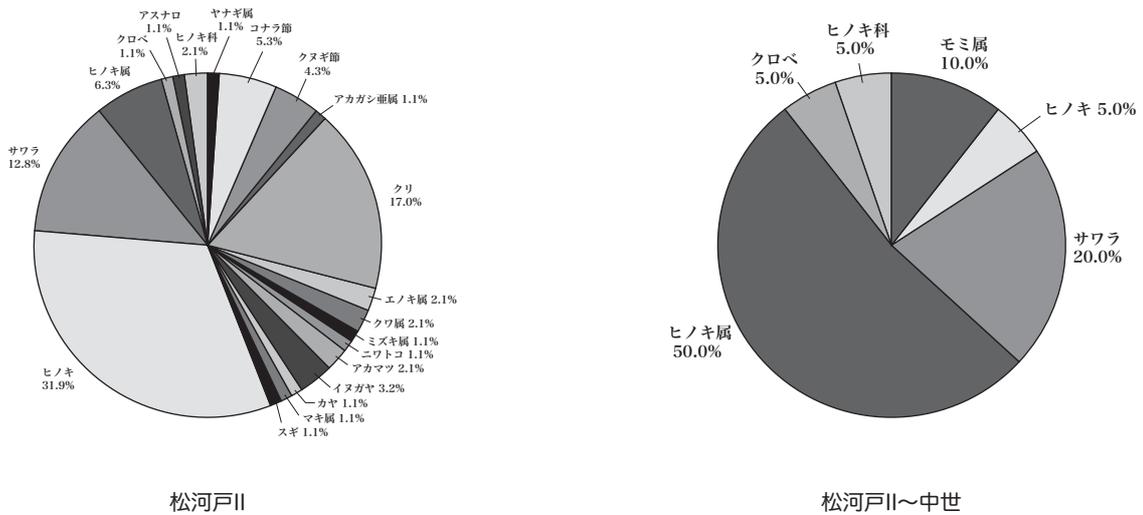
# 時期別樹種組成変遷グラフ



弥生IV期 (SB1013)

弥生V期 (SD1005)

廻間I (SD1001)



松河戸II

松河戸II~中世

図 23 本川遺跡時期別樹種組成変遷グラフ

まず、主要機種ごとの樹種組成比からみていく(図24)。柱は弥生Ⅳ期ではヒノキが過半数を占め、サワラが約3割で残りはヒノキ属というように、すべての樹種をヒノキ属が占める結果となっている。しかし、松河戸Ⅱ式併行期では、コナラ節が最も多く36.3%で、同じくブナ科のクヌギ節が9.1%、クリが18.2%を占めている。針葉樹ではイヌガヤが18.2%と最も多く、アカマツ・ヒノキ属がそれぞれ9.1%で弥生Ⅳ期の樹種組成とは大きく異なる。これは、弥生Ⅳ期はすべて掘立柱建物SB1013の柱根であるのに対し、松河戸Ⅱ式併行期はいずれも竪穴住居の柱根であることに起因しているためであろう。

同じ松河戸Ⅱ式併行期においても、柱を除く建築部材では、サワラが45.5%で最も多く、次いでヒノキ18.2%、ヒノキ属・ヒノキ科が9.1%、クロベ・イヌガヤ・マキ属が4.5%と針葉樹、なかでもヒノキ科が全体の86.5%を占めるにいたり、広葉樹はコナラ節の4.5%にすぎない。おそらく、竪穴住居の柱材には太径木は不要であるため、主としてブナ科の落葉広葉樹がもちいられたのであろう。その一方で、掘立柱建物の柱材や、竪穴住居でも柱の礎板や梁材などにはより径の太いヒノキ科の材が必要であったためと考えられる。

弥生Ⅴ期の矢板材に使用された樹種はクヌギ節とシイノキ属(ツブラジイ)のみであり、両者の比率はほぼ拮抗している。クヌギ節は松河戸Ⅱ式併行期においても曲柄平鋏や柱・杭・板などにもちいられているが、シイノキ属は本川遺跡の全時期を通じてこの弥生Ⅴ期の矢板材にしかみられない。後述する松河戸Ⅱ式併行期の自然木にも含まれていないことから、本報告書の第Ⅲ章5で樹種同定を担当した植田弥生氏は、古墳前期以降、アカガシ亜属とシイノキ属を主体とする常緑広葉樹林が急速に減少した可能性を指摘している。

杭は廻間Ⅰ式併行期・松河戸Ⅱ式併行期ともにクリが最も多く、特に廻間Ⅰ式併行期では全体の75%を占めている。クリ以外ではクワ属(ヤマグワ)が両時期に共通し、広葉樹がいずれの時期

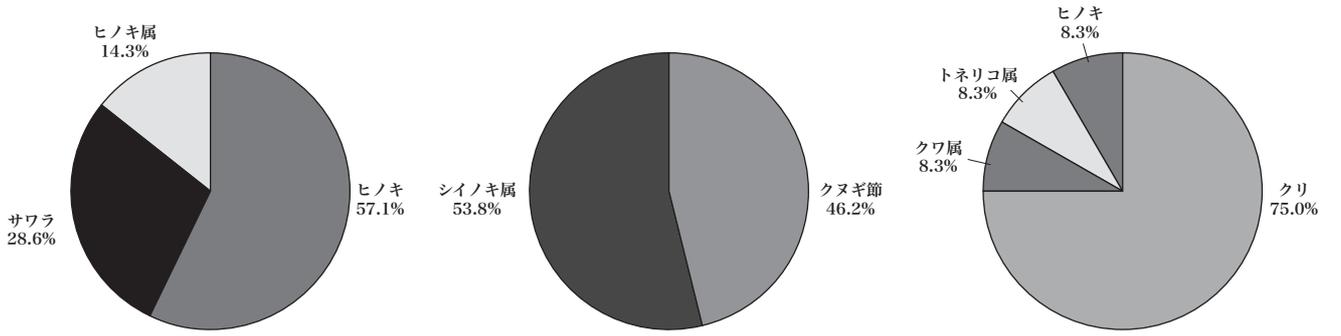
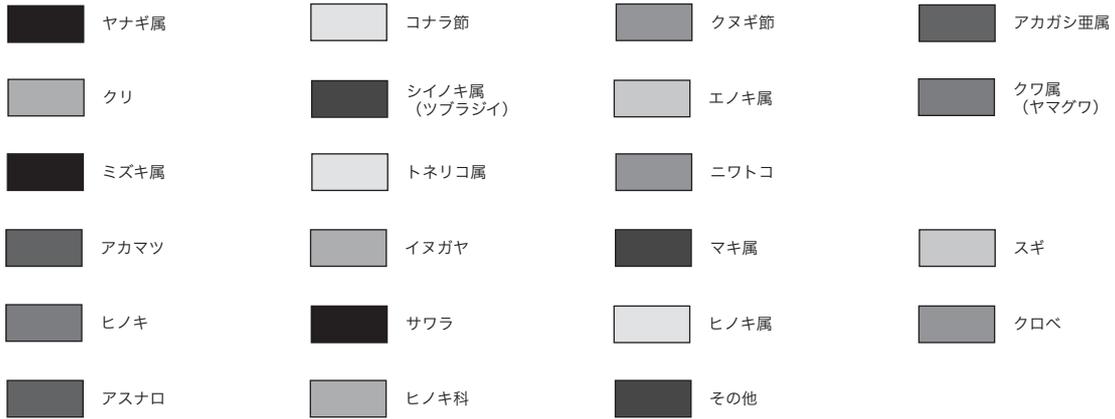
においても9割を超えている。筆者によるこれまでの検討(樋上2002・2003)では、杭材にはいずれの遺跡においても特定の樹種が約半数を占めており、しかもその地域の環境に最も適応した材がもちいられていることから、その集落の近辺で最も入手しやすい樹種を利用したと考えられる。この推測が正しいとするならば、この本川遺跡では、少なくとも古墳前期から中期にかけて、周辺の丘陵(碧海台地)および微高地にはクリを主体とする落葉広葉樹林が広がっていた可能性が高い。

松河戸Ⅱ式併行期の板をみると、ヒノキが約7割を占め、ヒノキ科では全体の85%を超えている。板には穿孔板や有扶板のように、用途の特定はできないがすでに利用済みのもの以外に、掘削具や容器・祭祀具などの製作途上における一時的な姿である場合と、製作過程で排出される削り屑や残材も含まれている。

一般的には、弥生時代の集落遺跡から出土する板材には、掘削具を製作する途中段階の板材が多いことから、アカガシ亜属などブナ科の広葉樹材が半数以上を占め、古墳時代以降は指物容器類や祭祀具の製作にともなうとみられるスギ・ヒノキ科の針葉樹材が卓越する傾向がある。本川遺跡は全体の約85%をヒノキ科の針葉樹が占めていることから、古墳時代における板の樹種組成としてはごく一般的な状況といえる。ただ、どの遺跡においても、針葉樹ではスギかヒノキ科のいずれかに極端に依拠している場合が多く、この両者がほぼ同数で共存している例はほとんどないといつてよい。全国的な傾向としては、伊勢湾地域を境に東はスギ、西はヒノキ科を多用しており、この地域ではスギを多用する遺跡(朝日遺跡・南木戸遺跡)とヒノキを多用する遺跡(八王子遺跡・勝川遺跡・志賀公園遺跡)が混在している状況である(樋上2002)。この本川遺跡では、すべての時期を通じてスギは1点しか確認されておらず、圧倒的にヒノキ科が卓越する地域に属する。

この傾向は松河戸Ⅱ式併行期における棒・丸太の樹種組成にも現れており、ヒノキ・ヒノキ属は

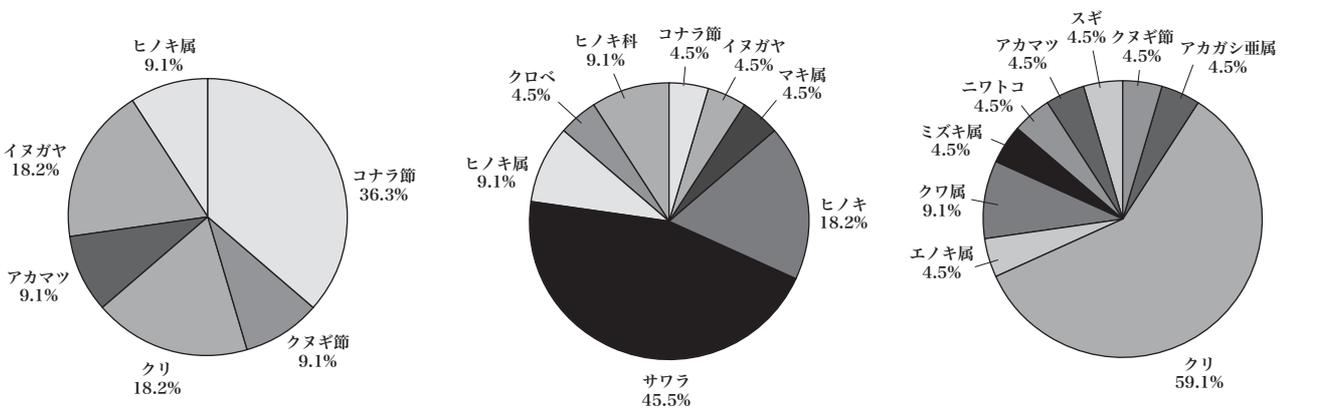
# 主要器種・自然木樹種組成グラフ



SB1013 柱 (弥生IV)

SD1005 矢板 (弥生V)

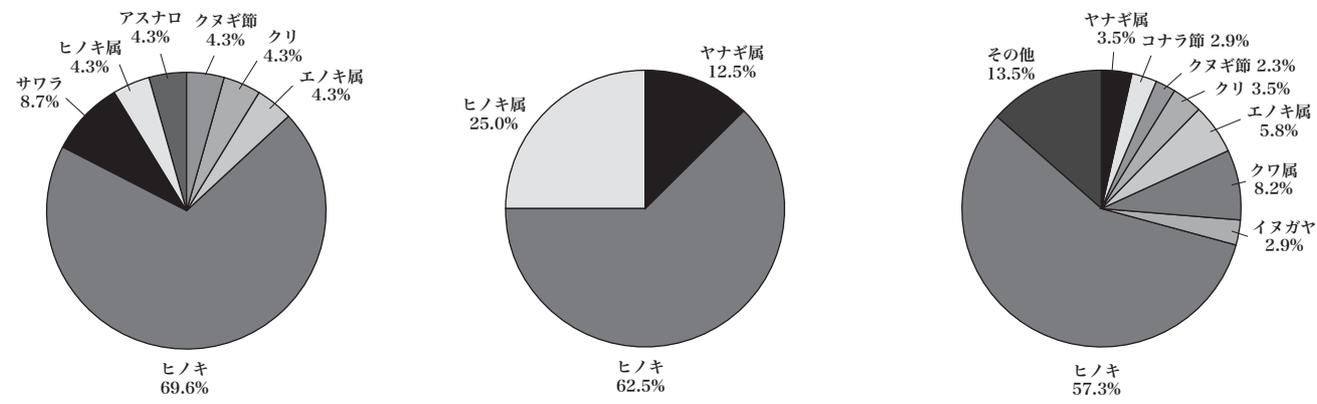
SD1001 杭 (廻間I)



柱 (松河戸II)

建築部材 (松河戸II)

杭 (松河戸II)



板 (穿孔板・加工板含む、松河戸II)

棒・丸太 (松河戸II)

自然木 (松河戸II)

図 24 本川遺跡主要器種・自然木樹種組成グラフ

## 遺構別自然木樹種組成グラフ（松河戸Ⅱ式併行期）

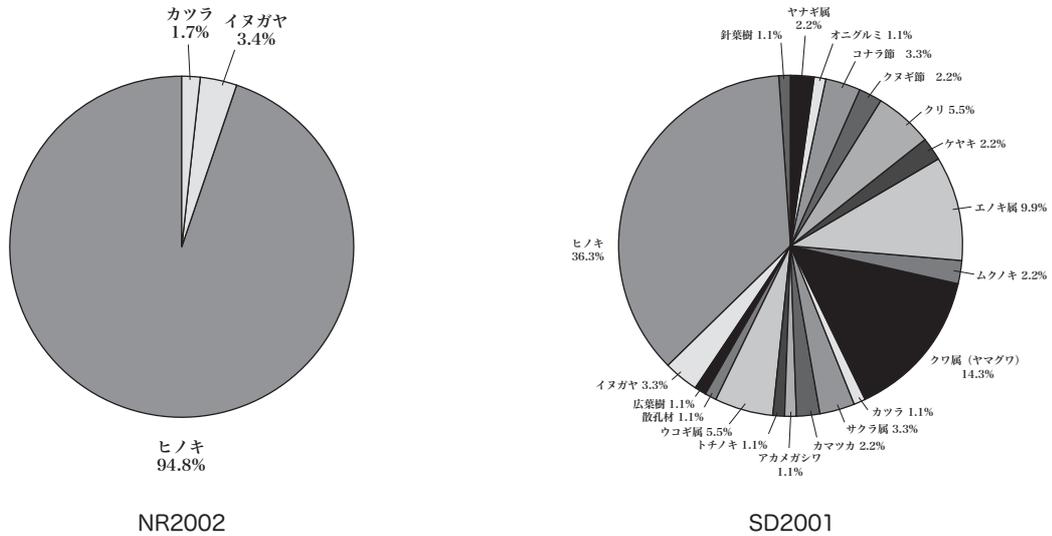


図 25 本川遺跡遺構別自然木樹種組成グラフ

合わせて 87.5% を占めている。

同じく松河戸Ⅱ式併行期に属する遺構 (NR2002・SD2001) から出土した自然木 (低加工の板・棒状品などもふくむ) 149 点の樹種組成 (図 25) をみると、まず木製品として利用されている樹種が全体の 9 割近くにおよんでいる。なかでもヒノキが 57.5% を占め、クワ属 8.2%、エノキ属 5.8% がそれに次ぐ。一方で、矢板・杭に多用されているクヌギ節・クリはそれぞれ 2.3% と 3.5% にすぎず、シイノキ属や建築部材の半数を占めるサワラは全く出土していない。

これら自然木の樹種組成を遺構ごとにみると、集落の東側の谷にあたる NR2002 出土の 58 点中、実に 55 点がヒノキであり、その他の樹種はカツラが 1 点とイヌガヤが 2 点にすぎない。一方、集落の西を画する大溝 SD2001 (91 点) には多様な樹種が認められる。このうち、ヒノキは 33 点で全体の 36.3% を占め、ヤマグワ 14.3%、エノキ属 9.9%、クリ・ウコギ属 5.5% と続く。SD2001 だけをみれば、クリの比率も他の樹種に較べて高いことから、前述の推測のとおり、本川遺跡の周辺にはクリが多数成育していたこと

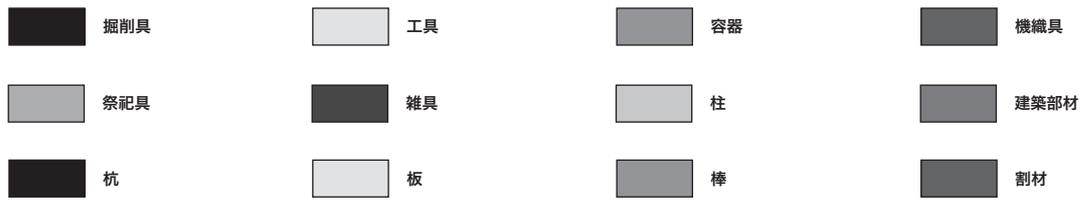
が裏付けられる。また、ヒノキの比率が高く、特に根材が多く出土していることから、植田氏は本遺跡の周辺の丘陵や山地にヒノキが自生していた可能性を指摘している (第三章 5)。次に、廻間Ⅰ式併行期と松河戸Ⅱ式併行期における、ブナ科とヒノキ科の利用法をみると (図 26)、廻間Ⅰ式併行期ではブナ科は杭が 4 分の 3 を占めるのに対し、ヒノキ科は容器が半数を占めている。松河戸Ⅱ式併行期では、ブナ科は約 6 割が柱で掘削具と杭がそれぞれ 1 割弱と用途が比較的限定されているのに対して、ヒノキ科では柱以外の建築部材と板がそれぞれ約 4 割を占める一方、工具・容器・機織具・祭祀具・雑具 (机天板) など、多様な利用法が認められる。

### 6. 周辺地域の他遺跡との比較

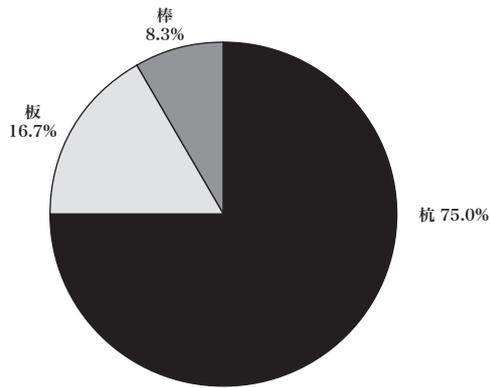
ここまでは本川遺跡出土木製品について、器種組成と樹種組成の両面から分析をおこなってきた。次に、愛知県下ならびに東海地域におけるほぼ同時期の木製品出土遺跡を概観し、本川遺跡出土木製品の特徴をあらためて考える材料とする。安城市釈迦山遺跡 (図 27)

釈迦山遺跡 (神谷・川崎編 2001) は矢作川中

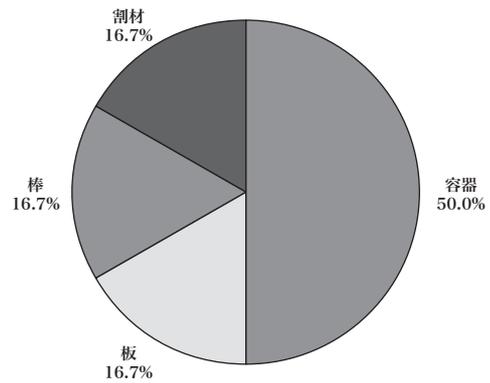
## ブナ科・ヒノキ科利用器種組成比較グラフ



### 廻間I式併行期

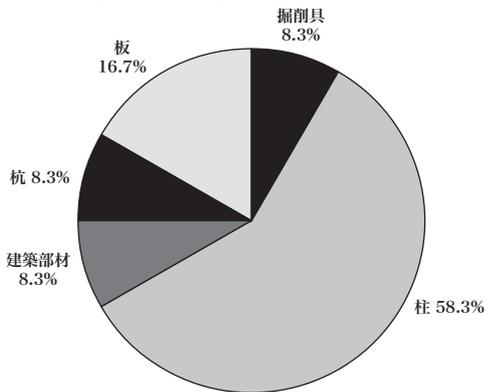


ブナ科

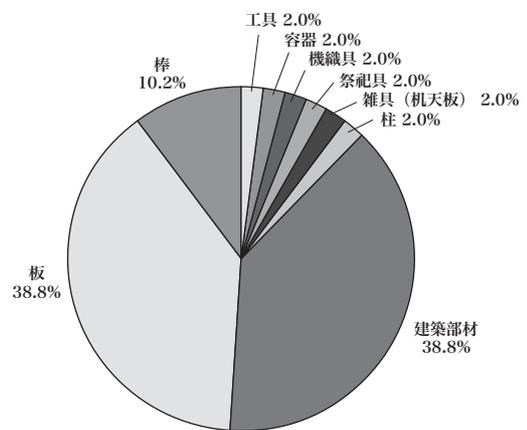


ヒノキ科

### 松河戸II式併行期



ブナ科



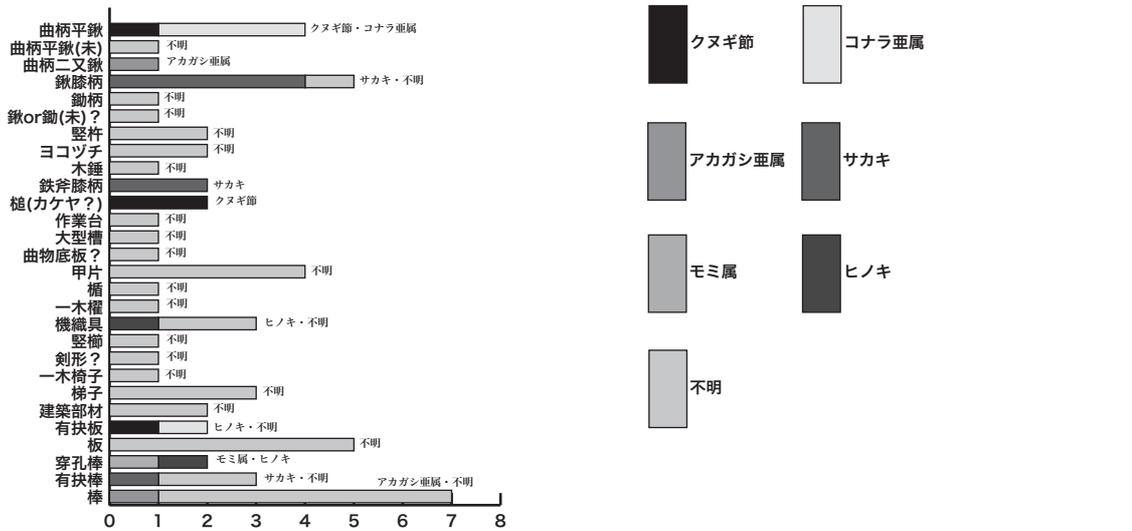
ヒノキ科

図 26 本川遺跡ブナ科・ヒノキ科利用器種組成比較グラフ

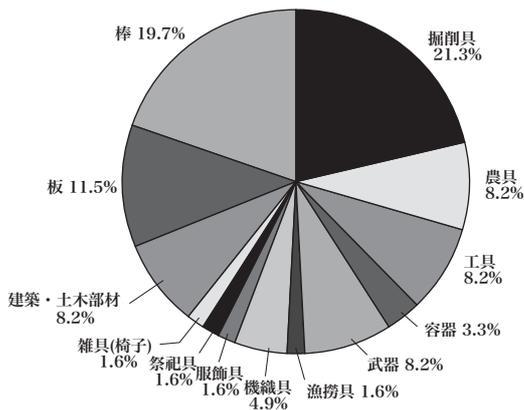
流域の右岸に位置し、碧海台地縁辺部の沖積低地に立地する。弥生終末期から古墳前期にかけての重要な遺跡が集中する、いわゆる古井遺跡群の中核を占める集落である。1986年に緊急調査がお

こなわれ、2001年に報告書が刊行された。報告書に掲載された木製品は59点で、うち19点の樹種が明らかとなっている。所属時期はおおむね廻間I式後半～II式前半期に併行している。

## 安城市釈迦山遺跡（廻間I～II式併行期）



### 器種組成



### 樹種組成

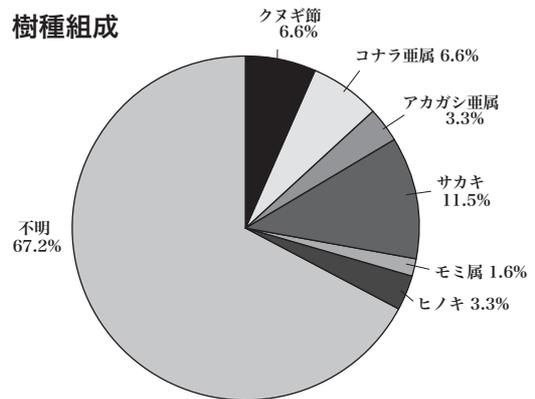


図 27 釈迦山遺跡出土木製品器種・樹種組成グラフ

器種組成をみると、曲柄平鋏を主体とする掘削具と棒状品が約2割と最も多く、竖杵・ヨコヅチ・木錘といった農具類、鉄斧膝柄・カケヤ・作業台の工具類、甲・楯といった武器、梯子をふくむ建築部材、そして板がそれぞれ1割前後で、そのほか、容器（槽・曲物）・漁撈具（櫂）・機織具・服飾具（竖櫛）・祭祀具（劍形?）・雑具（椅子）など、点数こそ少ないものの、日常生活で使用される木製品が一通り揃っているのが特徴である。特に、甲や楯・竖櫛などは一般的な階層ではなく、当時の首長層が使用したと考えられるものであることから、本遺跡にはこのような上位の階

層の人々が居住していた可能性が高い。

樹種は大半が未同定のため、周辺の植生復元には情報不足だが、曲柄平鋏にはクヌギ節とコナラ亜属、鋏膝柄・鉄斧膝柄にはサカキ、機織具にはヒノキなど、後述する濃尾平野低地部における樹種の使用状況とほぼ共通している。

一宮市八王子遺跡（図 28～30）

八王子遺跡（樋上編 2001）は濃尾平野のほぼ中央に位置し、沖積低地に形成された日光川左岸の微高地に立地している。八王子遺跡より南西約2kmの範囲には、北川田遺跡・山中遺跡・南木戸遺跡・二タ子遺跡など、弥生～古墳時代の特に

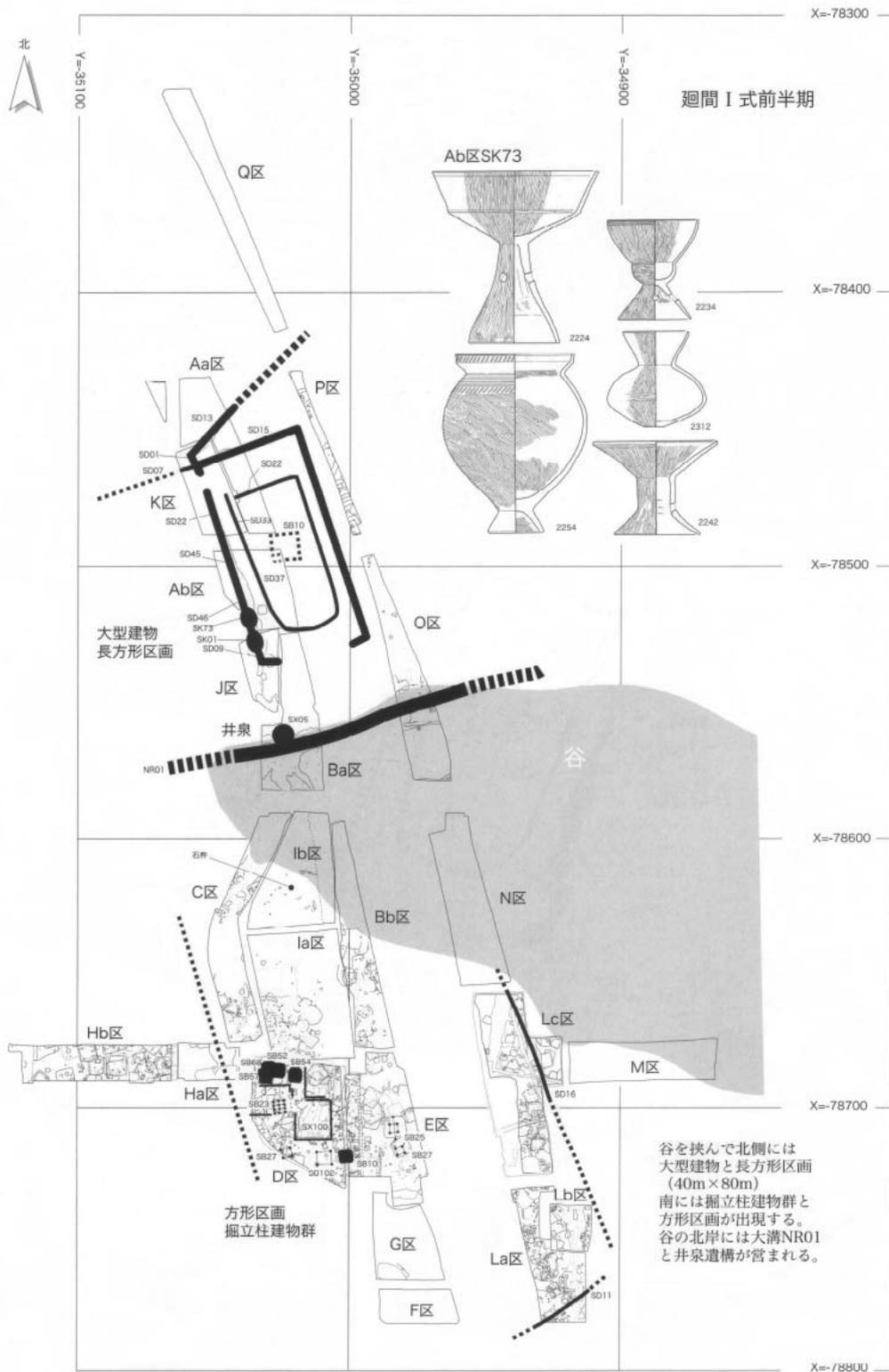


図 28 八王子遺跡遺構全体図 (1 : 2,500、樋上編 2001 より)

# 一宮市八王子遺跡

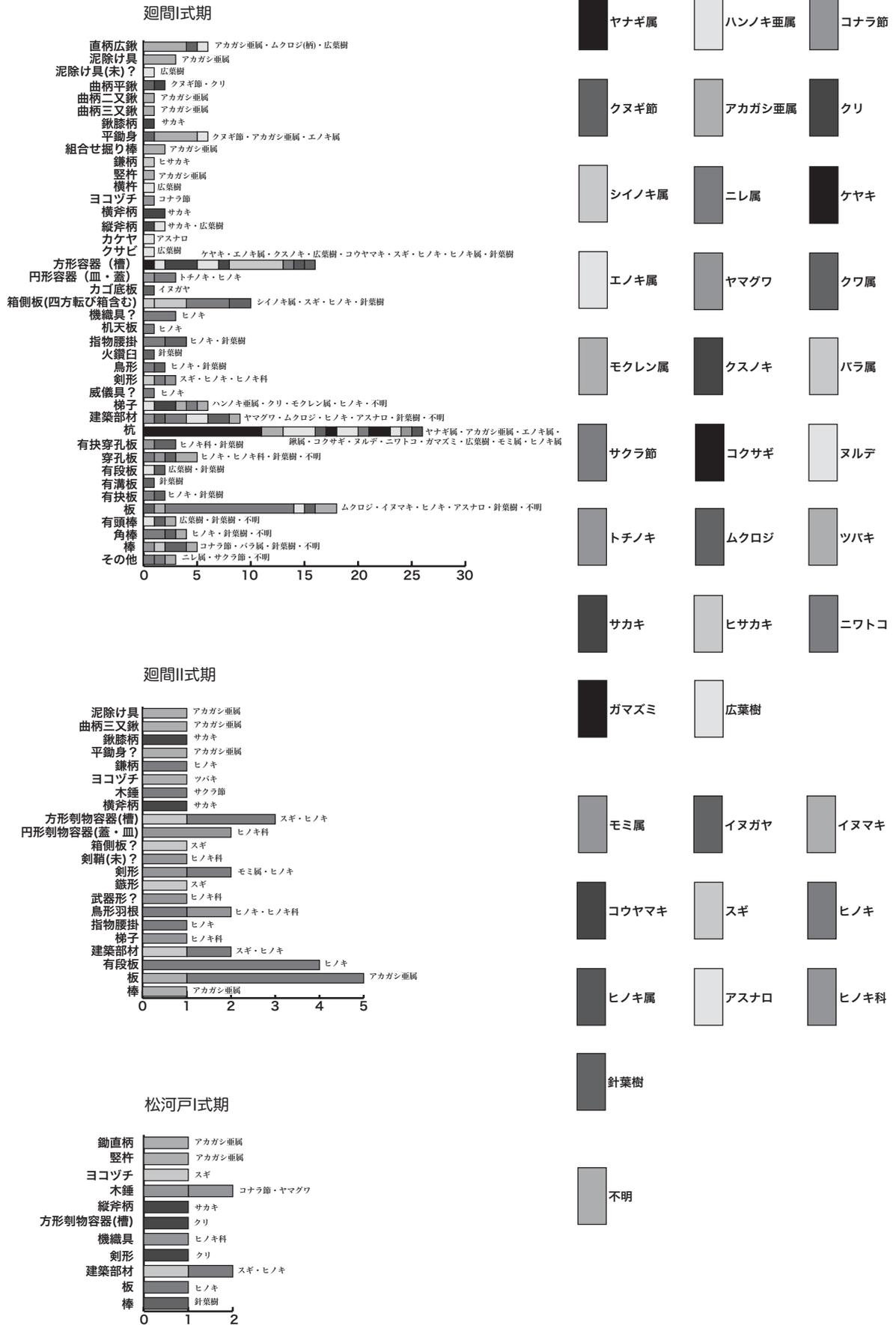


図 29 八王子遺跡出土木製品器種別使用樹種変遷グラフ

重要な遺跡が集中し、萩原遺跡群と呼ばれている。八王子遺跡はこの萩原遺跡群の北端に位置し、弥生前期から中世にいたるまで、各時代の遺構が展開している。

古墳初頭（廻間Ⅰ式期）は、谷（旧河道）を隔てた北側には大型掘立柱建物Ⅰ棟を中心とする方形区画があり、南側には方形柵列（建物？）を中心に小型の掘立柱建物群と竪穴住居群が広範囲に展開する。谷には、北の方形区画側に幅約10mの大溝が掘削され、大溝の北肩には木組みをほどこした大型の井泉が築かれている。この井泉の周辺からは、銅鏃・玉類とともに、大量の小型精製土器群が出土しており、この北側の方形区画が非日常の祭祀空間であったことをしめしている。

この大型掘立柱建物を中心とする方形区画は廻間Ⅱ式期には廃絶し、南側の居住域も縮小する。廻間Ⅱ式後半～Ⅲ式期には断絶があり、松河戸Ⅰ式期に再び南の居住域に竪穴住居数棟が営まれるようになる。

木製品は前述の大溝内から出土しており、層的的に廻間Ⅰ式期・同Ⅱ式期・松河戸Ⅰ式期の3時期に分けられる。時期のあきらかな木製品は廻間Ⅰ式期：139点、廻間Ⅱ式期：35点、松河戸Ⅰ式期：13点で、このうち樹種が判明しているのはそれぞれ125点・35点・13点である。

一見してわかるとおり、廻間Ⅰ式期は器種数がきわめて多く、掘削具、農具、工具、容器、機織具、祭祀具、雑具、建築・土木部材など一通りの器種がみられる\*。なかでも、掘削具（14.3%）、容器（19.5%）、建築・土木部材（26.6%）の比率が高く、逆に農具の占める比率は低い（2.6%）。容器類は全長50cm以上の大型の方形槽が多く、直径40cm近い円形の大型皿も2点出土している。祭祀具は比率こそ低い（3.9%）が、弥生以来の銅剣を模した剣形木製品や、人面線刻板を転用した鳥形木製品などの優品がみられる。これら大型容器類と祭祀具は、前述の井泉を利用した祭祀でもちいられて廃棄された可能性が高い。掘削具は他の器種とやや離れた位置で、大溝の底近くでまとまって出土していることから、大溝の掘削

にもちいられ、破損したものをそのまま廃棄したと考えられる。そのためか、直柄広鏃・曲柄平鏃には未成品が認められない。

樹種組成をみると、きわめて多様な樹種がもちいられている。広葉樹ではヤナギ属（7.1%）とアカガシ亜属（10.3%）、針葉樹ではヒノキ（22.6%）とスギ（5.8%）がめだつ。このうちヤナギ属は井泉（SX05）の周辺に打ち込まれた杭の約半数を占めており、八王子遺跡の周辺で最も入手が容易な材であったことがわかる。アカガシ亜属・ヒノキ・スギは搬入された可能性が高く、その他種々雑多な樹種がもちいられている背景には、当時の人々にとって有用な落葉広葉樹主体の森林が濃尾平野低地部になかったことをしめしている。また、板の樹種組成をみると、ヒノキが約7割を占める一方、広葉樹はムクロジ1点しかなく、掘削具にもちいられることの多いアカガシ亜属やコナラ節・クヌギ節の板はみられない。そのためこの遺跡では、泥除け具を除く掘削具の製作をおこなっていなかった可能性がある。ただし、鳥形木製品の羽根の未成品や、加工痕が明瞭に残るヒノキの板材がみられることから、祭祀具や指物容器類などはこの遺跡で製作されていたようである。

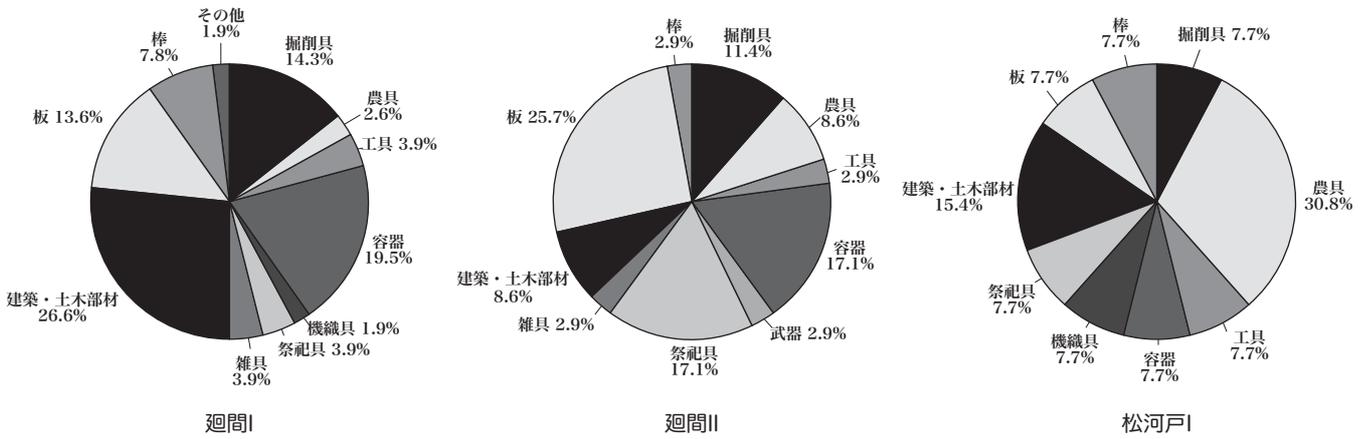
廻間Ⅱ式期には点数のみならず、器種数も激減する。器種組成をみると、依然として掘削具（11.4%）・容器（17.1%）・祭祀具（17.1%）の比率は高いが、建築・土木部材（8.6%）が減少し、農具（8.6%）が増えている。容器類では、大型槽は姿を消すが、小型の脚付方形槽や円形の合子蓋などの優品は残る。祭祀具には剣形木製品や鳥形木製品の羽根などがあり、武器には剣鞘の未成品がある。

樹種組成は廻間Ⅰ式期に較べてかなり単純化しており、ヒノキ科が全体の6割におよんでいる。アカガシ亜属は14.3%で、スギは11.4%を占めている。

松河戸Ⅰ式期には器種数がさらに減少する。器種組成では掘削具・容器類が減少し（7.7%）、農具の比率が高くなる（30.8%）。脚付方形槽や剣

\* 報告書刊行後、未報告資料の再整理過程において、廻間Ⅰ式期に属する櫛の破片を1点確認した。これにより、廻間Ⅰ式期から八王子遺跡では武器の存在があきらかとなった。ただし、本文中のグラフは報告書掲載資料のみで集計したため、未掲載資料はグラフの数値には反映されていない。

器種組成



樹種組成

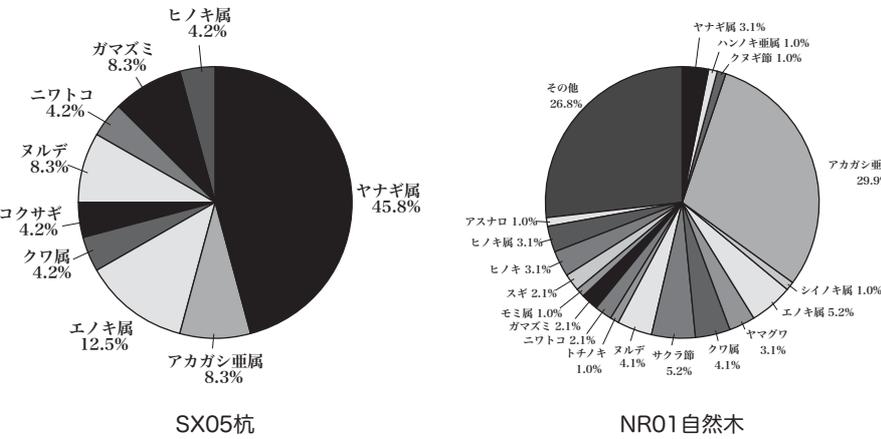
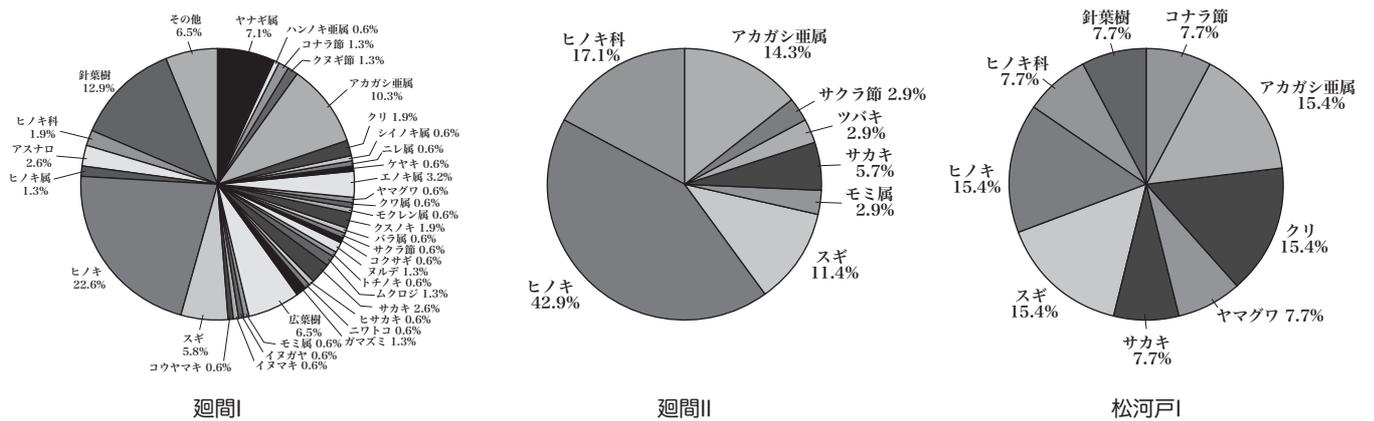


図 30 八王子遺跡出土木製品器種・樹種組成変遷グラフ

形木製品はこの時期にも認められる。

樹種組成では、特定の樹種への偏りがなくなる。この時期で特徴的なのは、脚付方形槽や剣形木製品にヒノキやスギではなく、クリがもちいられる点である。

このように、八王子遺跡の木製品を時期別にみていくと、首長にかかわる大規模な祭祀空間を内包する特殊な集落（居館？）から一般集落へと変化していった様子が器種ならびに樹種組成にはっきりと現れているといえる。

春日井市勝川遺跡（図 31・32）

勝川遺跡（赤塚編 1984、樋上編 1992、樋上 2003）は濃尾平野東部の鳥居松段丘の縁辺部および庄内川支流の地蔵川に面する沖積低地に立地している。段丘上には弥生Ⅳ期以来、古墳中期にかけての居住域・墓域、そして古代寺院（勝川廃寺）が展開する。段丘直下の沖積低地には、弥生Ⅳ期の木製品製作工房施設があり、旧地蔵川からは弥生Ⅴ期後半～廻廻Ⅰ式期、古墳中期（5世紀後半）、古代（8～10世紀）の木製品が層位的に出土している。ここでは特に、Ⅱ-Ⅰ期：弥生Ⅴ期後半～廻廻Ⅰ式期（103点）とⅡ-Ⅱ期：5世紀後半（55点）の木製品についてみていくこととする。

Ⅱ-Ⅰ期は、一見すると八王子遺跡同様、器種数が多い。しかし、器種組成をみると、板（37.3%）、掘削具（17.6%）、棒（15.7%）、建築・土木部材（13.7%）が多く、八王子遺跡で多くみられた容器はわずか1%で、祭祀具は皆無である。掘削具は器種のバラエティーが豊富であり、特に未成品が多い点が特徴といえる。板や丸太（半裁・1/4をふくむ）に広葉樹（樹種未同定）が多いことから、これらの掘削具は原材段階からこの集落で製作されていたと考えられる。

樹種組成をみると、広葉樹が半数を超えており、なかでもアカガシ亜属（9.7%）とコナラ節（7.8%）が多い。今後、樹種同定が進めばこの両者はさらに増えるとおもわれる。針葉樹で樹種が判明しているものは少ないが、現状ではヒノキが多い。樹種未同定の点数が多いことを差し引いても、前述の八王子遺跡に比べて使用された樹種の数が圧倒

的に少ないといえる。この遺跡は居住域と墓域が鳥居松段丘と呼ばれる洪積台地上に立地していることから、尾張低地に営まれた他の集落（朝日遺跡・八王子遺跡など）とは異なり、アカガシ亜属やコナラ節・クヌギ節などの広葉樹材の入手は容易であったとおもわれる。このことは、弥生Ⅳ期の杭材の約4割にクヌギ節がもちいられていることから証明できよう。そのため、弥生Ⅳ期以来、尾張低地の集落に、広葉樹の丸太や板材、製品を供給する役割を担った集落であった可能性が高い。

Ⅱ-Ⅱ期には、掘削具（10.4%）が減少して農具が増える（8.3%）が、依然として一通りの器種が出土している。この時期で特に注目されるのは、楯の存在である。この楯は破片ではあるが、片面には赤彩をほどこし、もう片面には黒漆を塗布する優品である。樹種はモミ属をもちいている。また、机天板（コナラ節）も認められることから、前段階よりも集落としてはややランクがアップした印象をうける。ただし、依然として板や丸太は多い。

樹種組成では、針葉樹が半数を超えるようになる。広葉樹ではクリ（6.8%）がやや多くなるが、コナラ節（8.5%）・クヌギ節（3.4%）・アカガシ亜属（8.5%）の比率はほとんど変化していない。このことから、周辺の植生にめだつた変化はなく、直柄広楯の未成品が出土していることから、依然として他の集落に木製品などを供給する機能を維持していたと考えられる。その一方で、この時期、集落の周辺には勝川大塚古墳（推定全長90m）や洲原山古墳（直径約40m）などの大型古墳が築造されるようになる。7世紀末～8世紀初頭にはこの地に藤原宮同範瓦を有する勝川廃寺が造営され、春部郡の中心となる萌芽が、5世紀後半のこの時期すでに現れていたとすれば、前述の楯などを有するこの集落は、一般集落の上位か、大型古墳に葬られた首長層にかかわるものであった可能性が高い。

東海市トメキ遺跡（図 33）

トメキ遺跡（立松編 1998）は知多半島の付

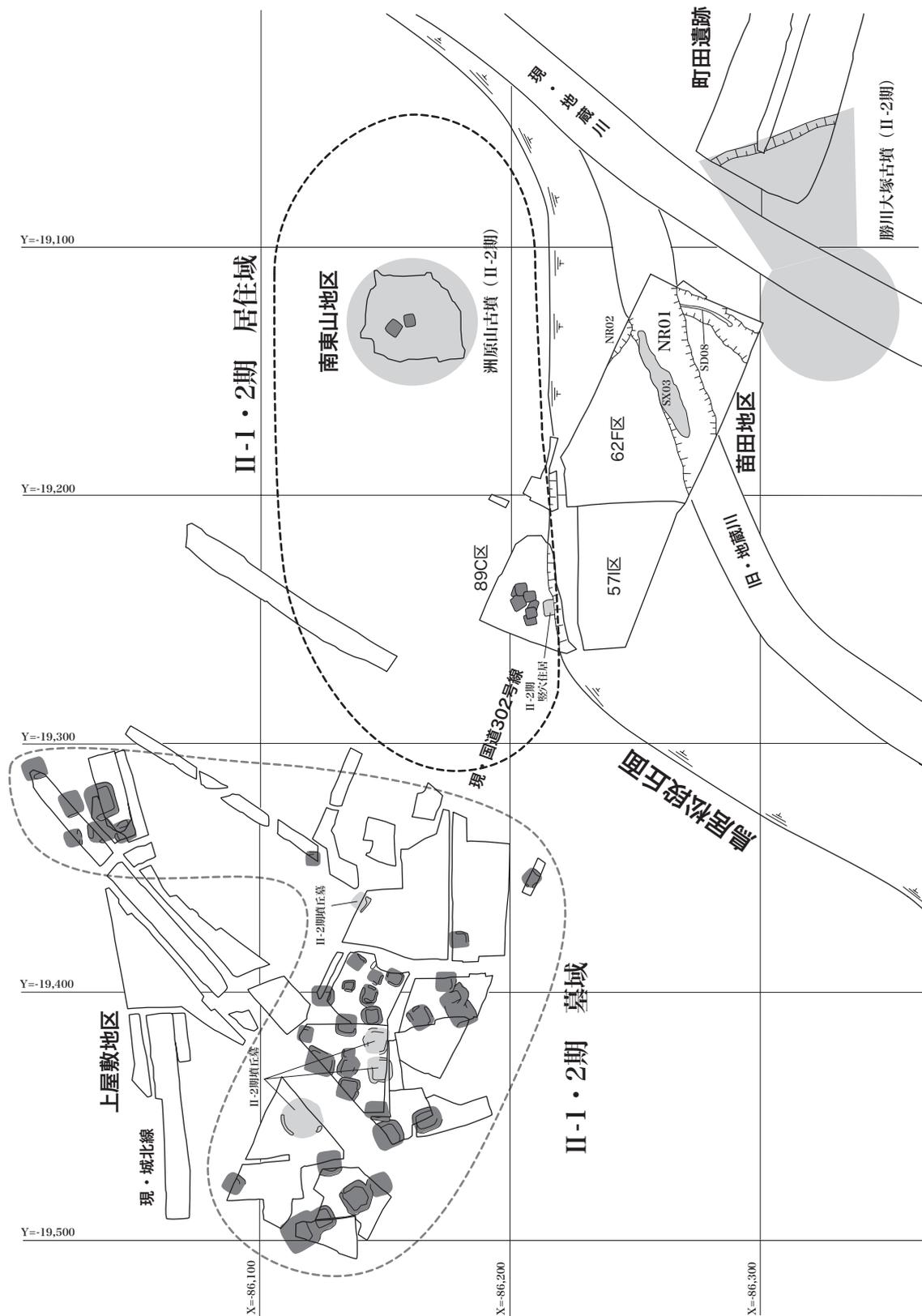
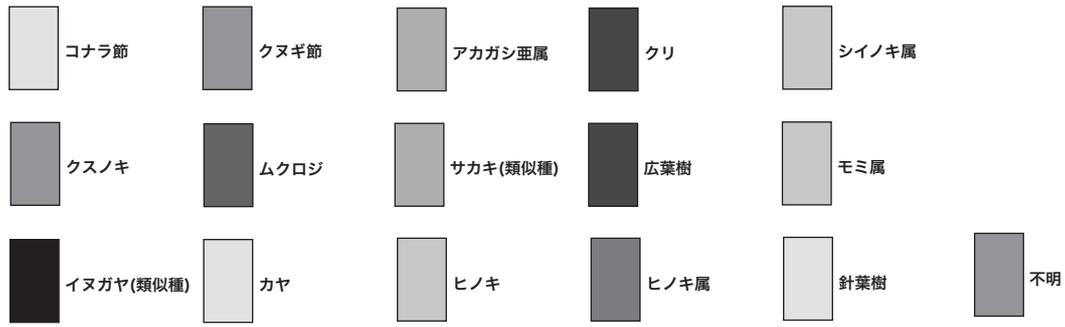
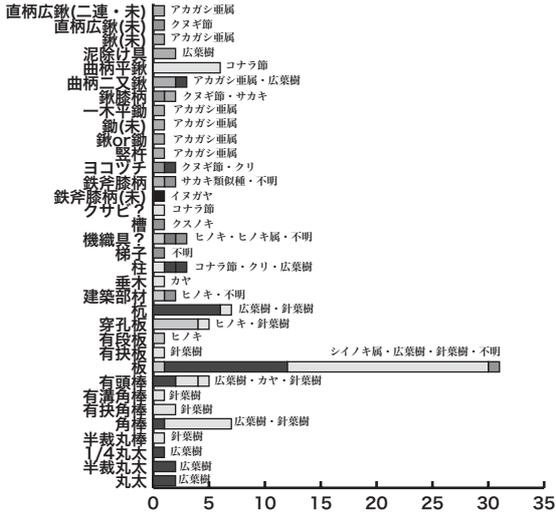


图 31 勝川遺跡遺構全体図 (1 : 2,500、樋上 2003 より)

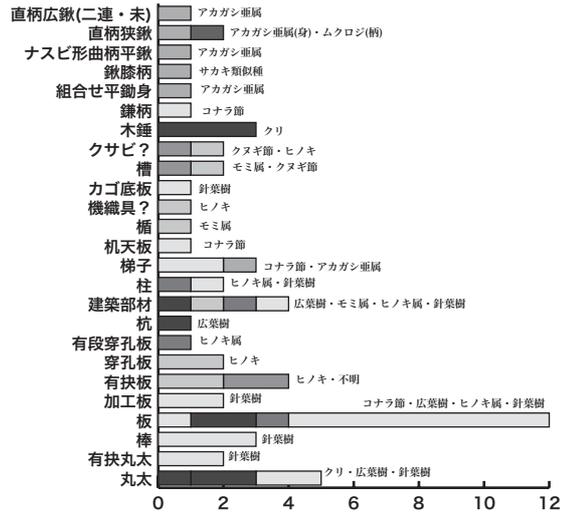
# 春日井市勝川遺跡



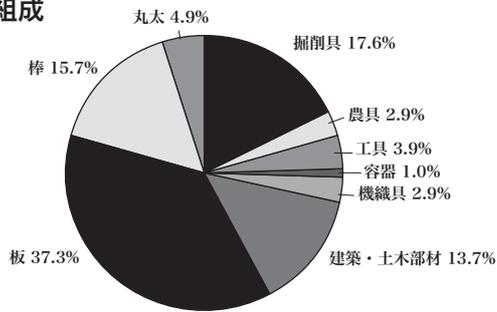
勝川III-1期(弥生V期～廻間I式期)



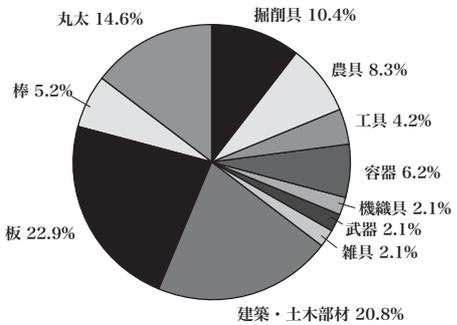
勝川III-2期(5世紀後半)



## 器種組成

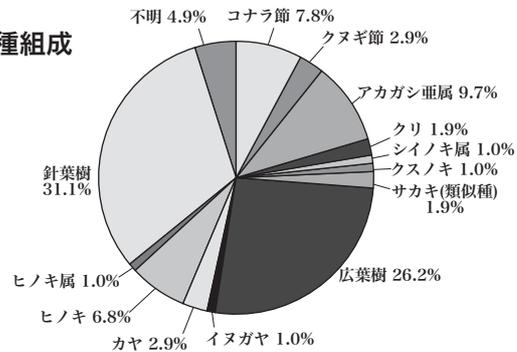


勝川III-1期

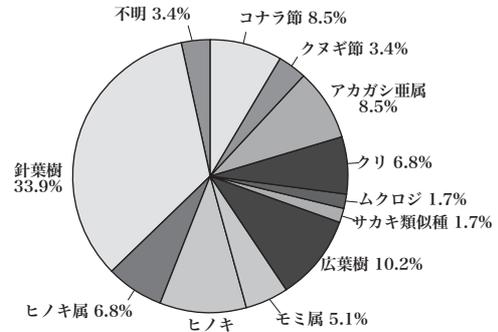


勝川III-2期

## 樹種組成



勝川III-1期



勝川III-2期

図 32 勝川遺跡出土木製品器種・樹種組成変遷グラフ

# 東海市トノメキ遺跡 (松河戸I~II式期)

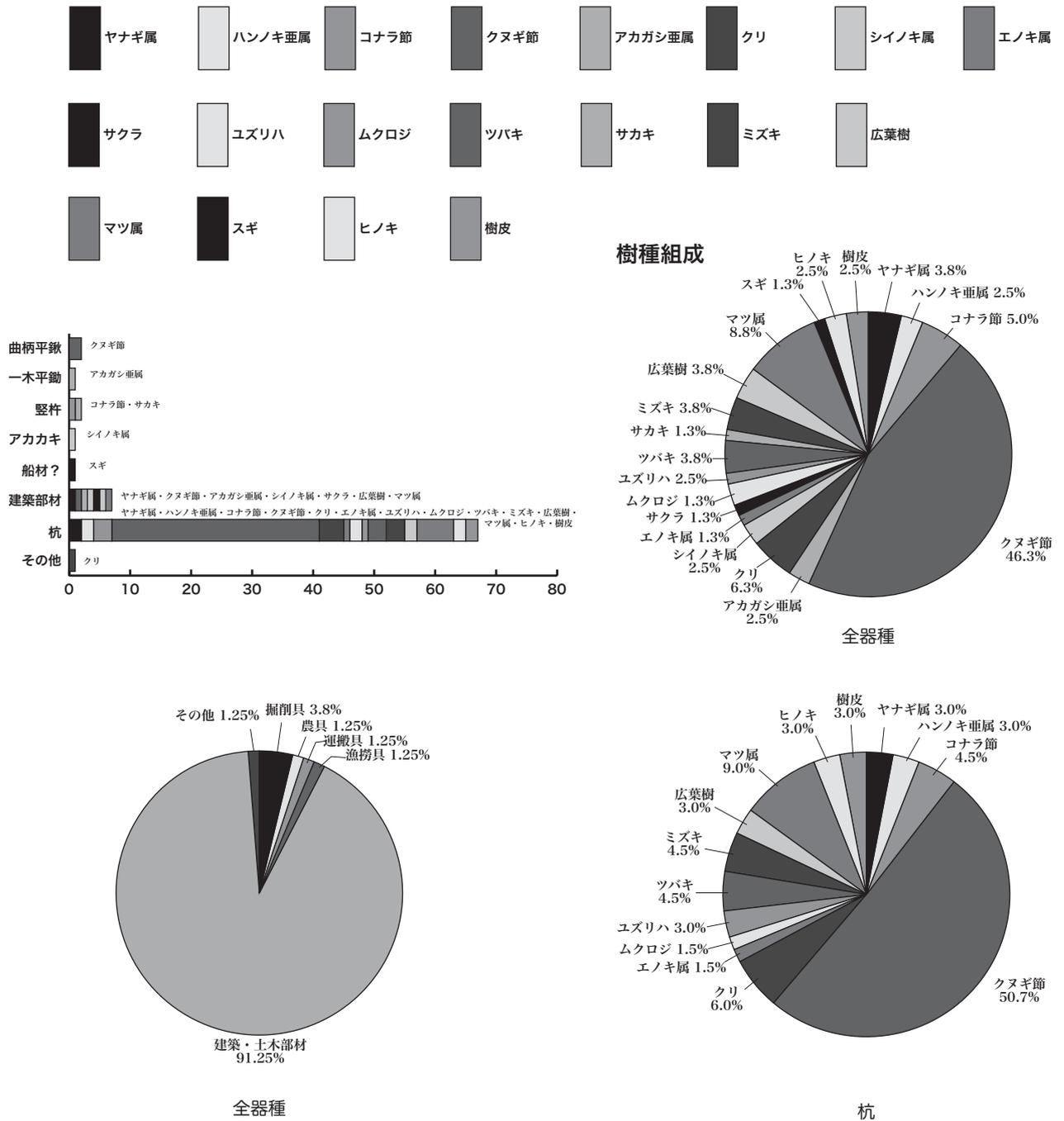


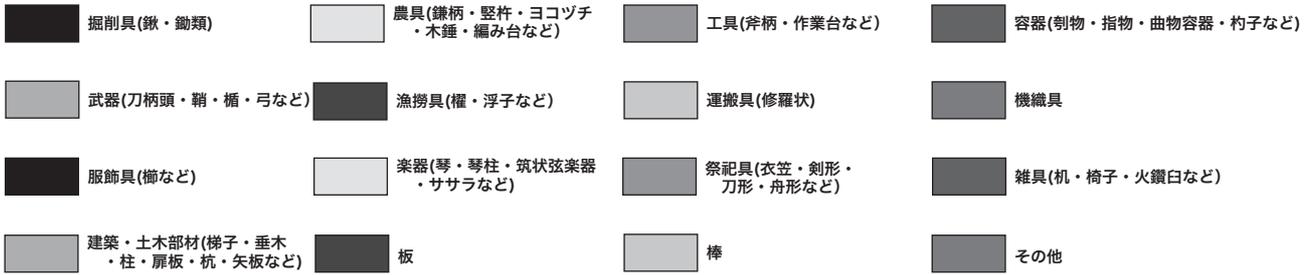
図 33 トノメキ遺跡出土木製品器種・樹種組成グラフ

け根に位置し、あゆち潟と呼ばれた伊勢湾最奥部の広大な干潟に面する丘陵直下の開析谷に立地している。縄文後期から中世の遺物が出土しており、木製品は 73 点出土しており、すべて松河戸 I 式

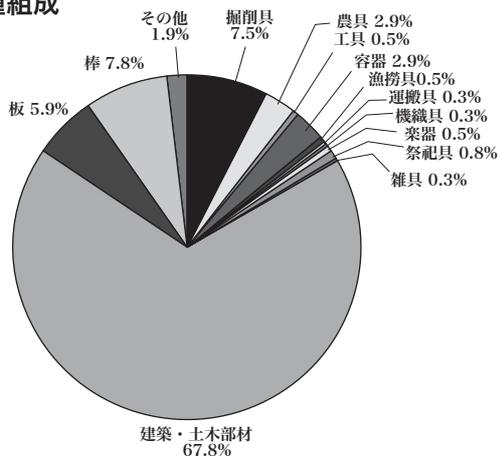
後半期に属する。

木製品の大半が杭で、それ以外の器種は少ない。ただし、船材とみられる破片が 1 点出土しており、アカカキとともに、この集落が海と密接なかわ

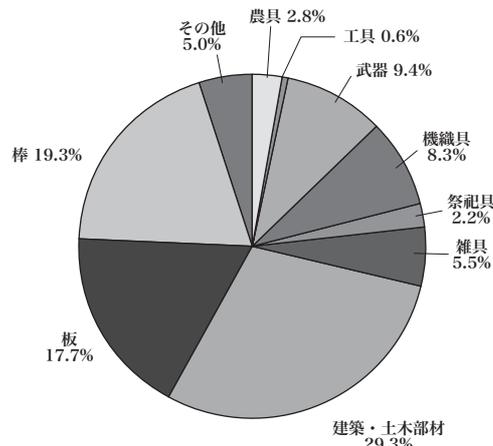
# 顔戸南・城之越・恒武西浦・山ノ花遺跡



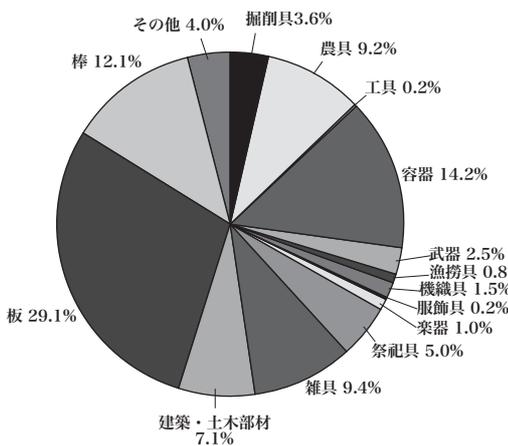
## 器種組成



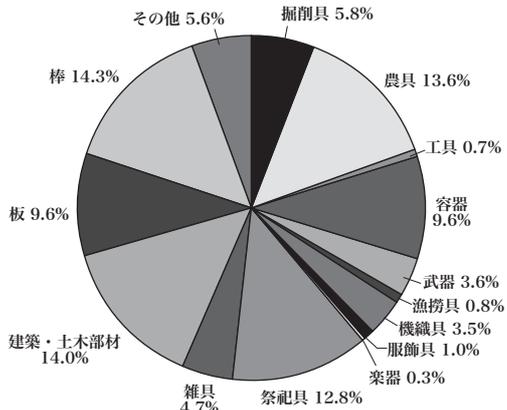
岐阜県顔戸南



三重県城之越



静岡県恒武西浦



静岡県山ノ花

図 34 顔戸南・城之越・恒武西浦・山ノ花遺跡出土木製品器種組成グラフ

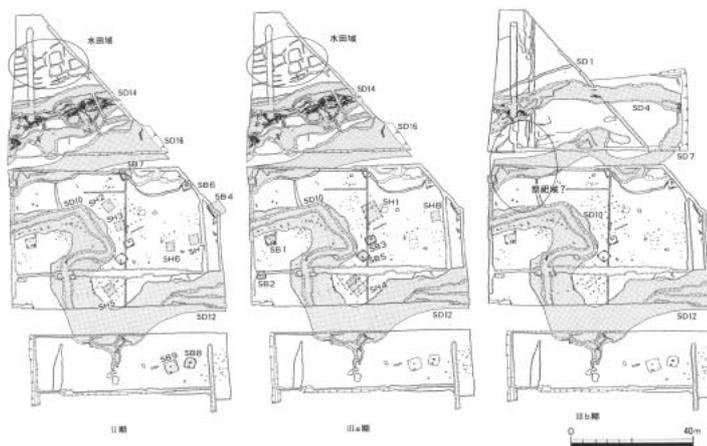


図 35 顔戸南遺跡遺構変遷図 (1 : 2,500、小野木編 2000 より)

りを有していたことをしめしている。

樹種組成で注目されるのはクヌギ節の多さで、ほとんどは杭材にもちいられている。杭全体のなかでクヌギ節は半数を占めることから、この集落の近辺ではクヌギ節が最も入手しやすい樹種であったことがわかる。クヌギ節以外の樹種はばらつくが、マツ属 (8.8%)・コナラ節 (5.0%)・クリ (6.3%) がややめだつことから、この遺跡周辺の丘陵には落葉広葉樹主体の典型的な二次林が広がっていた可能性が高い。

岐阜県御嵩町顔戸南遺跡 (図 34 左上・35)

顔戸南遺跡 (小野木編 2000) は、岐阜県東部の可児川によって形成された沖積低地に立地している。集落は掘立柱建物が主体を占めるが、首長居館にみられる大型建物や方形区画のような施設は認められない。集落の北側には水田域が展開しており、水田に接する溝からはシガラミ状遺構が確認されている。

木製品は水田域南辺の溝と、集落内を屈曲して走る大溝からおもに出土している。404 点が樹種同定結果とともに報告されており、所属時期は廻間Ⅱ式期から宇田式期 (5 世紀後半) におよぶ。報告書では細かな時期区分がなされているが、ここでは一括して扱う。また、樹種組成は検討せず、器種組成のみをみていくこととする。

器種組成で全体の約 7 割を建築・土木部材が占めており、このうちの大半が杭材である。それ

以外の器種では、掘削具 (7.5%)・農具 (2.9%)・容器 (2.9%) がややめだつ。また、衣笠 (蓋) の軸や琴柱の未成品など比較的珍しい木製品もみられるが、おおむね一般的な器種組成といえる。掘立柱建物主体の遺構を加味すれば、やや上位に位置する一般集落とすべきであろう。

静岡県浜松市恒武遺跡群 (恒武西浦・山ノ花遺跡、図 34 下・36・37)

恒武遺跡群は、三方原台地と磐田原台地に挟まれた天竜川平野の

中央部に位置し、天竜川左岸の沖積平野微高地上に立地している。恒武西浦遺跡・恒武西宮遺跡・山ノ花遺跡と呼称される 3 遺跡で構成されており、時代幅は古墳前期から戦国期におよぶ。5 世紀中葉～後半の木製品は恒武西浦遺跡の北辺と山ノ花遺跡において、北東から南西に流れる幅約 20 m、深さ約 2 m の大溝から出土しており、これらは一連の溝あるいは自然流路と考えられている。

恒武西浦遺跡 (柴田編 2000) では 477 点、山ノ花遺跡 (鈴木 1998) では 730 点の木製品が報告されている。両遺跡ともに掘削具から建築・土木部材にいたるまで、一通りの器種が認められる。特徴としては、工具の比率が低く (0.2%・0.7%)、容器 (14.2%・9.6%)・祭祀具の比率が高い (5.0%・12.8%) ことがまずあげられる。また、農具が比較的多い (9.2%・13.6%) ことも注目される。武器は木製品全体のなかでは決して高比率ではないが (2.5%・3.6%)、ここまでみてきた他の遺跡に較べれば、多い方に属するといえる。

さらに、それぞれの器種の内容をみると、祭祀具で特に目を引くのはタタリ状木製品 (儀仗形) や、衣笠の骨などで、前者には直弧文をほどこし、黒漆が塗られたものもある (図 37)。こういった祭祀具類は、舟形や鳥形などとは次元が異なり、きわめて限られた階層の人物のみが手にするもので、特に「威儀具」と呼ばれている (鈴木

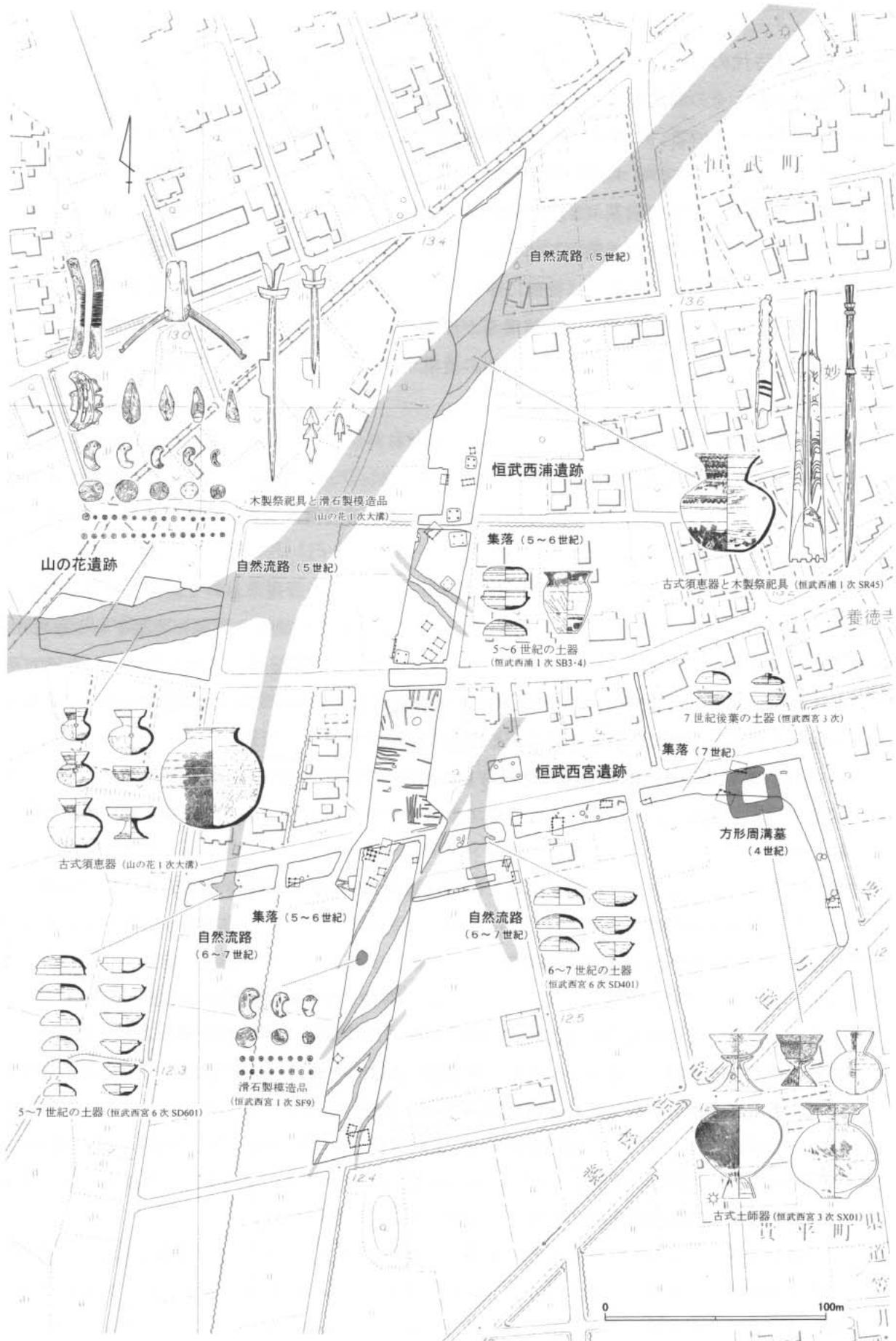
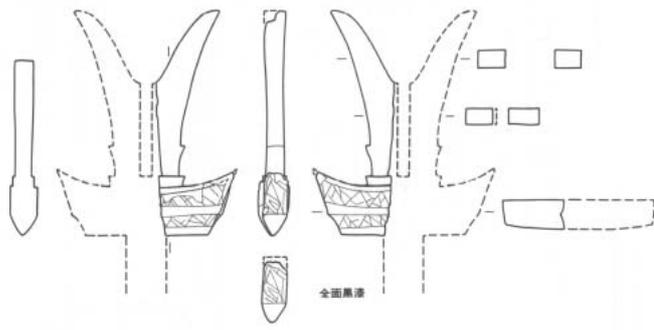
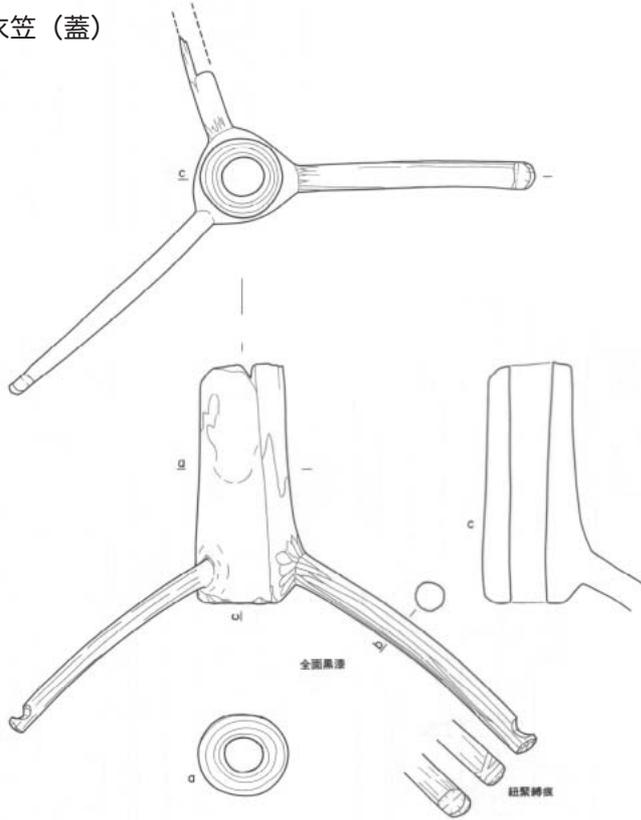


図 36 恒武遺跡群遺構全体図 (1:2,500、鈴木 2002 より)

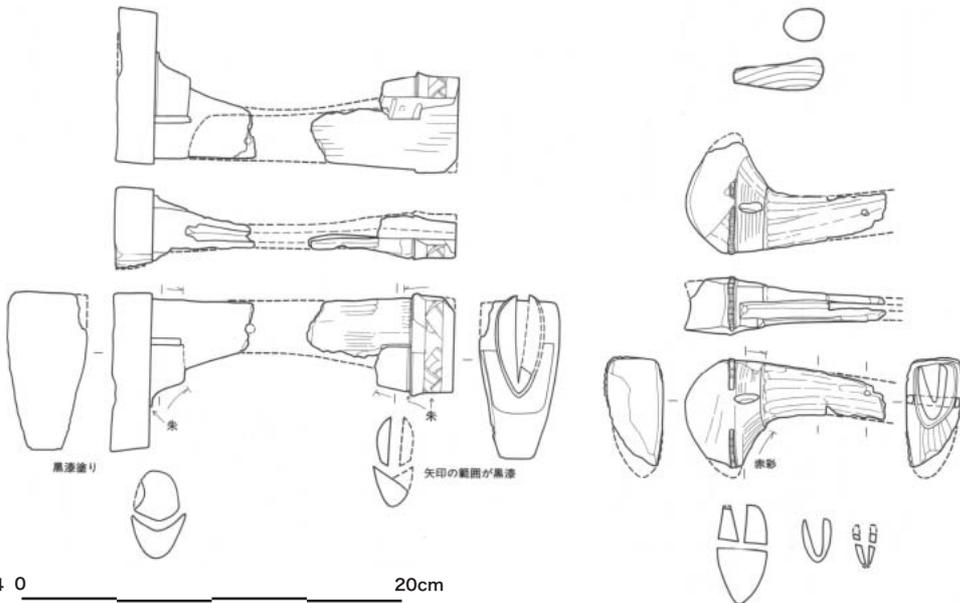
儀仗形



衣笠 (蓋)



大刀柄頭



1/4 0 20cm

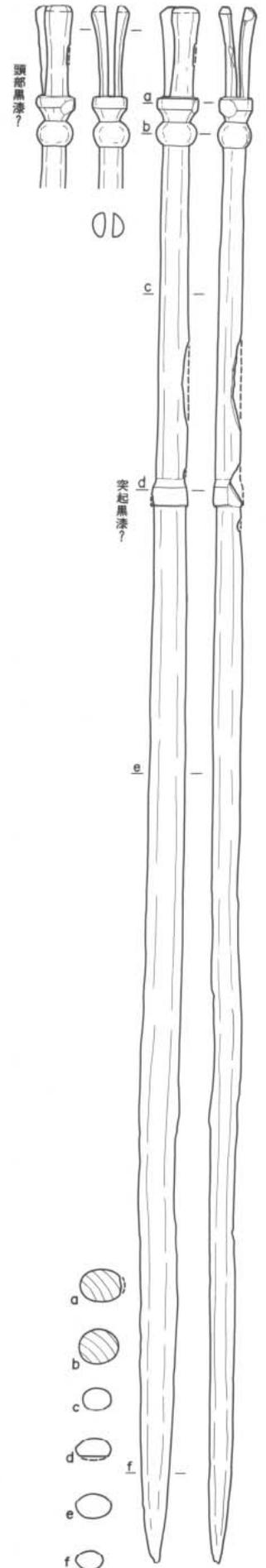


图 37 山ノ花遺跡出土木製威儀具 (1:4、鈴木 1998 より)

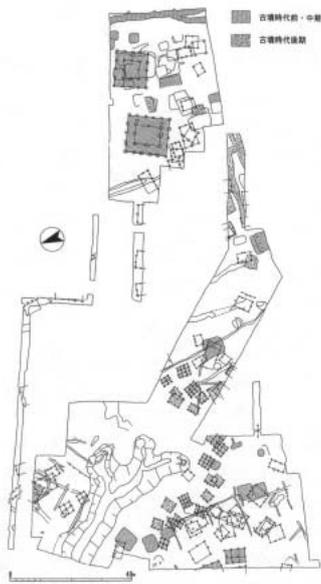


図 38 城之越遺跡遺構全体図 (1 : 2,500、  
中浦 1998 より)

2000)。武器に関しては、大刀の柄頭に赤・黒漆をほどこし、直弧文を描いたものがみられる。そのほか、机天板や筑状木製品、大型掘立柱建物の部材（扉板・マグサ材・壁板など）も多量に出土している点も、ここまで検討してきた他の遺跡にはみられない特徴である。これらはいずれも首長層に関わる木製品群といえるが、恒武西浦・恒武西宮遺跡で確認されている遺構は竪穴住居と小規模な掘立柱建物が散在する状況であり、いわゆる首長居館をしめすような大型掘立柱建物や方形区画等は認められない。今後、周辺地域から、この場で祭祀をおこなった首長の居館が見つかる可能性が高い。

三重県上野市城之越遺跡 (図 34 右上・38)

城之越遺跡 (穂積編 1992、中浦 1998) は三重県北西部の上野盆地南部に所在し、木津川上流域右岸の沖積低地微高地上に立地している。3基の井泉と、石貼りをほどこした大溝が確認されており、これらは後の庭園遺構の原形とされている。この大溝内から4世紀後半～5世紀前半に属す

る182点の木製品が出土している。

この遺跡から出土した木製品の器種組成は、これまでみてきたすべての遺跡と著しく異なるものである。掘削具・容器が1点も出土せず、農具 (2.8%)・工具 (0.6%) の比率もきわめて低い。その一方で、武器 (9.4%)、機織具 (8.3%)、建築・土木部材 (29.3%) の占める比率が非常に高い。武器には、格子状に細かな糸を巻き付けた上に黒漆をほどこした飾り弓や劍鞘などがあり、建築・土木部材では扉板やマグサ材など大型掘立柱建物の部材が多い。祭祀具はほとんどが武器形である。白や堅杵、ヨコヅチ、木鍾など、農作業の関連するものもあるが、全般的に日常生活に関わる木製品の欠如が目につく。

石貼りをほどこした大溝の西側には、同時期の大型掘立柱建物が2棟存在するが、首長の生活域とみるよりは、井泉と大溝を中心とするこの一面は、この地域を支配した首長層が執り行う一大祭祀空間とみるべきで、彼らの生活の場 (首長居館) はこの城之越遺跡とは異なる場所に存在した可能性が高い。

## 7. 出土木製品の器種組成からみた古墳時代集落の階層性

前節では、本川遺跡に比較的近似した時期・地域の遺跡から出土した木製品を器種組成と樹種組成の点から検討を加えた。その結果、特に器種組成において、遺跡 (集落) によってかなりの違いがあり、しかも、それぞれの遺跡において確認された遺構の性格と密接に結びついていることがあきらかとなった。

これを、遺跡の性格を軸にして、検出される遺構と出土木製品の対応関係として模式化すると、図 39 上のようなになる。すなわち、弥生後期後半～古墳前期前半には、大型掘立柱建物・方形区画・井泉による祭祀空間と掘立柱建物・竪穴住居・区画溝による首長居住空間がセットとなる遺跡では、ほぼすべての種類の木製品が揃うのに対して、掘立柱建物と竪穴住居で構成される遺跡 (一般集落 A) では、威儀具や大型建物の建築部材が

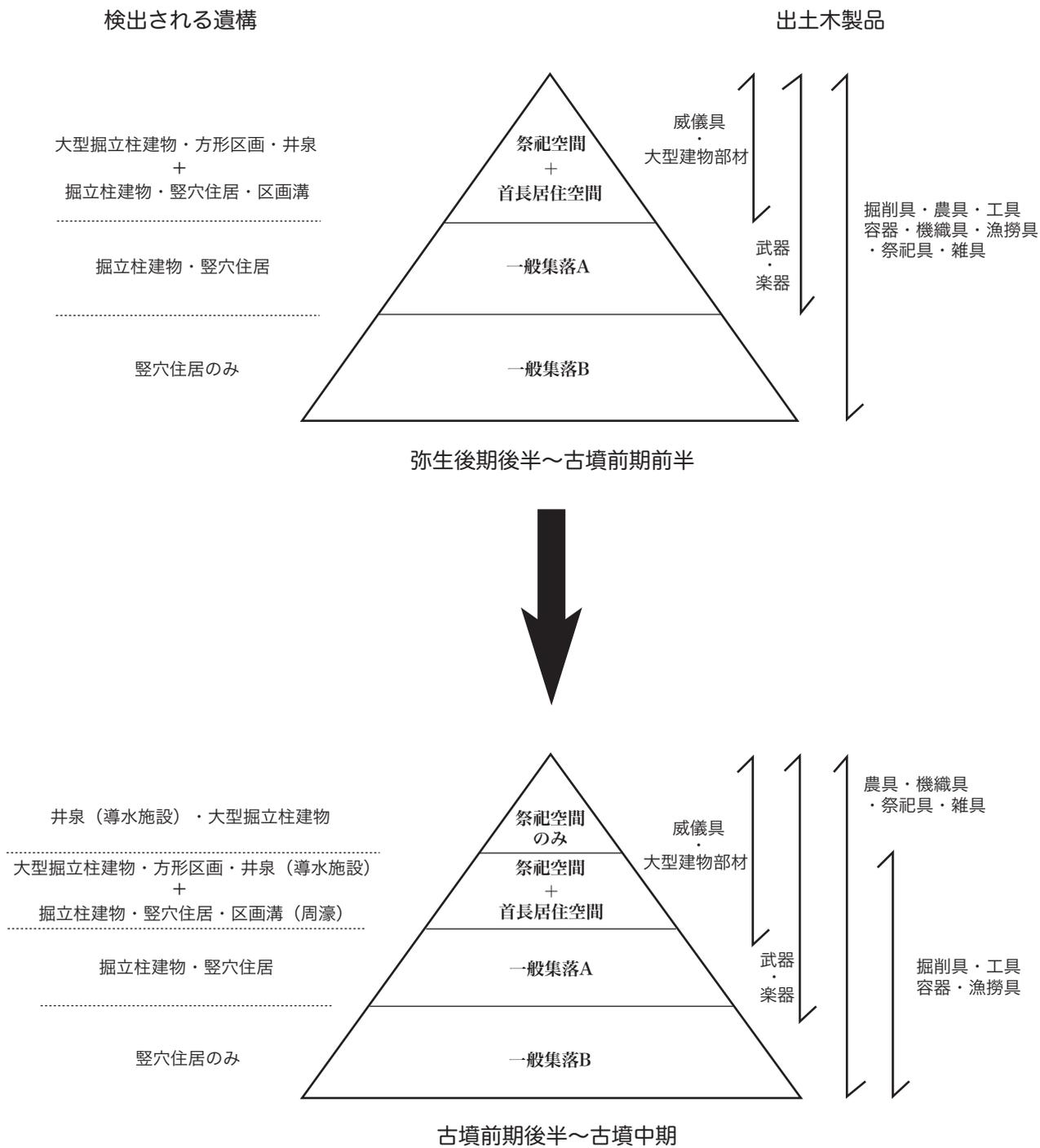


図 39 出土木製品の組成と集落の階層性についての模式図

欠落する。さらに、竪穴住居のみで構成される遺跡（一般集落 B）では、武器や楽器などがみられない（本川遺跡 NR3001 出土の琴板は時期不明だが、あるいは古墳中期に属する可能性もある。もしこの時期に属するとすれば、一般集落 B の

一部まで楽器が使用されていたこととなる）。そして、前者の遺跡から後者の遺跡までは、図のようなピラミッド構成をなすと考えられる。もちろん、ひとつの集落を完掘した例はごく稀であるため、すべての調査事例がこの図式に合致する訳で

はないし、それぞれの階層が本来はさらに細かく分かれているとおもわれるが、小論で検討してきた数少ない事例を適合させると、祭祀空間+首長居住空間の例は八王子遺跡や小論では検討の対象とはしなかったが三重県津市六大 A 遺跡（穂積 2000、穂積編 2002）、一般集落 A は釈迦山遺跡、一般集落 B は勝川遺跡（II -1 期）となろう。

次いで、古墳前期後半～古墳中期の状況を模式化すると、図 39 下のようになる。前段階には最上位に位置していた、祭祀空間+首長居住空間から、祭祀空間のみが独立する遺跡が出現する（例えば城之越遺跡）。それにともなって、これまでのおおむね 3 段階に区分することができた遺跡の階層が大きく 4 段階に分けられるようになる。このうち最上位に位置する、祭祀空間のみが独立する遺跡では、日常生活に関わる木製品のうち、掘削具・工具・容器・漁撈具などが欠落し、祭祀具、なかでも威儀具や、武器の優品（装飾性の強い一群）、大型建物の建築部材などが多数出土する。これより下の階層では遺構の構成・木製品の組成について、前段階と大きな相違は認められない。ただ、祭祀空間+首長居住空間に関しては、巨大な周濠で囲まれた、いわゆる豪族居館がおそらくこの段階から出現し、また木製品では威儀具や武器の種類が増加する。これに前節で検討した遺跡をそれぞれに該当させると、祭祀空間のみは城之越遺跡、祭祀空間+首長居住空間は恒武遺跡群（首長居住空間は未検出）、一般集落 A は勝川遺跡や顔戸南遺跡、一般集落 B はトヽメキ遺跡となろう。当然のことながら、古墳中期の本川遺跡は、検出遺構・出土木製品の組成から一般集落 B の典型例にあげることができる。

最後に、本節での検討において特に重要とおもわれるのは、農具や機織具が、弥生後期後半から古墳中期を通じて、すべての階層の遺跡からも必ず出土する点である。このうち機織具については、首長層の衣服を織る役割を課せられた人々が上位の階層の生活空間に配置されていた可能性とともに、律令期における沖ノ島の祭祀遺跡からもミニチュア品が出土することから、すでに祭祀の場で

もちいられていたことも考えられる。農具についても同様に、祭祀の場で何らかの農耕（収穫）の情景を再現するマツリがおこなわれていたか、あるいは首長自らが祭祀行為ではない農作業に直接携わっていた可能性が考えられる。いずれにせよこの時期、各地域の首長層は決して農耕から切り離された存在ではなかったことをしめしている。

## 8. 木製祭祀具からみた祭祀の重層性

前節で結論づけたように、本川遺跡は古墳中期において、最も下位に位置づけられる一般集落 B に属すると考えられる。しかしながら、この本川遺跡からは、最下層の集落には一見不似合いなまでの立派な鳥形木製品が出土している。そこで次に、木製祭祀具の階層性と、それにともなう祭祀の重層性について考えてみる。

古墳中期における祭祀行為を、きわめて大雑把に分けると、王権の祭祀・中小首長の祭祀・ムラの祭祀とすることができよう。王権の祭祀については、ヤマト王権から律令期の旧国あるいは数郡単位でおこなわれたであろう祭祀までをふくんでいる。中小首長の祭祀は、同じく律令期の郡ないしは郷単位での祭祀を想定している。ムラの祭祀は、各集落単位でおこなわれた小規模な祭祀を指している。これを前節で検討した遺跡（集落）の階層に対応させると、上位 2 階層（祭祀空間のみと祭祀空間+首長居住空間の上位レベル）での祭祀が王権の祭祀に、祭祀空間+首長居住空間のなかの下位レベルと一般集落 A での祭祀が中小首長の祭祀に、一般集落 B での祭祀がムラの祭祀に対応すると考えている。

これら、それぞれの階層における祭祀に、木製祭祀具を対応させると図 40 左のようになる。まず、武器形木製品は筆者の分類による一般集落 B からは出土せず、しかも穂積裕昌氏による一連の研究（穂積 1998・1999・2001）でもあきらかなように、記紀では井泉におけるウケヒ（誓約）儀礼において、玉などとともにもちいられていることから、王権および中小首長の祭祀の場で使用されたと想定できる。

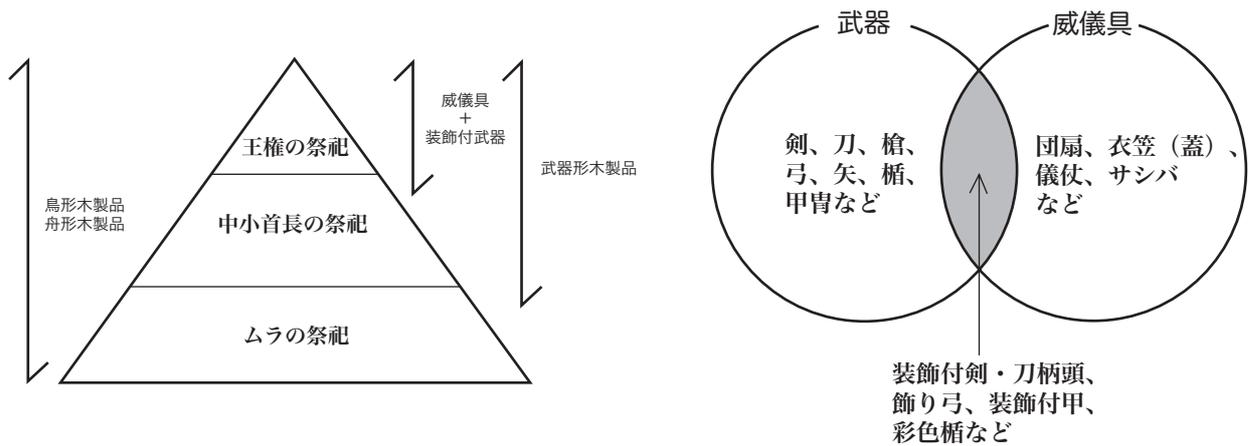


図 40 木製祭祀具と祭祀の重層性（左）、武器と威儀具の関係模式図（右）

一方、鳥形木製品は古墳の周濠をふくむ、ほぼあらゆる階層の遺跡から出土しており、時期・地域によって形態も様々であることから、すべての階層における祭祀行為にもちいられたとおもわれる。想像をたくましくすれば、本川集落ではムラ長が住む大型竪穴住居の傍らを流れる大溝SD2001の、ほとりにそびえるケヤキの大木のふもとでおこなわれたムラのマツリにおいて、シンボルとして使用された可能性が考えられる。

それに対し、威儀具は王権の祭祀と中小首長の祭祀でもより上位の階層でしかもちいらなかった可能性が高い。小論では、ここまで威儀具を祭祀具のなかの一要素として分類してきたが、威儀具は本来的に王の権威を荘厳化するための装置であり、他の祭祀具のように具体的な祭祀行為にもちいられるものではない。そのため、威儀具は他の木製祭祀具とは異なる範疇で捉えるべきものといえる。

さらに、この威儀具と同様の機能を有したと考えられるのが装飾性の高い武器の一群である。装飾付の大刀や飾り弓、彩色をほどこした甲冑や楯は実際の戦闘用道具ではなく、王が自らの権威を高めるために身につけた特別な武器と考えられる。この武器と威儀具の関係を模式化すると、およそ図40右のようになろう。

このように、前節で検討した集落の階層性と同様に、祭祀がおこなわれる場と執行する主宰者の

階層に応じて、使用される木製祭祀具の組み合わせが決められていたのである。

## 9. まとめにかえて

以上、本川遺跡から出土した木製品を器種組成と樹種組成の両面から検討し、他の遺跡と比較することにより、特に古墳中期の本川遺跡の性格について考えてきた。その結果、本川集落は、当時としてはごく一般的な集落であることがあきらかとなった。

これまで、古墳時代の集落遺跡は、もっぱら首長居館にその研究の力点が置かれてきたといって過言ではない。しかし、首長居館の対極にあるはずの一般集落に関しては、その景観の復原や出土遺物に対する研究はほとんどなされてこなかった。筆者は一般集落の内部構造と所有物を明確化にすることによって、はじめて首長居館の姿が見えてくるのではないかと考えている。その意味において、この本川遺跡は大変貴重なデータを提供することができたといえる。

また、後半部分ではやや飛躍して、古墳時代における集落の階層性と祭祀の重層性についても筆者なりの考えを述べてきた。近年、弥生終末期から古墳前期の首長居館に関連する遺跡が全国的に増加しつつあり、各地でその類型化が進められている。しかし、それらはおおむね遺構からの検討にとどまっており、遺構と遺物を組み合わせた

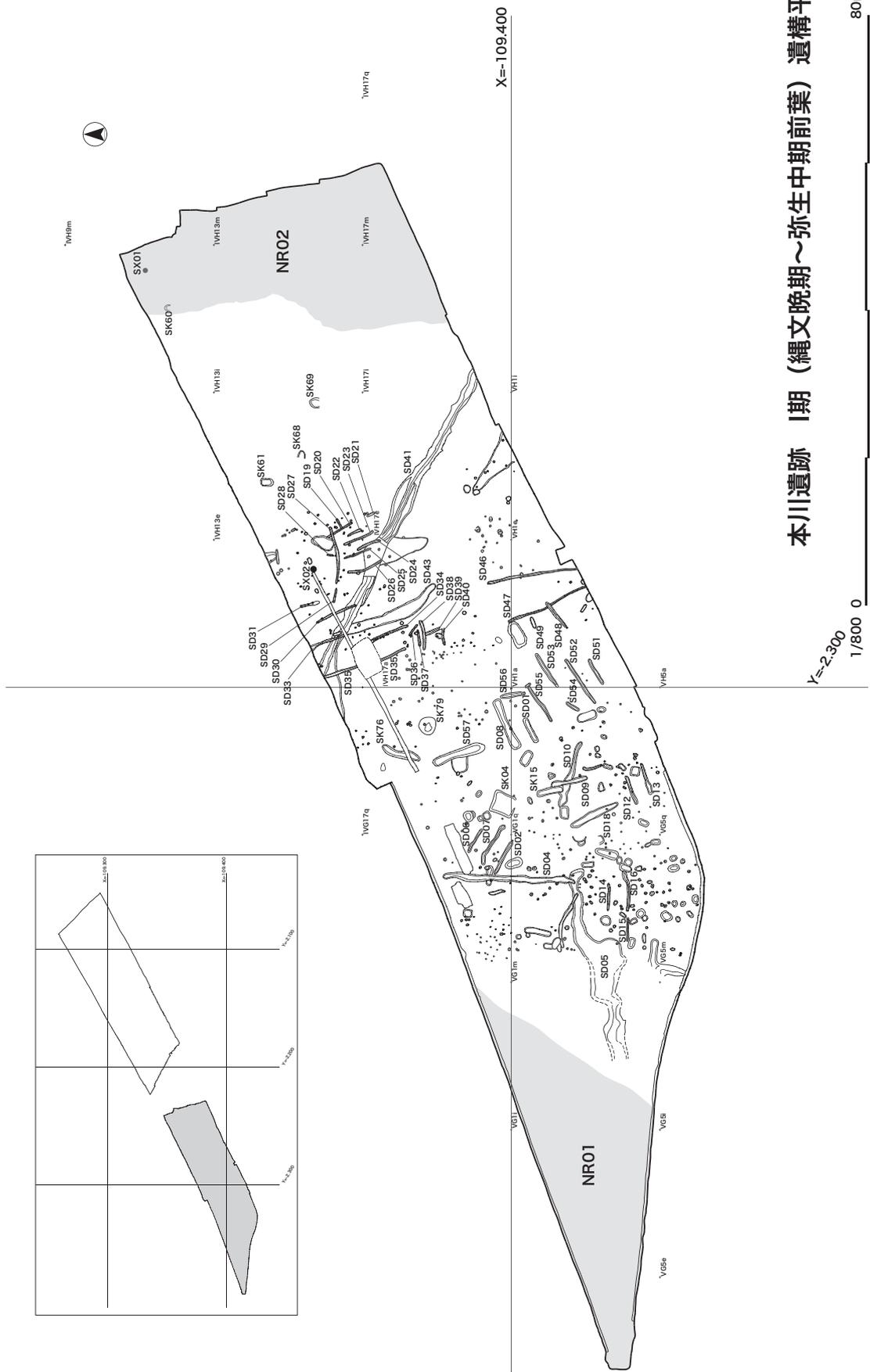
研究は意外におこなわれていない。筆者は、煮沸行為など直接火にかける用途を除く、日常生活のありとあらゆる場面にもちいられるという木製品の特性に着目し、木製品の組成から居館および集落の階層性を明確にすることを小論において試みた。それにより、この両者はきわめてよく対応していることがわかった。さらに木製祭祀具についても、祭祀における階層性に対応して祭祀具の組成が変化することもあきらかにできた。

今後は、古墳前・中期のみならず、弥生～古墳時代全般を通じて同様の検討をおこなうとともに、他の出土遺物と複合させて、首長居館および集落論に迫っていきたいと考えている。

末筆ながら、小論を作成するにあたり、石黒立人・植田弥生・鈴木裕明・穂積裕昌・村上由美子・山田昌久の各氏には貴重なご教示を賜りました。記して感謝いたします。

## 引用文献

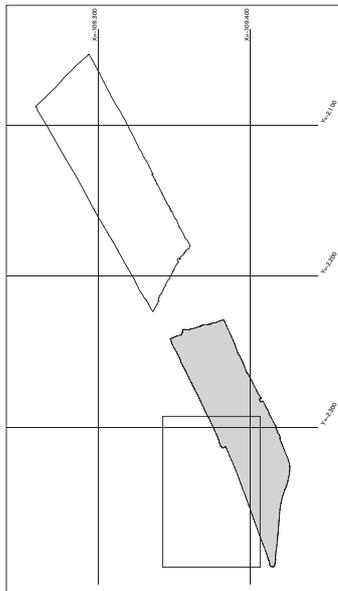
- 赤塚次郎 編 1984『勝川』愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 赤塚次郎 2002「首長居館と集落」『季刊考古学』第80集、雄山閣
- 大阪府立弥生文化博物館 2002『王の居館を探る』展覧会図録
- 小笠原義彦・阿部義平 編 1991「特集 古代の豪族居館」『季刊考古学』第36号、雄山閣
- 小野木 学 編 2000『顔戸南遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書 第58集
- 神谷真佐子・川崎みどり 編 2001『釈迦山遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集
- 柴田 睦 編 2000『恒武西宮・西浦遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第120集
- 鈴木一有 2002『恒武西宮遺跡 第3・6・7次発掘調査報告書』(財)浜松市文化協会
- 鈴木敏則 1998『山ノ花遺跡 木器編(図版)』(財)浜松市文化協会
- 鈴木裕明 2000『権威の象徴-古墳時代の威儀具-』展覧会図録、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 立松 彰 編 1988『トヽメキ遺跡』愛知県東海市教育委員会
- 寺澤 薫 編 1998「特集 古墳時代の首長居館」『古代学研究』第141号
- 寺澤 薫 2001「首長居館論追補」『八王子遺跡考察編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集
- 中浦基之 1998『城之越遺跡(2次)発掘調査報告』上野市文化財調査報告 51
- 橋本博文 編 1988「特集 豪族の居館跡」『月刊考古学ジャーナル』No.289、ニュー・サイエンス社
- 樋上 昇 編 1992『勝川遺跡IV』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第29集
- 樋上 昇 編 2001『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集
- 樋上 昇 2002「樹種からみた尾張地域の木製品」『考古学フォーラム』15
- 樋上 昇 2003「春日井市勝川遺跡出土木製品の再検討」『研究紀要4』愛知県埋蔵文化財センター
- 穂積裕昌 編 1992『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 99-3
- 穂積裕昌 1998「古墳時代の湧水点祭祀について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI
- 穂積裕昌 1999「井泉と誓約儀礼」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズVII
- 穂積裕昌 2000『六大A遺跡発掘調査報告(木製品編)』三重県埋蔵文化財調査報告 115-17
- 穂積裕昌 2001「井泉と大形建物」『八王子遺跡考察編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集
- 穂積裕昌 編 2002『六大A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 115-16



本川遺跡 I期 (縄文晩期～弥生中期前葉) 遺構平面図

遺構図版 1 I期遺構全体図

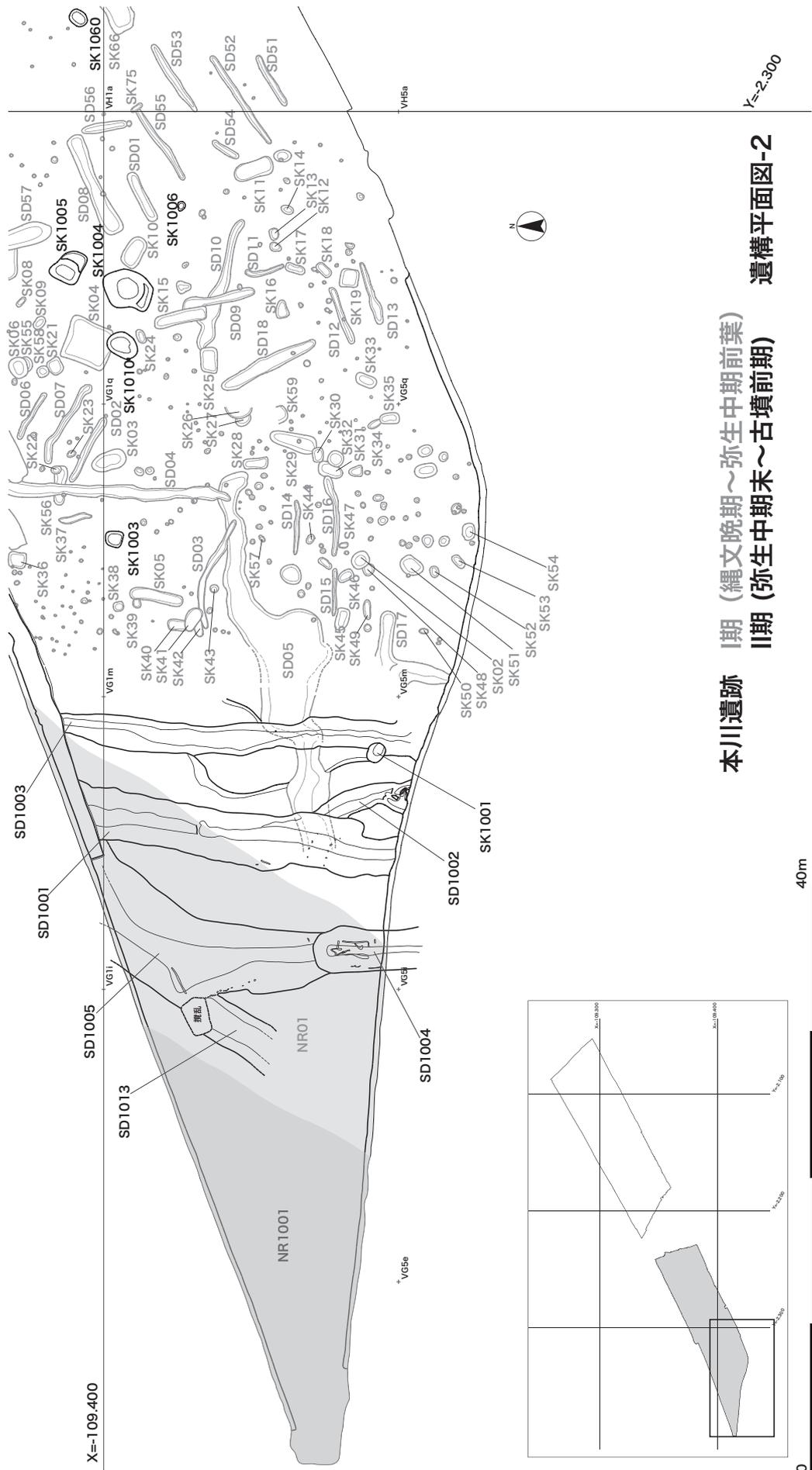
1/400 0 40m



本川遺跡  
 I期 (縄文晩期～弥生中期前葉)  
 II期 (弥生中期末～古墳前期)  
 遺構平面図-1

Y=2,300





本川遺跡 I期 (縄文晩期～弥生中期前葉)  
II期 (弥生中期末～古墳前期) 遺構平面図-2

遺構図版 3 I・II期遺構分割図(2)

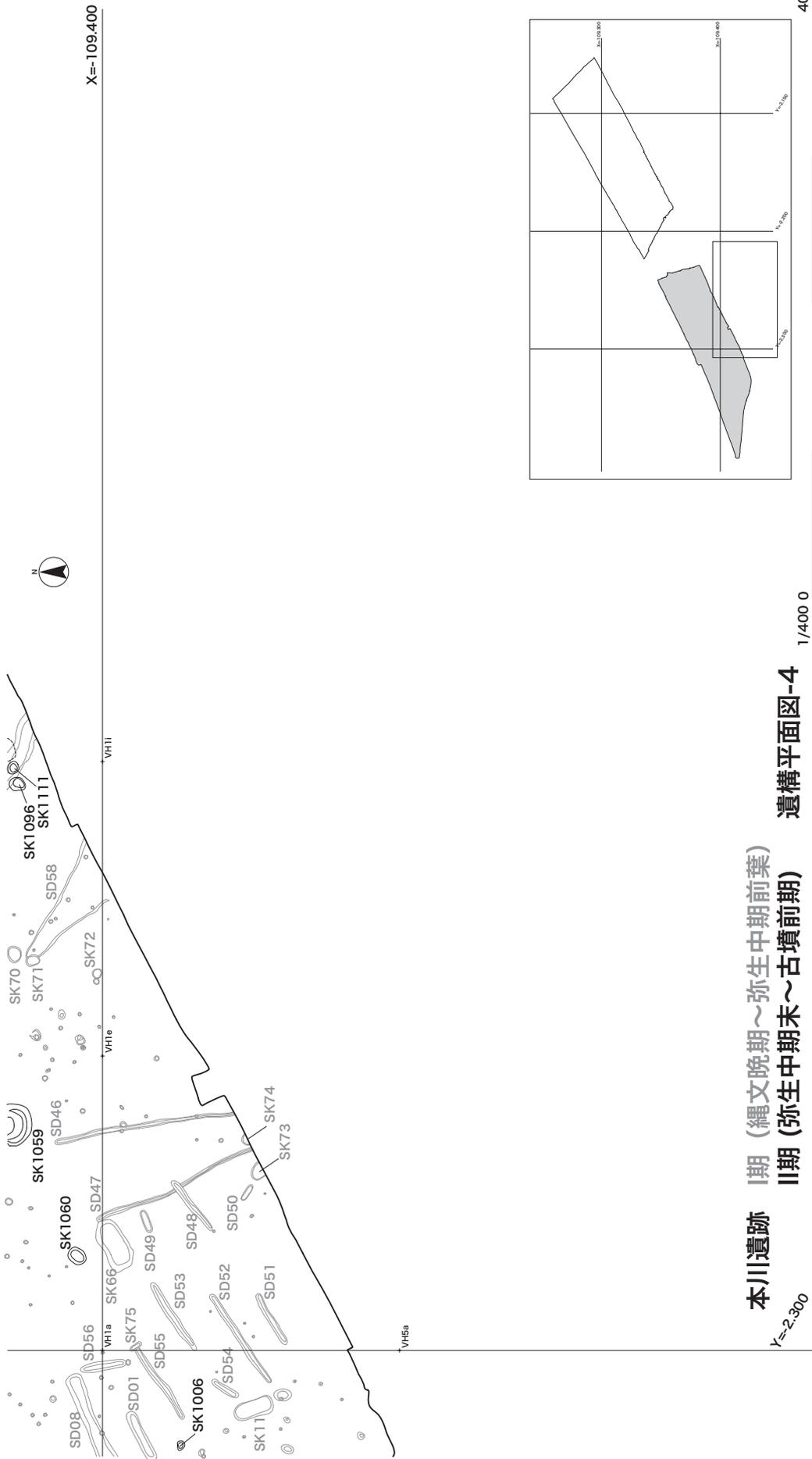
1/400 0

本川遺跡 I期 (縄文晩期～弥生中期前葉)  
II期 (弥生中期末～古墳前期)

遺構平面図-3



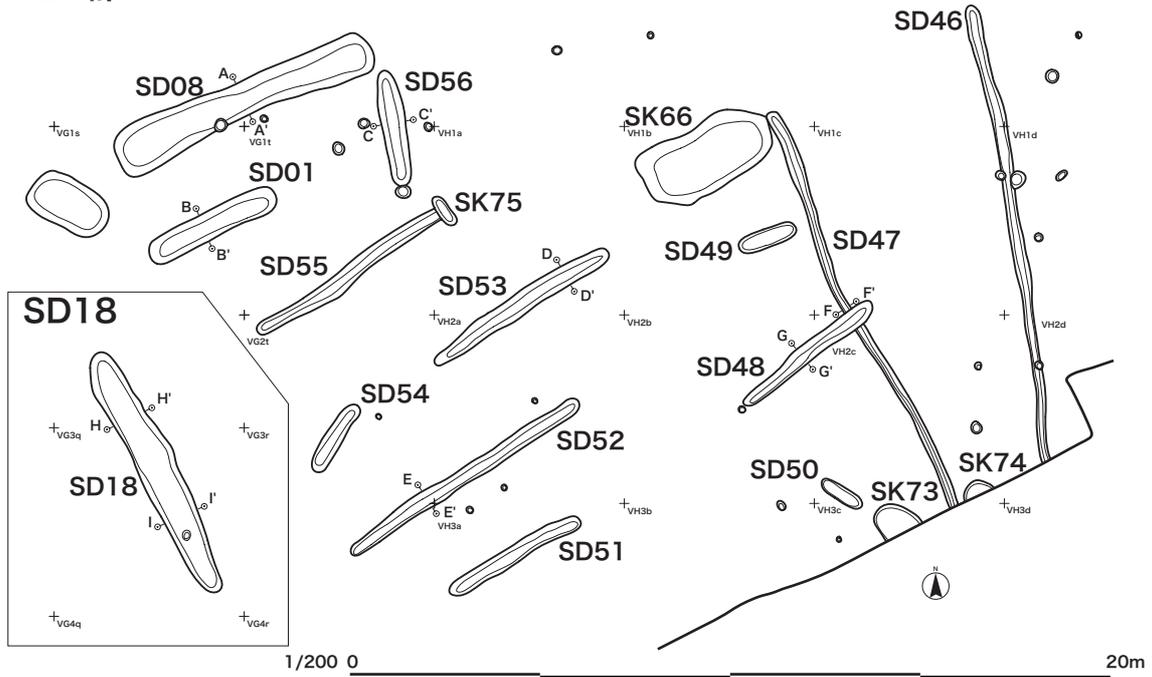
遺構図版 4 I・II期遺構分割図(3)



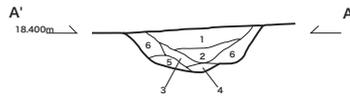
本川遺跡  
 I期 (縄文晩期～弥生中期前葉)  
 II期 (弥生中期末～古墳前期)

遺構平面図-4

# SD群



## SD08



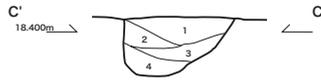
1. 7.5Y5/1 粘土 (炭化物含)
2. 5Y5/2 粘土 (炭化物含)
3. 7.5Y5/1 粘土 (7.5Y4/1 粘土・10GY6/1 細粒砂含)
4. 10GY6/1 極細粒砂 (10GY6/1 極細粒砂含、炭化物含)
5. 5Y6/1 粘土 (炭化物含)

## SD01



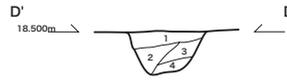
1. N4/0 粘質シルト

## SD56



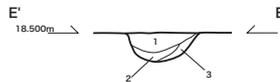
1. 5Y5/1 粘質シルト (炭化物含)
2. 10Y6/1 粘質シルト (10Y7/1 細粒砂含、炭化物含)
3. 10Y5/1 粘質シルト (10GY6/1 極細粒砂含)
4. 7.5GY4/1 粘質シルト (10GY6/1 極細粒砂含)

## SD53



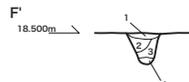
1. 2.5Y5/1 粘質シルト (10Y4/1 粘土含、炭化物含)
2. 10Y4/1 粘土 (炭化物含)
3. 2.5Y5/1 粘質シルト (5Y6/1 極細粒砂含、炭化物含)
4. 10GY5/1 細粒砂

## SD52



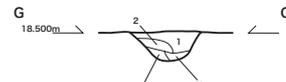
1. 7.5Y5/1 粘質シルト (炭化物含)
2. 5GY7/1 細粒砂
3. 7.5Y5/1 粘質シルト (5GY7/1 細粒砂含、炭化物含)

## SD47



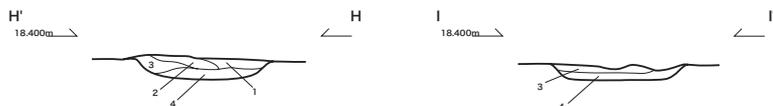
1. 5Y5/1 極細粒砂 (5Y4/1 シルト含、炭化物含)
2. 5Y5/1 極細粒砂 (5Y7/2 極細粒砂含)
3. 5Y5/1 極細粒砂 (炭化物含)
4. 10Y6/1 細粒砂

## SD48



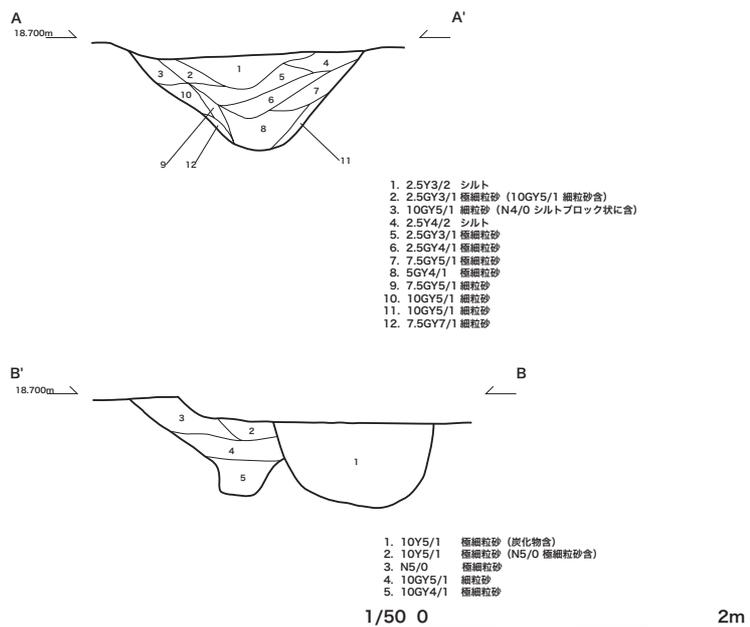
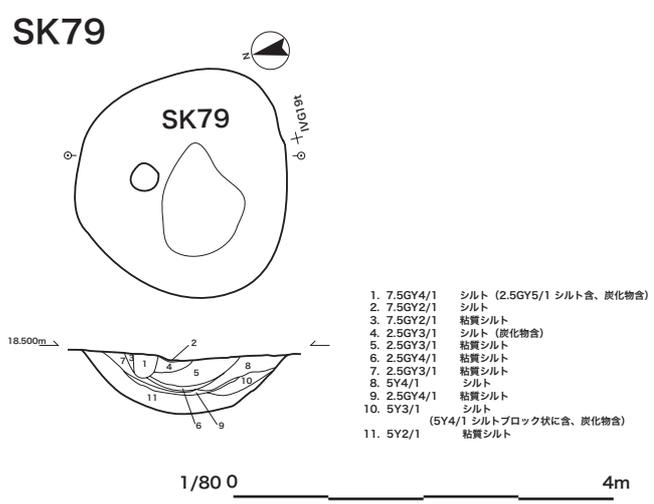
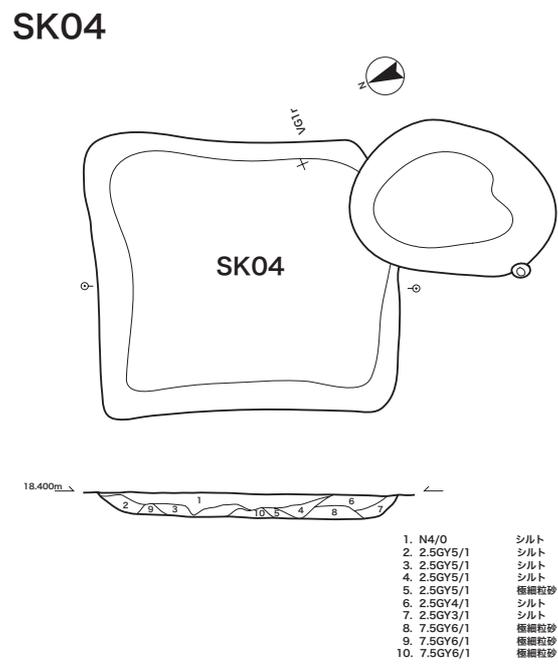
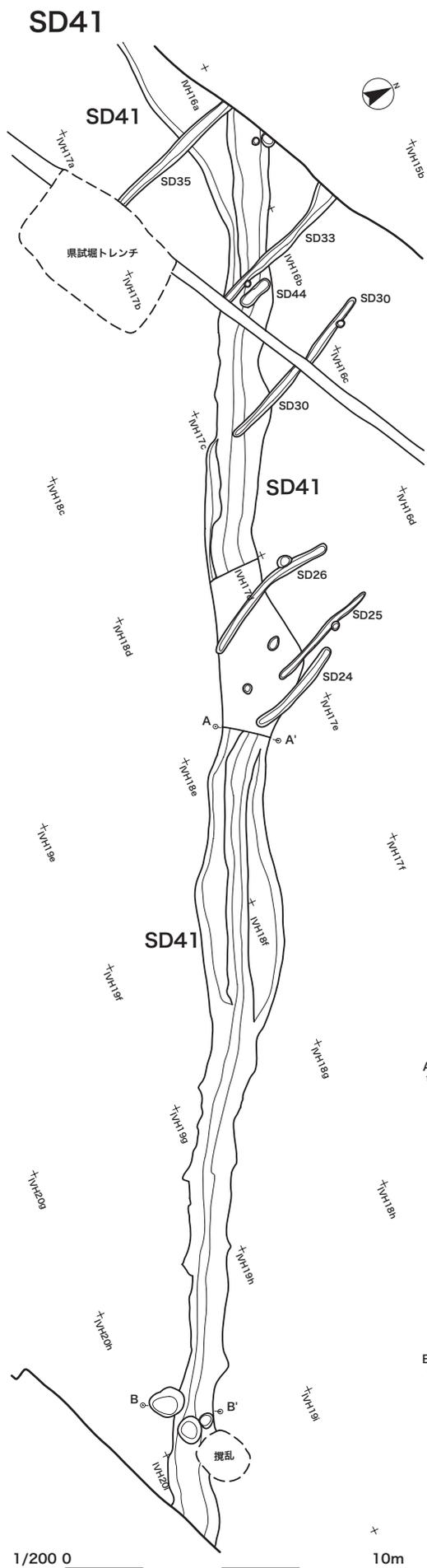
1. 7.5Y5/1 極細粒砂 (炭化物含)
2. 7.5Y5/1 極細粒砂 (7.5Y7/2 細粒砂・10GY6/1 細粒砂含)
3. 10GY6/1 粘質シルト (2.5GY5/1 極細粒砂含)
4. 10GY6/1 細粒砂

## SD18

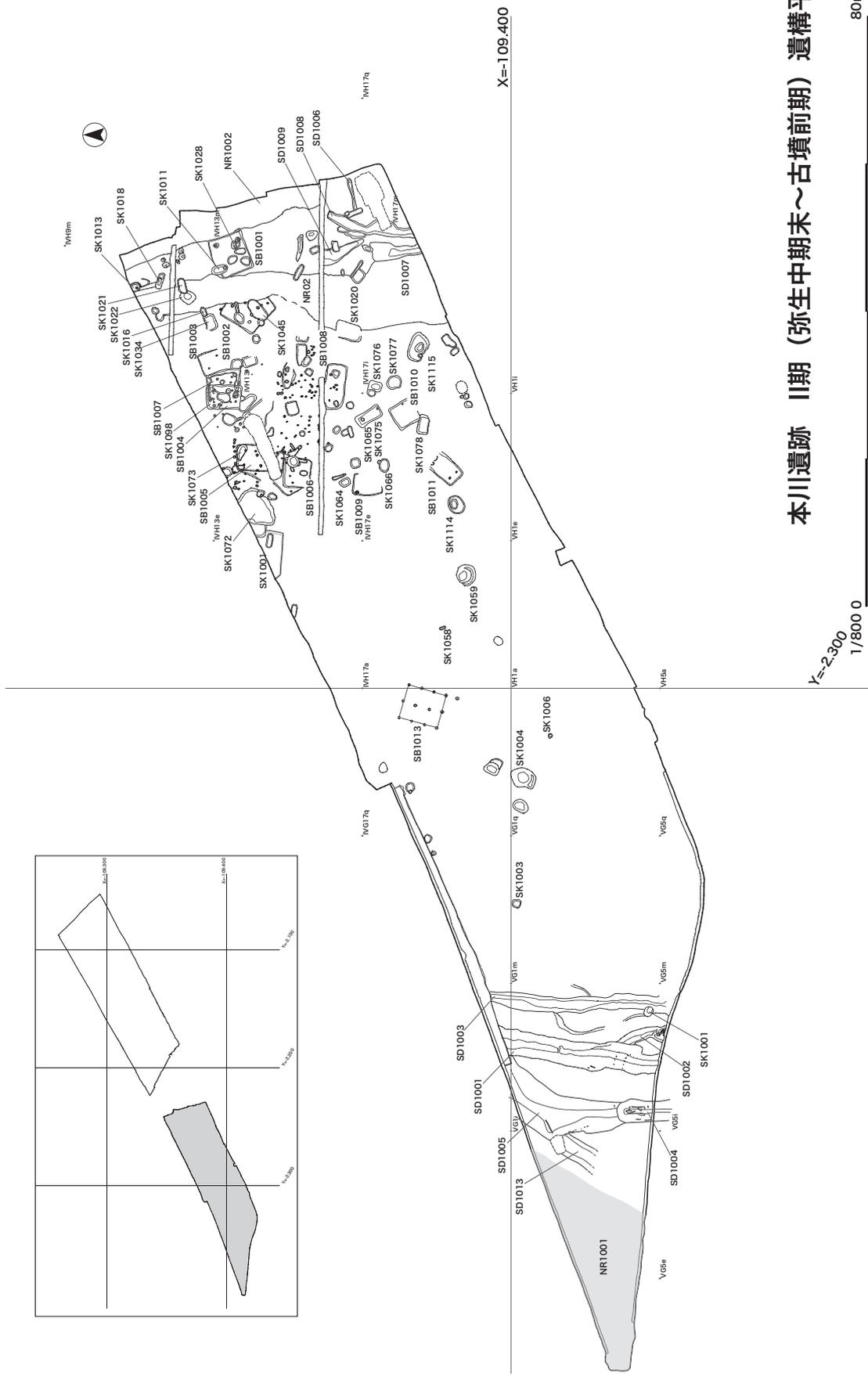


1. 2.5GY5/1 シルト
2. 10Y4/1 シルト
3. 5GY5/1 シルト
4. 5GY6/1 極細粒砂

1/50 0 4m



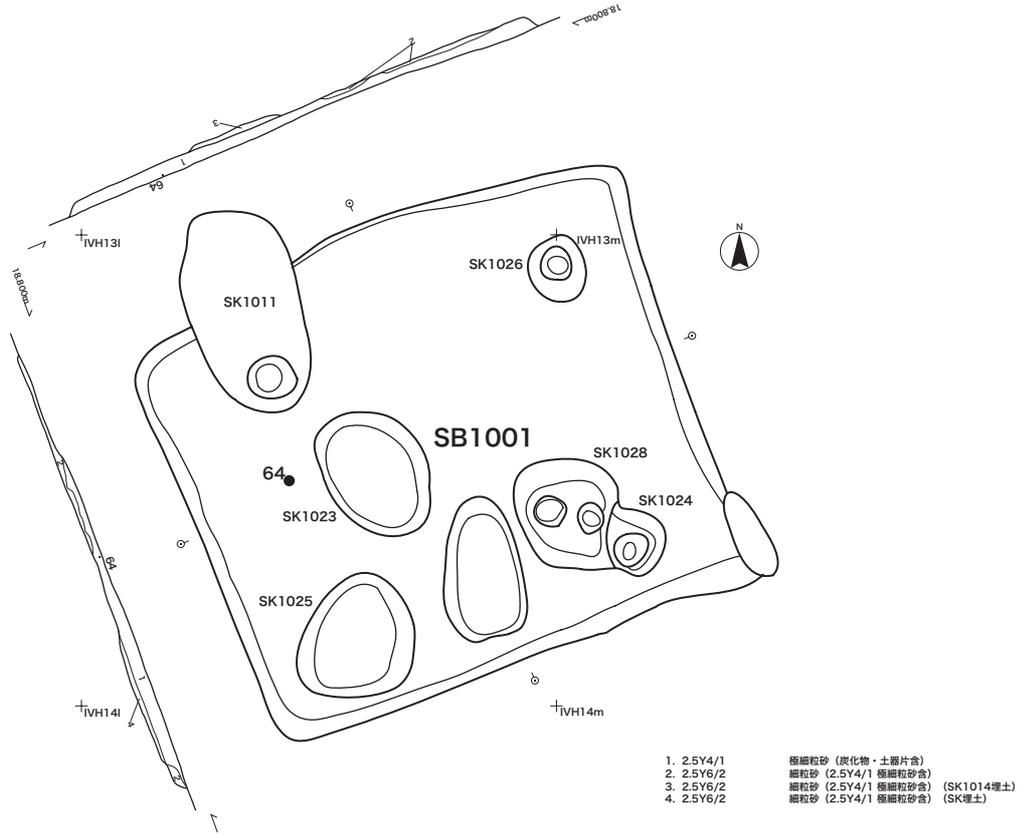
遺構図版 7 I 期遺構図 (2)



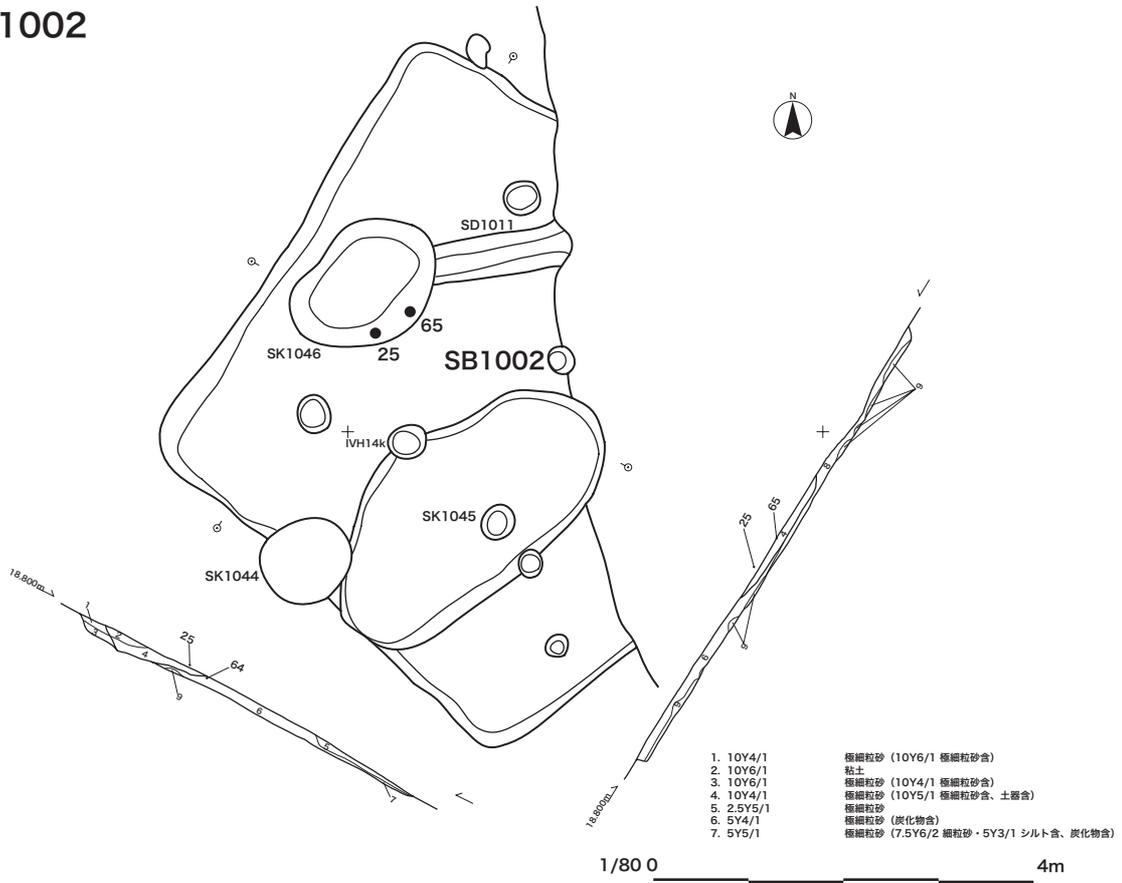
本川遺跡 II期 (弥生中期末~古墳前期) 遺構平面図

遺構図版 8 II期遺構全体図

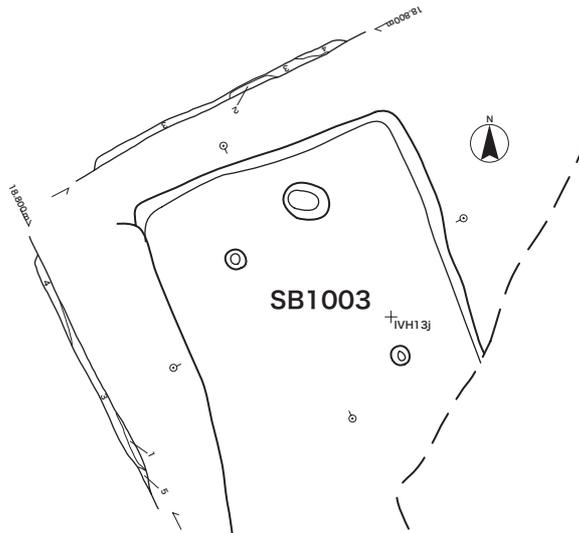
# SB1001



# SB1002

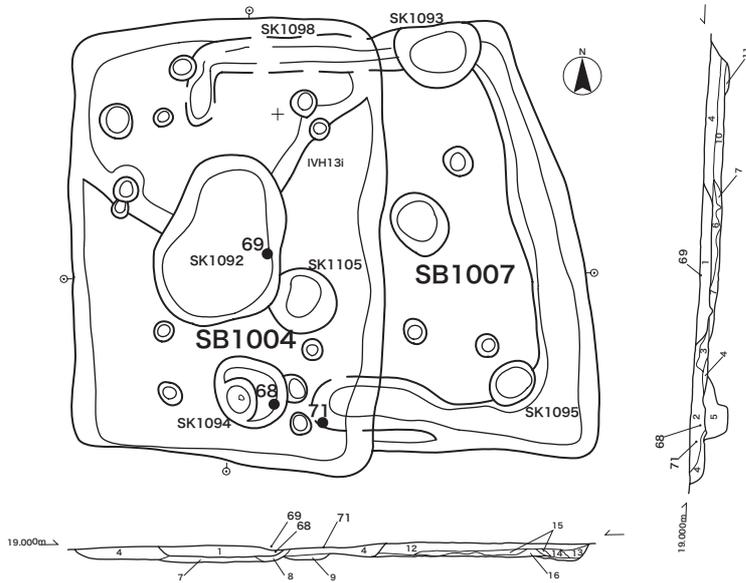


# SB1003



- |            |                   |
|------------|-------------------|
| 1. 2.5Y3/1 | シルト               |
| 2. 5Y5/2   | 細粒砂               |
| 3. 5Y4/1   | 極細粒砂 (5Y5/2 細粒砂含) |
| 4. 5Y5/2   | 細粒砂 (5Y4/1 極細粒砂含) |
| 5. 7.5Y6/1 | 細粒砂               |

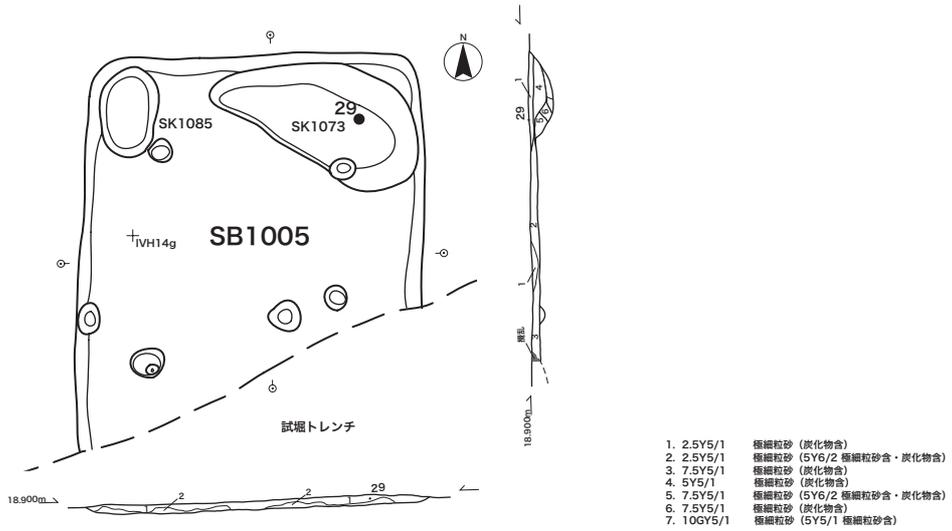
# SB1004・1007



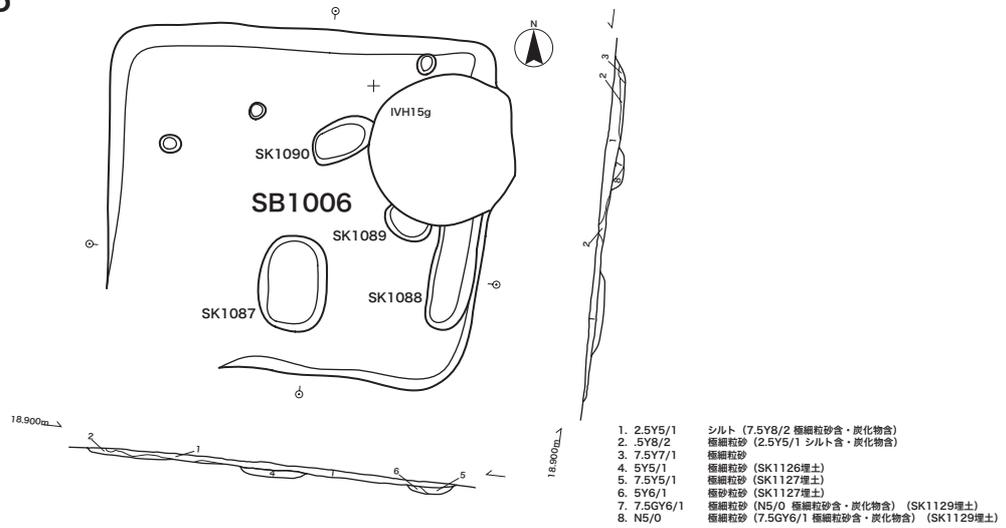
- |             |   |
|-------------|---|
| 1. 2.5Y4/1  | 極細粒砂 (炭化物・土器含) (SK1132埋土)               |
| 2. 2.5Y4/1  | 極細粒砂 (炭化物・土器含)                          |
| 3. 5Y5/1    | 極細粒砂 (5Y6/1 極細粒砂含、炭化物含)                 |
| 4. 2.5Y6/1  | 極細粒砂 (5Y6/2 極細粒砂含、炭化物含)                 |
| 5. 10Y6/1   | 極細粒砂 (7.5Y5/1 極細粒砂含、炭化物・土器含) (SK1134埋土) |
| 6. 2.5Y4/1  | 極細粒砂 (7.5Y6/1 細粒砂含、炭化物含) (SK1132埋土)     |
| 7. 7.5Y6/1  | 細粒砂 (SK1132埋土)                          |
| 8. 2.5Y4/1  | 極細粒砂 (10Y7/1 細粒砂含)                      |
| 9. 7.5Y6/1  | 極細粒砂 (10Y7/1 細粒砂含、炭化物含)                 |
| 10. 10Y6/1  | 細粒砂 (2.5Y6/1 極細粒砂含、炭化物含)                |
| 11. 10Y6/1  | 細粒砂                                     |
| 12. 10Y5/1  | 極細粒砂 (7.5Y6/2 細粒砂含)                     |
| 13. 5Y5/1   | 極細粒砂                                    |
| 14. 5Y4/1   | 極細粒砂                                    |
| 15. 7.5Y6/1 | 細粒砂 (5Y5/1 極細粒砂含)                       |
| 16. 7.5Y6/1 | 細粒砂                                     |

1/800  4m

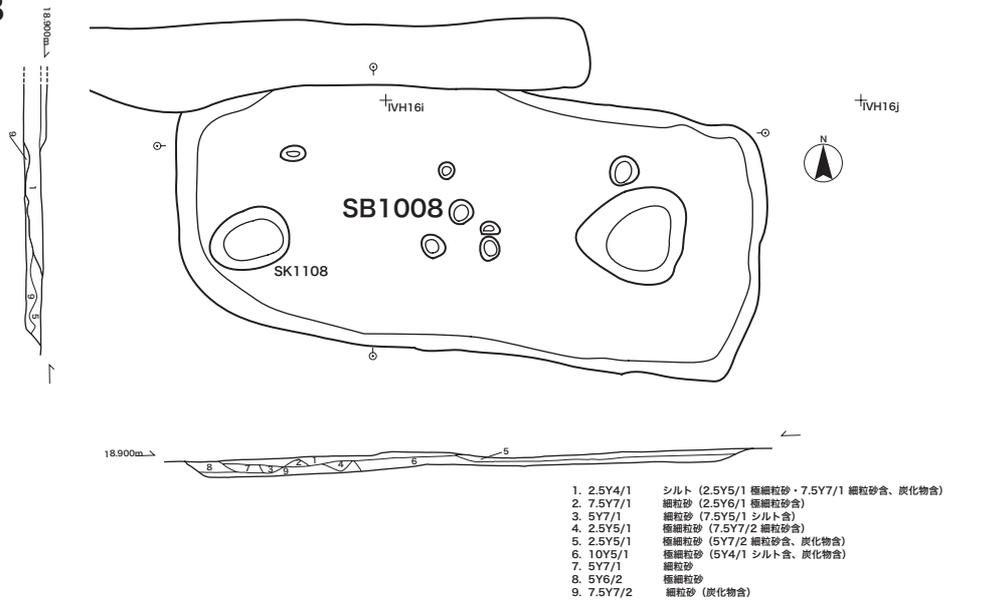
# SB1005



# SB1006

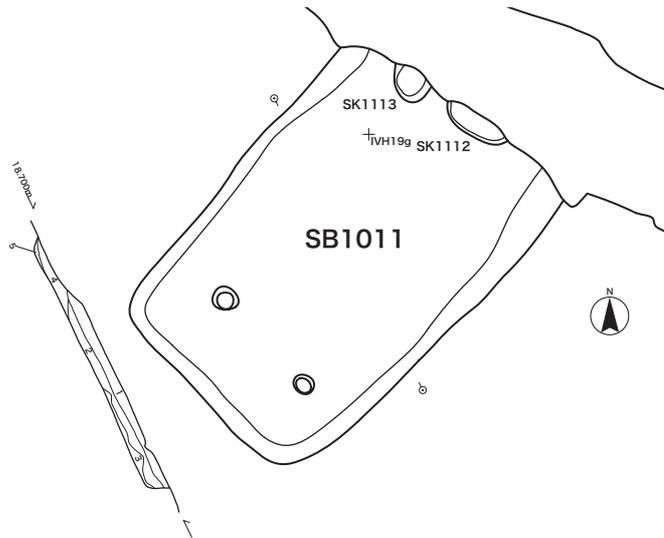


# SB1008



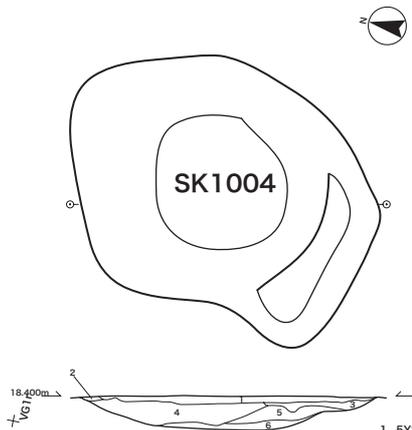
1/80 0 4m

# SB1011



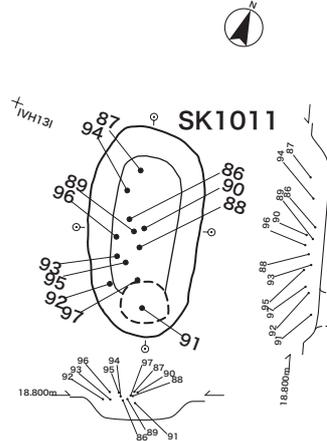
- 1. 2.5Y4/2 シルト
- 2. 2.5Y4/1 シルト (2.5Y5/1 極細粒砂含)
- 3. 2.5Y6/2 細粒砂 (2.5Y5/1 極細粒砂含)
- 4. 2.5Y6/2 細粒砂 (2.5Y5/1 極細粒砂含)
- 5. 2.5Y6/2 細粒砂

# SK1004



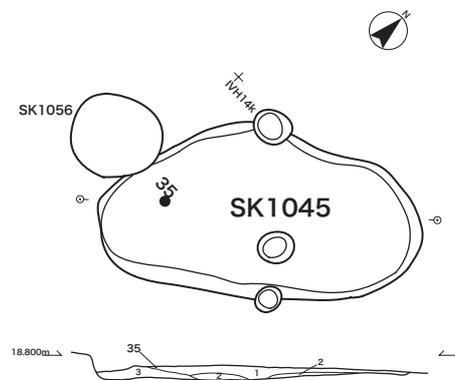
- 1. 5Y2/1 シルト
- 2. 2.5Y5/1 シルト
- 3. 2.5Y5/2 粘質シルト
- 4. 2.5Y5/1 粘質シルト
- 5. 5Y5/1 粘質シルト
- 6. 5GY6/1 シルト

# SK1011



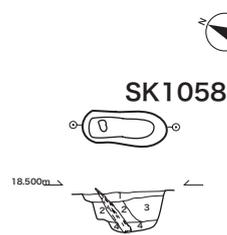
- シルト
- シルト
- 粘質シルト
- 粘質シルト
- 粘質シルト
- シルト

# SK1045



- 1. 5Y5/1 極細粒砂 (5Y6/2 細粒砂含、土層含)
- 2. 5Y6/2 細粒砂 (5Y5/1 極細粒砂含)
- 3. 10Y5/1 細粒砂

# SK1058

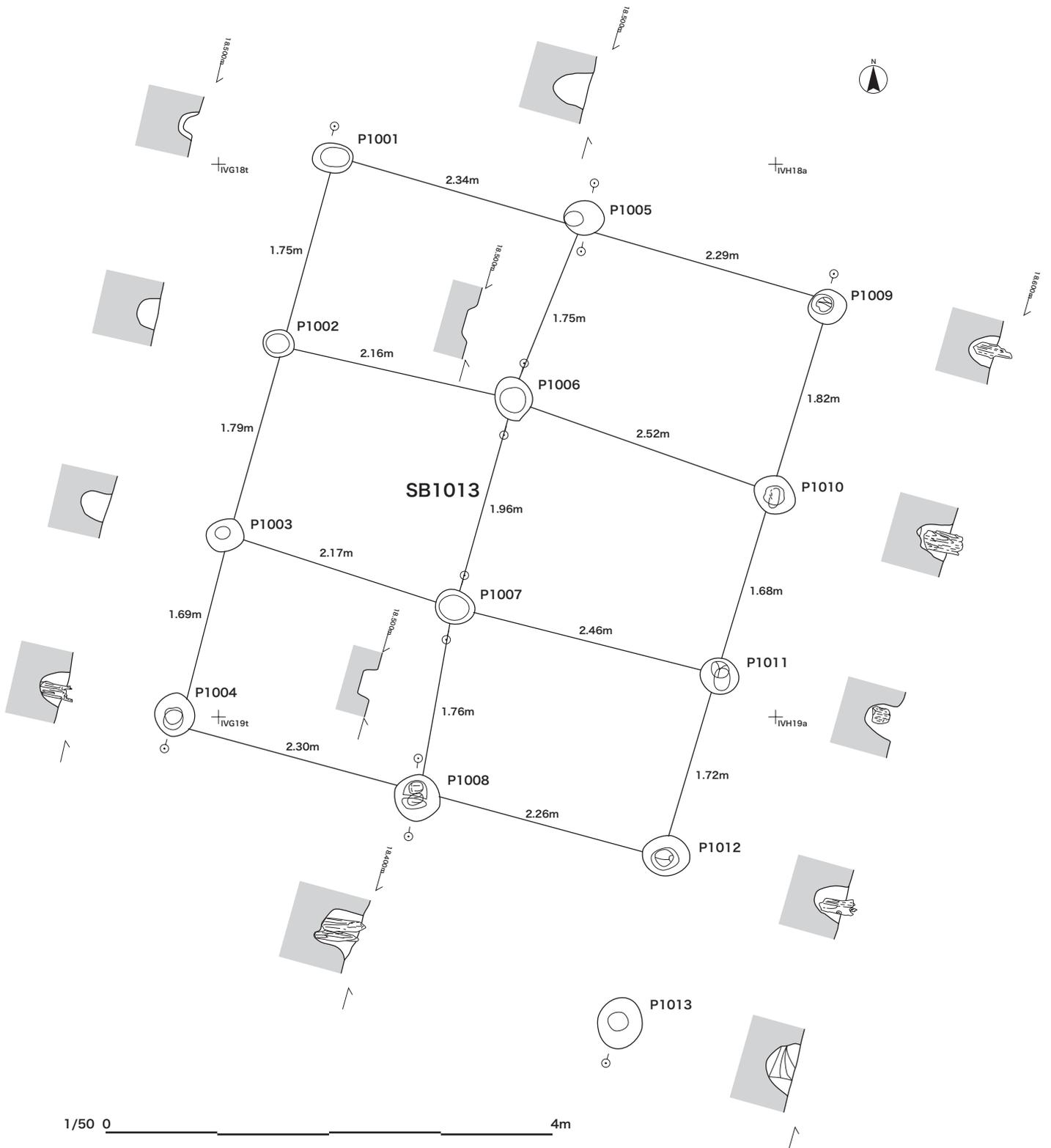


- 1. 10GY5/1 粘質シルト (シルトブロック含)
- 2. 10GY4/1 砂質シルト (シルトブロック多量に含)
- 3. N2/0 粘質シルト (シルトブロック含)
- 4. 10GY6/1 細粒砂 (粘土ブロック含)

1/80 0

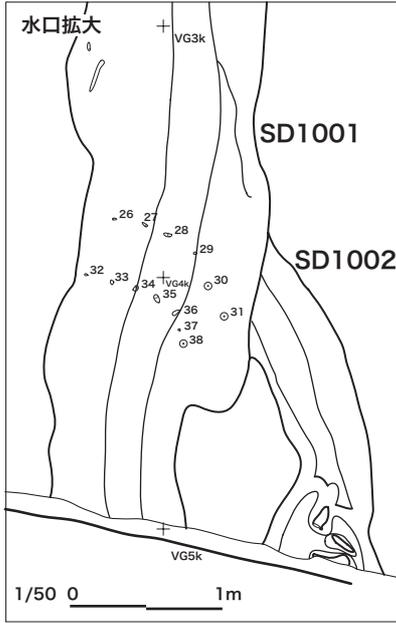
4m

# SB1013

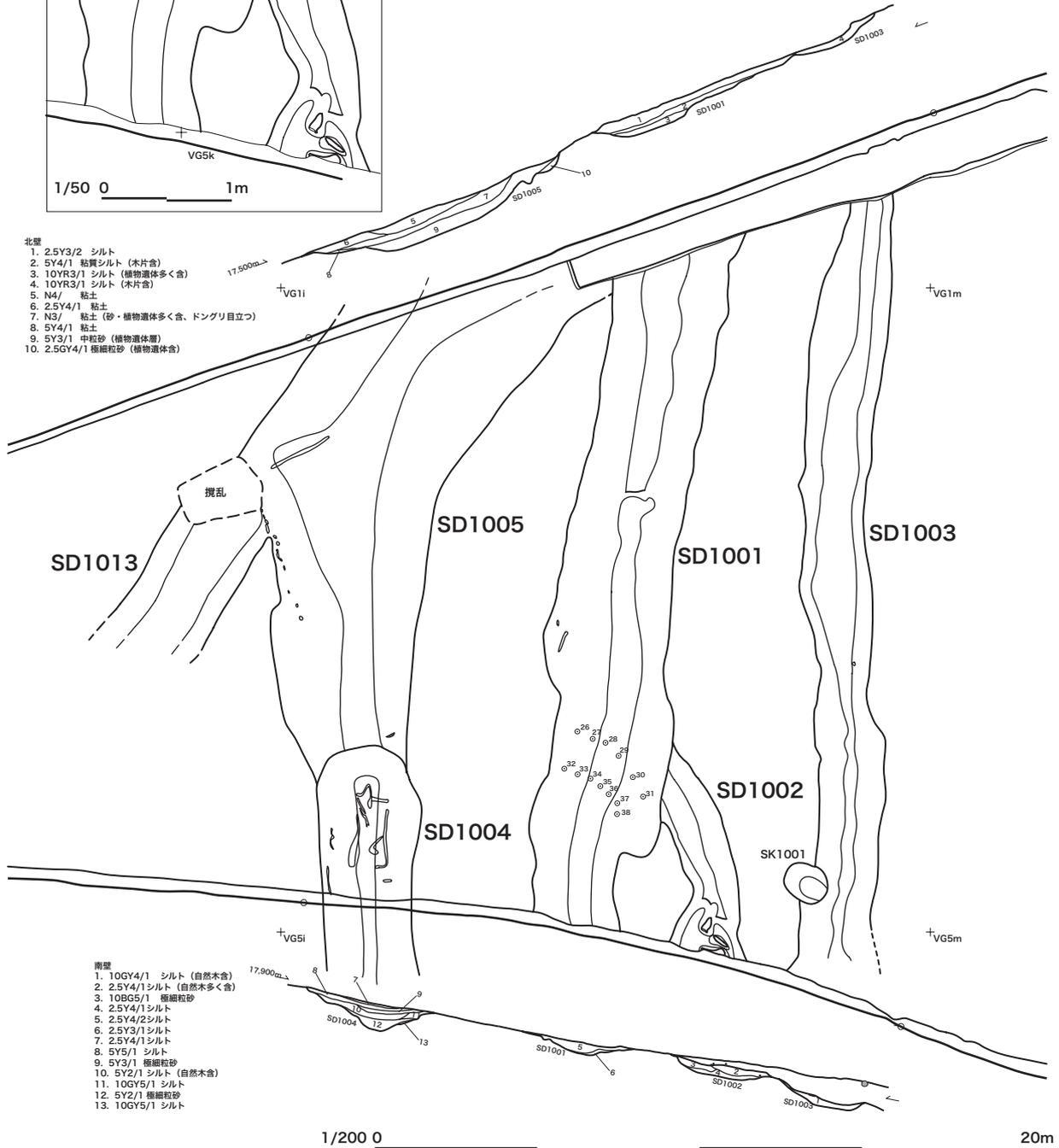


遺構図版 13 II 期遺構図 (5)

# SD群



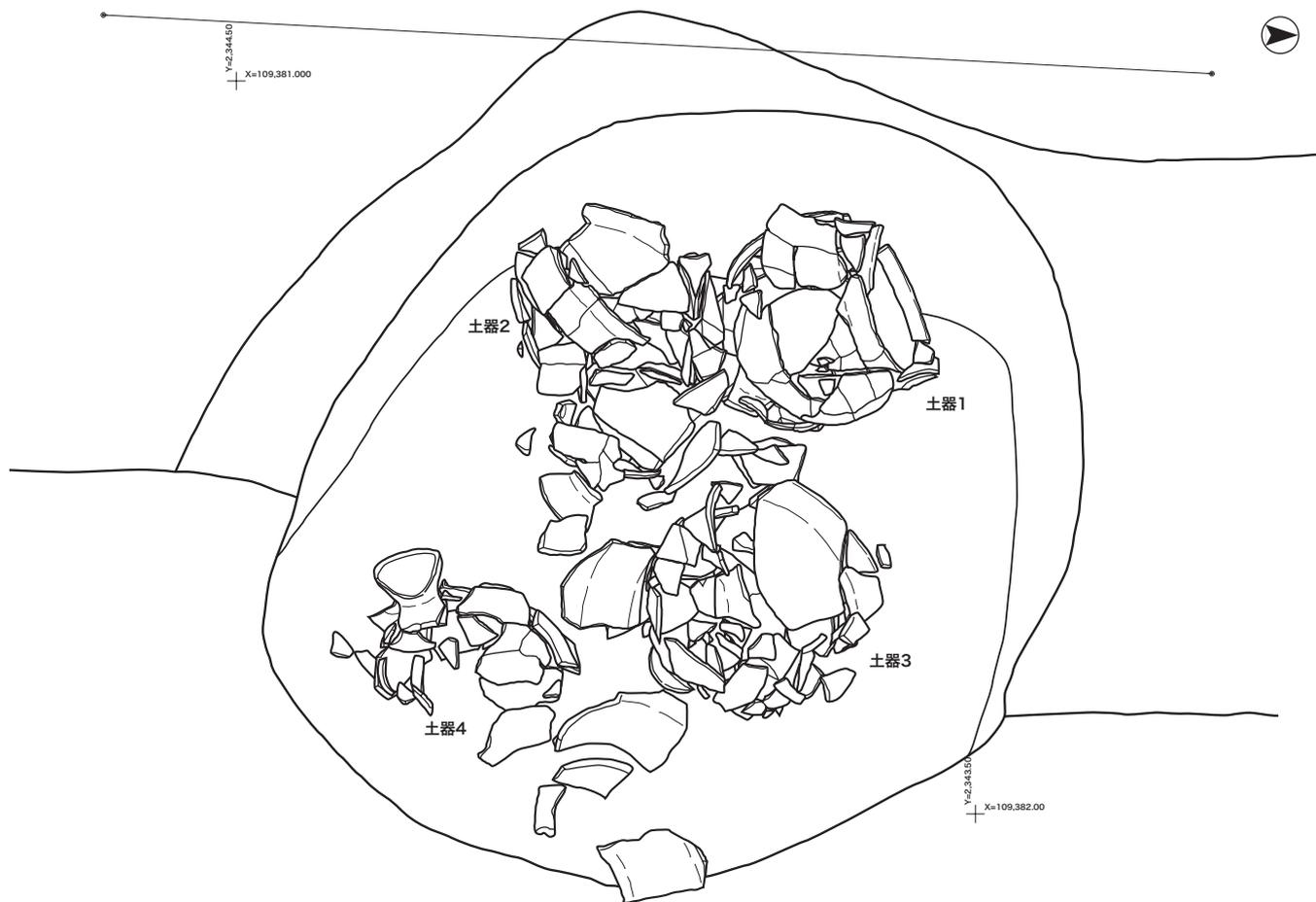
- 北壁
1. 2.5Y3/2 シルト
  2. 5Y4/1 粘質シルト (木片含)
  3. 10YR3/1 シルト (植物遺体多く含)
  4. 10YR3/1 シルト (木片含)
  5. N4/ 粘土
  6. 2.5Y4/1 粘土
  7. N3/ 粘土 (砂・植物遺体多く含、ドンダリ目立つ)
  8. 5Y4/1 粘土
  9. 5Y3/1 中粒砂 (植物遺体層)
  10. 2.5GY4/1 極細粒砂 (植物遺体含)



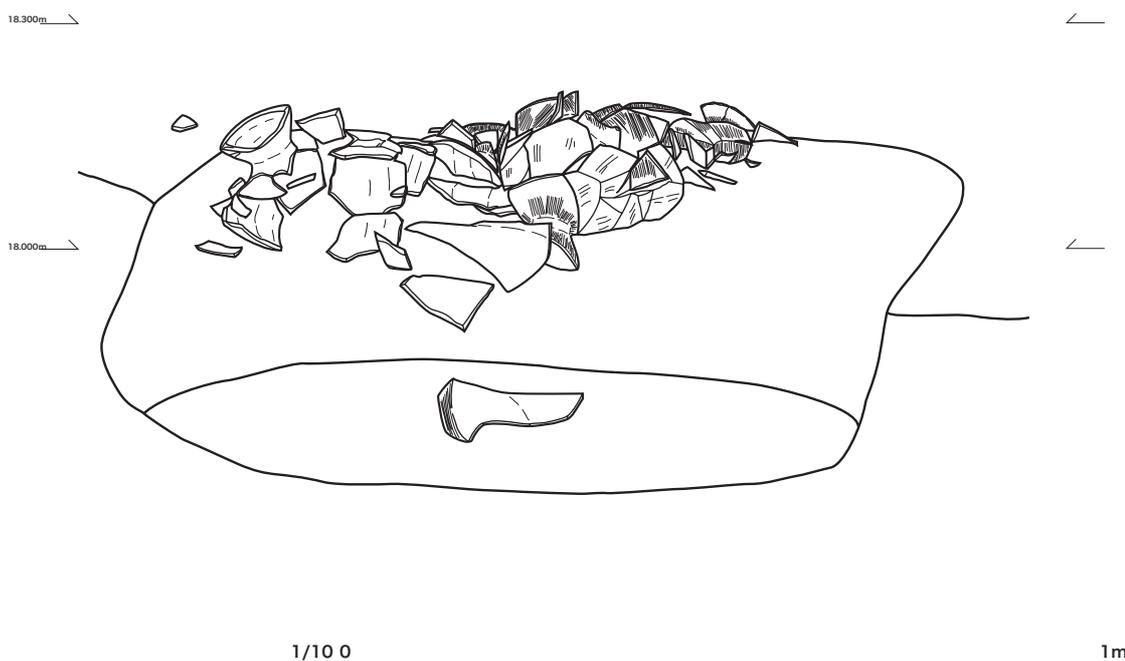
- 南壁
1. 10GY4/1 シルト (自然木含)
  2. 2.5Y4/1シルト (自然木多く含)
  3. 10BG5/1 極細粒砂
  4. 2.5Y4/1シルト
  5. 2.5Y4/2シルト
  6. 2.5Y3/1シルト
  7. 2.5Y4/1シルト
  8. 5Y5/1 シルト
  9. 5Y3/1 極細粒砂
  10. 5Y2/1シルト (自然木含)
  11. 10GY5/1 シルト
  12. 5Y2/1 極細粒砂
  13. 10GY5/1 シルト

遺構図版 14 II期遺構図(6)

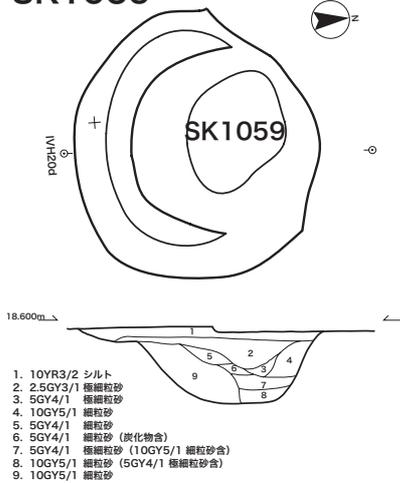
# SK1001平面図



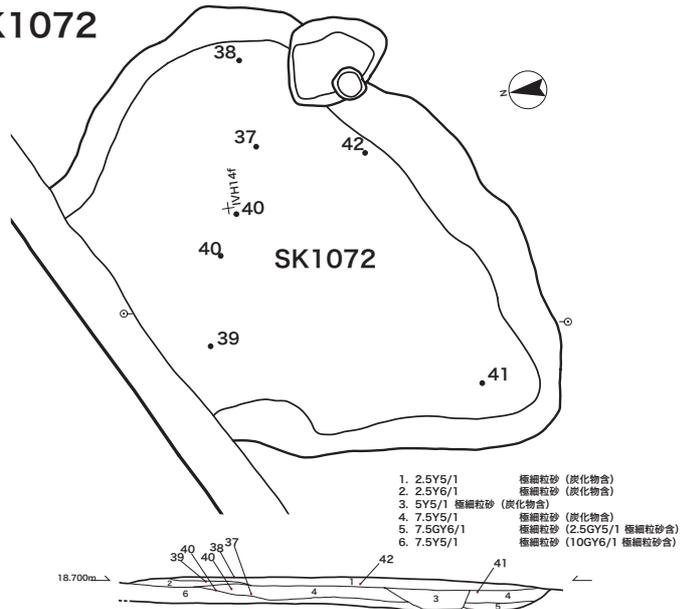
# SK1001見通し図



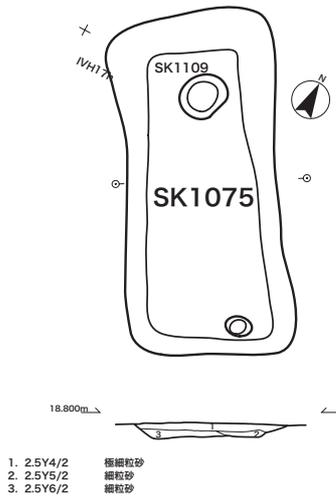
### SK1059



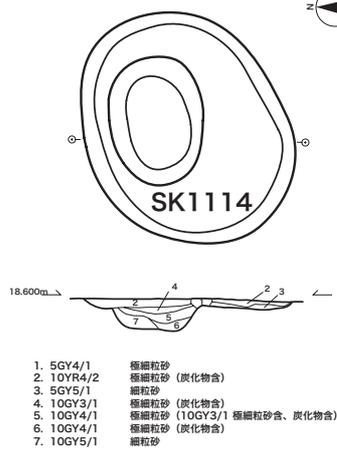
### SK1072



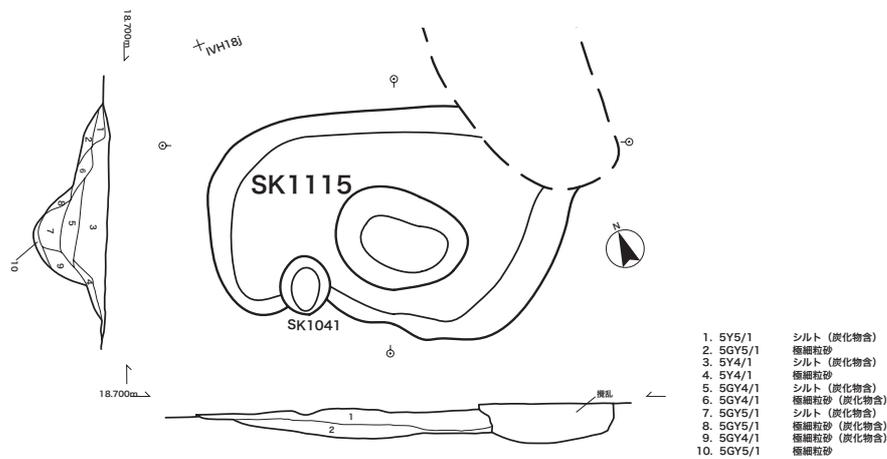
### SK1075



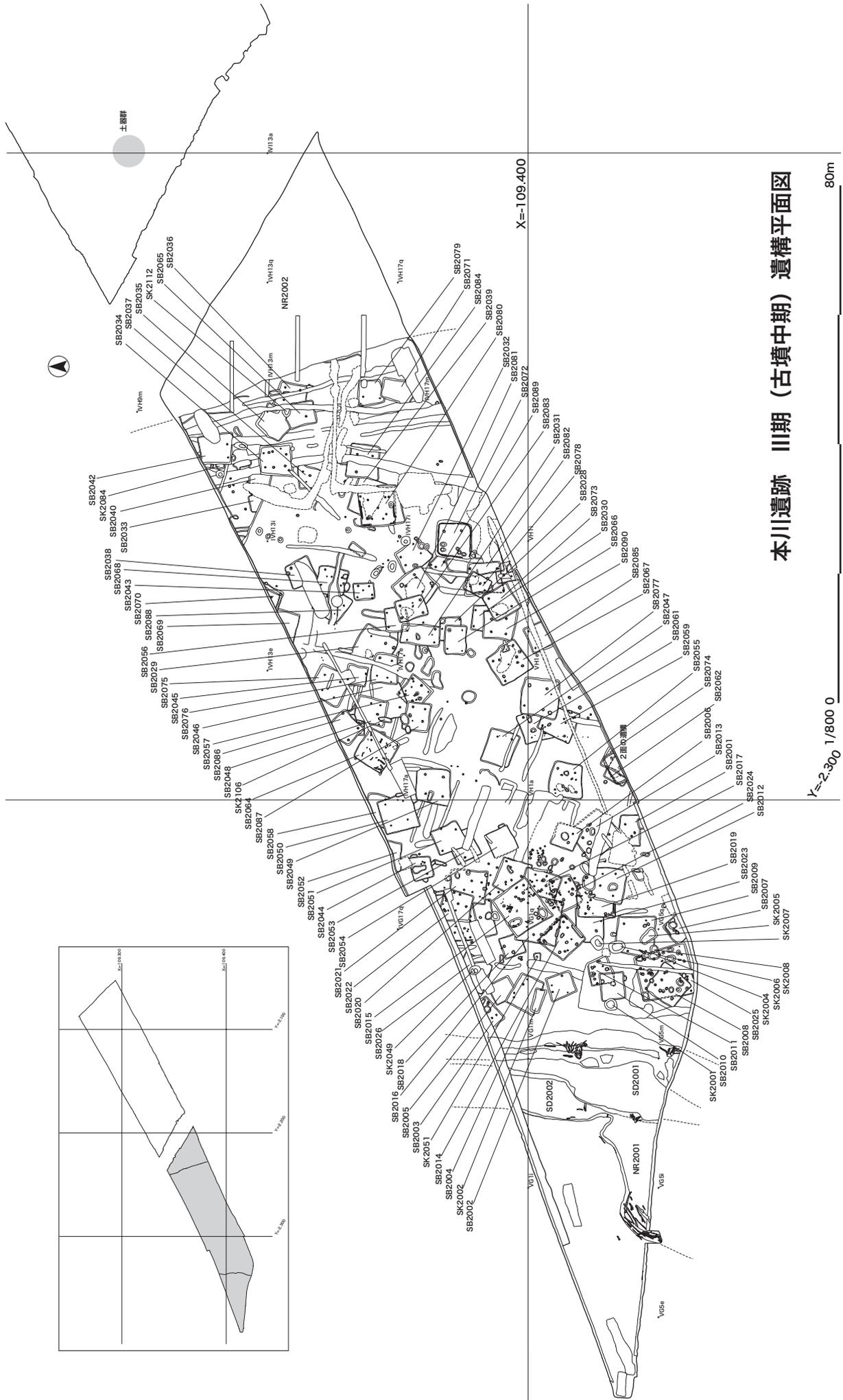
### SK1114



### SK1115

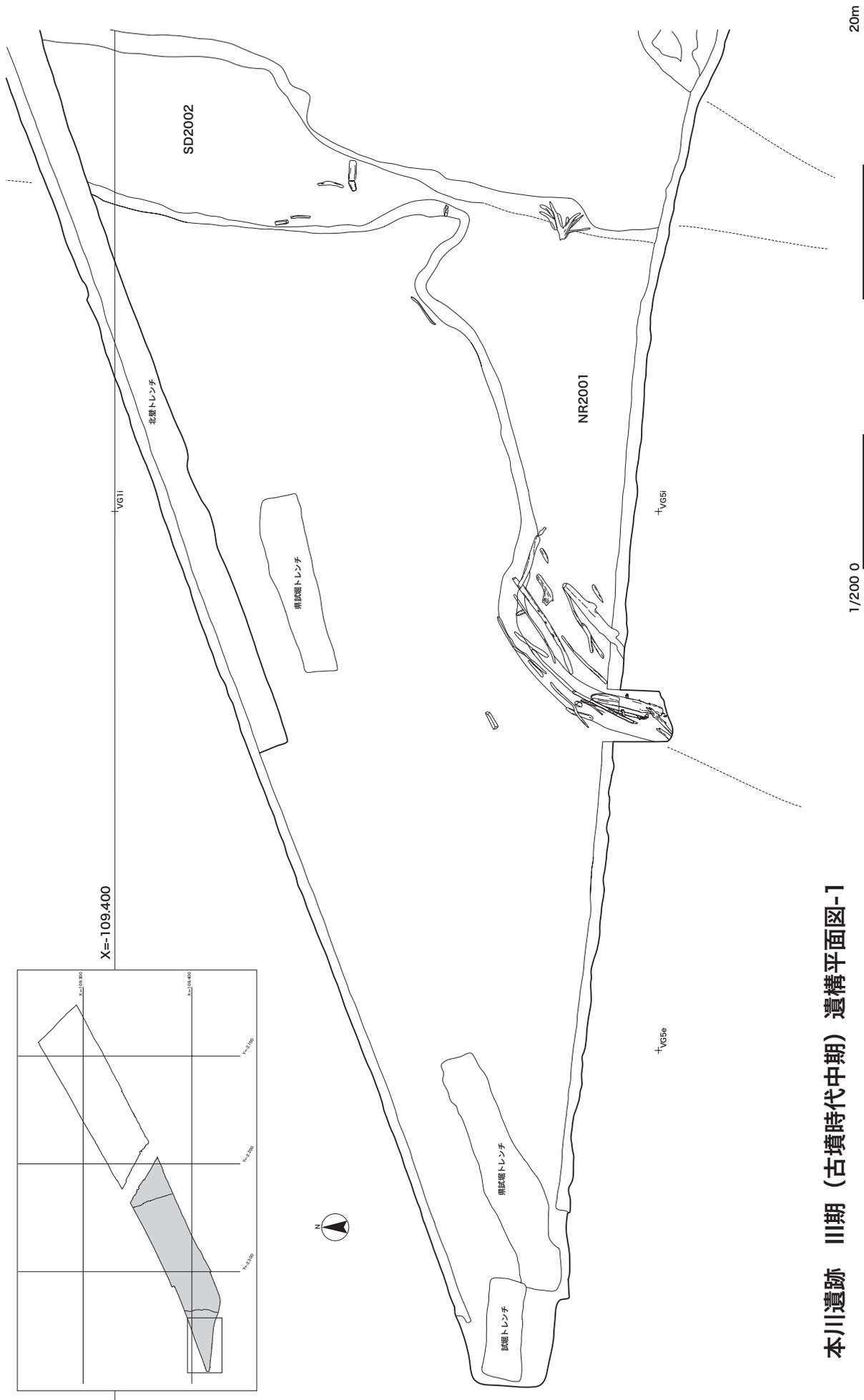


1/800 4m



本川遺跡 Ⅲ期 (古墳中期) 遺構平面図

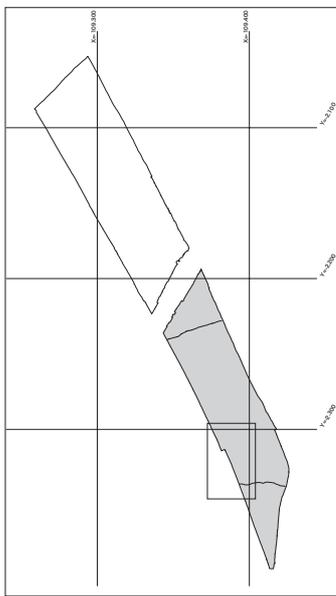
遺構図版 17 Ⅲ期遺構全体図



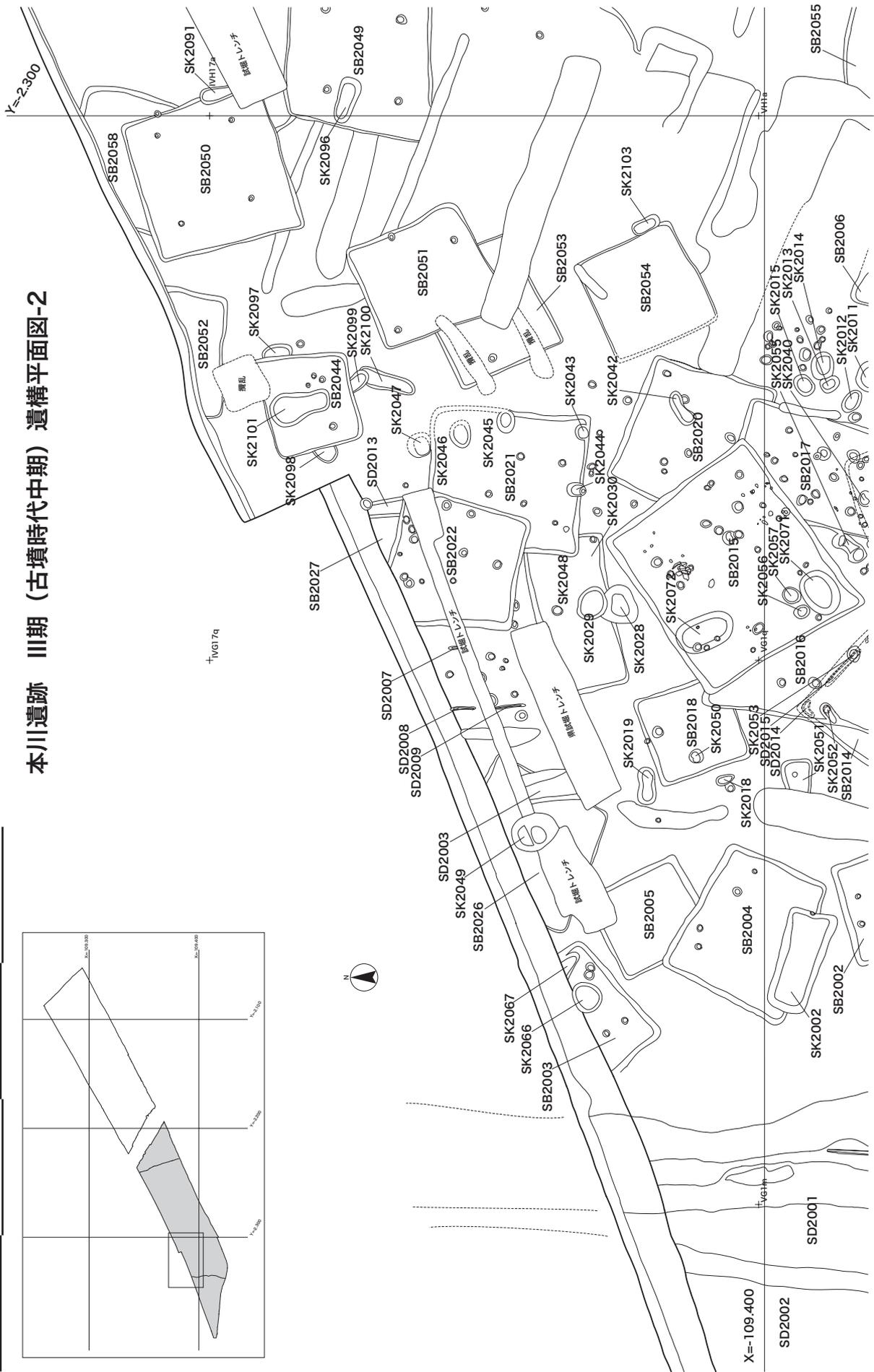
本川遺跡 Ⅲ期 (古墳時代中期) 遺構平面図-1

1/200 0

20m



# 本川遺跡 Ⅲ期 (古墳時代中期) 遺構平面図-2



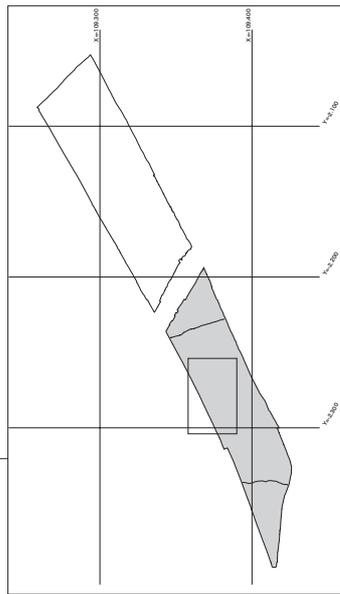


遺構図版 20 III期遺構分劃図 (3)

本川遺跡 III期 (古墳時代中期) 遺構平面図-3

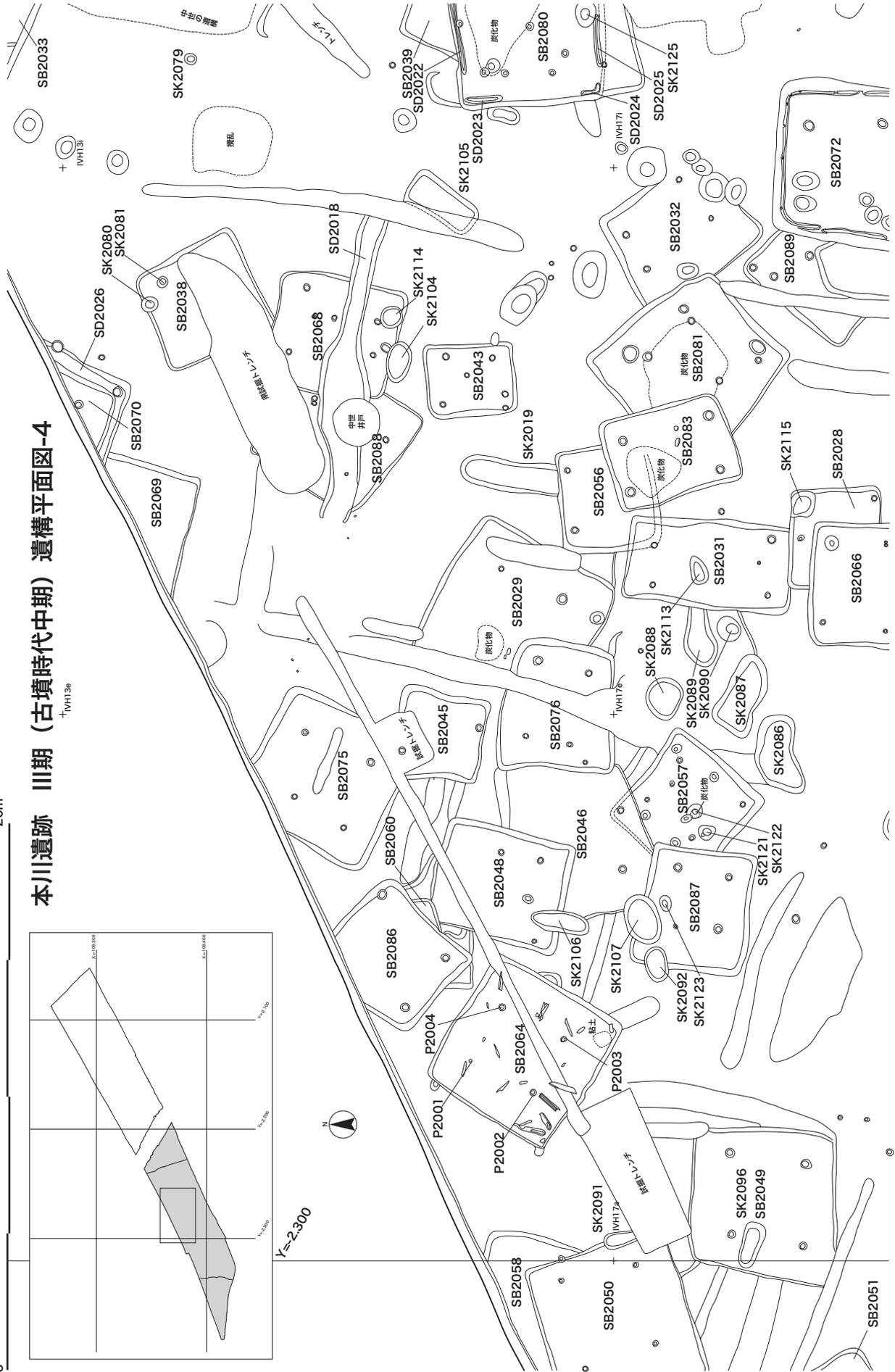
1/200 0

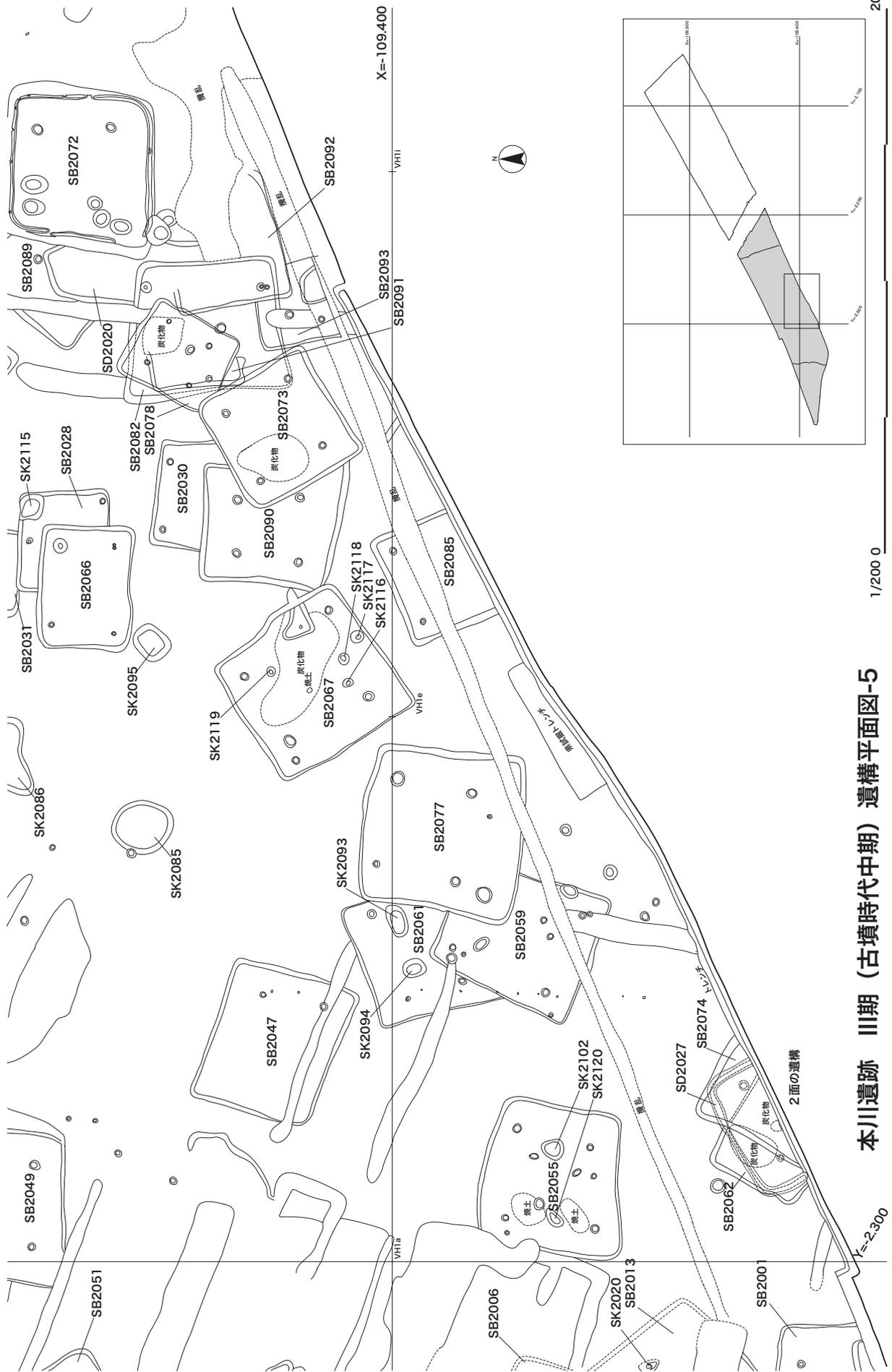
20m



本川遺跡 Ⅲ期 (古墳時代中期) 遺構平面図-4

↑IVH136



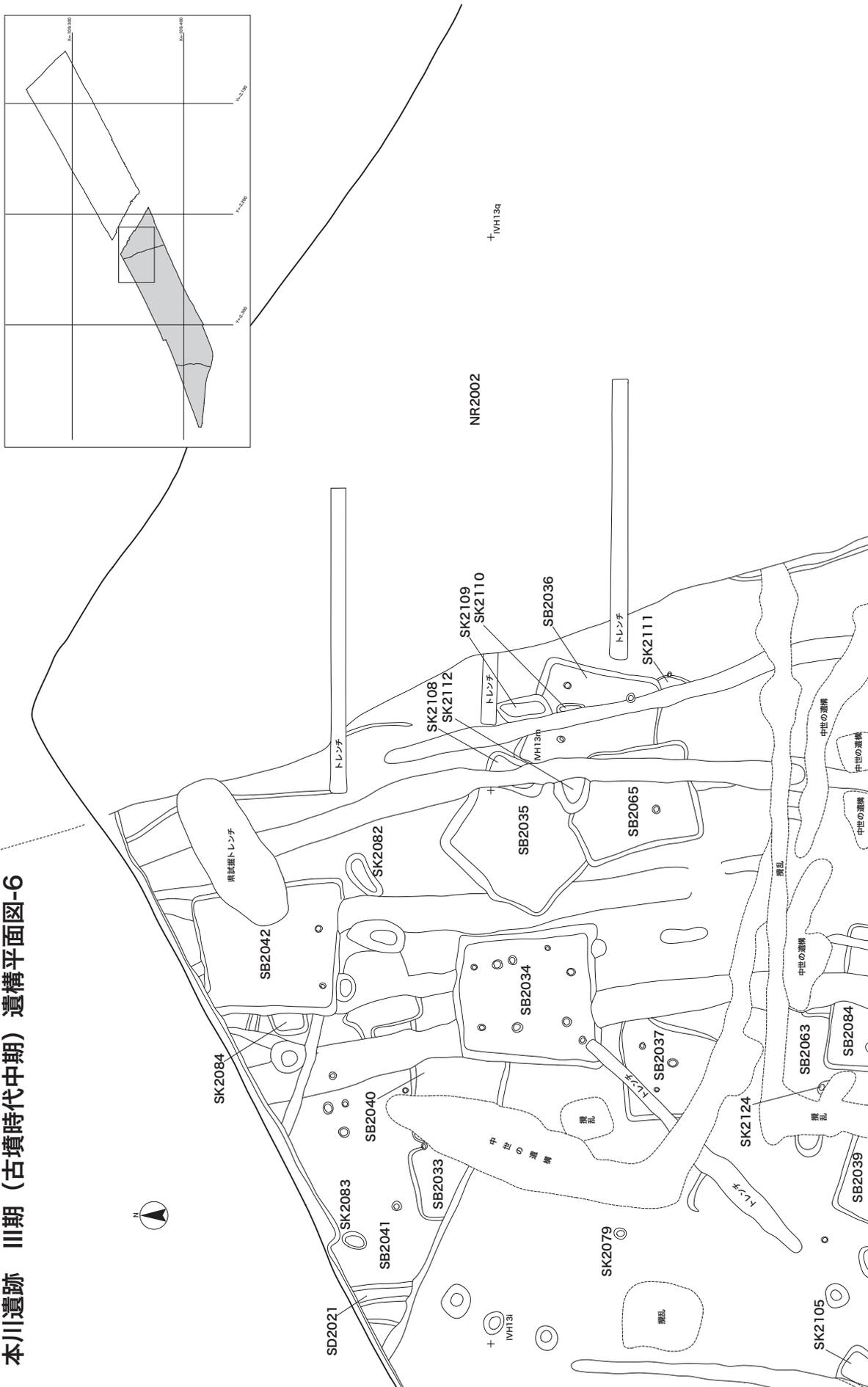


本川遺跡 Ⅲ期 (古墳時代中期) 遺構平面図-5

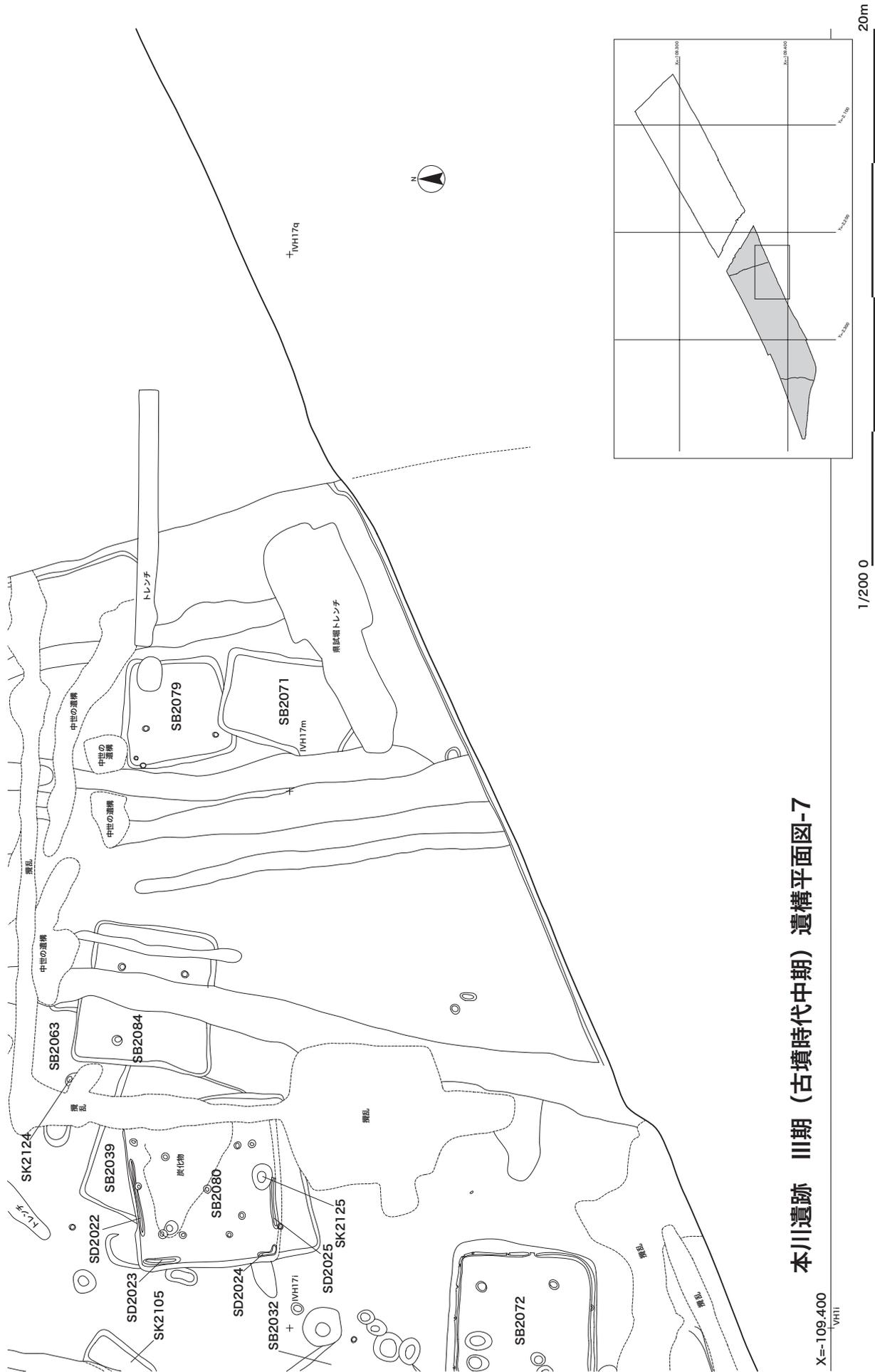
遺構図版 22 Ⅲ期遺構分割図 (5)

# 本川遺跡 III期 (古墳時代中期) 遺構平面図-6

1/200 0 20m



遺構図版 23 III期遺構分割図 (6)



遺構図版 24 Ⅲ期遺構分割図 (7)

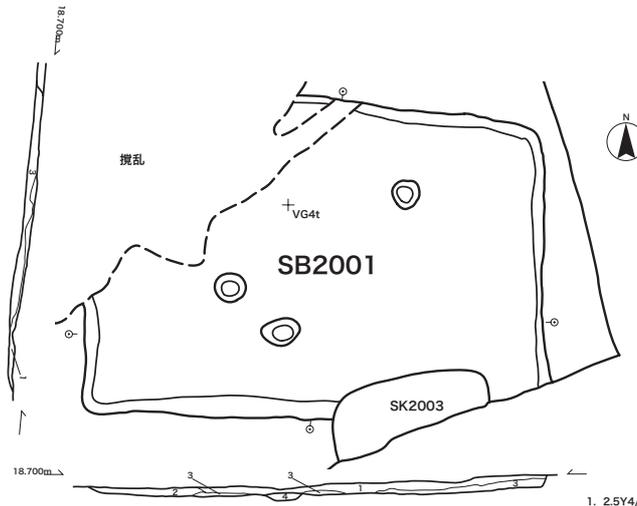
本川遺跡 Ⅲ期 (古墳時代中期) 遺構平面図-7

X=109.400  
VH1

1/200 0

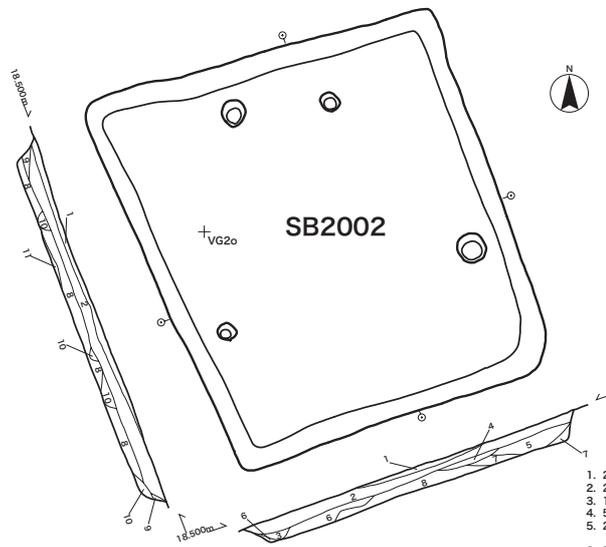
20m

# SB2001



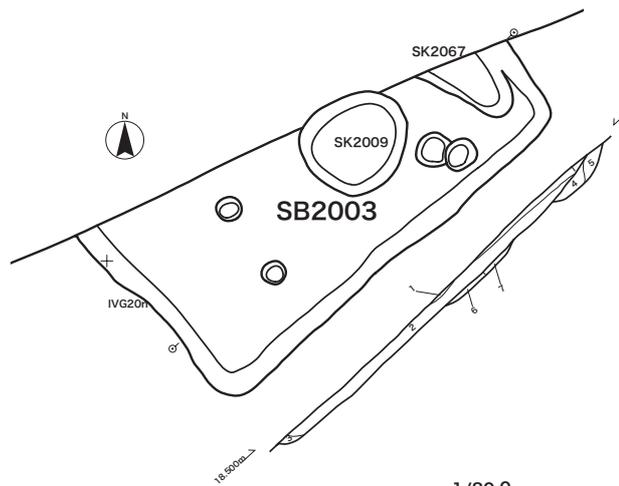
- 1. 2.5Y4/1 シルト (2.5Y4/2 シルト含)
- 2. 2.5Y4/2 シルト (2.5Y4/1 シルトブロック状に含)
- 3. 2.5Y5/2 シルト (2.5Y5/1 シルト含)
- 4. 2.5Y4/2 シルト (2.5Y4/1 シルト含)

# SB2002



- 1. 2.5Y4/1 シルト (炭化物含)
- 2. 2.5Y4/1 シルト (多量の炭化物含)
- 3. 10Y3/1 粘質シルト
- 4. 5Y4/1 粘質シルト (炭化物含)
- 5. 2.5Y5/1 粘質シルト (5Y6/2 極細粒砂ブロック状に含、炭化物含)
- 6. 5GY4/1 粘質シルト (2.5Y4/1 シルト含、炭化物含)
- 7. 5Y4/2 粘質シルト
- 8. 5GY4/1 粘質シルト
- 9. 2.5Y4/1 粘質シルト (炭化物含)
- 10. 2.5GY4/1 粘質シルト (炭化物含)
- 11. 5GY4/1 極細粒砂

# SB2003

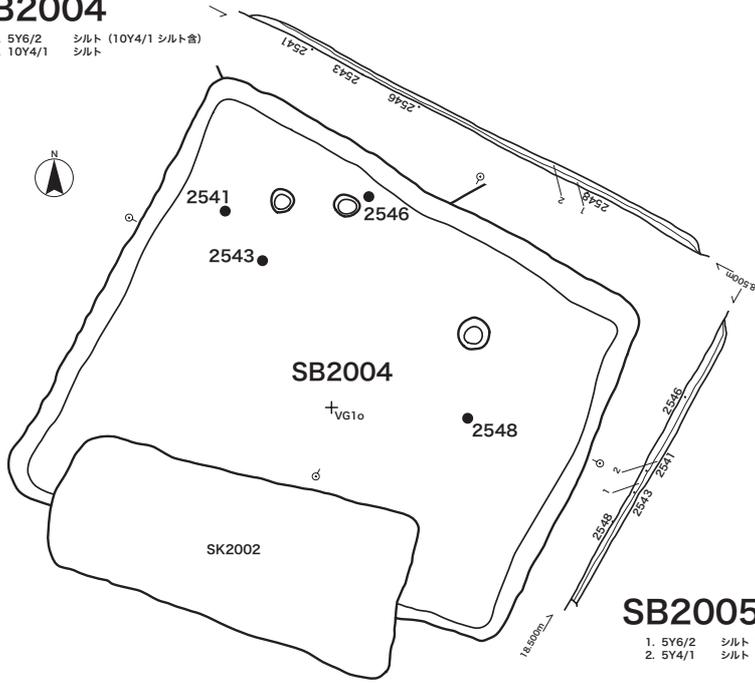


- 1. 7.5Y5/1 シルト
- 2. 7.5Y4/1 シルト
- 3. 7.5Y5/1 シルト
- 4. 7.5Y3/1 シルト
- 5. 7.5Y3/2 シルト
- 6. 7.5Y3/1 粘質シルト
- 7. 7.5Y3/2 粘質シルト

1/80 0 4m

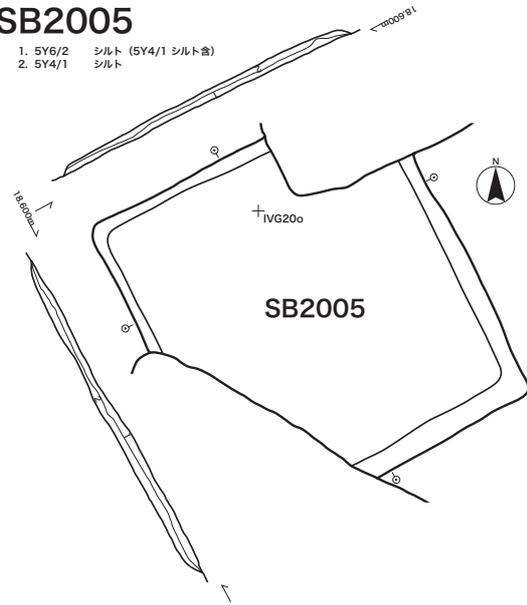
### SB2004

1. 5Y6/2 シルト (10Y4/1 シルト含)
2. 10Y4/1 シルト



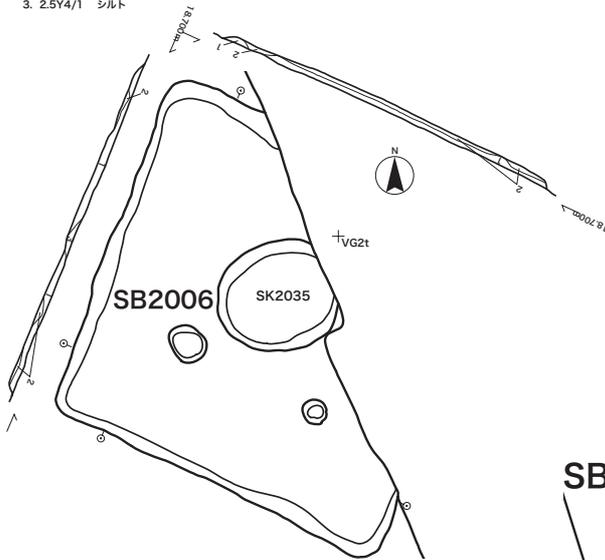
### SB2005

1. 5Y6/2 シルト (5Y4/1 シルト含)
2. 5Y4/1 シルト

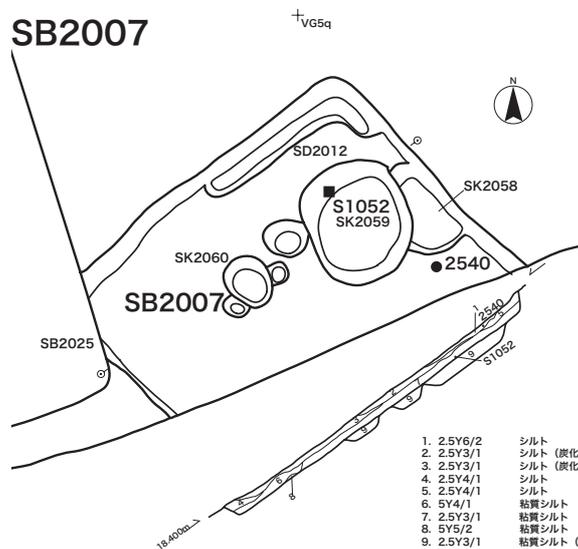


### SB2006

1. 5Y4/1 シルト (わずかに炭化物含)
2. 5Y5/2 シルト
3. 2.5Y4/1 シルト



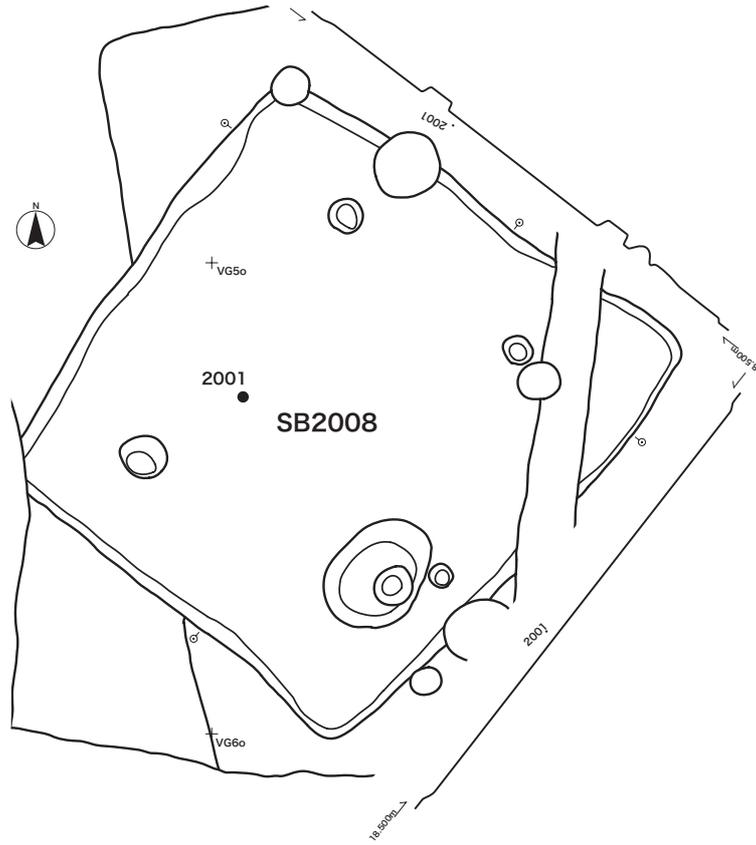
### SB2007



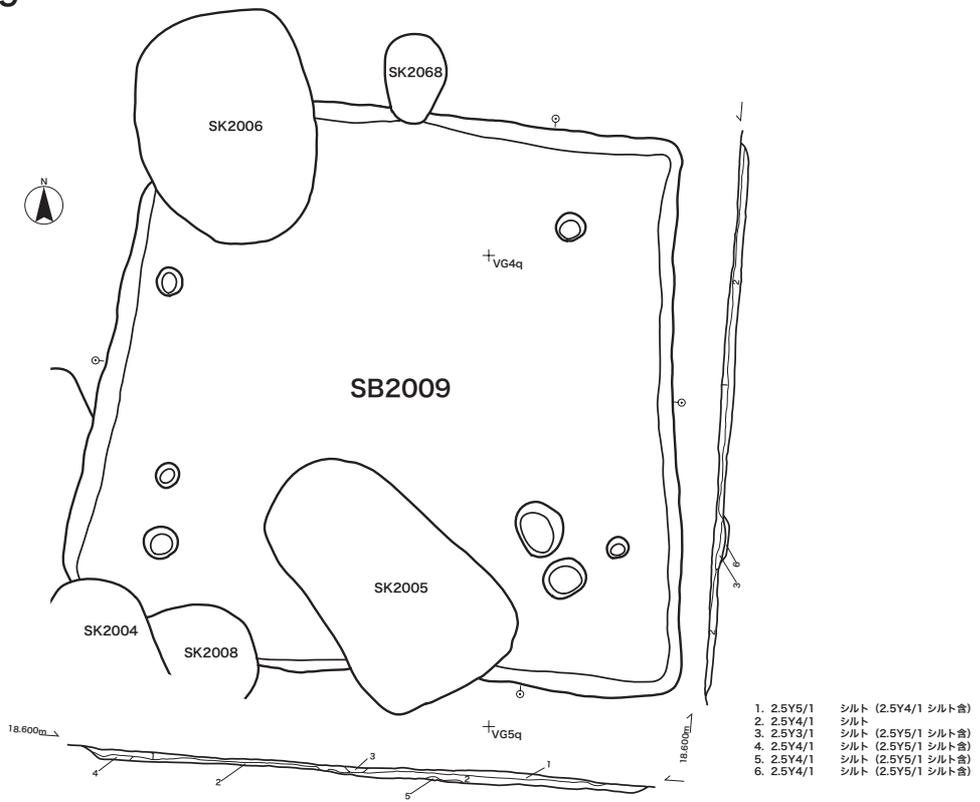
1. 2.5Y6/2 シルト
2. 2.5Y3/1 シルト (炭化物多く含)
3. 2.5Y3/1 シルト (炭化物含)
4. 2.5Y4/1 シルト
5. 2.5Y4/1 シルト
6. 5Y4/1 粘質シルト
7. 2.5Y3/1 粘質シルト
8. 5Y5/2 粘質シルト
9. 2.5Y3/1 粘質シルト (5GY4/1 粘質シルト含)

1/80 0 4m

# SB2008



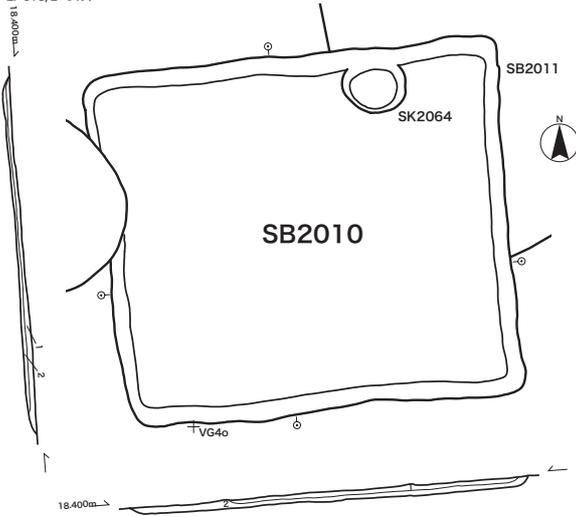
# SB2009



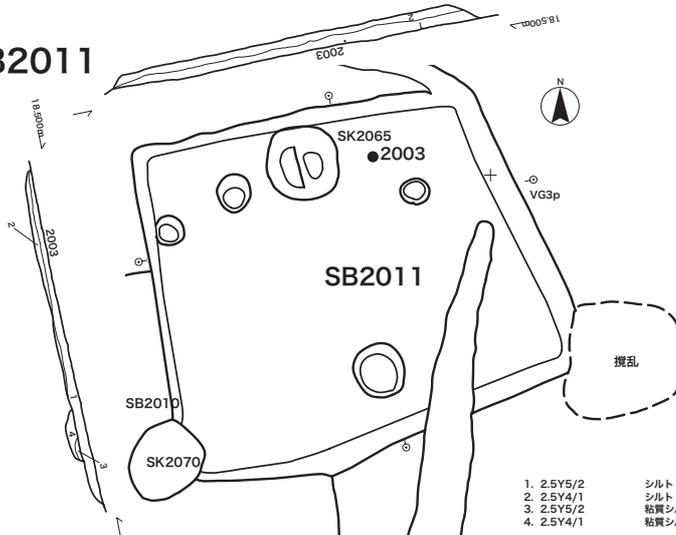
1/80 0 4m

# SB2010

1. 5Y3/1 シルト
2. 5Y3/2 シルト

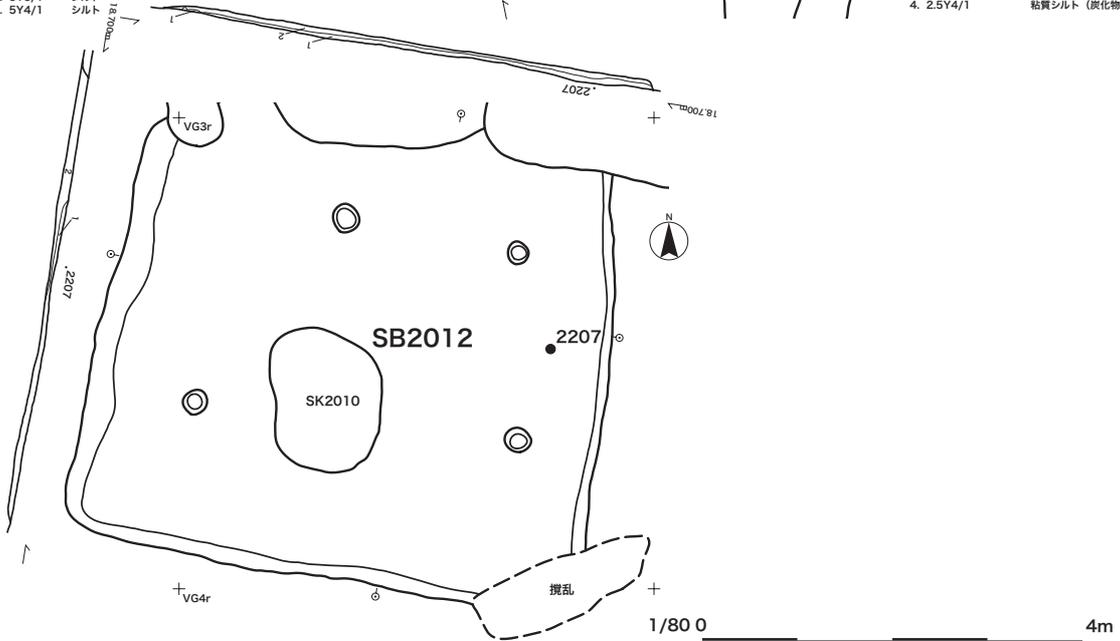


# SB2011



# SB2012

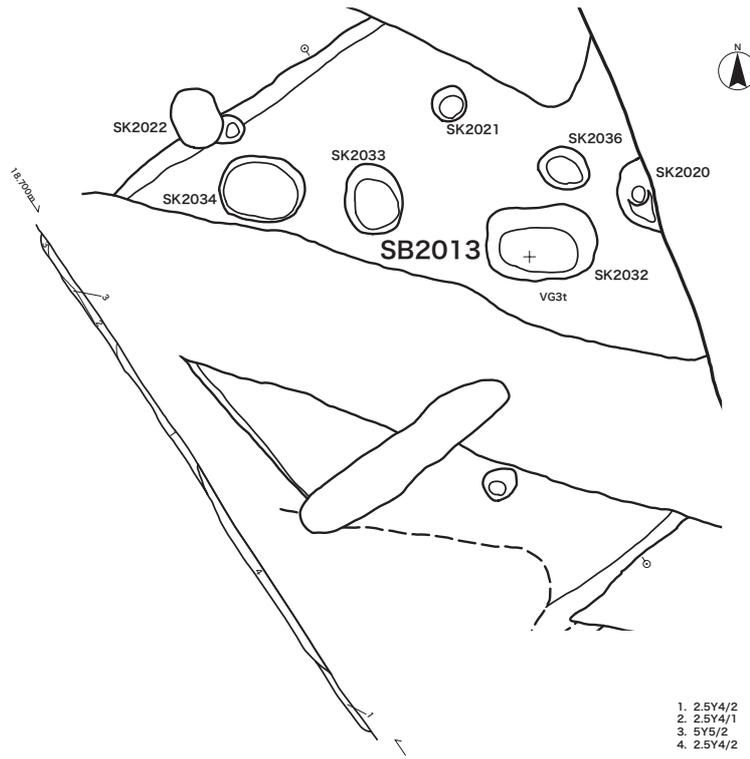
1. 5Y5/1 シルト
2. 5Y4/1 シルト



1. 2.5Y5/2 シルト (炭化物含)
2. 2.5Y4/1 シルト
3. 2.5Y5/2 粘質シルト (炭化物含)
4. 2.5Y4/1 粘質シルト (炭化物含)

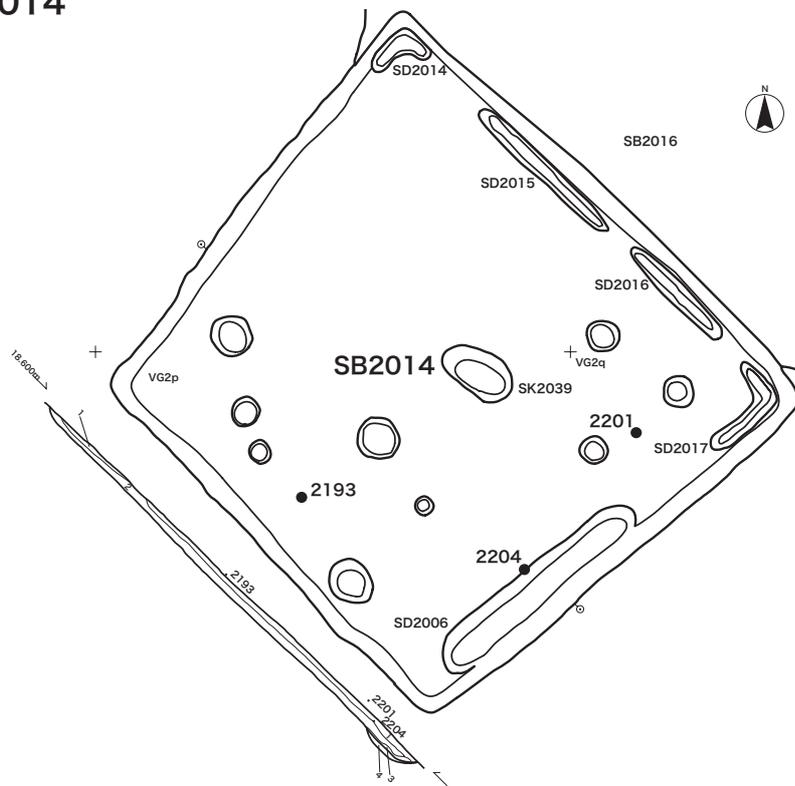
1/800 4m

# SB2013



1. 2.5Y4/2 シルト
2. 2.5Y4/1 シルト
3. 5Y5/2 シルト
4. 2.5Y4/2 シルト (2.5Y5/2 シルトブロック状に含)

# SB2014

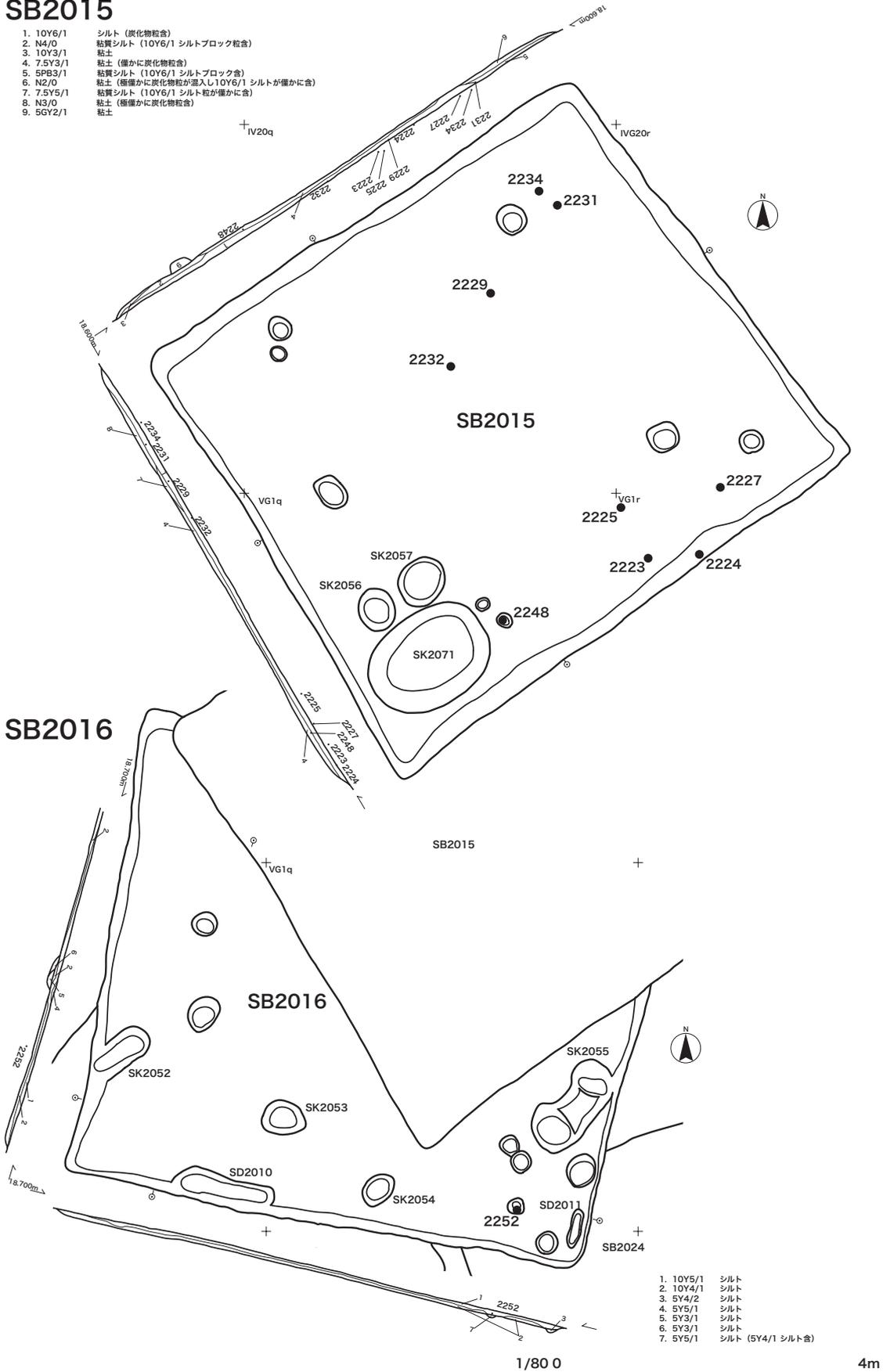


1. 10Y6/1 シルト (炭化物含)
2. 5Y4/1 シルト
3. N4/0 粘質シルト
4. 7.5GY4/1 粘質シルト

1/80 0 4m

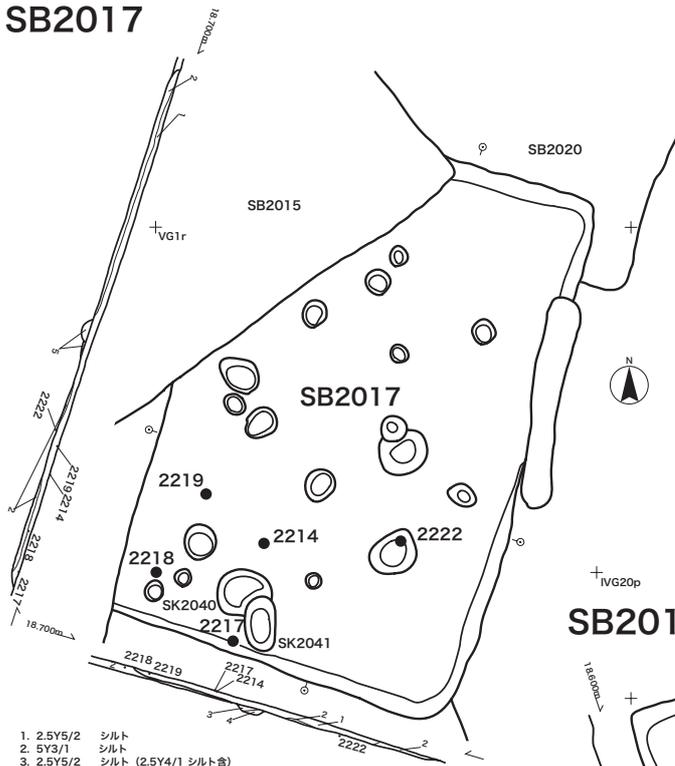
# SB2015

- 1. 10Y6/1 シルト (炭化物粒含)
- 2. N4/0 粘質シルト (10Y6/1 シルトブロック粒含)
- 3. 10Y3/1 粘土
- 4. 7.5Y3/1 粘土 (僅かに炭化物粒含)
- 5. 5PB3/1 粘質シルト (10Y6/1 シルトブロック含)
- 6. N2/0 粘土 (僅僅かに炭化物粒が混入し10Y6/1 シルトが僅かに含)
- 7. 7.5Y5/1 粘質シルト (10Y6/1 シルト粒が僅かに含)
- 8. N3/0 粘土 (僅僅かに炭化物粒含)
- 9. 5GY2/1 粘土



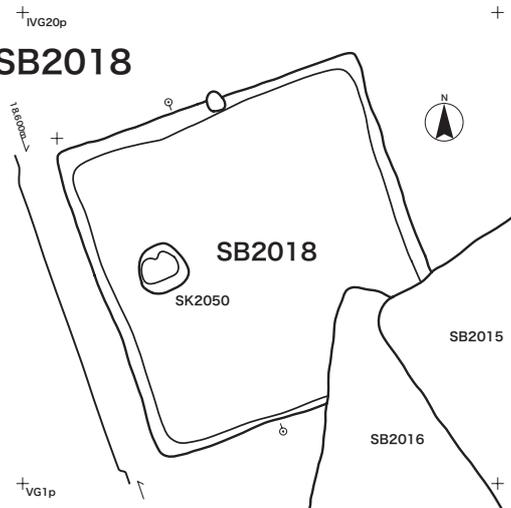
- 1. 10Y5/1 シルト
- 2. 10Y4/1 シルト
- 3. 5Y4/2 シルト
- 4. 5Y5/1 シルト
- 5. 5Y3/1 シルト
- 6. 5Y3/1 シルト
- 7. 5Y5/1 シルト (5Y4/1 シルト含)

# SB2017

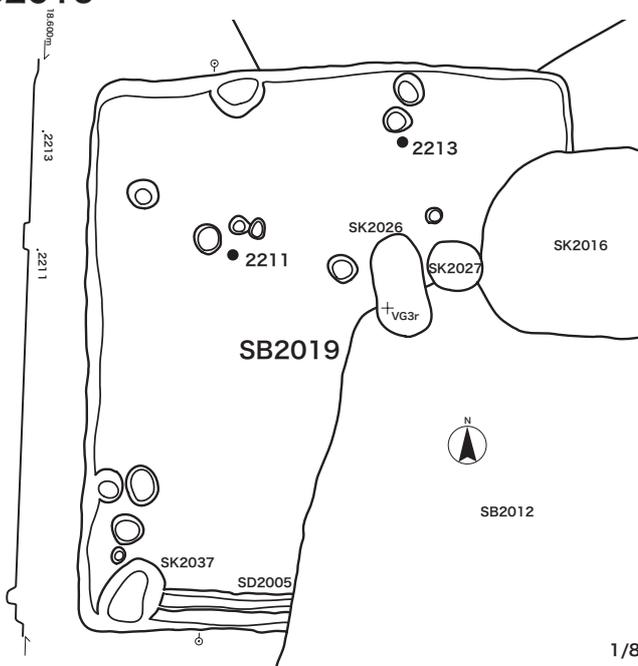


1. 2.5Y5/2 シルト
2. 5Y3/1 シルト
3. 2.5Y5/2 シルト (2.5Y4/1 シルト倉)
4. 5Y3/1 秘質シルト
5. 5Y3/1 シルト (5Y5/2 シルト倉)

# SB2018

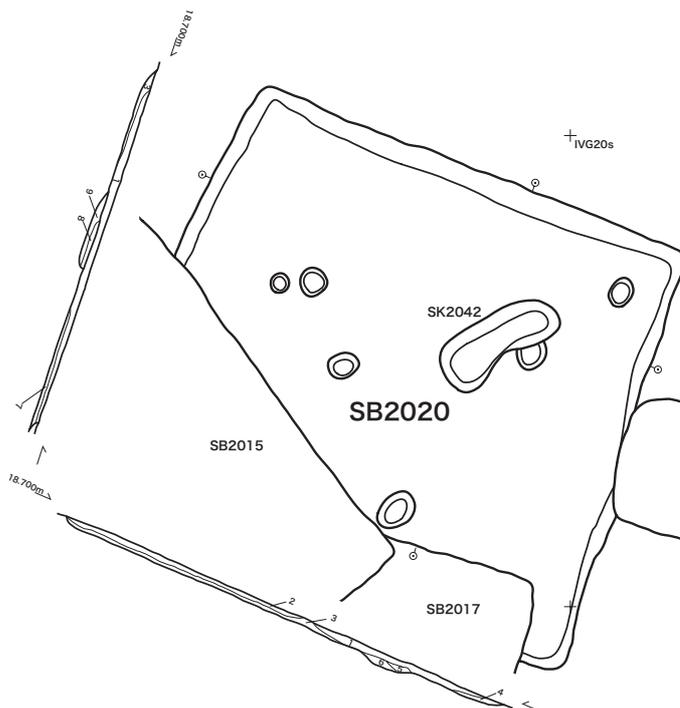


# SB2019



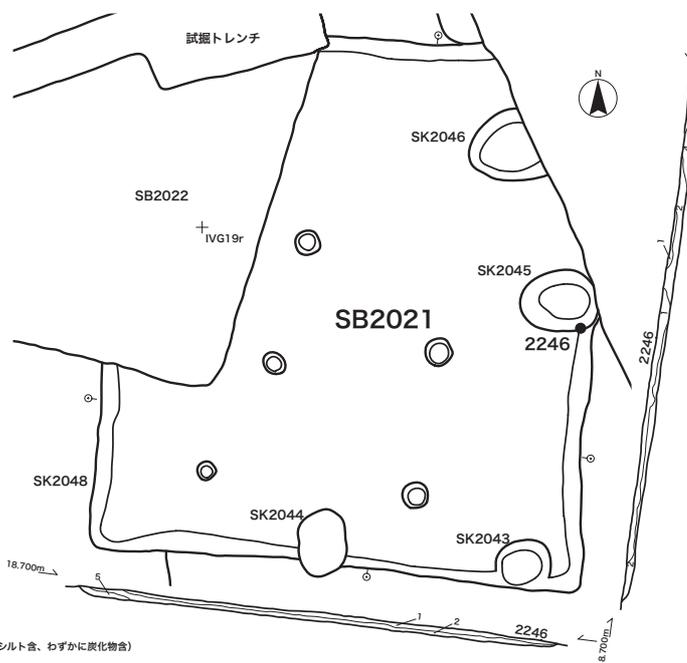
1/800 4m

# SB2020



- 1. 7.5Y4/1 シルト
- 2. 7.5Y4/1 シルト
- 3. 7.5Y3/1 シルト
- 4. 2.5Y3/1 シルト
- 5. 7.5Y3/1 シルト
- 6. 7.5Y2/1 粘質シルト
- 7. 7.5Y3/1 シルト
- 8. 7.5Y3/1 シルト
- 9. 7.5Y2/1 粘質シルト

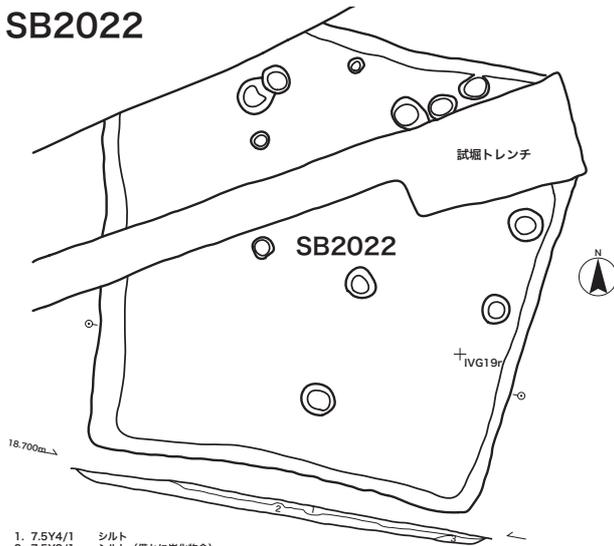
# SB2021



- 1. 5Y4/1 シルト (5Y5/1 シルト含、わずかに炭化物含)
- 2. 7.5Y3/1 シルト
- 3. 2.5GY5/1 シルト (10Y3/1 シルト含、わずかに炭化物含)
- 4. 10Y3/1 シルト
- 5. 7.5Y3/1 シルト (7.5Y4/1 シルト含)

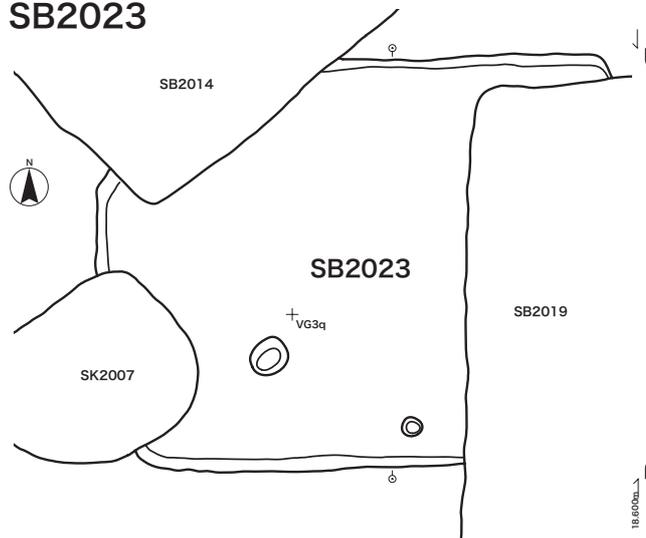
1/800  4m

# SB2022

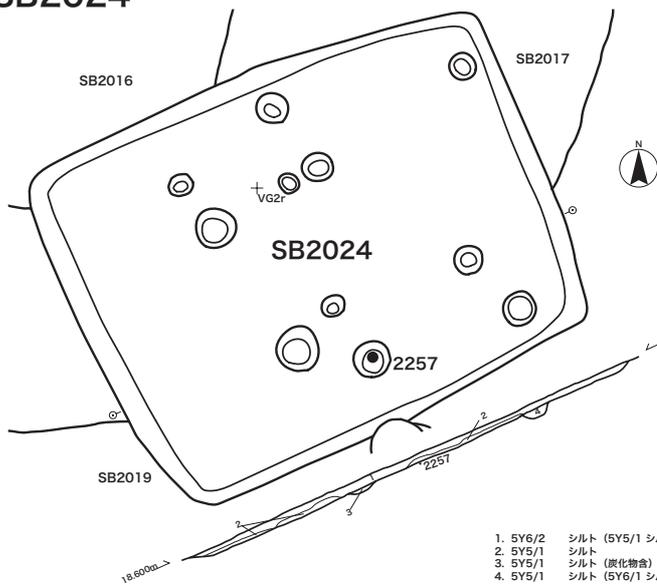


- 1. 7.5Y4/1 シルト (僅かに炭化物含)
- 2. 7.5Y3/1 シルト (僅かに炭化物含)
- 3. 7.5Y4/1 シルト (7.5Y3/1 シルト含、僅かに炭化物含)

# SB2023



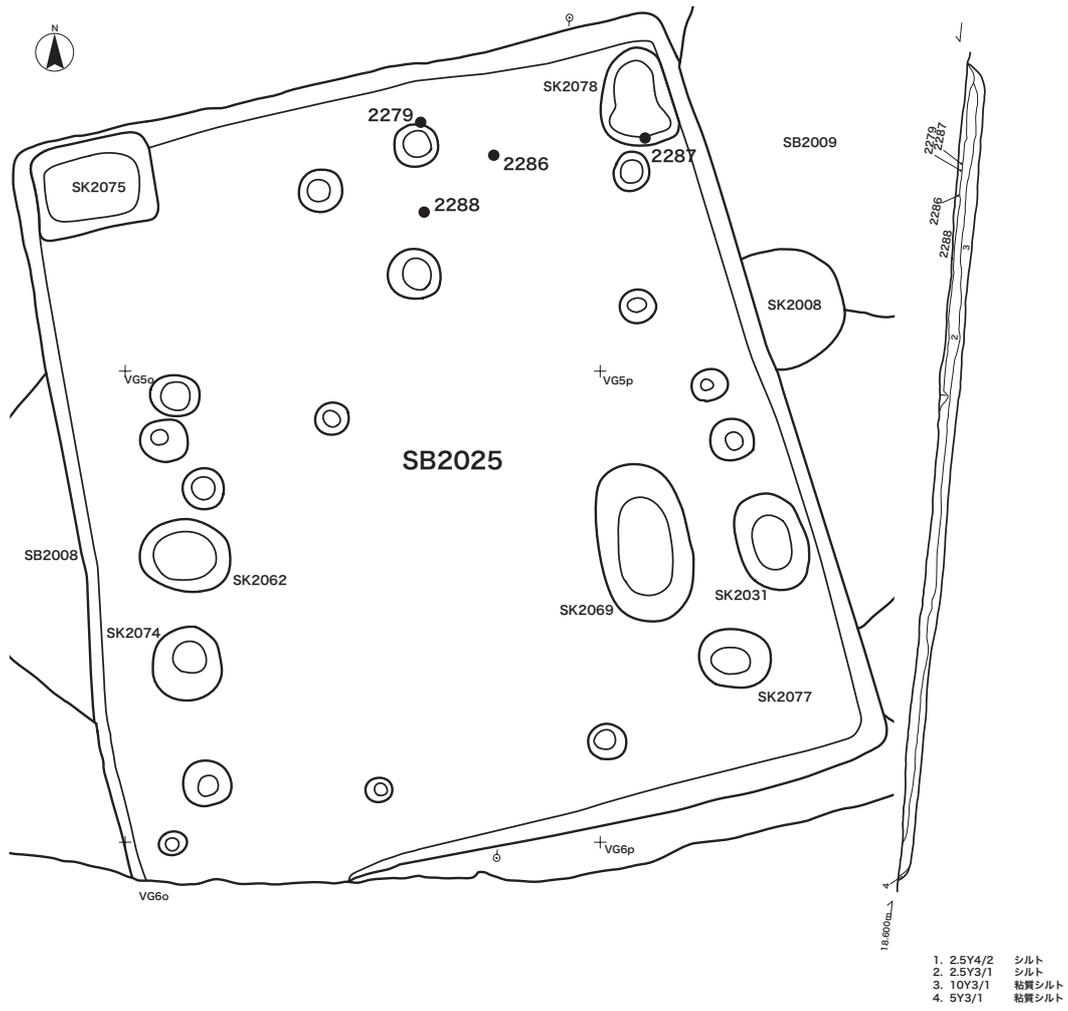
# SB2024



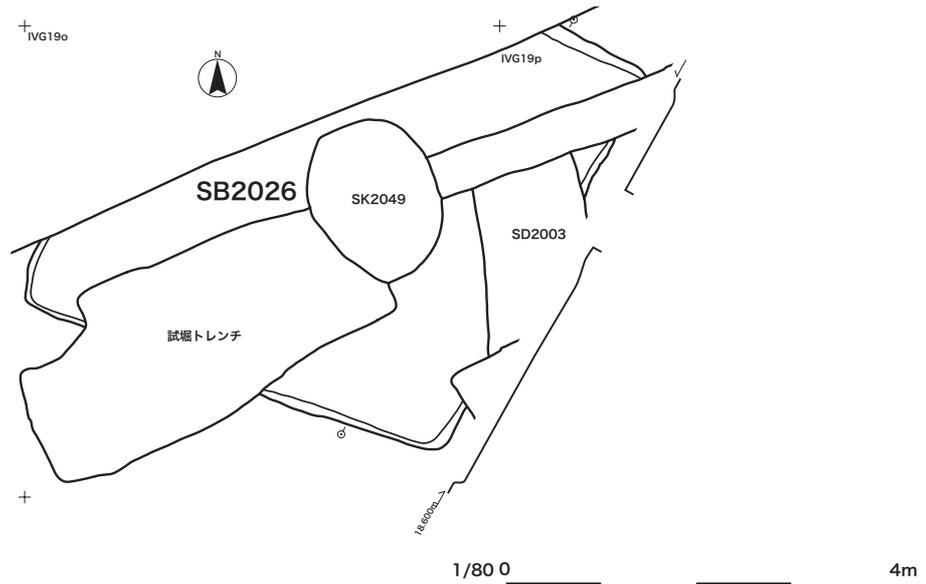
- 1. 5Y6/2 シルト (5Y5/1 シルト含、炭化物含)
- 2. 5Y5/1 シルト
- 3. 5Y5/1 シルト (炭化物含)
- 4. 5Y5/1 シルト (5Y6/1 シルト含)

1/80 0 \_\_\_\_\_ 4m

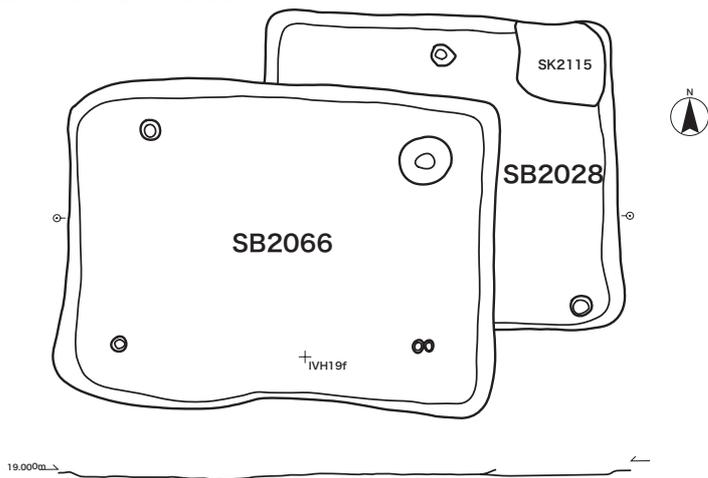
# SB2025



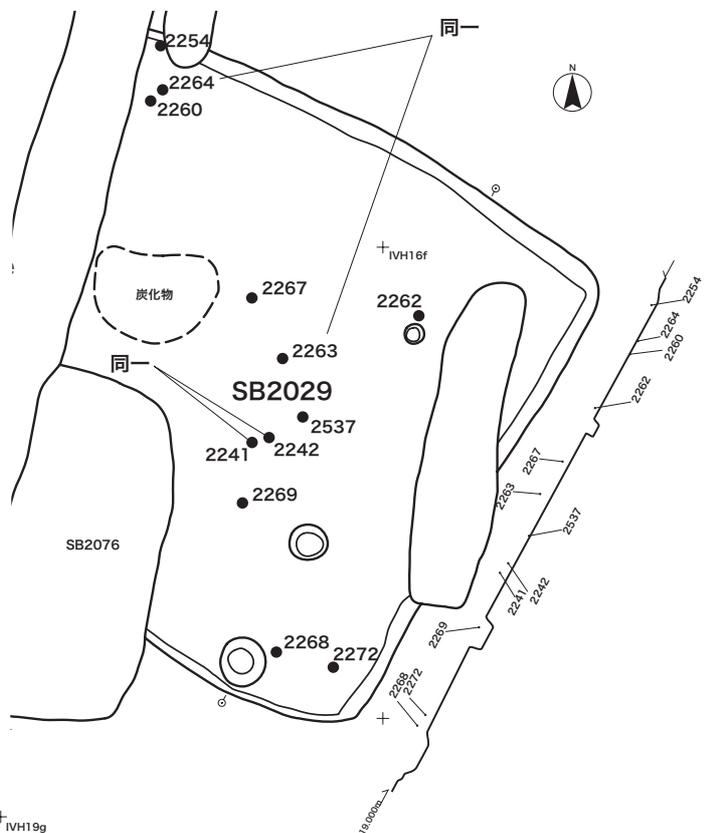
# SB2026



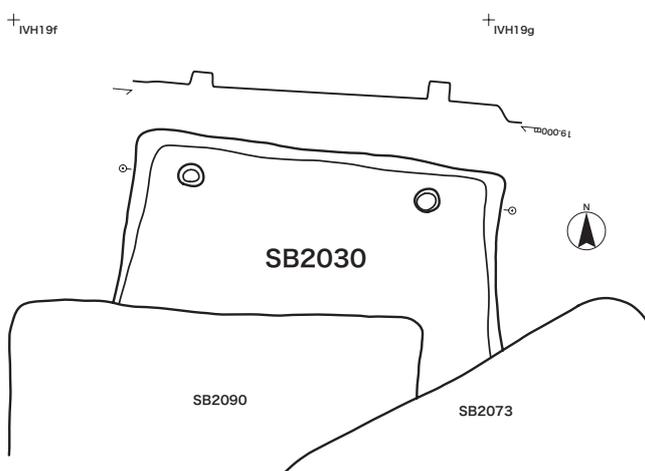
# SB2028・2066



# SB2029

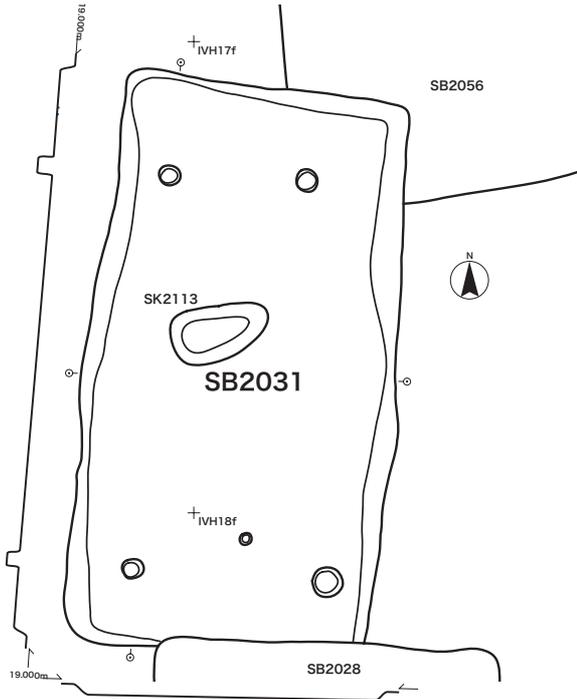


# SB2030

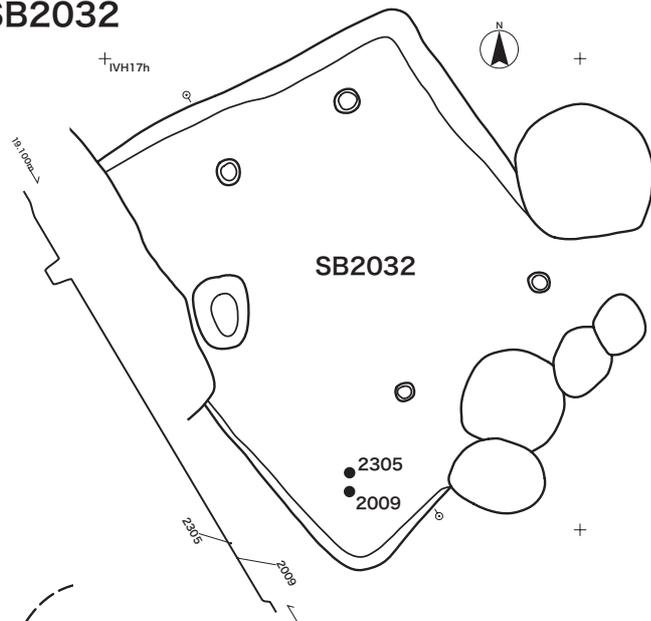


1/80 0 4m

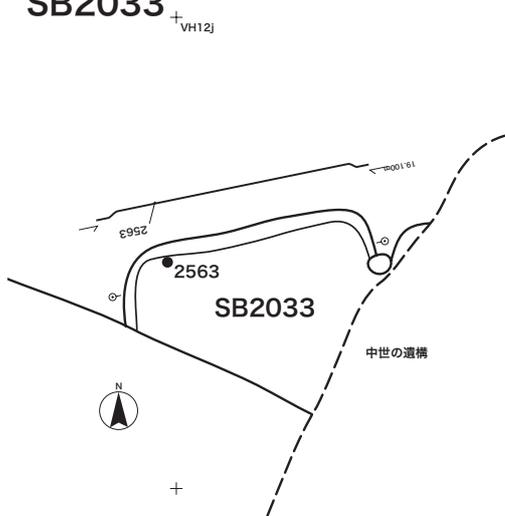
SB2031



SB2032

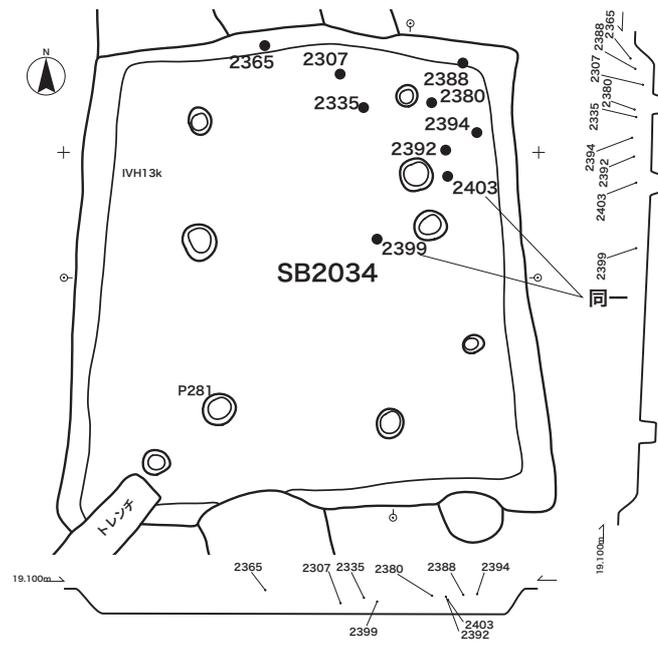


SB2033

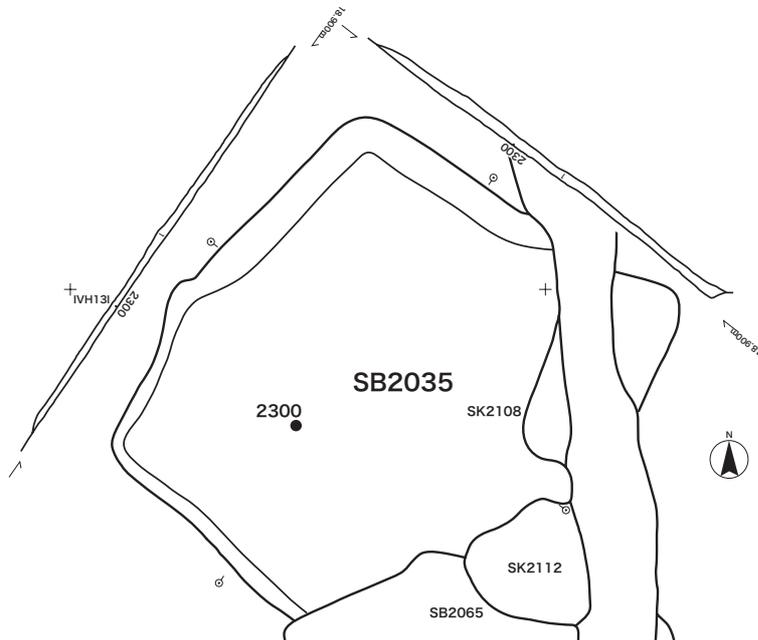


1/80 0 4m

# SB2034



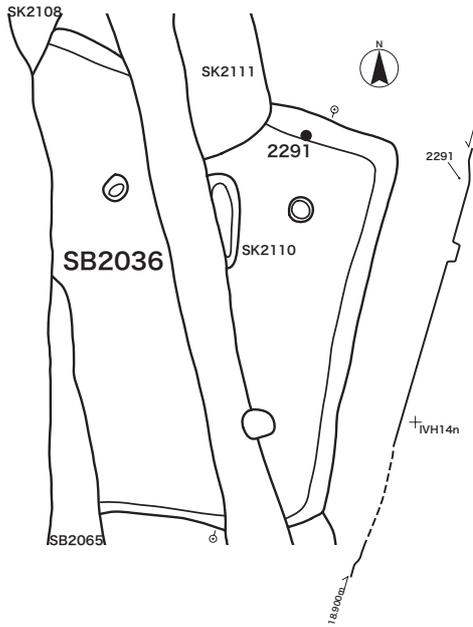
# SB2035



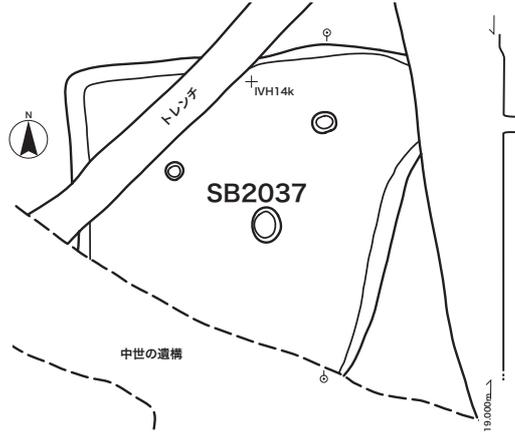
1. 2.5Y4/1 シルト (炭化物倉)

1/80 0 4m

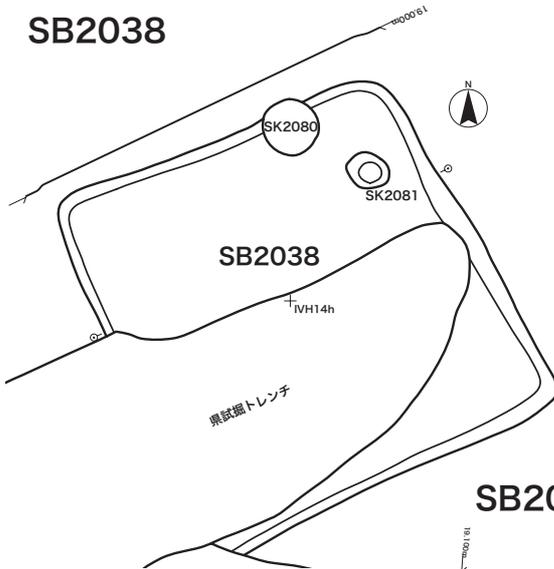
### SB2036



### SB2037



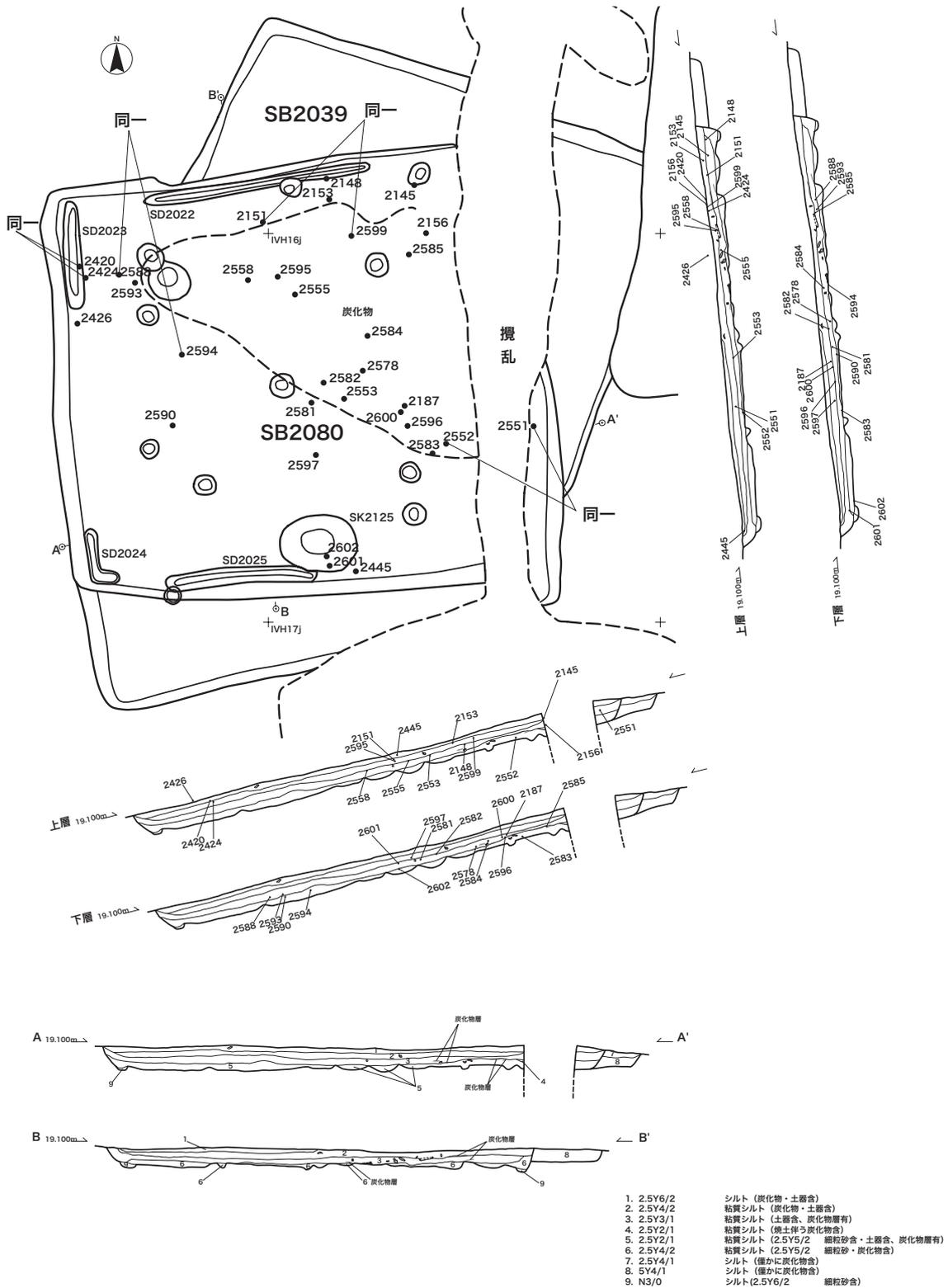
### SB2038



### SB2040



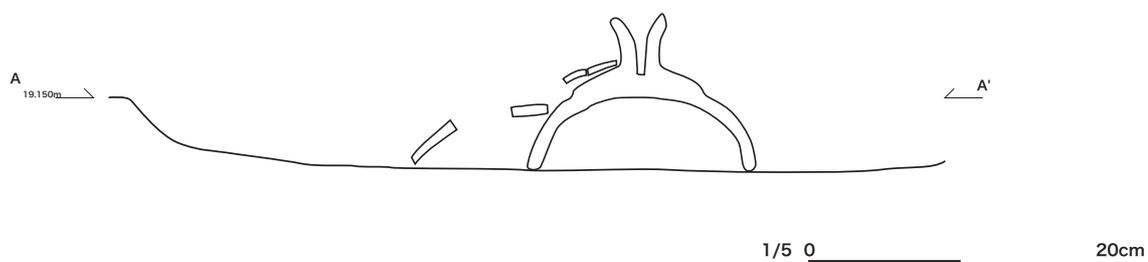
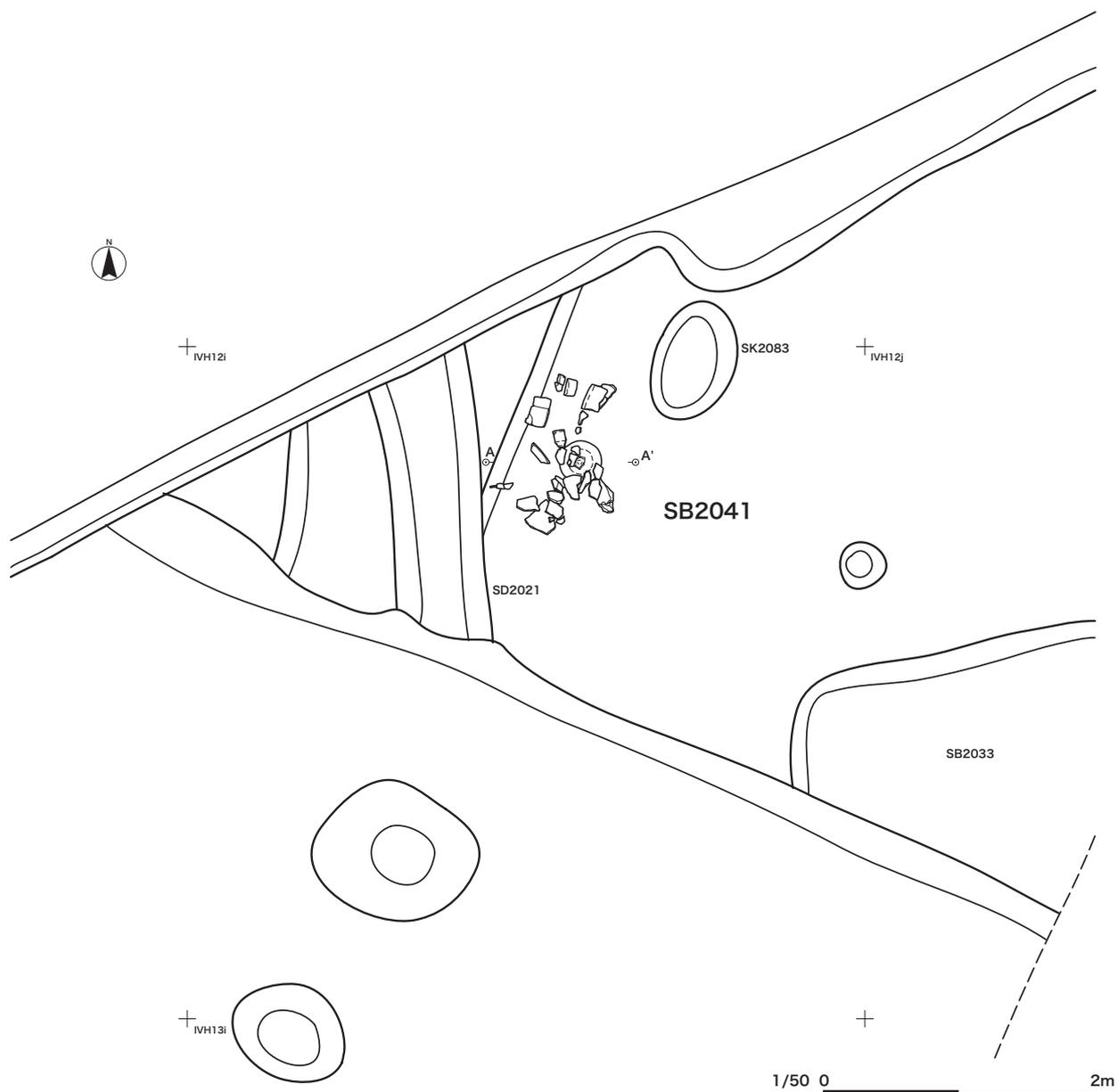
# SB2039・2080



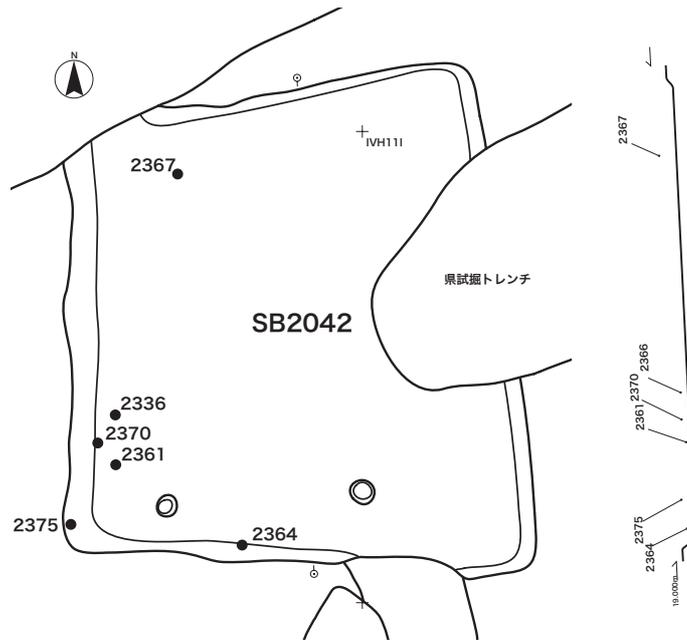
1/80 0

4m

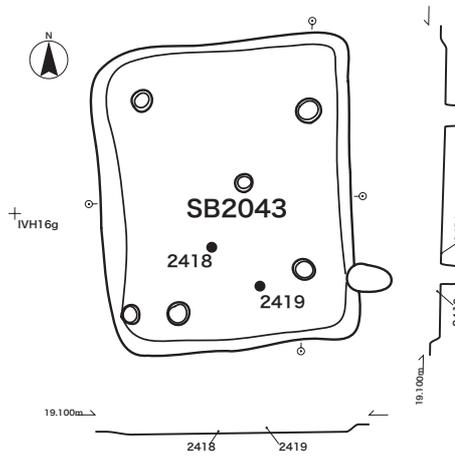
# SB2041



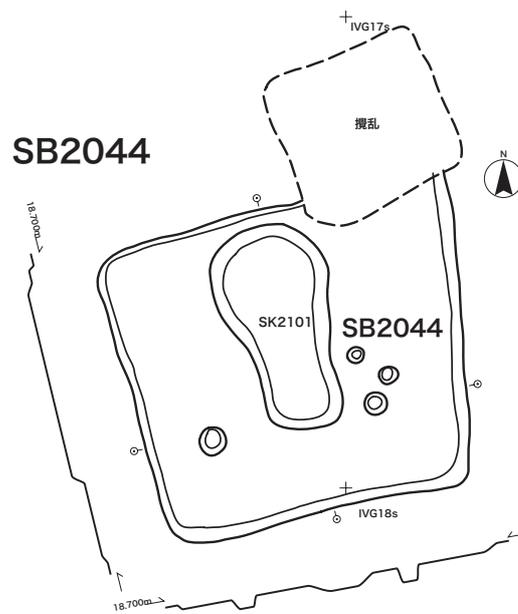
### SB2042



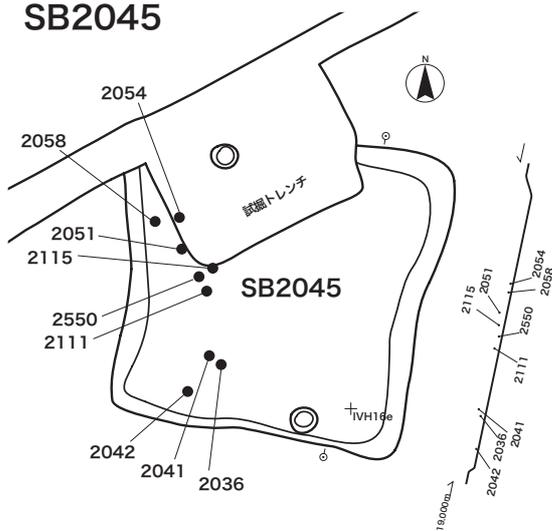
### SB2043



### SB2044

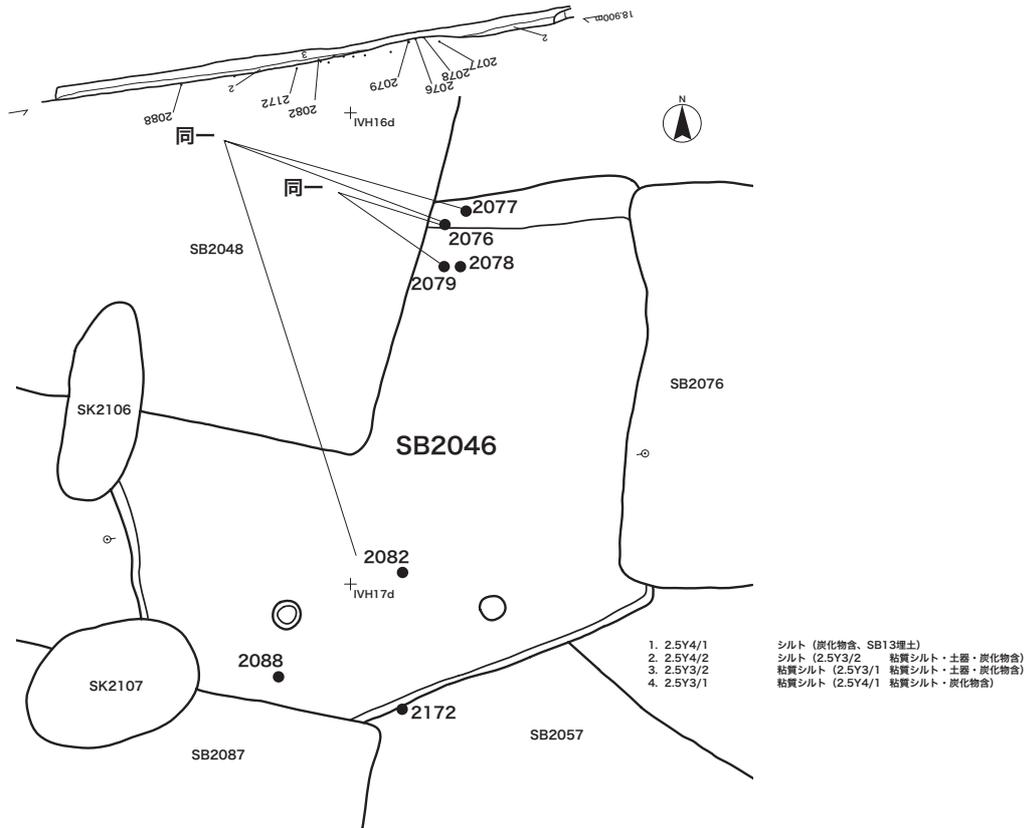


### SB2045

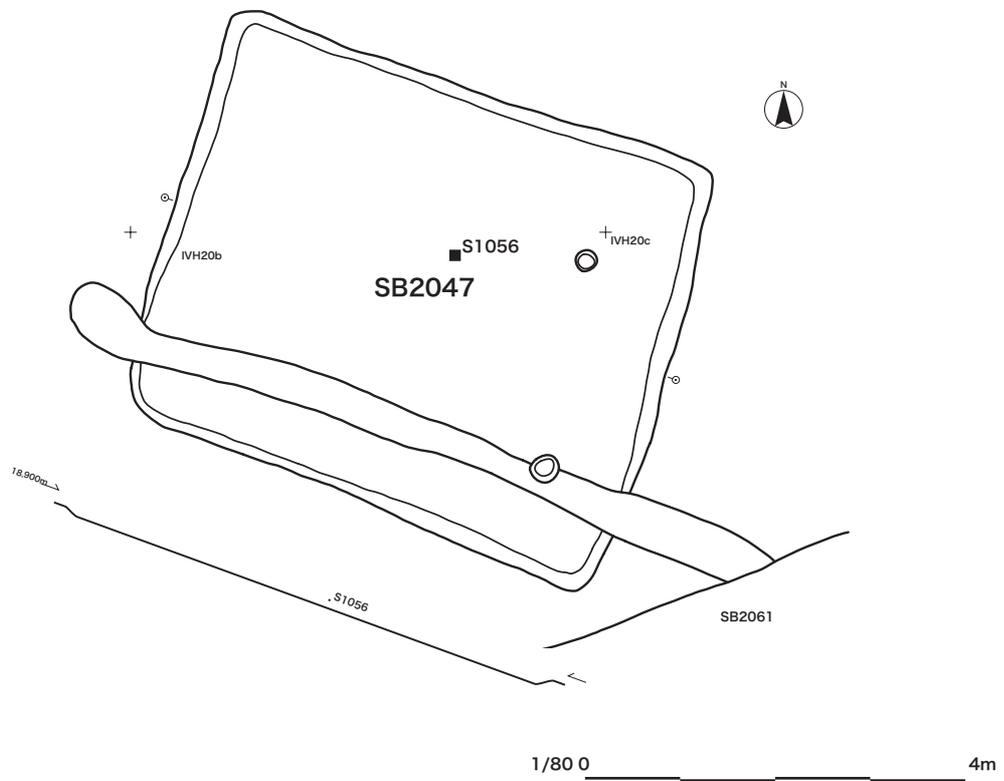


1/80 0 4m

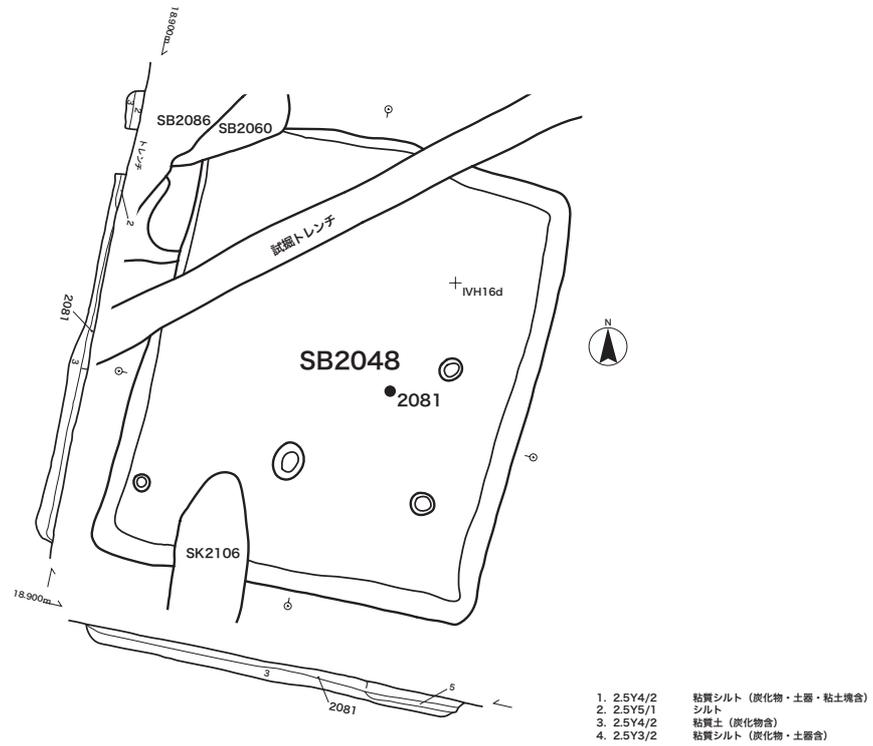
# SB2046



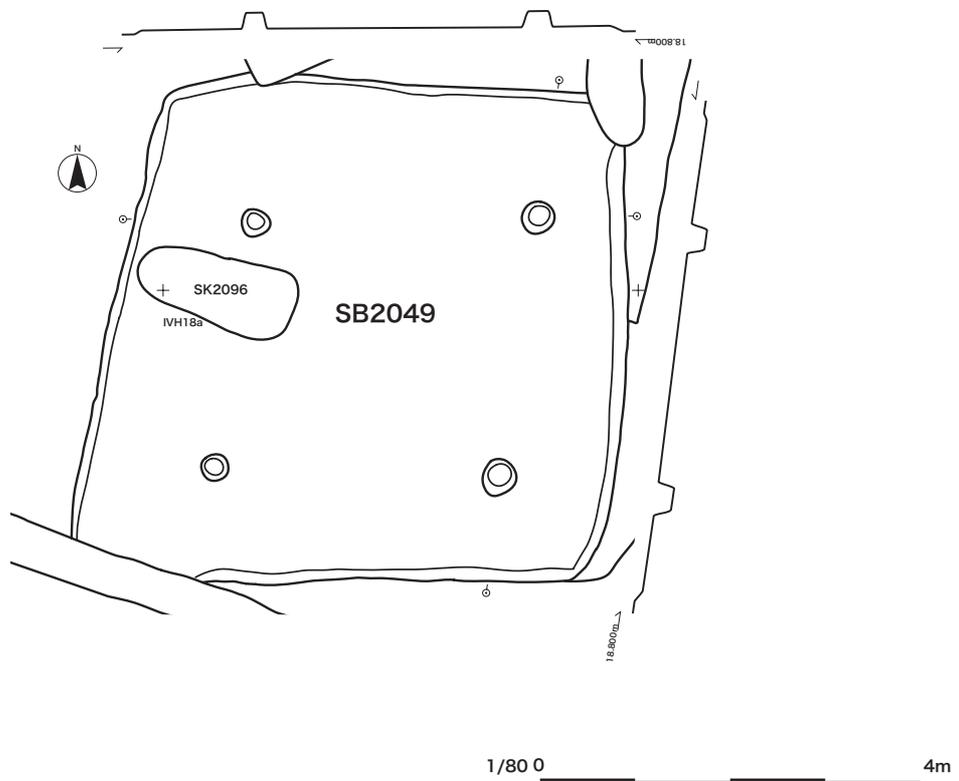
# SB2047



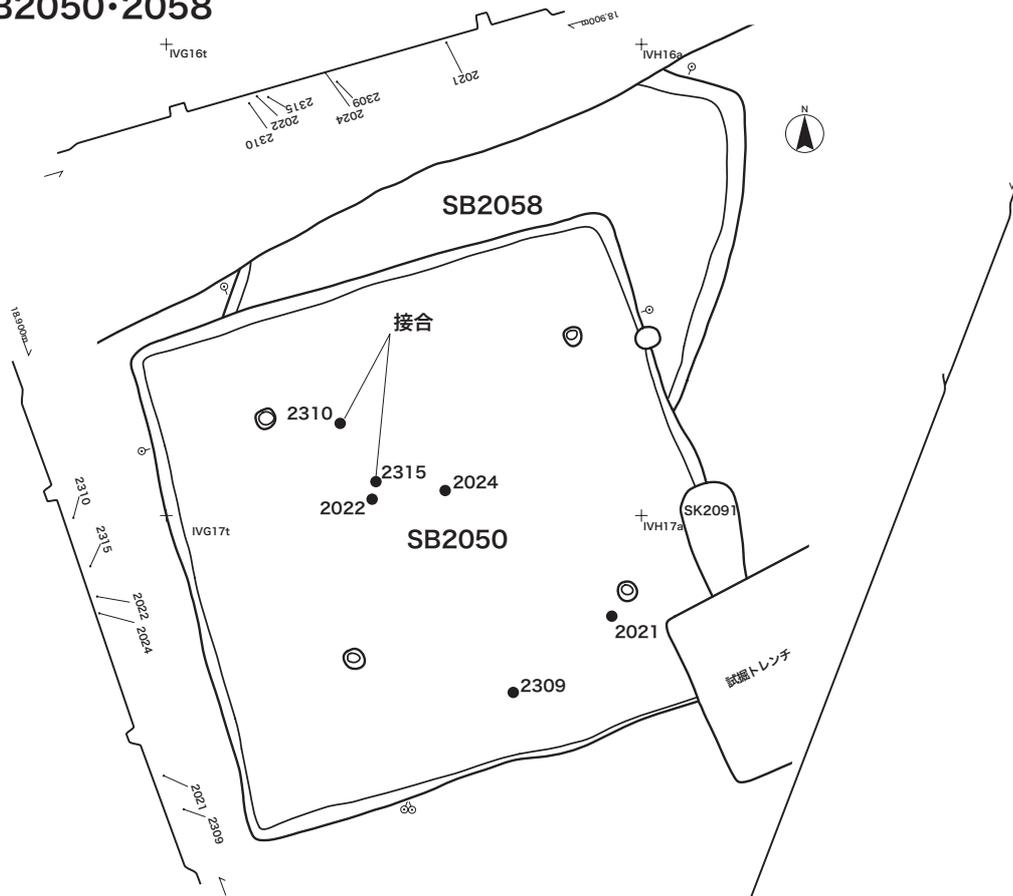
# SB2048



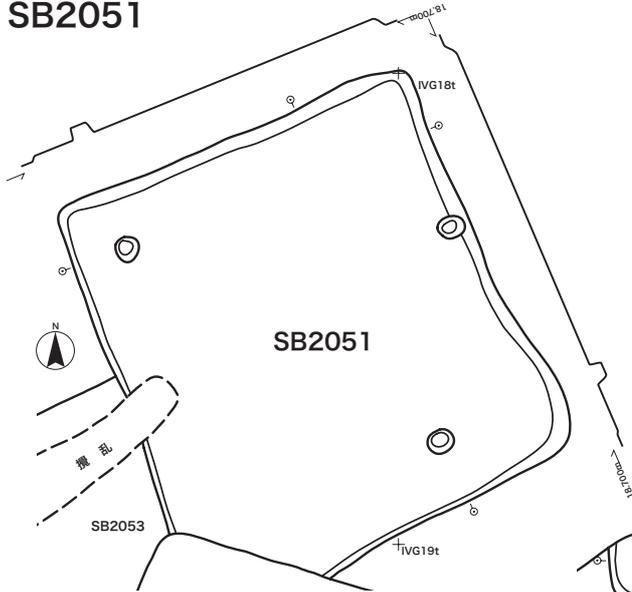
# SB2049



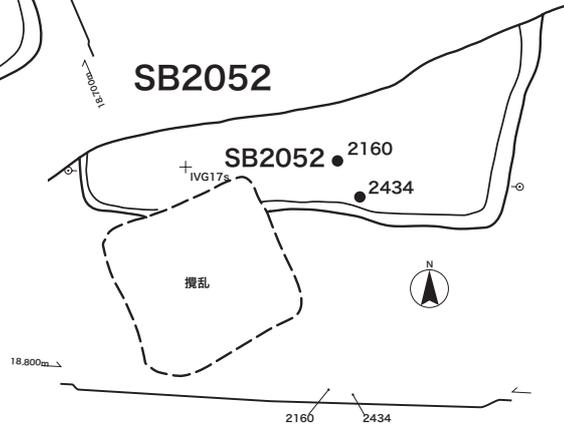
SB2050・2058



SB2051

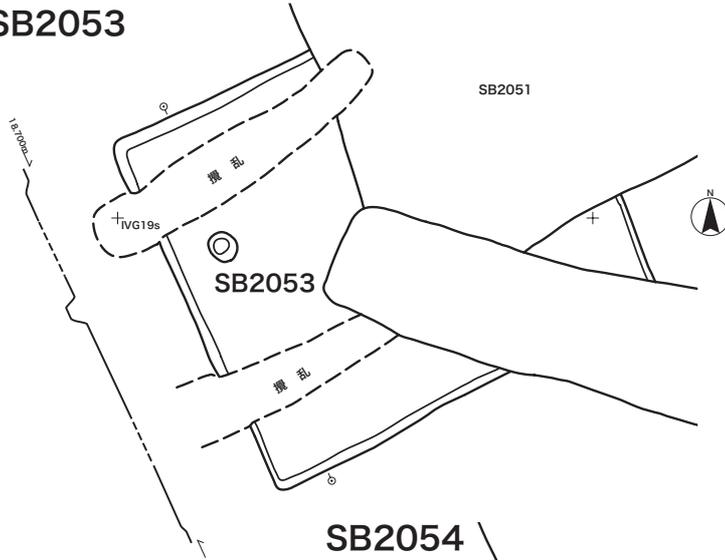


SB2052

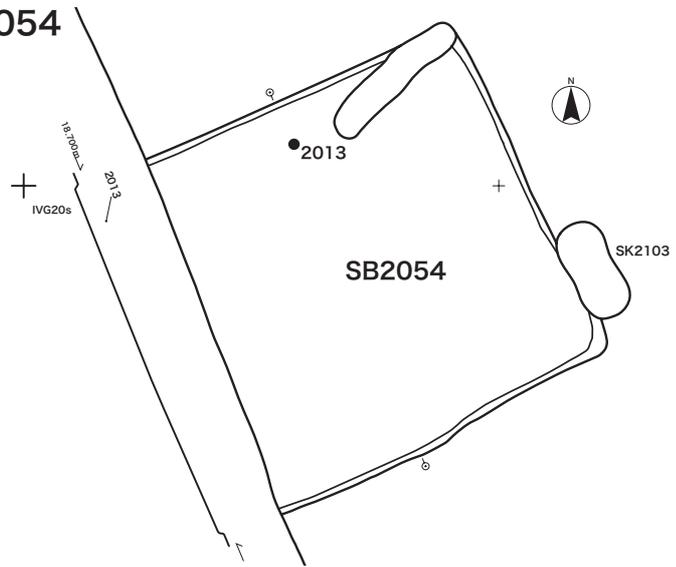


1/800 4m

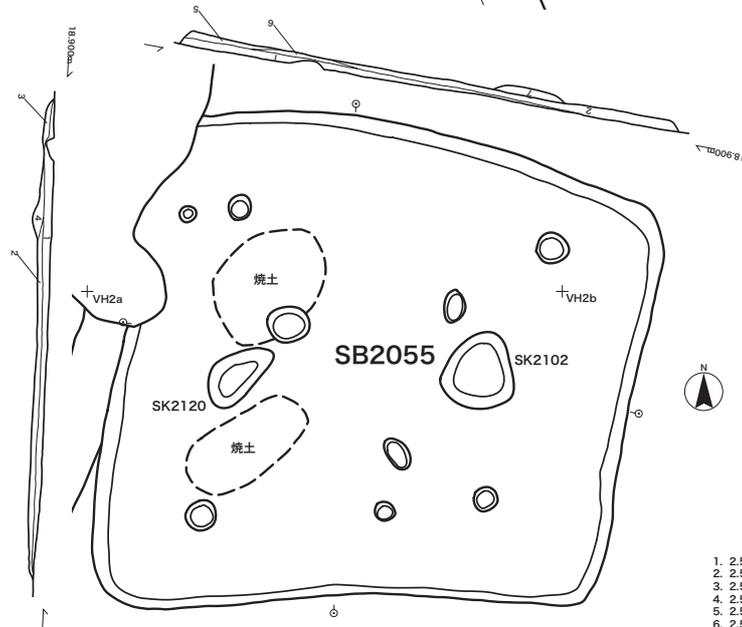
# SB2053



# SB2054



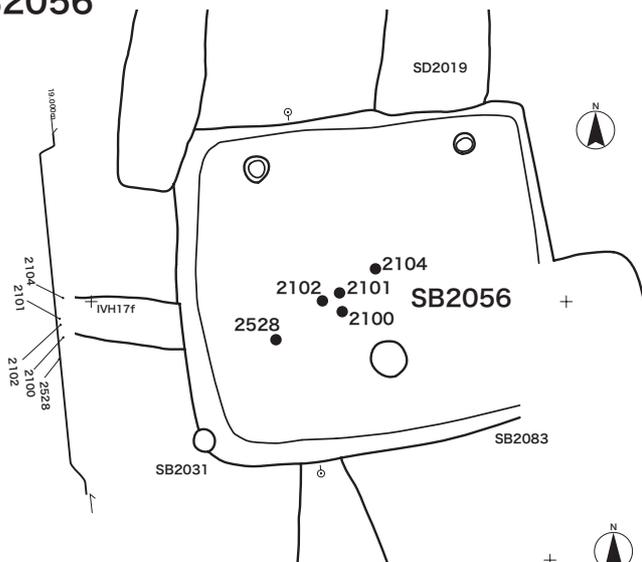
# SB2055



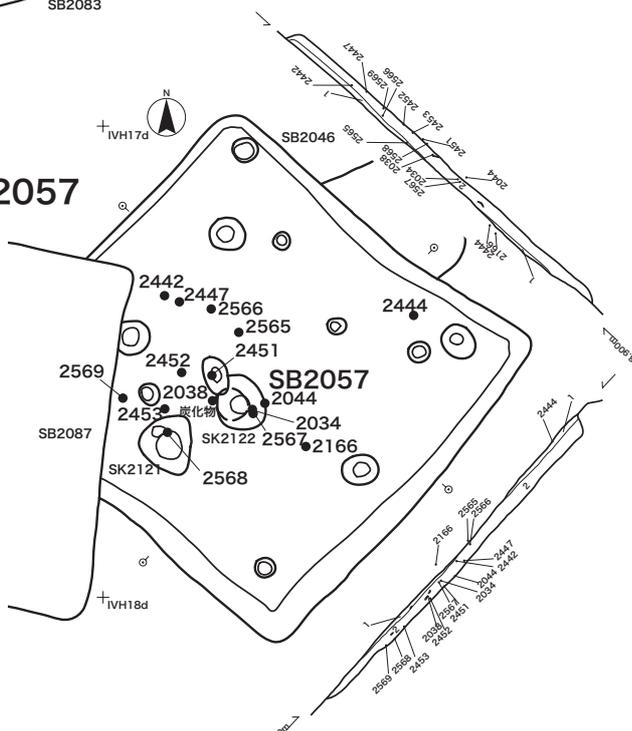
- 1. 2.5Y4/2 シルト (炭化物・土器舎)
- 2. 2.5Y4/1 粘質シルト (炭化物舎)
- 3. 2.5Y4/2 粘質シルト (炭化物舎)
- 4. 2.5Y4/1 粘質土
- 5. 2.5Y4/1 粘質土
- 6. 2.5Y4/2 粘質シルト (炭化物舎)
- 7. 5Y4/1 粘質土

1/800  4m

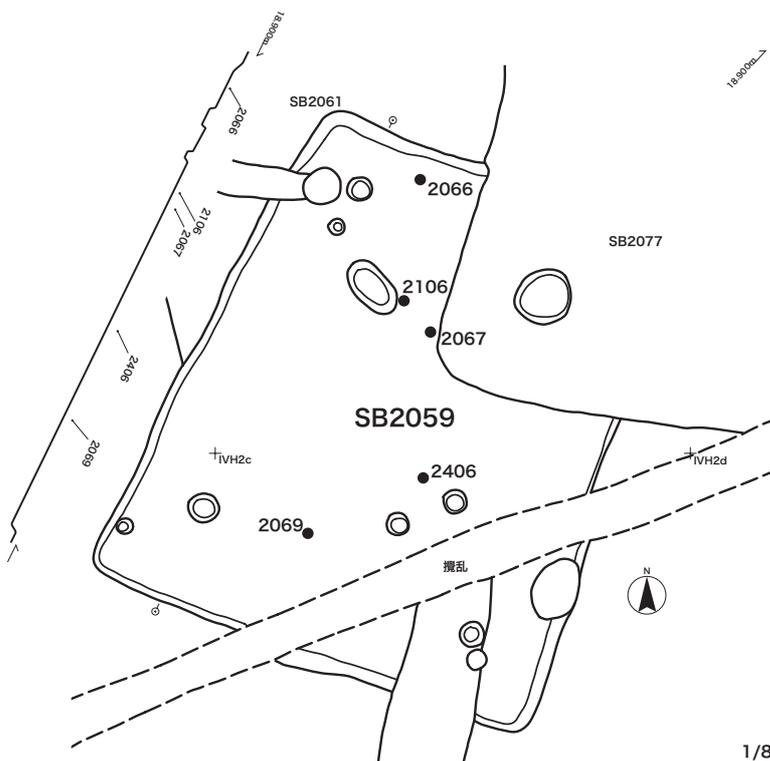
# SB2056



# SB2057



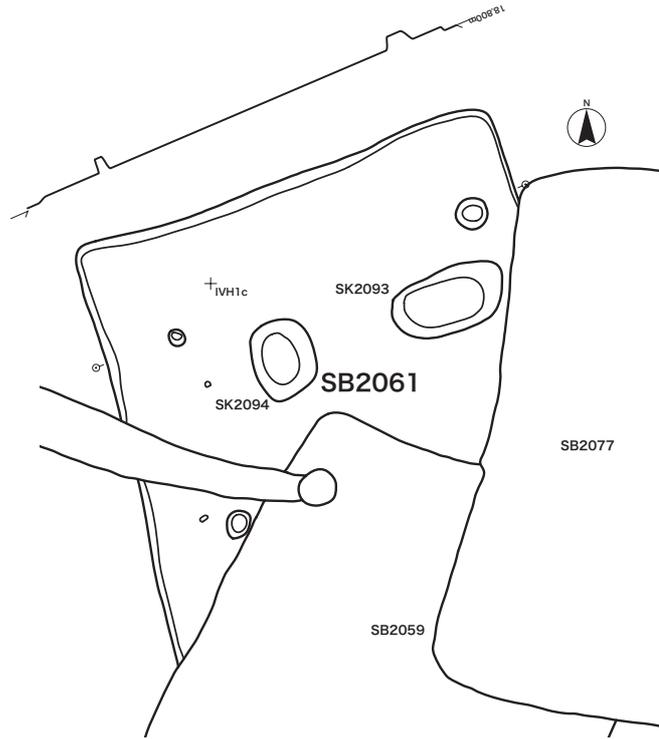
# SB2059



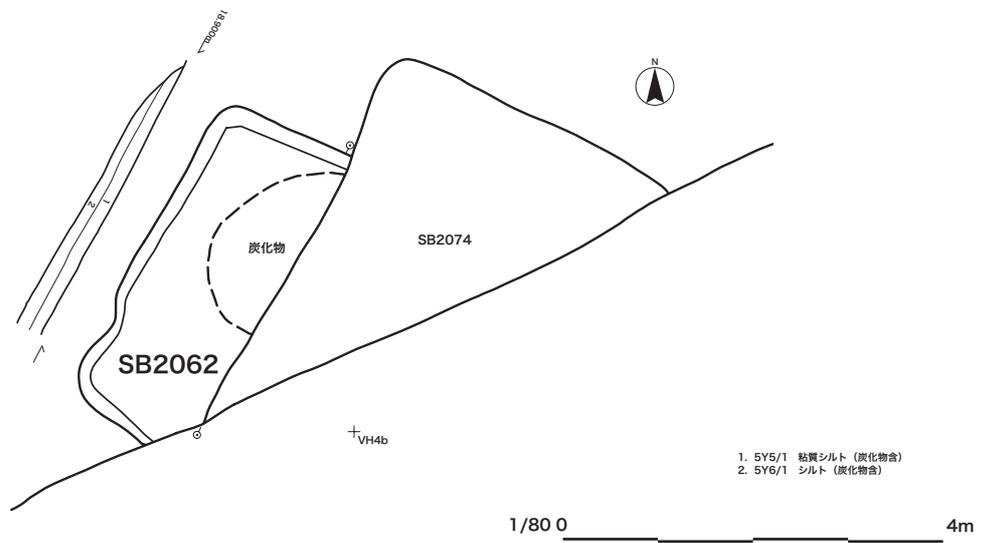
- 1. 2.5Y3/2 シルト (土器・炭化物含)
- 2. 2.5Y3/1 粘質シルト (土器・炭化物含)

1/80 0 4m

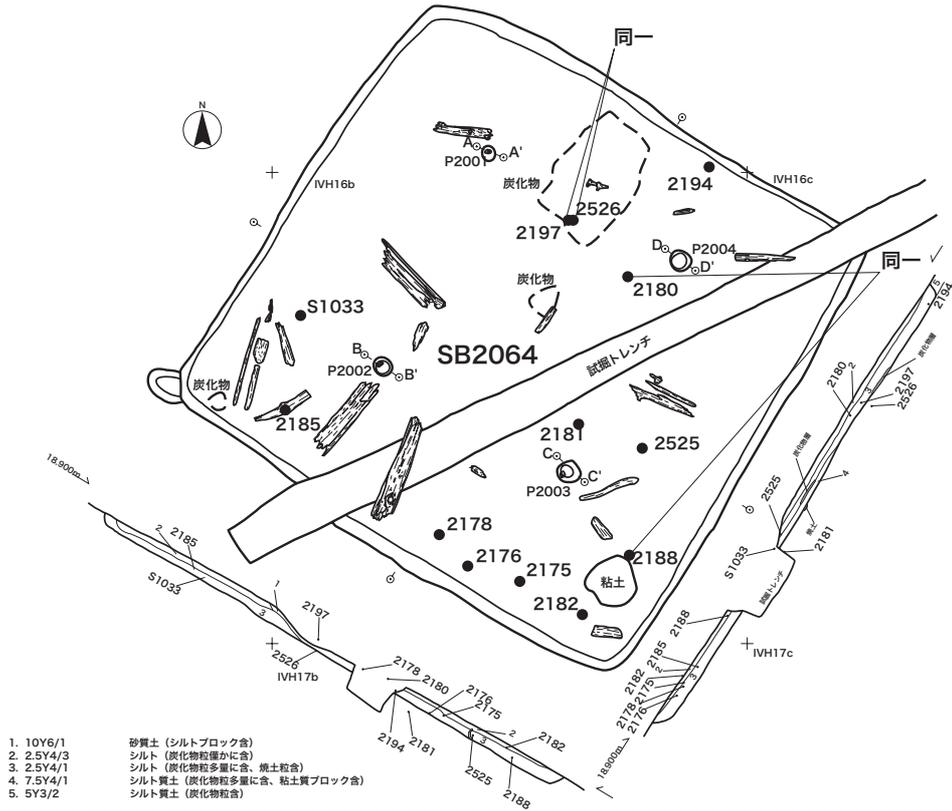
# SB2061



# SB2062

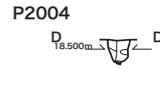
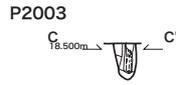
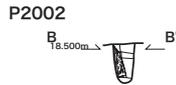
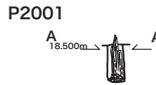


# SB2064

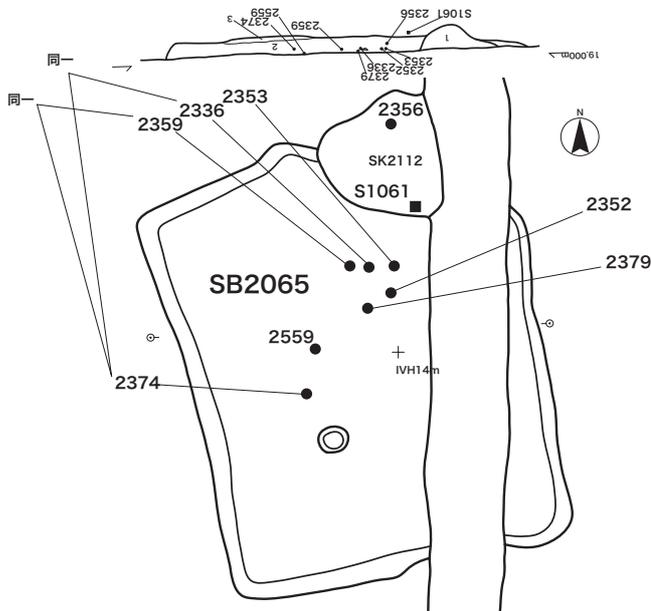


- 1. 10Y6/1 砂質土 (シルトブロック含)
- 2. 2.5Y4/3 シルト (炭化物粒僅かに含)
- 3. 2.5Y4/1 シルト (炭化物粒多量に含、焼土粒含)
- 4. 7.5Y4/1 シルト質土 (炭化物粒多量に含、粘土質ブロック含)
- 5. 5Y3/2 シルト質土 (炭化物粒含)

## B区 SB2064内Pit



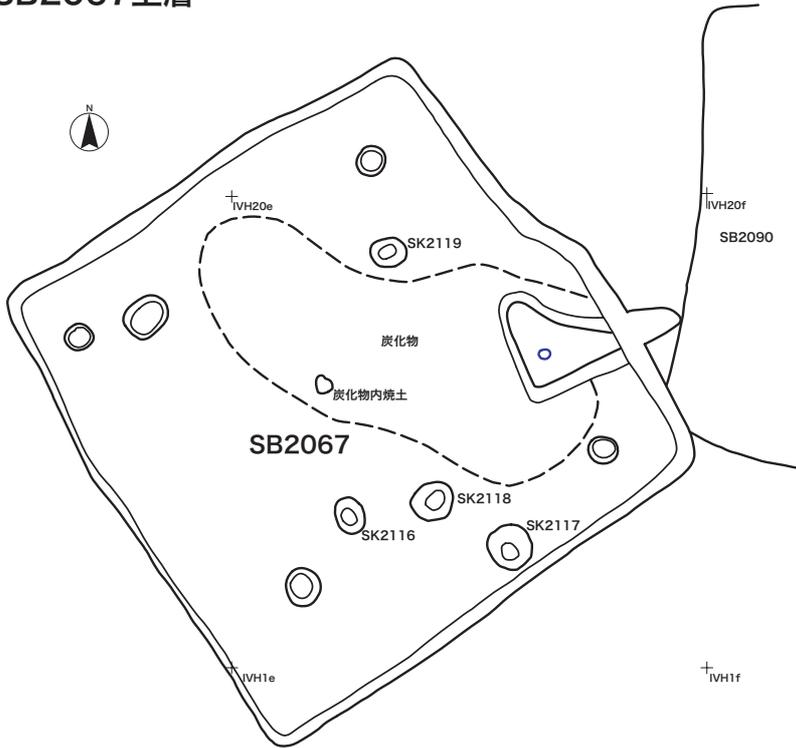
# SB2065



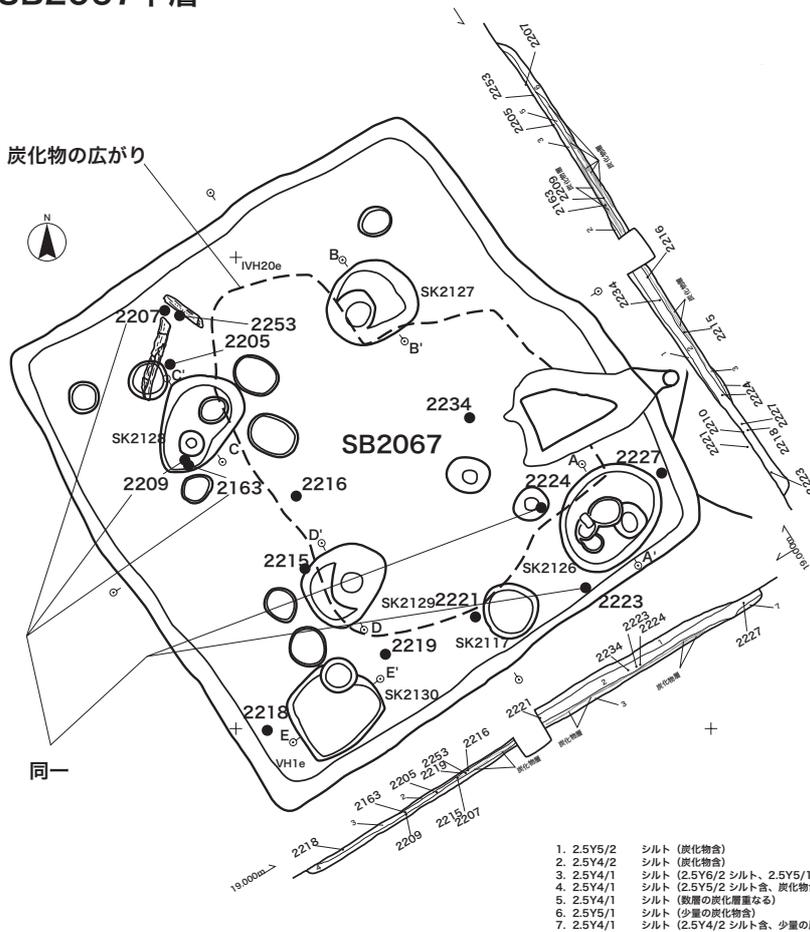
- 1. 2.5Y5/2 シルト (土礫・炭化物含)
- 2. 5Y3/1 粘質シルト (5Y4/1 細粒砂・炭化物含)
- 3. 2.5Y3/1 シルト

1/80 0 4m

# SB2067上層



# SB2067下層



## B区 SB2067内

### SK2126



1. 2.5Y3/1 シルト (2.5Y4/2 シルト含、炭化物多く含)
2. 2.5Y4/1 粘質シルト
3. 5Y3/1 粘質シルト (炭化物含)

### SK2127



1. 5Y4/1 粘質シルト (2.5Y4/1 シルト・5Y2/1 粘土含、土器・炭化物含)
2. 2.5Y4/1 粘質シルト (5Y5/2 極細粒砂含)
3. 10Y4/1 粘質シルト

### SK2128



1. 5Y3/1 粘質シルト (炭化物含)
2. 2.5Y4/1 粘質シルト (炭化物含)
3. 2.5Y4/1 粘質シルト (2.5Y5/2 極細粒砂含)
4. 2.5Y6/2 極細粒砂 (2.5Y4/1 粘質シルト含)

### SK2129



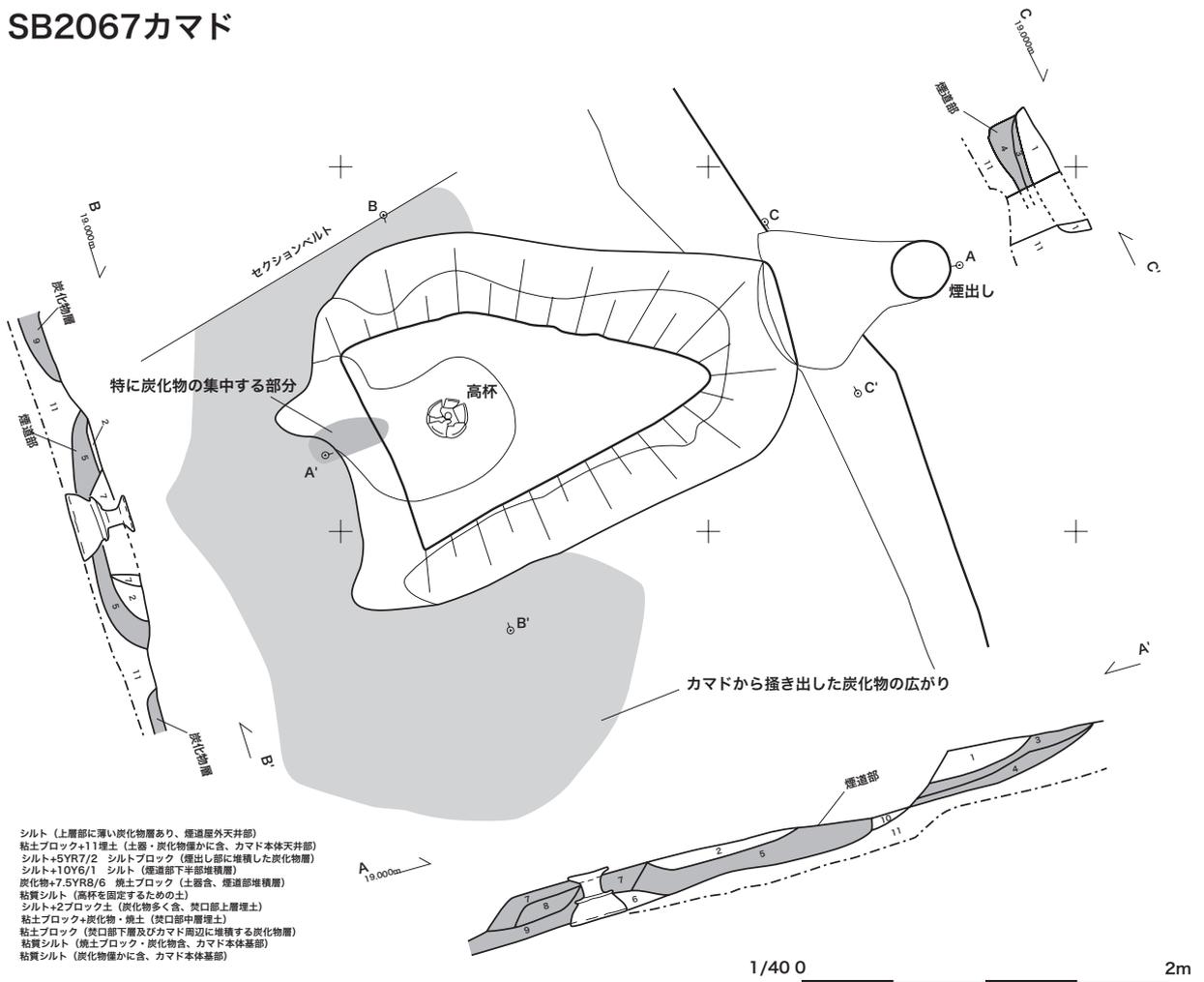
1. 5Y3/1 粘質シルト (2.5Y5/2 シルト含、土器含、炭化物多く含)
2. 5Y4/1 粘質シルト
3. 7.5Y4/1 粘土 (10Y4/1 極細粒砂含)

### SK2130



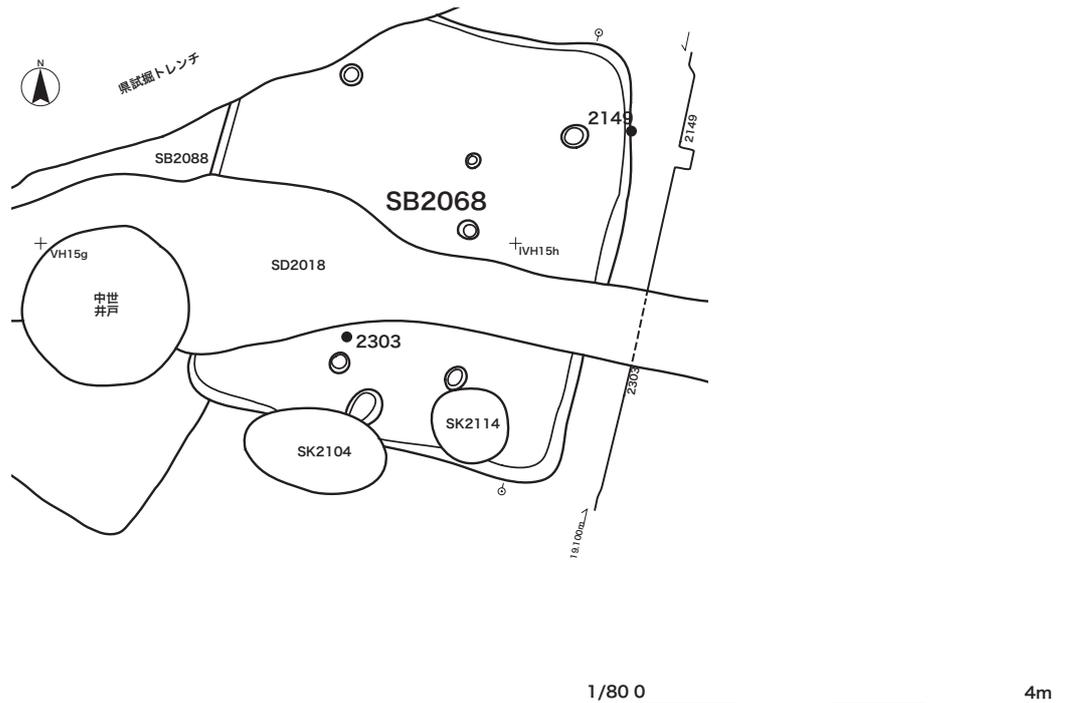
1. 2.5Y5/2 シルト (炭化物含)
2. 2.5Y4/2 シルト (炭化物含)
3. 2.5Y4/1 シルト (2.5Y6/2 シルト、2.5Y5/1 シルト含)
4. 2.5Y4/1 シルト (2.5Y5/2 シルト含、炭化物含)
5. 2.5Y4/1 シルト (数層の炭化物層有る)
6. 2.5Y5/1 シルト (少量の炭化物含)
7. 2.5Y4/1 シルト (2.5Y4/2 シルト含、少量の炭化物含)

# SB2067カマド

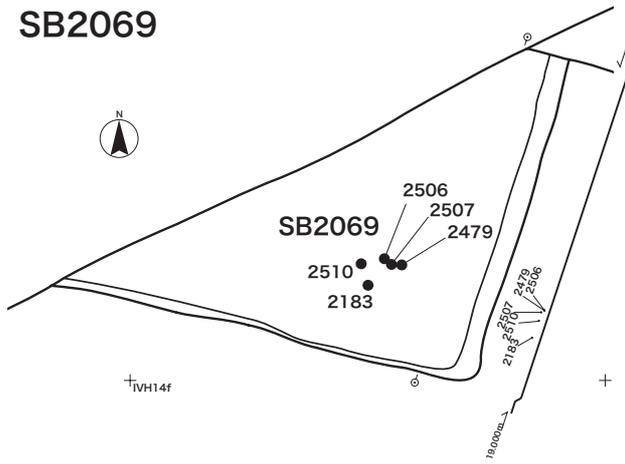


- 1. 5Y7/2 シルト (上層部に薄い炭化物層あり、煙道部外天井部)
- 2. N8/0 粘土ブロック+11埋土 (土器・炭化物層かにか、カマド本体天井部)
- 3. 7.5R2/1 シルト+5YR7/2 シルトブロック (煙出し部に堆積した炭化物層)
- 4. 5YR7/2 シルト+10Y6/1 シルト (煙道部下半部堆積層)
- 5. N2/0 炭化物+7.5YR8/6 粘土ブロック (土器含、煙道部堆積層)
- 6. 5Y6/1 粘質シルト (竈形を固定するための土)
- 7. 7.5Y6/1 シルト+2ブロック土 (炭化物多く含、焚口部上層埋土)
- 8. 5YR8/1 粘土ブロック+炭化物・焼土 (焚口部中層埋土)
- 9. N2/0 粘土ブロック (焚口部下層及びカマド周辺に堆積する炭化物層)
- 10. 10Y6/1 粘質シルト (粘土ブロック・炭化物含、カマド本体基部)
- 11. N6/0 粘質シルト (炭化物層かにか、カマド本体基部)

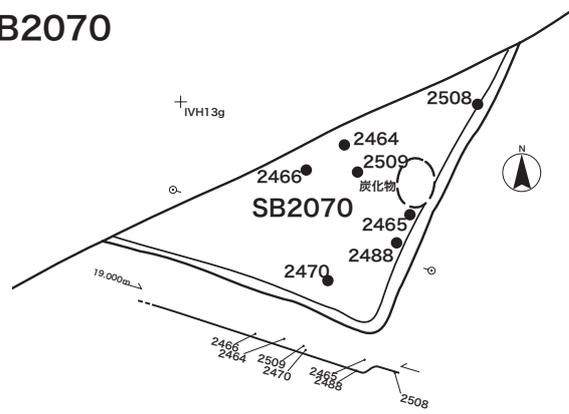
# SB2068



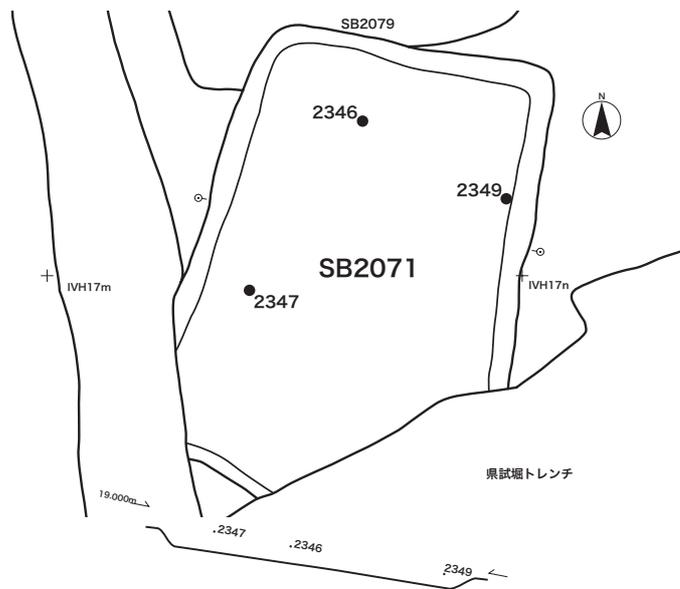
# SB2069



# SB2070



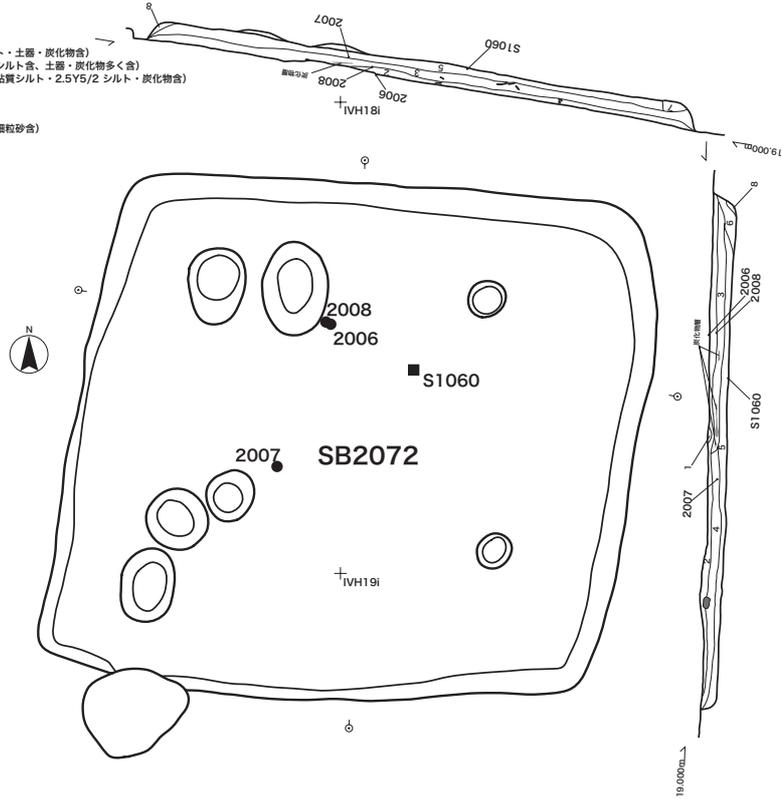
# SB2071



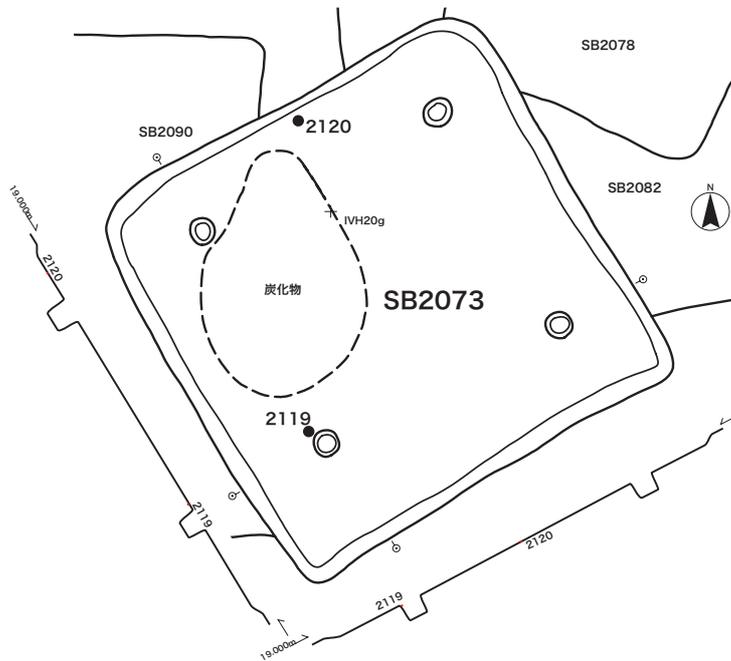
1/800 4m

# SB2072

- 1. 2.5Y4/1 シルト (炭化物含)
- 2. 2.5Y5/2 シルト (2.5Y3/2 シルト・土器・炭化物含)
- 3. 2.5Y3/1 粘質シルト (2.5Y5/2 シルト含・土器・炭化物多く含)
- 4. 2.5Y4/1 粘質シルト (2.5Y2/1 粘質シルト・2.5Y5/2 シルト・炭化物含)
- 5. 2.5Y3/1 粘質シルト (炭化物含)
- 6. 2.5Y2/1 粘質シルト (炭化物含)
- 7. 2.5Y5/2 細粒砂
- 8. 2.5Y3/1 粘質シルト (2.5Y5/1 細粒砂含)



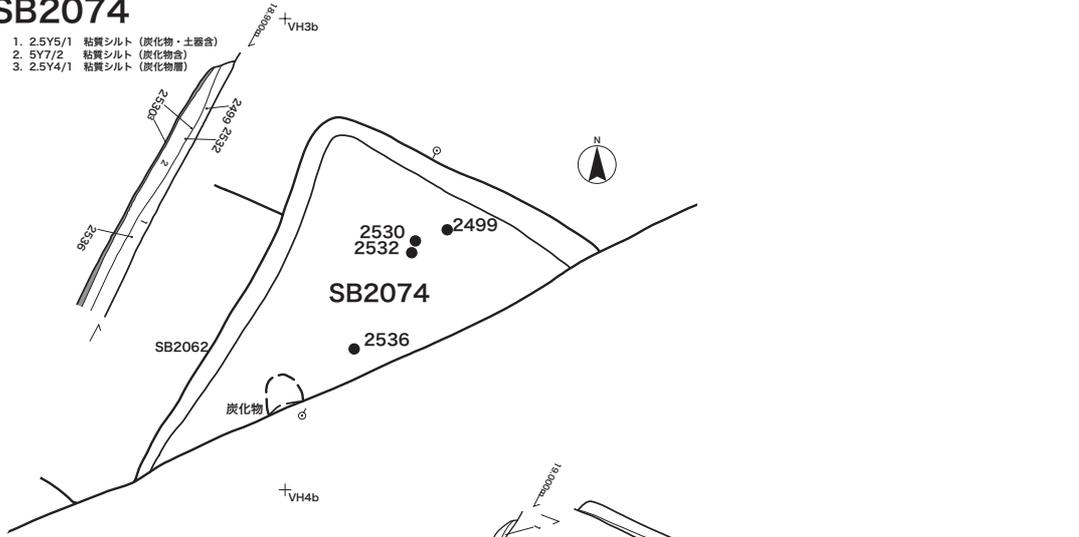
# SB2073



1/800 4m

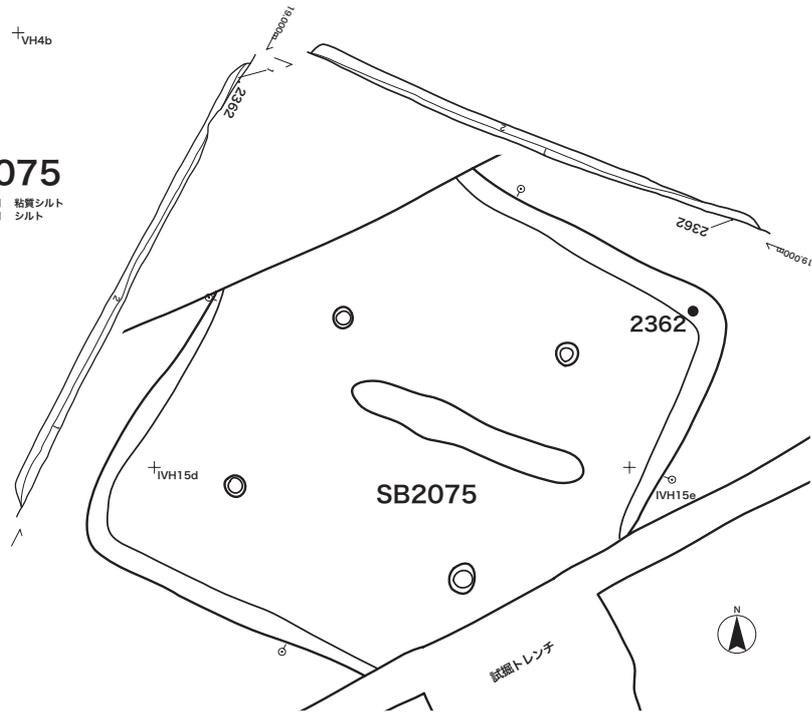
### SB2074

1. 2.5Y5/1 粘質シルト (炭化物・土器舎)
2. 5Y7/2 粘質シルト (炭化物舎)
3. 2.5Y4/1 粘質シルト (炭化物層)

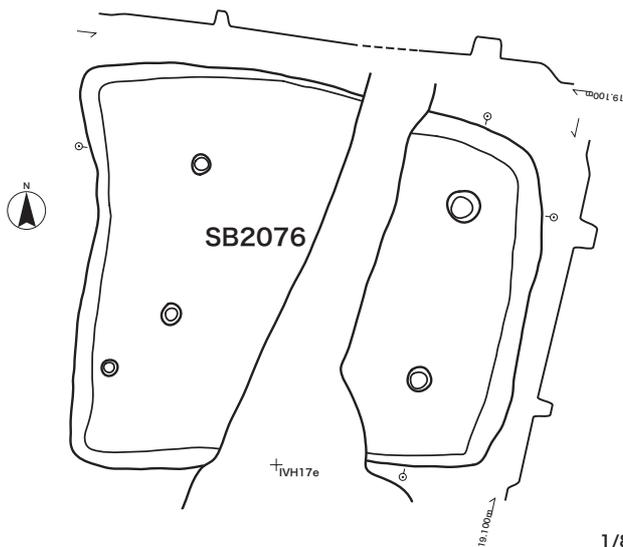


### SB2075

1. 1.10YR4/1 粘質シルト
2. 1.10YR4/1 シルト

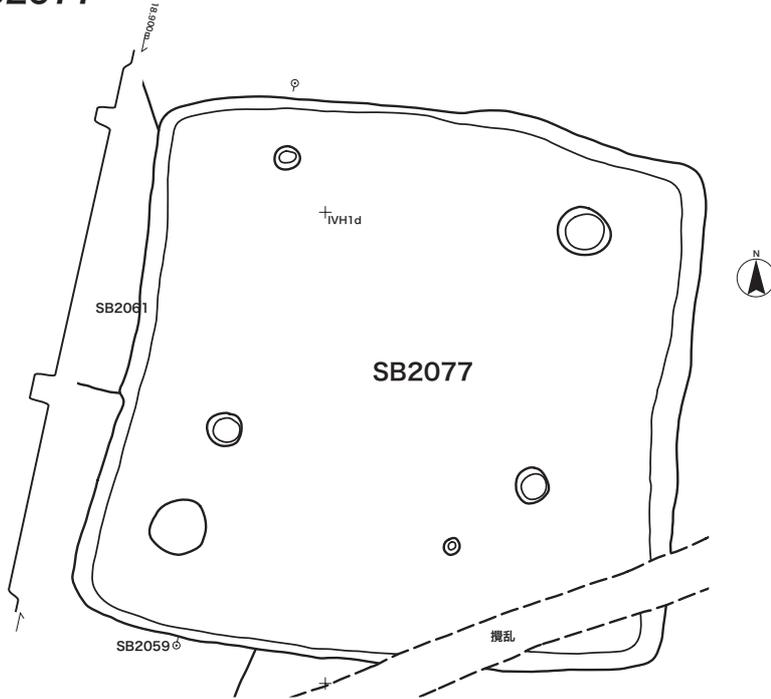


### SB2076

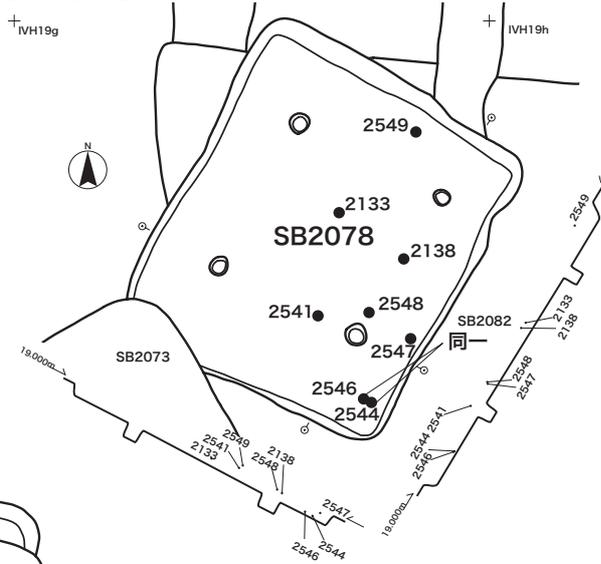


1/800 4m

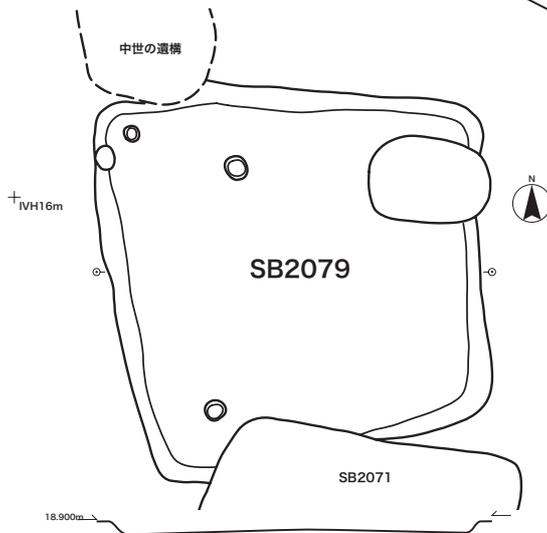
# SB2077



# SB2078

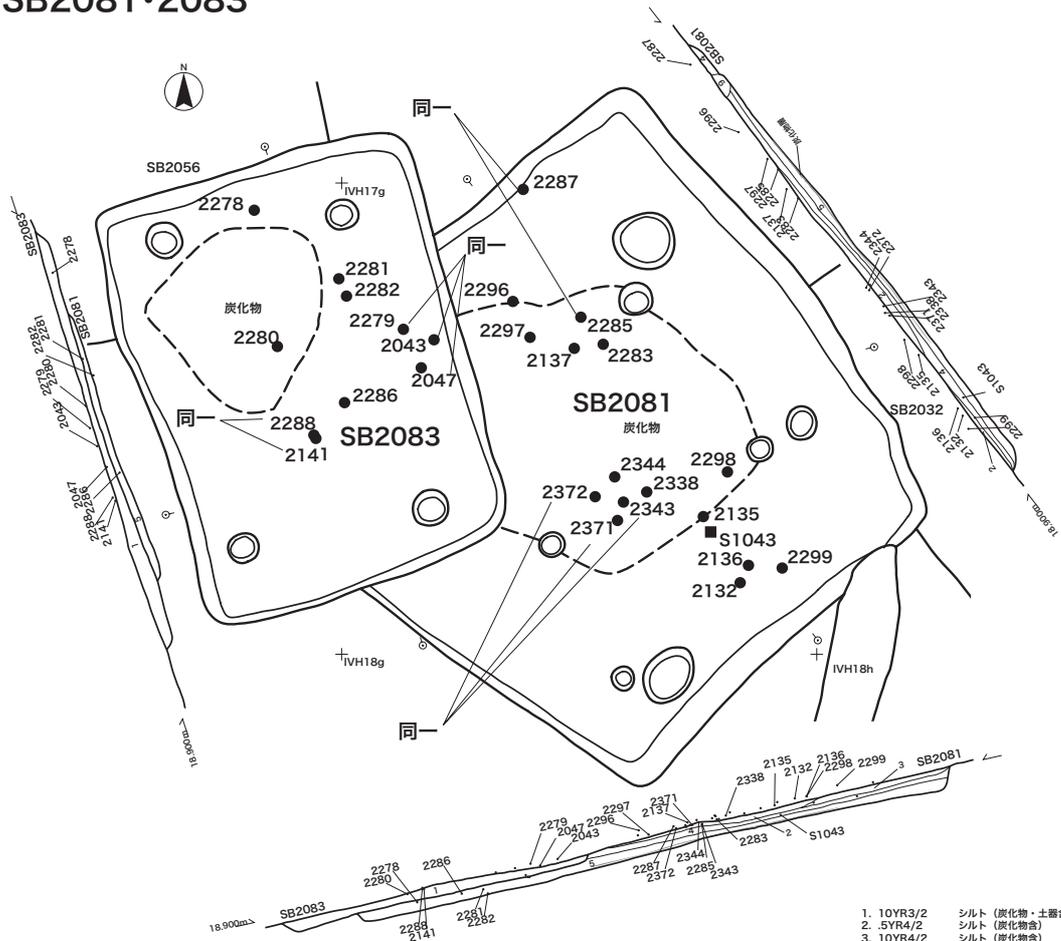


# SB2079



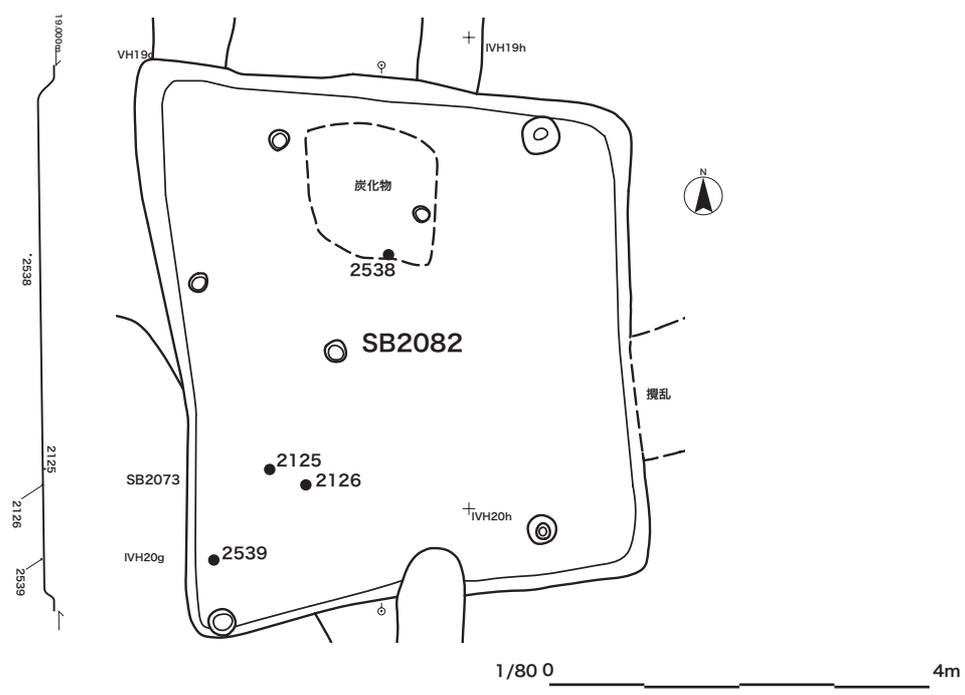
1/80 0 4m

# SB2081・2083

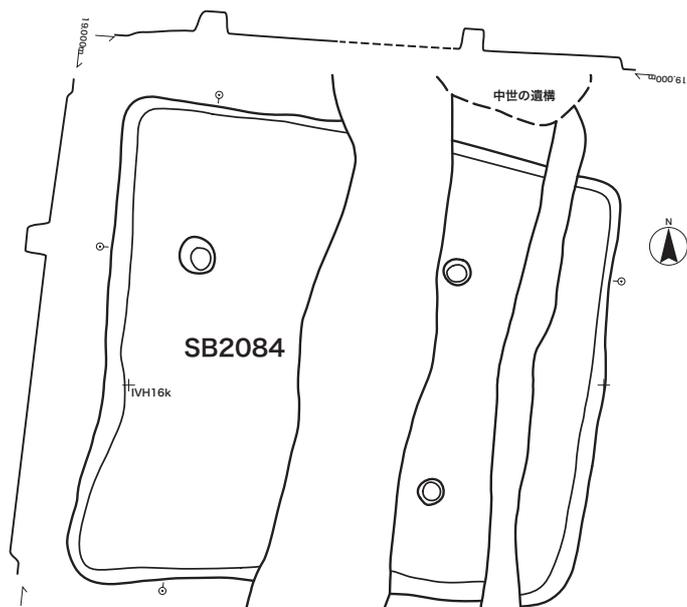


1. 10YR3/2 シルト (炭化物・土器含)
2. 5YR4/2 シルト (炭化物含)
3. 10YR4/2 シルト (炭化物含)
4. 10YR5/2 シルト (炭化物含)
5. 10YR4/1 粘質シルト (炭化物多量に含)
6. 2.5Y4/1 粘質シルト
7. 10YR4/1 粘質シルト (炭化物含)
8. 2.5Y4/1 粘質土 (炭化物含)
9. 10YR4/1 粘質土 (炭化物含)

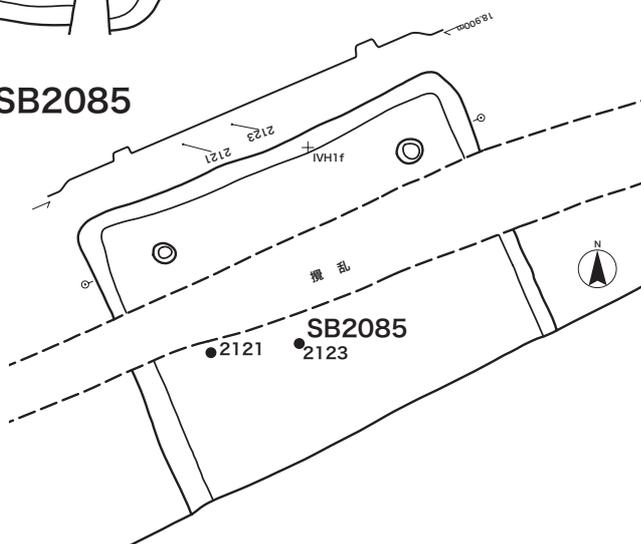
# SB2082



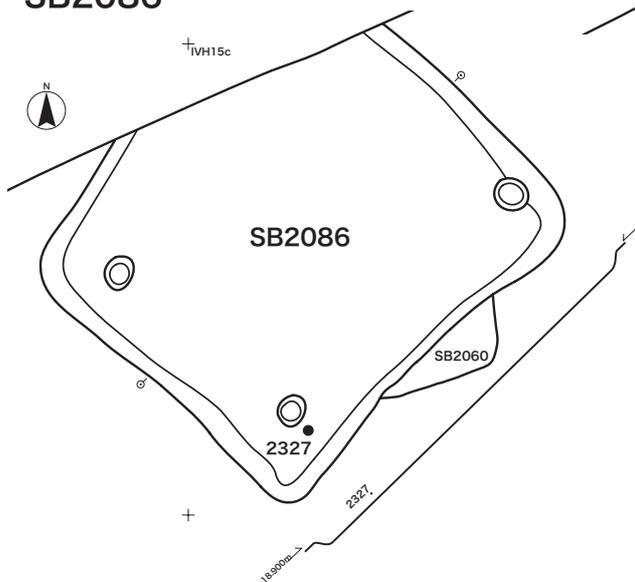
# SB2084



# SB2085

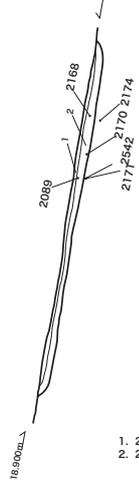
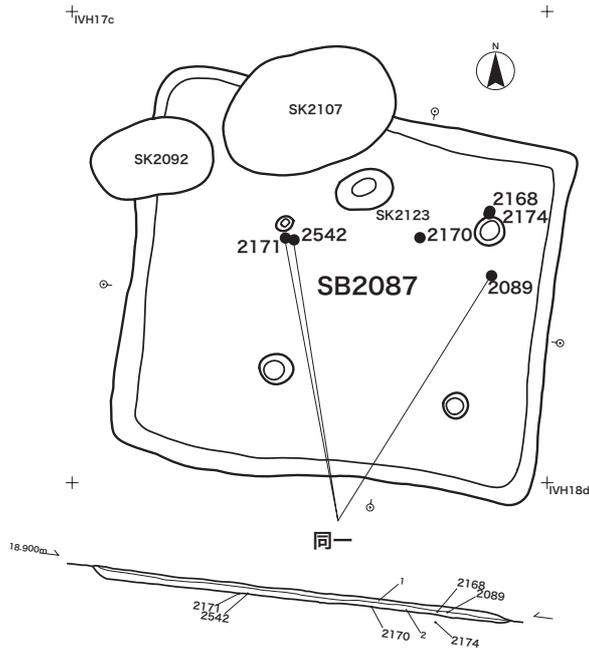


# SB2086



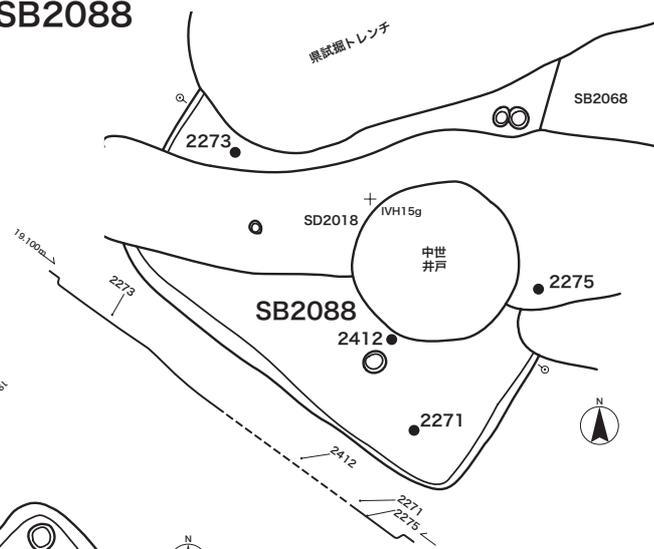
1/80 0 4m

# SB2087



1. 2.5Y4/2 シルト (2.5Y3/1 粘質シルト含、土器・炭化物含)
2. 2.5Y3/1 粘質シルト (土器・炭化物含)

# SB2088

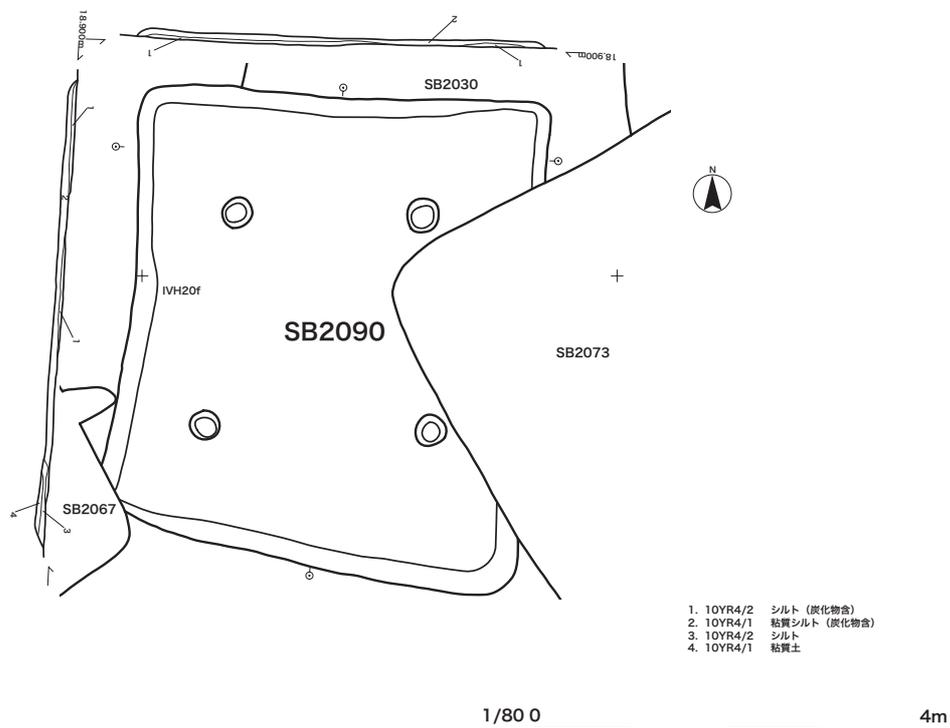


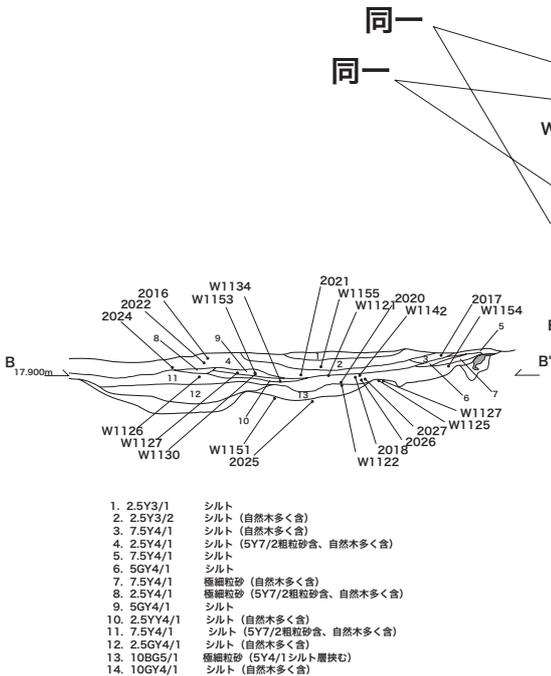
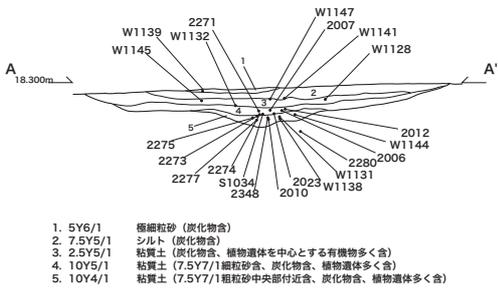
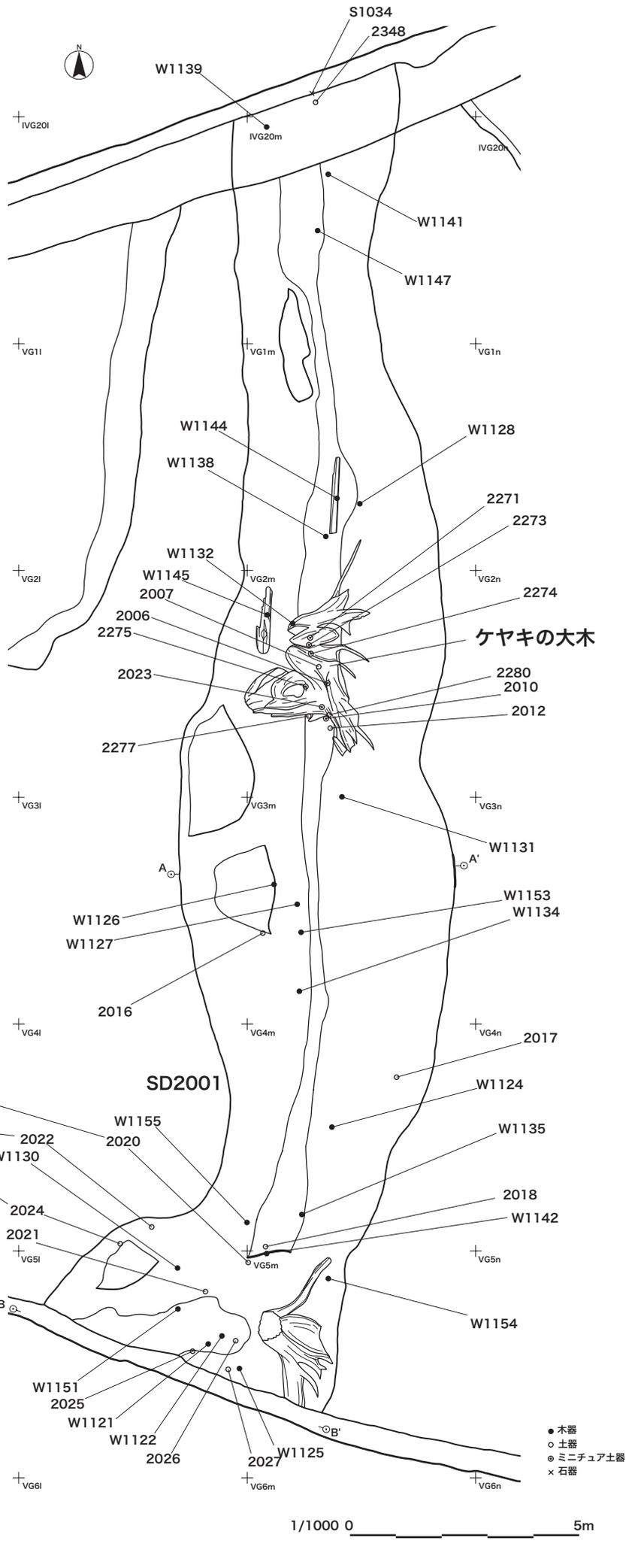
# SB2089



1/800 4m

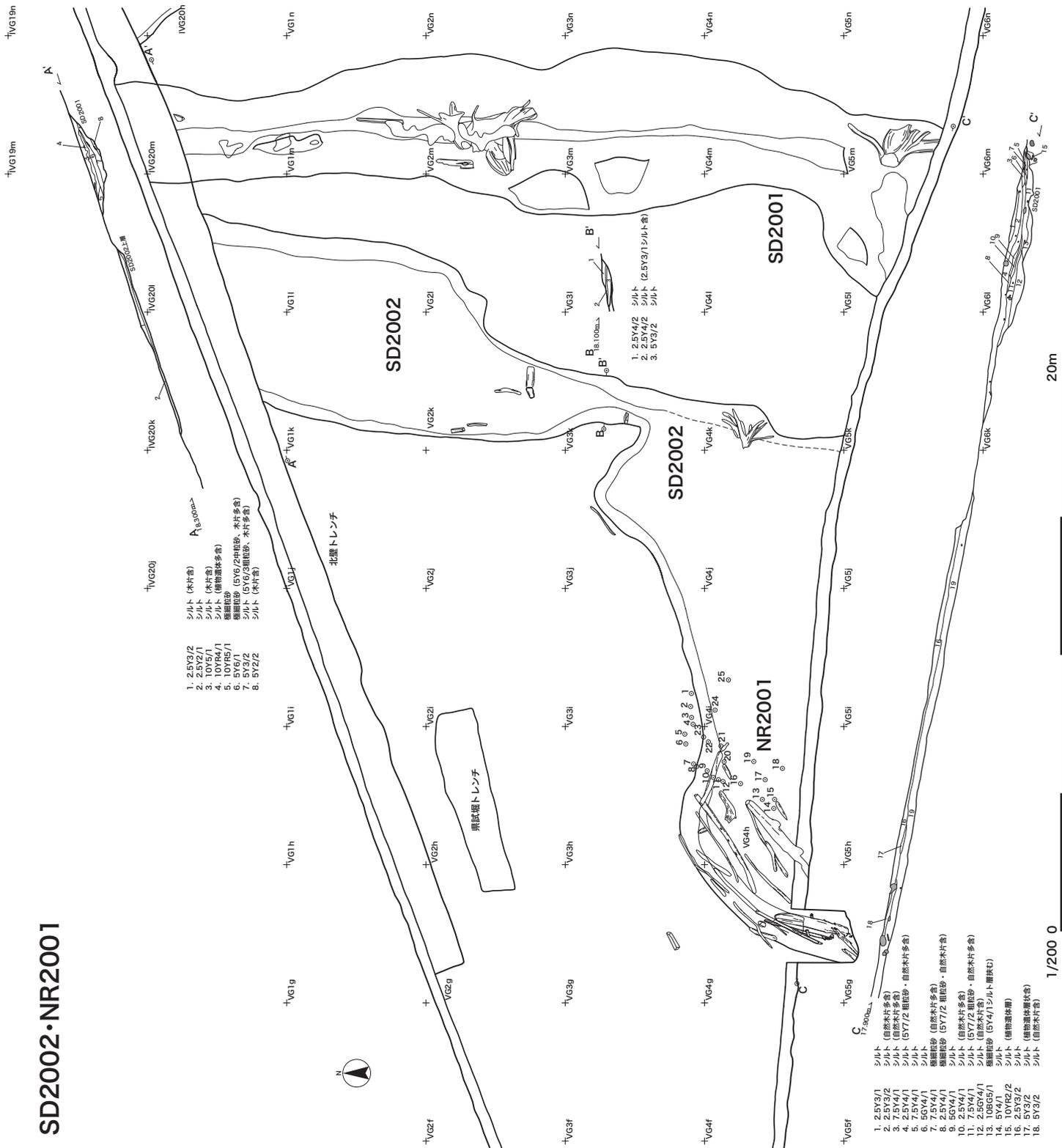
# SB2090



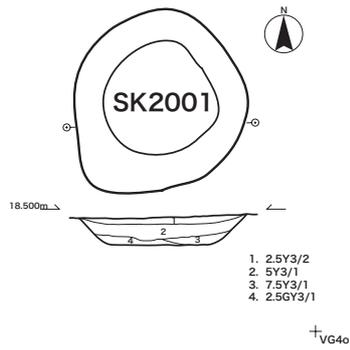


遺構図版 59 III期遺構図 (35)

# SD2002・NR2001

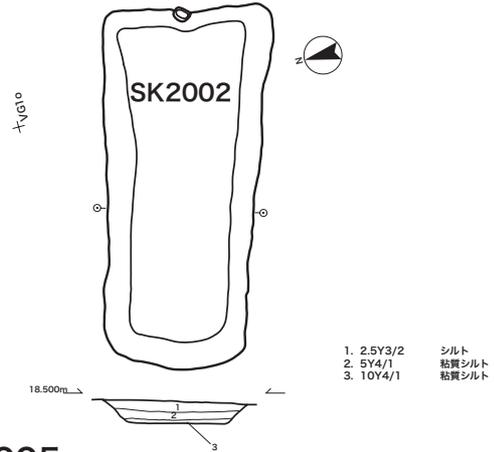


### SK2001



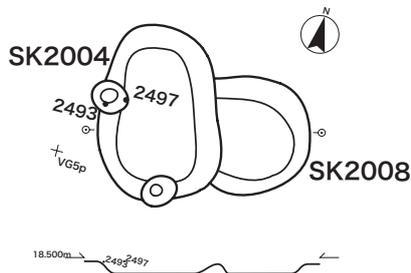
- 1. 2.5Y3/2 シルト (炭化物含む)
- 2. 5Y3/1 粘質シルト (炭化物含む)
- 3. 7.5Y3/1 粘質シルト (炭化物含む)
- 4. 2.5GY3/1 粘質シルト

### SK2002

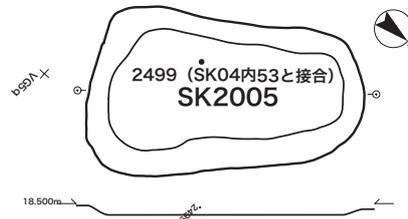


- 1. 2.5Y3/2 シルト
- 2. 5Y4/1 粘質シルト
- 3. 10Y4/1 粘質シルト

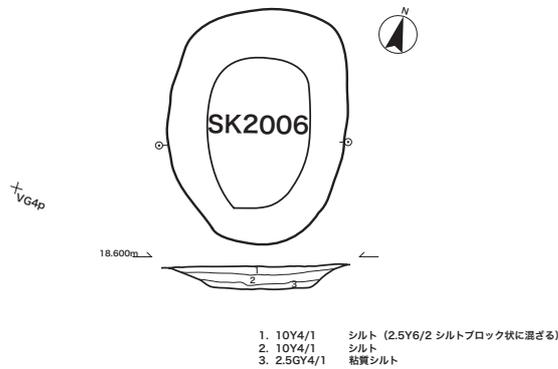
### SK2004・2008



### SK2005

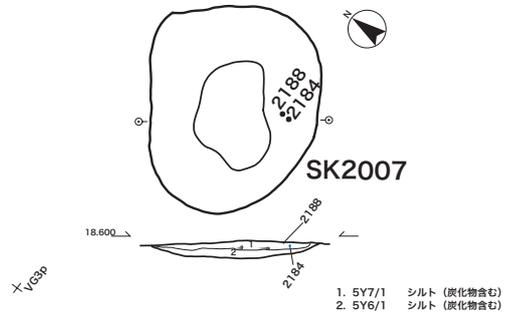


### SK2006



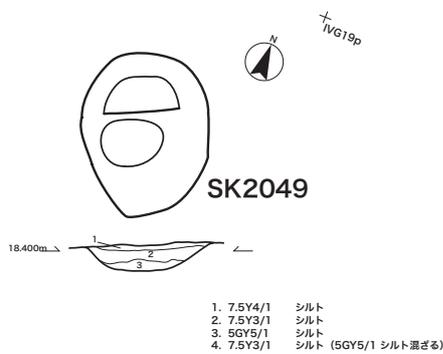
- 1. 10Y4/1 シルト (2.5Y6/2 シルトブロック状に混ざる)
- 2. 10Y4/1 シルト
- 3. 2.5GY4/1 粘質シルト

### SK2007



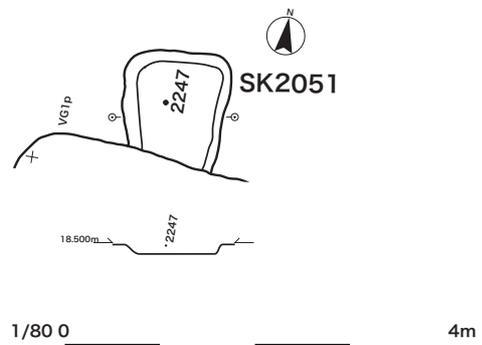
- 1. 5Y7/1 シルト (炭化物含む)
- 2. 5Y6/1 シルト (炭化物含む)

### SK2049



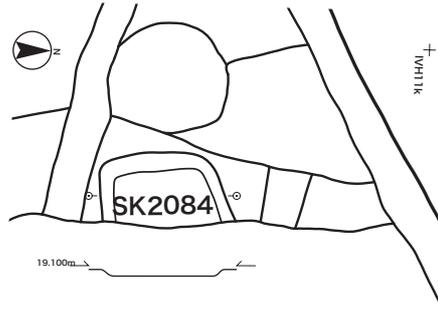
- 1. 7.5Y4/1 シルト
- 2. 7.5Y3/1 シルト
- 3. 5GY5/1 シルト
- 4. 7.5Y3/1 シルト (5GY5/1 シルト混ざる)

### SK2051

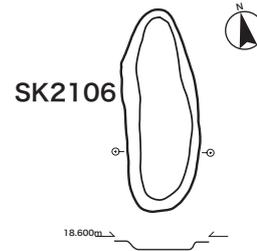


1/80 0 4m

# SK2084



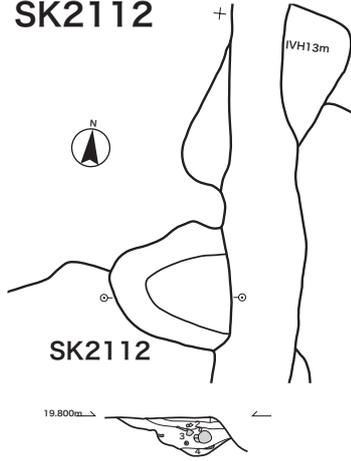
# SK2106



IVH17c

1/80 0 4m

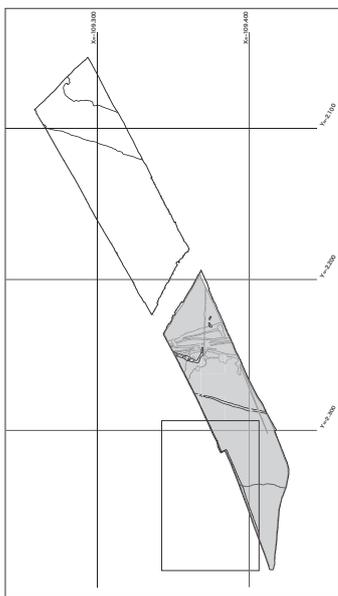
# SK2112



1. 2.5V5/2 シルト (2.5V4/1 シルト、炭化物含)
  2. 2.5Y3/1 粘質シルト (土器・炭化物含)
  3. 5Y2/1 粘質シルト (土器・炭化物多く含)
  4. 5Y3/1 粘質シルト
- (炭化物含、第3層との境界に一部粘土と炭化物のある部分あり)  
 \*第1~3層に約2mm~10mm程の層が混ざる

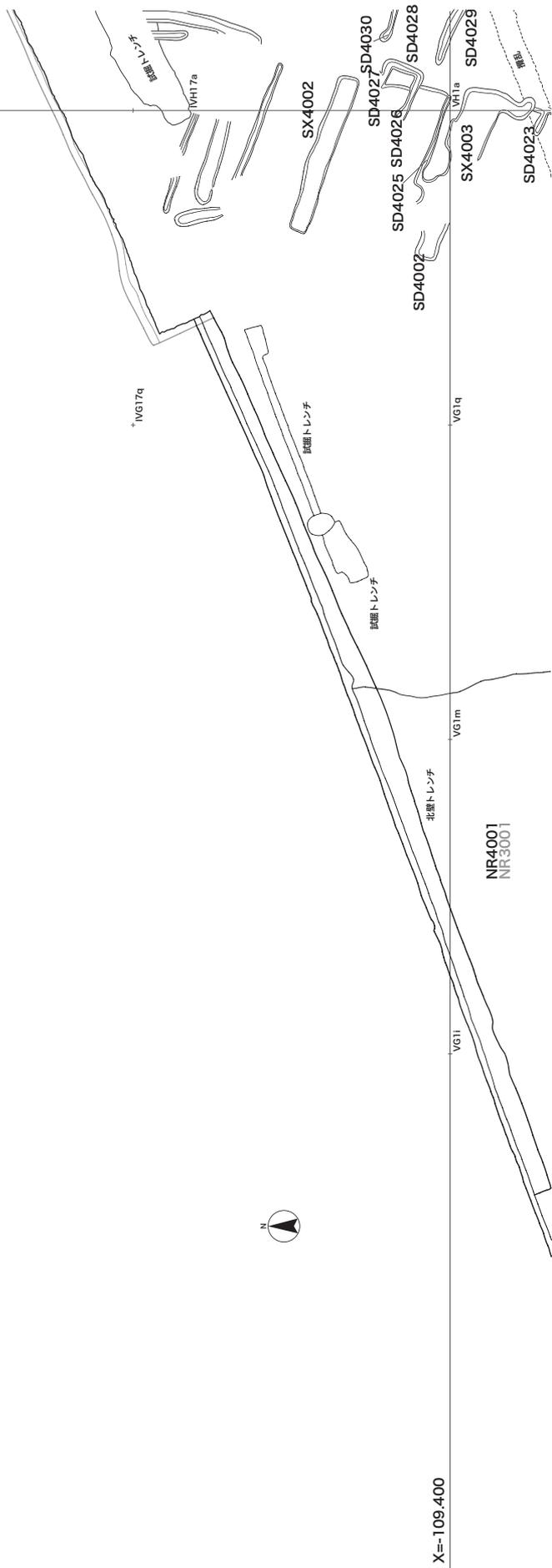


1/400 0 40m

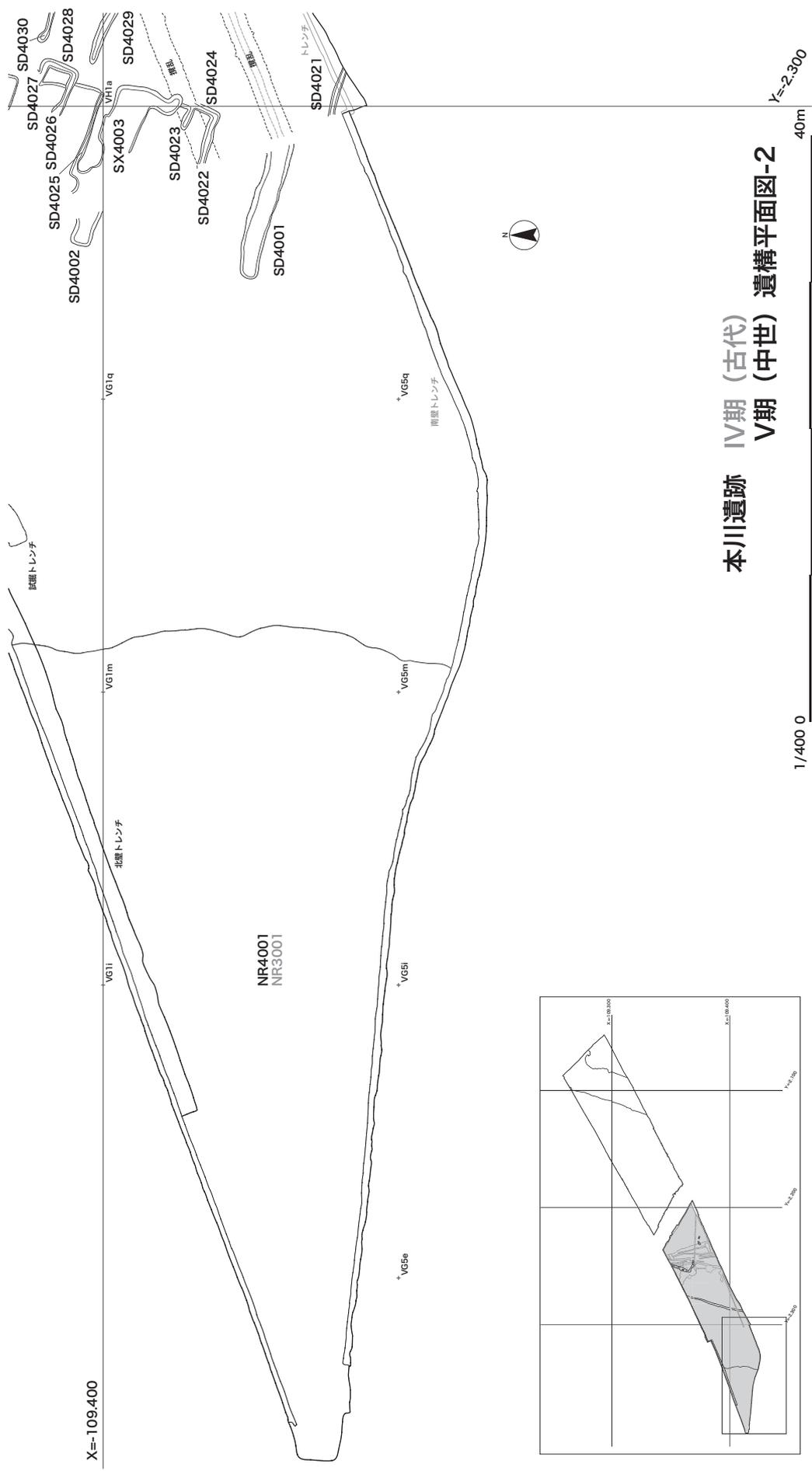


# 本川遺跡 IV (古代) 遺構平面図-1 V (中世) 遺構平面図-1

Y=2,300



X=-109,400



本川遺跡 IV期 (古代)  
V期 (中世) 遺構平面図-2

1/400 0

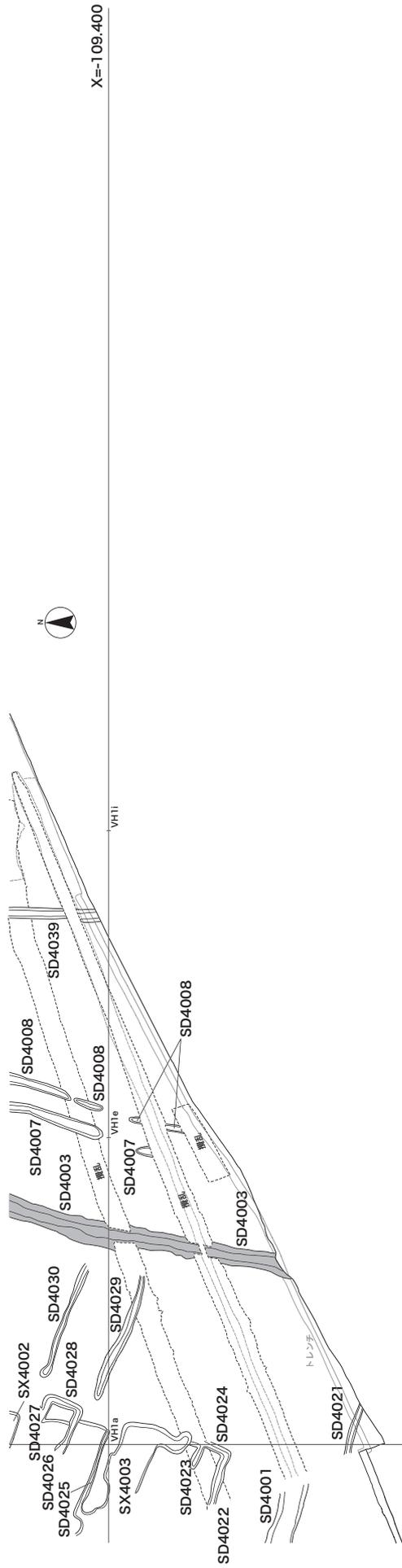
40m

Y=2,300

X=-109,400

遺構図版 65 IV・V期遺構分割図(2)





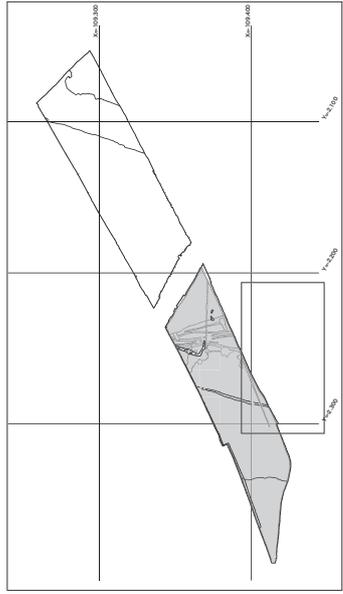
X=-109.400

本川遺跡 IV期 (古代)  
V期 (中世) 遺構平面図-4

Y=2.300

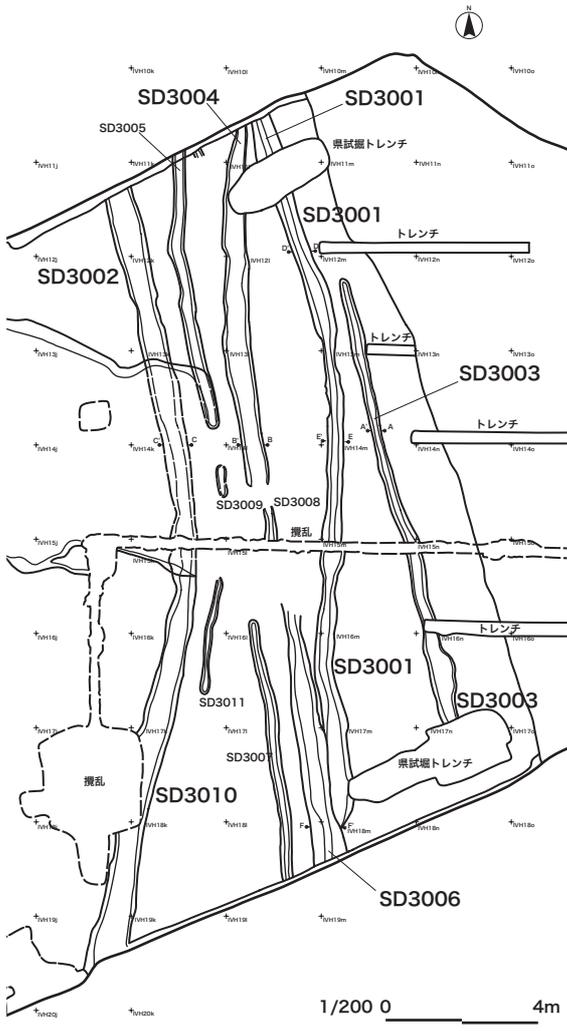
1/400 0

40m



遺構図版 67 IV・V期遺構分割図(4)

# SD3001~3011



## SD3003



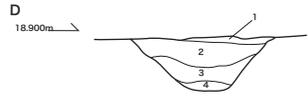
## SD3004



## SD3010

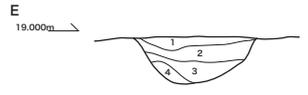


## SD3001



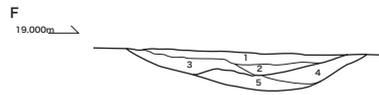
1. 2.5Y4/1 シルト (2.5Y6/2 シルトの斑土、炭化物含)
2. 5Y4/1 シルト (炭化粒・土器含)
3. 5Y3/1 粘質土 (炭化粒含)
4. 7.5Y3/1 細粒砂

## SD3001



1. 2.5Y4/1 シルト (2.5Y6/2 シルトの斑土、炭化物・土器含)
2. 5Y4/1 シルト (炭化粒・土器含)
3. 2.5Y3/1 粘質土 (炭化粒含)
4. 2.5Y6/3 中粒砂

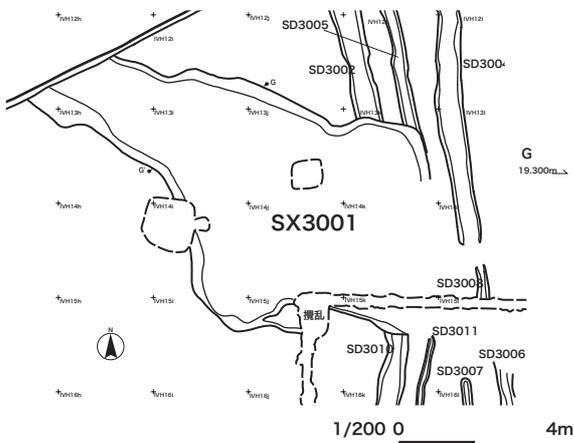
## SD3006



1. 7.5Y6/1 粘質土 (炭化物多く含)
2. 7.5Y6/1 粘質土 (N4/1粘質土含)
3. N4/1 粘質土 (7.5Y6/2 シルト含)
4. N4/1 粘質土
5. 7.5Y6/2 シルト

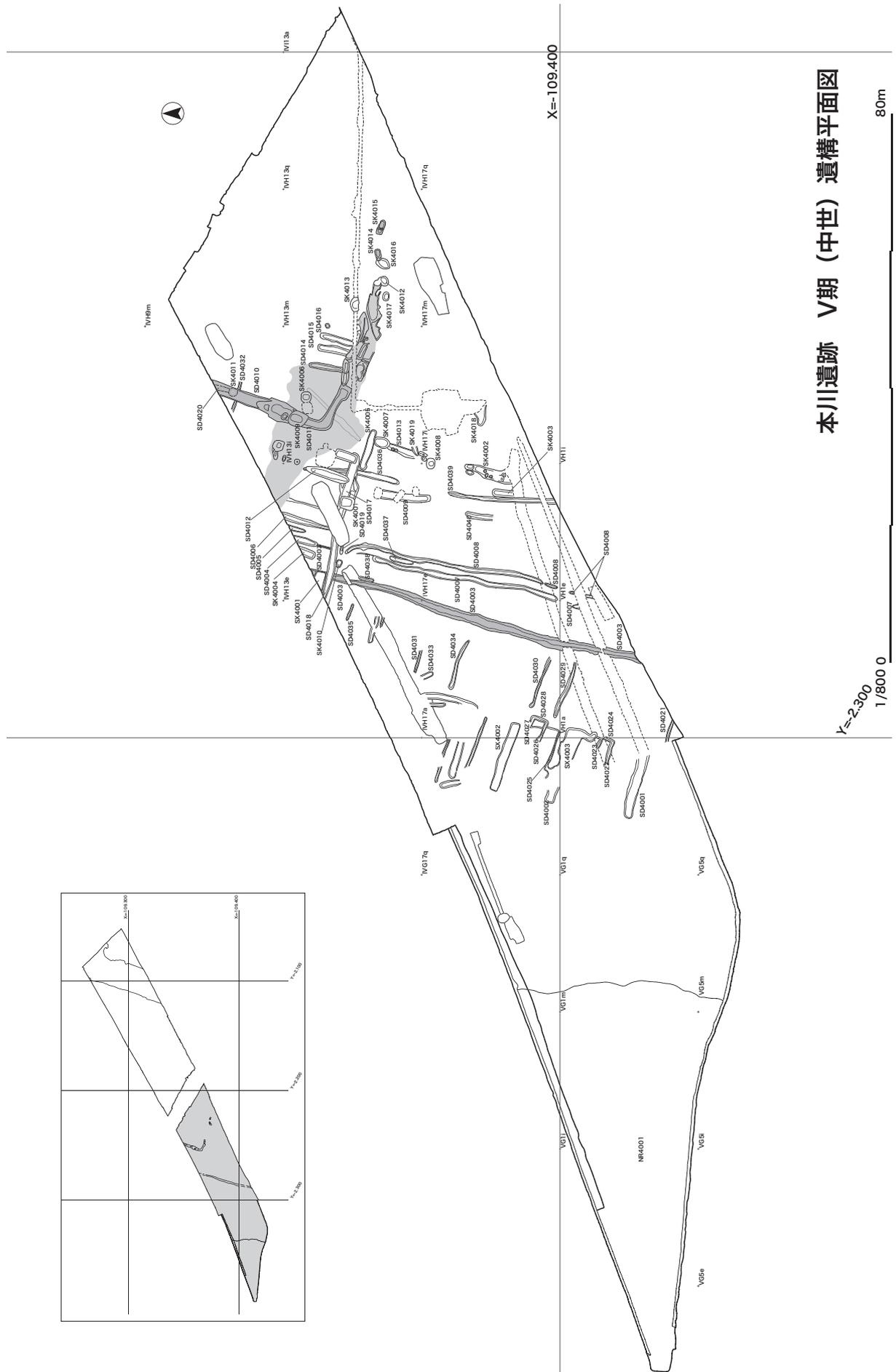
1/50 0 1m

# SX3001



1. 5YR6/1 極細粒砂
2. 5YR5/1 シルト
3. 5YR6/1 極細粒砂
4. 5YR6/1 極細粒砂

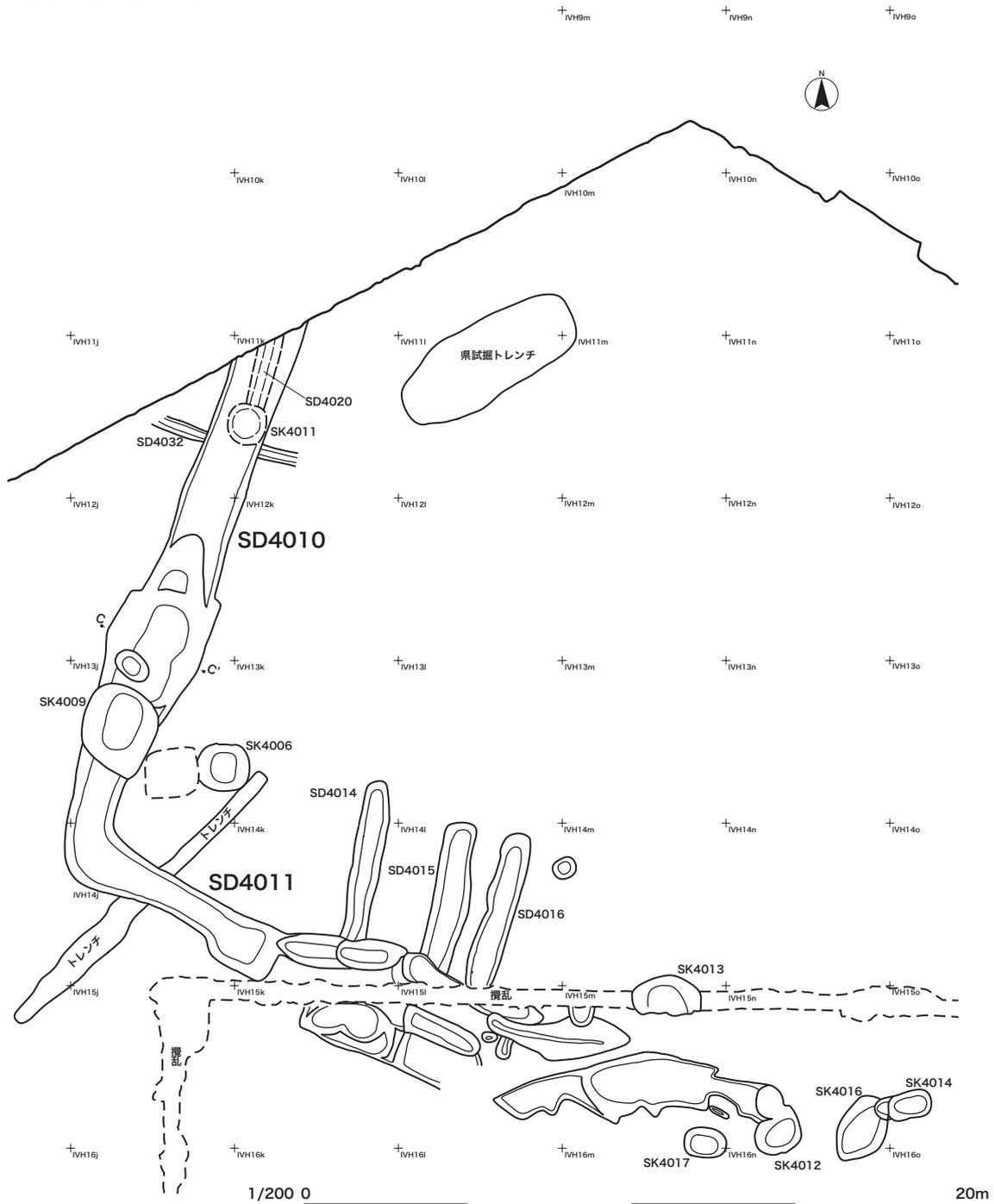
1/100 0 2m



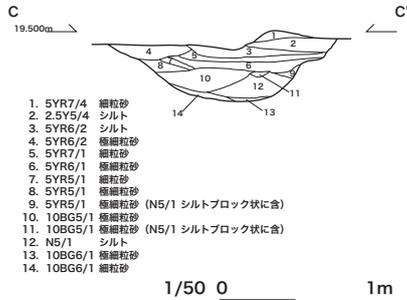
本川遺跡 V期 (中世) 遺構平面図

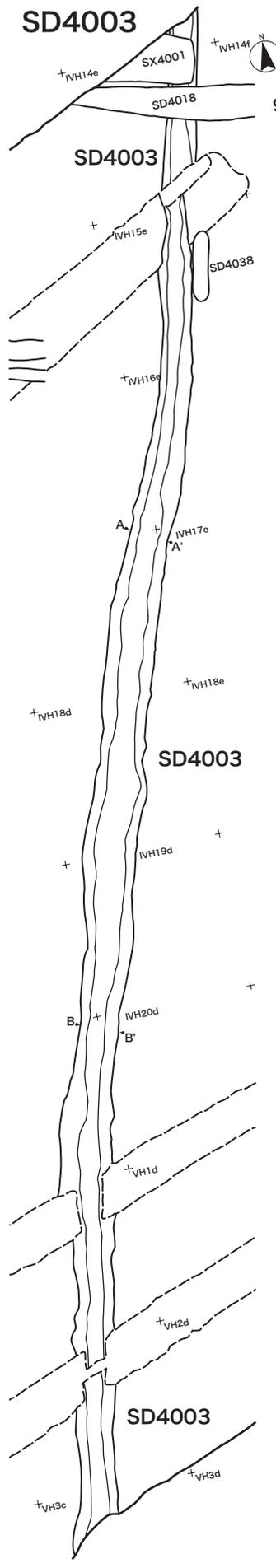
遺構図版 69 V期遺構全体図

# SD4010・4011

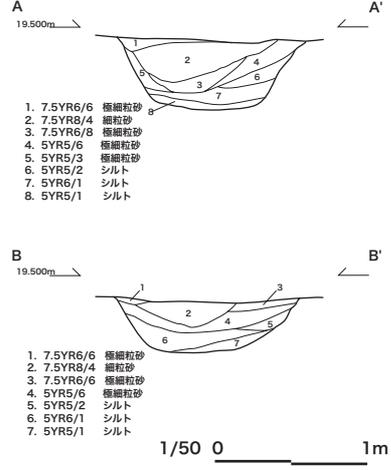


## 98B SD4010

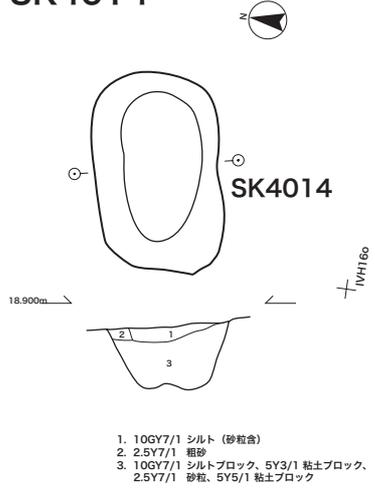




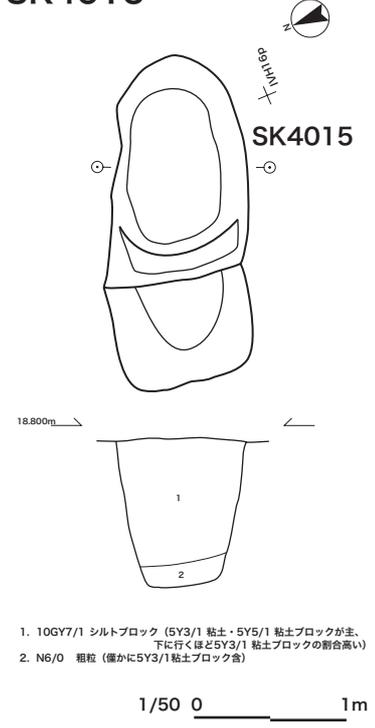
**98B SD4003**

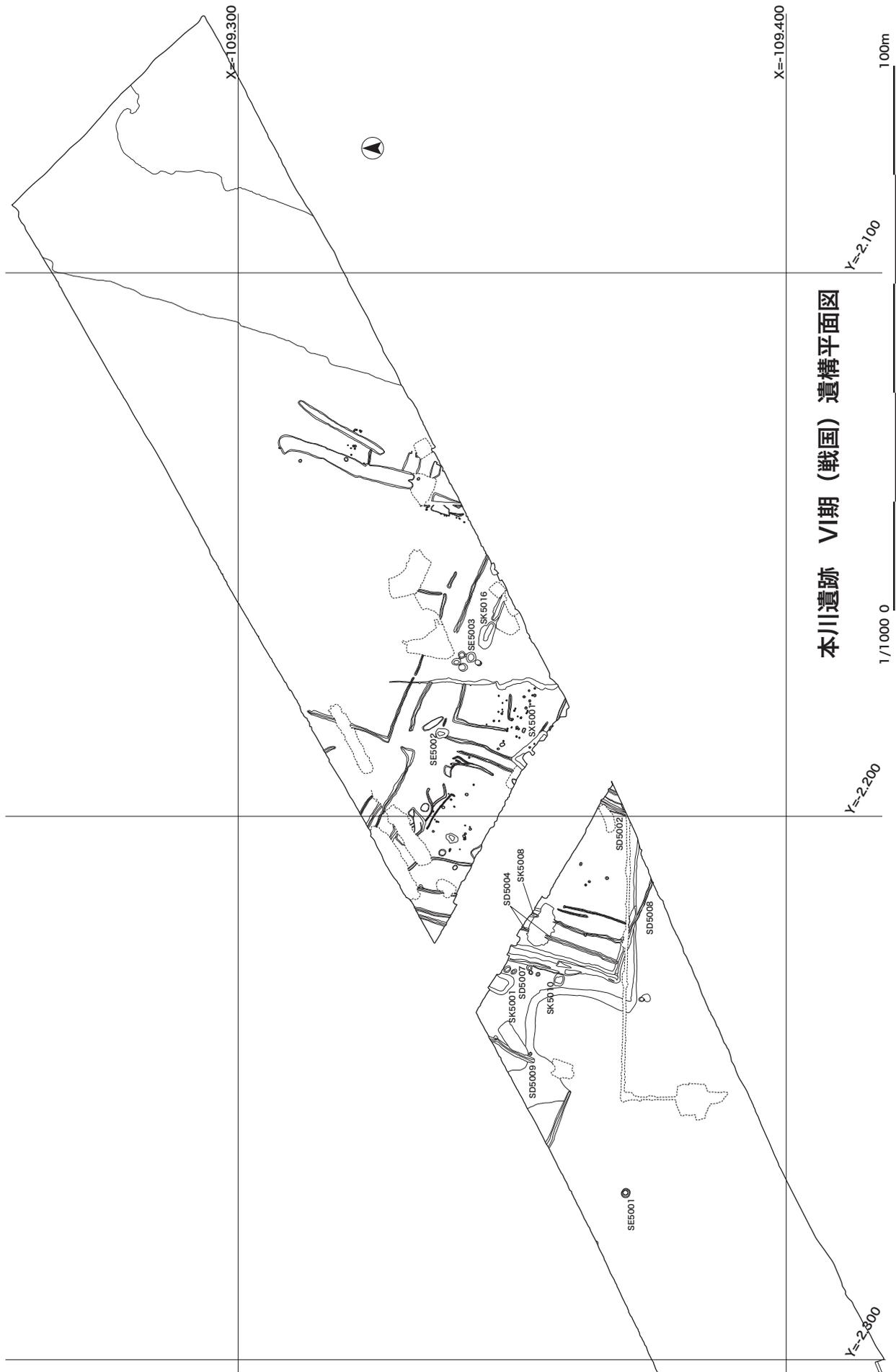


**SK4014**

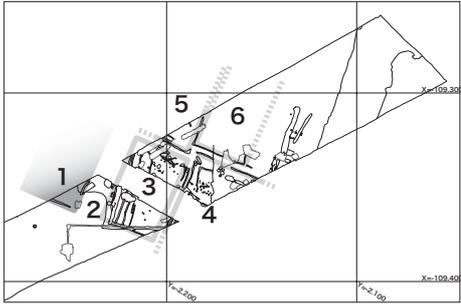


**SK4015**

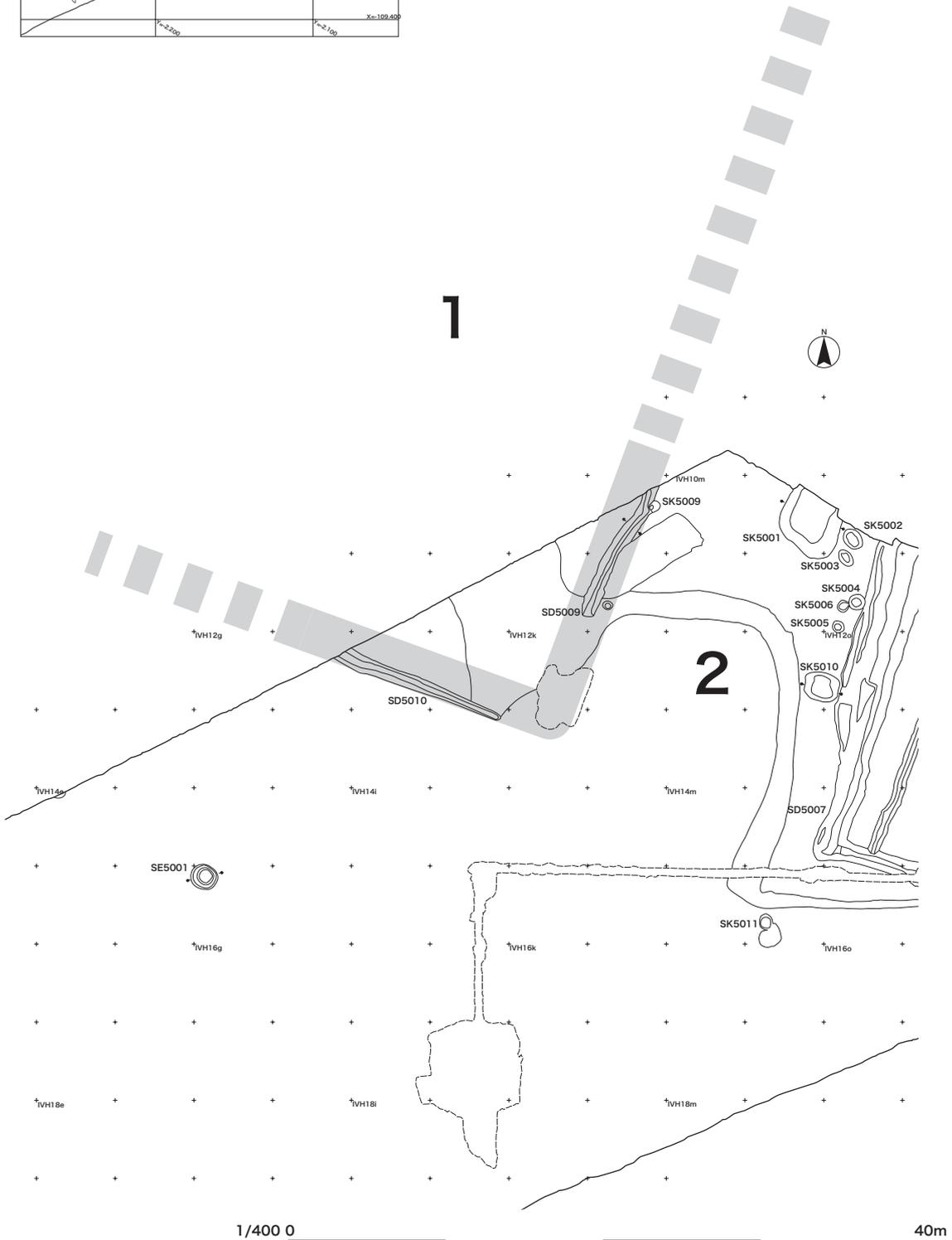


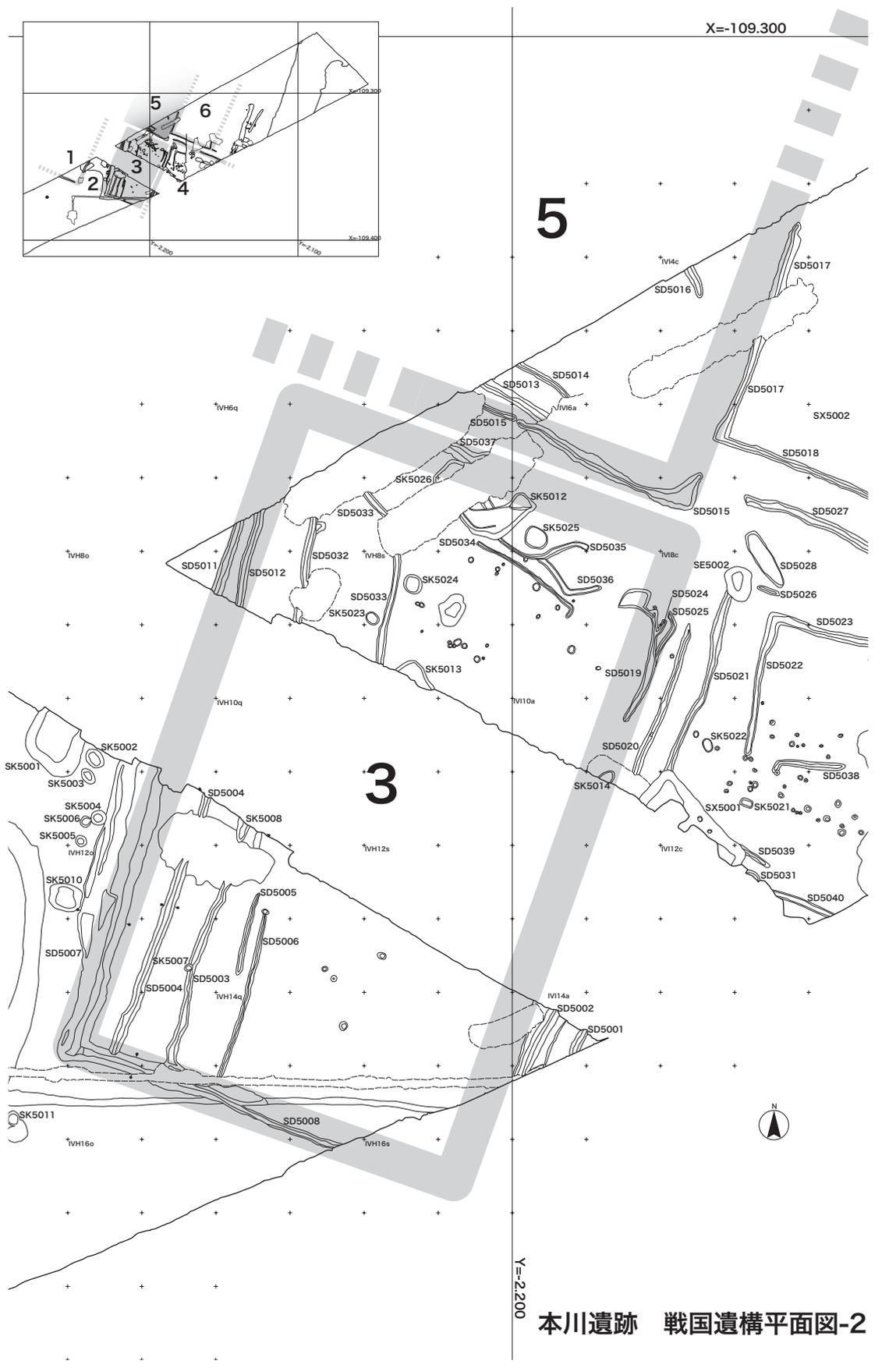


遺構図版 72 VI期遺構全体図



本川遺跡 戦国遺構平面図-1

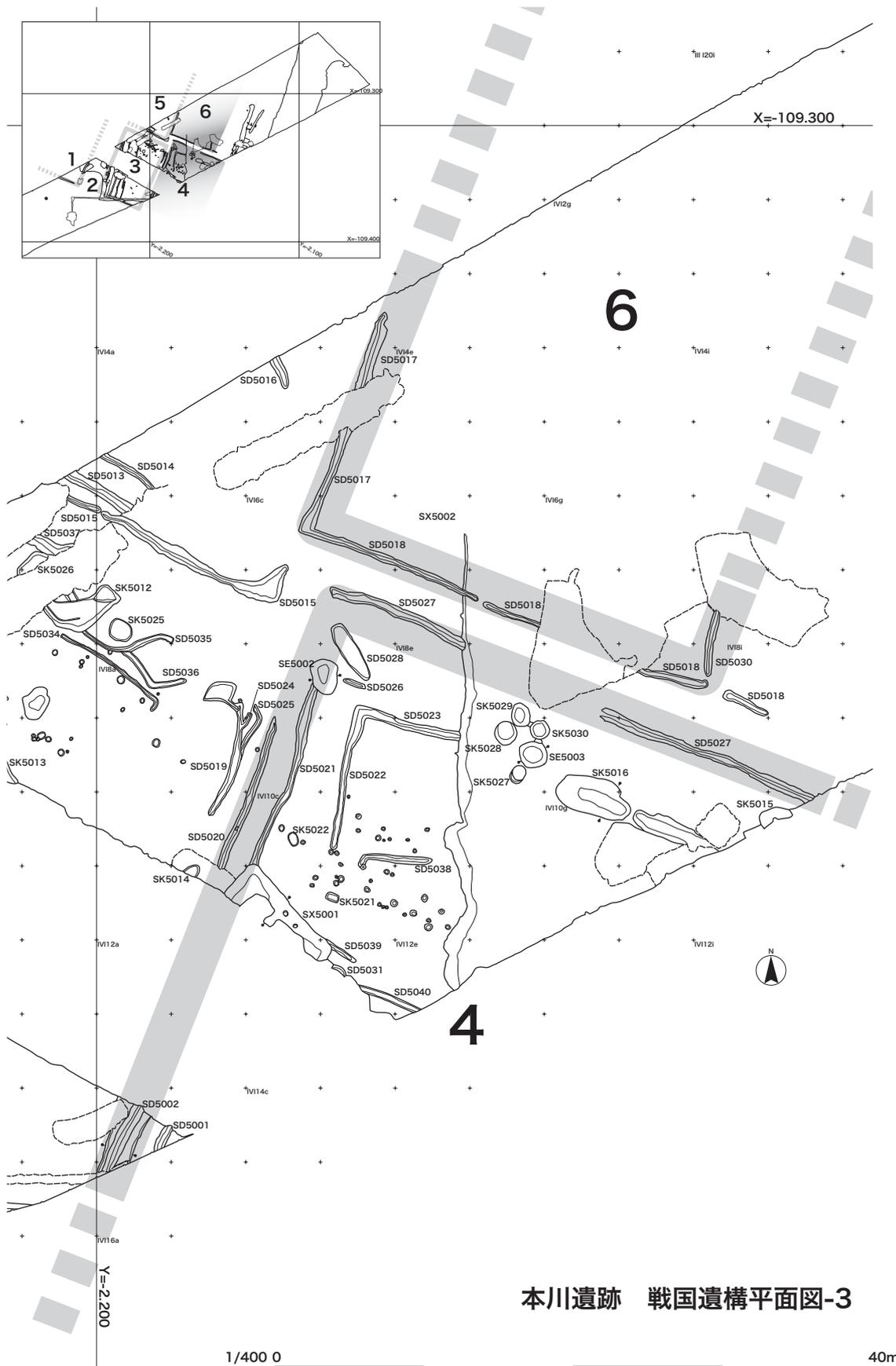




本川遺跡 戦国遺構平面図-2

1/4000

40m

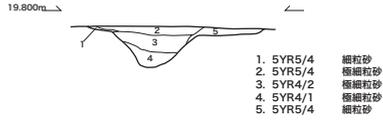


本川遺跡 戦国遺構平面図-3

1/400 0

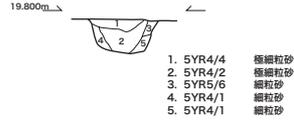
40m

### SD5002



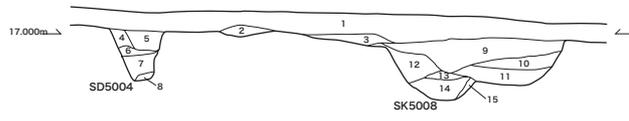
- 1. 5YR5/4 極細粒砂
- 2. 5YR5/4 極細粒砂
- 3. 5YR4/2 極細粒砂
- 4. 5YR4/1 極細粒砂
- 5. 5YR5/4 極細粒砂

### SD5004



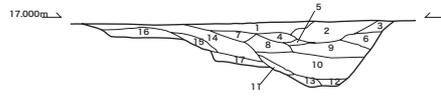
- 1. 5YR4/4 極細粒砂
- 2. 5YR4/2 極細粒砂
- 3. 5YR5/6 極細粒砂
- 4. 5YR4/1 極細粒砂
- 5. 5YR4/1 極細粒砂

### SD5004・SK5008



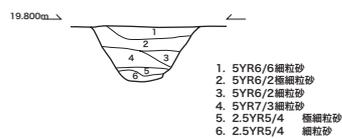
- 1. 5YR3/4 極細粒砂 (表土)
- 2. 5YR3/4 極細粒砂 (炭化物含)
- 3. 5YR3/4 極細粒砂 (炭化物含)
- 4. 5YR4/4 極細粒砂
- 5. 5YR4/4 極細粒砂
- 6. 5YR4/2 極細粒砂
- 7. 5YR5/1 極細粒砂
- 8. 5YR6/1 極細粒砂
- 9. 5YR4/4 極細粒砂
- 10. 5YR4/3 極細粒砂
- 11. 5YR4/2 極細粒砂
- 12. 5YR3/2 極細粒砂
- 13. 5YR7/2 極細粒砂
- 14. 5YR2/1 極細粒砂
- 15. 5YR4/8 極細粒砂

### SD5007



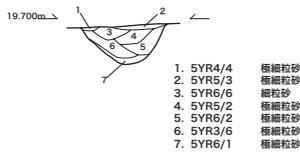
- 1. 5YR5/6 極細粒砂
- 2. 5YR6/6 極細粒砂
- 3. 5YR7/6 極細粒砂
- 4. 5YR5/4 極細粒砂
- 5. 5YR6/4 極細粒砂
- 6. 5YR6/4 極細粒砂
- 7. 5YR6/4 極細粒砂
- 8. 5YR4/3 極細粒砂
- 9. 5YR4/4 極細粒砂
- 10. 5YR3/4 極細粒砂
- 11. 5YR3/4 極細粒砂
- 12. 5YR5/1 極細粒砂
- 13. 5YR6/1 極細粒砂
- 14. 5YR7/3 極細粒砂
- 15. 5YR8/2 極細粒砂
- 16. 5YR8/1 極細粒砂
- 17. 5YR4/1 極細粒砂

### SD5008



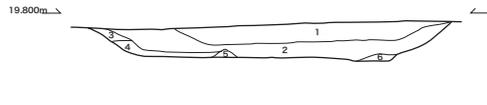
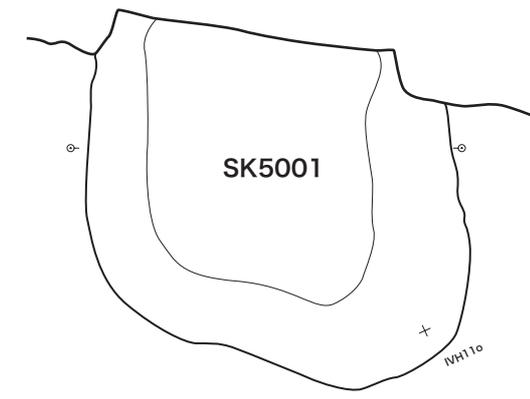
- 1. 5YR6/6 極細粒砂
- 2. 5YR6/2 極細粒砂
- 3. 5YR6/2 極細粒砂
- 4. 5YR7/3 極細粒砂
- 5. 2.5YR5/4 極細粒砂
- 6. 2.5YR5/4 極細粒砂

### SD5009



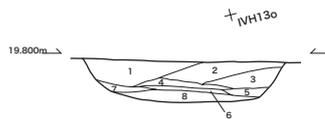
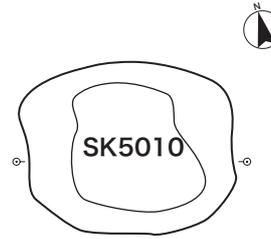
- 1. 5YR4/4 極細粒砂
- 2. 5YR5/3 極細粒砂
- 3. 5YR6/6 極細粒砂
- 4. 5YR5/2 極細粒砂
- 5. 5YR6/2 極細粒砂
- 6. 5YR3/6 極細粒砂
- 7. 5YR6/1 極細粒砂

### SK5001



- 1. 5YR4/3 極細粒砂
- 2. 5YR4/2 極細粒砂
- 3. 5YR4/2 シルト
- 4. 5YR2/4 極細粒砂
- 5. 5YR5/1 シルト
- 6. 5YR2/4 極細粒砂

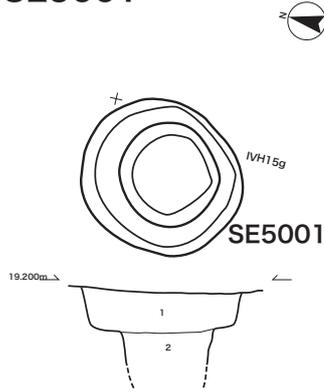
### SK5010



- 1. 7.5YR6/6 極細粒砂
- 2. 7.5YR5/3 極細粒砂
- 3. 7.5YR6/4 極細粒砂
- 4. 5YR7/2 極細粒砂 (炭化物含)
- 5. 10R5/6 極細粒砂
- 6. 5YR5/3 極細粒砂
- 7. 5YR6/1 極細粒砂
- 8. 2.5YR6/3 極細粒砂

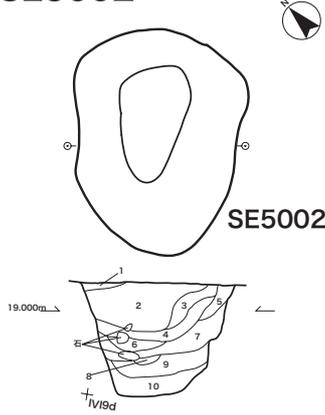
1/80 0 4m

### SE5001



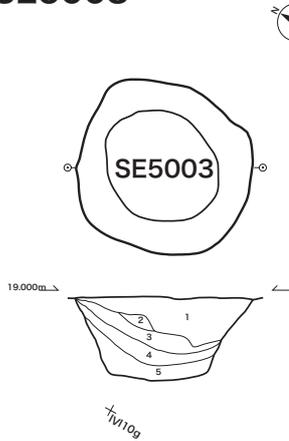
- 1. 5YR5/2 シルト (2.5Y4/2
- 2. 10BG5/1 極細粒砂 シルトをブロック状に含)

### SE5002



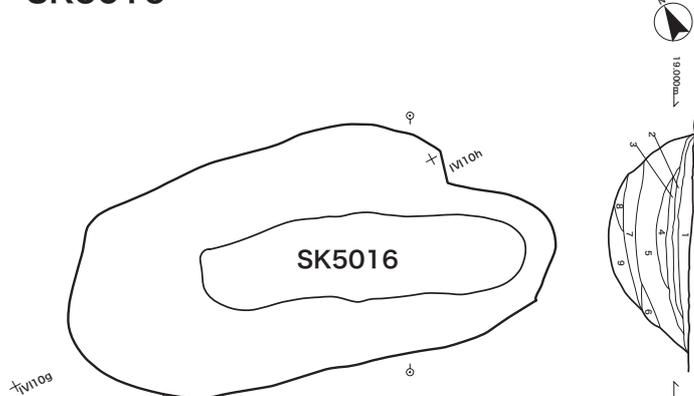
- 1. 10YR4/3 極細粒砂
- 2. 5Y3/1 極細粒砂
- 3. 2.5Y4/2 極細粒砂、2.5Y3/2 シルト、5Y3/1 粘土、5Y2/1 シルトなどの珪土
- 4. 5Y3/2 極細粒砂
- 5. 5Y2/2 粘土、5Y3/2 粘土などの珪土
- 6. 5Y4/1 細粒砂 (5Y3/1 粘土ブロック含)
- 7. 5Y4/1 シルト、7.5Y3/1 粘土、7.5Y4/1 細粒砂などの珪土
- 8. 7.5Y3/1 細粒砂
- 9. 7.5Y 細粒砂、5Y3/2 細粒砂、2.5Y4/2 細粒砂などの流水堆積
- 10. 5Y4/1 細粒砂

### SE5003



- 1. 5Y4/2 細粒砂
- 2. 7.5Y4/1 細粒砂
- 3. 5Y3/1 細粒砂
- 4. 7.5Y3/1 細粒砂
- 5. 5Y4/1 細粒砂

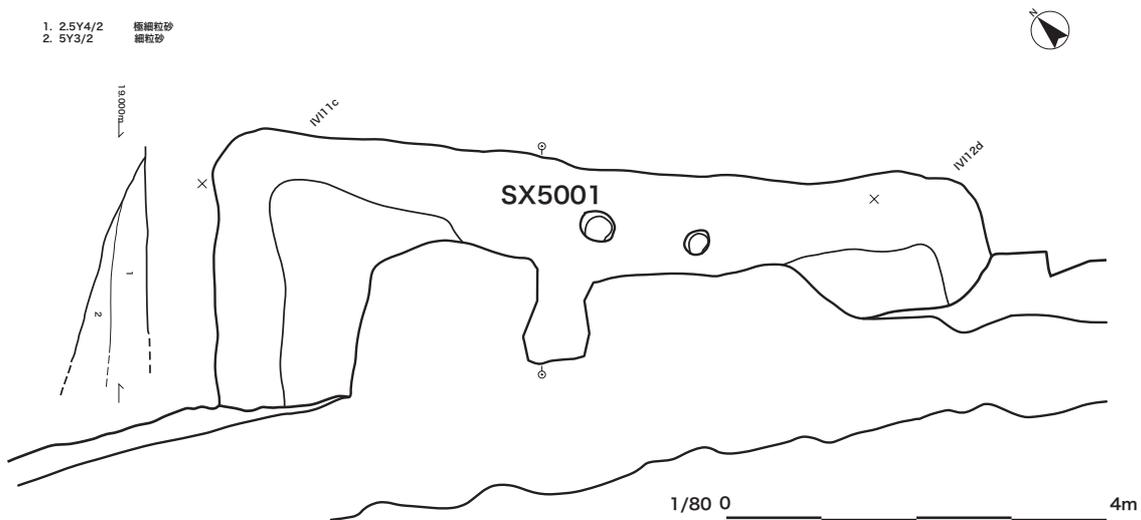
### SK5016



- 1. 2.5Y3/2 極細粒砂
- 2. 5Y4/1 極細粒砂
- 3. 2.5Y4/1 極細粒砂
- 4. 10YR4/1 極細粒砂
- 5. 5Y3/1 シルト
- 6. 2.5Y4/2 極細粒砂
- 7. 7.5Y4/1 極細粒砂
- 8. 7.5Y3/1 シルト
- 9. 5Y4/1 細粒砂

### SX5001

- 1. 2.5Y4/2 極細粒砂
- 2. 5Y3/2 細粒砂



SD41



SD48



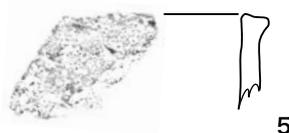
SD47



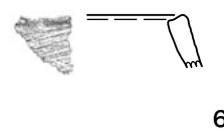
SK60



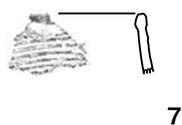
SK61



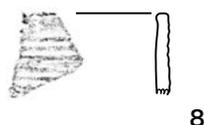
SK68



SK69



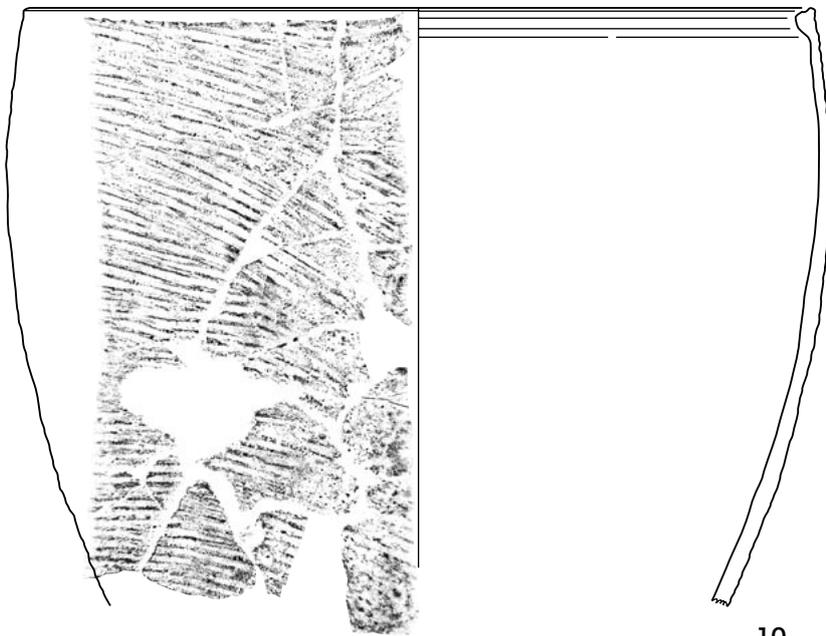
SK79



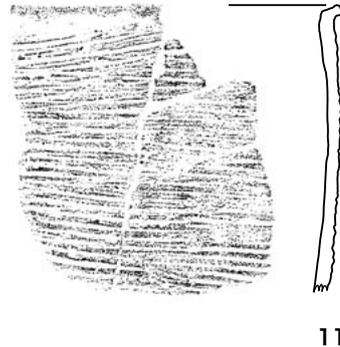
SX01



SX02



検出III

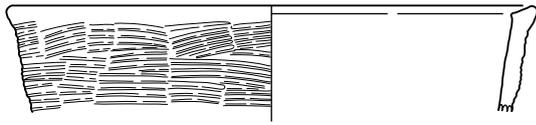


検出IV

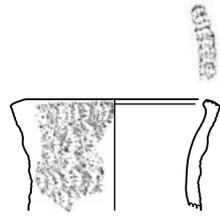


1/40 20cm

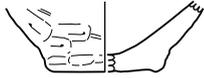
NR02



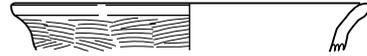
14



19



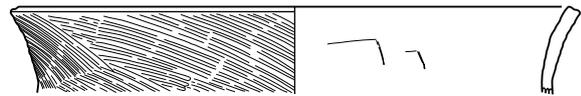
15



17

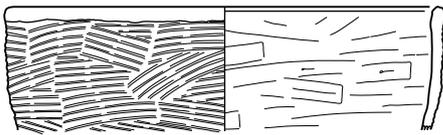


16



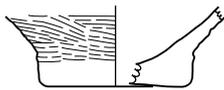
18

NR1002



20

SB1005



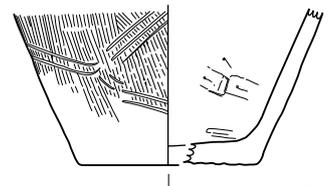
12

SB2037



21

SB2075



24

SB2045



22

SB2048



23



1/4 0 20cm

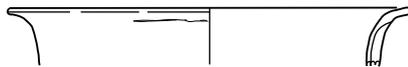
SB1005



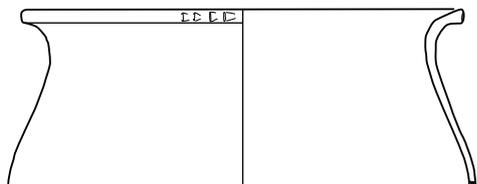
26



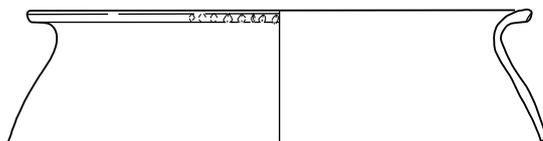
27



28

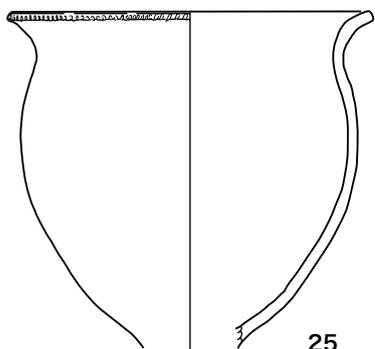


29



30

SB1002



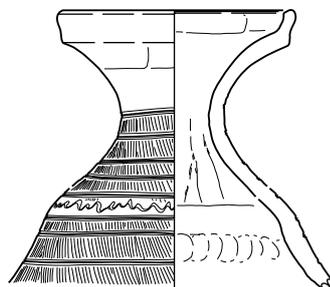
25

SK1003



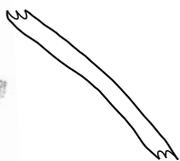
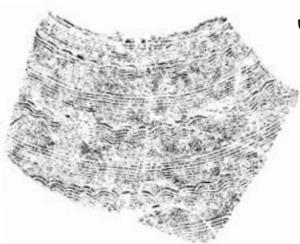
31

SK1006



32

SK1028

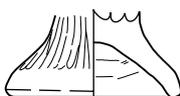


33

SK1045



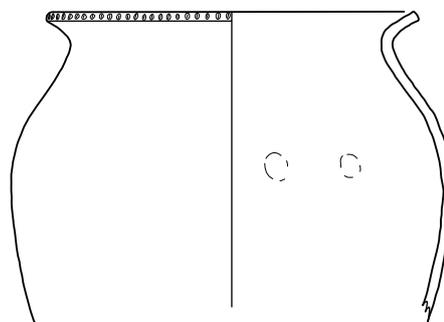
34



36

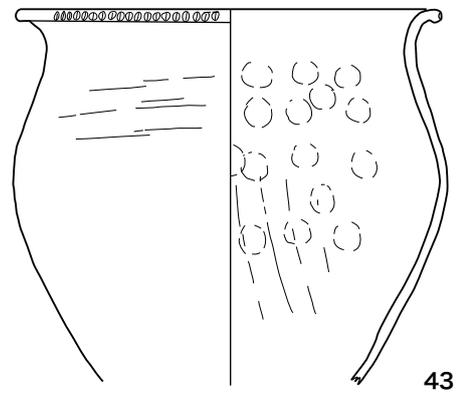
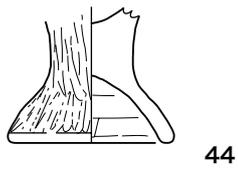
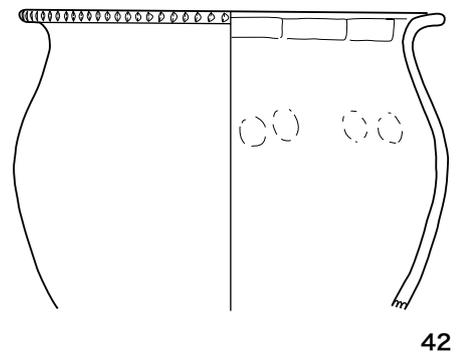
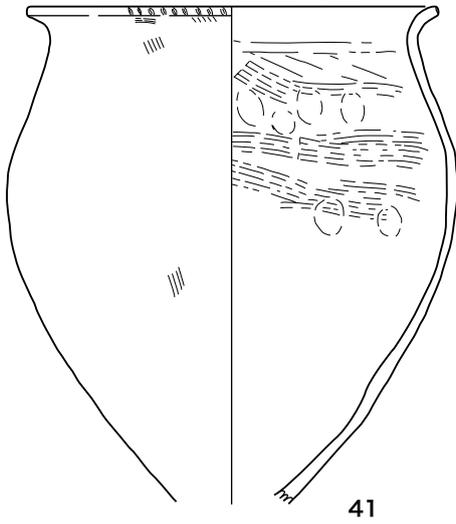
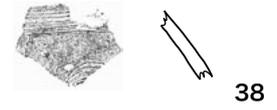
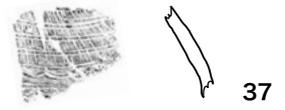
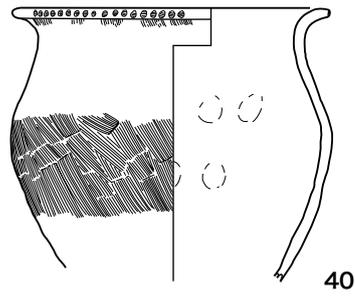
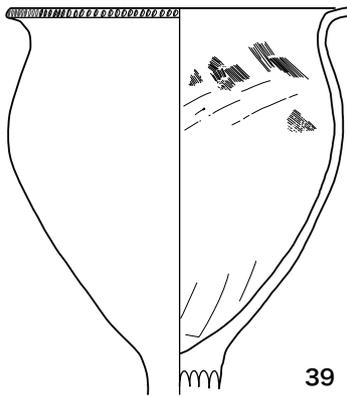
1/40

20cm



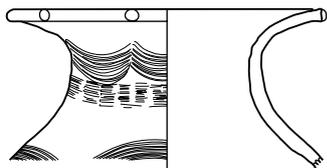
35

# SK1072



1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

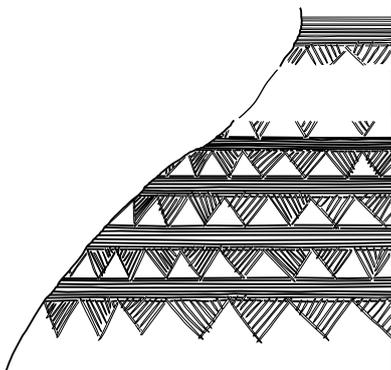
SB2069下層



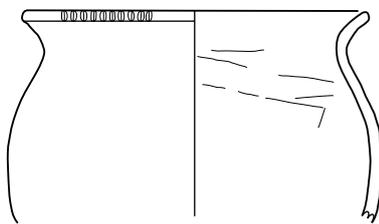
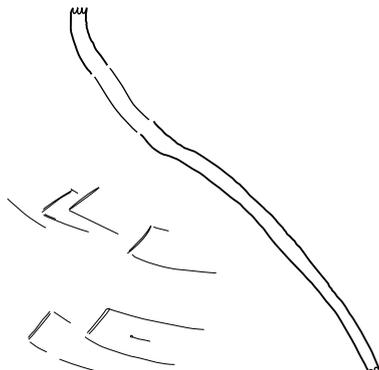
45



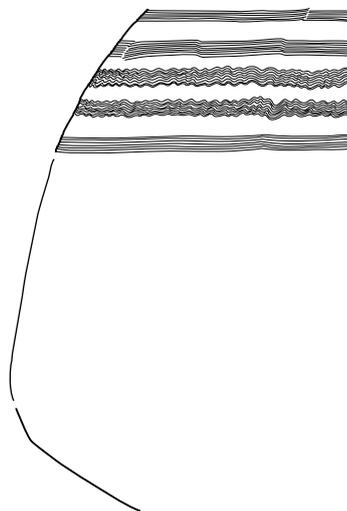
48



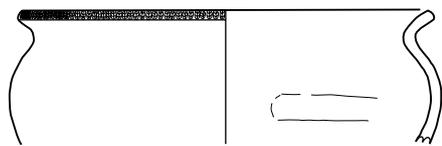
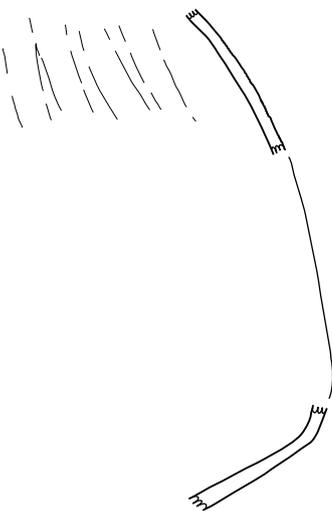
46



49

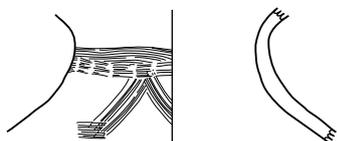


47

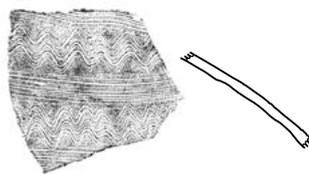


50

SK1073



51



52

1/4 0 20cm

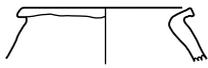
NR02



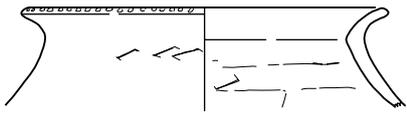
53



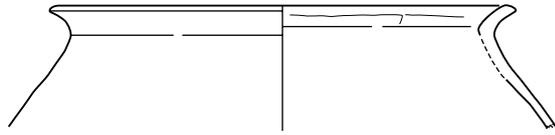
54



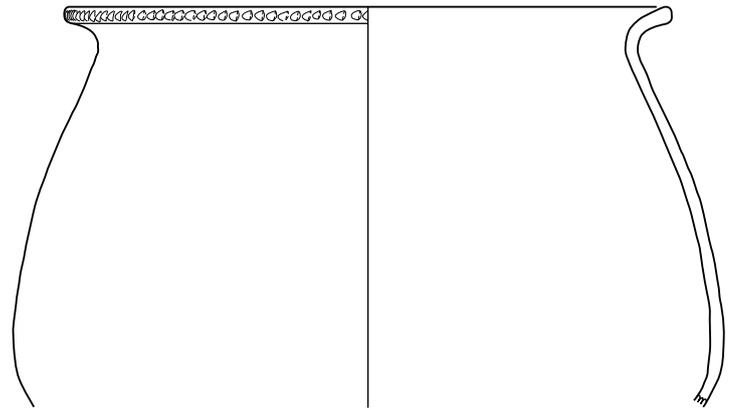
55



56



57

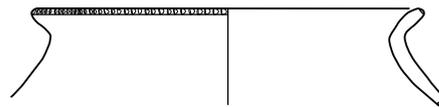


58

NR1002

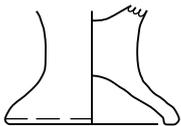


59



60

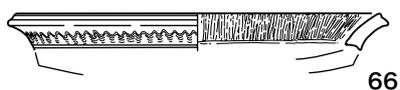
SD1001



61

1/4 0 \_\_\_\_\_ 20cm

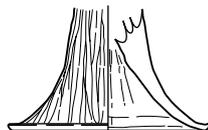
SB1004



66



67



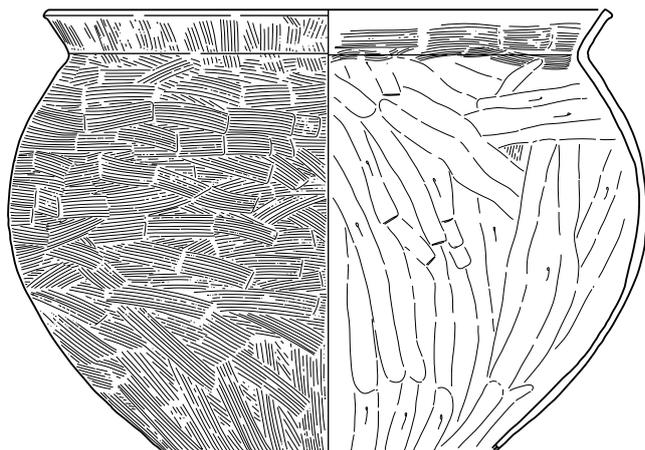
68



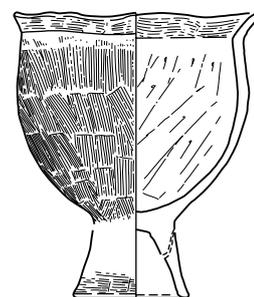
69



70



71



73



72



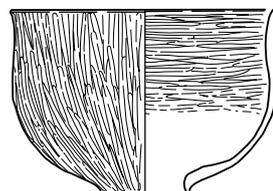
74

SB1007



98

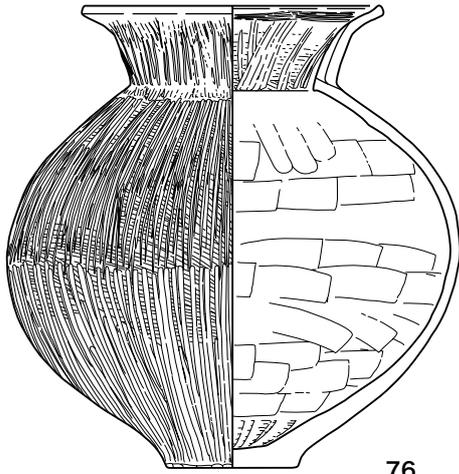
SB1002



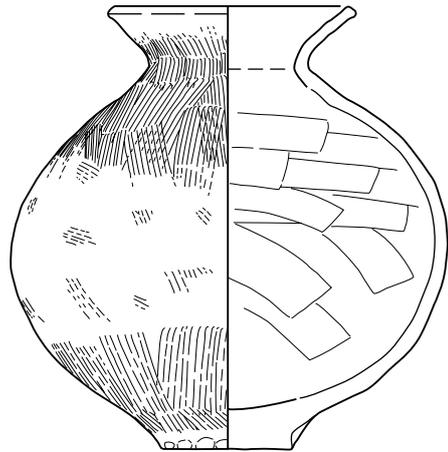
65

1/4 0 ————— 20cm

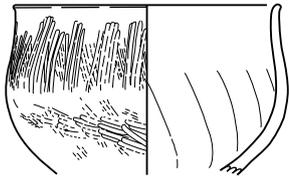
SD1001



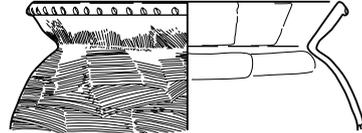
76



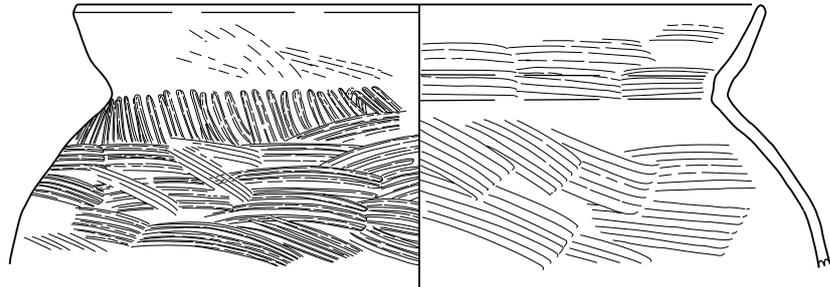
77



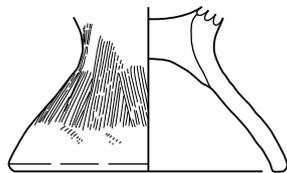
75



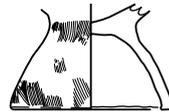
78



79



80



81

1/4 0  20cm

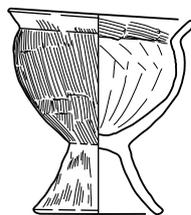
SB1001



62

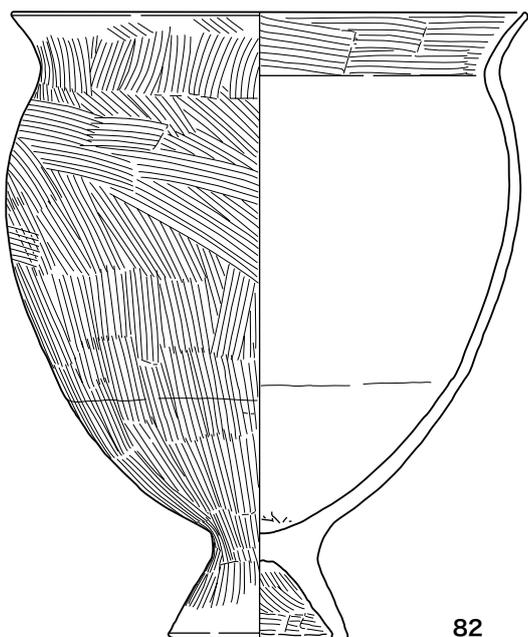


64

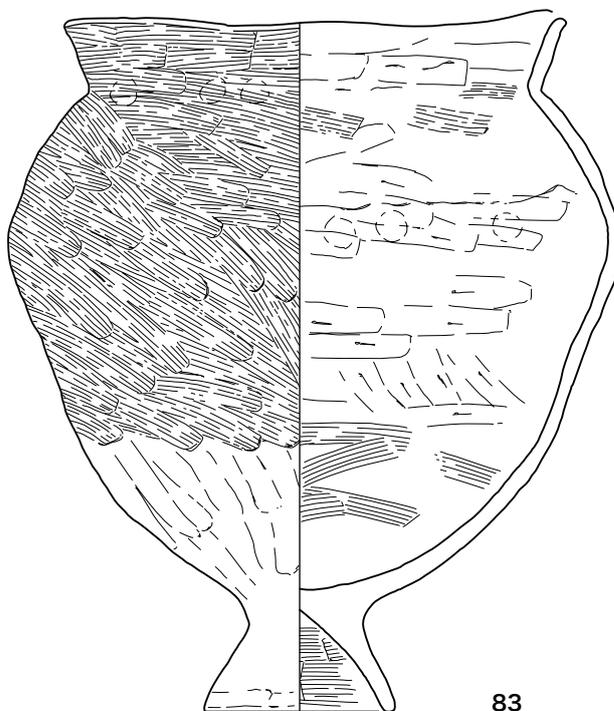


63

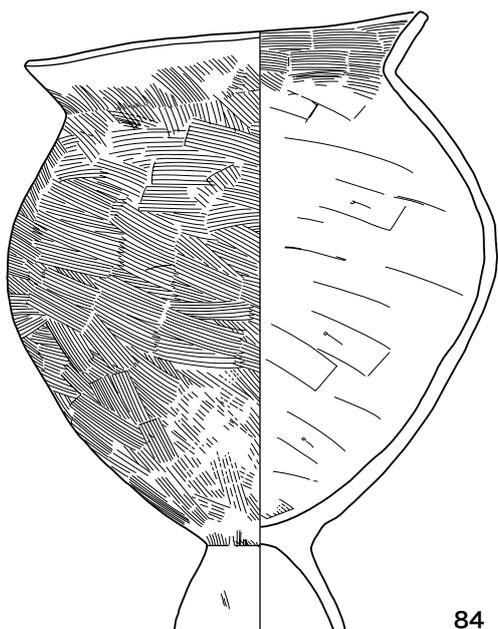
SK1001



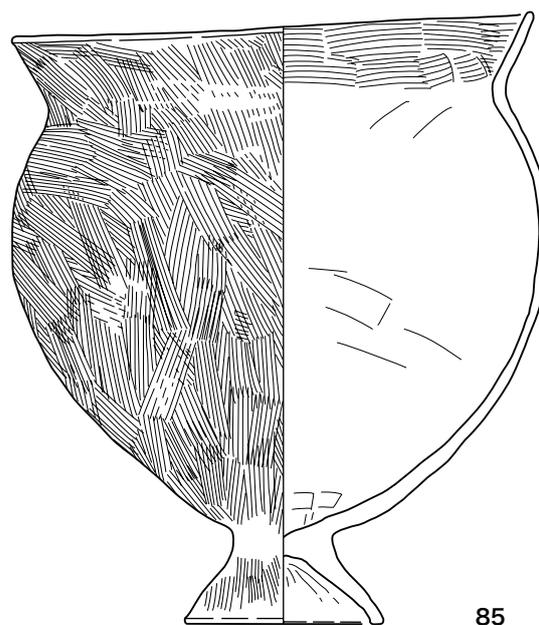
82



83



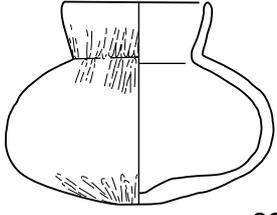
84



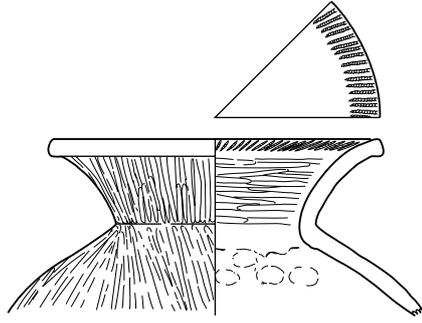
85

1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

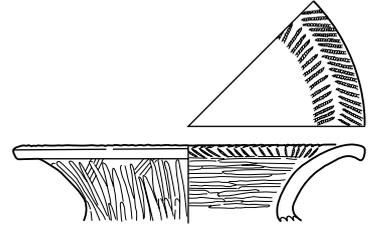
SK1011



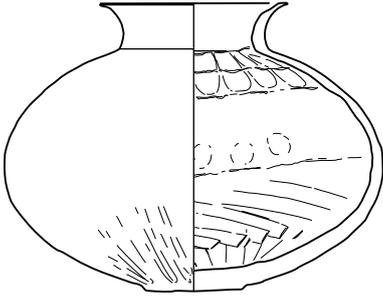
90



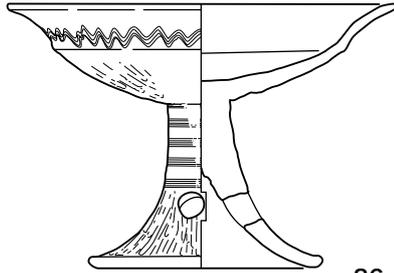
92



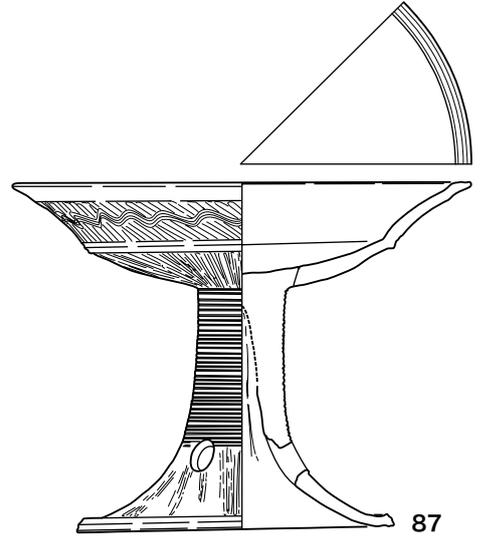
93



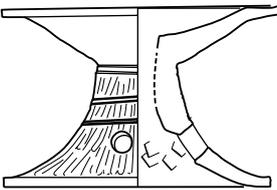
91



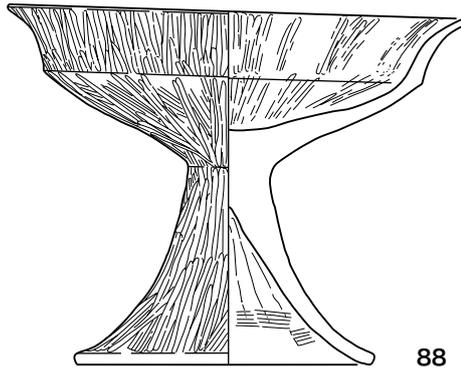
86



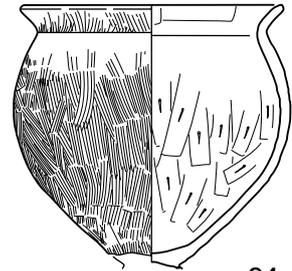
87



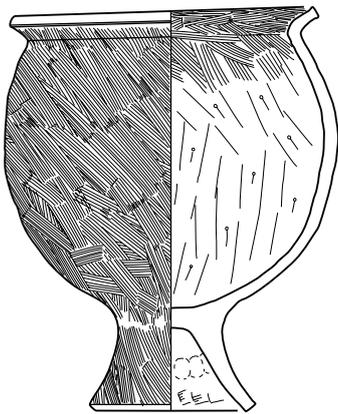
89



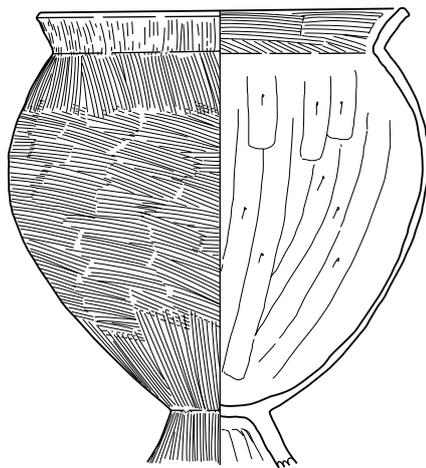
88



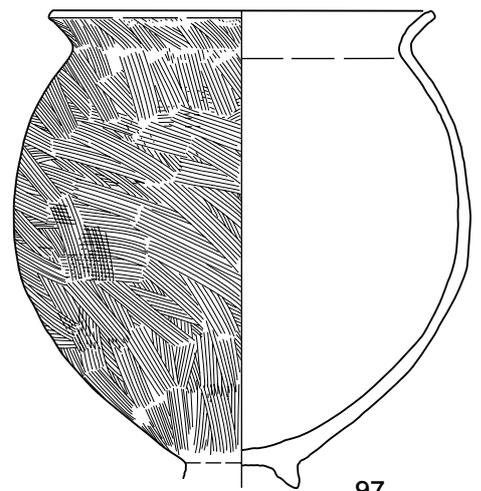
94



95



96



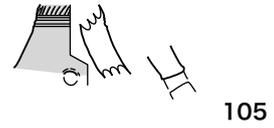
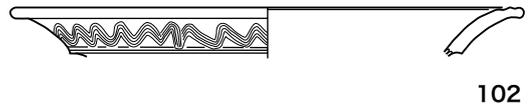
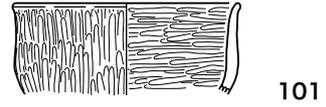
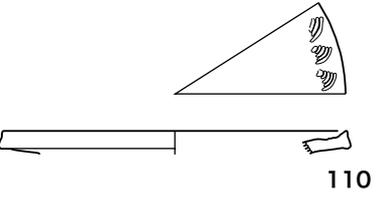
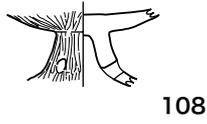
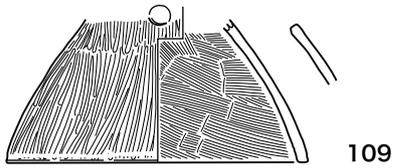
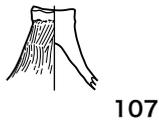
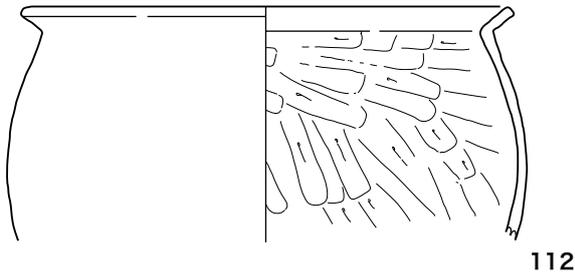
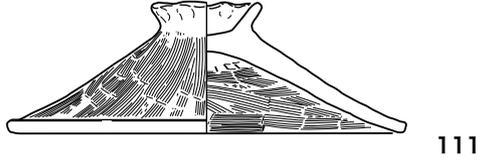
97

1/40  20cm

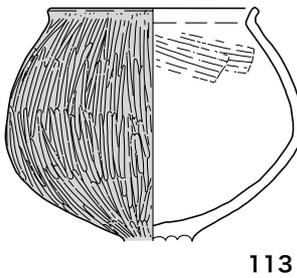
NR02



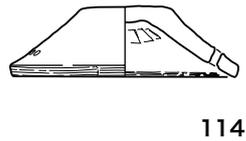
NR1002



検出III



検出IV

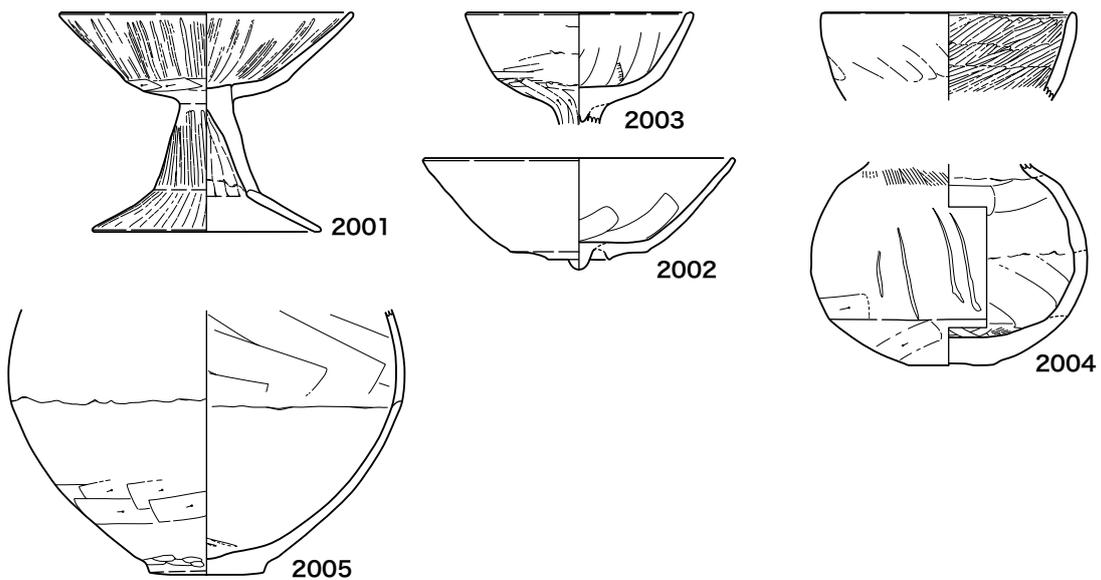


SX4003

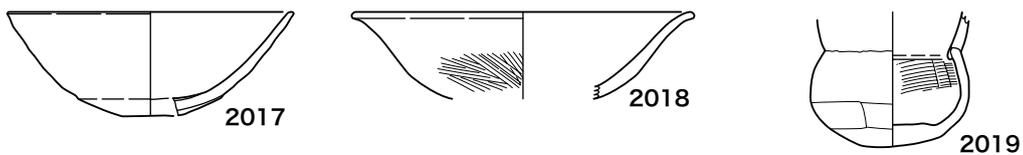


1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

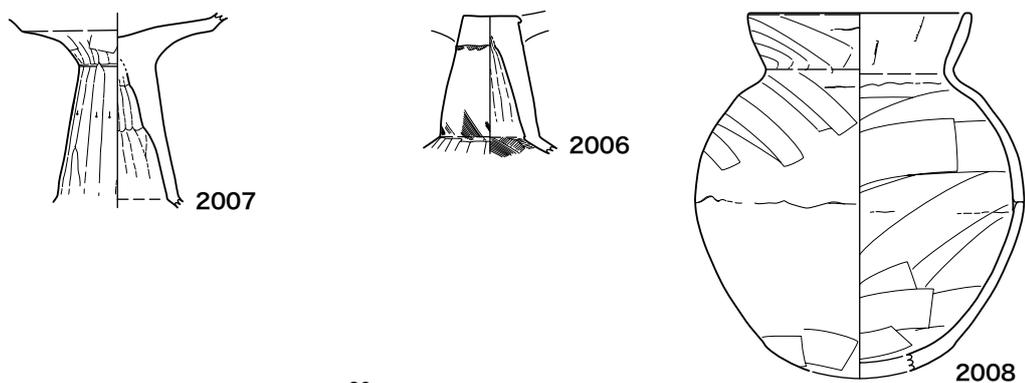
SB2004



SB2016

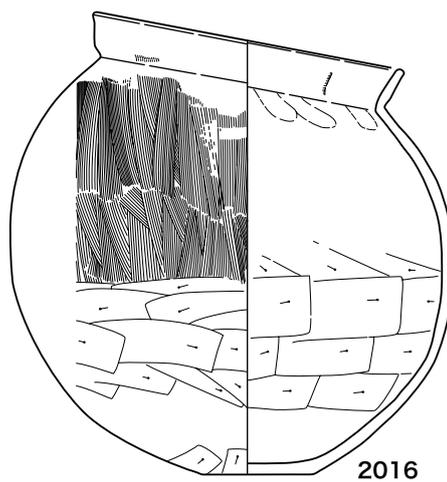
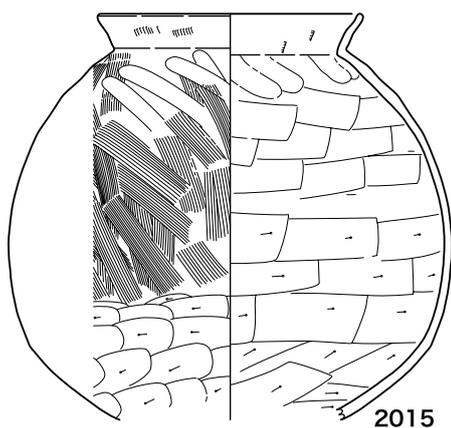
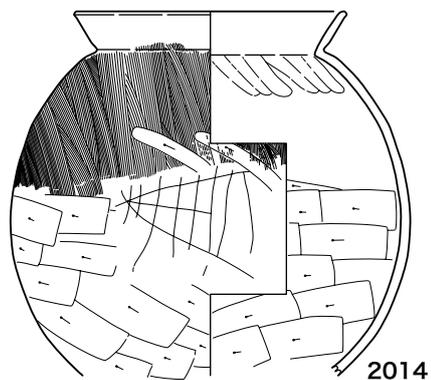
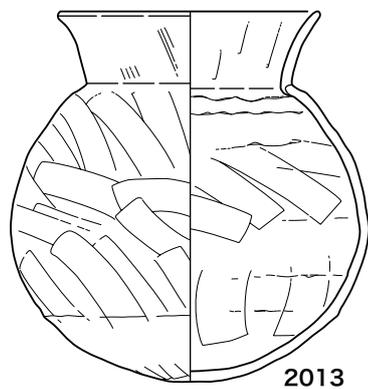
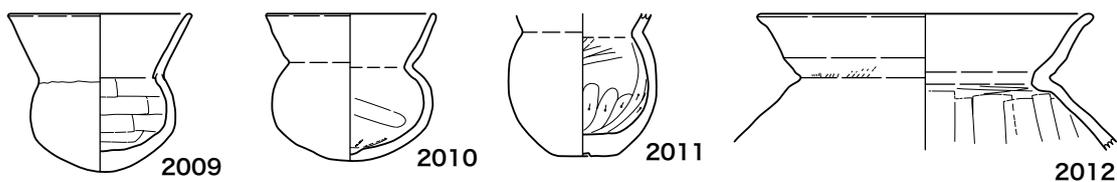


SB2014

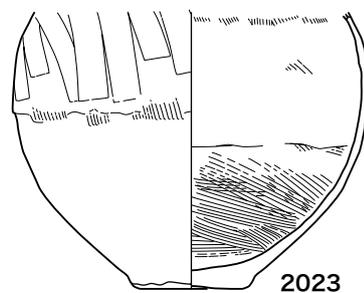
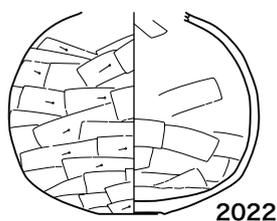
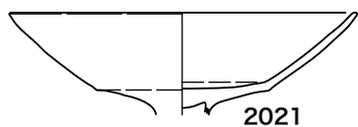


1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

SB2015

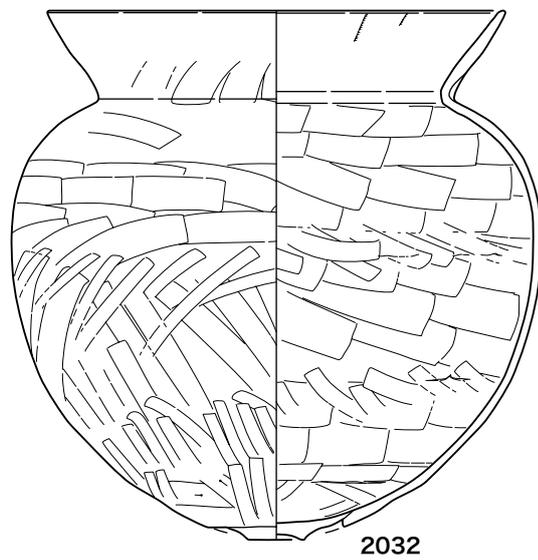
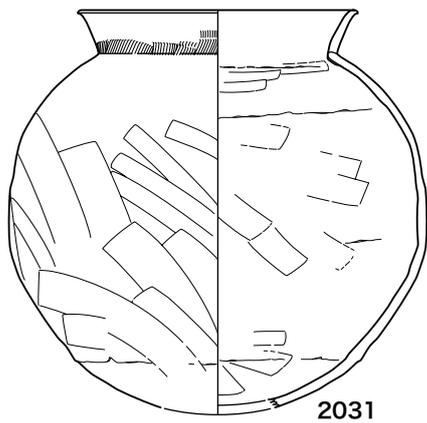
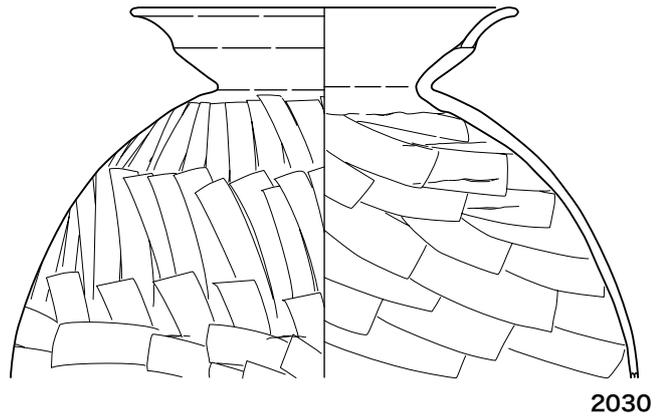
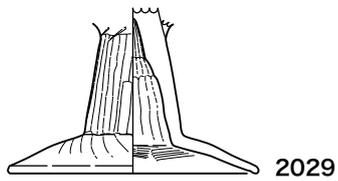
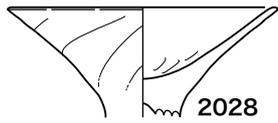
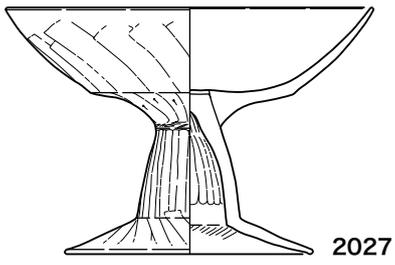


SB2019

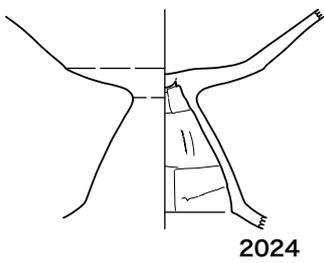


1/40 20cm

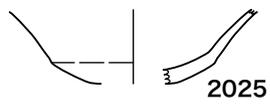
SB2025



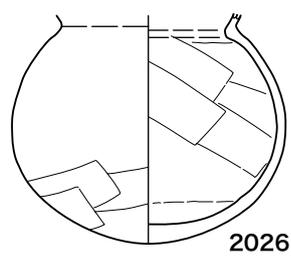
SB2021



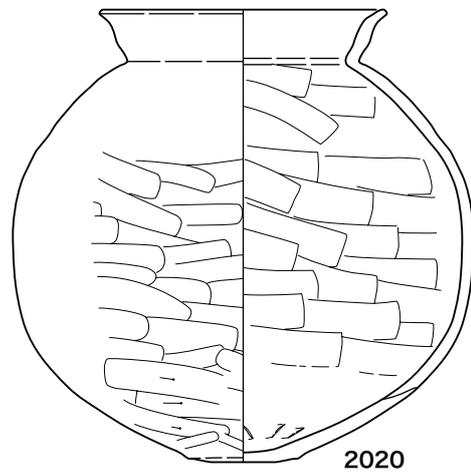
SB2022



SB2024

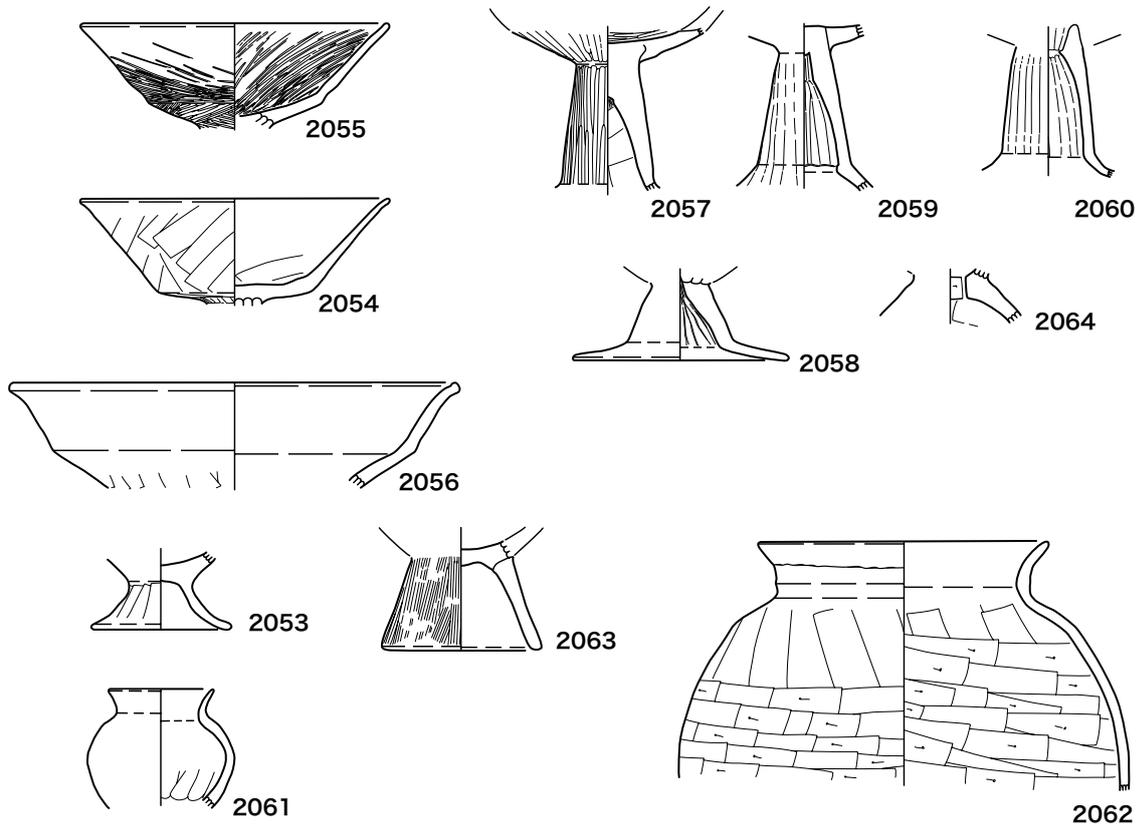


SB2017

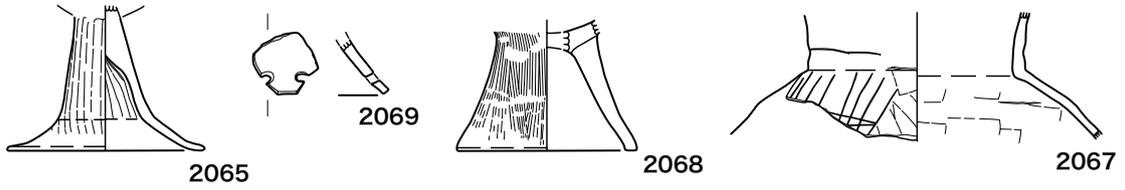


1/40 20cm

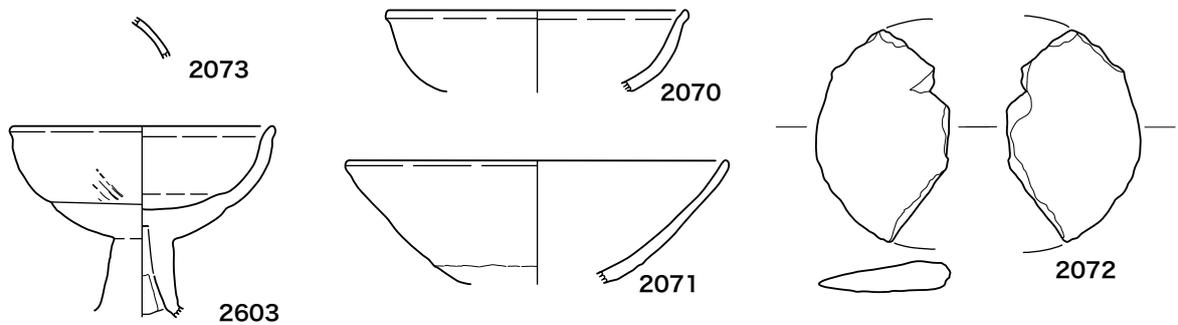
SB2034



SB2035

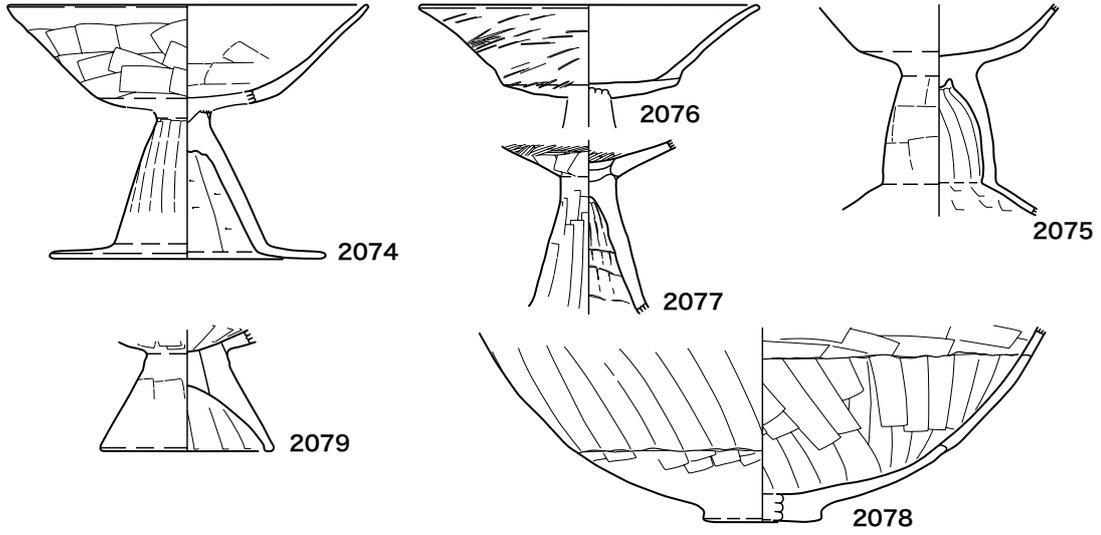


SB2041

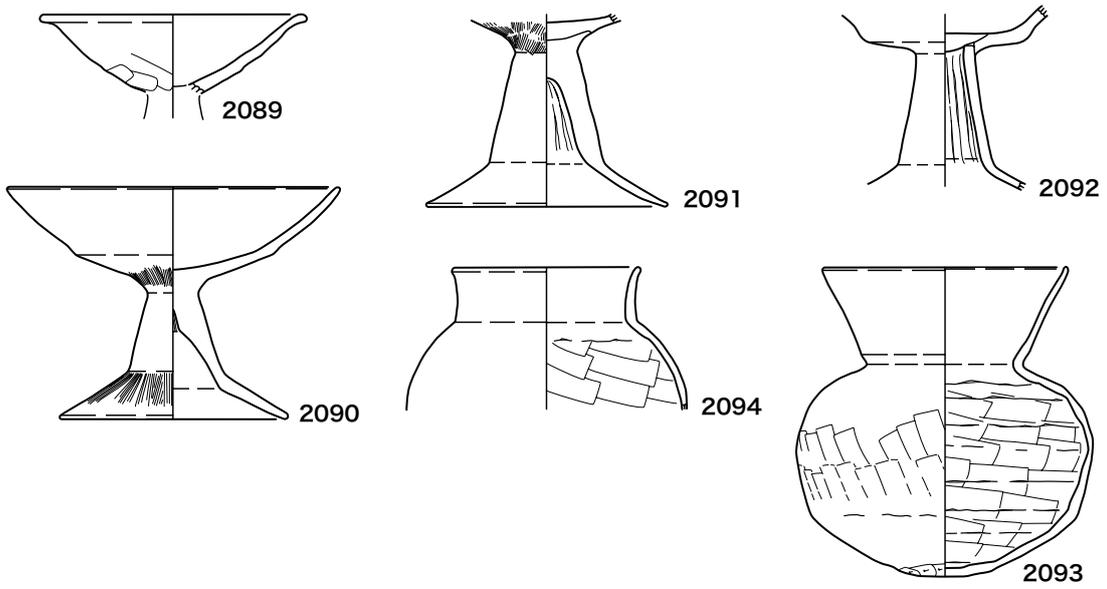


1/4 0 20cm

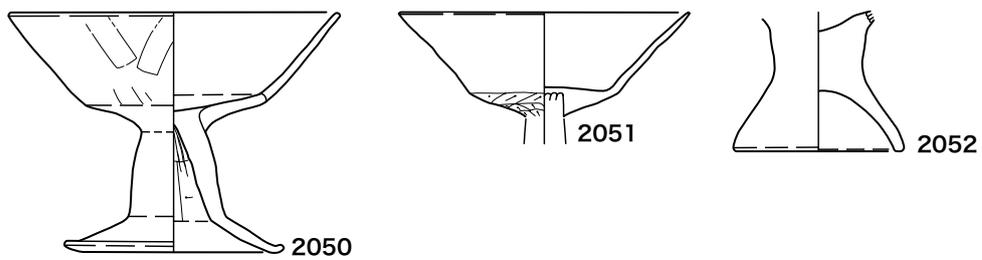
SB2042



SB2046

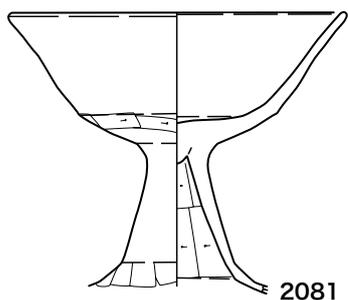


SB2032

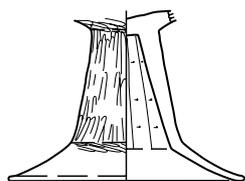


1/4 0 20cm

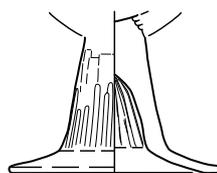
SB2045



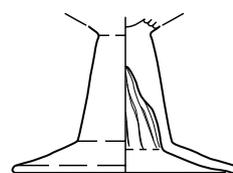
2081



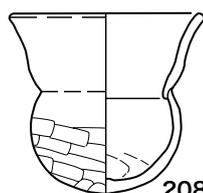
2083



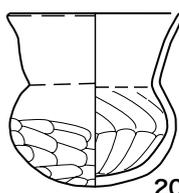
2085



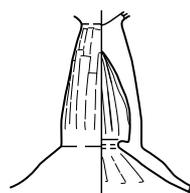
2084



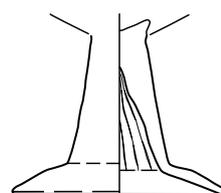
2087



2088

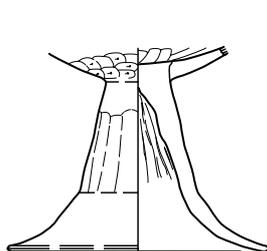


2086

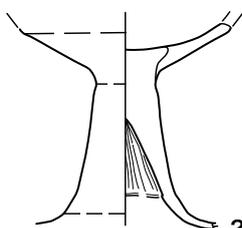


2082

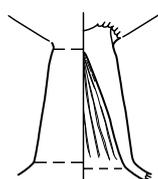
SB2048



2096



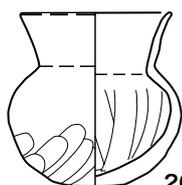
2095



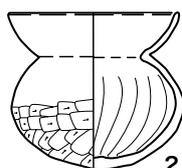
2097



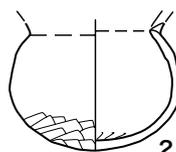
2098



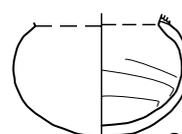
2099



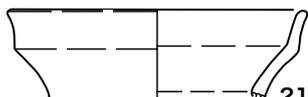
2100



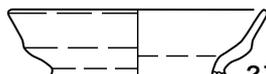
2101



2102



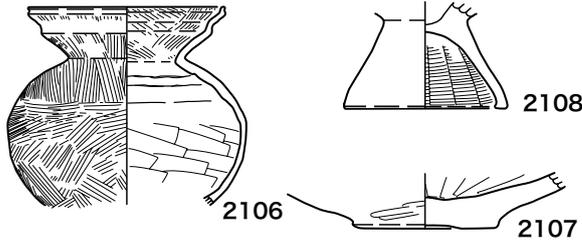
2103



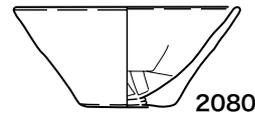
2104

1/4 0 \_\_\_\_\_ 20cm

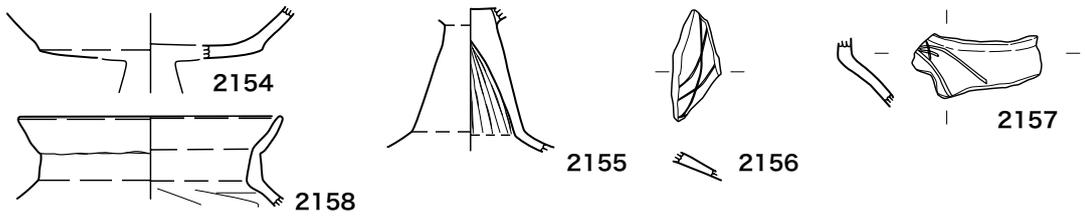
SB2052



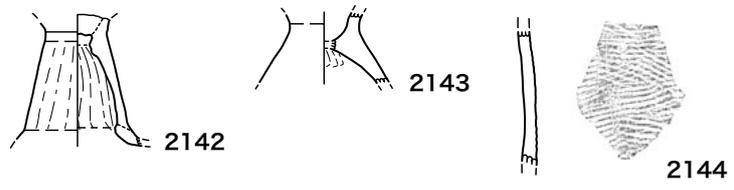
SB2043



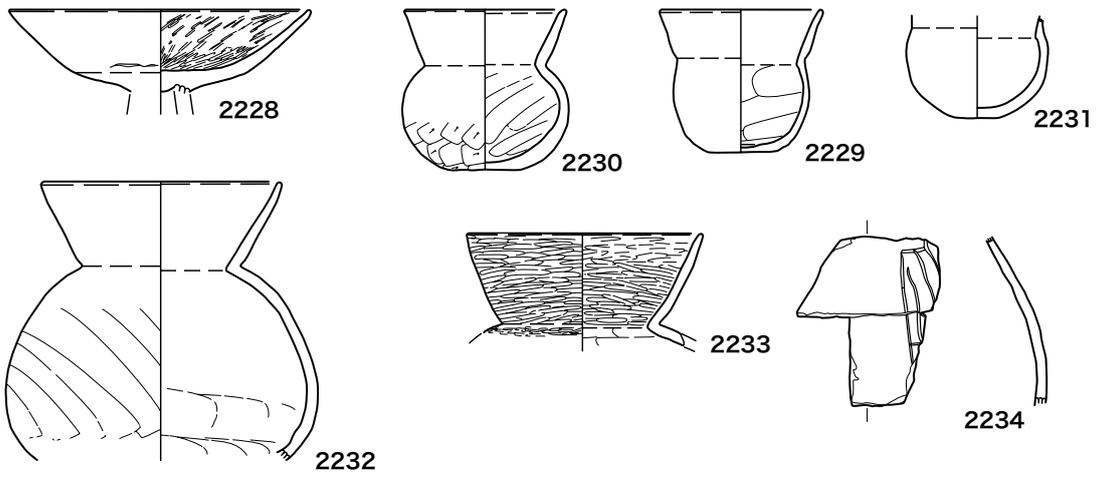
SB2062



SB2058

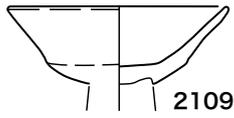


SB2071

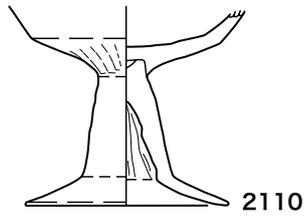


1/4 0 20cm

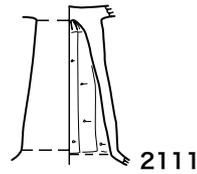
SB2056



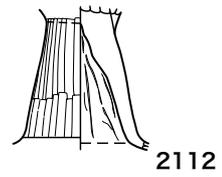
2109



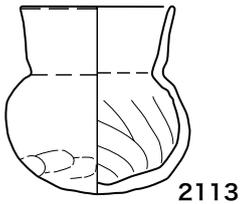
2110



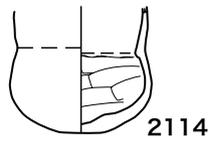
2111



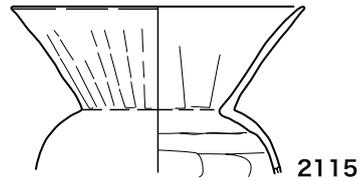
2112



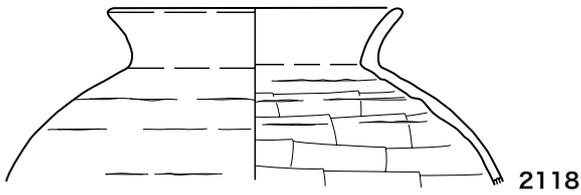
2113



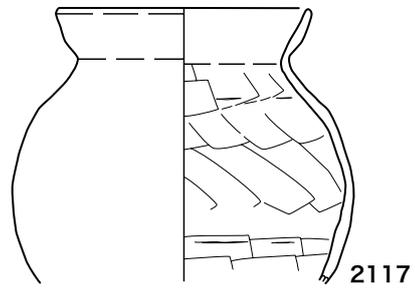
2114



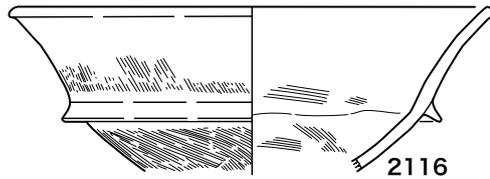
2115



2118

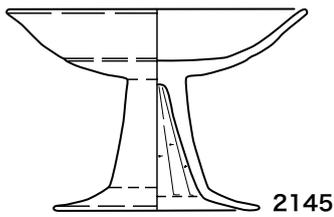


2117

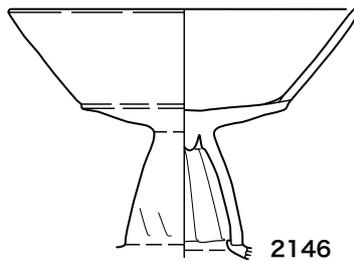


2116

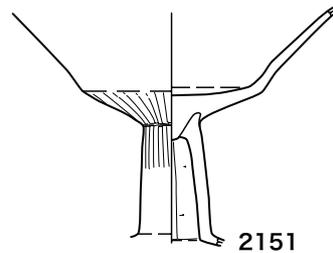
SB2059



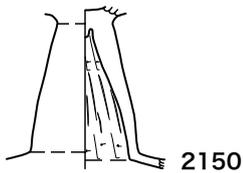
2145



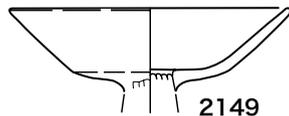
2146



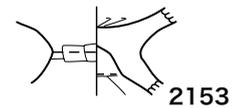
2151



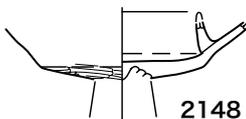
2150



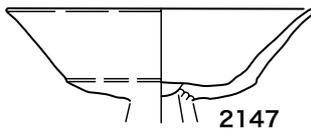
2149



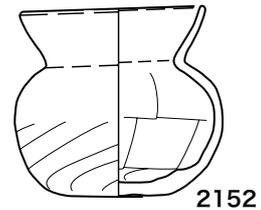
2153



2148



2147

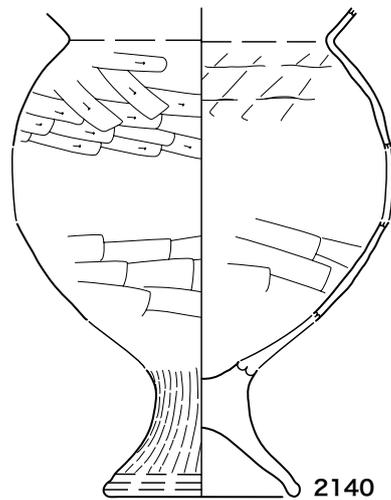
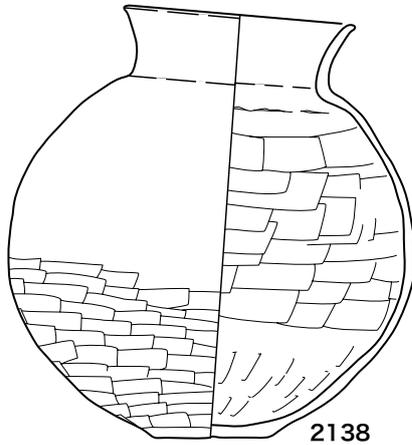
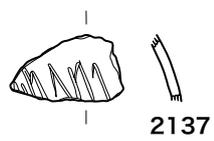
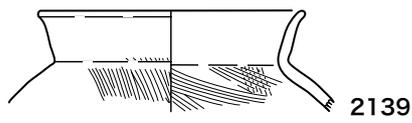
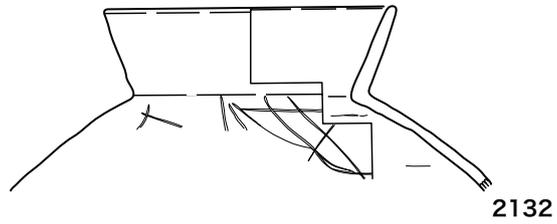
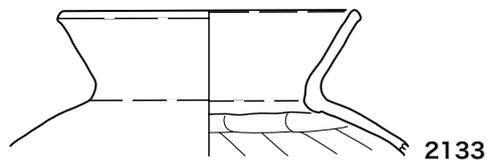
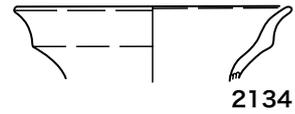
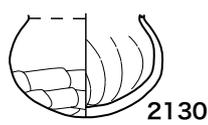
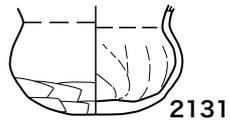
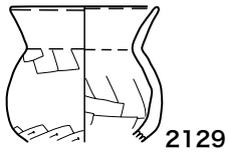
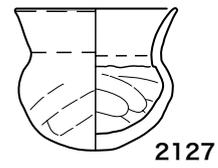
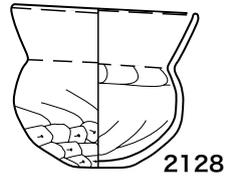
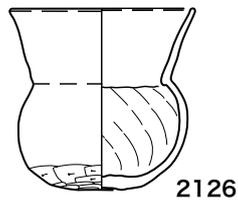
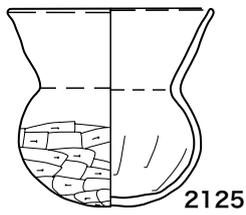
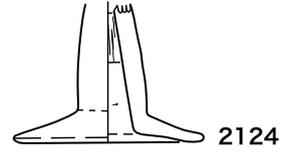
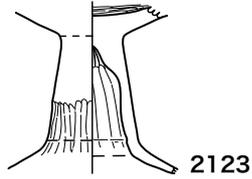
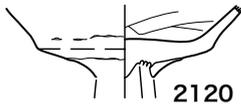
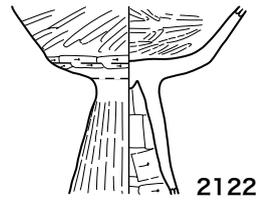
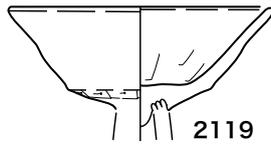
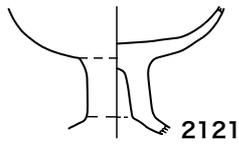


2152

1/40

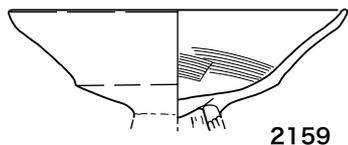
20cm

SB2057

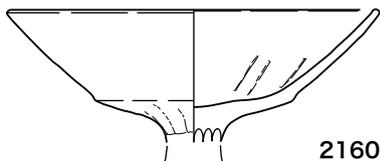


1/40 20cm

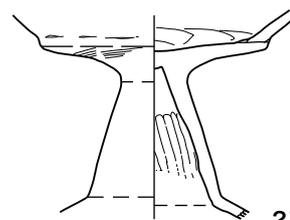
SB2064



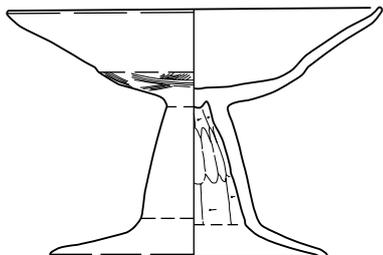
2159



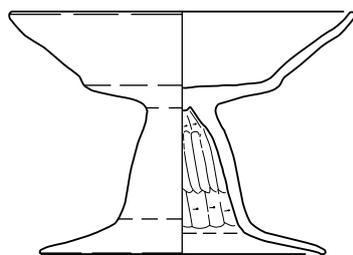
2160



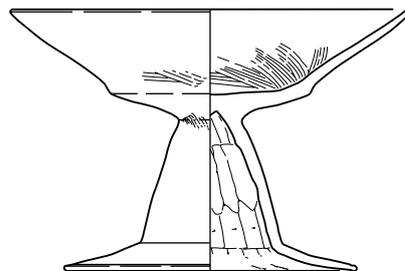
2161



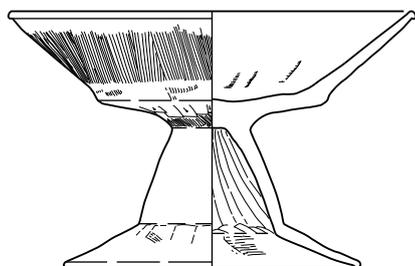
2162



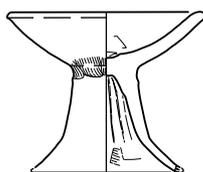
2163



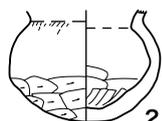
2164



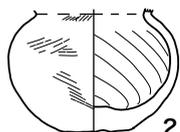
2165



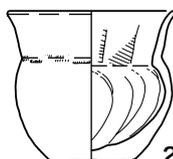
2173



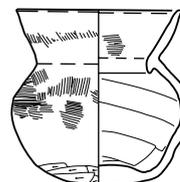
2166



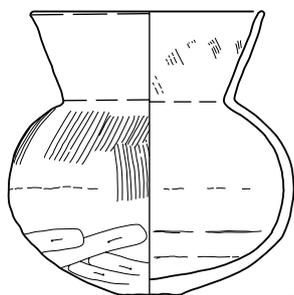
2167



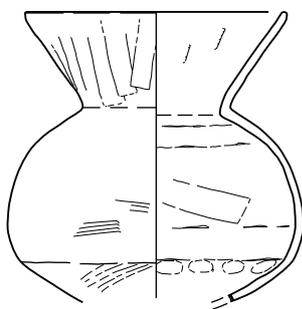
2168



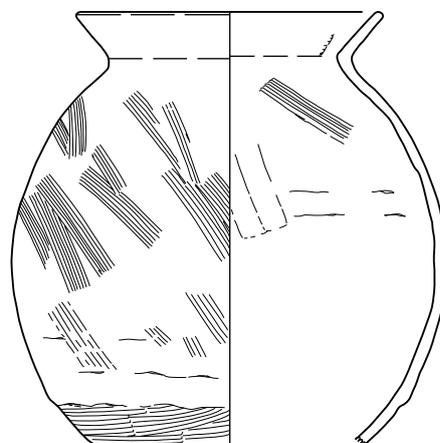
2169



2170



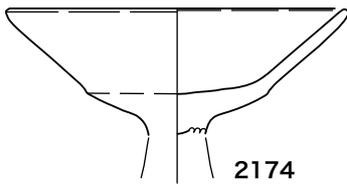
2171



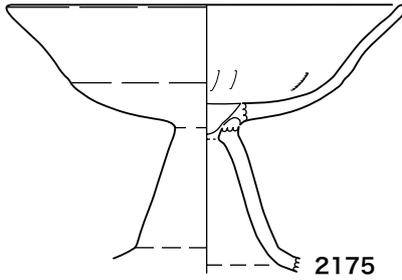
2172

1/40  20cm

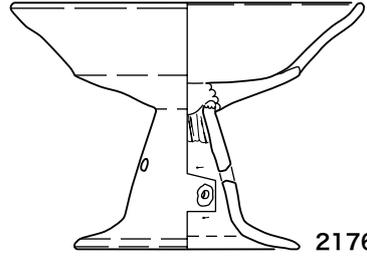
SB2065



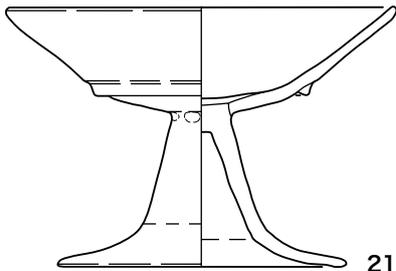
2174



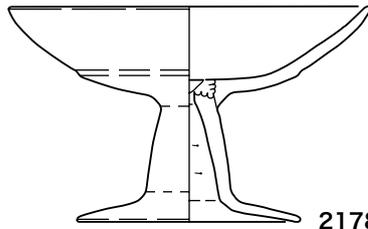
2175



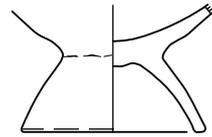
2176



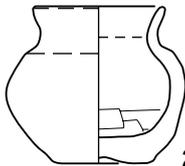
2177



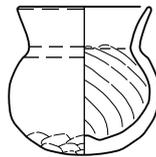
2178



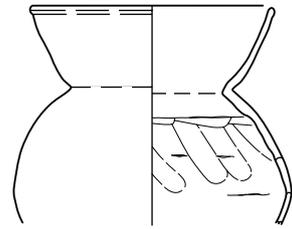
2182



2179

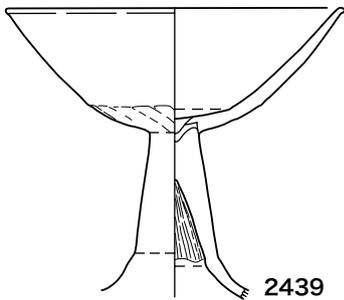


2180

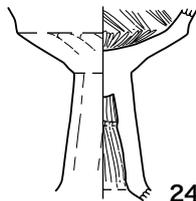


2181

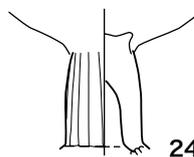
SB2087



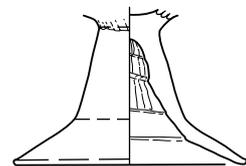
2439



2440



2441



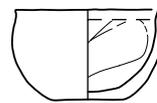
2442



2437



2438



2436



2443



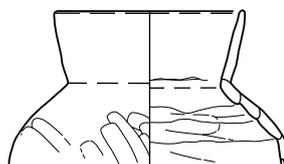
2444



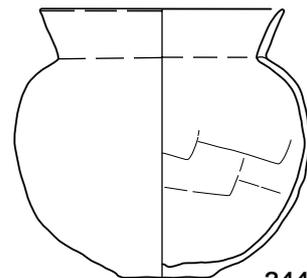
2445



2448



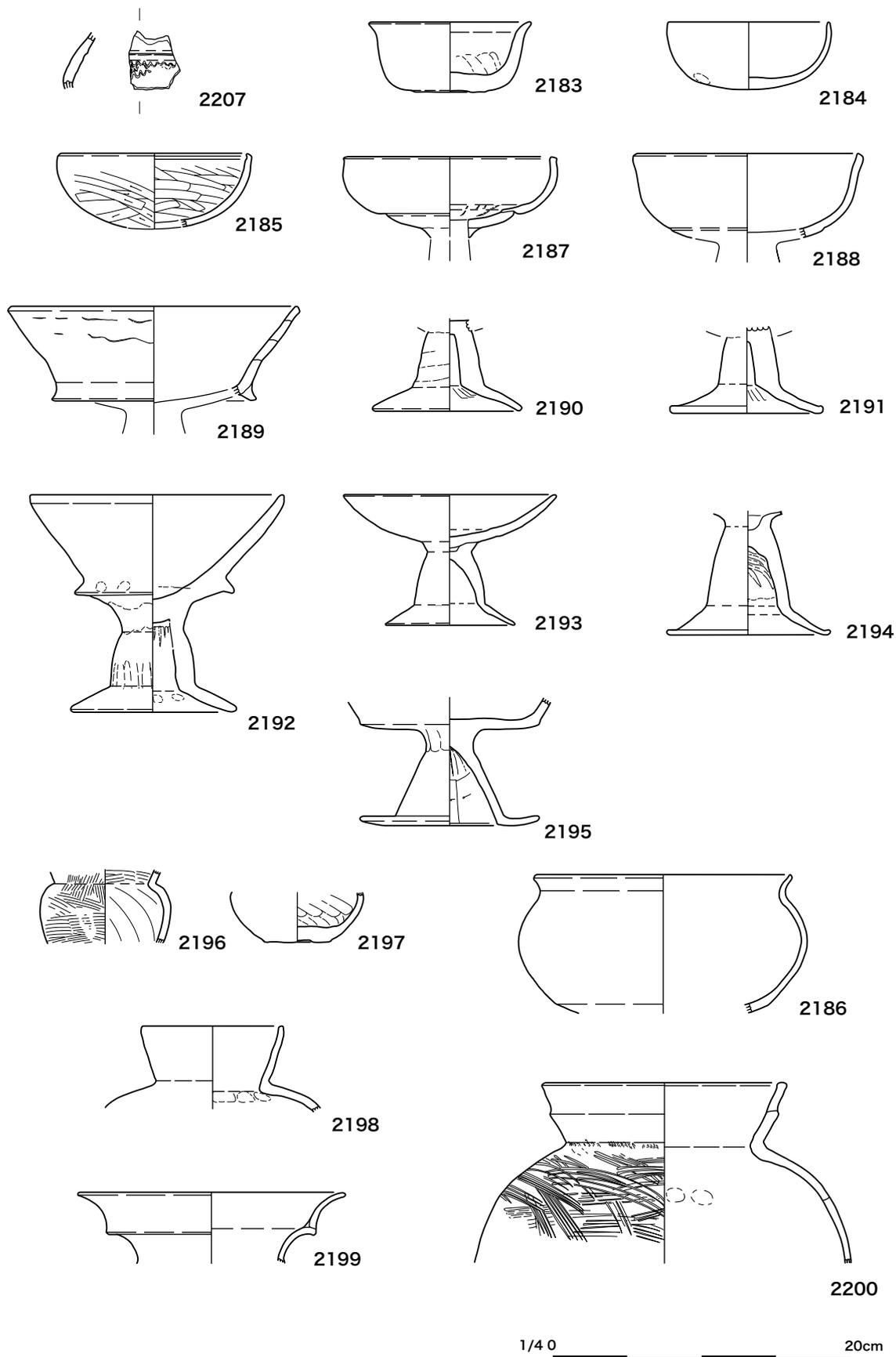
2446



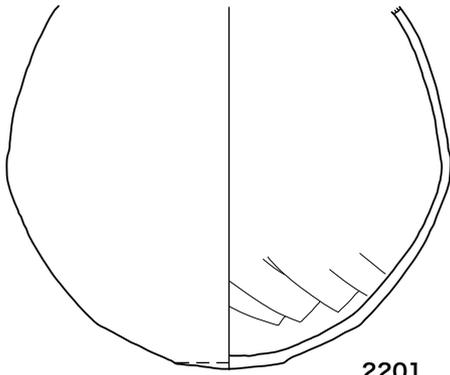
2447

1/4 0 20cm

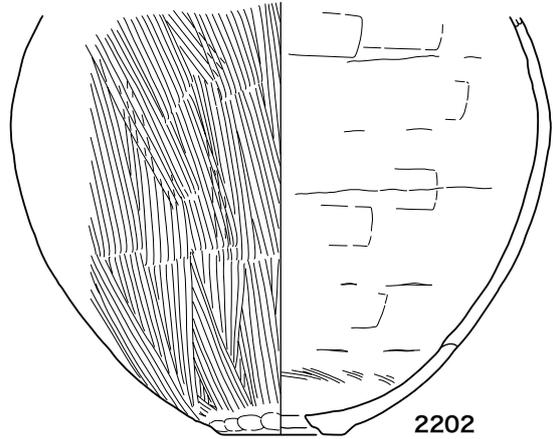
SB2067-1



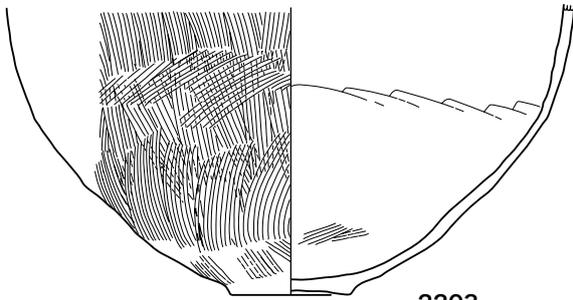
SB2067-2



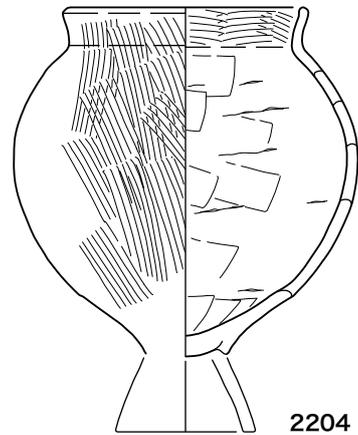
2201



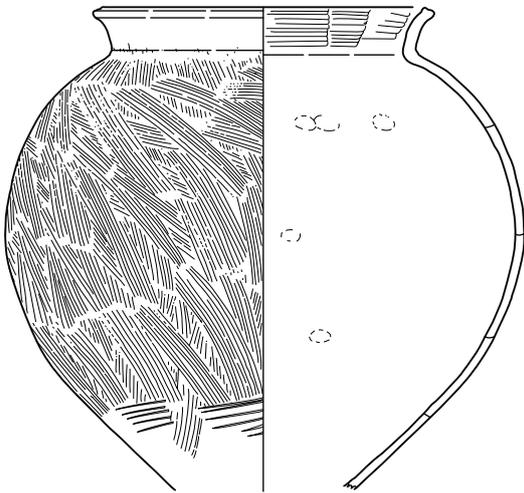
2202



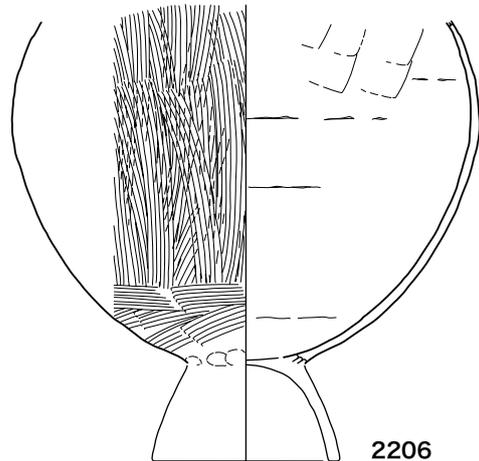
2203



2204



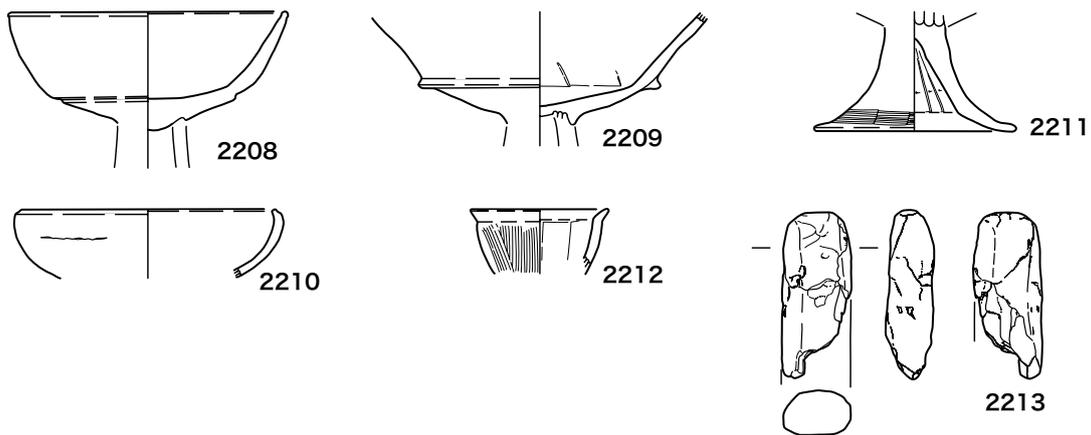
2205



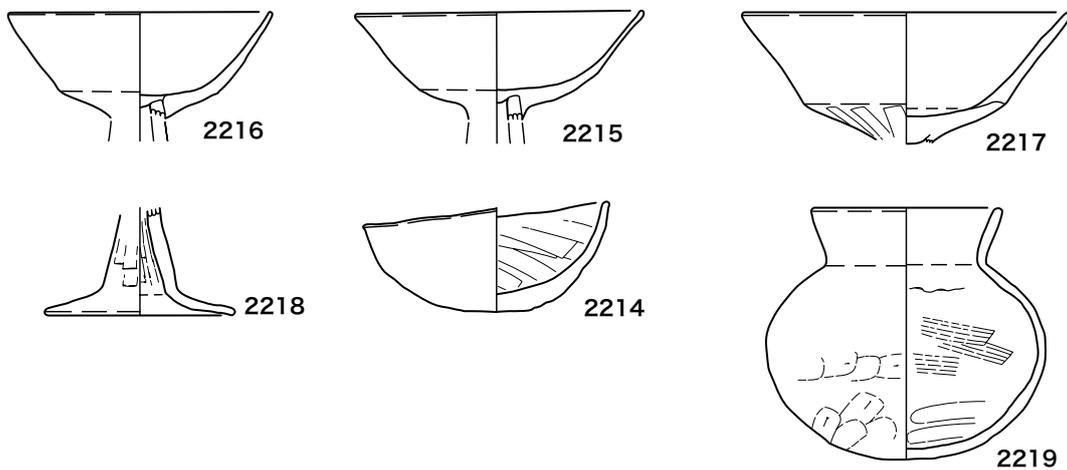
2206

1/4 0 20cm

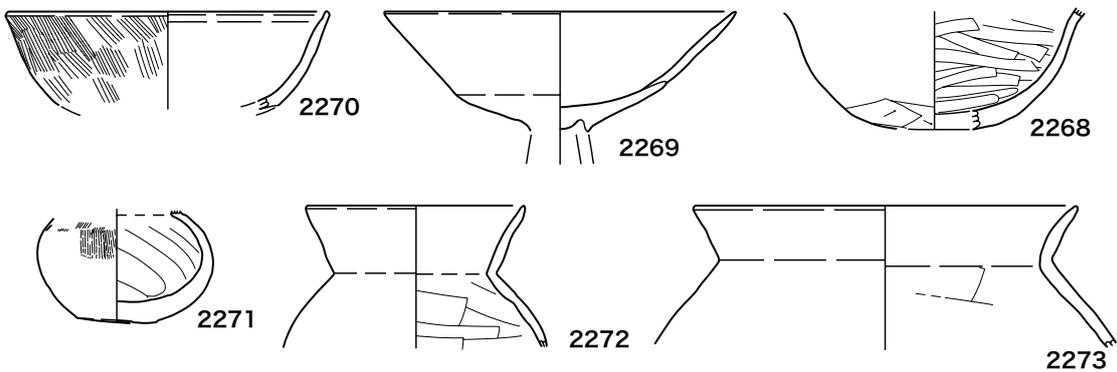
SB2068



SB2069

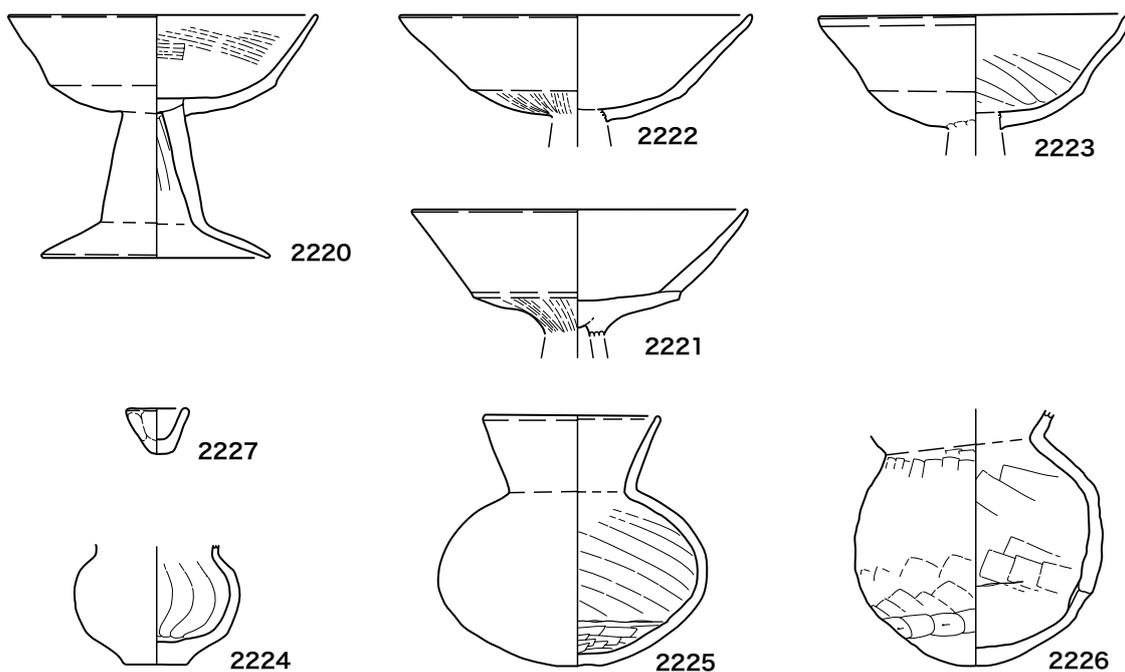


SB2073

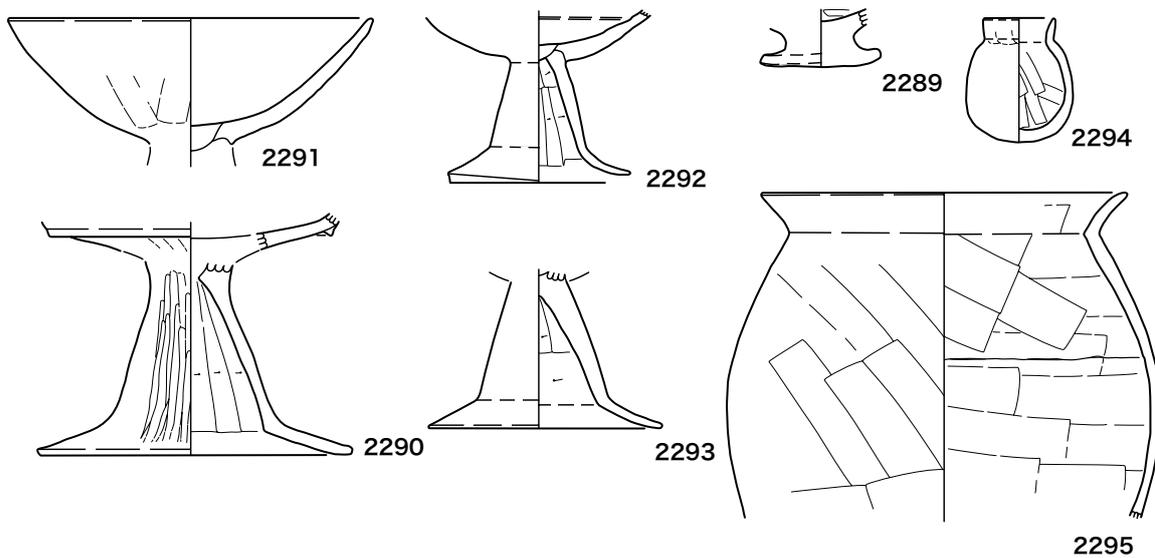


1/4 0 20cm

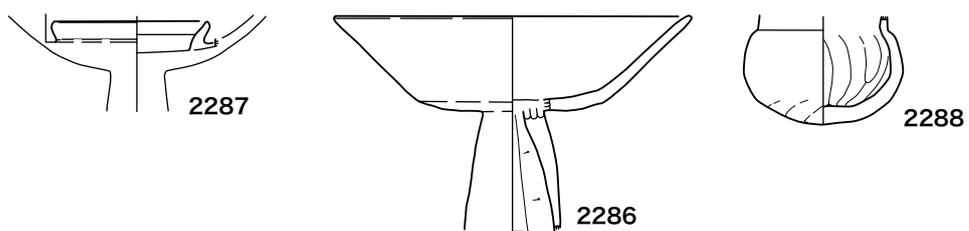
SB2070



SB2077

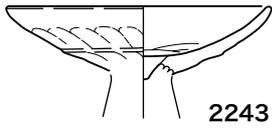


SB2076

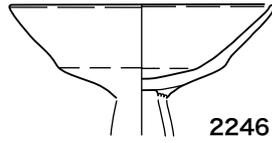


1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

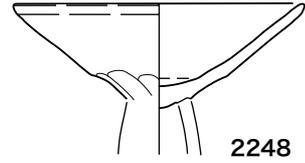
SB2072-1



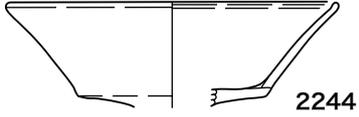
2243



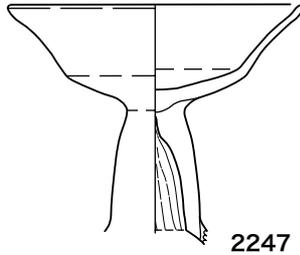
2246



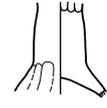
2248



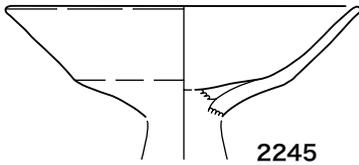
2244



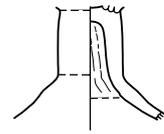
2247



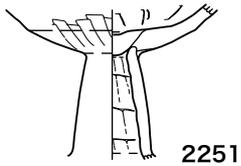
2249



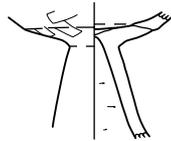
2245



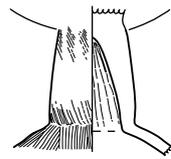
2250



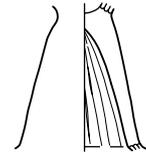
2251



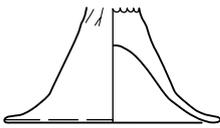
2252



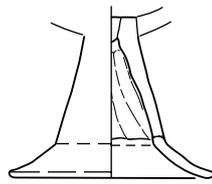
2253



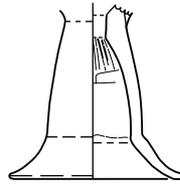
2254



2255



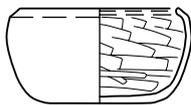
2256



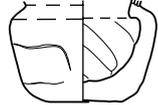
2257



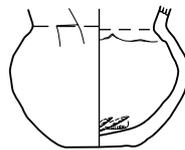
2266



2242



2258



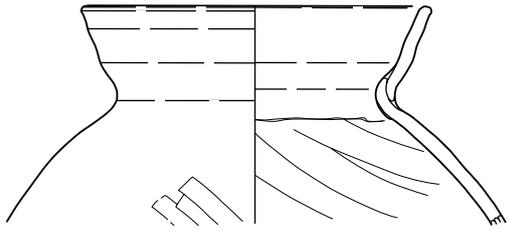
2259



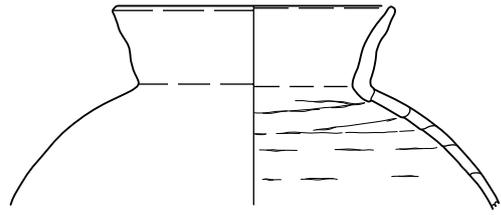
2267

1/4 0 \_\_\_\_\_ 20cm

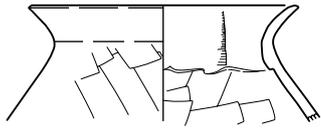
SB2072-2



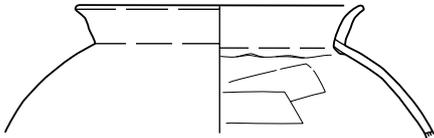
2260



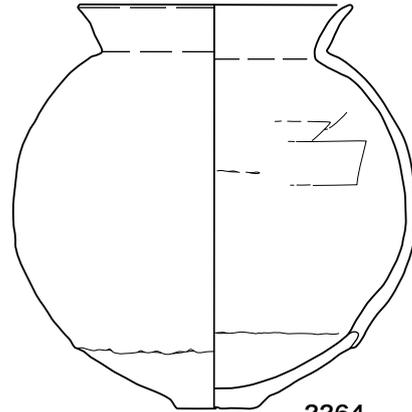
2261



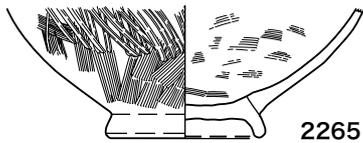
2262



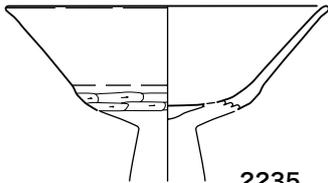
2263



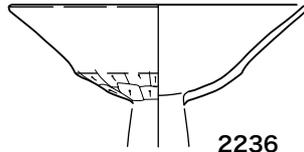
2264



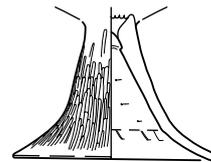
2265



2235



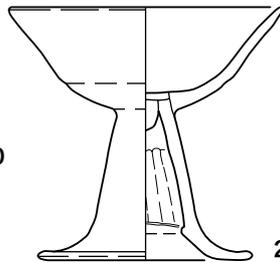
2236



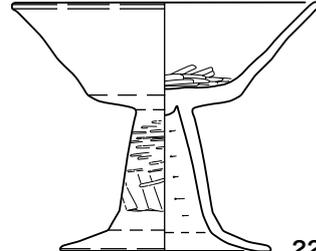
2237



2240



2238



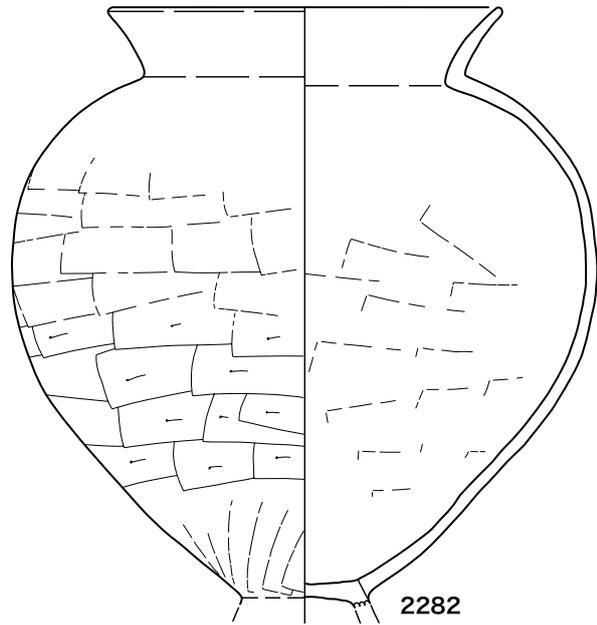
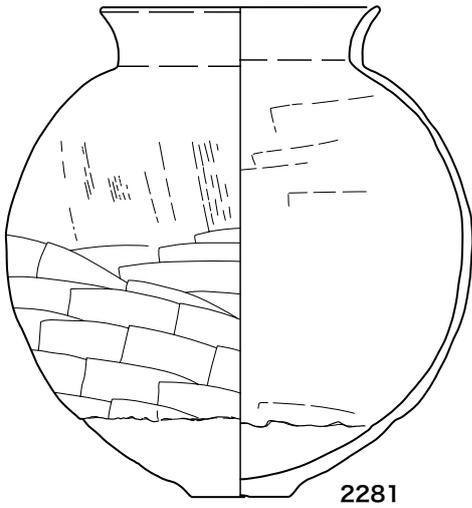
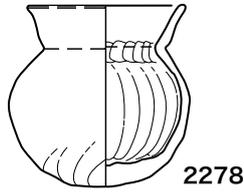
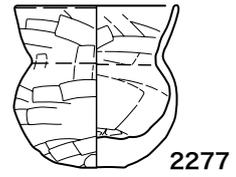
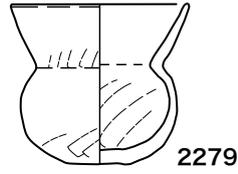
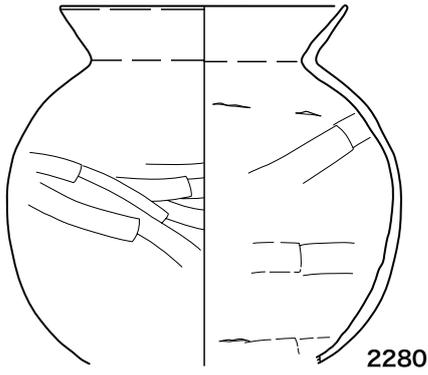
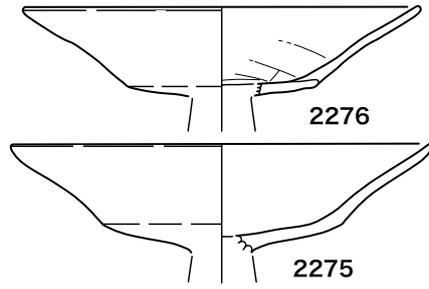
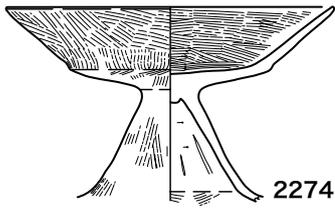
2239



2241

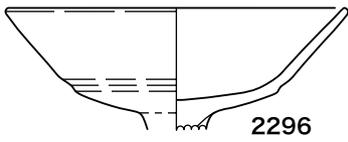
1/4 0 20cm

SB2074

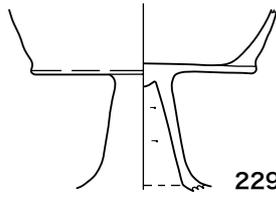


1/40  20cm

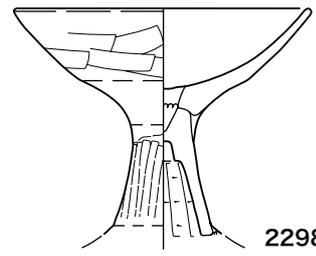
SB2078



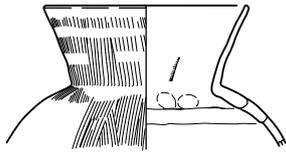
2296



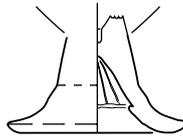
2297



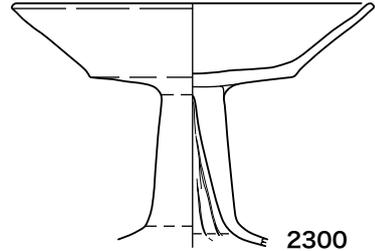
2298



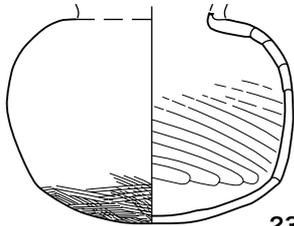
2301



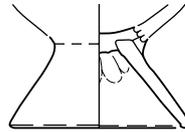
2299



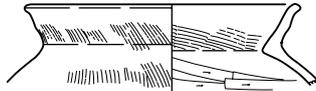
2300



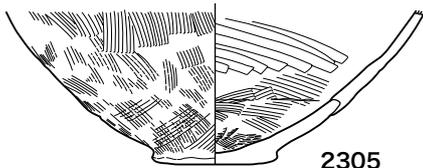
2302



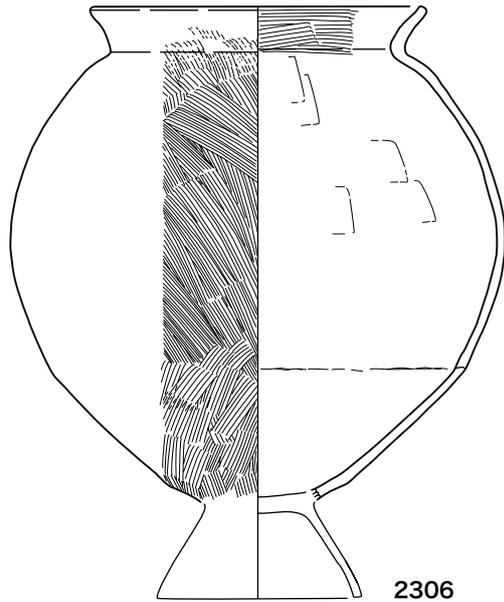
2303



2304



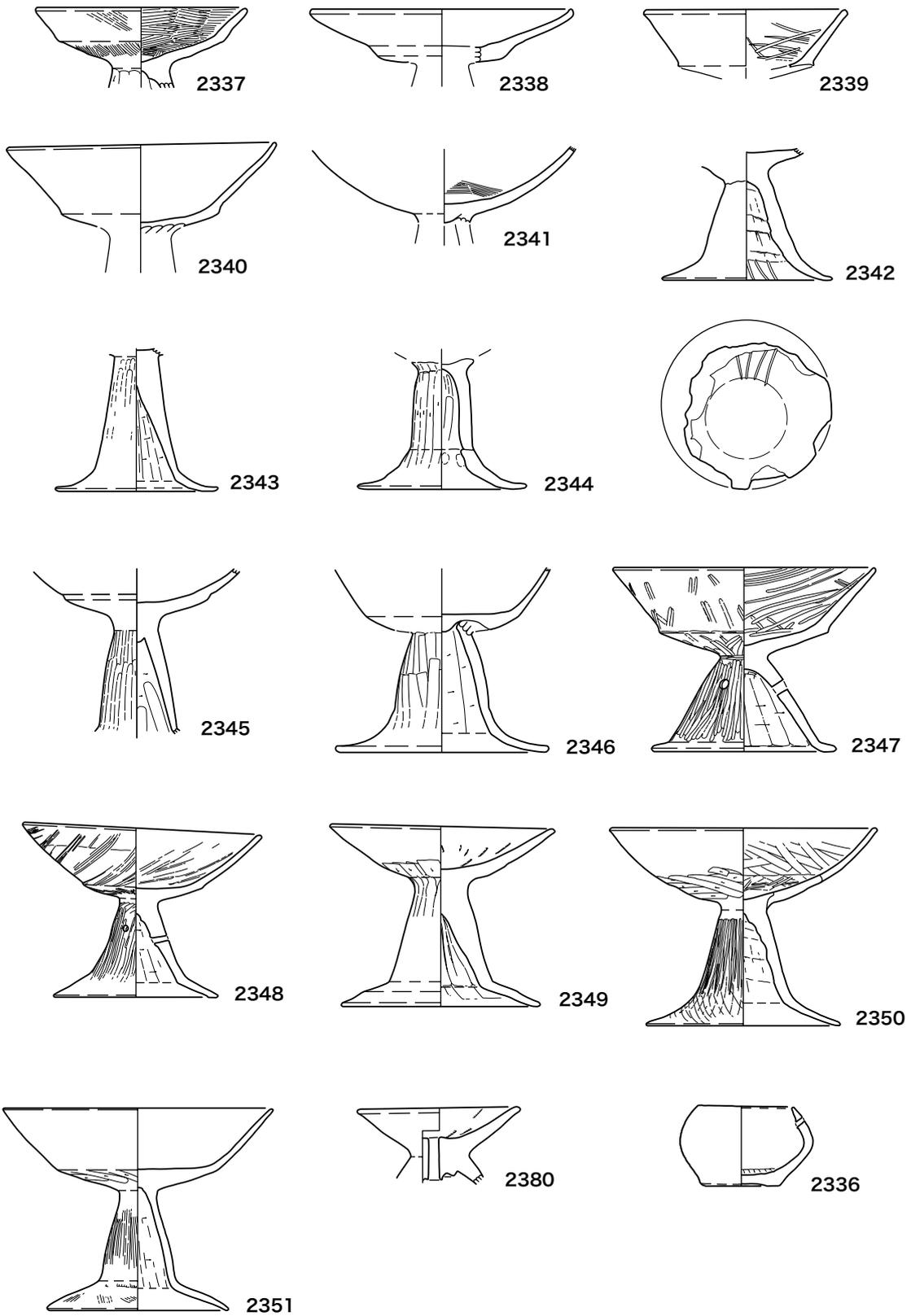
2305



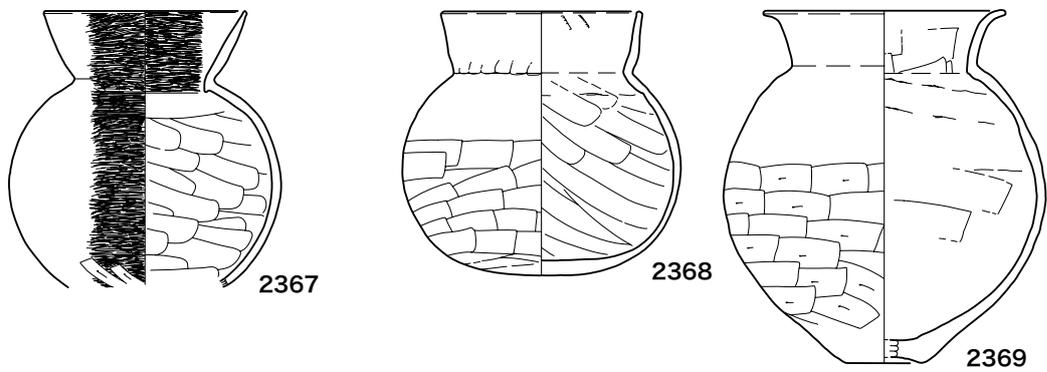
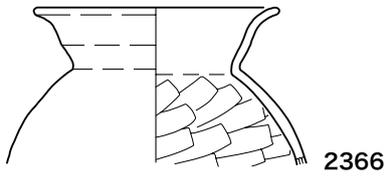
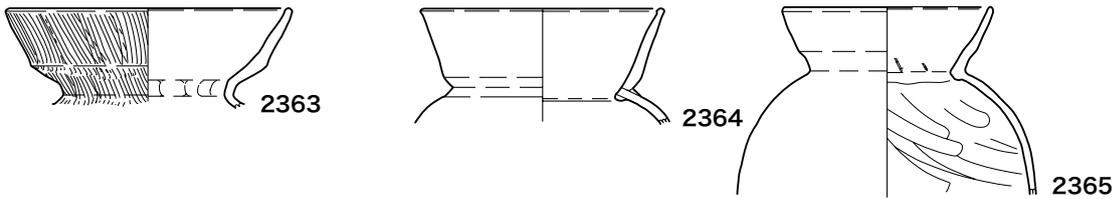
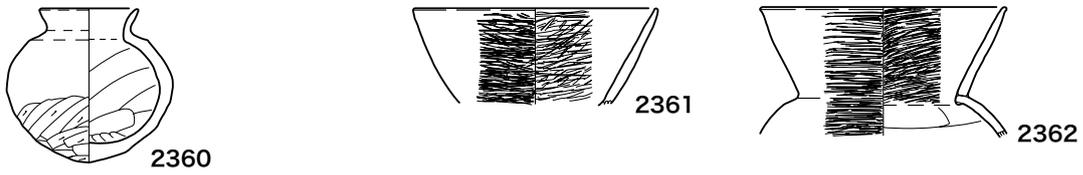
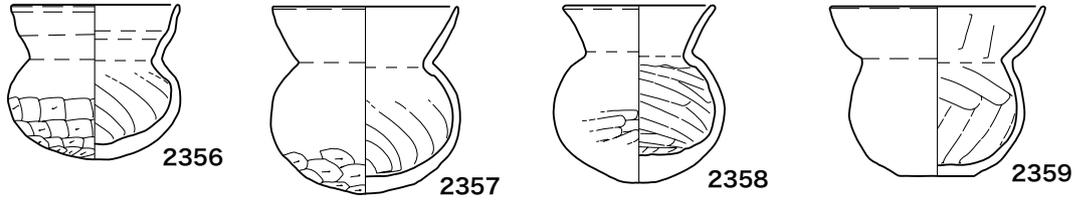
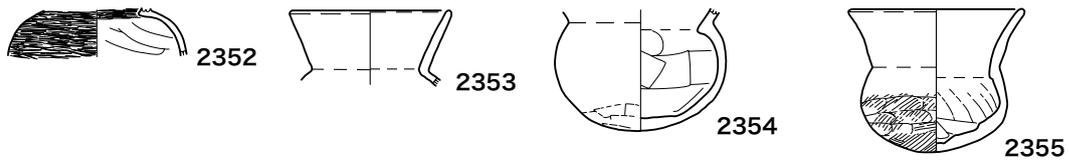
2306

1/4 0 20cm

SB2080-1

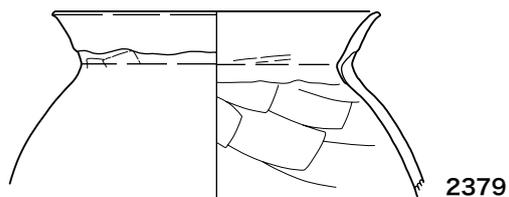
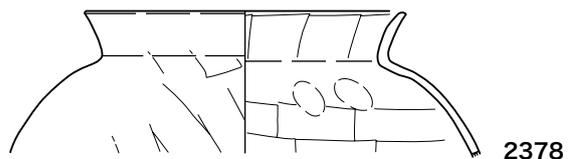
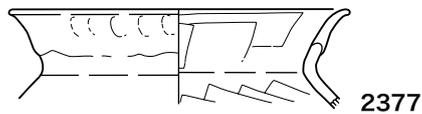
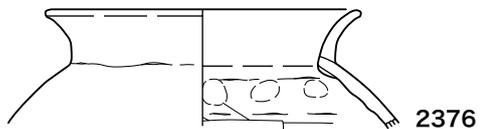
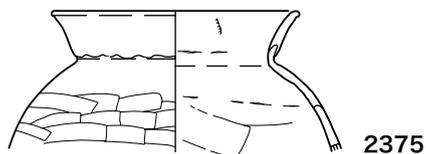
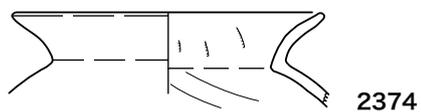
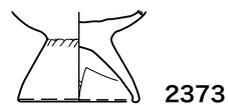
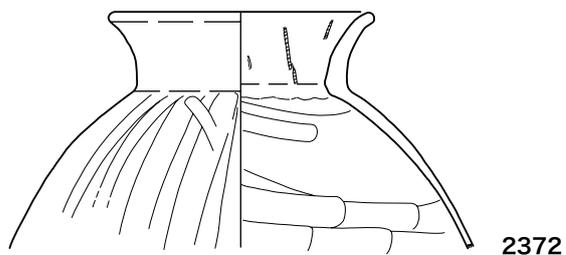
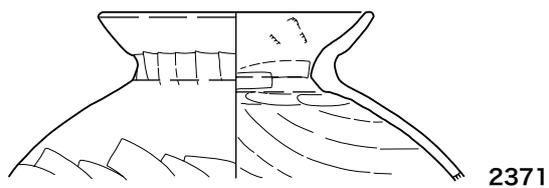
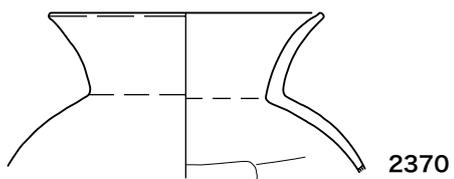


SB2080-2



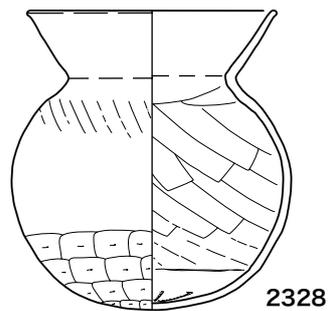
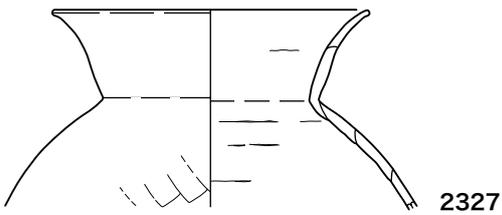
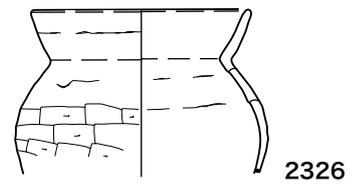
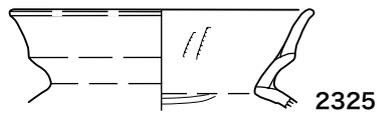
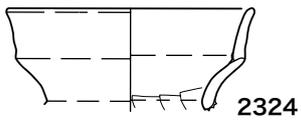
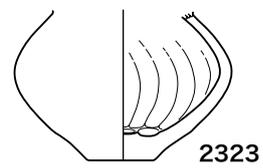
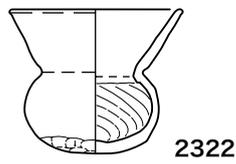
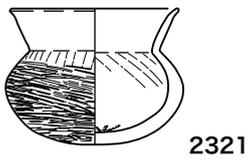
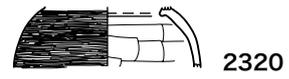
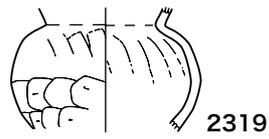
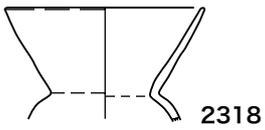
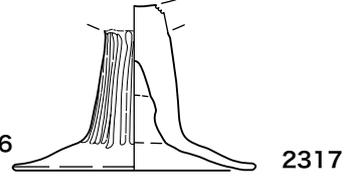
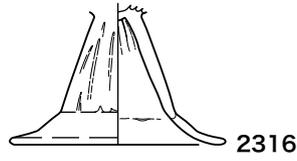
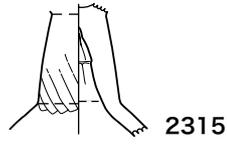
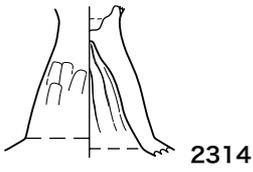
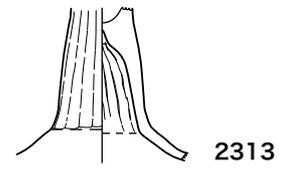
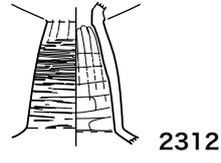
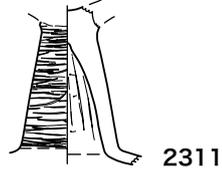
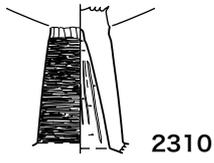
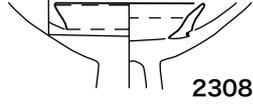
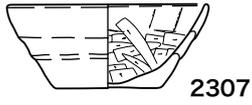
1/40 20cm

SB2080-3



1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

SB2080-4



1/4 0 20cm

SB2080-5



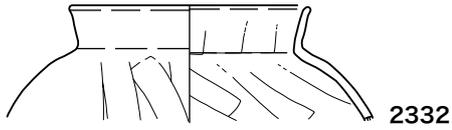
2329



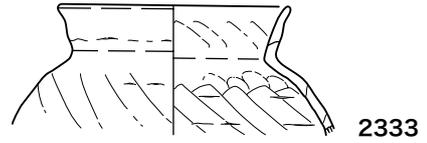
2330



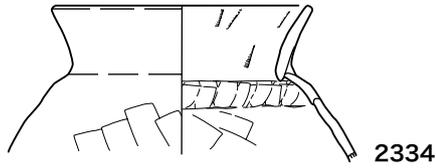
2331



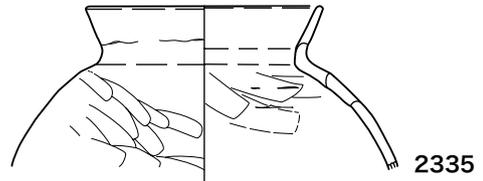
2332



2333

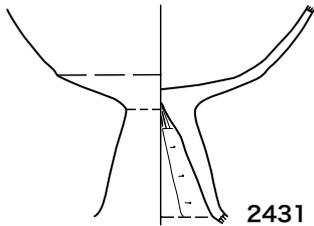


2334

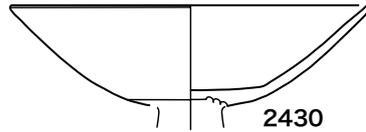


2335

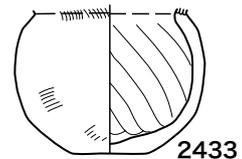
SB2085



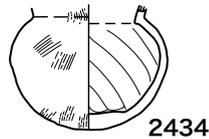
2431



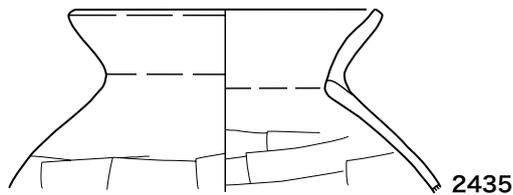
2430



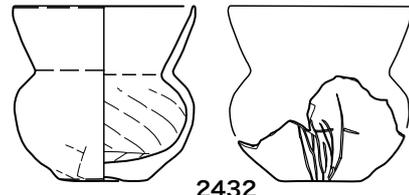
2433



2434



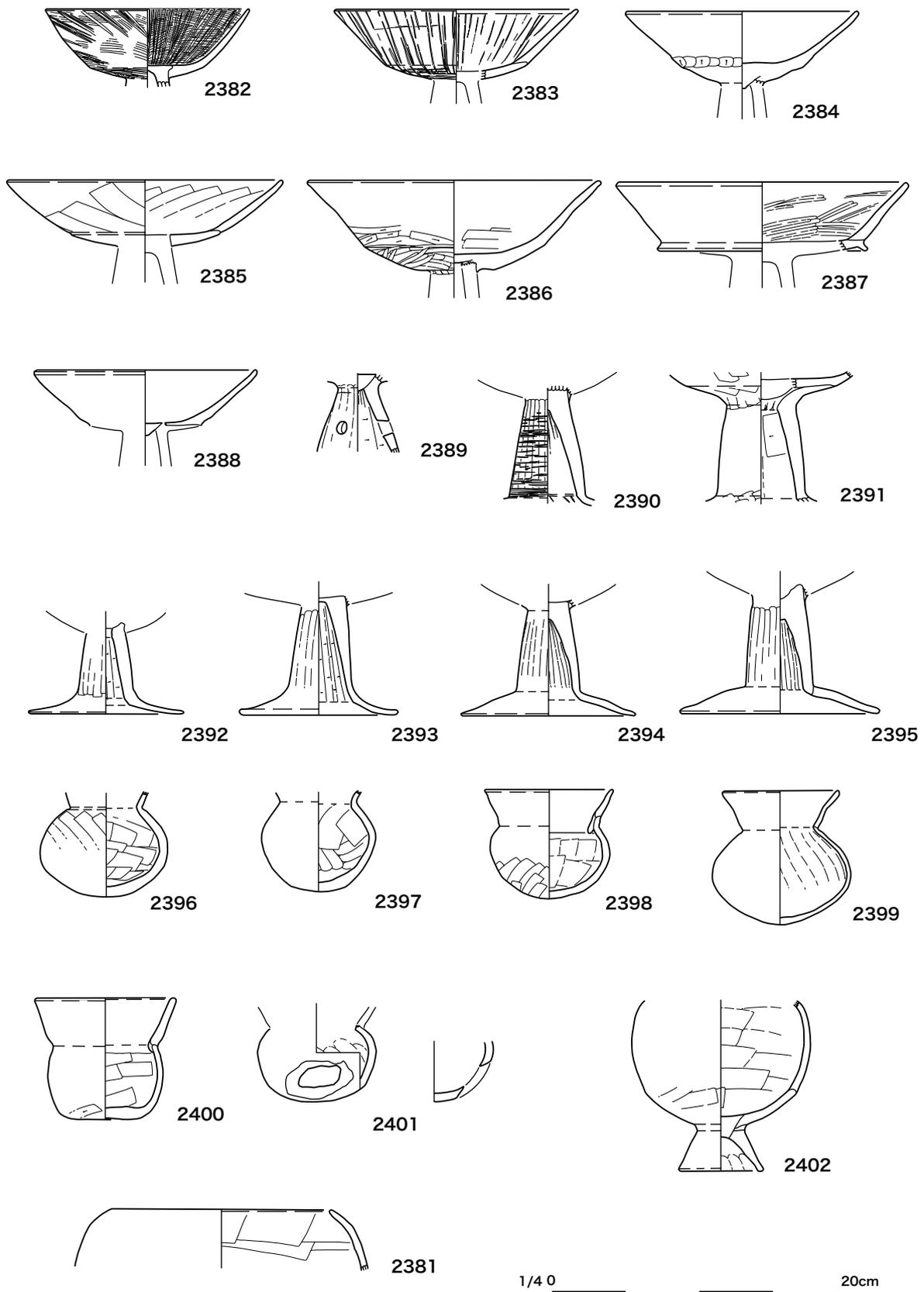
2435



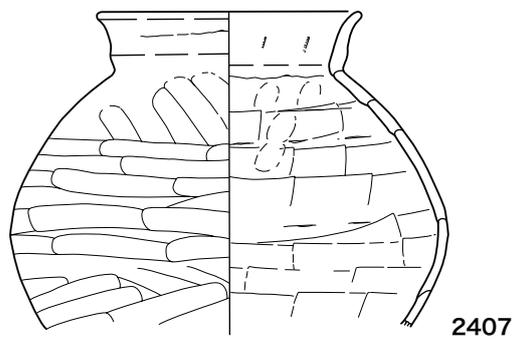
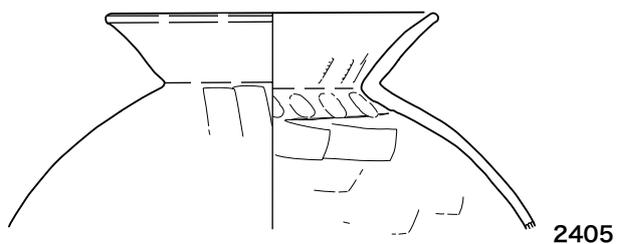
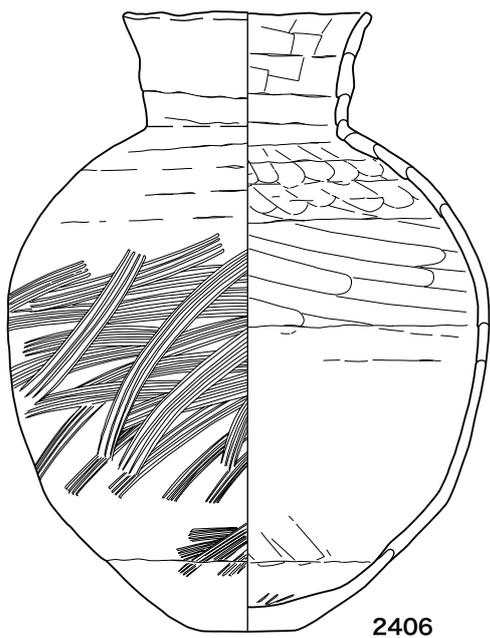
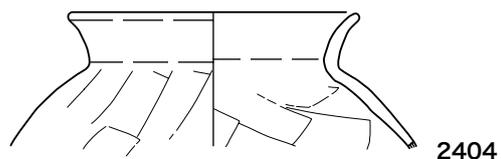
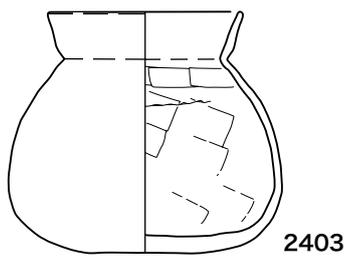
2432

1/40  20cm

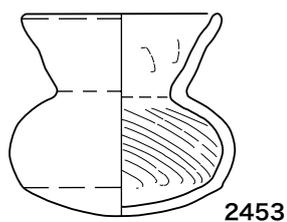
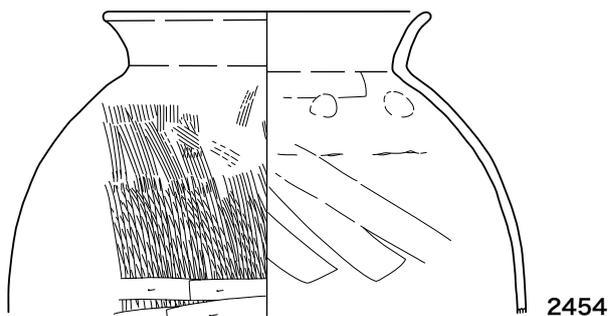
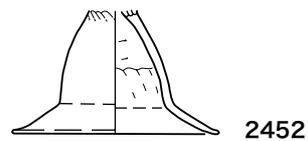
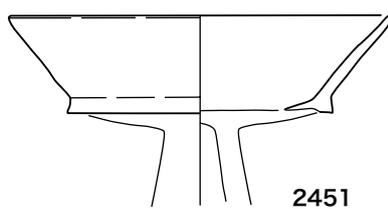
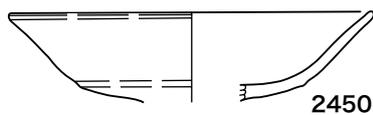
SB2081-1



SB2081-2

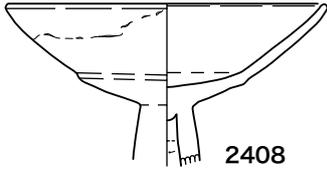


SB2088

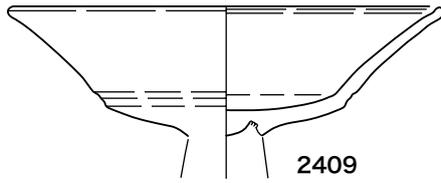


1/4 0 \_\_\_\_\_ 20cm

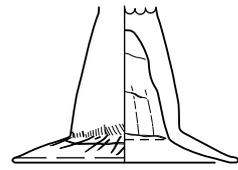
SB2082



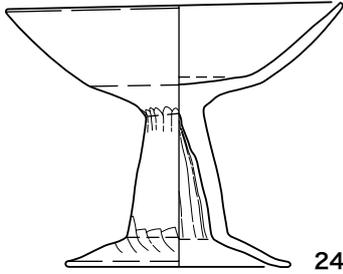
2408



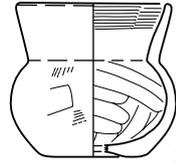
2409



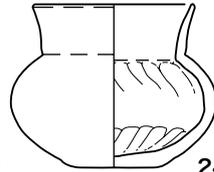
2410



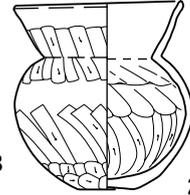
2411



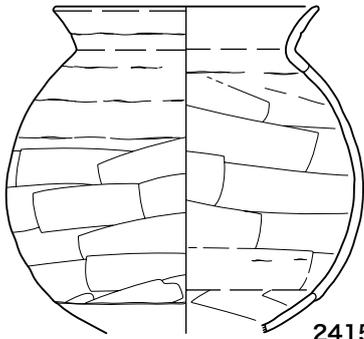
2412



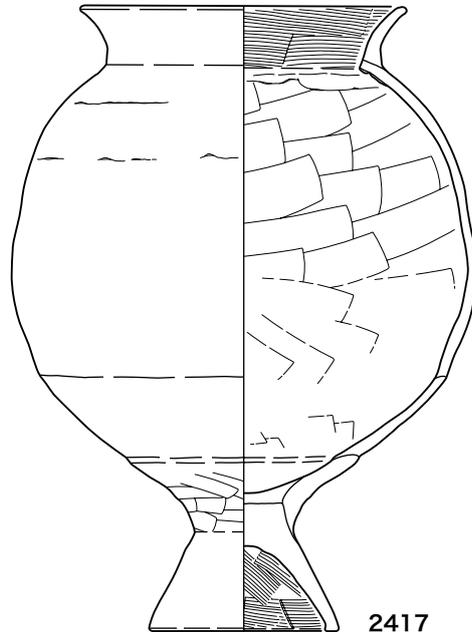
2413



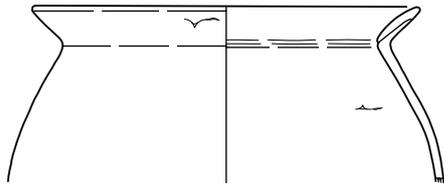
2414



2415



2417

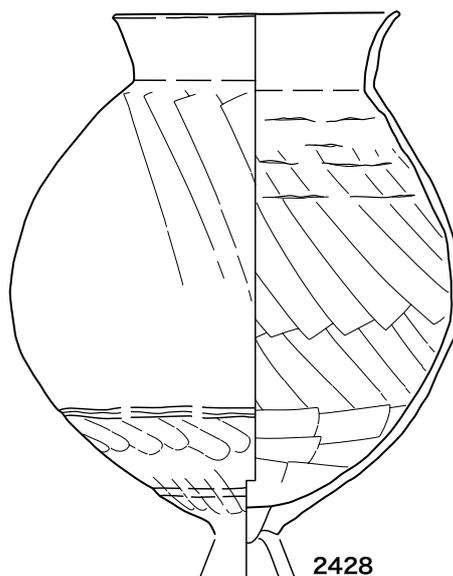
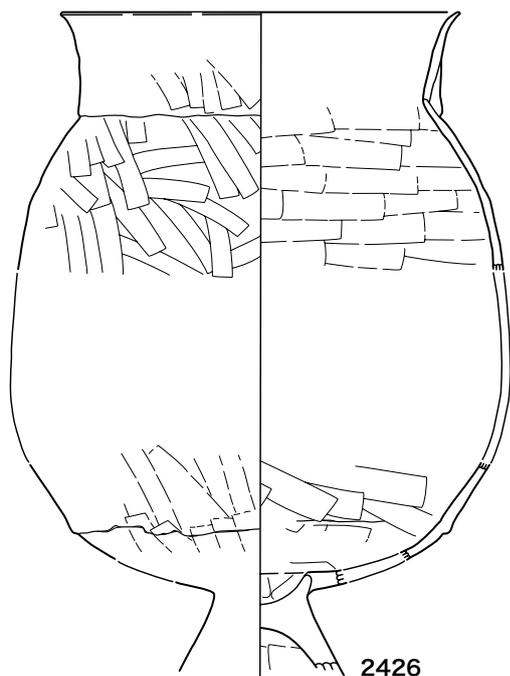
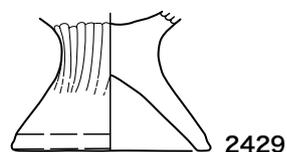
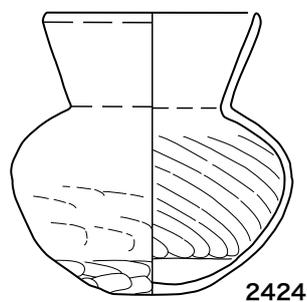
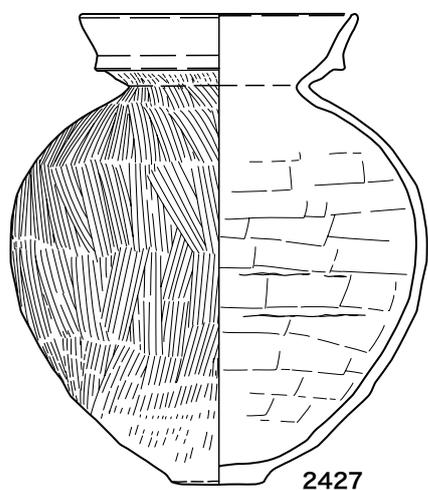
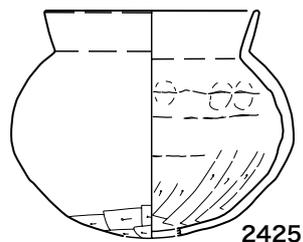
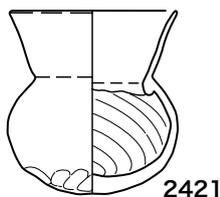
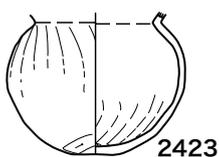
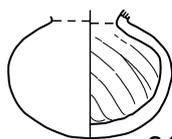
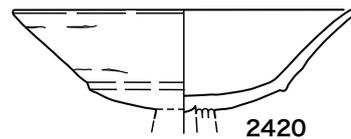
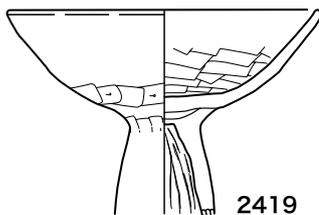
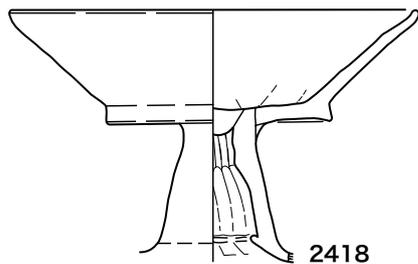


2416

1/4 0

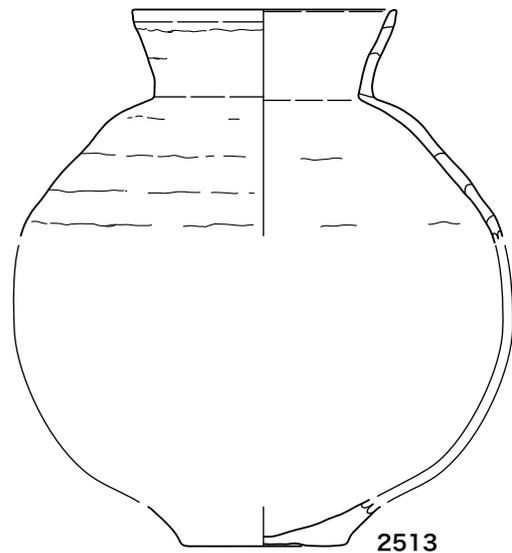
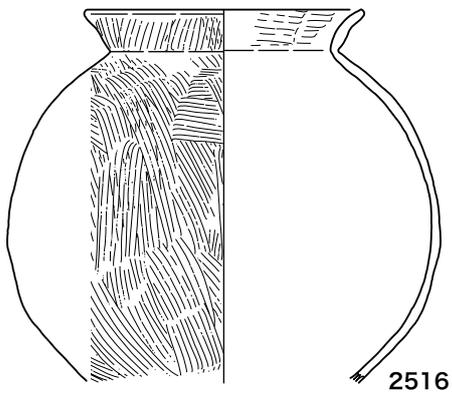
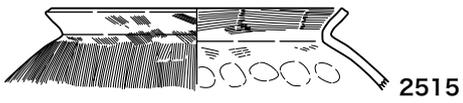
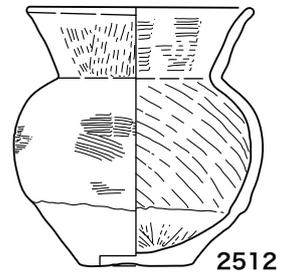
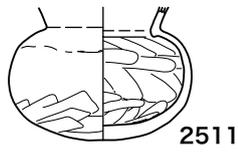
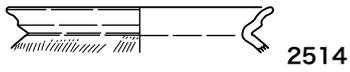
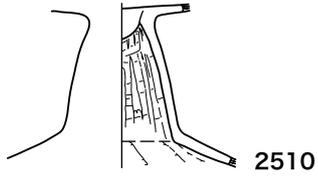
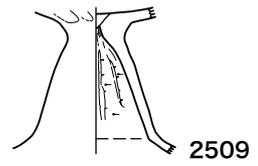
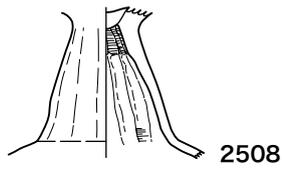
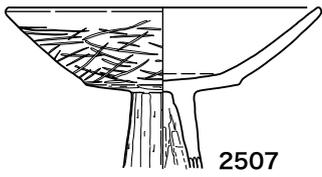
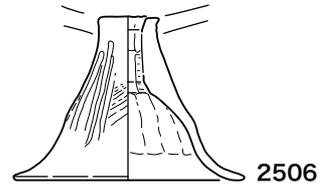
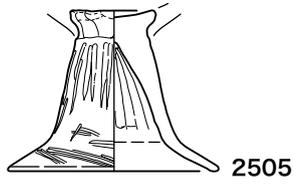
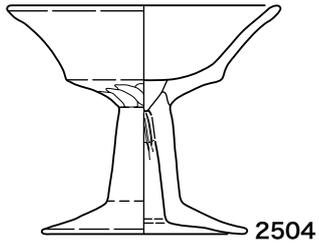
20cm

SB2083



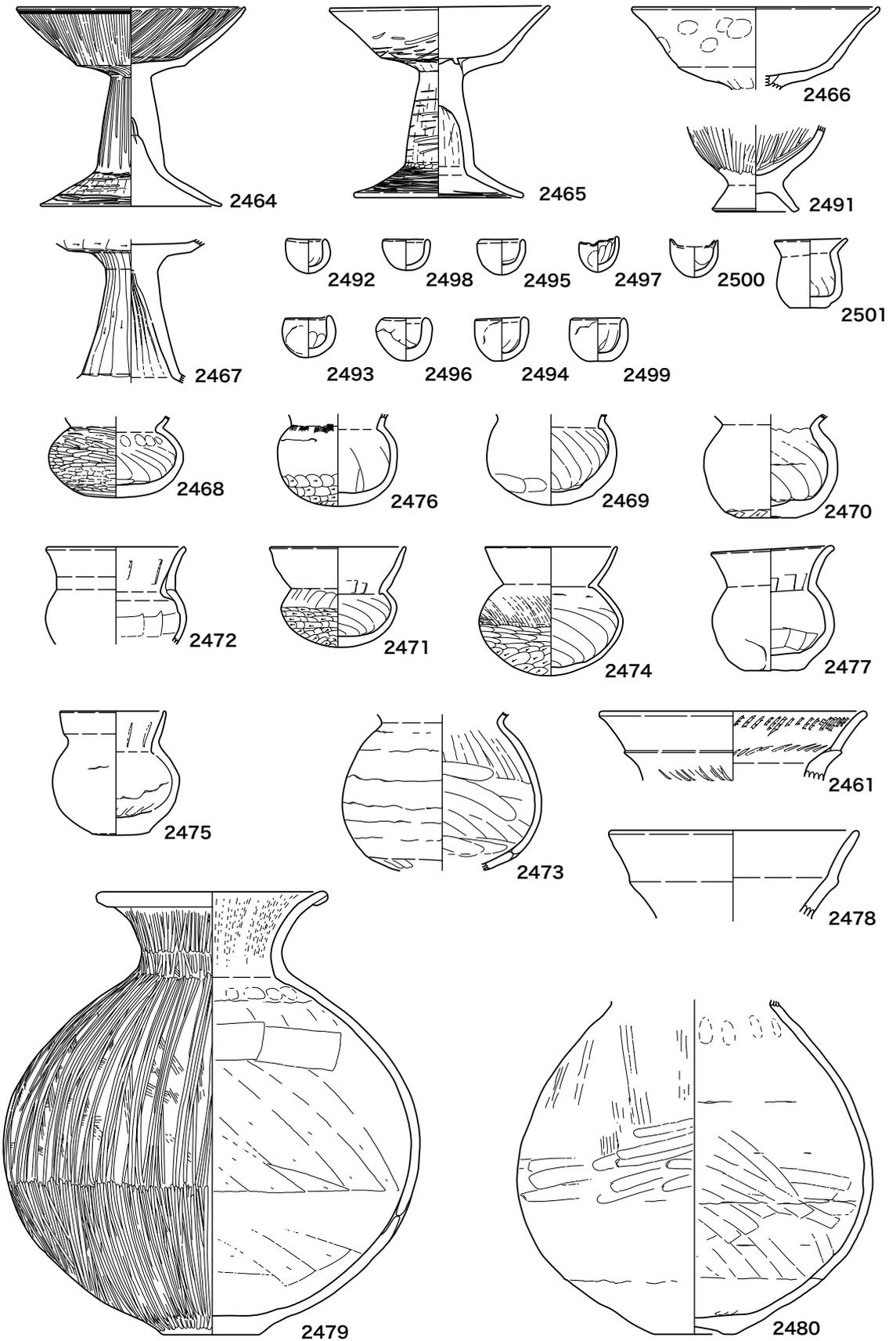
1/40 20cm

SD2001上層



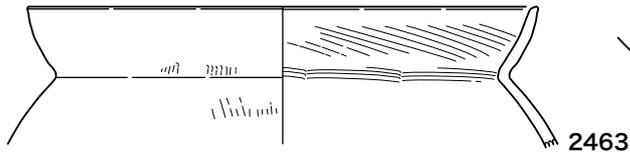
1/4 0 20cm

SD2001下層-1

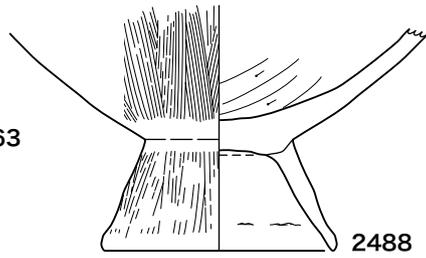


1/40 20cm

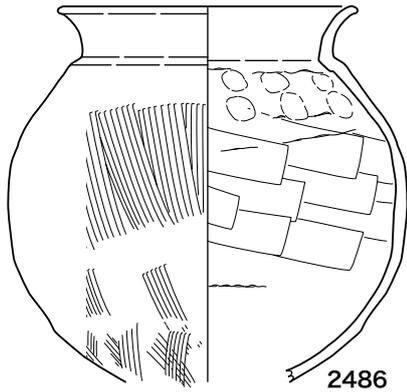
SD2001-下層2



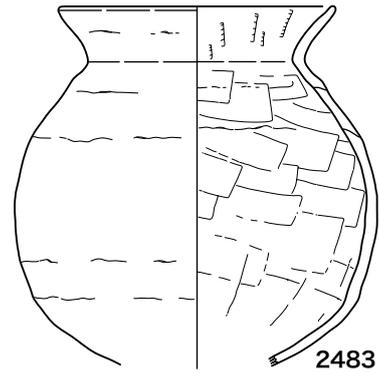
2463



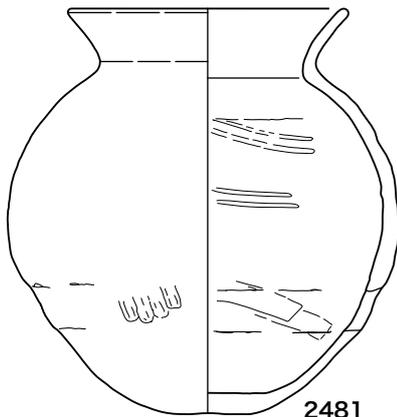
2488



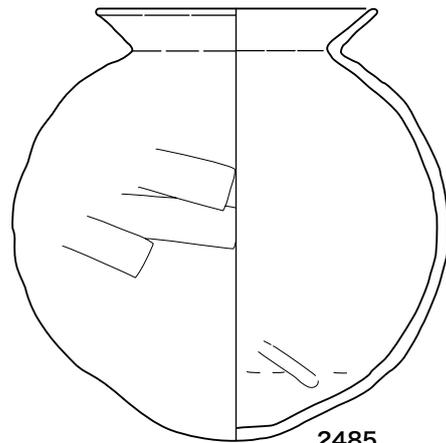
2486



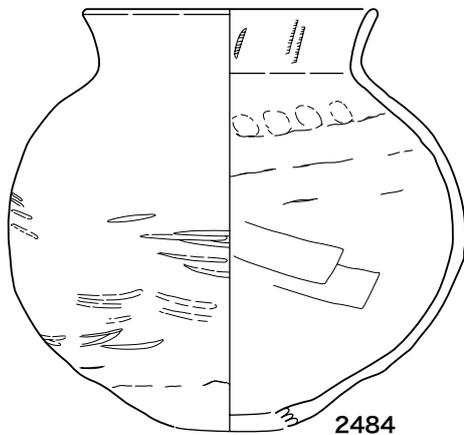
2483



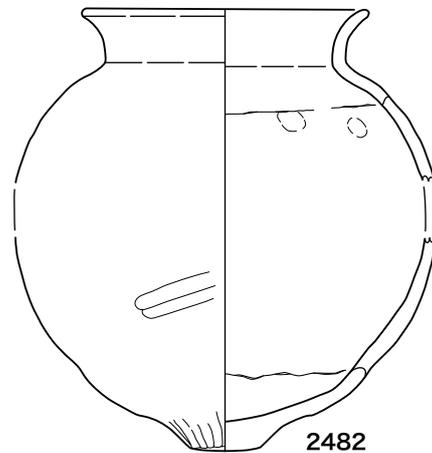
2481



2485



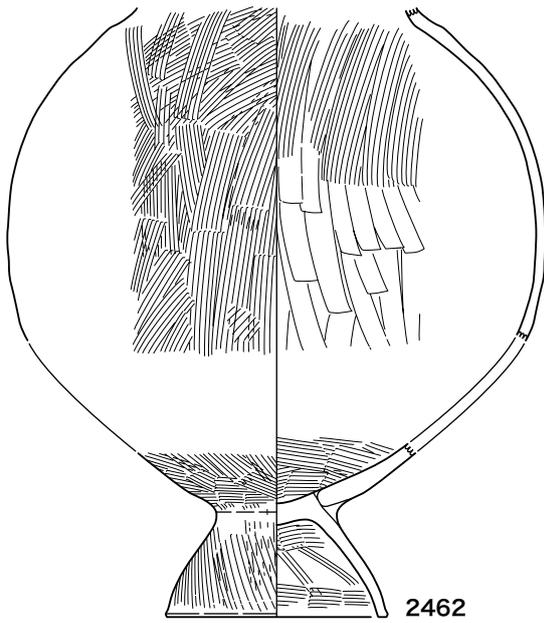
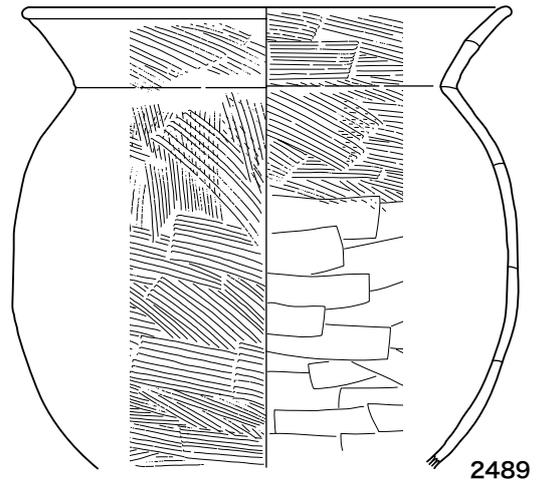
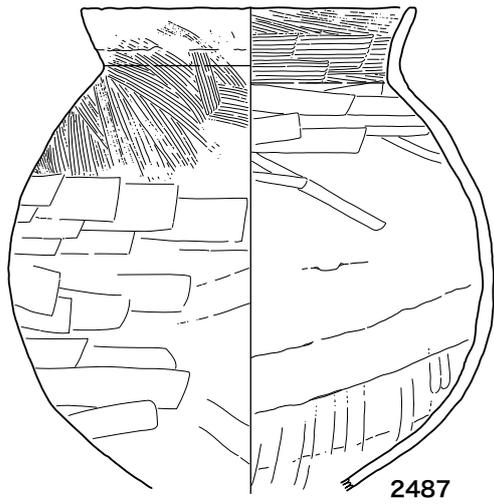
2484



2482

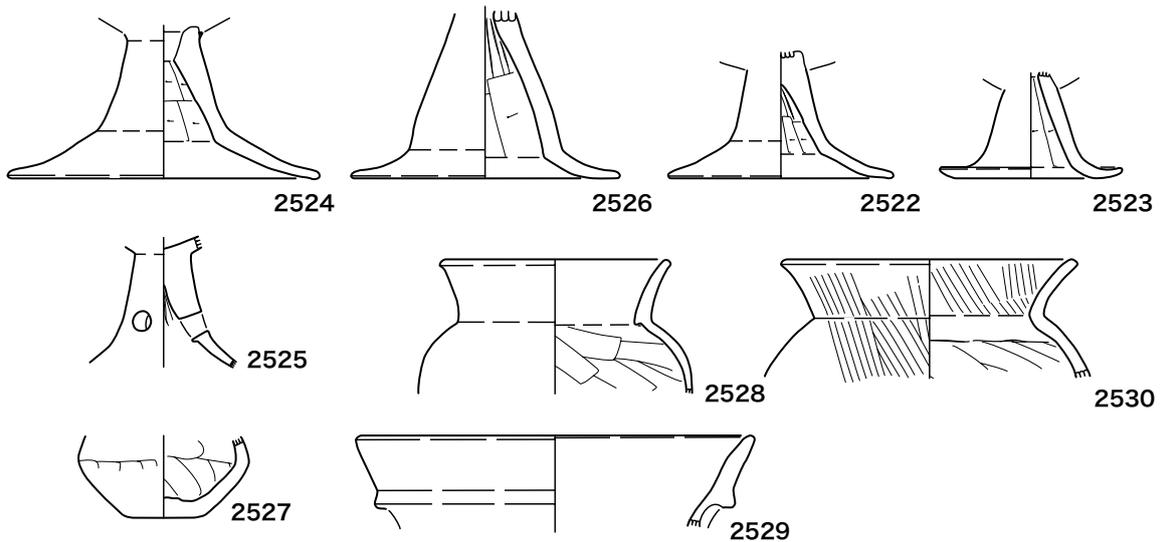
1/40  20cm

SD2001下層-3

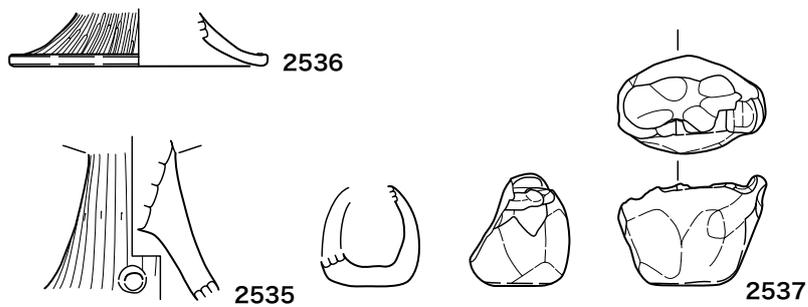


1/4 0 20cm

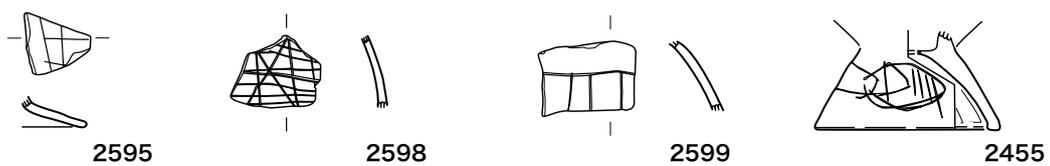
SD3001



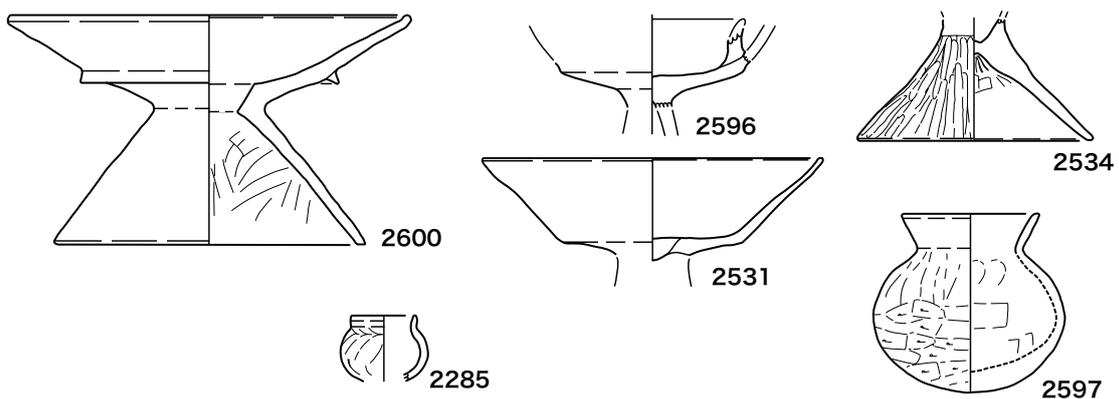
SD3003



検出 I・II

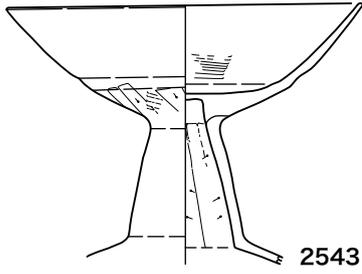


包含層出土

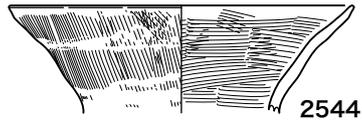


1/4 0 20cm

SK2005

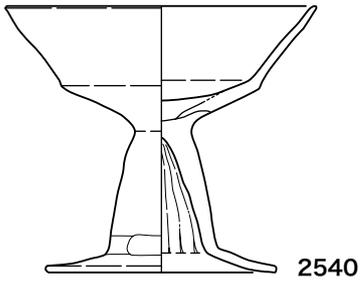


2543

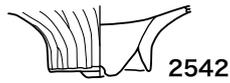


2544

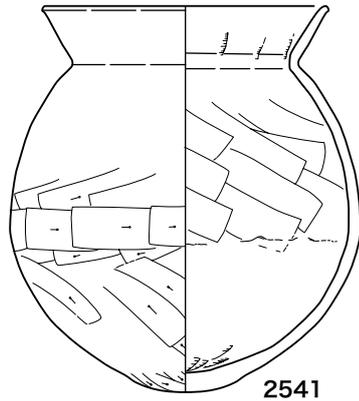
SK2002



2540

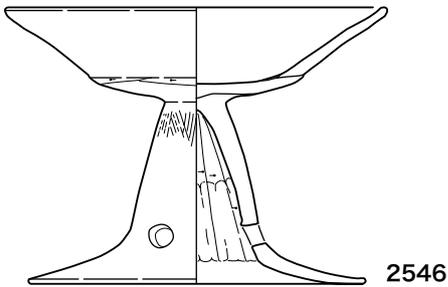


2542

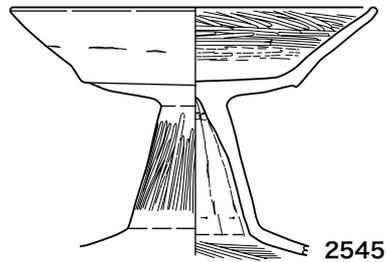


2541

SK2007



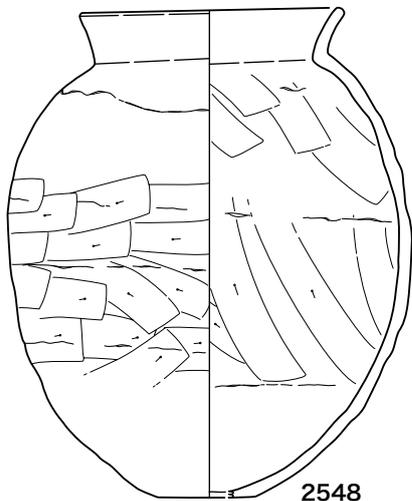
2546



2545



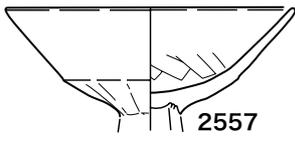
2547



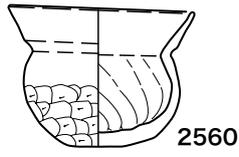
2548

1/4 0 20cm

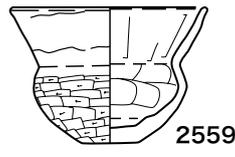
SK2112



2557



2560



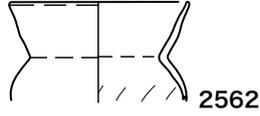
2559



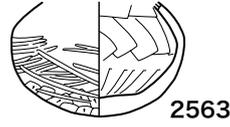
2561



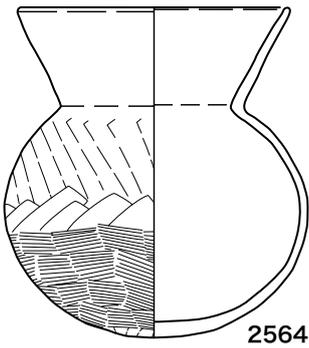
2558



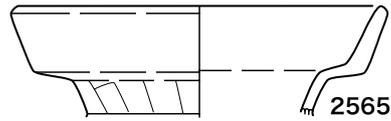
2562



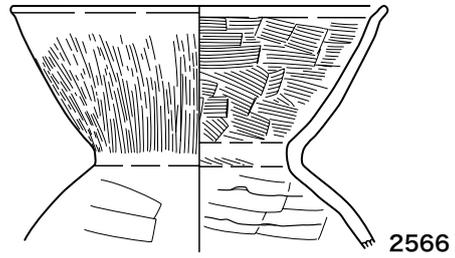
2563



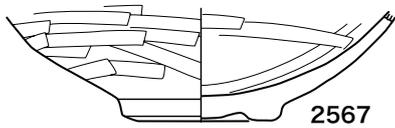
2564



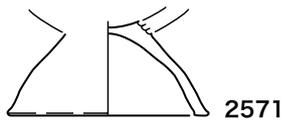
2565



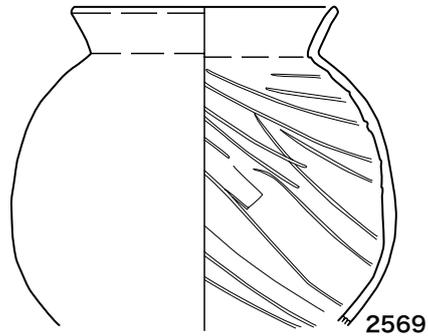
2566



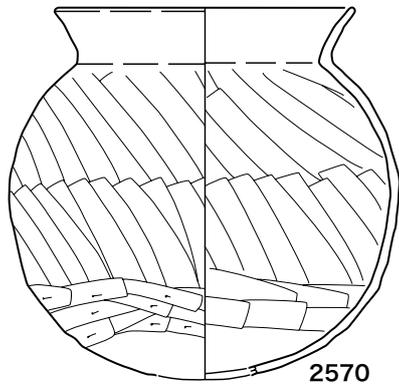
2567



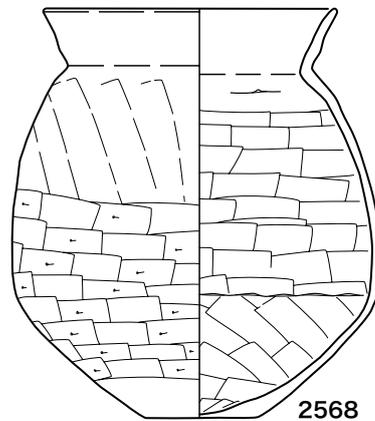
2571



2569



2570



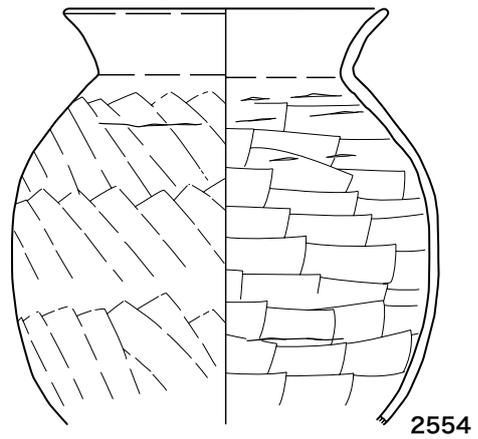
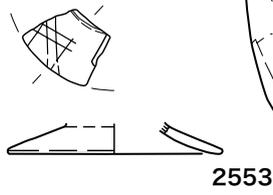
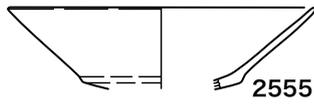
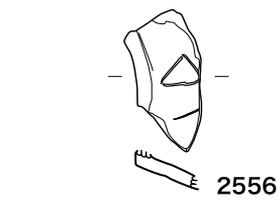
2568

1/4 0 20cm

SK2106

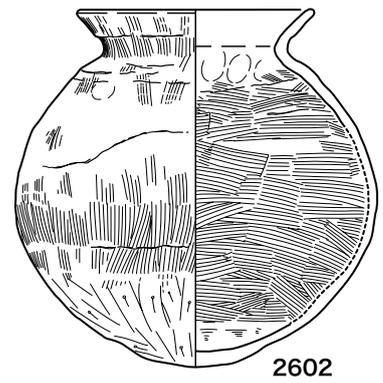
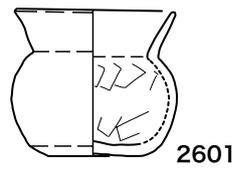
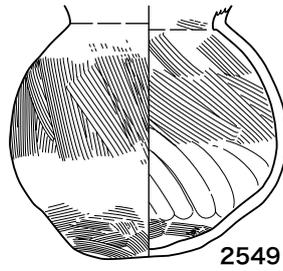
SK2021

SK2101

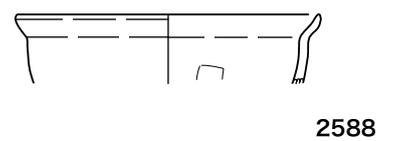
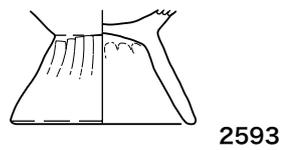
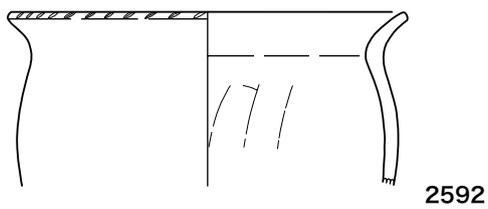
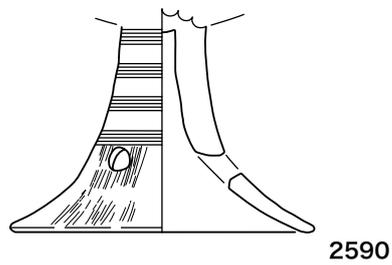
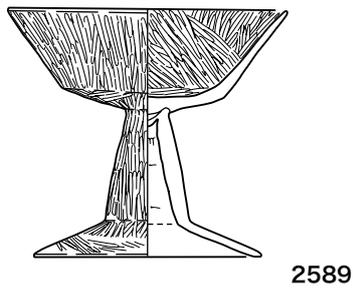


SK2009

試掘出土遺物



C区土器集積

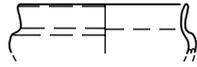


1/4 0 20cm

SD3002

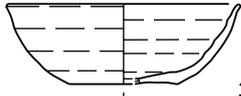


3001

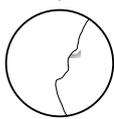


3002

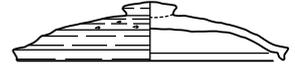
SD3004



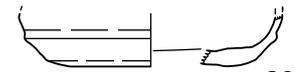
3003



3004



3005

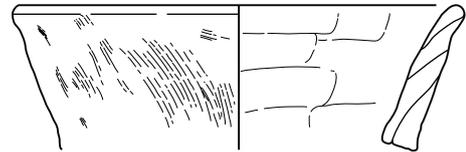


3006

SD5007



3008

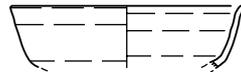


3007

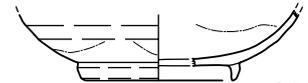
NR3001



3009



3010



3011

SB2080上層



3012

SK2084



3013

SX3001



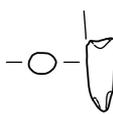
3014

検出

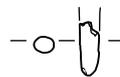
A区



3015



3016



3017

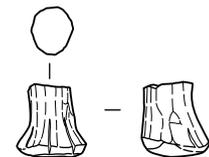
B区



3018



3019



3020

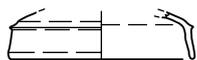
1/4 0 20cm

## 検出II

### B区



3021



3022



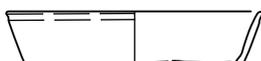
3023



3024



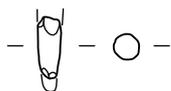
3025



3026



3027



3028

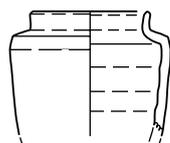


### 表土はぎ

#### A区



3029



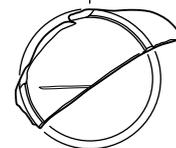
3031



3033



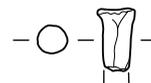
3030



3034



3032



3035

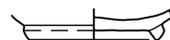
### その他



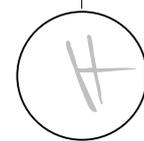
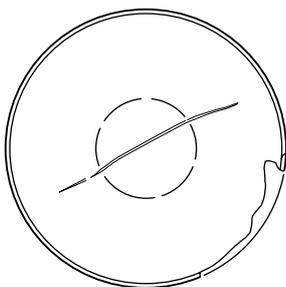
3036



3037

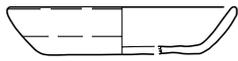


3038

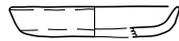


1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

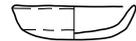
NR4001



4001



4002



4003



4004



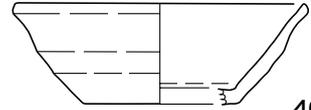
4005



4006



4007



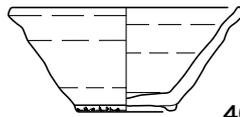
4008

検出I

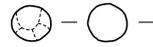
A区



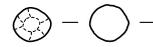
4009



4010



4015



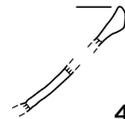
4016



4011



4012



4013・401

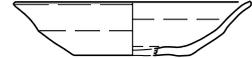
B区



4017



4018



4019



4020

D区



4021

検出II

A区南北トレンチ

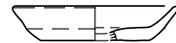
A区北壁トレンチ



4022



4023



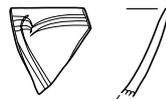
4024

表土はぎ

A区



4025

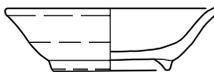


4026



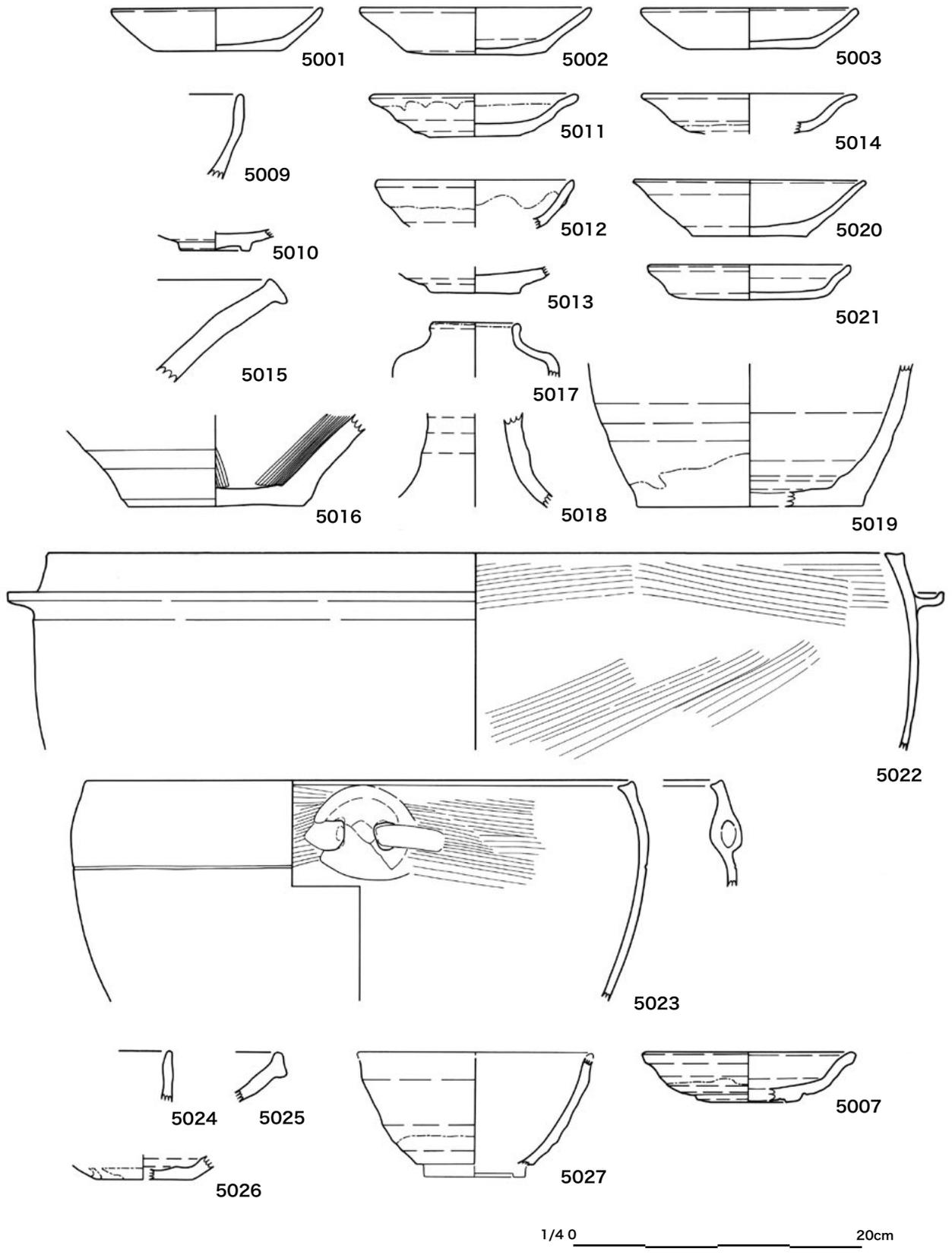
4027

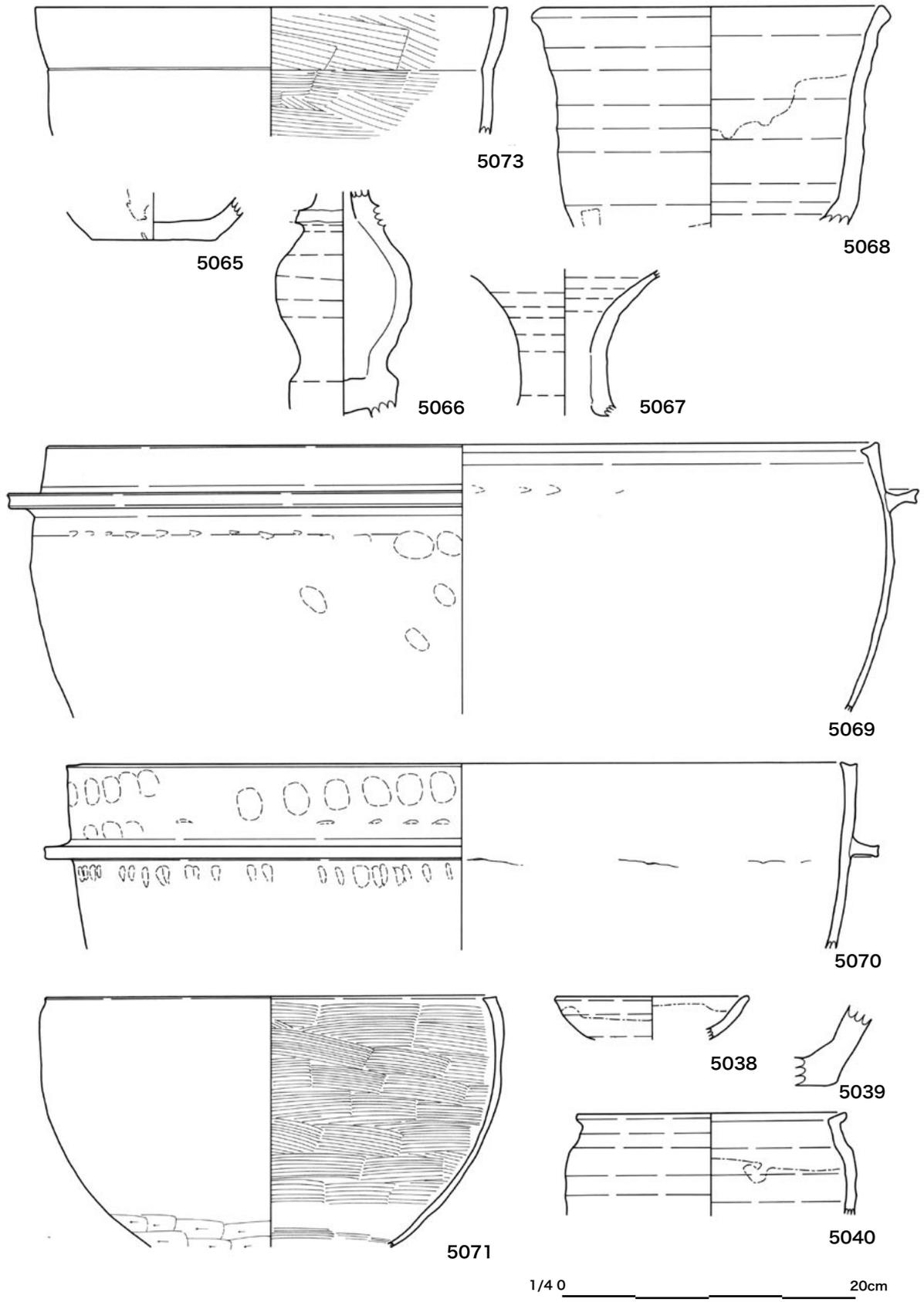
B区



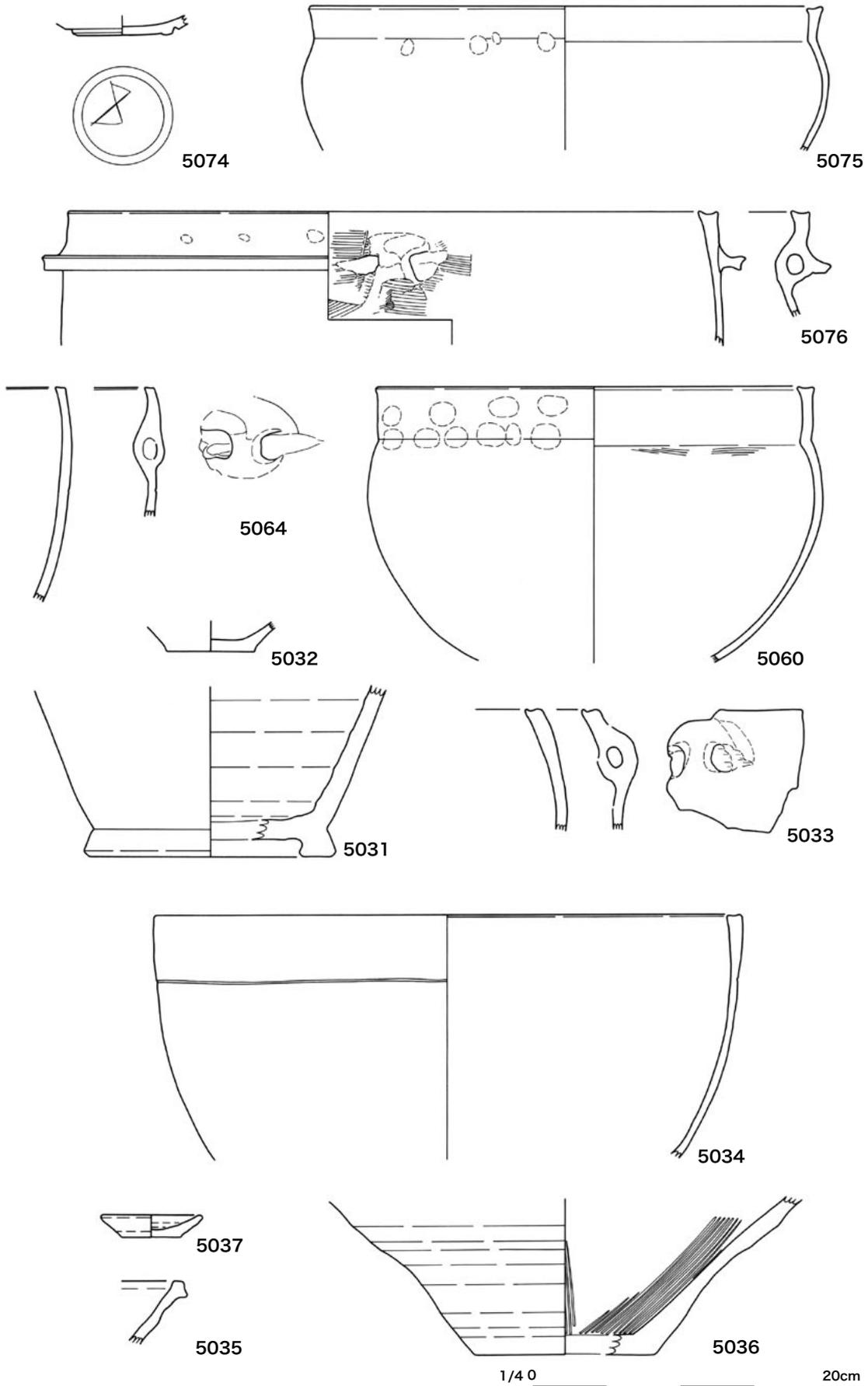
4028

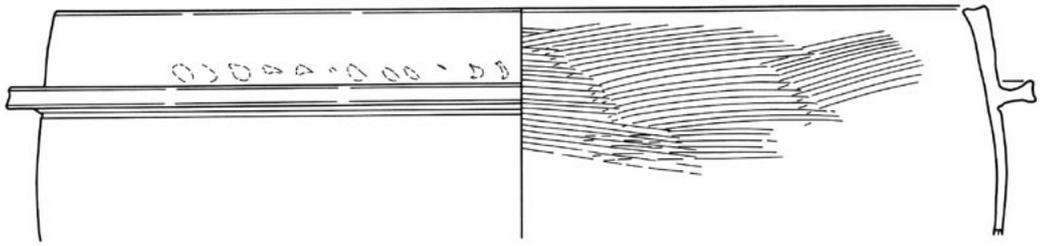
1/4 0 20cm



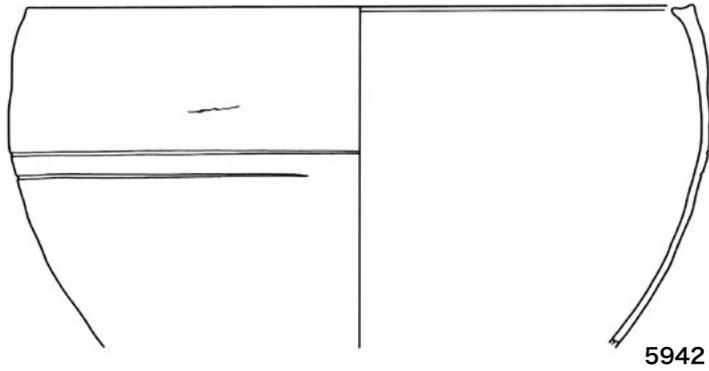




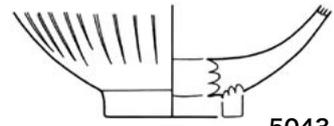




5041



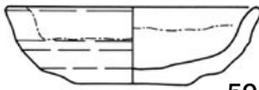
5942



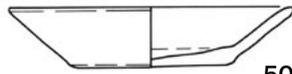
5043



5047



5044



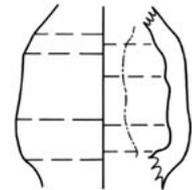
5048



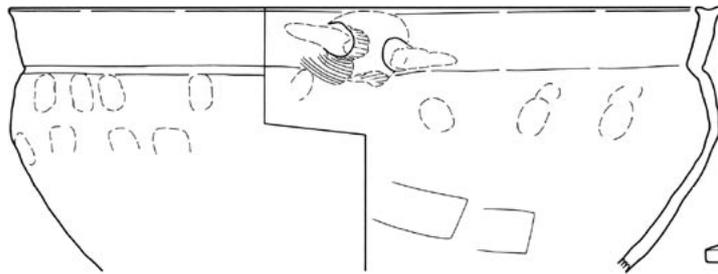
5045



5049



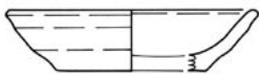
5046



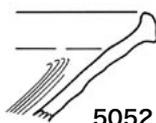
5050



5051



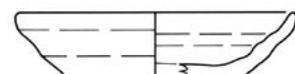
5053



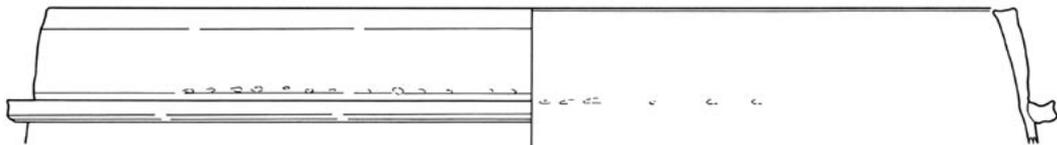
5052



5054

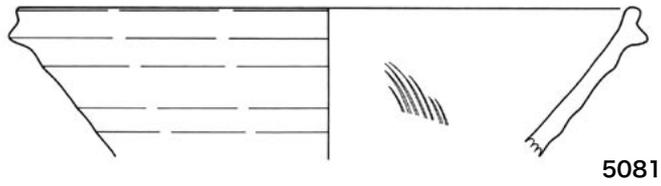
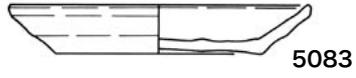
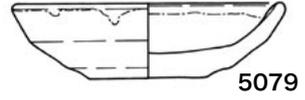
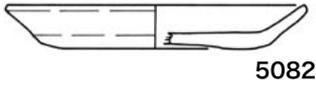
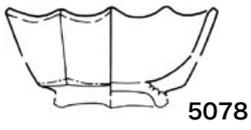
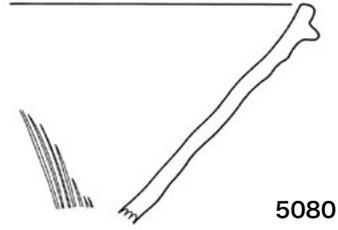
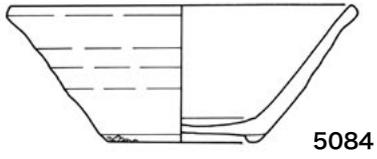
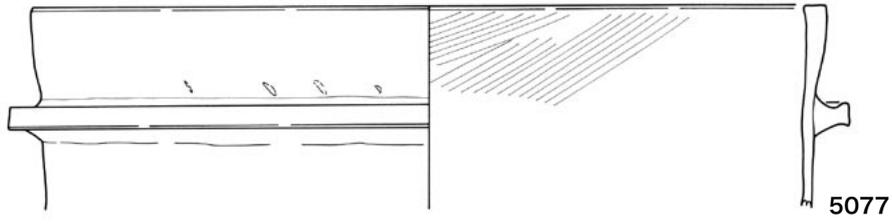


5058



5059

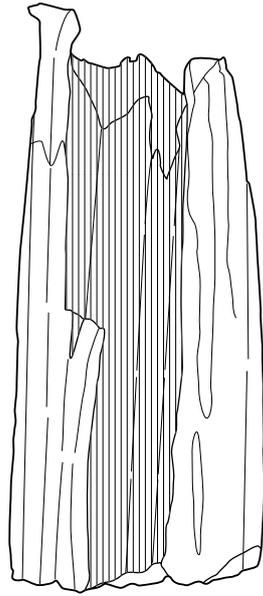
1/4 0 \_\_\_\_\_ 20cm



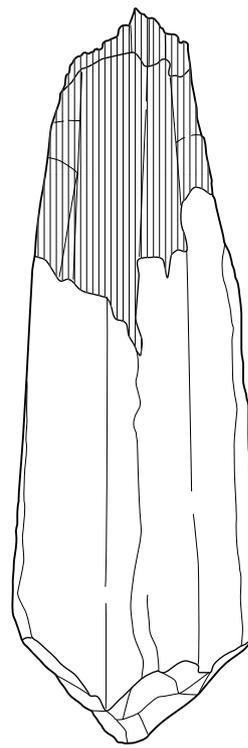
1/4 0  20cm



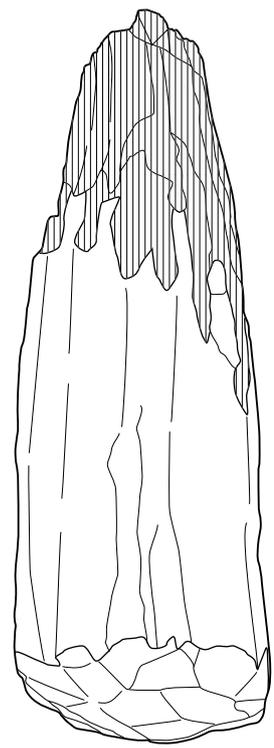
P1004



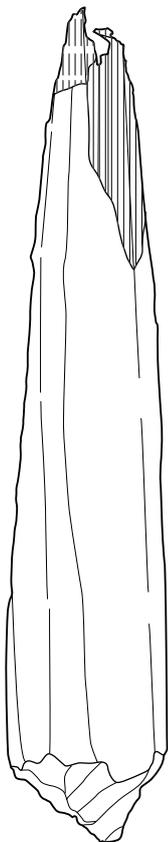
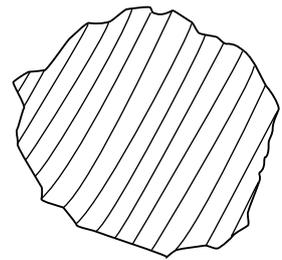
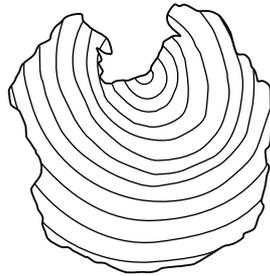
1064



P1008-1



1065



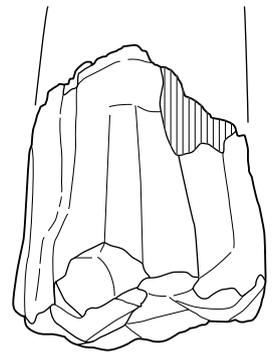
P1008-2



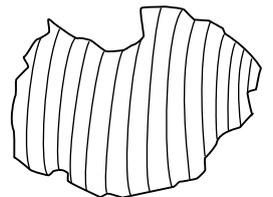
1066



P1011

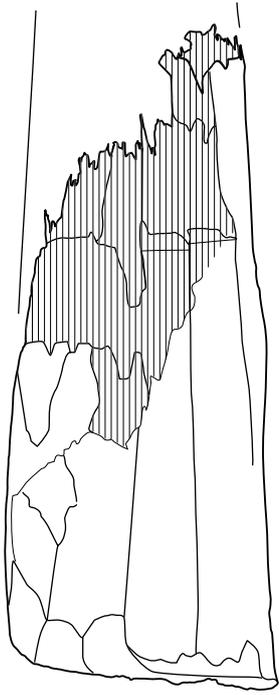


1069

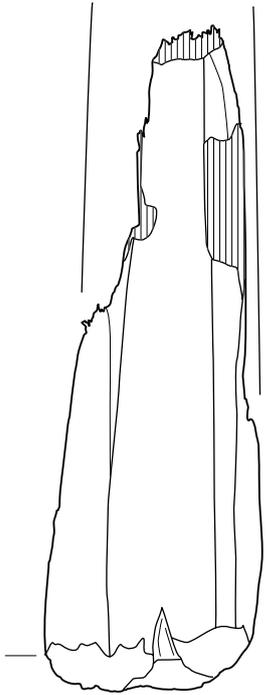


1/40 20cm

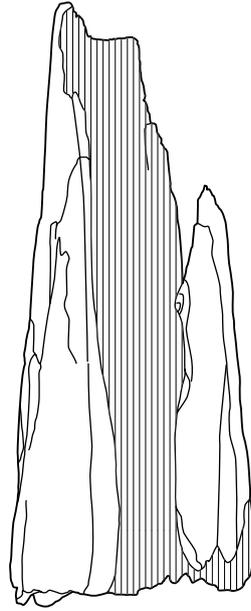
SB1013-2



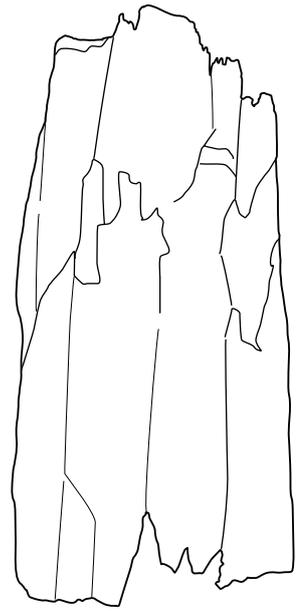
P1009



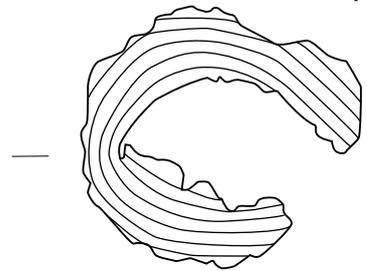
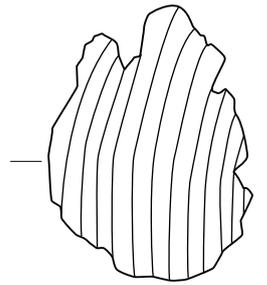
1067



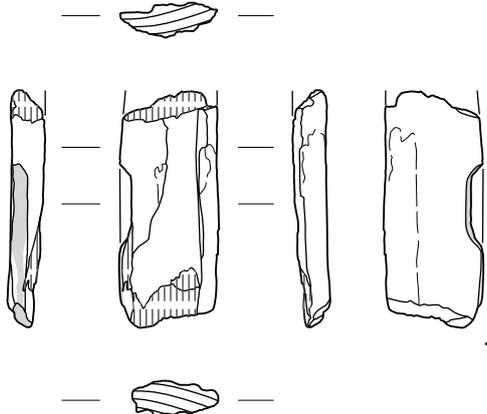
P1010



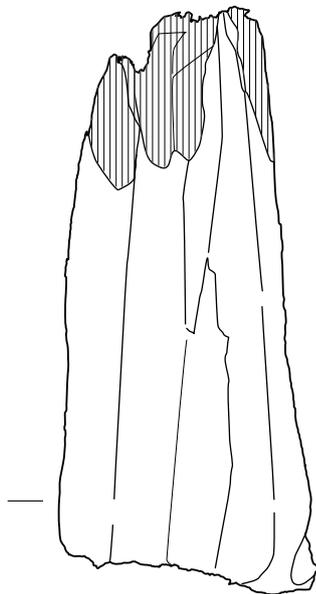
1068



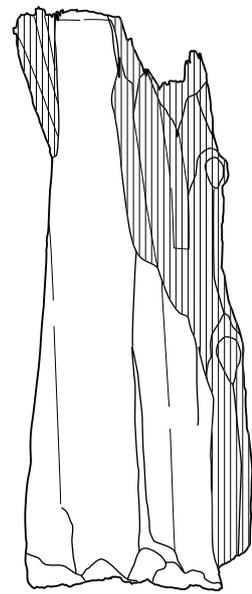
SD1003



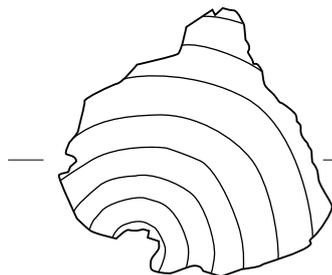
1071



1070

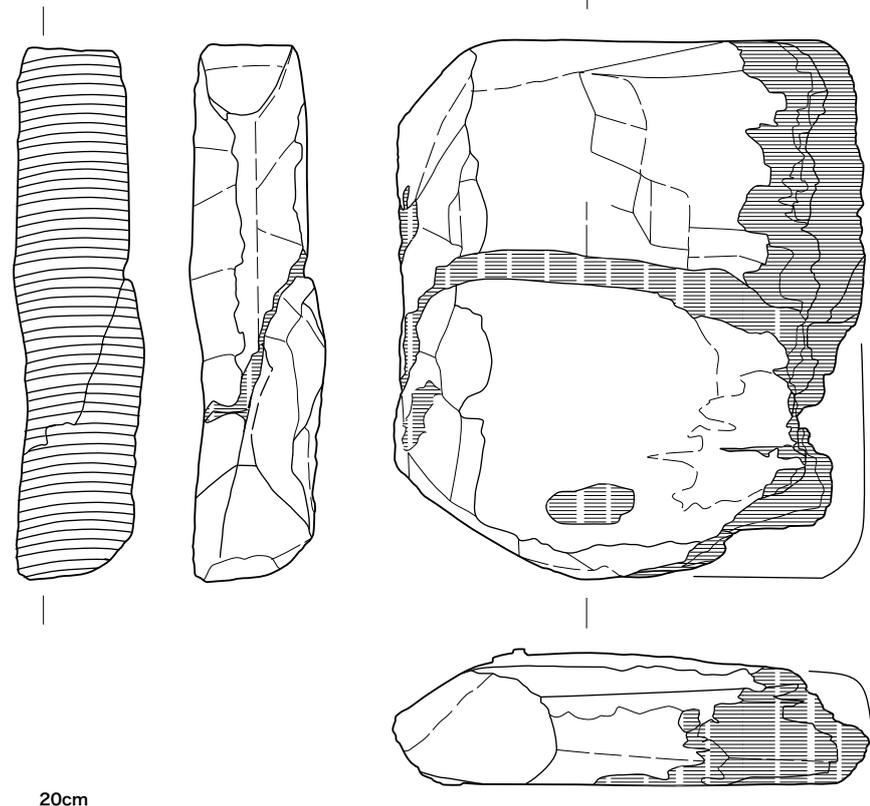
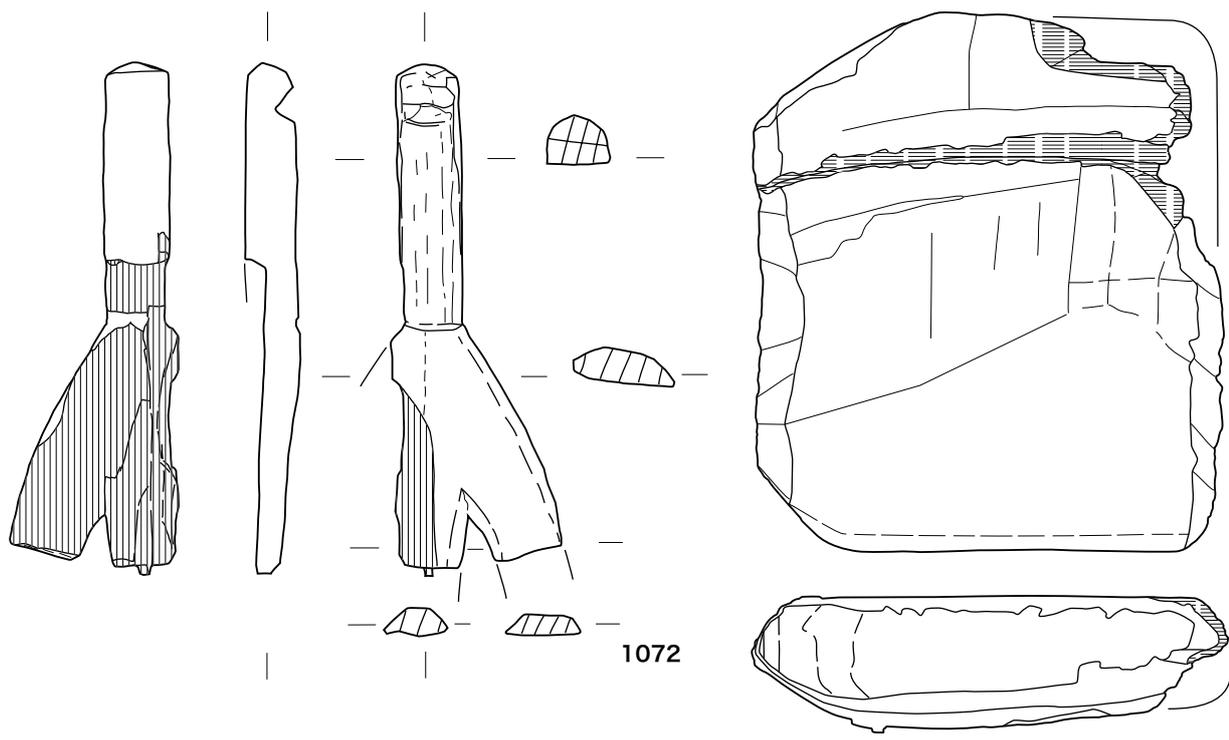


P1012



1/40 20cm

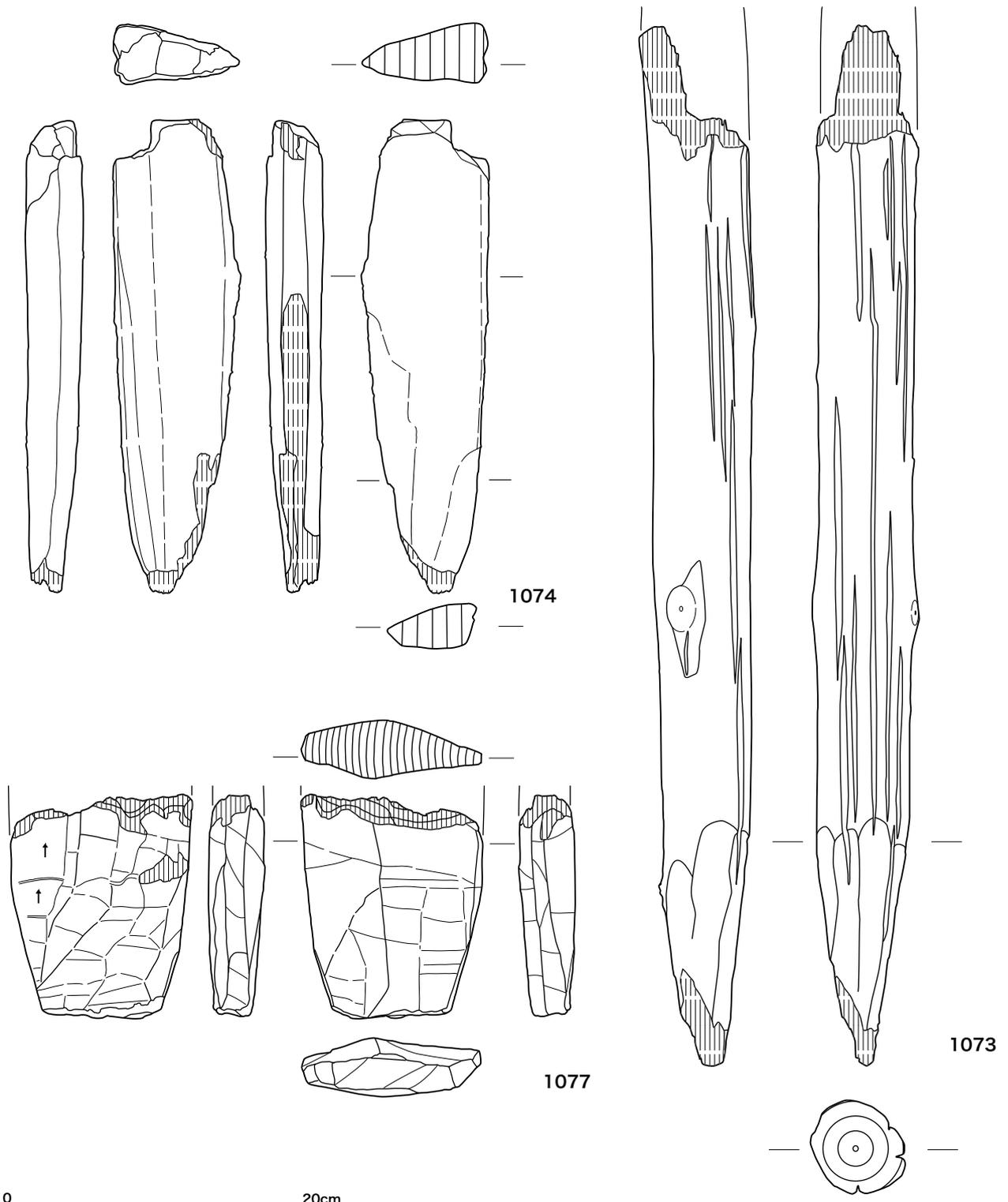
SD1005-1



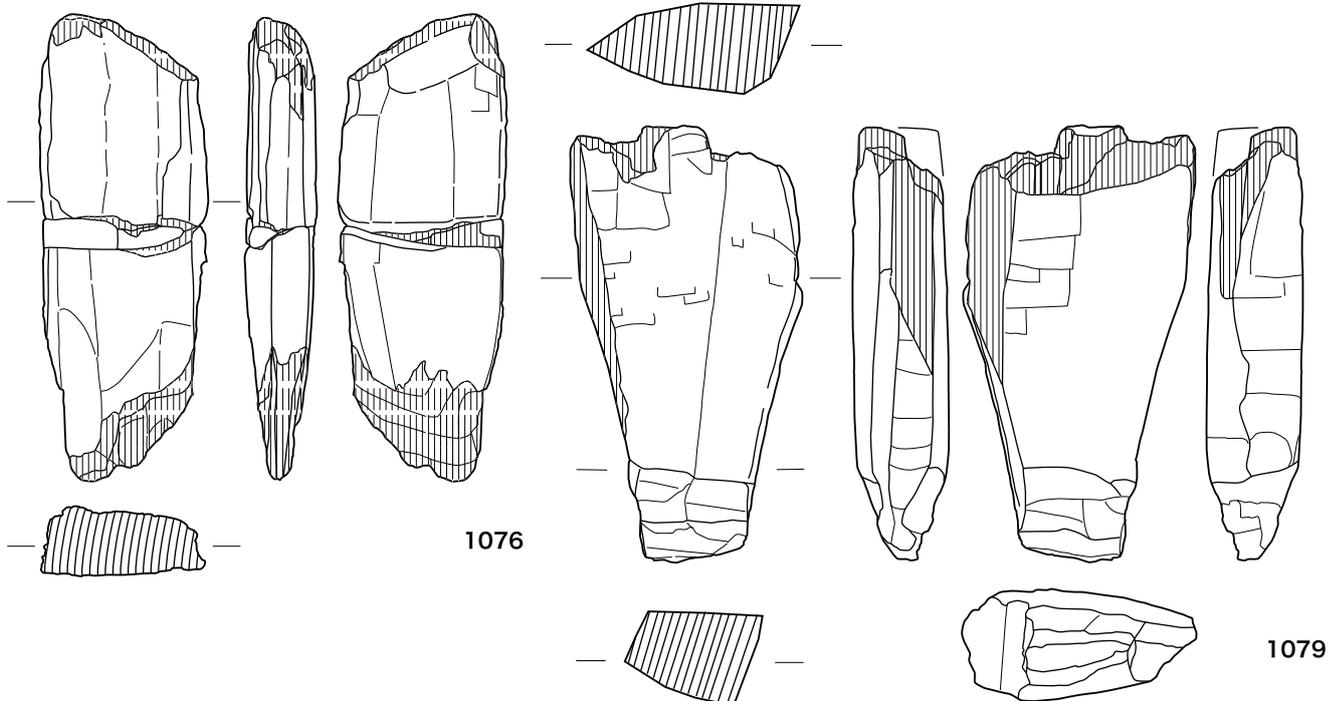
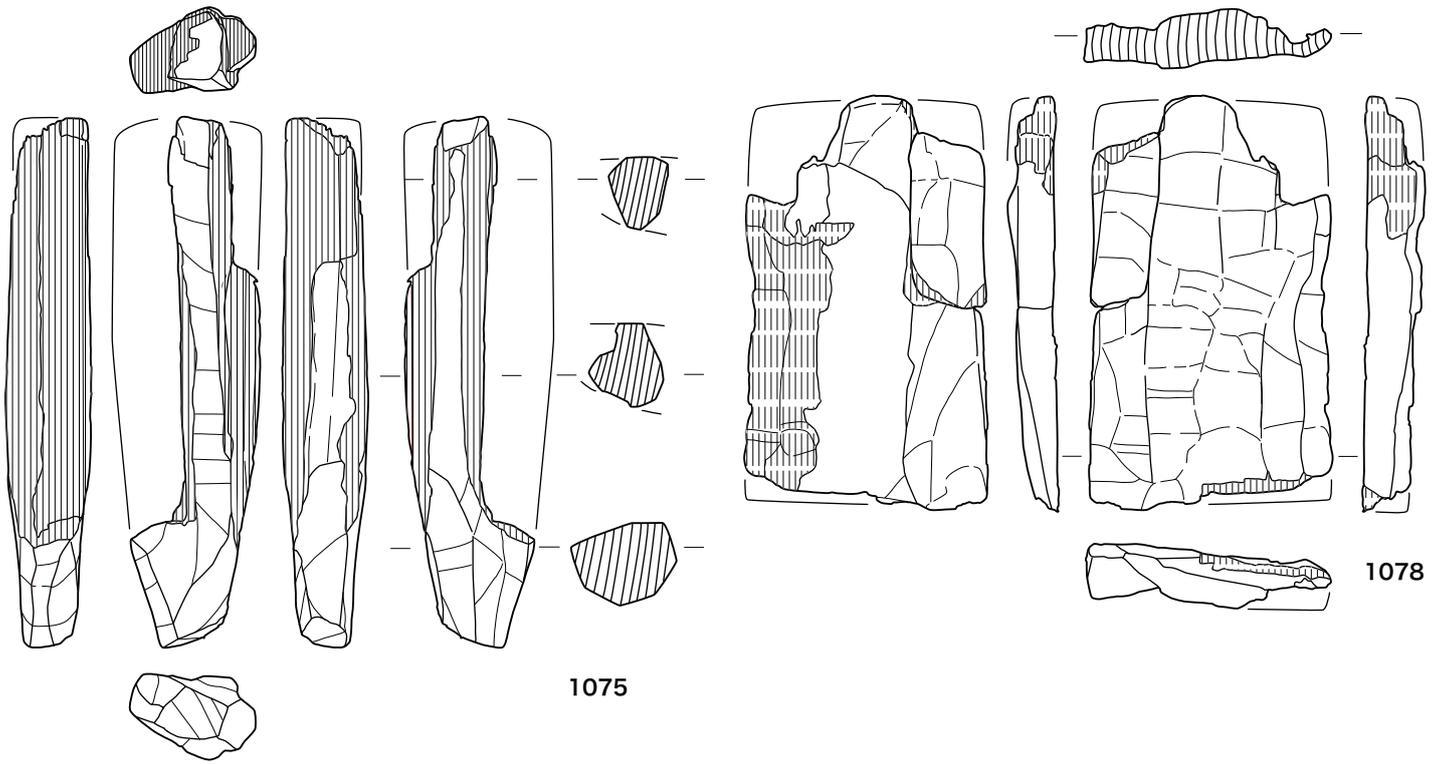
1/40 20cm

1087

SD1005-2

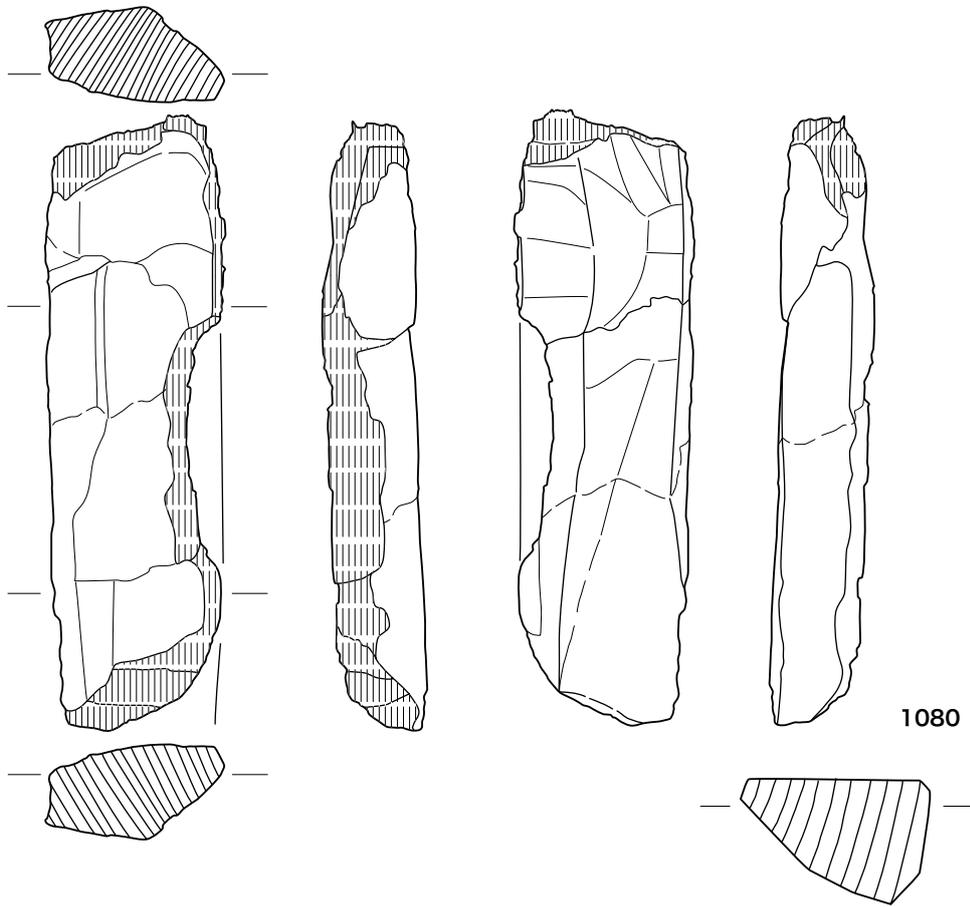


SD1005-3

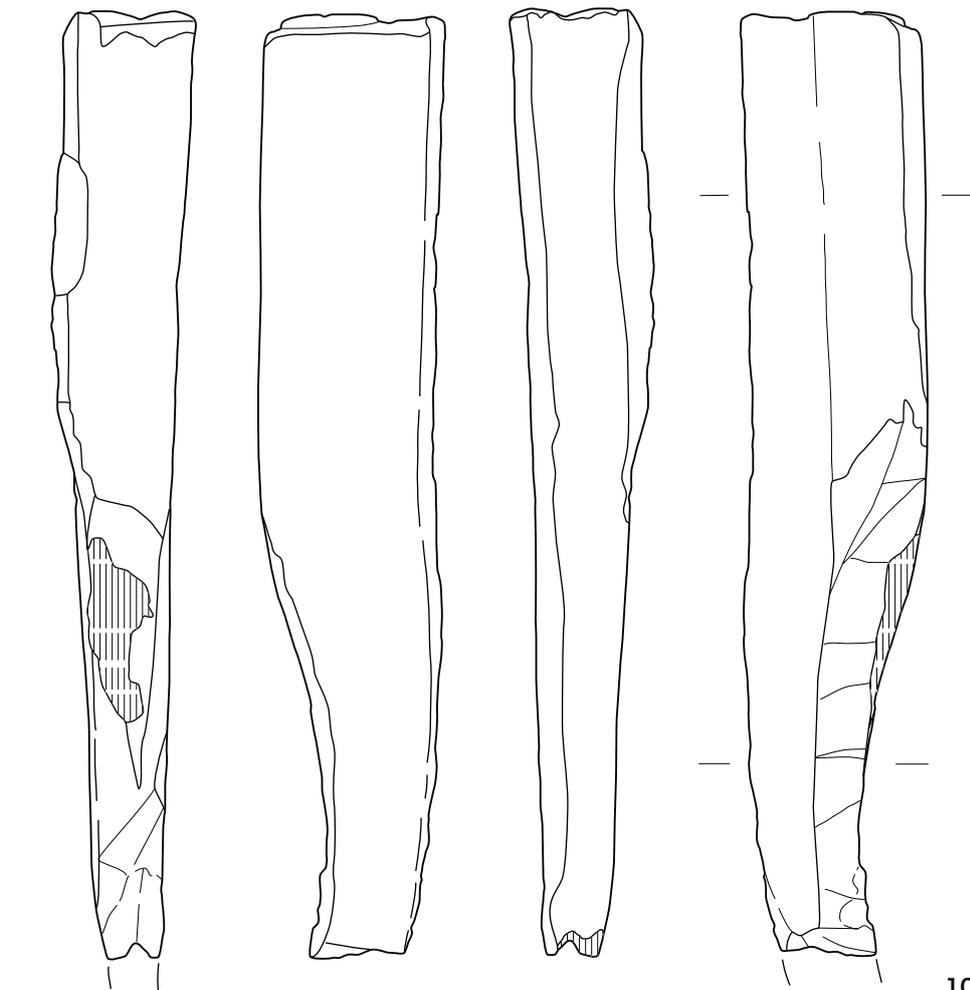


1/40  20cm

SD1005-4



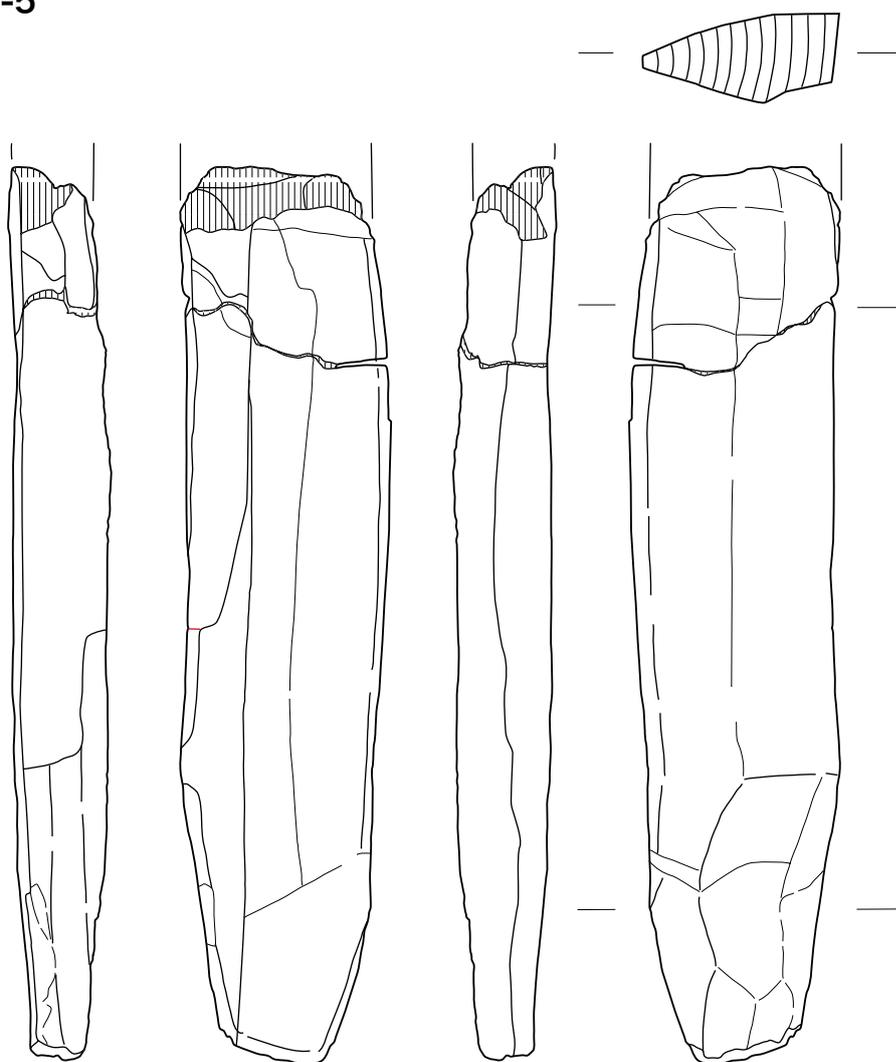
1080



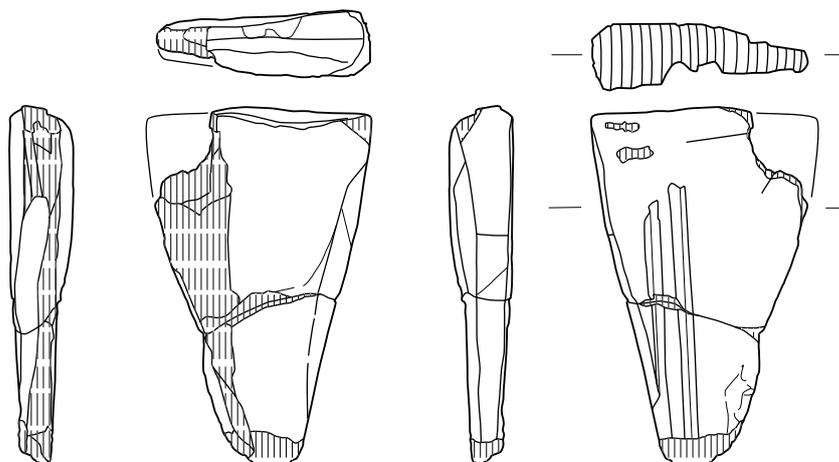
1081

1/40 20cm

SD1005-5



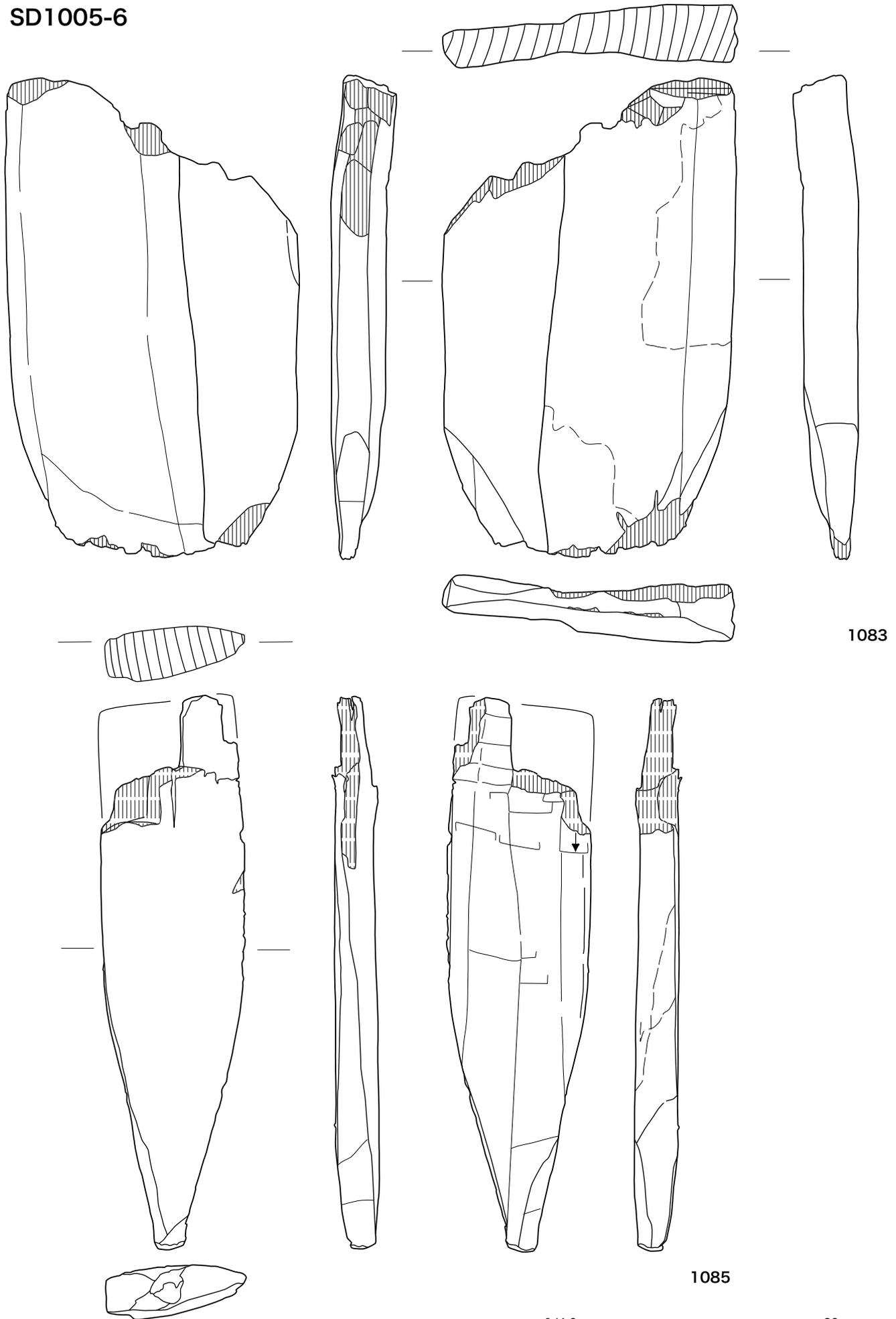
1082



1086

1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

SD1005-6



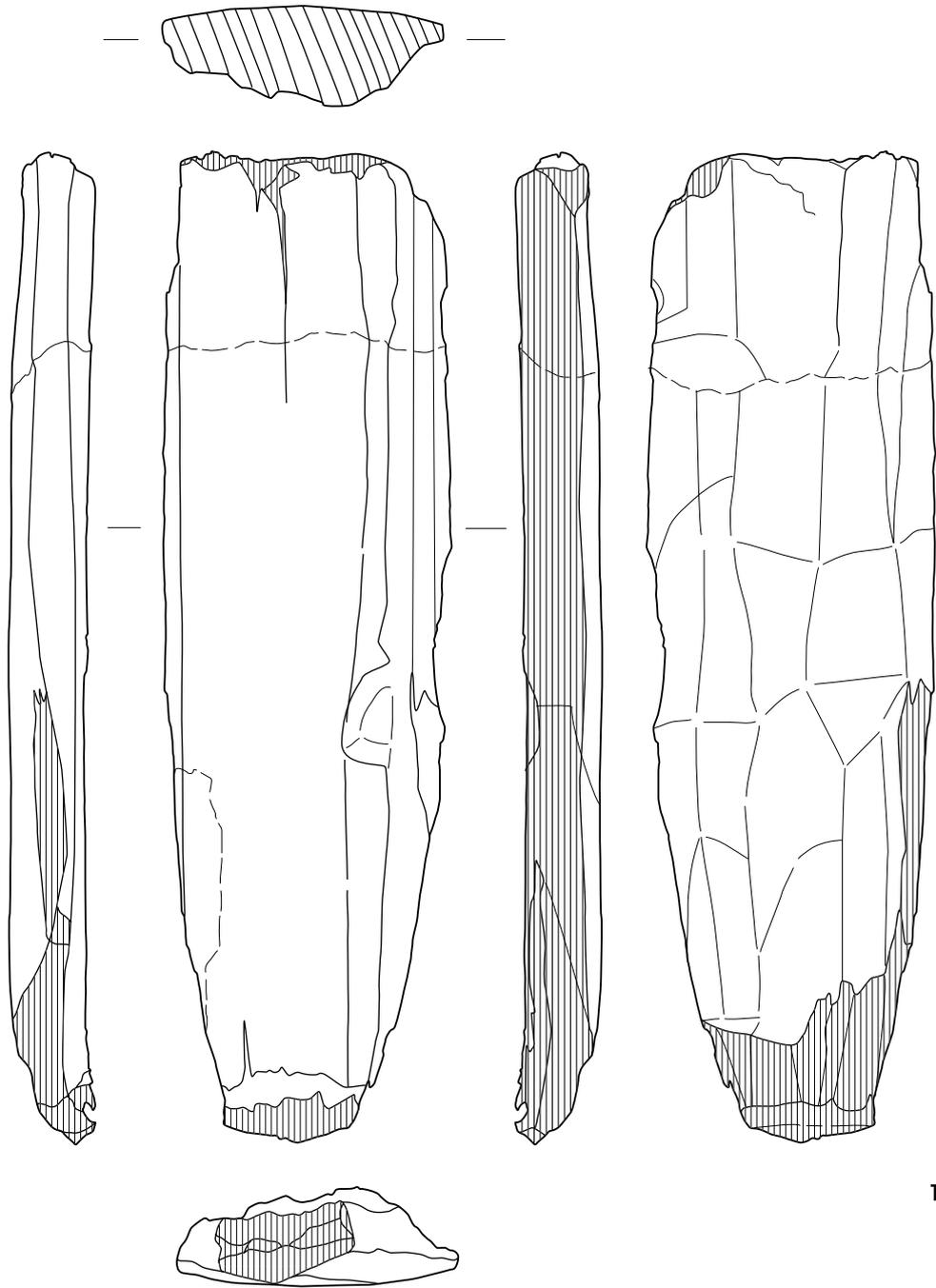
1083

1085

1/40

20cm

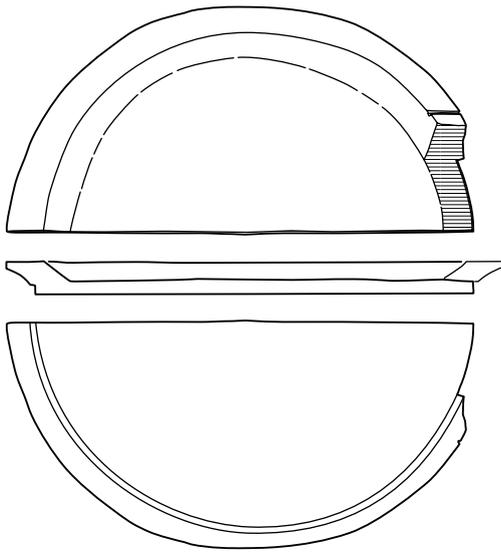
SD1005-7



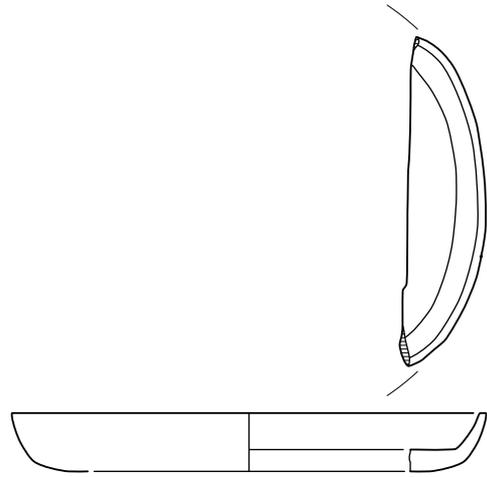
1084

1/4 0  20cm

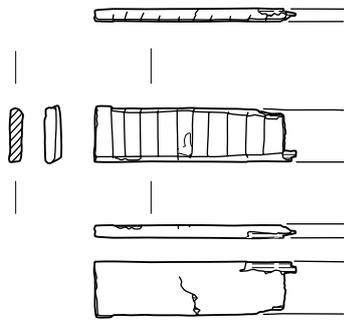
SD1001-1



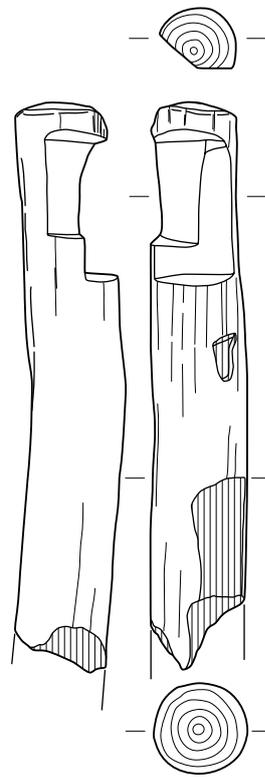
1088



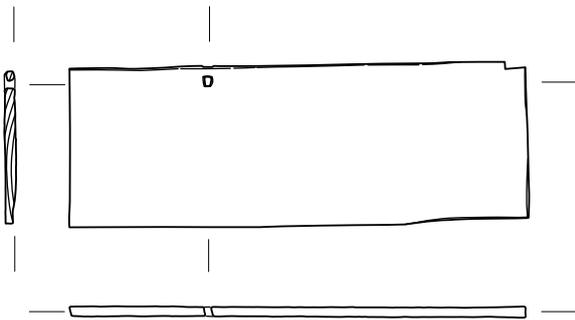
1089



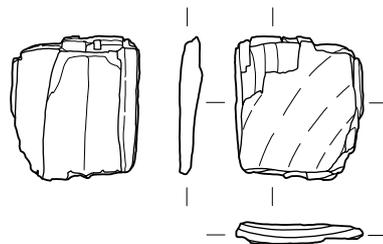
1090



1091



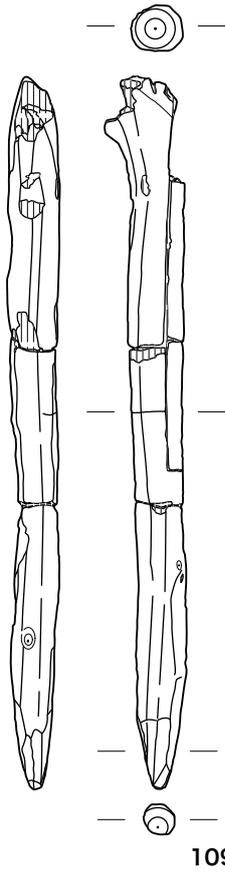
1096



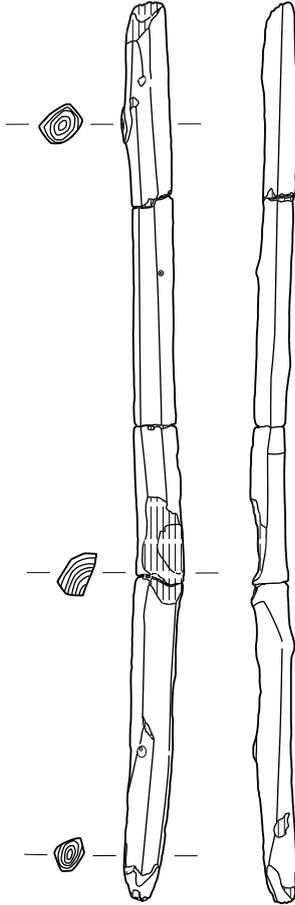
1097

1/40 20cm

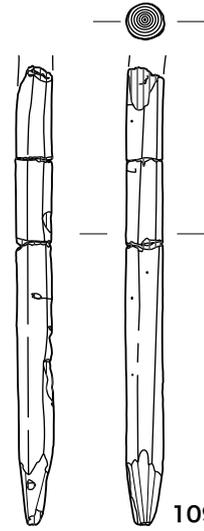
SD1001-2



1093



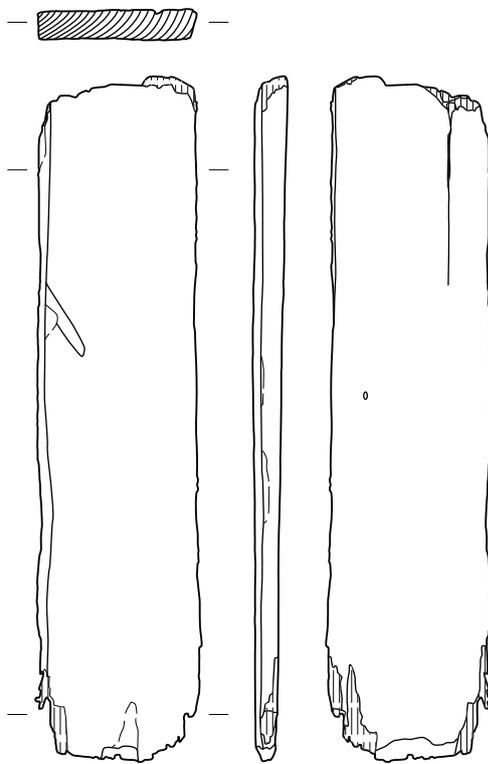
1094



1095



1102



1098

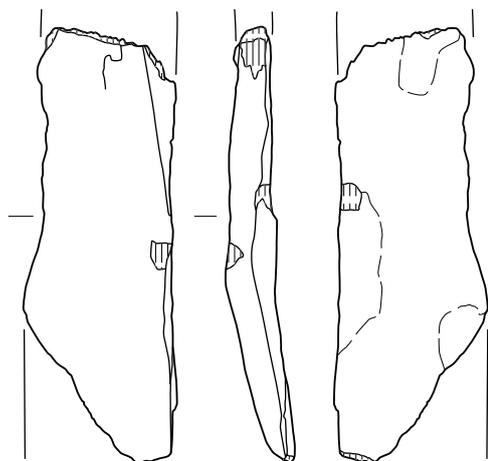


1092

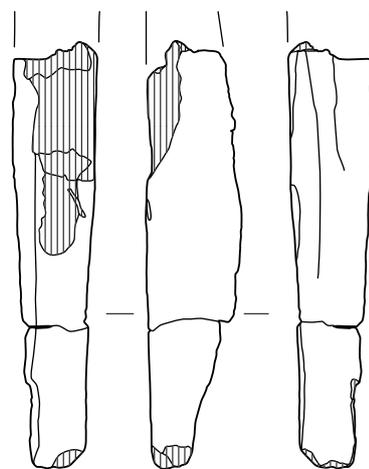
1/80

40cm

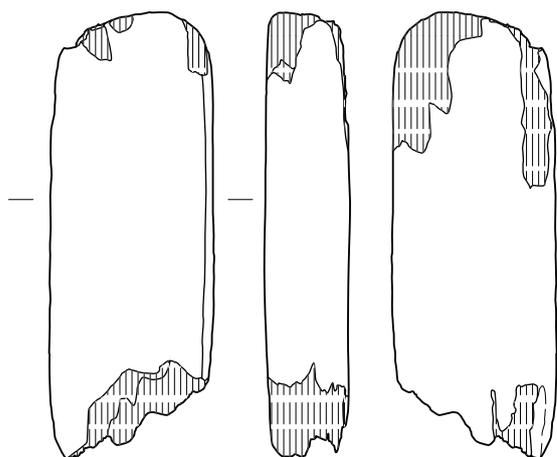
SD1001-3



1099



1100

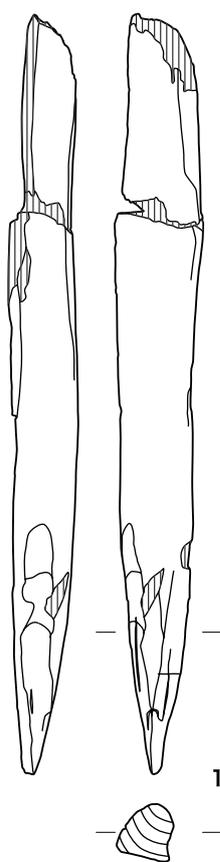


1101

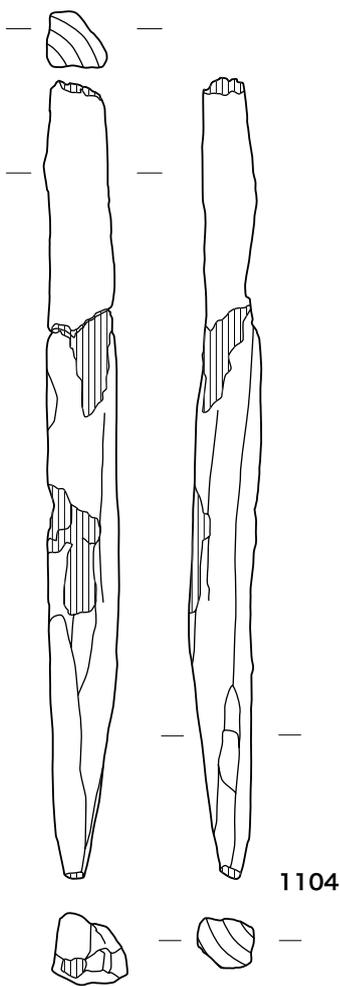


1/40 \_\_\_\_\_ 20cm

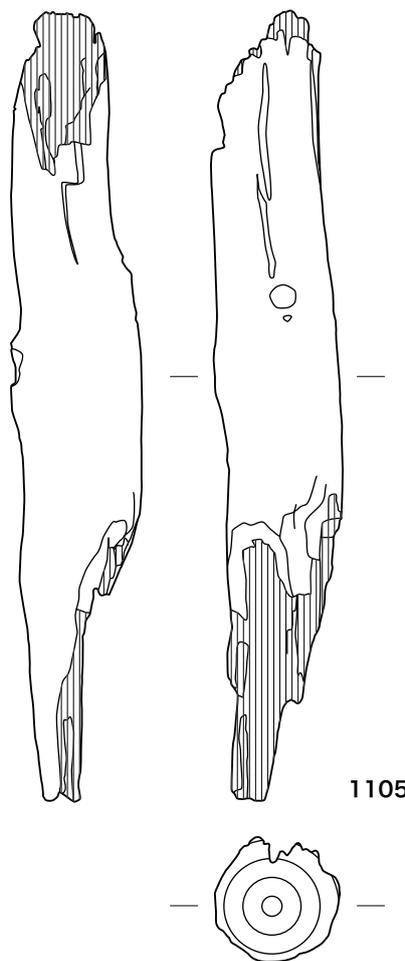
SD1001杭列-1



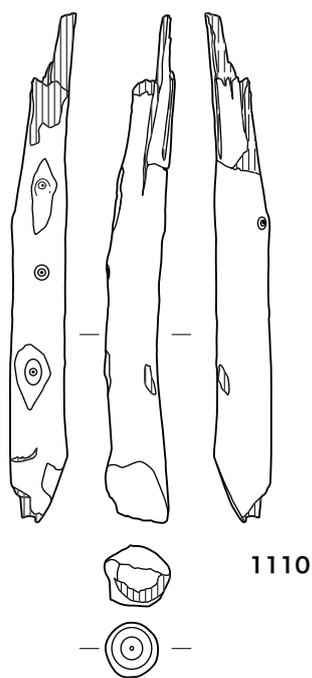
1103



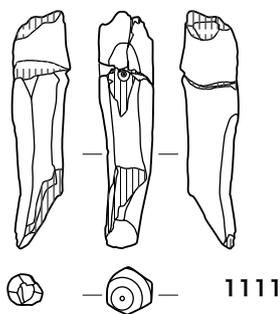
1104



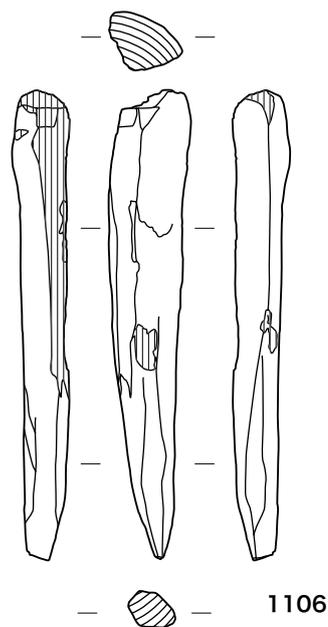
1105



1110



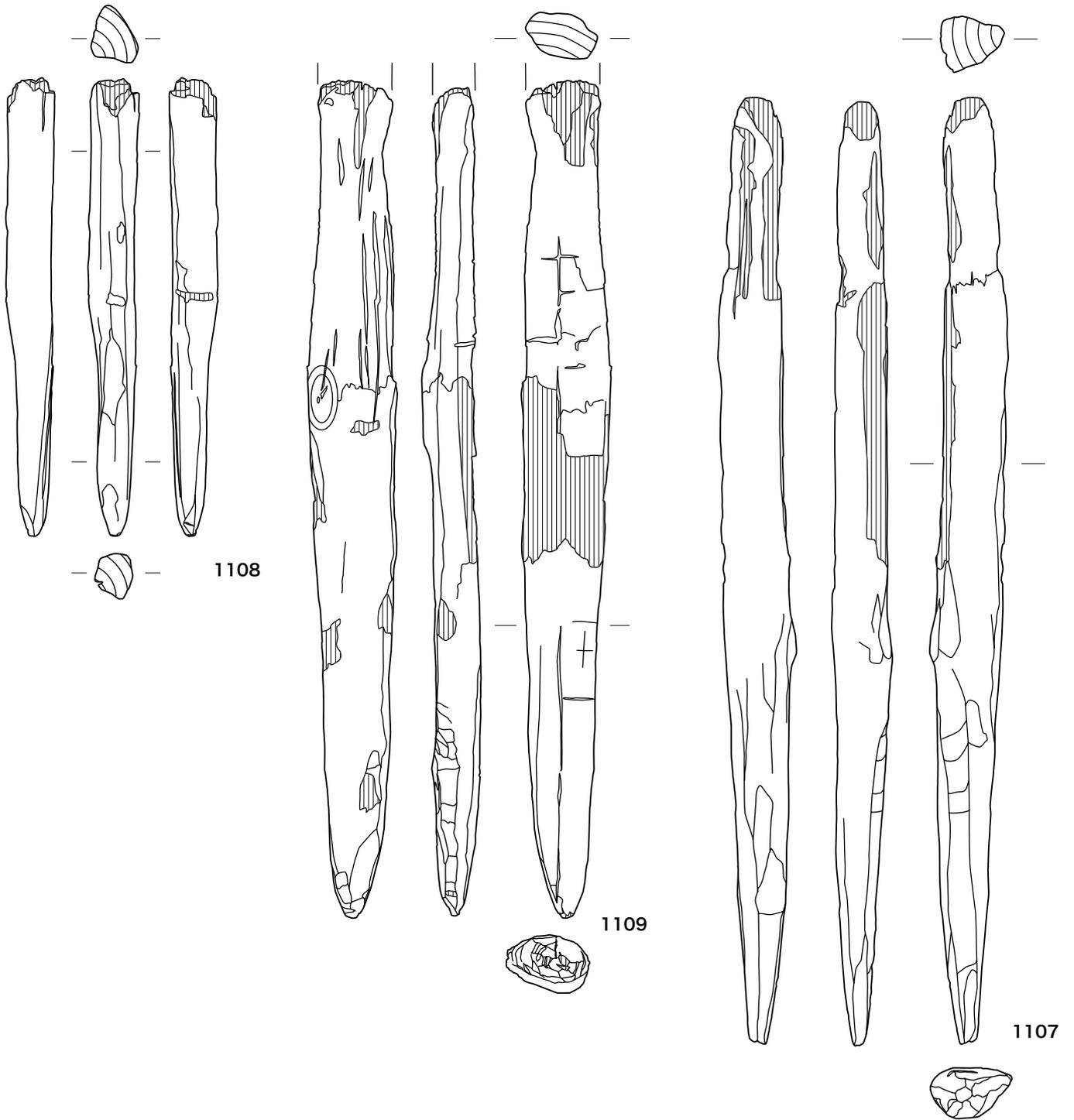
1111



1106

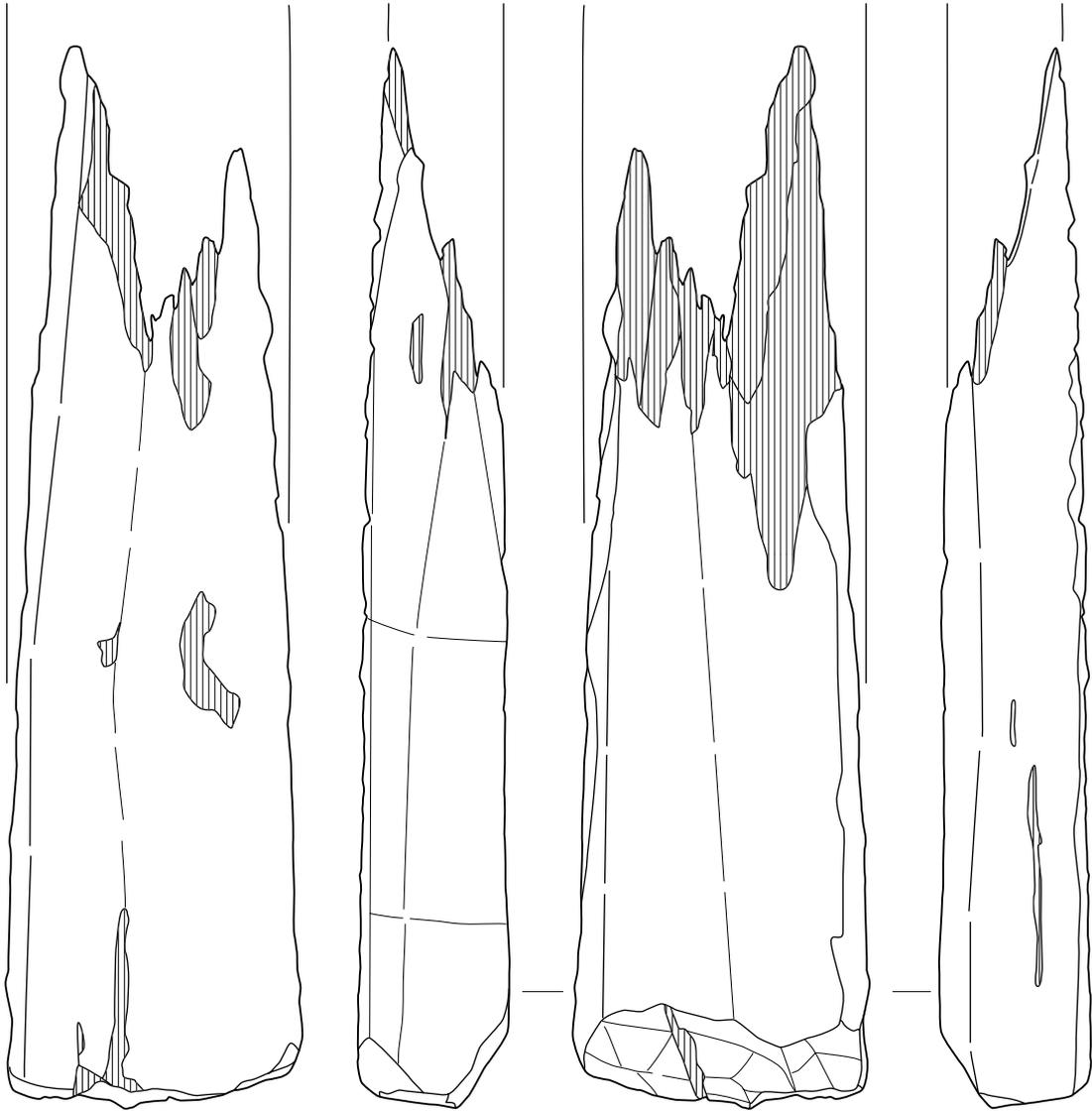
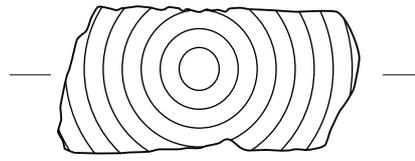
1/80 40cm

SD1001杭列-2

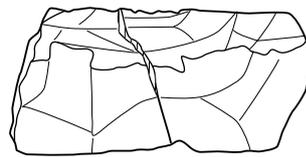


1/80 40cm

SK1058

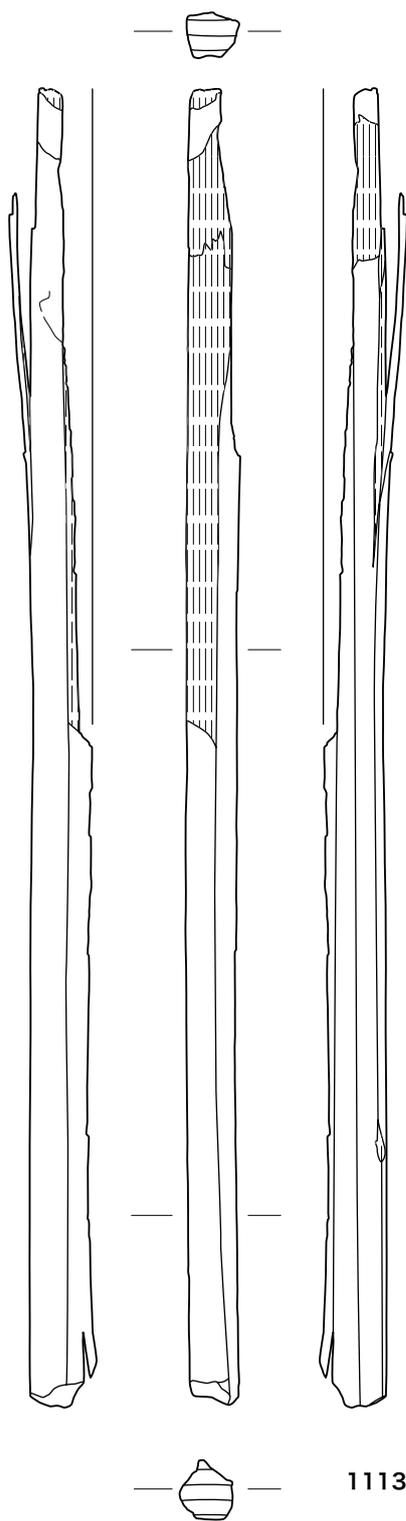


1112



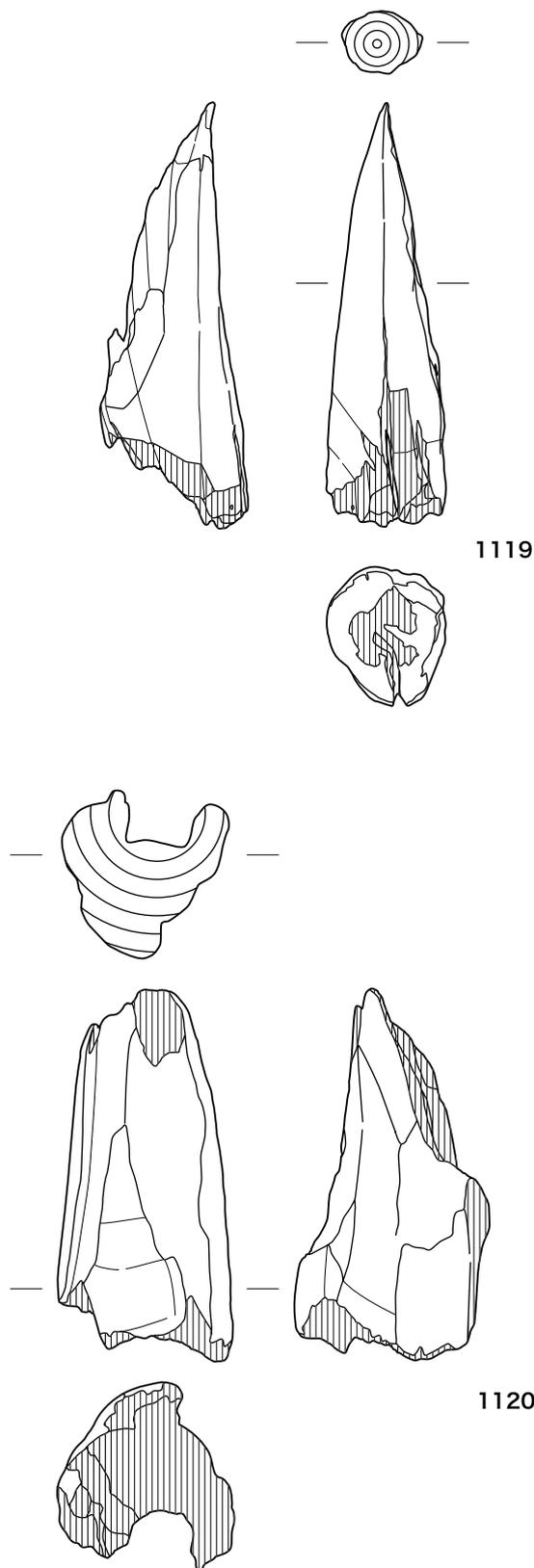
1/40  20cm

SB2002



1113

SB2067

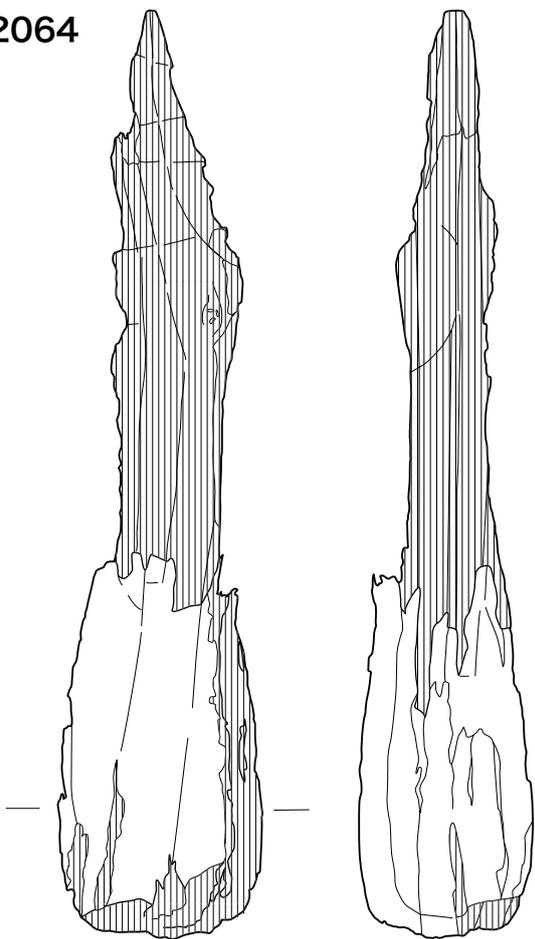


1119

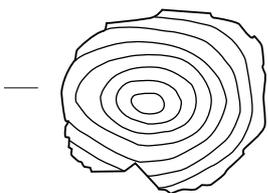
1120

1/40 20cm

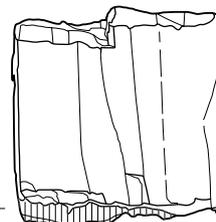
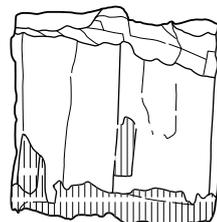
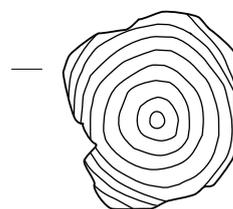
SB2064



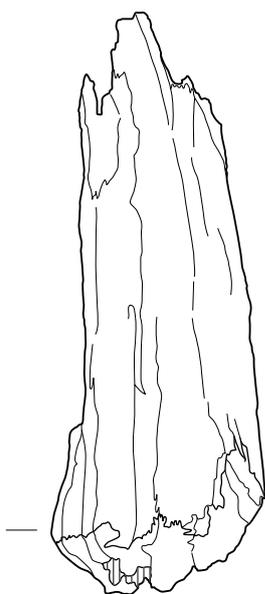
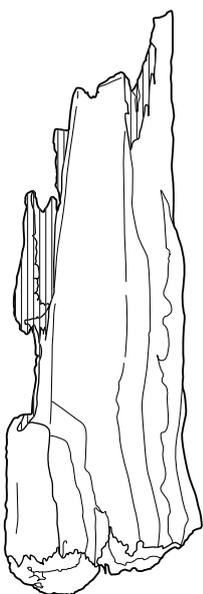
1115



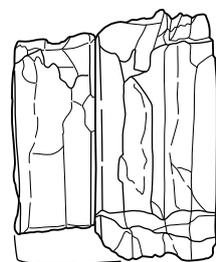
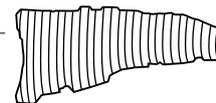
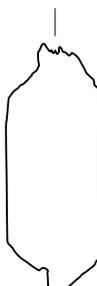
1114



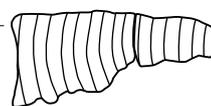
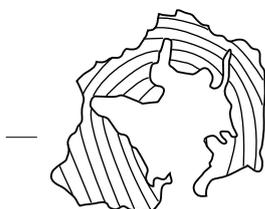
1117



1116

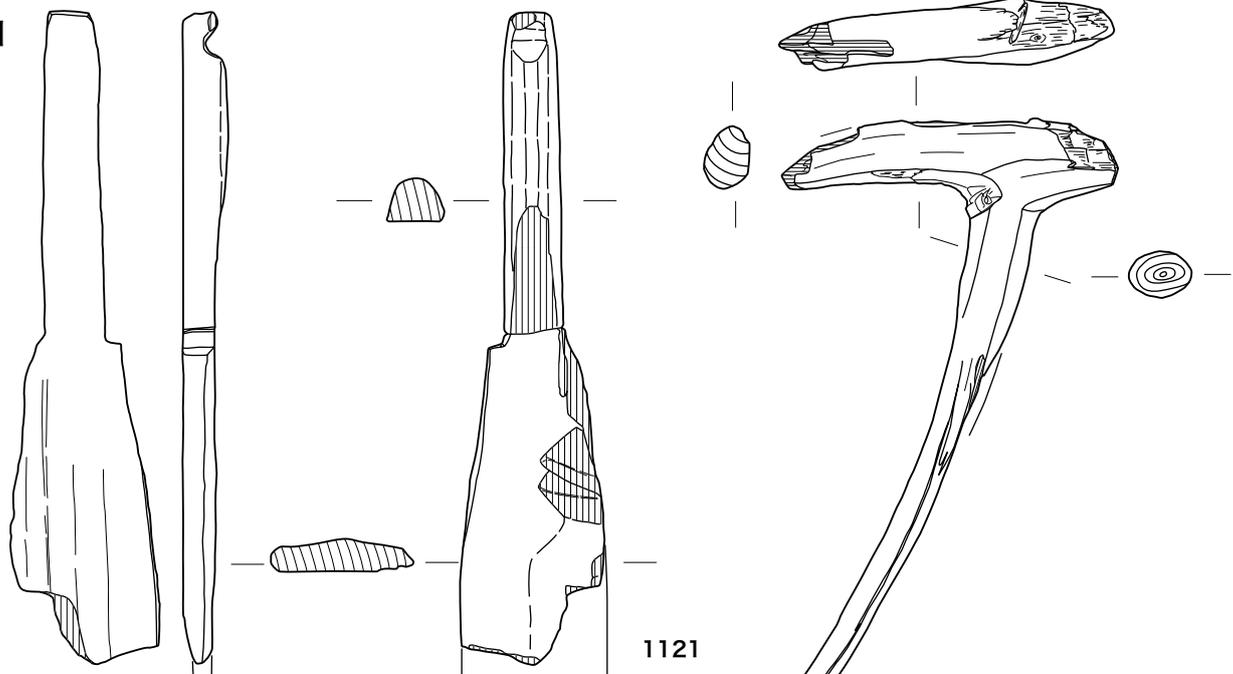


1118



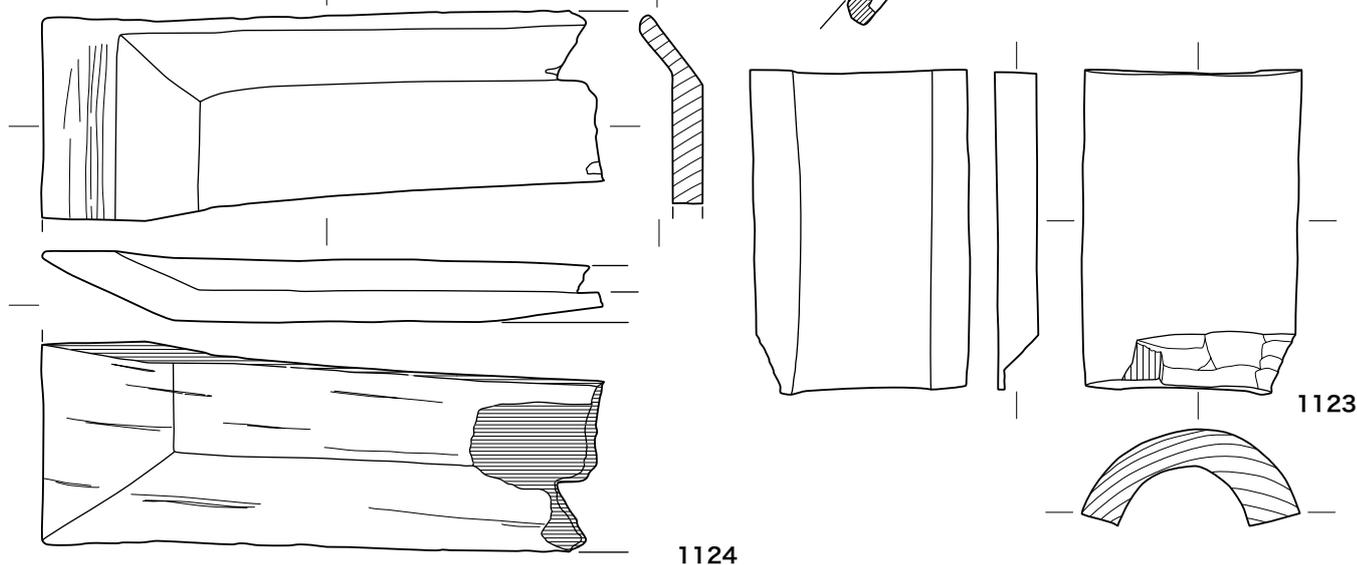
1/40 20cm

SD2001-1



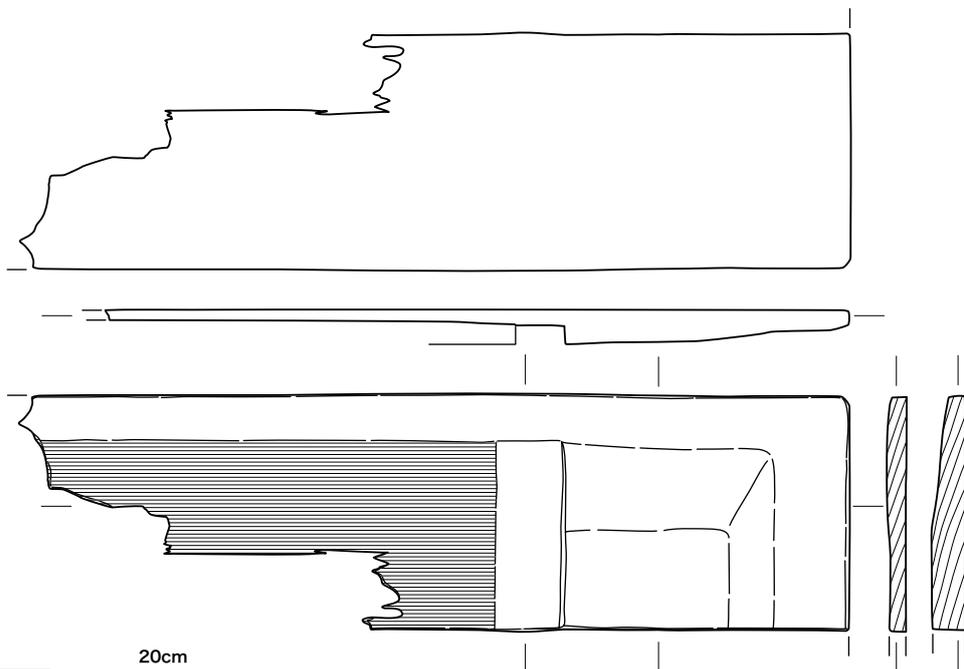
1121

1122



1123

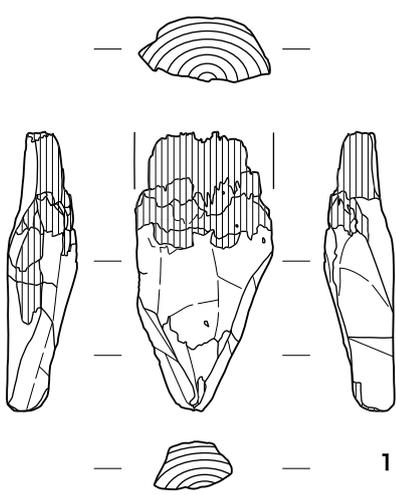
1124



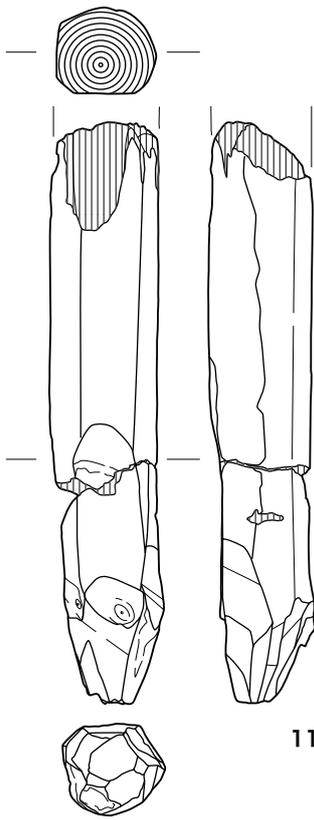
1126

1/40

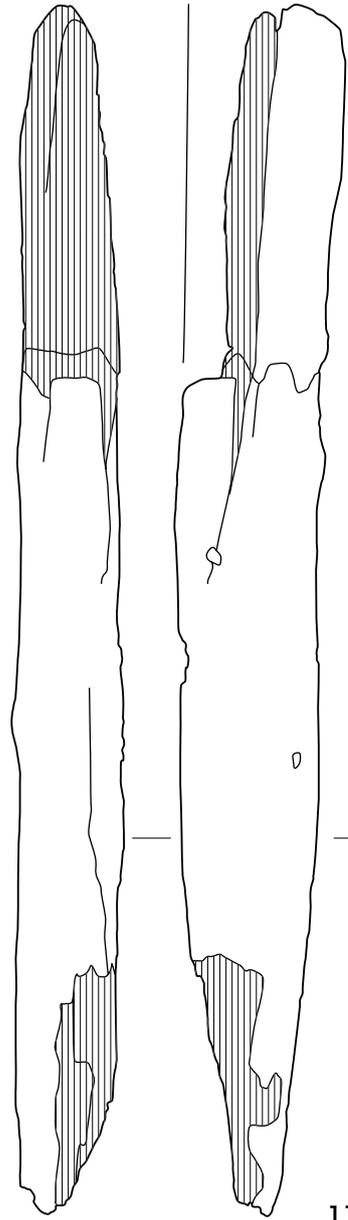
20cm



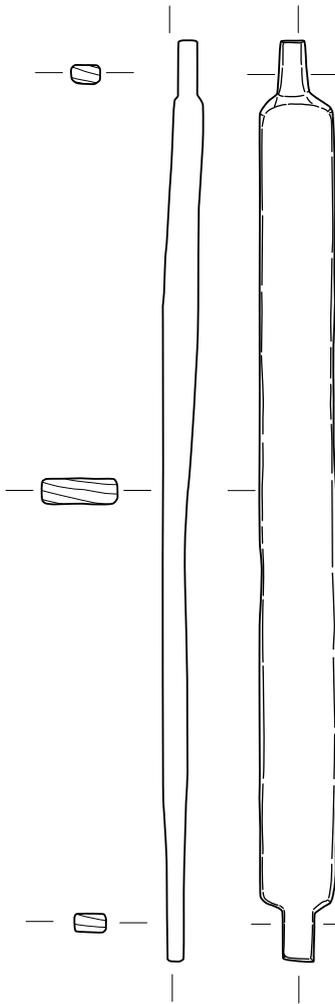
1130



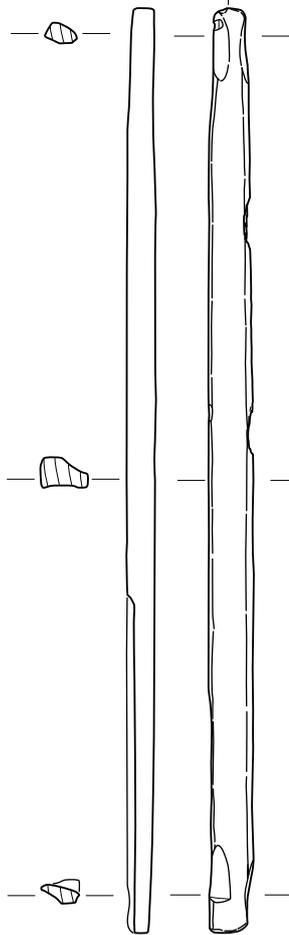
1129



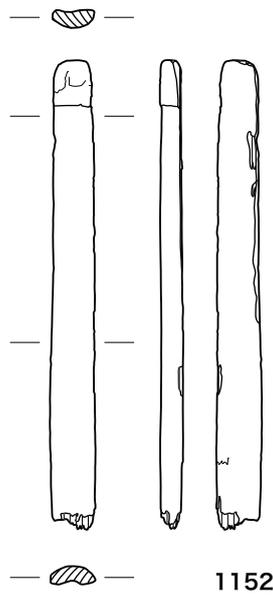
1128



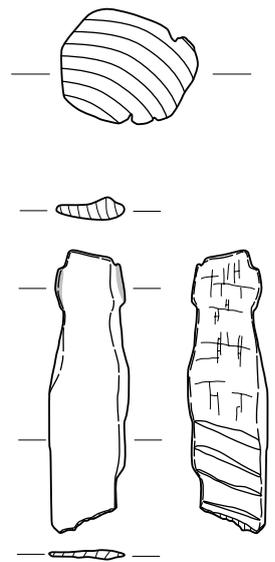
1125



1151



1152

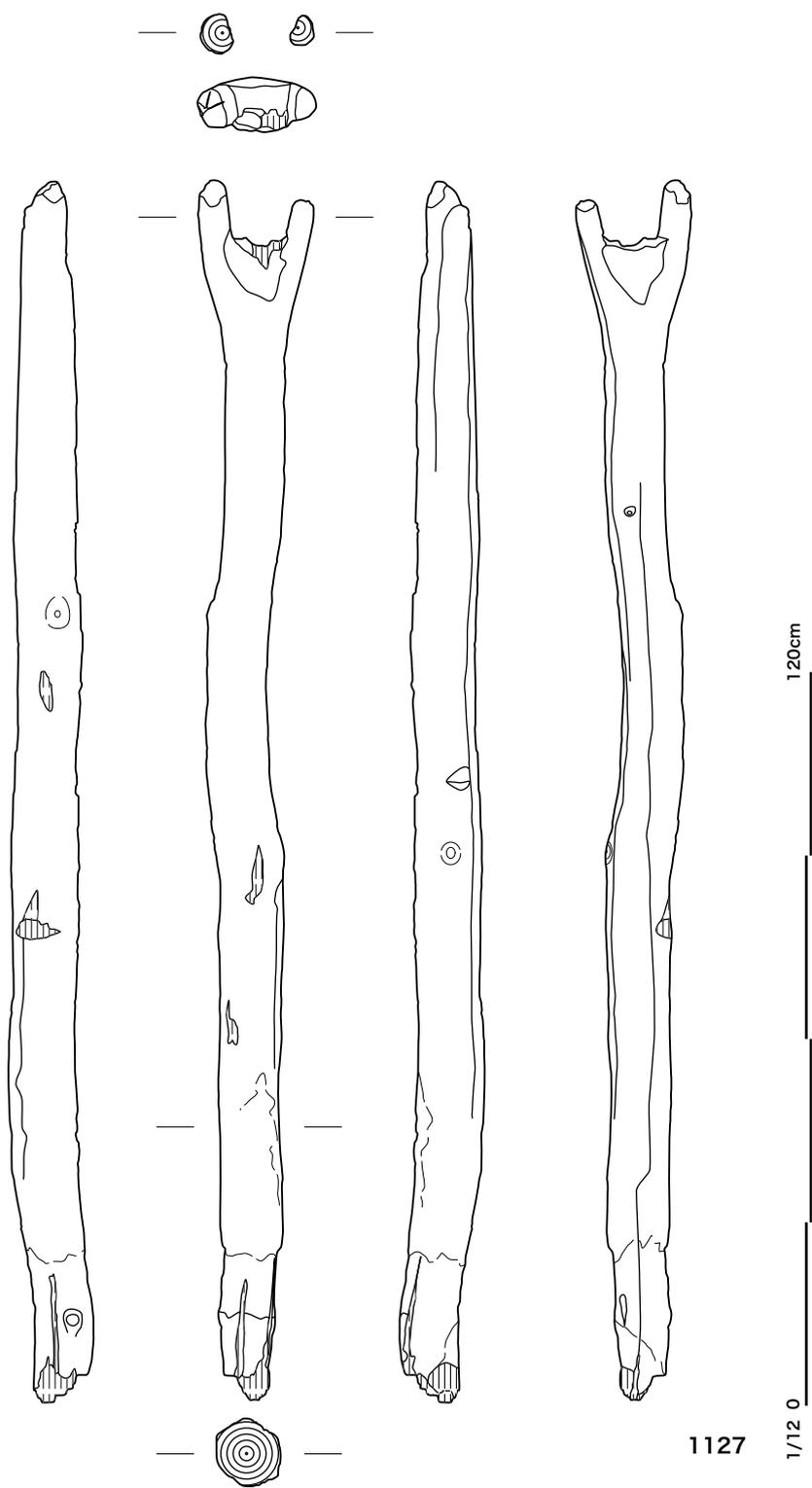


1153

1/40

20cm

SD2001-3



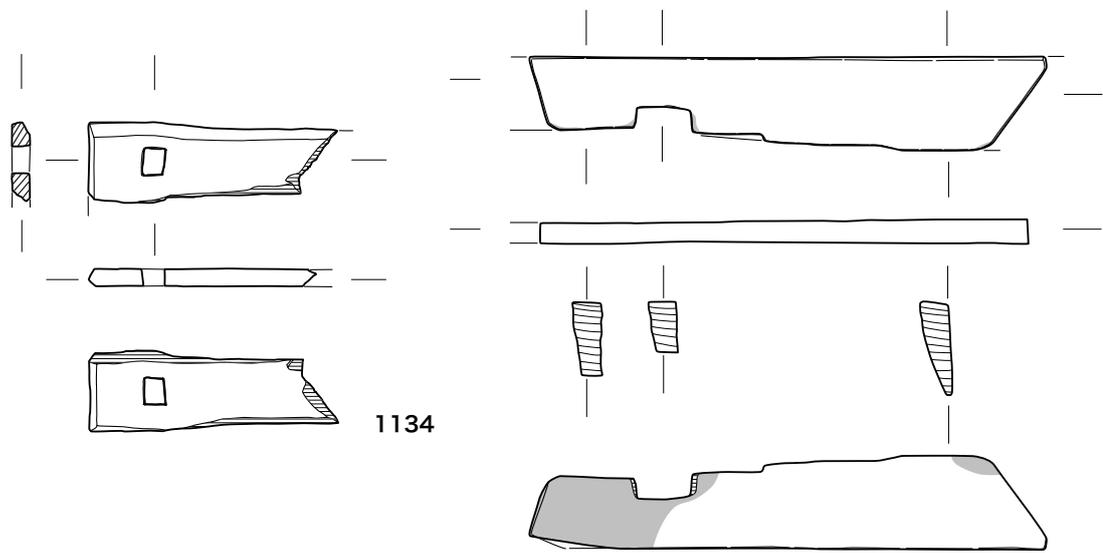
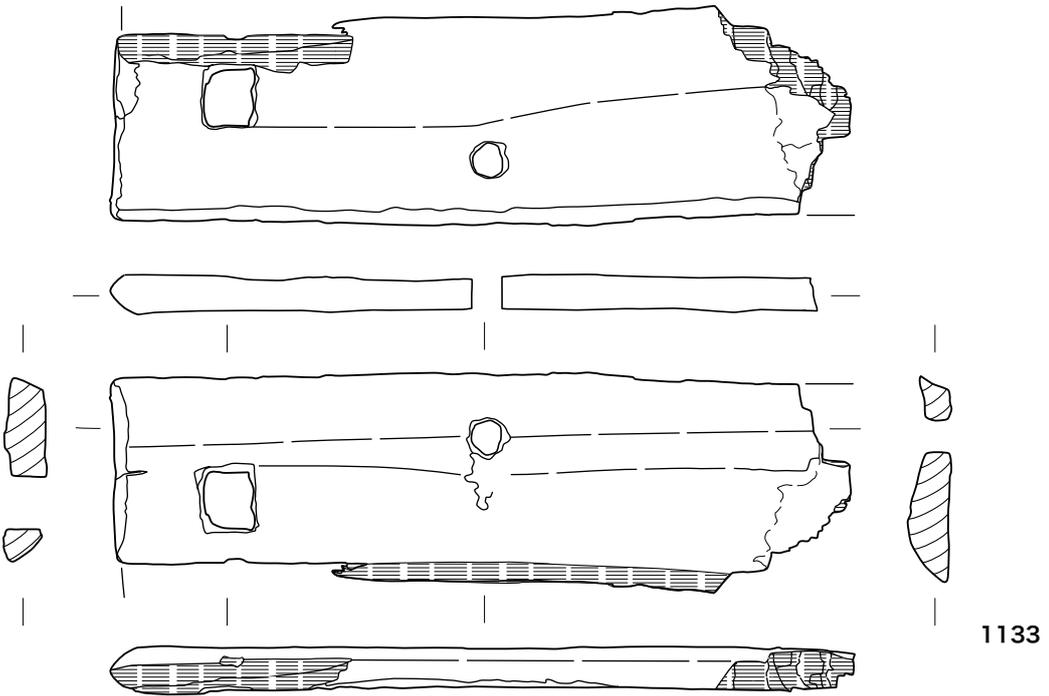
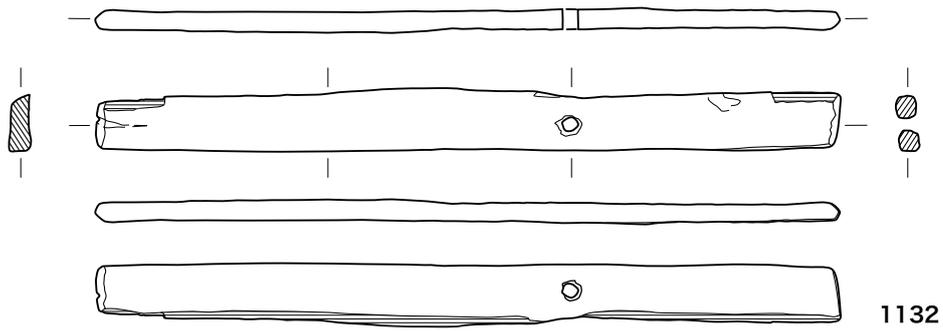
SD2001-4



1131

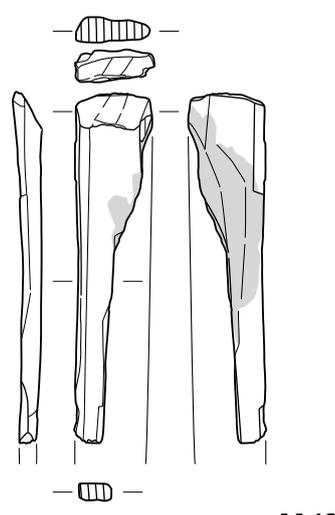
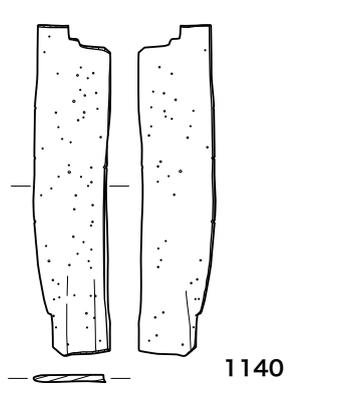
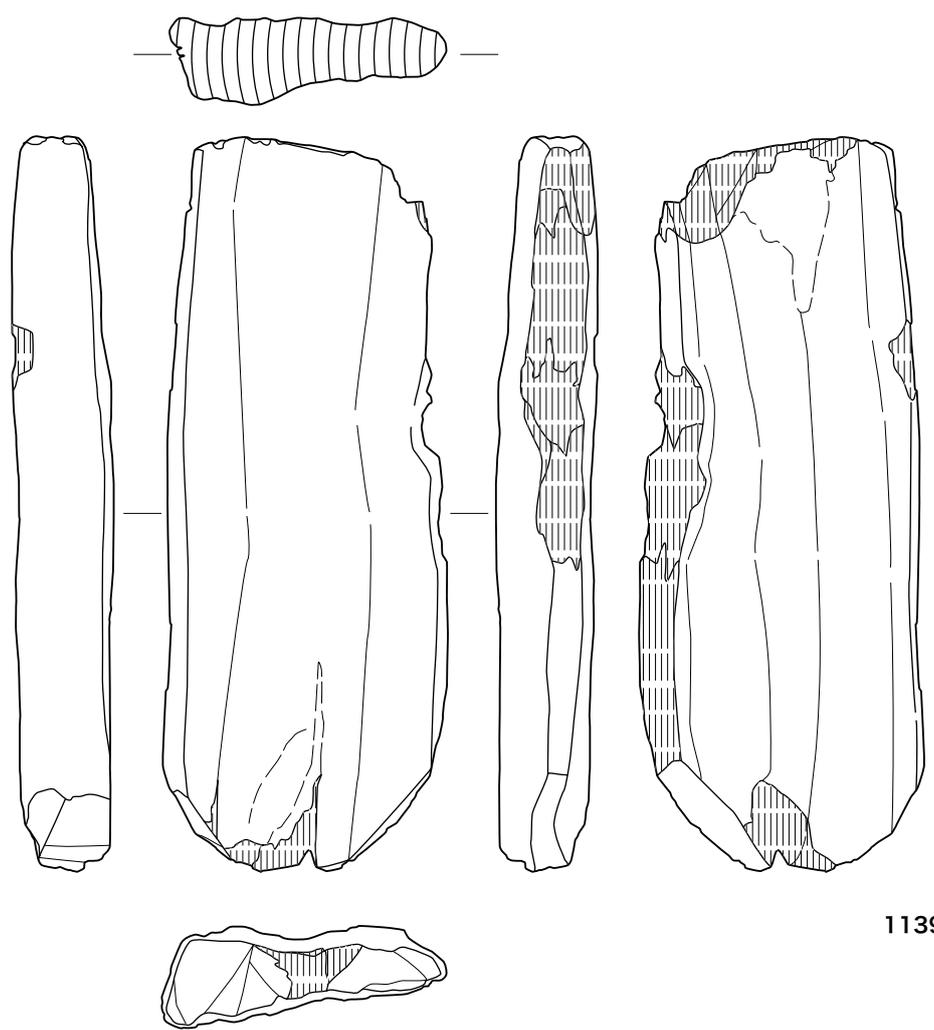
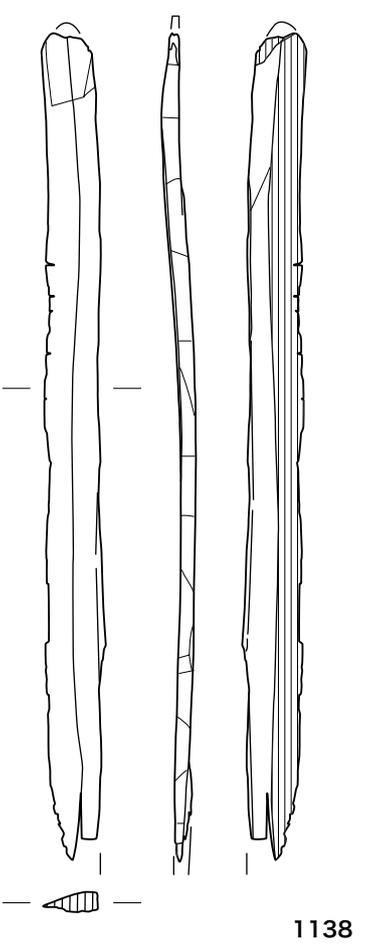
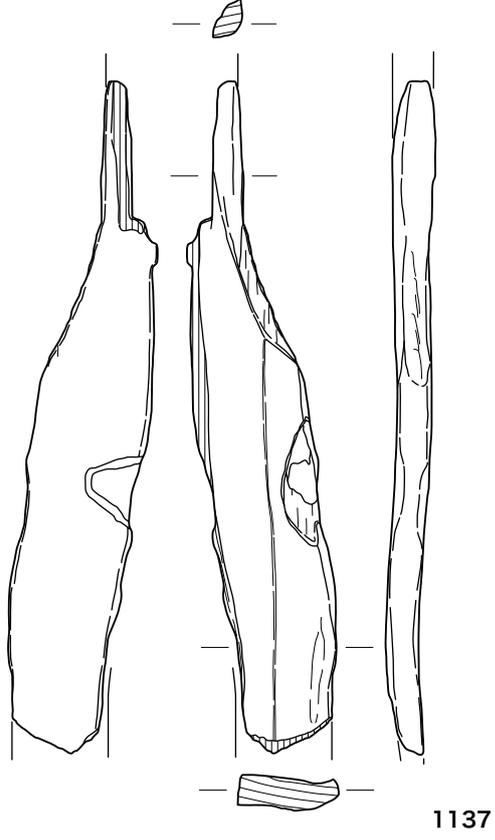
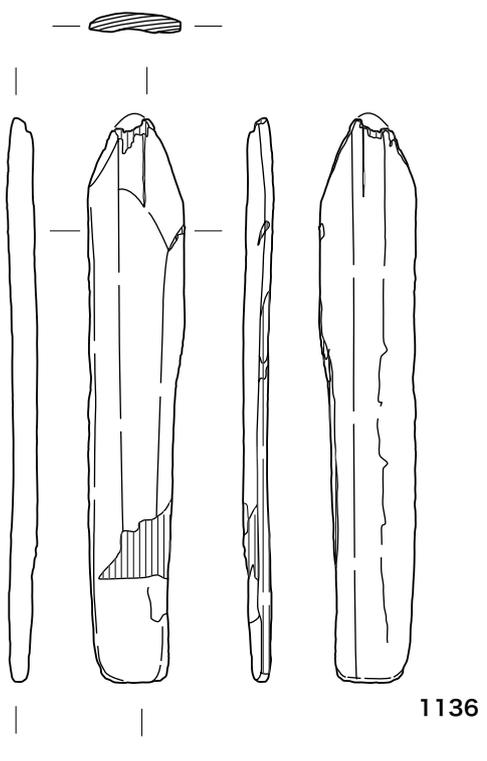
1/40 20cm

SD2001-5



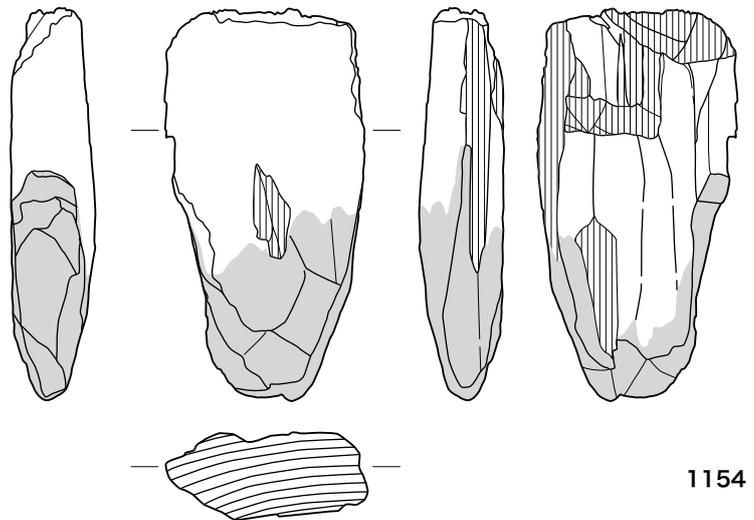
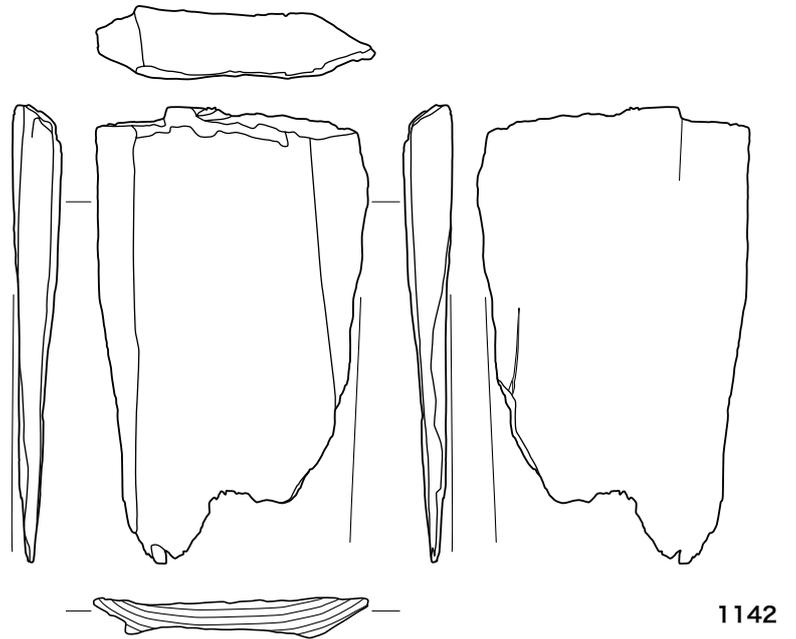
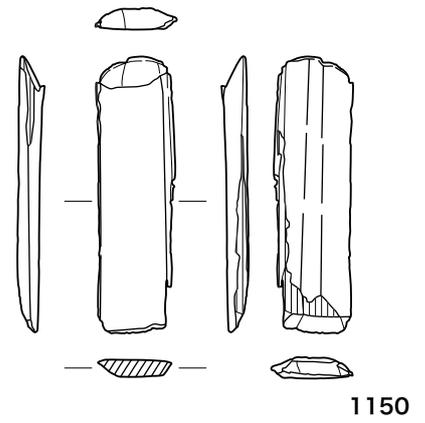
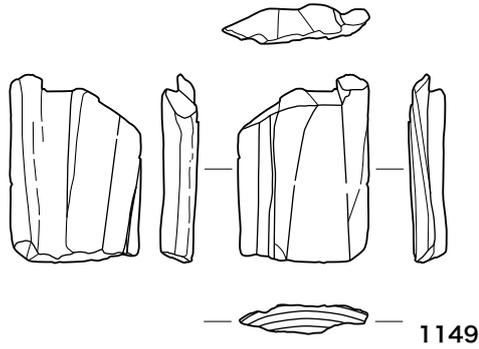
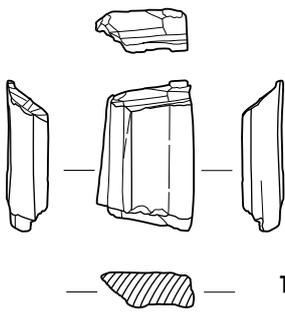
1/40 20cm

1135

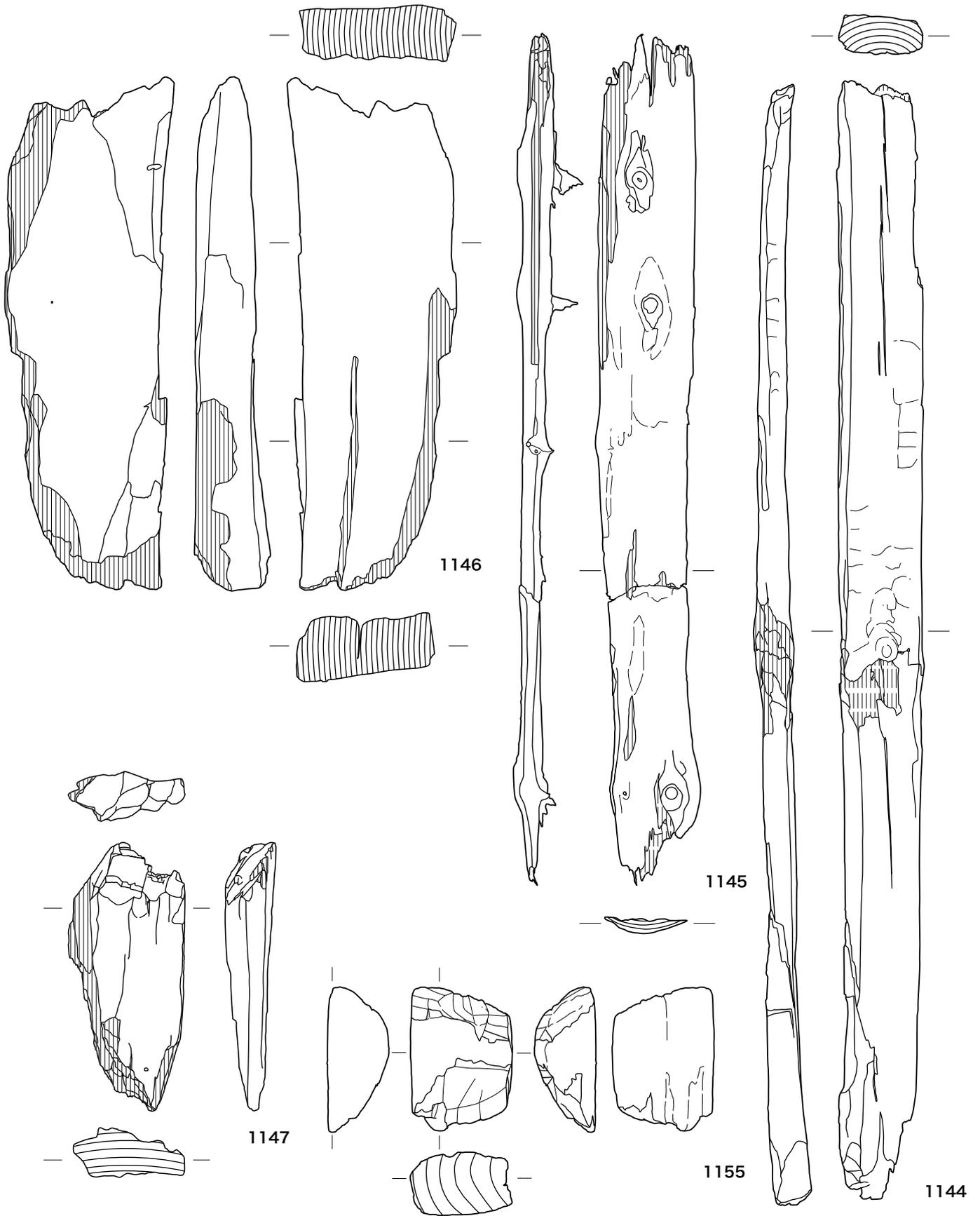


1/40 20cm

SD2001-7



1/40 20cm



1/80 40cm

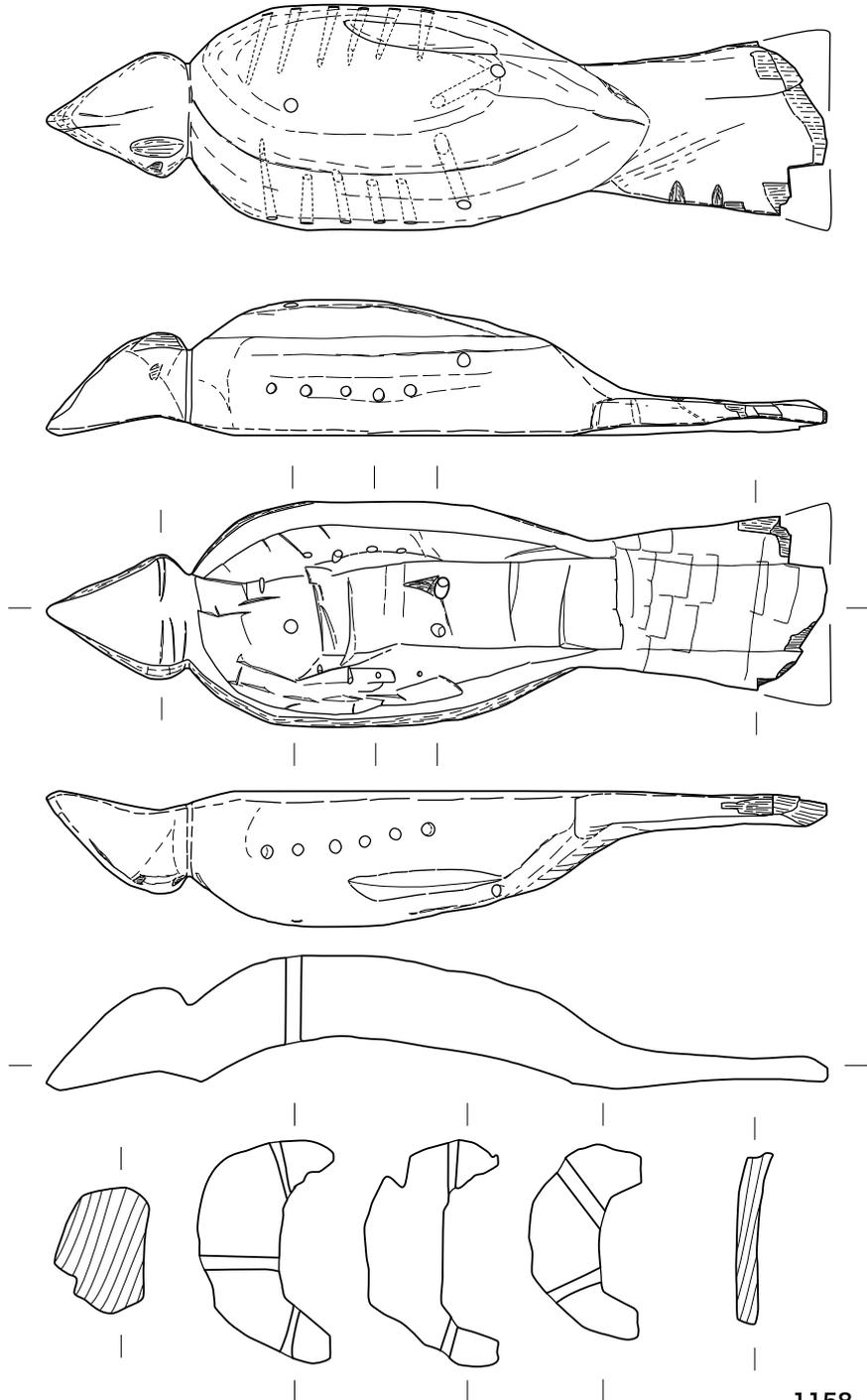


1156

1157

1/4 0 20cm

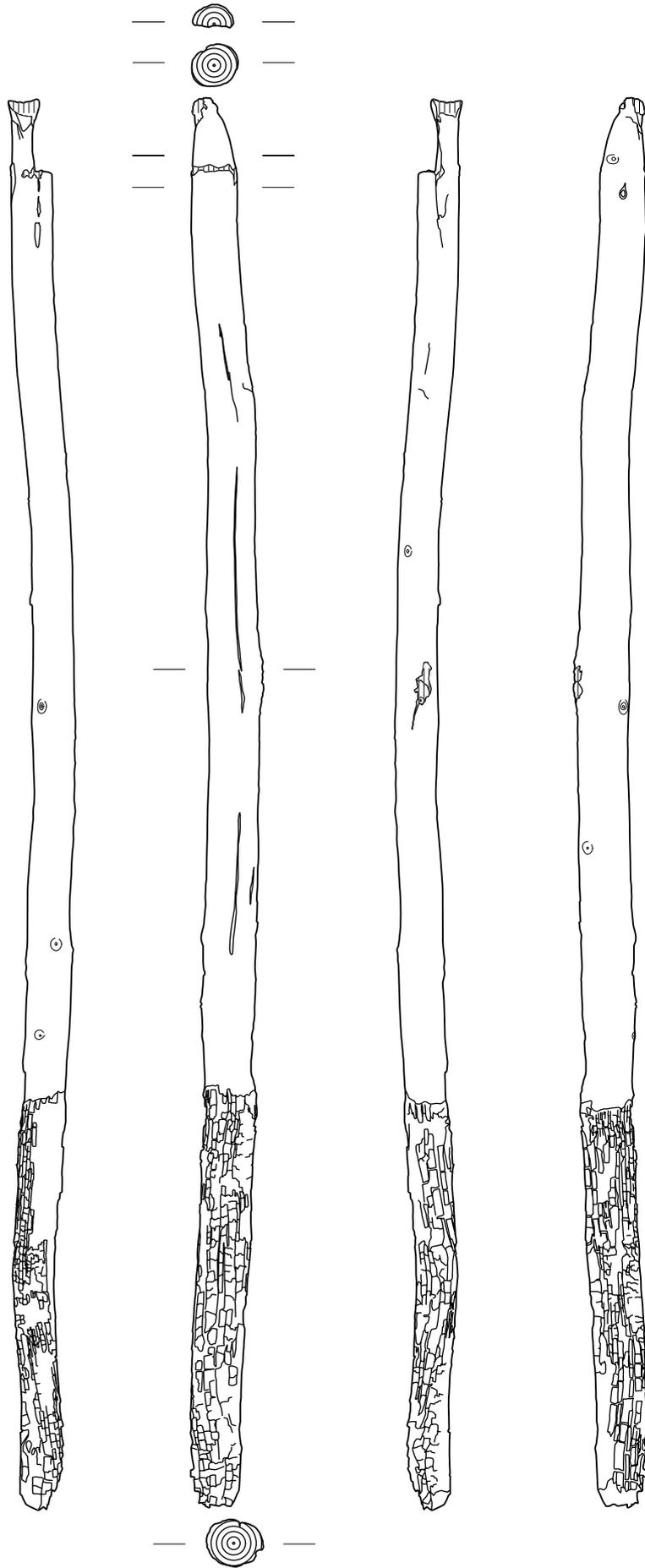
NR2001-1



1158

1/40  20cm

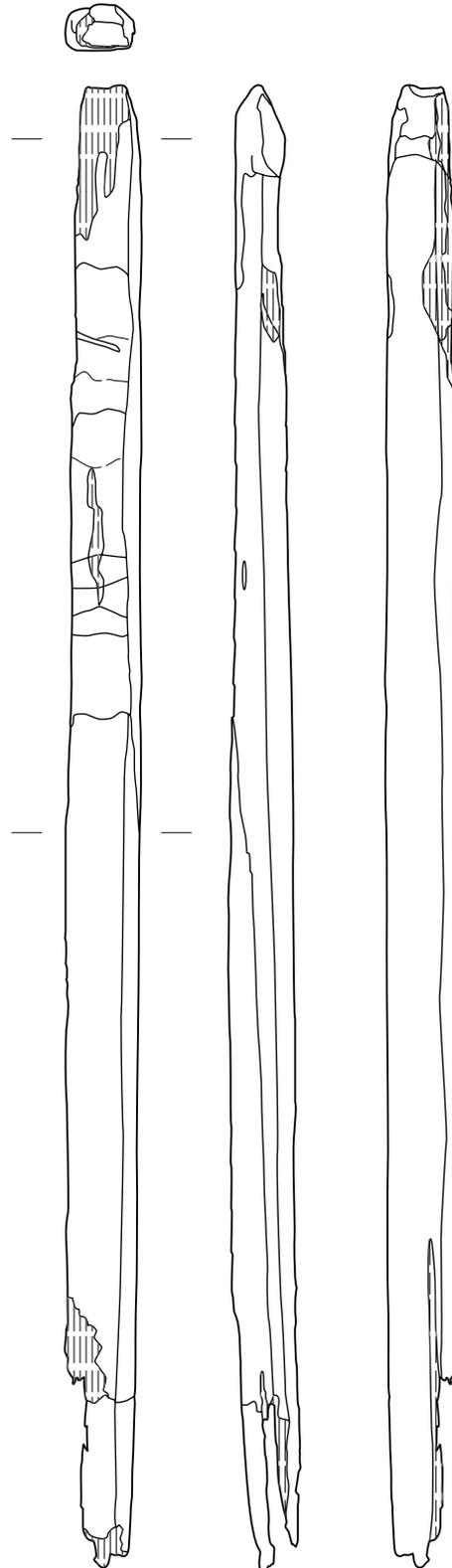
NR2001-2



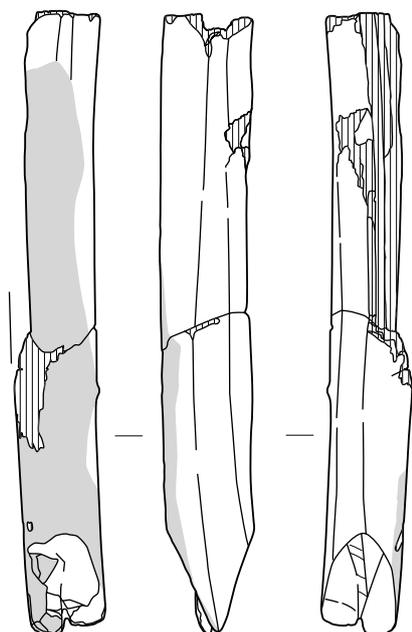
1159

1/12 0 120cm

NR2001-3



1160



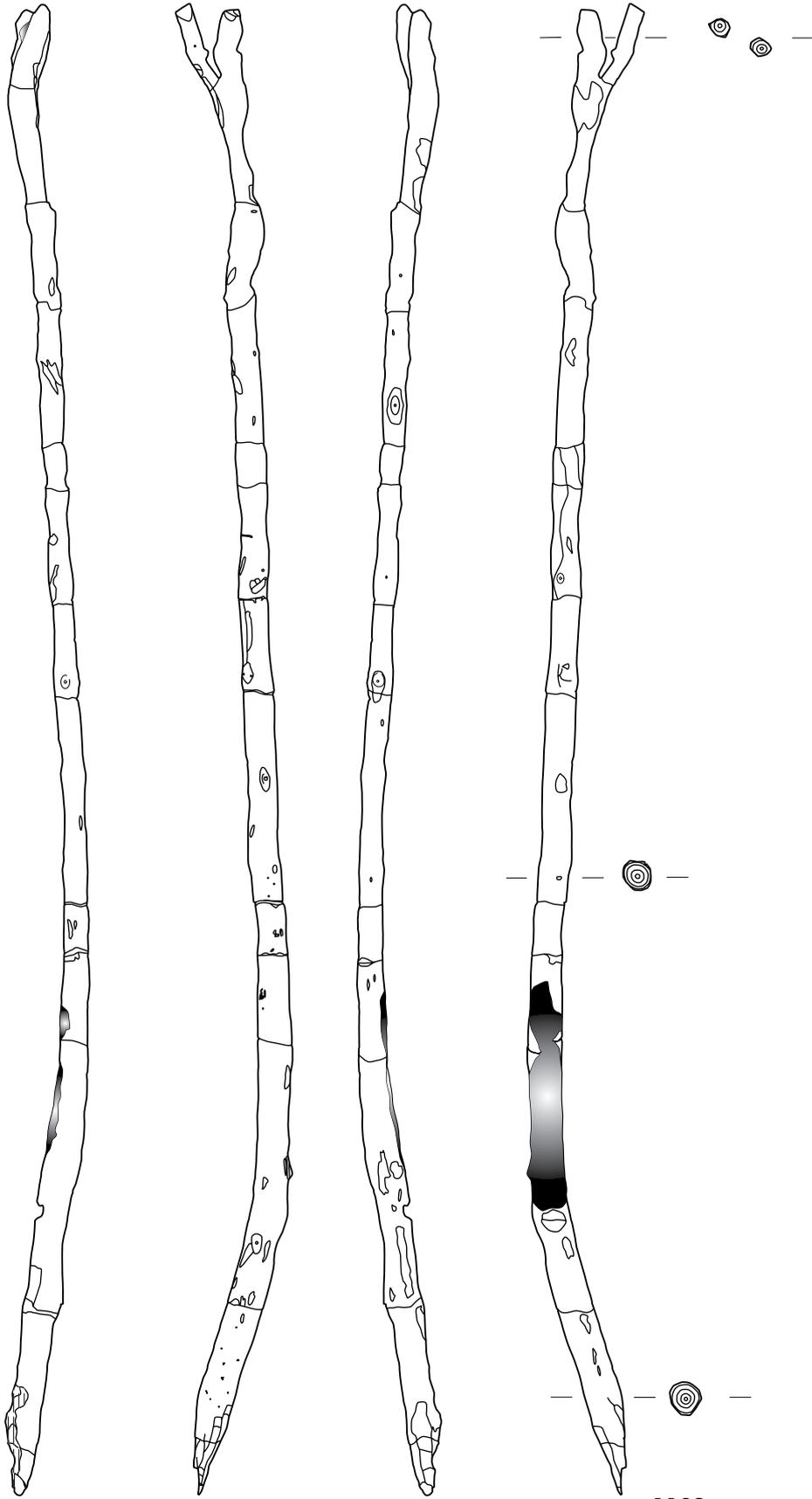
1161



1164

1/4 0

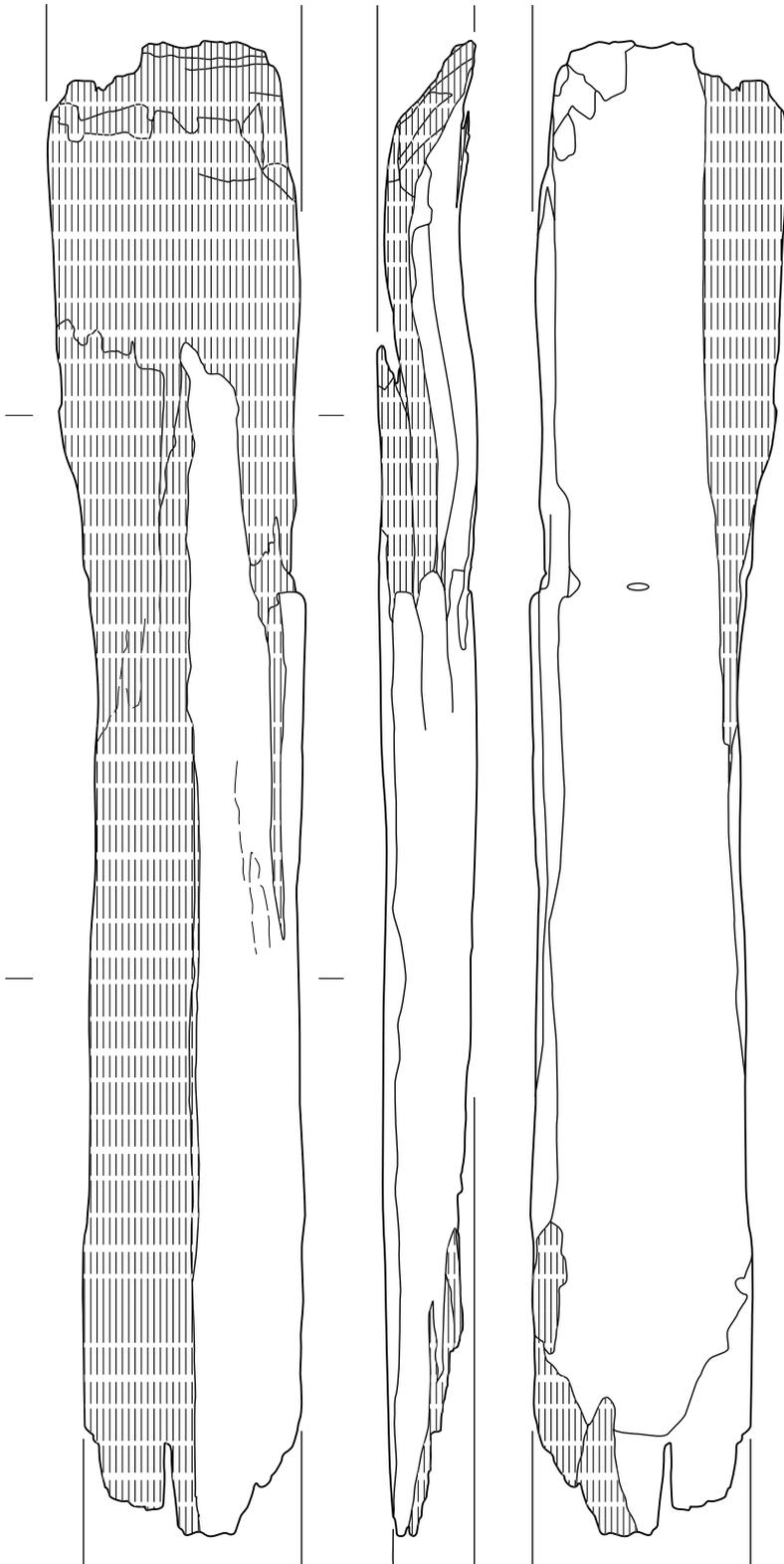
20cm



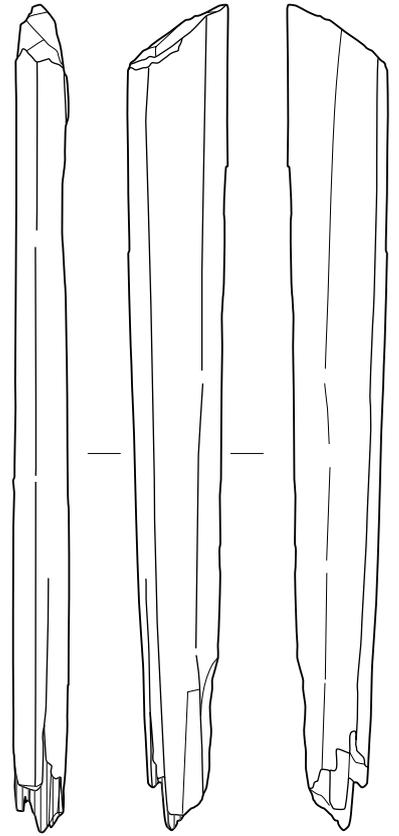
1162

1/80 40cm

NR2001-5



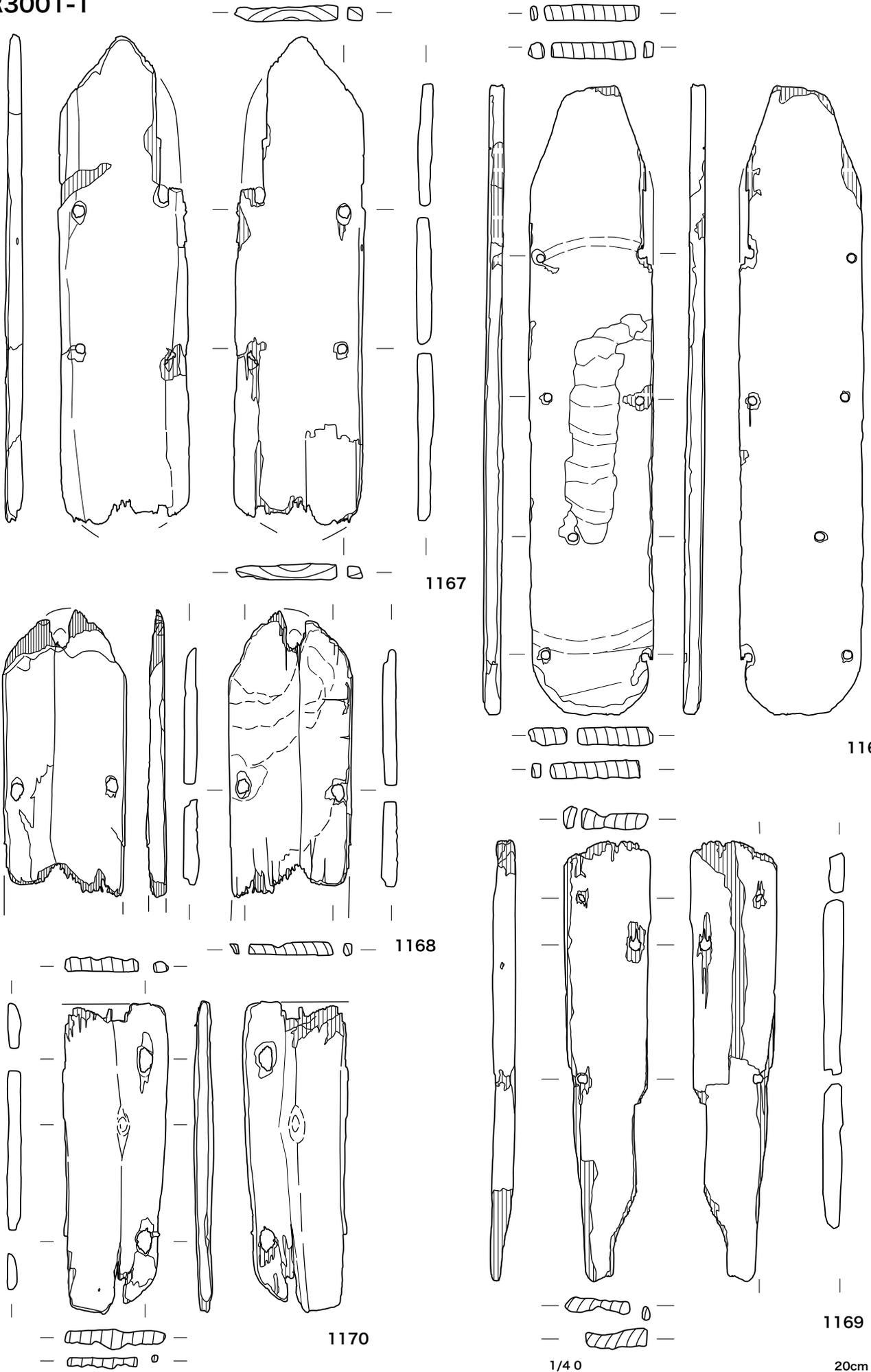
1163



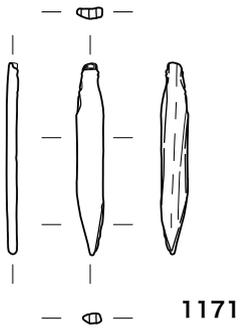
1165



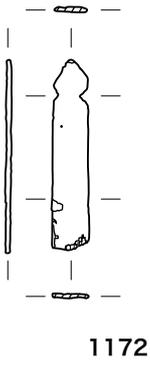
1/40 \_\_\_\_\_ 20cm



NR3001-2



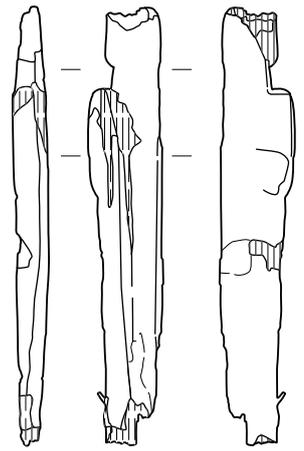
1171



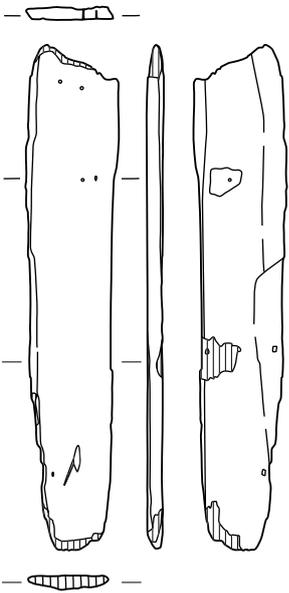
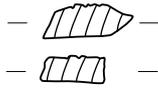
1172



1175



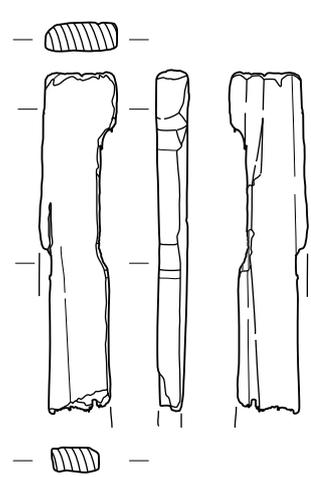
1176



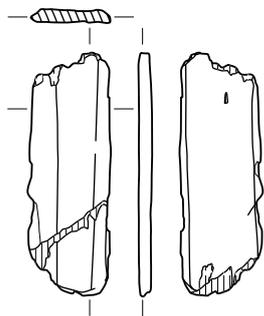
1177



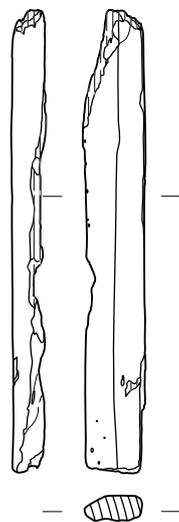
1179



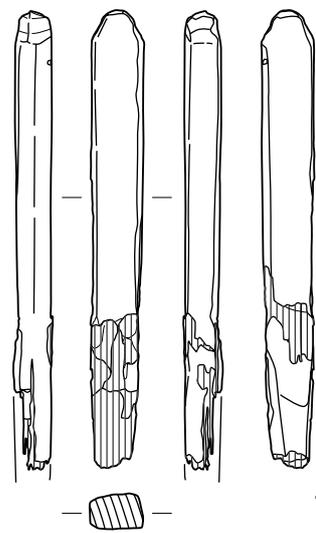
1180



1181

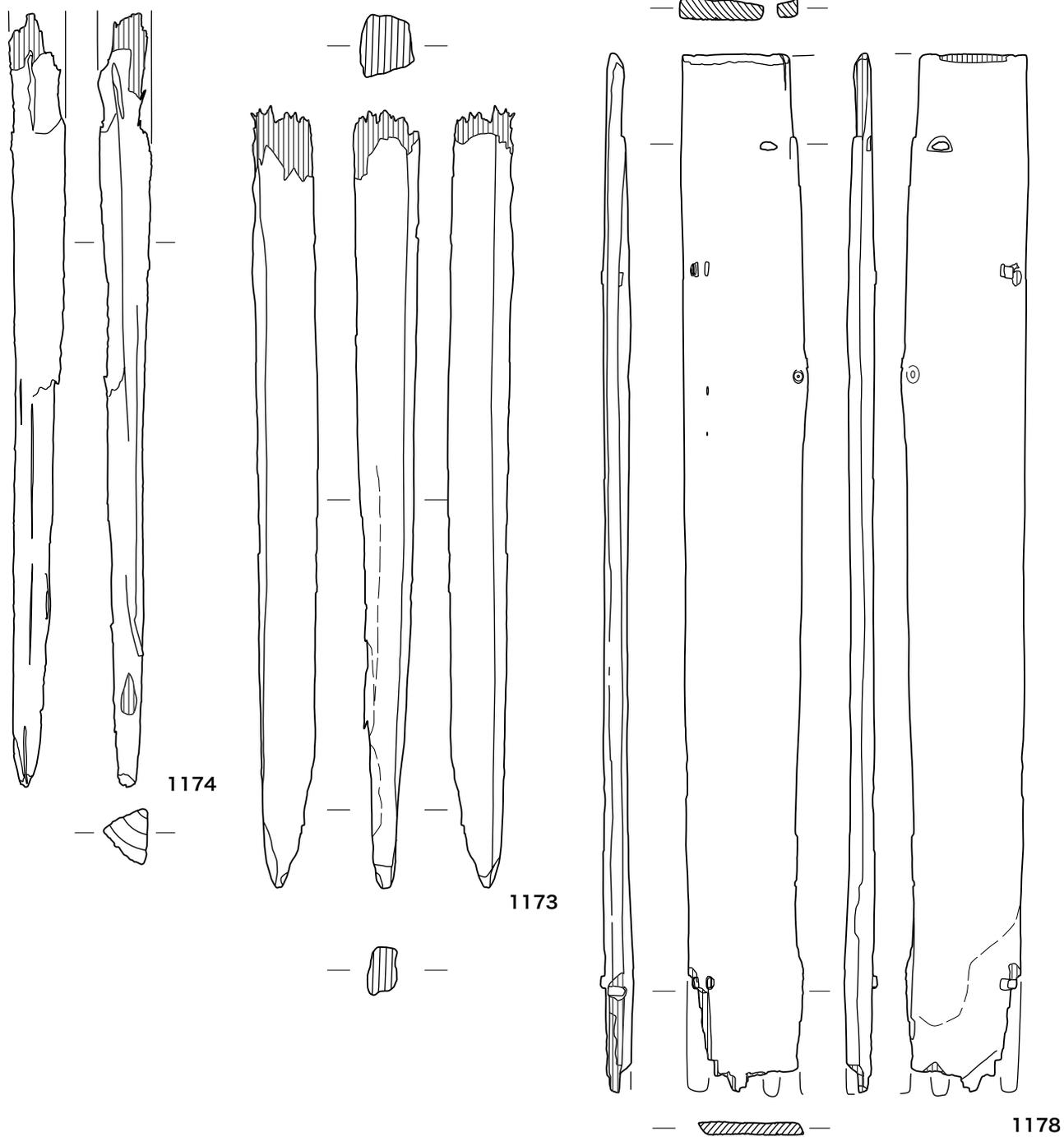


1182



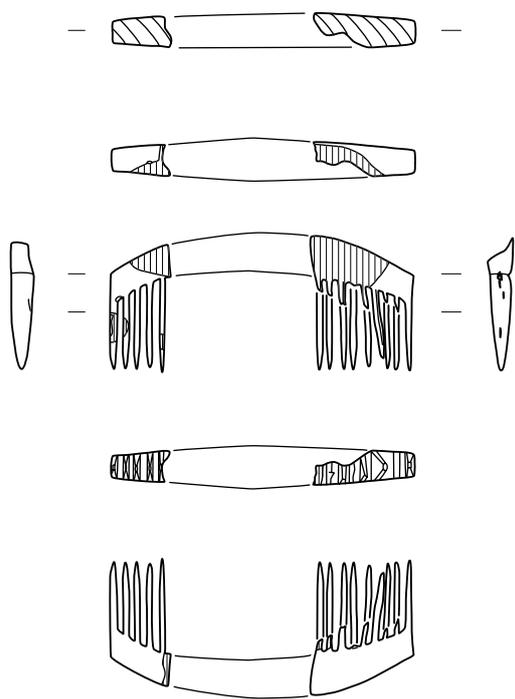
1183

1/40 20cm



1/80 40cm

SK5016



— 00000 / 0 — 1184

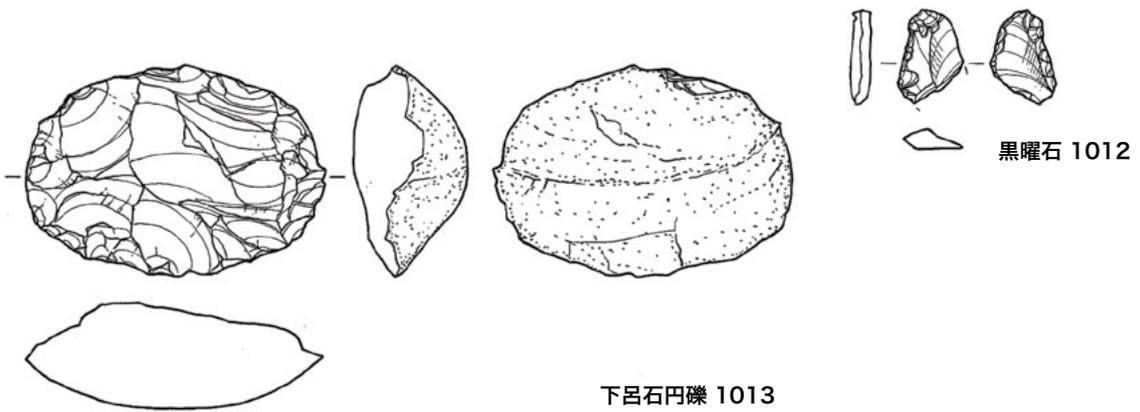
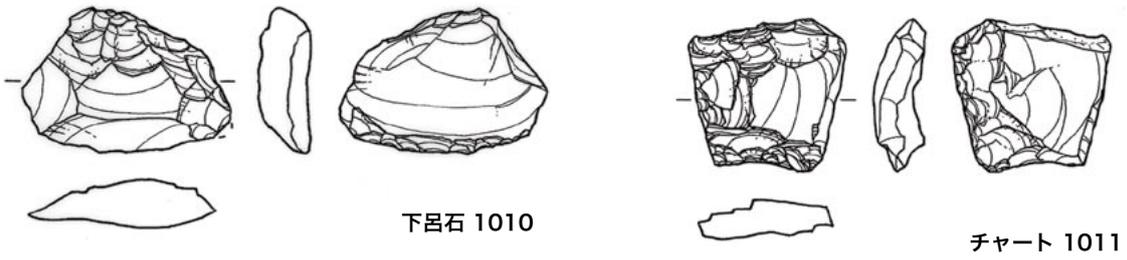
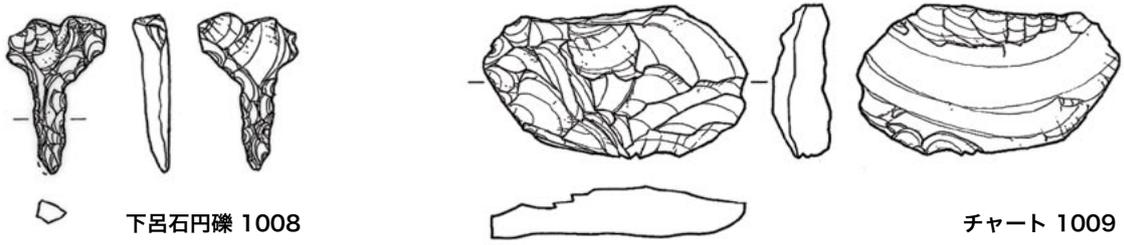
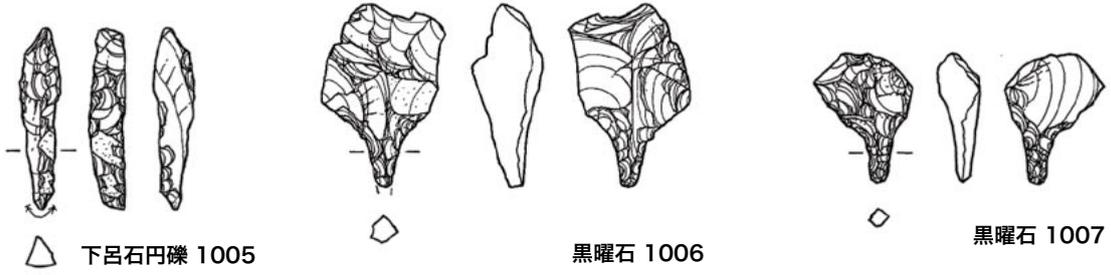
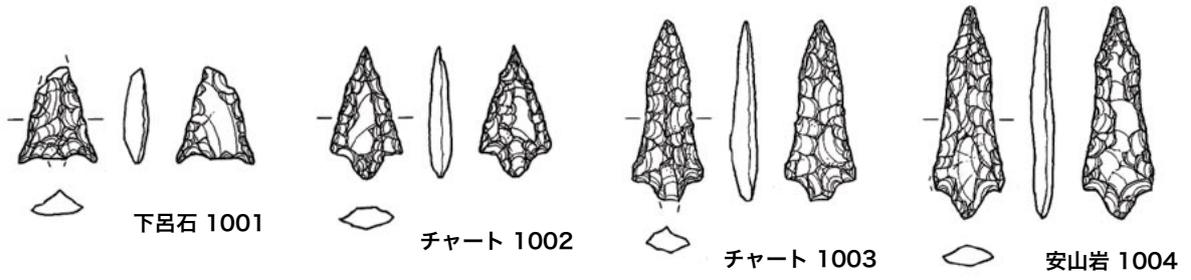
1/20 ————— 10cm

SD1001杭列?



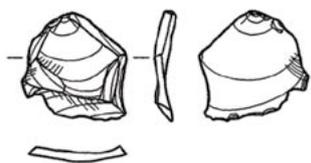
1185

1/40 ————— 20cm

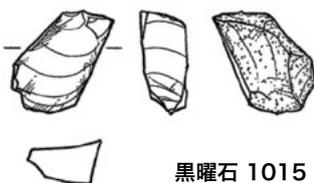


2/30

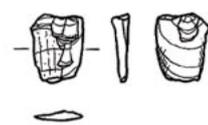
10cm



黑曜石 1014



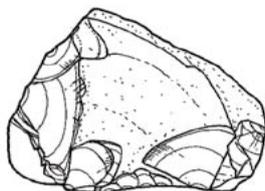
黑曜石 1015



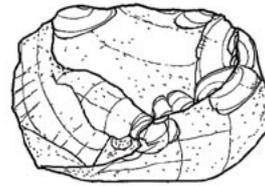
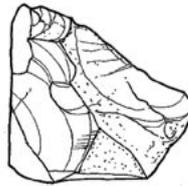
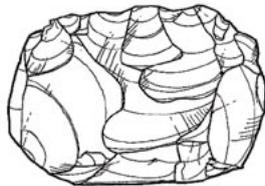
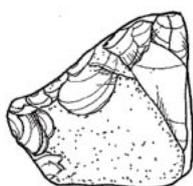
黑曜石 1016



黑曜石 1017



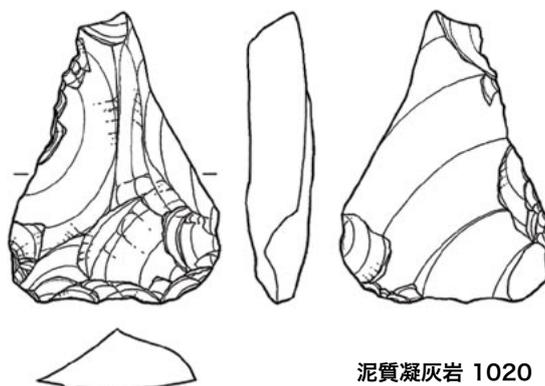
黑曜石 1018



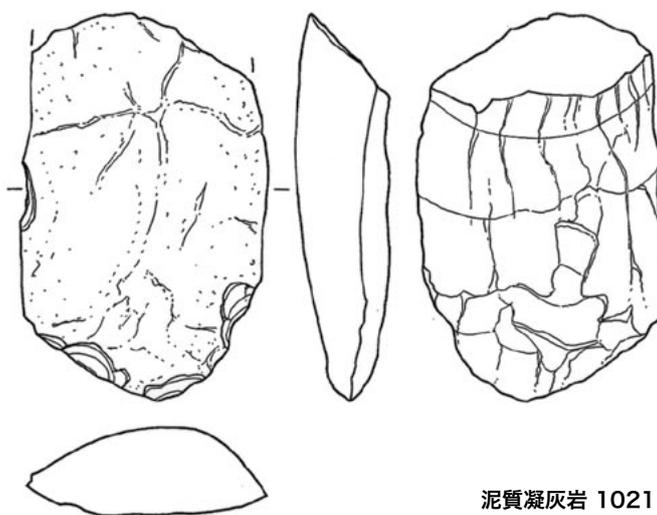
黑曜石 1019

2/30

10cm



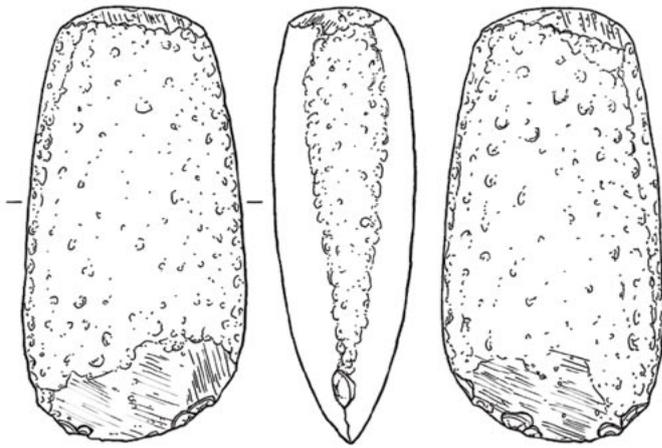
泥質凝灰岩 1020



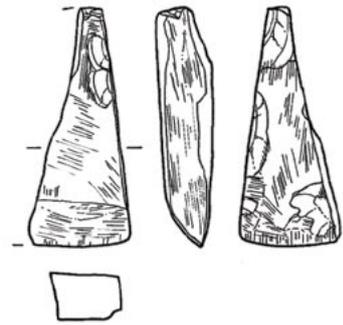
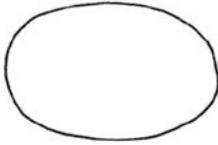
泥質凝灰岩 1021

1/20

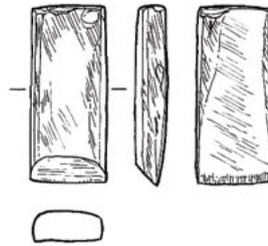
10cm



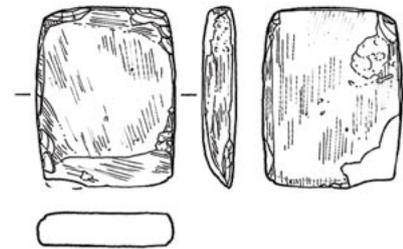
ハイアロクラスタイト 1022



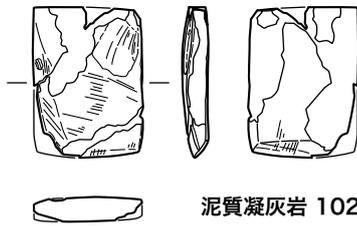
ハイアロクラスタイト 1023



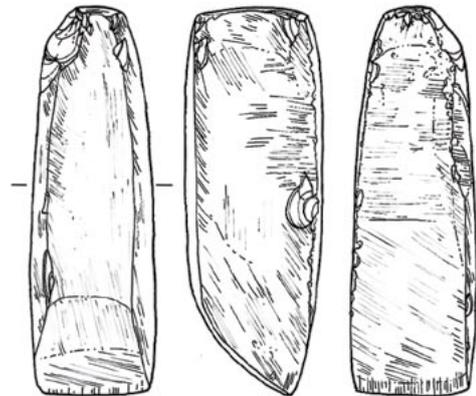
ハイアロクラスタイト 1024



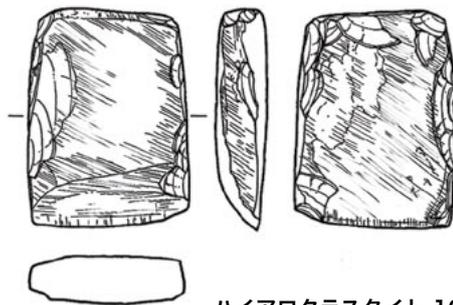
ハイアロクラスタイト 1025



泥質凝灰岩 1026

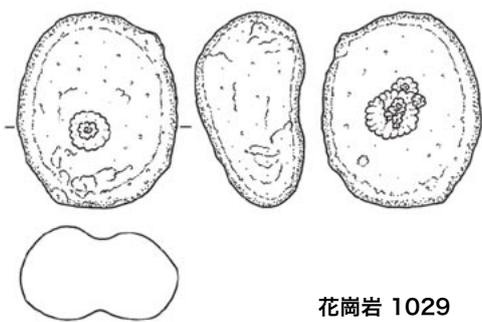


ハイアロクラスタイト 1028

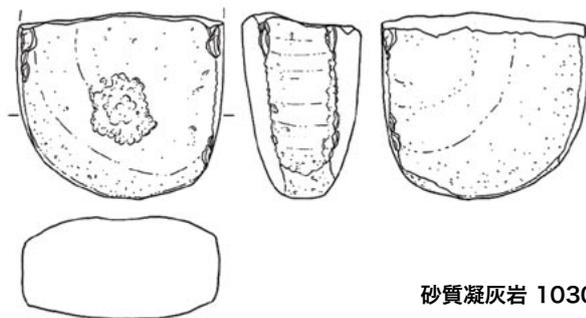


ハイアロクラスタイト 1027

1/20 \_\_\_\_\_ 10cm



花崗岩 1029

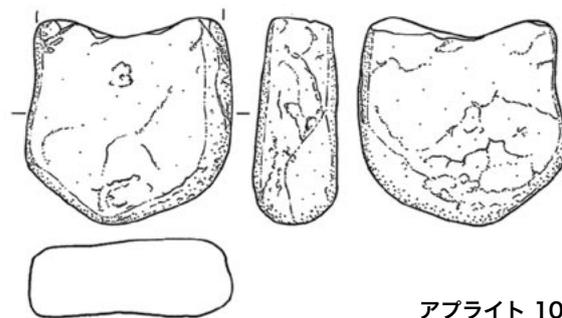


砂質凝灰岩 1030

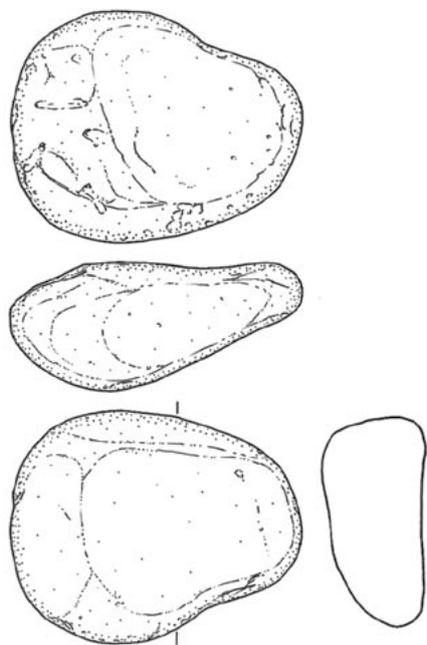
1/30  20cm



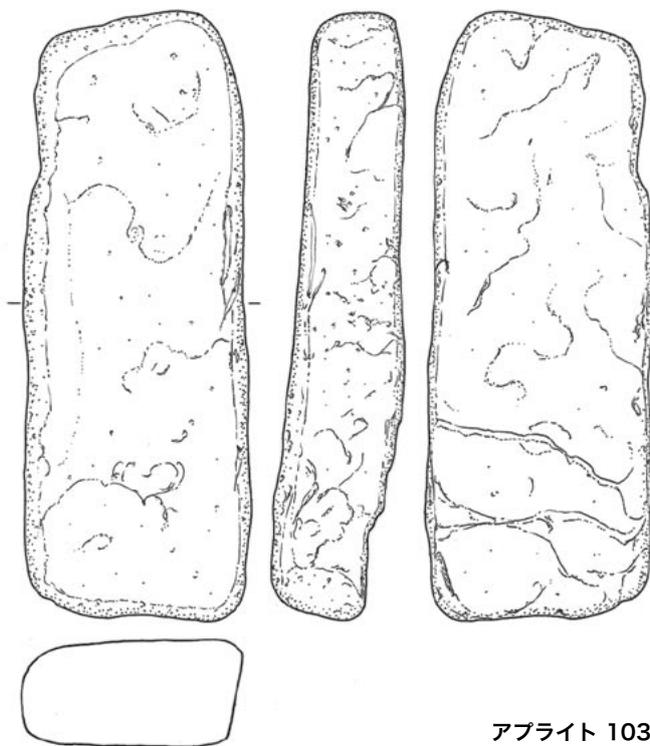
泥質凝灰岩 1031



アブライト 1032



細粒花崗岩 1033



アブライト 1034

1/40  20cm

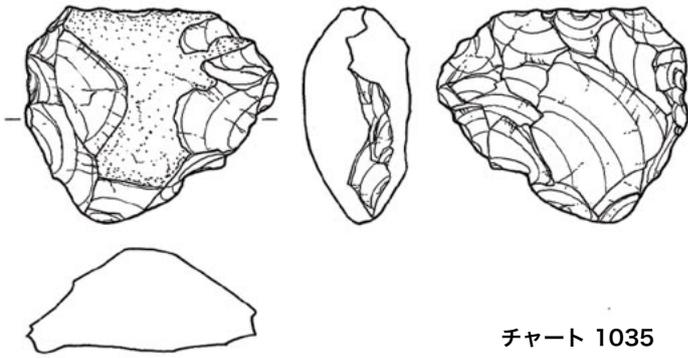


チャート 1035

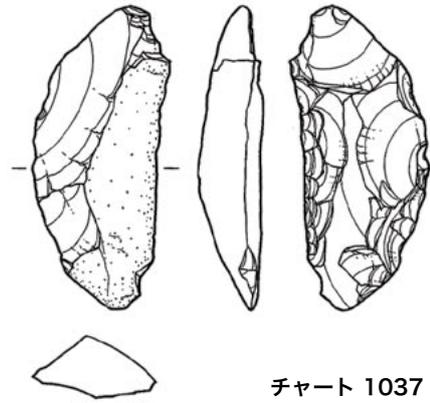


チャート 1037

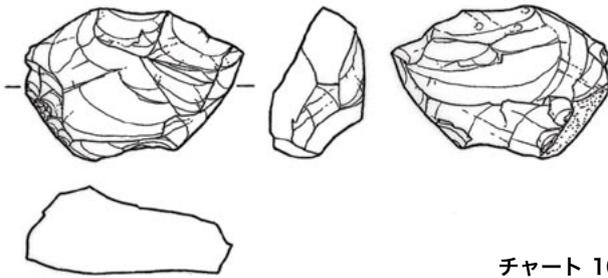


チャート 1036

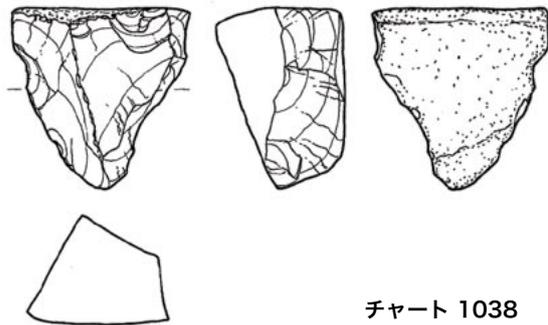


チャート 1038

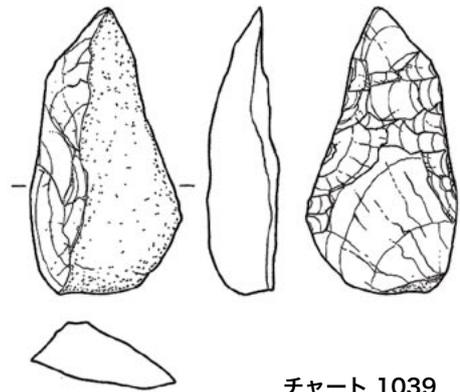


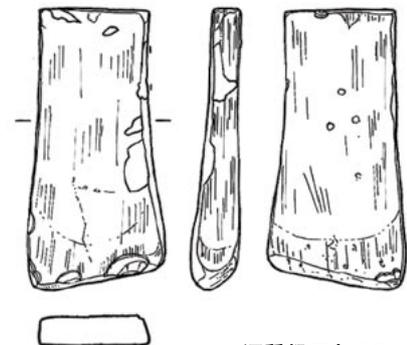
チャート 1039

2/30

10cm



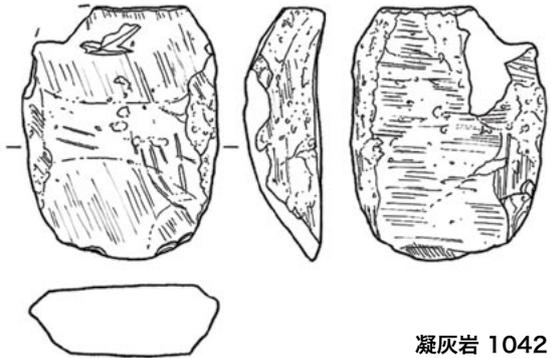
凝灰岩 1040



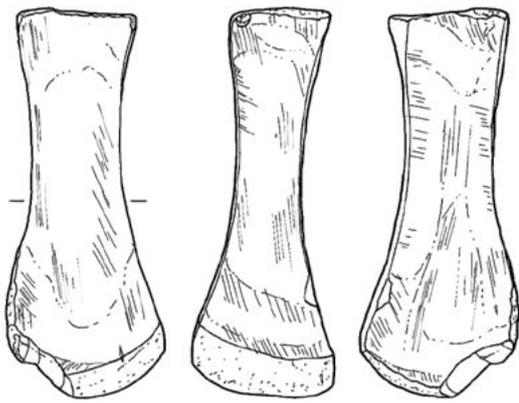
泥質凝灰岩 1041

1/20

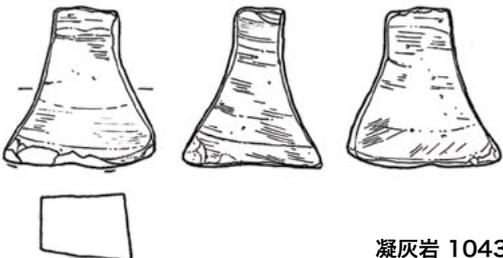
10cm



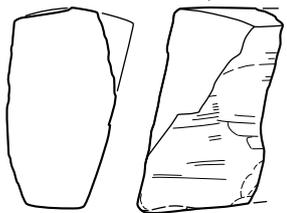
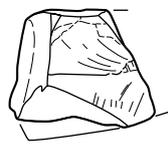
凝灰岩 1042



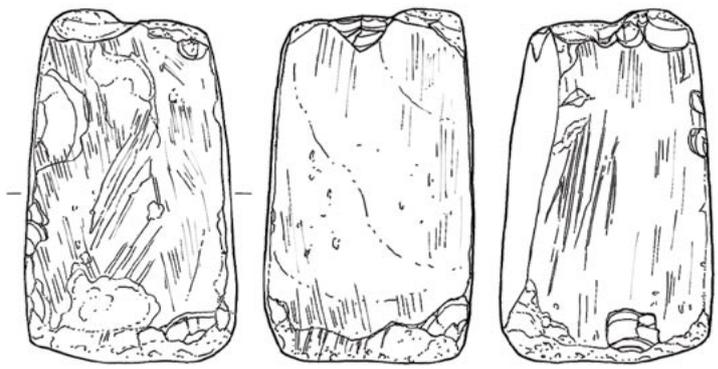
泥質凝灰岩 1044



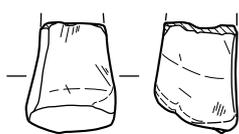
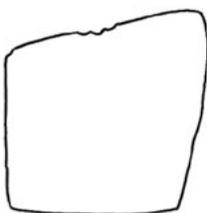
凝灰岩 1043



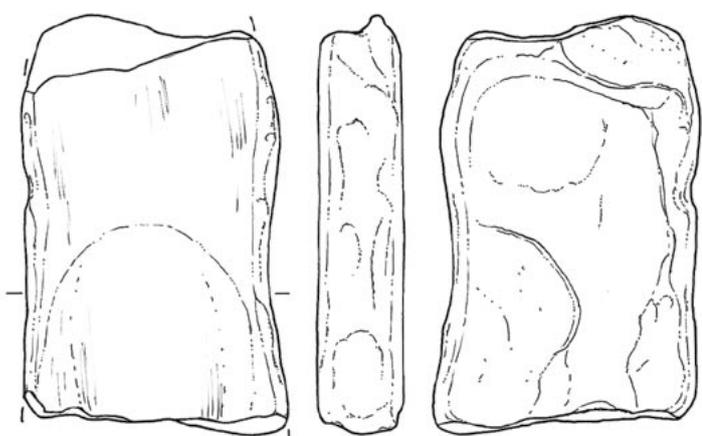
凝灰岩 1046



凝灰岩 1045



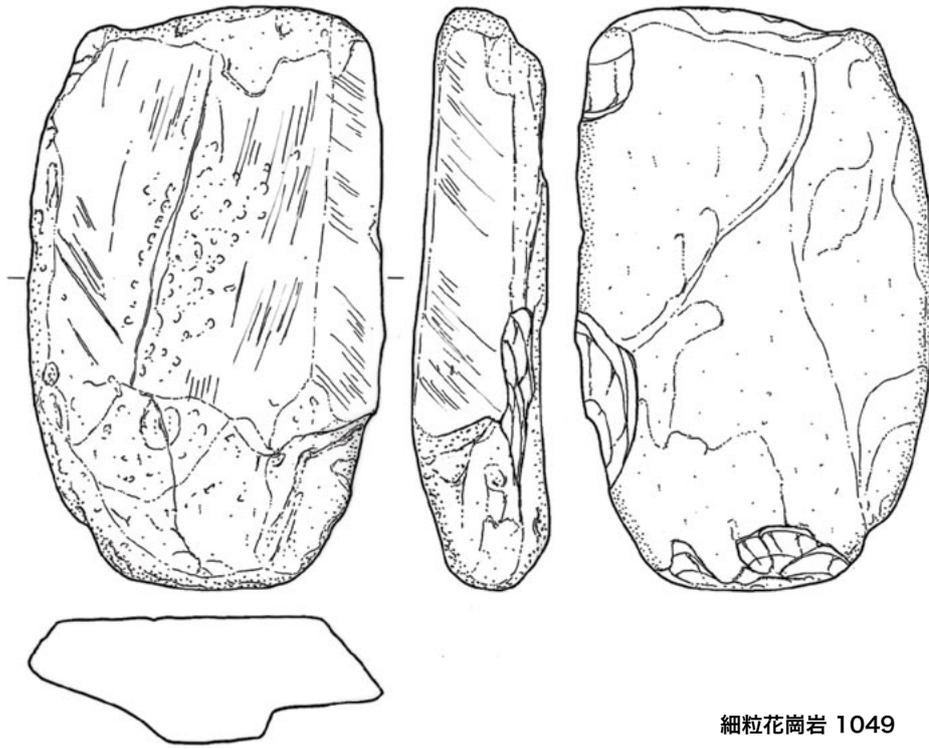
凝灰岩 1047



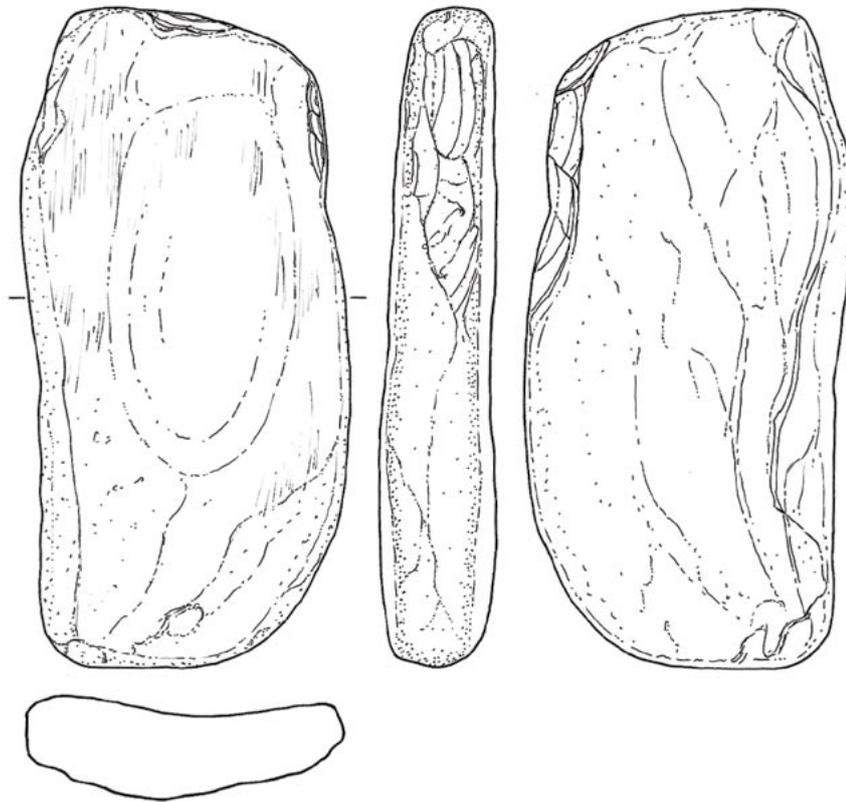
結晶片岩 1048



1/20 \_\_\_\_\_ 10cm

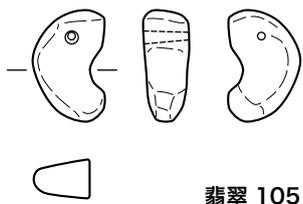


細粒花崗岩 1049



細粒花崗岩 1050

1/20 \_\_\_\_\_ 10cm



翡翠 1051



ガラス 1052



滑石 1053



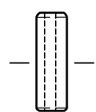
ガラス 1054



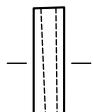
滑石 1055



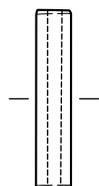
滑石 1056



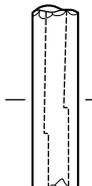
1057



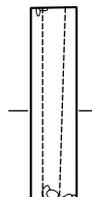
1058



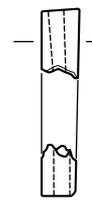
1059



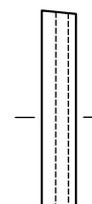
1060



1061



1062



1063

熔結凝灰岩

1/1 0 \_\_\_\_\_ 4cm



II -2 期 SK1011 出土土器群



II -3 期 SK1001 土器群



Ⅲ期 SB2064 出土土器群



Ⅲ期 SB2067 出土土器群



Ⅲ期 SD2001 出土土器群



Ⅲ期 NR2001 出土鳥形木製品

遺構写真図版1 A区I・II期遺構(1)



A区I・II期遺構全景(東から)



A区I・II期遺構全景(南西から)



A区I・II期遺構全景(南西から)



A区SD1001～1003(南から)



A区 SD1001 杭列 (南から)



A区 SD1001 杭列 (西から)



A区 SD1005・1013 分岐点 (北から)



A区 SD1005 矢板列 (北から)



A区 SD1004 全景 (北から)



A区 SD1004 全景 (西から)

A区 SK1001 土器出土状況  
(西から)



A区 SK1001 土器出土状況  
(北から)



A区 SK1001 土器出土状況  
(東から)





B区I・II期遺構全景(西から)



B区I・II期遺構全景(西から)



B区 SB1001 全景 (西から)



B区 SB1001 土器出土状況 (西から)



B区 SB1004・1007 (西から)



B区 SB1004 土器出土状況 (南から)



B区 SB1002・NR02 (南から)



B区 SB1005 (西から)



B区SB1013全景(西から)



B区SB1013全景(南から)



B区P1004 柱穴断面(西から)



B区P1008 柱穴断面(西から)



B区P1009 柱穴断面(西から)



B区P1010 柱穴断面(西から)



B区P1011 柱穴断面(西から)



B区P1012 柱穴断面(西から)



B区 SX02 土器出土状況 (南から)



B区 SX02 土器出土状況 (西から)



B区 SK1072 土器出土状況 (西から)



B区 SK1058 木製品出土状況 (南西から)



B区 SK1011 土器出土状況  
(西から)



B区 SK1011 土器出土状況  
(南から)



A区Ⅲ期遺構全景（東から）



A区Ⅲ期遺構全景（南西から）



A区Ⅲ期遺構全景（南から）



A区SB2004・SK2002全景（南東から）



A区SB2019全景（北東から）



A区 SB2015 全景 (南東から)



A区 SB2015 土器出土状況 (南西から)



A区 SB2015 完掘状況 (南から)



A区 SB2025 全景 (南から)



A区 SK2007 土器出土状況 (南から)



A区 SK2007 土器出土状況 (南東から)



A区 SD2001・NR2001 全景 (南西から)



A区 SD2001 全景 (北から)



A区SD2001 遺物出土状況  
(北から)



A区SD2001 遺物出土状況  
(南から)



A区SD2001 木製品(曲柄平鍬)出土状況  
(南から)



A区SD2001 木製品(斧柄)出土状況  
(南から)



A区SD2001 木製品(方形槽)出土状況  
(東から)



A区SD2001 木製品(机天板)出土状況  
(南東から)

A区NR2001 木製品出土状況  
(北東から)



A区NR2001 木製品出土状況  
(南東から)



A区NR2001 鳥形木製品出土状況  
(北東から)





B区Ⅲ期遺構全景（南西から）



B区Ⅲ期遺構全景（南西から）



B区Ⅲ期遺構全景（北東から）



B区SB2034全景（南から）



B区SB2034土器出土状況（南から）



B区 SB2035 全景 (南西から)



B区 SB2035 土器出土状況(東から)



B区 SB2035 土器出土状況(北から)



B区 SB2035・2536・2065 全景 (西から)



B区 SB2041 カマド検出状況 (東から)



B区 SB2045 全景 (南から)



B区 SB2045 土器出土状況 (東から)



B区 SB2069 全景 (東から)



B区 SB2074 全景 (北から)



B区 SB2064 全景 (南東から)



B区 SB2064 全景 (南西から)



B区 SB2064 建築部材検出状況 (南東から)



B区 SB2064 建築部材検出状況 (西から)



B区 SB2064 (P2001) 柱穴断面 (西から)



B区 SB2064 (P2002) 柱穴断面 (西から)



B区 SB2064 (P2003) 柱穴断面 (西から)



B区 SB2064 (P2004) 柱穴断面 (西から)



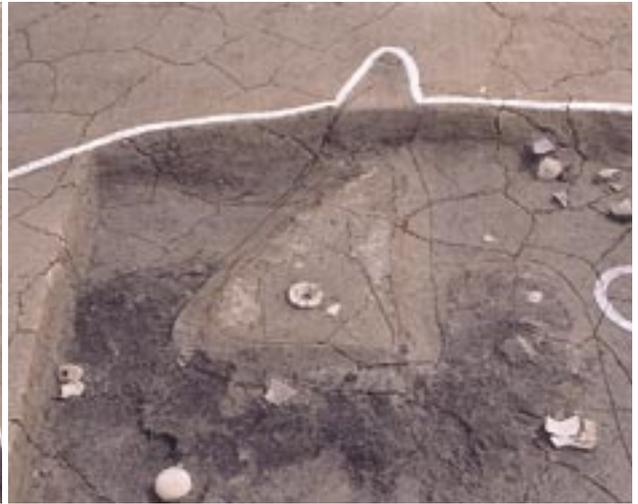
B区 SB2067 全景 (南西から)



B区 SB2067 全景 (北西から)



B区 SB2067 カマド (南西から)



B区 SB2067 カマド断ち割り状況  
(南西から)



B区 SB2067 カマド断ち割り状況  
(南から)



B区 SB2067 全景 (南西から)



B区 SB2067 全景 (北西から)



B区 SB2067 カマド断ち割り状況 (南西から)



B区 SB2067 カマド断ち割り状況 (南西から)



B区 SB2067 カマド断ち割り状況 (南西から)



B区 SB2067 カマド煙道部断ち割り状況 (南西から)



B区 SB2067 完掘状況 (南西から)



B区 SB2067 カマド完掘状況 (北西から)



B区 SB2067 カマド完掘状況  
(南西から)



B区 SB2067 カマド完掘状況  
(南東から)



B区 SB2080 土器出土状況 (西から)



B区 SB2080 土器出土状況 (北から)



B区 SB2081 全景 (北から)



B区 SB2081 土器出土状況 (北から)



B区 SB2081 全景 (北東から)



B区 SB2081 土器出土状況 (北から)



B区 SB2083 全景 (北から)



B区 SB2083 土器出土状況 (西から)



B区 SK2112 土器出土状況 (東から)



B区 SK2112 土器出土状況 (東から)



C区下面Ⅲ期土器集中地点 (北から)



B区 NR3002 Ⅳ期遺物集積 (南から)



B区 NR3002 Ⅳ期遺物集積 (東から)



B区 NR3002 Ⅳ期遺物集積 (北から)



B・C区VI期遺構全景（南西から）



C区VI期遺構全景（北西から）



C区VI期遺構全景（南西から）



C区SK5016横櫛出土状況（北西から）



D区VI期遺構全景（北東から）



D区VI期遺構全景（西から）

SX02



SK1072



SK1006



NR02



SB1002



SB2069 下層



SB1004



SK1011



88



86



87



89



91



90



96



97



94

SD1001



76



77



95

SB1007



98

SX4003



99

SB1001



64



63

SK1001



検出Ⅲ



検出Ⅳ



NR1002



SB2004



SB2014



SB2015



SB2048



SB2025



SB2045



SB2057



SB2064



SB2069



SB2070



SB2072



SB2067



SB2074



SB2077



SB2068



SB2078



SB2082



SB2080



SB2081



SB2088



SB2083



SD2001-1



SD2001-2



SD3003



SD2001-3



SK2007



SK2112



NR2002



2579

C区土器集中地点



2589



2591

その他



2601



2602

SD3004



3004

検出Ⅰ



3020

検出Ⅱ



3025

製塩土器



3016

3017

3035

3028

その他



3036

検出 I



4021

SD5009



5001



5002

SK5016



5044



5049

SD5007



5011



5020



5021

SK5030



5054

SE5002



5056

木製品



1072

1121



1088

1089



1091



1126



鳥形木製品



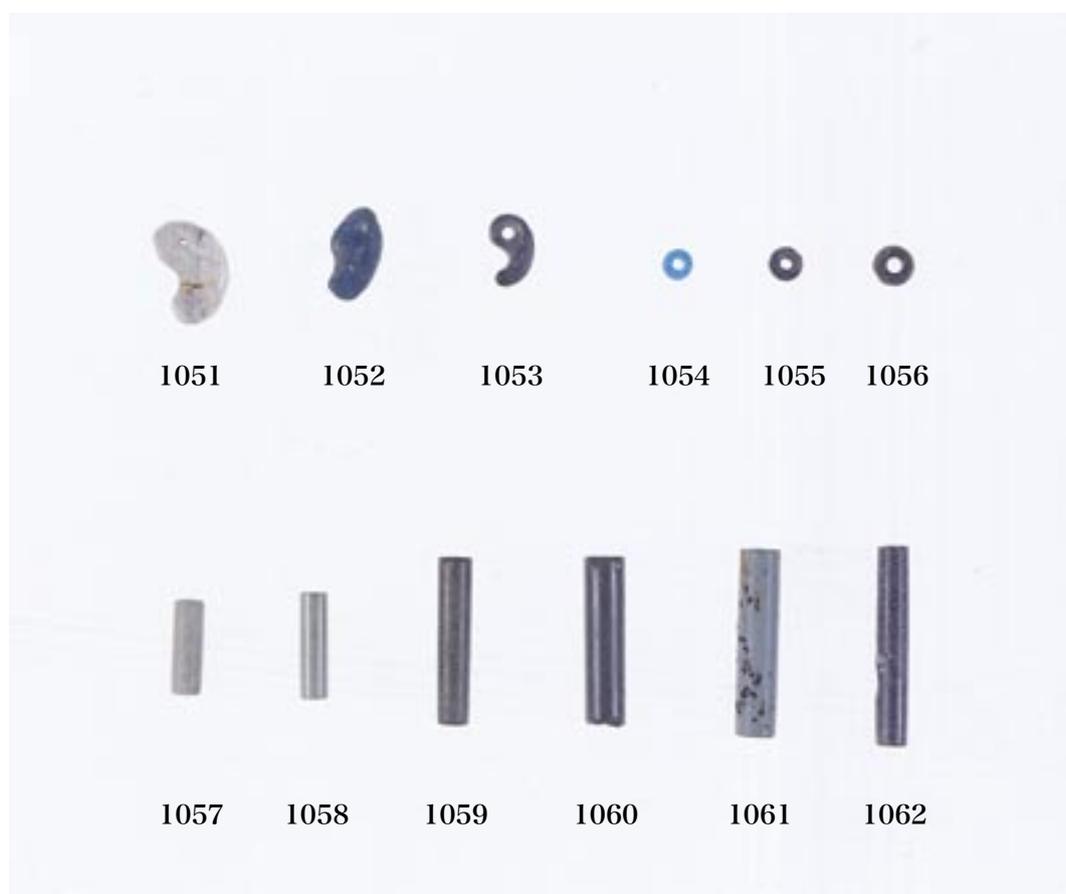












報告書抄録

ふりがな	ほんがわいせき
書名	本川遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第100集
編著者名	樋上 昇・佐藤公保・川添和暁・鬼頭 剛・堀木真美子・上田恭子・森 勇一・藤根 久・今村美智子・山形秀樹・Lomtatize Zauri・植田弥生・池谷勝典・馬場伸一郎・望月明彦
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	2003年8月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほん がわ 本 川	あいちけんとよたしえかくちょう 愛知県豊田市永覚町 たいしょう・ほんがわ 大正・本川	23211	63472	35 0 55	137 8 30	199804 ~199903	15,500㎡	第二東海 自動車道 建設にと もなう事 前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本 川	集落	縄文 ↳ 弥生	竪穴住居 掘立柱建物 溝 土坑	縄文土器 弥生土器 石器	畠遺構?
		古墳	竪穴住居 溝 土坑	土師器 須恵器 木製品 玉 石製品	カマド付住居 鳥形木製品
		古代	溝 土坑 自然流路	土師器 須恵器	
		中世	区画溝 土坑	灰釉系陶器 陶磁器 土師器	屋敷地
		戦国	区画溝 井戸 土坑	灰釉系陶器 陶磁器 土師器	屋敷地

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第100集

## 本川遺跡

2003年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社